CLANNAD　～Light colors～

傾世催眠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＬＡＮＮＡＤ　～Ｌｉｇｈｔ　ｃｏｌｏｒｓ～

【Ｎコード】
Ｎ５９１１Ｇ

【作者名】
傾世催眠

【あらすじ】
少女は、その強さ故にずっと一人だった。少年は、強く在る為に独りである事を選んだ……指折りの進学校である光坂高校の数少ない不良生徒であり番長の称号をもつ男『川上央己』は、この町最強の少女坂上智代と出会う。優等生ばかりの無個性な生徒達の中で、一際異彩を放つ二人は、次第に互いを意識し始め、やがて惹かれ合い触れ合った。だが、智代がこの学校に来た本当の目的を明かした事で、歯車は狂いだす……。ＣＬＡＮＮＡＤ＆智代アフターのキャラが多数登場するオリキャラメインのＣＬＡＮＮＡＤアナザースト

ーリーです。

4月8日：プロローグ

もっとも幼い日の記憶は、冬の公園
オレはそこで一人泣いていた
初めて来た場所
帰り道も、どうやってここまで来たのかすらもわからない
ただガムシャラに、近所に住む割と歳の近い友達の後をついてきた
いや、友達と思っていたのは俺の一人よがりで
自転車どころか、走る事もしゃべる事もままならない幼児なんて
彼らからすれば足手まとい以外の何者でも無かったのだろう
気がついたら誰もいなかった
日もいつのまにか暮れ、街灯の周りだけが明るく光っていた
幼いオレには、その下で泣くしかなかった
誰か来てと
誰か助けてと
置き去りにされた悲しさ

一人ぼっちの心細さ
もう家には帰れないかもという恐怖
泣く理由には事欠かず、泣き疲れて涙が枯れても尚すすり泣いた

「どうしたの？」
やさしい声がした
一瞬オフクロが迎えに来てくれたのかと錯覚する程に
でも全然ちがった
安堵の中見上げたその女（ひと）は
すでにオバサンだったオフクロとは
似ても似つかない髪の長いお姉さんだった
しゃがんで合わせてくれた目線
煌々とした灯りに照らされたその微笑は
子供ながらに綺麗だと思った
「どうしたの？」

呆けているところに同じ質問をされて、自分の置かれている状況を思い出す

とたんに感情が昂ぶり涙が溢れる

「・・・・・・いなく・・・・・・なちゃった・・・・・・・」

嗚咽混じりに何とかそれだけ言えた。

穏やかではないオレの言葉にお姉さんは顔を曇らせる

「お母さんと一緒だったの？」

「ううん・・・たっくん・・・」

「お兄さんかしら・・・？」

「うん・・・ぼくお兄ちゃん・・・」

オレのズレた答えにお姉さんは一度困った顔をしたがすぐにまた優しく微笑んでくれる

「そう、お兄ちゃんなの・・・お名前は？」

「おーき・・・」

「オーキ君？」

「うん・・・」

「いくつかな?」

「2さい・・・」

「2歳なの・・・?」

「うん・・・」

目を丸くされる

オレは普通の子供より早熟だったらしく、オフクロが産まれたばかりの弟にかかりきりだったこともあり、その頃にはすでに一人で外を出歩いていた

とは言え、そんな幼い子供がこんな夜遅くに一人で夜の公園に居たのだから驚くのも無理もない

「お家はどこかわかる?」

首を振ってこたえる

するとお姉さんは少し思案してからニコリと笑うと

いきなりオレを抱きかかえた

驚いた

けど、不安はなかった

むしろ嬉しくてドキドキした

「よし！じゃあ、一緒にお家を探しましょう！」

お姉さんは、はずむような声でそう言ってくれた

綺麗な顔が間近にあり、すごく好いにおいがした

多分オレは

この時初めて“女性”という物を認識したんだと思う

そしてオレの記憶はここで終わっている

安堵と泣き疲れで寝ちまったんだ

次に目覚めた時には、自宅の布団の中だった

今にして思えば、お姉さんはすげえ苦労した事だろう

手がかりは名前と年齢だけ

一軒一軒家を回ったのだろうか？

それとも、運良く探しに来たオフクロにでも出会えたのだろうか？

まあ、今更訊いたところで覚えちゃいないだろうけど・・・・・・

４月８日（火）

「川上！おい、川上！」

すみません。とても眠いんで放置でお願いします。

「川上くん。おきて」

んっ、この声は・・・・・・
しゃあない。彼女の顔を立てて起きますか

「ん・・・・・・」

隣の席の女の子『仁科　りえ』の声で今日何度目かの目覚めをむかえたオレは、まだもやのかかった頭で状況を把握する。
どうやらまだ授業中の様だ。
教室の壁に掛けられた時計がさしている時間は正午を過ぎてはいたが、昼休みまではもうしばらくある。
何より、さっきから教師がこちらを睨んでるし。
あれは確か現国教師の・・・・・・まあ、現国なんだろう。
「１２ページの５行目から・・・」
心優しい仁科が小声でこっそりと教えてくれる。

でも、その瞬間に教科書を指しながら体を傾けていたから多分バレバレだ。
まあ、それを咎めるほど教師も鬼ではないようだが。
「えっと・・・」
立ちあがって教えられたところから読み始める。
大方読み間違いでも期待していたんだろうが、苦手な英語ならともかく日本語でつっかえる俺ではない。
加えてこの文豪の作品は過去に読破済みだったりもする。
留学先で出来た恋人にさんざんつくされながら、栄達の為に捨てた最低な男の話だ。
「よし、そこまで」
丸々一ページ以上読まされた所で、ようやく抑揚のない事務的な声でお許しがでた。
しかし着席して顔をあげると、その不意をつくかのように訊いてくる。
「川上、先生の授業はそんなにつまらないか？」
「いえ、たんにこの国の教育制度に納得がいってないといいますか、文部省のやりかたが性に合わないだけなので、お気になさらないでください」
常日ごろから公言していたことを少々とぼけて答えると、クスクスと笑いがおきた。
うちの学校はこの辺りじゃ一番の進学校だけあってか、知的（？）なジョークの受けがいい。
現国教師はわざとらしく咳きをしてみせそれをやめさせると、
「性に合わないで済む問題ではないだろう。来年は受験だぞ。真面目にやれ」
と、ありきたりな台詞で話を切り上げ、授業を再開させた。
まあ、はじめから他の生徒に体裁を取り繕う為の注意でしかなかったのだから、こんな物だろう。
教師の視線が他をむいている隙に「悪い」と片手を前に立て仁科

に小さく頭を下げ、笑顔でうなずき返してくれる彼女に本当に悪いと思いつつも、俺は再び休み時間まで寝にはいった。

俺の高校生活も2年目をむかえたわけだが、授業態度は大体いつもこんな感じである。

寝ているか、授業とはまったく関係のない本を読んでいるか。

ようは、世間一般では『不良』とか『落ちこぼれ』とかにカテゴライズされる人間なのだ。

もっとも俺からすれば、こんな馬鹿げた実のない事をいつまでも甘受し続けている連中のほうがどうかしていると思うのだが。

言っておくが、俺は別に勉強は嫌いではない。むしろ知識欲は人一倍ある方だ。

俺ほど“智”を愛し求め、夕べに死んでもいいと思っている人間はそうそう居ないと自負している。

だからこそ学校の勉強が退屈でしかたがない。

この学校を選んだ最大の理由は“もっとも自宅から近いから”だが、この辺で一番の学校ならもしやと多少期待もしていた。

しかしそれもすぐに失望へと変わった。

内容が多少複雑でより面倒になったというだけで、本質的に義務教育のころと何も変わらない名ばかりの高等教育に、確かに頭のめぐりはいいがただそれだけの生徒達。

正直、この程度かよと思ったね。

いや、別に彼らを馬鹿にしているわけではない。それなりに面白い奴もいるし。

お隣の仁科さんは一年の時も同じクラスだったが、こんな俺にも優しくてくれる良い子だし、他にも・・・そう例えば思っていた通りやってきたコイツだ。

「スタンドプレーは程々にしてくれといつも言っているはずだが・・・？」

四限目の授業が終わるなり皮肉たっぷりに現れたのは、如何にも

優等生というナリをした眼鏡の男子『末原』だった。
見た目通りなかなかのキレ者で、成績は学年でトップクラス、このクラスの委員長も務め教師からの信認も厚い。云わばエリート中のエリートだが、一年の最初の試験で俺に負けたのが余程悔しかったのか、それとも性格が悪過ぎて友達が居ないのか、何かと俺に絡んでくる困った奴である。
「その俺をダシにする君が言うかね」
「君の所為で授業が中断されて迷惑だと言ってるんだ」
調子を合わせて気取って指摘してやったのだが、あくまで“不良にも屈しない毅然とした委員長”のポーズで通すつもりらしい。
しばし無言でにらみあう。
“不良ＶＳクラス委員”
まさに一触即発の状況に教室は騒然と・・・・・・しているのは昼休みだからであって、気をとめている人間はほとんどいなかった。
それだけこの光景が日常茶飯事な物であり、ある意味信頼されているということだろう。
大人気ない委員長よりこの俺が。
「わざわざ絡んできたのは先生のほうで、俺は大人しく寝ていただけなんだが・・・」
「フンッ、そうやって大物ぶっていられるのも今のうちだ」
「だろうな・・・だから今ぐらい好きにさせてくれよ」
この不毛な会話を切り上げるべく、俺は机の横にかけてあるカバンを取りながら立ち上がると、廊下に向かって歩き出す。
「早退か？」
「いや、残念ながら他で食ってくるだけだ」
そう言つつ俺は、彼の背後をアゴでさした。
それでようやく末原も自分の後ろで退くのを待っている女子が居る事に気づく。
しかもそいつが今にもキレそうな程ムッとしていた物だから、さすがの末原もバツが悪そうにそそくさと逃げていった。

どうやら今日の“舌戦”も俺の勝ちのようだ。
「いつもごめんね川上君、机使わせてもらって」
俺が気を利かせた事に気づいた仁科が、その待っていた友人に代わって恐縮する。
「ああ、いや・・・」
「りえちゃんが謝ることないよ。どうせ他に行くんだし」
だが当の本人がこの言い草だった・・・。
彼女の名前は『杉坂』だ。
恐らく仁科と一番仲の良い友人で、昼はいつも俺の席を占領して仲良く弁当を囲んでいる。
お淑やかで長い黒髪がよく似合う仁科とは対照的に、杉坂はショートカットでつり目がちないかにも気の強そうな子で、実際結構キツイ事をズケズケ言ってくるタイプだ。
しかも、どういうわけだか俺を目の仇にしている節があるし・・・。
まあ、俺は杉坂もそんなに嫌いじゃないからいいけど。
何と言うか、育ちのいいお嬢さんとそのボディガードって感じで、なかなか良いコンビだと思う。
・・・・・だから噛み付いてくるのかもしれんが・・・・・。
そう考えれば微笑ましい限りだ。いちいち目くじら立てる事でもあるまい。
申し訳なさそうな顔をしている仁科に、後ろ手をあげる仕草で“気にするな”と言って、俺は颯爽と教室を後にした。

4月8日：プロローグ（後書き）

4月8日：伝説不在（前書き）

・今更ですが、ちょこちょこ直しました。6／13

4月8日：伝説不在

教室を追われた俺は旧校舎に来ていた。
校舎が増築された際に主だった施設はほとんどそちらに移った為、今はマイナーな文化部の部室や物置として使われるのみの場所だ。
空いている教室も多く、当然人気も少なく教師の目も届きにくい。
つまり、あまり人に知られたくない事をしたい者にとって絶好の場所なのだ。
と言っても、今日の俺はそういった事をするために来たわけではない。
最近ここの一室を一部の生徒が占拠し、あまつさえ他校のガラの悪い生徒を招き入れ溜まり場にしているらしいのだ。
それが事実であれば看過しておく訳にもいくまい。
ただでさえ進学校の光坂は“おぼっちゃん校”と、なめられていると言うのに。
目的地の旧校舎の一階にある『資料室』と書かれたプレートの前で立ち止まる。
ここはかつて図書室だったらしく、今は本館に入りきらない書籍や古い資料等の置き場になっている。
そしてここを占拠した人物は、表向きはここの管理人として公認されているらしいのだ。
その為、旧校舎に頻繁に出入りしていたとしても教師から不審に思われる事も無い。
なかなかの知能犯だ。これは気を引き締めていかねばなるまい。
ドアを軽くノックしてみる。
すると、
「はーい。どうぞ」
と可愛らしい声がした。どうやら首謀者はすでに来ているようだ。
意を決し、ゆっくりとドアを開け中に入る。

「いらっしゃいませ。あっ、川上くん」
中に居た髪の長いたれ目がちな女生徒は、ほんわかとした笑顔で俺を迎えてくれた。
彼女こそ資料室をのっとり、悪の軍団のアジトにした張本人『宮沢　有紀寧』である。
「いつものでいいですか？」
「ああ。すまない」
そして彼女は、当たり前の様に自宅から持ってきたというカセットコンロで湯を沸かし始め、俺も一度周囲を見渡してから、当たり前の様に教室の中央に置かれている長机の椅子に座り、鞄からパンの入った袋を取り出し食い始める。
まあ、ぶっちゃけると……俺はすでに懐柔されていた！
それも“いつもの”で通じる程の仲だったりする。
とは言っても、俺も一緒になって入り浸っているという訳ではない。
週に一二度、情報収集と他所から来る輩に睨みを効かせる為に顔を出す程度だ。
「今日は奴等は来るのか？」
「どうでしょう？約束とかはありませんが……」
「まあ、いつも勝手に押しかけてくるのか……」
このほわわんとした如何にも育ちの良いお嬢さんという感じの彼女が、ガラの悪い連中と付き合いがあるというのは、まぎれもない事実である。
もちろん、これには理由がある。
『宮沢　和人』
この辺りでは名の知れた男である。
腕っ節の強さと男気を併せ持った彼の元には多くの仲間が集い、数々の逸話が今も語り草となっている。
彼女はその宮沢和人の妹であり、やってくる連中は兄貴の仲間という訳だ。

もっとも、だからといって彼女が始めからすんなりと受け入れられていた訳ではない。

それどころか、最初の頃は彼らとどう接していいかわからず悩んでいたぐらいだ。

そして彼女がクラスメイトだった俺にその相談を持ちかけてきた事で、俺もこの件にかかわるハメになった。

「は？不良と付き合うにはどうしたらいいかって？つってもピンキリだからな……まあ、基本的に普通にしてればいいんじゃない？」

「普通に……ですか？」

「別に変に気負ったりしないで、今俺と話してる感じでいいと思うけど」

「川上君は優しい人だってわかってますから」

「いや、まあ……てか事情がわからないとこれ以上言いようがないんだけど」

「そうですね……実は……私には兄がいるんです……」

「へえ……ひょっとして宮沢和人？」

「兄をご存知なんですか！？」

「マジ！？……会った事はないけど名前はな」

「やはり有名なんですね……」

「まあな。でも、そんなに悪い噂じゃないよ。多少ヤンチャはしても、半端な事や人としてやっちゃいけない事はしないし、させない人だ……て聞いてる」

「そうですか……」

「まあ、実際会ったわけじゃないし、兄弟だからこそうまくいかない事もあるだろうけど……大丈夫じゃないか？可愛い妹の方から仲良くしたいって言えば、邪険にする兄貴は居ないと思うけどな」

「いえ、違うんです……仲良くなりたいのは、兄とではなく、兄の友人達となんです」

「ダチと……？それなら兄貴に相談してみれば？」

「それは……無理なんです……」
「ああ、個人的にって事か……そりゃあ兄貴には言い辛いわな……」
「そうではなくて、兄は……もう居ないんです……」
「いないって……まさか……！？」

彼女が兄貴の仲間と仲良くなりたかった理由、それは両親とうまくいかず家を出ていった為に、疎遠になってしまった兄の事を知る為だった。
彼がその最後の時まで共に過ごした仲間達の中に、彼が何を見て、何を感じていたのかを見出そうとしていたのだ。
当然、やめておけと反対した。
あの宮沢和人の仲間達だ。悪い奴らじゃないだろう。
だが、そういった世界に触れれば、やはり様々なリスクが生じる可能性が大きくなる。
身の危険にさらされるかもしれないし、それが両親や教師の耳に入れば問題になるはずだ。
だからこそ、兄貴は優等生の妹と距離を置いたのかもしれない。
しかし、亡き兄を想う宮沢の意思は固く、最後は「何かあったら俺に連絡しろ」と言うしかなかった。

それからもたまに相談にのったが、最初の内こそ彼らから拒絶されていた物の、結局受け入れられたようだ。
それどころか、彼女の周囲の人間を和ませる雰囲気と、分け隔てない思いやりを慕ってか、何やらソッチ系の友人がどんどん増えているらしい。
まあ、大切にされているようだし、それ自体さほど問題だとは思っていなかったのだが……さすがの俺にも予想外の問題が起きた。

それは去年の三学期が始まってすぐの、ある休み時間に起こった。

「ゆきねー！ゆきねぇはいるか！？」
「何だアンタは？ウチの生徒じゃねえだろ？どういうつもりだ？」
「あん？テメエには関係ねえんだよ！」
「部外者はアンタだろうが・・・筋が通ってねえのはどっちだよ？」
突然俺達の教室に乱入してきたガラの悪い学ランとのメンチのきり合いは、宮沢が血相を変えて割って入った後もしばらく続いた。
その時は宮沢の仲裁もあり事無きをえたのだが、それは始まりにすぎなかった。
その後も奴らは、何だかんだ口実を作っては校内に侵入して来たのだ。
それもだんだんと調子にのってきて、リピーターやら団体まで現れる始末。
そして起こるべくしてそれは起こった。
間抜けな奴がついに教師にみつかったのだ。
咄嗟にその場は俺のダチだと言って何とか誤魔化したが、当然その事を宮沢はひどく気に病んでいた。
まあ、でも、宮沢には悪いが、半分はそれがねらいだったのだ。
宮沢と奴らに貸しを作り、これで奴らも来なくなるだろうと高をくくっていたのだが・・・俺はすぐに宮沢の行動力を見誤っていた事を思い知らされる。
彼女がクラスの連中にこれ以上迷惑をかけない為に打った手、それがここ資料室の管理人就任だった。
遮蔽物の多い校舎裏と中庭に面した人気の無い旧校舎の一階は、忍び込むには最適な場所であり、元々図書室であったその内部には、大きな本棚が多数あり死角だらけ。
つまりここは……宮沢有紀寧と愉快な仲間達の秘密基地になる為に存在していた様な場所だったのだ。
これにはさすがの俺も堪えきれず、初めて案内された時に思わず

「みー・やー・ざー・わー……！」
「えっ!?かっ、川上君!?きゃあ!!痛いっ!!痛いですぅ！！」
「当たり前だ。お仕置きだからな」
「あん!ごめんなさい!許してぇ!!」
と、こめかみをグリグリしてしまった。
女の子に手を上げる事は本来俺の主義に反するのだが、おかげで益々侵入者は多くなり、俺もいちいち見回りせにゃならなくなったのだから、むしろ寛大すぎるぐらいだろう。
「お待たせしました。カフェオレです」
「ああ、サンキュ」
宮沢が“いつもの”コーヒーにたっぷりミルクをいれたカフェオレを作ってくれた。
口にあったパンを飲み込んでから、まだ少し湯気のたつそれを流し込む。
美味い!そして温度も丁度いい。
俺はカフェ・オ・レ党で猫舌だ。
別にブラックでも飲めなくはないが、やはりミルクが入ってマイルドかつ温めになった方が飲みやすくて好きなのだ。
宮沢はコーヒーを煎れるのが巧く、ちゃんとこちらの好みを覚えていて、細やかな気づかいでいつも最高の持て成しをしてくれる。
まあ、とどのつまり、こうやって懐柔された訳だが……。
「そういや新学期始まったけど、何か変わった事とかある?」
一息ついたところで俺は真向かいに座る彼女に本題を切り出した。
今や彼女も相当な事情通なのだ。
中学の頃にはソッチ系の事情に強いダチも居たが、今の俺にはそういったネットワークが無いに等しい。だから宮沢から得られる情報は貴重である。
光坂は進学校で一見そういった事とは無縁なようだが、進学校だ

からこそ反感を買いやすく舐められやすい。
宮沢のダチがいい例だ。悪気は無いのかもしれんが、我が物顔で他校に入ってくるか普通？
他にも、単車で校庭に乗り入れてきた輩もいたし、かつあげのカモにもされやすい。
三年には火種を持ち込みそうな先輩もいるし・・・。
そういった被害を少しでも減らす為にも、情報は必要だろう。
だから、二年になって宮沢とクラスが分かれた事もあり、ここの様子見兼ね定期的に彼女から話を聴くことにしている訳だ。
「そうですね……あっ、そういえば、坂上さんが転校されたって聞きました」
「坂上……？坂上智代がか！？」
「はい」
あまりの衝撃に思わず立ち上がり身を乗り出す。
『坂上　智代』
もはや懐かしさすら憶える名前だった。
俺が中学の頃、女の身でありながらこの町で最強とまで噂され、誰ともつるまず、ただ一人夜ごと町を徘徊しては気に入らない不良共を狩り続けた、都市伝説にまでなっているタメ歳の少女の名だ。
しかし、ある頃を境に彼女の姿は夜の町から消え、次第に名前も聴かなくなっていった。
「不良狩りをやめて、大分落ち着いたらしい」という噂を最後に……。
「それで……どこに行ったか分かるか？」
「そこまでは……でも、前に通っていた学校にはもう居ない事は確かみたいですよ。それと、去り際にこう言ったとか……『私より、強い奴に会いに行く』」
「……そうか……」
宮沢の考えたネタなのか、そういう噂があるのかわからないが、それっぽくシリアスに演じてくれた宮沢の台詞にかえって脱力して

座りなおす。
ああっ、そうなのか……アイツももう居ないのか……。
一度も会った事はなっかったが、何か昔からの友人が遠くへ行ってしまった様な寂しさを覚えた。

「中坊の、それも女が最強って、この町レベル低くね？どうよ、俺らで坂上倒して天下とらねえか？」
中学の頃は、よくそんな事を焚きつけられた物だった。
「女と戦えるかよ。てか、いくら負けなしと言っても、相手は半端モンの雑魚ばっかじゃねえか。坂上もたかが知れてる。それよか天下取りたきゃ宮沢和人に喧嘩売ってこいよ。ああ、俺は部活あるから行けないけどな。まあ葬式くらいは行ってやってもいいけど」
そんな事を言って頭の悪い友人達をたしなめながらも、俺はずっとやきもきしていた。
だって、あまりにもアホ過ぎるだろう。
自分から危険に身を晒す様な真似をして。
結構美人だとも聴いていたし……。
自分は絶対に負けないとでも思っているのだろうか？
だとしたら、あまりにも甘い。喧嘩を、実戦の怖さをわかっていない。
それとも……自分なんて、どうなってもいいと思っているのだろうか？
「……誰か止めてやれよ……」
彼女の噂を聴くたびに、負けなかった事に安堵しつつ歯痒さを感じていた。
何度か彼女を探し、町を徘徊した事もあった。
だが、部活に打ち込んでいた頃はあまり派手に動く事も出来ず、引退した頃には彼女は町から消えてしまい、結局一度も会える事は無かった。
でも、残念ではあったが、それでも大人しくなってくれた事に胸

を撫で下ろしていたのだ。
そしてこの転校で、ようやく坂上は自らの業から解き放たれるのだろう。
また同じ過ちをしなければの話だが……。

「少し残念ですね……私も一度お会いしたいと思っていましたから……」

「そうだな……」

感慨深げな宮沢の言葉に、俺も感傷のまま相槌をうった。
すると彼女はクスリと笑い冗談ぽく言う。

「とても綺麗な方だったみたいですしね」

「いや、俺は見た事ないけど……そういうことでなくて、ここの所大人しかったとはいえ、あれだけのビックネームが居なくなったんだ。目の上のタンコブが消えて、張り切る馬鹿が出てこないとも限らない。お前のダチの中にも、喜んでお祭り騒ぎしている奴がいるんじゃないのか？」

おかげで俺の正論も、どこか言い訳っぽく聞こえてしまう。
宮沢は俺の問いに苦笑しながら「ほんの一部の方達ですけどね」と答えた。

やっぱりいたのか……すげえな坂上智代。

しかしこんな馬鹿な事に感心していられる状況ではない。

宮沢和人が逝き、坂上智代が去った。

実質これで、この町で最強と呼ばれていた人間が不在になったのだ。それを幸いと喜ぶ輩も多かろう。これを発端として有象無象の勢力が乱立するような事になれば、かなり厄介な事になるかもしれない。

「まあ、とりあえずあいつ等だけでも、あんまヤンチャしないように見張っておいてくれ」

俺はゴミ袋になったパンの入っていた袋をカバンと一緒に掴むと、出来るだけ明るく言いながら席を立った。昼休みはまだ少し残って

はいるが、宮沢は色々後片付けや準備があるだろうから、早目に切り上げた方がよかろう。

「お帰りですか？」

「ああ、ごちそうさん」

「お粗末さまでした。またいつでもいらして下さい」

「ああ、何か悪さしてないか見回りに来るから」

「それは気をつけないといけませんねえ」

「してたらお仕置きな」

「またグリグリですか？」

「別のでもいいけど？」

「出来れば痛くない事がいいです」

「痛くないお仕置きって……まあ、とにかく気をつけろよ。じゃあな」

「はい」

彼女の話術にハマって帰るタイミングを失い、危うく邪心が芽生えそうだったので、殺し文句で強引に話を締めて足早に資料室から退散する。

危ない危ない。

宮沢は聖女の皮をかぶった魔性の女だ。……と、俺は思っている。アットホームなムードの中、無防備な彼女と二人っきりで他愛の無い話をしていると、思わず「ちこうよれ」とか言ってしまいそうになる。

しかしひとたび彼女に手を出せば、間違いなく待っているのはデスロード。彼女のファンを全て倒すまで終わらぬ戦いが続く事は明白だ。

しかも、ちょっとそれも面白そうだと戦闘民族気質が首をもたげてるから怖い。

いかんな。

宮沢は俺を信用してくれているというのに不謹慎だろう。

などと自分を律して浮ついた心を静める。

これからの事を考えれば、浮ついている場合ではないのだ。
この町で大規模な抗争が起きれば、他でもなくその宮沢が一番巻き込まれる可能性が高いのだから。
「たく……勝手にいくなよ……」
思わず会った事もない人間達に毒づく。
また置いていかれてしまった様な寂寥感にさいなまれながら……。

4月8日：約束された未来

5限目の途中から雨が降りはじめた。
そういえば朝に、「午後くらいから降りだしそうだ」と読んでいたんだった。
にもかかわらず俺が傘を持ってきていないのは、二度寝して失念したからである。
まあ今の俺には、あまり昼間の天気は関係ないしな。
下校時間までにやむかは微妙だが、そんなに雨足も強くは無いし、濡れるのは嫌いじゃないから問題はない。
むしろ今は、濡れたい気分でもあるし……。
「……ふむ、次、川上」
窓についた水滴を見ながら感傷にひったっていると、それを見透かした様に先生が俺を指名した。
「はい」
やや緊張しながら立ち上がり背筋を伸ばす。
教壇に立っておられるのは、古文の『幸村先生』だ。
すでに髪も髭も白く、顔には深いしわが刻まれた定年間近の老教師で、生徒からも穏やかで人のいい好々爺として親しまれている。
だが、教師を含めこの人の“凄さ”に気付いている人間は数える程もいないだろう。
特に“何が”ということではない。その泰然とした佇まいや、含蓄のある言葉、存在その物にただ齢を重ねてきただけでは出せない深みがあるのだ。
「今日は居眠りや読書はしておらんようじゃの」
「午前中に寝ておきましたから……」
とぼけた俺の答えにクスクスと笑いが起こる。
しかし先生は眉一つ動かさず、「ふむ」とその白い口髭を数回しごくと

「退屈だからと言って、あまり教師を無視する様な真似をしてはいかんぞ。教師も傷つくからのう」

と、諭す様に仰られた。

なるほど一理ある。さすが幸村先生だ。そこいらの教師とは言う事が違う。

「はい」

素直にそれを心に留め、続いて来るであろう本題の質問に備えていたのだが、

「ふむ……では、次、杉坂」

スルーされた！

「えっ！？あっ、はい」

「次のページの訳を読んでくれるかの」

虚をつかれた杉坂が慌てて立ち上がり、他の生徒が吹き出しそうになるのを必死に堪えている中、肩透かしを食らった俺は一人力なく席についた。

やられた！さすが幸村先生、一本取られたぜ！

「やっぱりもうボケちゃってるんじゃないの？」などと陰口を叩いている輩がチラホラいるが、所詮奴らにはわかるまい。これはあくまで計算された自虐的ジョークである事を。

……多分……。

やはり放課後になっても雨は降り続いていた。

仕方なく、普段はあまり着ることのないブレザーを雨避けに羽織って帰ることにする。

ウチの学校の制服はブレザーだが、基本的に俺はＹシャツで過ごしている。

無論、ネクタイが嫌いだからだ。

「いや、それでいい訳ないだろう？」などという在りきたりなツッコミは却下だ。

夏服の時はしなくても許されているんだし、何の問題があろう？

校門を抜けると、壮観な桜のアーチが広がってる。

長い長い坂道の下まで。

ウチの学校の名物であり、おそらく“光坂”の名前の由来であろう桜並木の坂道である。

思えば……俺はガキの頃からこの景色をみてきた。

毎年、家の窓から見えるここの桜が咲いた事で、春の訪れを実感してきた。

思い出もたくさんある。

仲間内で花見をしたり、一人で夜桜を堪能したり。

そして去年、改めて正式な光坂の生徒として、花々に祝福されながらこの坂道を登った時には、やはり感慨深い物があった。

まあ、ここに入るのには、かなり苦労したからな。

中学の頃から「学校の勉強なんて意味がない」と公言して教師を敵に回していた俺の内申は当然ボロボロで、部活漬けではあったがろくな成績を残せなかったのでスポーツ推薦の話も無かった。

にもかかわらず、俺が志望したのは「近いから」と最難関の光坂。

無謀と言うより絶望的。

親は「何を馬鹿な事を」と怒り、担任は呆れ果て、周りからはヒーロー扱いされたね。

そして僅か半年、いや、正しくは三ヶ月足らずでそれを挽回し、見事合格してみせた時、俺は奇跡のヒーローとして伝説となった。

もっとも俺からすれば、この程度の奇跡なら何度も起こしてきたし、それが本当に奇跡だと思った事は一度もない。全ては必然だ。

てか、所詮義務教育レベルなのだから、高校の入試問題くらい完璧に出来て当たり前じゃね？……それまで俺も出来てなかったけど。

奇跡をやってのけたのは、むしろこんな俺の面倒を土壇場で引き

受けてくれて、やる気にさせてくれた塾の先生であり、あの人に俺を頼んだお袋だと思っている。
そう認識してはいたが、やはりどこか浮かれていたのだろう。
桜並木を歩きながら、きっと三年後には、再びこの花々に祝福されながらこの坂を降り、新たな道へと進んでいくのだろうな……なんてガラにもなく甘い未来を想像していた。

まったく……我ながら、滑稽過ぎて笑えてくる。

入学して桜も散りかけた頃、たまたま近くに居た上級生が口にした会話で、目が覚めた。

「この桜も、来年で見納めかぁ……」
「私達はギリギリセーフだけど、下級生やこれから入ってくる子達は可哀想だね」

『町を縦断していた桜並木を伐採し、再開発する計画』
その計画が公表されたのは、俺がまだ小学生の頃だった。
住民達は反対し、一時期デモや署名活動が盛んに行われていた。
俺も子供ながらに嫌だったから、親と一緒に署名をした。
しかし、いつの間にかその声は絶ち消え、俺もすっかり忘れてしまっていた。
その間にも計画は着々と進行し、ここ光坂の前を残すのみとなっていたのだ。
そしてここも、来年の春を待たずして無くなってしまう事が決まっている。

まったく、毎度の事ながら馬鹿げた話だ。

環境破壊が叫ばれ、エコや緑地化が持てはやされている今の時代に、
日本人の心の象徴たる桜を、
住民達にとって憩いの場所であり、思い入れのある物を、
この町のウリにだってなりうる物を、
どーーーーーしたら伐ろうなんて発想が生まれるのか、俺には理解できない。
他にいくらだって金をかけるべき所、改善すべきところは有るだろうに。
起伏が激しく坂の多いこの地は、大雨が降ると地滑りや川の氾濫が起きやすい。
森や並木には、それを防ぐ役目もある事を解っているのだろうか？
そしてそれを伐るという事が、どんな弊害を生むか解っているのだろうか？
『一利を興すは、一害を除くに如かず』という言葉を知らないのだろうか？
実際、地滑りや大きな水たまりで道が塞がれ、どれ程の被害が出ているのか知っているのだろうか？
知っているなら、どうして放っておけるのだろうか？
こんな無知で無学で見識の低い連中に、政治を任せていていいのだろうか？
都合のいい絵に画いた餅に血税を使い、大した効果も得られず害ばかりが残る。
そんな馬鹿げた事を、一体どれだけ繰り返せば気付くのだろうか？
どうして世の中こうも馬鹿ばっかなのだろうか？
まあ、この計画を立案した人間は、きっと桜を見た事がないのだろうけど。

虚しさを覚え、樹の幹に寄ってそれに触れる。
この程度の雨で散る事はないだろうが、ピークはすでに過ぎつつ

ある。
あと十日といったところか。
淡く、儚く、美しい桜は、“無常感”を好む日本人の心の琴線に触れる花だ。
“諸行無常　盛者必衰”
町も、人も、世界も、変わっていく。
それは得てして無情で、そして大局的には無上な事なのだろう。
が……だからこそ同時に人は、永遠や再生にも強い憧れを抱く。
桜は今年も咲き誇り、もうじき儚く舞散るだろう。
でも……
でも……
「お前は……こんなにも綺麗に咲けるのにな……」

今年の桜は、今まで見てきた中でも格別だ。
せめて、この至上の美しさを忘れまいと、濡れた桜を深く目蓋に焼き付けた。

4月8日：その手に掴みし光

クレーンゲームやプリクラの通路を抜け、最新ゲームの入荷を告げるポスターの張られた扉を開けると、けたたましい雑多な電子音に迎えられる。

鬱なまま帰りたくはなかったので、俺はゲーセンに気晴らしに寄ったのだ。

流行の音ゲーや新作の格ゲーにはチョットした人だかりが出来ており、チラホラと見知った顔やウチの制服を着た連中も見える。

ちなみに進学校の光坂はゲーセンの出入り禁止だ。

まあ、そんな事をいちいち気にする奴は、ここには来てはいないだろうが。

その人だかりを素通りして俺が向ったのは、大分昔に出た格ゲーの機体だった。

コンシューマにも移植された定番の格闘ゲームだが、今時プレイする人間は少なく、一応二台が背中合わせになっていて対戦可能だが、滅多に埋まる事はなく、今も二台とも空いている状態だった。

正直、俺はゲームは好きだが、アクション系はあまり巧くない。

新作に興味が無くは無いが、あっさり負けて余計にへこみそうなので今日は止めておく。

ここには気分転換に来たのだ。慣れたゲームでＣＰＵを相手にスカッとしたい。

奥の方の台に座り、コインを投入する。

選ぶのは、最も使い慣れた、最も愛嬌と意外性を秘めたキャラだ。

『ＲＯＵＮＤ１　ＦＩＧＨＴ』

まずは勘を取り戻すべく、技と動きを一つ一つ確かめながらプレイしていく。

生来ブキッチョな俺は、いわゆるコマンド技の入力が苦手だ。

出そうと思った技が出なかったり、何故かジャンプしたり。

複雑な連続技なんて到底無理で、超基本的な三連コンボが精一杯だったりする。
まあ、それでも、このレベルのＣＰＵには負ける事はないが。
派手なコンボが使えない分まとまったダメージが望めないだけで、きっちり隙をついてコツコツ当てていけばどうとでもなる物だ。
まだ敵が弱い事もあり、２戦目３戦目と危なげなく勝ち進んでいく。
すると、

バンッ！！

と台を機体を叩く音が店内に響いた。
座ったままではここからじゃ見えないが、方向的におそらく新作の所だろう。

「何だよ今の！？ハメじゃねえかよ！！」

続いて聞き覚えのあるやや甲高い男の声。
こんな大人気無い事をするのはまさか・・・とは思ったが。
ハアッ、とため息をついて、もしもの時にはプレイを諦める覚悟だけはしておく。

「おい、やめとけよ・・・」
「こんなインチキされて引き下がれるかよ！
あ～あ、嫌だねぇ。たかがゲームで、こんな卑怯な手まで使って勝ちたいのかねぇ」

案の定たかがゲームの事で難癖をつけ始めた。

「あん？何か文句あんのか！？」

「い、いえ、何でもありません・・・！」

・・・あっさり引き下がった！

どうやら相手が予想以上に強面だった様だ。

まあ、面倒な事にならずに済んだのならそれでいい。

そう思いながらプレイに専念していたのだが、

「ちぇっ、折角順番回ってきたのに、もう終わりかよ」

「あっさり負けたからな」

「しかも、卑怯な手使いやがって・・・、あれじゃあ超・ウルトラ・スーパー・グレート・ウルトラ・デリシャス・ワンダフル・テクニックを持つ僕でも、さすがに勝てなかったよ」

「ウルトラ2回言ってるからな」

あとデリシャスって・・・？

「それだけ凄いって事だよ！」

「ああ、スゲエやられっぷりだったな！パーフェクトで負けるとは、さすが春原だぜ！」

「アンタ馬鹿にしてませんかねえ！？さっきは相手にハメられたんだよ！じゃなきゃ一発食らって空中に浮かされてから、死ぬまで落ちても来れないっておかしいだろ！？」

ほう、新作には即死コンボがあるのか。

「ああ。まるで未来のお前を見ている様で、笑えたな」

「その可笑しいじゃねえよ！しかも未来の僕って何だよ！？」

「いや、何となくお前も似たような目に遭う気がしただけだ」

「不吉な予言すんのやめてくれますか？」

などと先程のクレーマーとその連れとのアホな会話が、段々とこちらに近づいて来る。

嫌な予感がした。

別に嫌いな人達ではないが、空気を読んではくれないだろう。

もうすぐボス戦なんだが・・・・・・。

「フッ、いいぜ岡崎。なら僕の本当の実力ってやつを見せてやるよ！」

「それ、さっきやってたのと違わないか？」

「いいんだよ。こっちの方が慣れてるからねぇ」

そして後もう少しで敵を倒せるというところで、画面に対戦者を告げる『ＮＥＷ　ＣＨＡＬＬＥＮＧＥＲ』の文字が。

やっぱり来たか・・・マジで勘弁してもらいたいのだが断る術は無い。

しかも対戦者が迷う事無く選んだのは、隠しキャラのラスボスだった。

「クックックッ、圧倒的な力の差ってやつを見せ付けてやるぜ！」

うわっ・・・ホント大人気無いなこの人・・・。

しみじみと嘆息している間に第一ラウンドが始まる。

相手のキャラはラスボスだけあって性能が段違いだ。

個々の技の隙がほとんど無く、威力も半端じゃない。

特に厄介なのが画面の１／３に当たり判定が生じる対空技で、技の出も早く、技後の硬直も短い為ガードしても反撃は間に合わない。

おまけに威力も高く、ガードの上から目に見えてＨＰを削られるという反則的な技だ。

つまり、この技を連発するだけで、誰でも強くなった気になれるのだった！

「オラオラオラオラ～～～！！」

「クッ！」

ワンパターンだが苛烈な攻撃の前に、俺は防戦一方だった。

飛び道具でも有ればこちらも遠目から牽制出来るのだが、生憎このキャラには無い。

それならと、大小のジャンプや変則的な技で揺さぶりミスを誘うも、反射神経は悪くないのかコンスタントに落とされ、たまに成功

しても単発の攻撃では逆転には至らない。
「ムダムダムダムダムダ～～～！！」
結局、ジリ貧のまま削り殺される様な形で俺は1ラウンド目を落とした。
「へっへっへっ、どうだ！僕の超・絶・スーパー・ウルトラ・ミラクル・フューチャリング・マックス・テクニックは！」
フューチャリング？
「お前それテクじゃなくて、明らかにキャラの性能がおかしいだろ？」
「わかってないなあ岡崎、キャラ選びもテクの内ってね！」
相方のツッコミにもまったく悪びれた様子も無く、むしろ得意気な相手の声。
無性に悔しい。
が、このままでは次も1ラウンド目の二の舞だろう。
攻略法が無いわけではない。
1、超必殺技を使用する為のゲージを一つ使い、ガードの硬直をキャンセルし攻撃する。
2、相手が技を出す前に間合いを詰めコマンド投げをかける。
3、相手の技をバックステップでギリギリかわし、空振した際の隙をつく。
もっとも確実なのは1だが、それにはこちらから攻撃を当ててゲージをためる必要があり、チャンスは一度か二度だろう。
2と3は両方出来て初めて効果がある戦法だ。
つまり、2で相手にこちらの接近を警戒させ、焦って遠目から出した所を3で回避し、技が出ききったのを見計らって、すぐさま間合いをつめて技の後に出来る若干の硬直を攻撃する。また、3を警戒したら2で投げると言う訳だ。
こう書くと一見簡単そうだが、言うは易く行うは難い。
2は相手に先に技を出されてはガードするしかなく、またコマンド投げをミスればモロに攻撃を食らってしまう。普通の投げでは間

合いが狭く威力も低い。
　3はバックステップ中は無敵と言うわけではないので、それこそ少しでも近すぎたり回避が遅ければやはり直撃を受けてしまうし、また回避出来たからと言って焦って間合いをつめようとすれば、残っていた敵の技のエフェクトに当たるという失態を演じる事となる。しかし遅ければ相手の次弾の餌食だろう。
　どちらも相当なリスクを負わねばならず、タイミングがシビアだ。
　しかしそこにしか活路は無い。
　諦めるか？
　たかがゲームだし。勝っても何かと面倒そうだ。ここは花を持たせてあげれば・・・。
　そんな大人な判断が首をもたげた時、ふと背の高い対戦者の連れの人と目があった。
　やはり今まで俺だとは気付いていなかったのだろう。
　アレ？と少し驚いた顔にペコリと頭を下げると、やれやれといった感じの首を竦めるジェスチャアーで応えてくれる。
　いつもながらアホな相方に呆れつつも、この状況を楽しんでいるのだろう。
　まったく、あの人もあの人で困った人である。
　・・・やるか！
　面がわれた事で、俺の中のエンターティナーの血が騒いでしまった。
　このまま何もせず負けては、観客も面白くはあるまい。
　調子にのせると、ろくな事しない人だしな。相手の為にもなるまい。
　何より、やはりこの人に負けるのは癪だ。
　だが、俺にやれるだろうか？
　先程挙げたリスクに加え、俺にはコマンド技が苦手で連続技が使えないという欠点もある。
　投げ技をミスしやすく、攻撃力を補うために何度も回避して攻め

ねばなるまい。
まさに超絶（略）テクをやってのける必要がある。
・・・アレをやるしかないか・・・！
対戦で使った事は無いが、相手はワンパターンだし、周りに人もほとんど居ないからやれるはずだ。
俺はすでに2ラウンド目が始まっているにもかかわらず、右手をボタンから離し、それをしばし見つめてから瞳を閉じる。

黙想・・・・・・・

やる事はただ一つ、相手が技を出そうとする“機”を読むこと。
早ければ避け、遅ければ投げる。
ただそれだけを、俺はやり抜く。

想い描くのは、あの日の“闇”

全ての色は消え失せ、全ての音も無くした。
何も無い、俺しかいない“世界”
しかしその中に、微かに灯る淡い光の玉が産まれた
俺はそれに右手を伸ばし
この手に掴む
“光”が溢れ、“世界”に満ちてゆく・・・・・・

「あれぇ？ひょっとして、僕があんまり強いから諦めちゃったかな？」

目を開けると、何発かもらったのだろう、体力バーが半分近くまで減らされていた。

まあ、覚悟の上だ。問題は無い。

「もう少しくらい抵抗してくれないと、つまんないんだよねぇ」

ではリクエストにお応えして！

まず手始めに、俺は調子にのって近づいてきた所を、すかさずコマンド投げで投げる。

「あっ・・・！？まあ、マグレマグレ」

残念ながらマグレではないんですよ。

懲りずに不用意に近づいてくる所を続けざまに2度3度と投げてみせる。

うん、いい調子だ。コマンド投げもミスってない。

「クソッ！！何だよそれ！？卑怯だぞ！！」

え～！？

「いや、お前が言うなよ」

「なら、これなら！」

くるか！

ようやく投げられる事を警戒して、遠目から技を出してきた。

そしてそれを見越してバックステップでかわし、絶妙なタイミングでステップインして3連コンボを叩き込む。

「ええっ！？」

「おおっ！」

観客からも感嘆の声がもれた。喜んでくれてるようだ。

「ちくしょう！このっ！このっ！」

相手はますます躍起になって攻めてくるが、こちらの思う壺である。

機体越しで姿こそ見えないが、聞こえてくる声やガチャガチャという音で、やろうとしている事は手に取るようにわかる。
何度目かのコンボを叩き込んだ所で、二本目はこちらが取った。
「あっ・・・・・・!!」
「超絶テク、完全に見切られたな・・・」
「・・・クックックッ、面白い!僕を本気にさせたな!超・絶・グレート・スーパー・ウルトラ・ミラクル・ファイティング・フェンシング・アイシング・アイドリング・ダンシング・ボンバヘッ!!を見せてやるぜ!!」
「もはやテクですらねえのかよ!」
「うるせえな!じゃあ、ボンバヘッ!!テクでいいよ!」
「どうでもいいが、もう始まってるからな」
「えっ!?しまったぁっ!!」
山ほどあるツッコミ所に耐えつつ、3ラウンド開始と同時にコンボを決める。
相手の動きが読みやすいとはいえ、薄氷を踏み続ける事に変わりは無いのだ。
余裕なんて有る筈がない。それにだ、
「卑怯なマネばかりしやがって・・・!だがこれなら、どうだ!!」
「!!」
やはり危惧していた事が起きた。
今まで万能対空技しか使ってこなかった相手が、他の技を使ってきたのだ。
ガード不能な突進投げや中段と下段の二択技等、ボスの技はどれも高性能で使い易い。
そしてそれらに無敵の対空技を絡めた時、ボスは真の強さを発揮するのである。
その筈なのだが・・・。
「あれ・・・?こ、このっ!」

「さっきのワンパターンの方が強いんじゃないか？」
「気が散るから少し黙っててくれませんかね！」
他の技をまったく使いこなせていなかった！
如何に高性能と言えど、単発で使ってもあまり意味がない。
どうやら対空技に頼りきっていた為に、他の技の使い方や連続技を知らないようだ。
しかも、相方に八つ当たりする程テンパッてきている。
詰んだな・・・。
そのちぐはぐな攻撃を、しっかり守ってきっちり反撃しながら、俺はその時を待った。
「ちくしょう！これでどうだ！！」
追い詰められた相手が最後に頼ったのは、やはり使い慣れた対空技だった。
しかしそれを待っていたのは、むしろ俺の方だ！
「何ぃ！？」
「うおっ！！」
同時に驚愕の声が上がる。
ここまで温存していたガードキャンセルを使い、同時に超必殺技の突進系乱舞を繰り出したのだ。
そして画面はスロウモーションとなり、ボスキャラはゆっくりと地に倒れた。
「う・・・・・・」
「お前スゲエな。あんだけ強えキャラ使っても負けてるよ」
「・・・納得いかねえ・・・」
ガタリと席を立つ音がした。
ああ、やっぱり来ちゃうのか・・・。
「オイッ、テメエ！随分と卑怯なマネ・・・って、げっ！！川上！？」
「どうも」
ウチの制服を着た小柄で金髪の男が威勢よく現れたが、相手が俺

だと気付いて青くなる。
彼は『春原　陽平』一応ウチの3年で一応先輩だ。
まあ、何と言うか・・・とにかくヤンチャな人である。
「よう、番長」
「どうも。番長はやめて下さいよ」
その春原先輩の後ろから続いて現れたのは、先程の背の高い連れの人『岡崎　朋也』
やはり3年の先輩で、何かと暴走しがちな春原先輩のツッコミ担当だが、止めてはくれない素敵な人だ。
ちなみに先輩の呼んだ“番長”とは、不本意ながら俺の事だったりする。
今時、それも“不良”と認知されている人間が3名しか居ない学校で番長って?と思うが、周りが勝手に言い出したのだから仕方あるまい。
そして何気に今、進学校光坂が誇る?不良生徒が全てこのゲーセンに集っていた。
まあ、何度も言うが3人だけなのだが・・・。
「フッ・・・やだねえ、たかがゲームでインチキなんて」
「お前はたかがゲームに負けたからって、因縁つけてるけどな」
「大方、パソコン部の奴らにでも頼んで、何か細工したんだろ」
「そんな事出来たらパソコン部凄過ぎな」
「アンタどっちの味方すかねえ?」
「少なくともお前の味方じゃねえな」
「友達甲斐無いっすねえ」
「悪い。友達だと思ってねえや」
「思えよ!て、お前も黙々とゲームやってんなよ」
「すんません。次ボスなんで・・・」
いつもの様に春原先輩の因縁に岡崎先輩がオートで返答してくれていたので、俺はその隙にラスボスまできていた。
汗ばんだ手をズボンで拭ってレバーを握り直すと、派手な演出と

ともにラスボスが現れ、最終決戦が始まる。
ＣＰＵが操るボスキャラは、半端じゃなく強かった。
間断無く放たれる飛び道具、迂闊に飛び込めば対空技落とされ、接近戦になれば必殺技のラッシュが来る。
それでも少ない隙を突いてチョコチョコ攻撃を当てていく物の、元々の攻撃力不足に加えてＣＰＵのラスボスは耐久力が１，５倍ぐらい高く、なかなか敵のバーが減っていかない。
結局、善戦こそした物の、倒しきれずゲームオーバー。
「惜しかったねえ。あ～あ、僕なら倒せたのに」
それまで大人しく固唾を呑んで観ていてくれた春原先輩が、嫌味ったらしく呟く。
まあでも、こういう時に邪魔しないでいてくれるあたり、そこまで悪い人じゃない・・・と思いたい。
「またお前、夢の中の話すんなよ」
「夢の話じゃねえよ！てか、夢の中でまでゲームやってる僕って何なんすかねえ？」
「すっげえ可哀想」
「だから見てねえよ！」
「ああ、あの技連発してると、どういう訳かクリアできちゃうんですよ」
「はあ？マジかよ？」
「ホラな。今日はたまたま調子が悪かっただけで、それが僕の本当の実力なんだよ」
「いや、俺もそのキャラ使えば出来ますけど」
「うっ・・・ま、まあ、お前はマグレとは言え、この僕に勝った男だからね」
「俺でもやれるな・・・てか、余程下手じゃなきゃ出来るんじゃねえか？」
「出来ますね・・・」
「な、何だよその目は・・・？二人して憐れんだ目で人を見るん

じゃねえ！」

こうして俺は、アホだが気のいい先輩達と親交を深めた。

4月8日：永遠の冬（前書き）

・7／16　細かい修正をしました

4月8日：永遠の冬

すでに日も落ちたゲーセンからの帰り道、俺にはもう一つ寄らねばならない所があった。

『古河パン』

昔から行きつけの小さなパン屋だ。

大体閉店間際のこの時間に、この場所に来ることが俺の昔からの日課となっている。

「ちぃっす」

「いらっしゃい・・・なんだテメェか」

中に入ると、とても客商売にはそぐわない目つきの悪い長身の男がレジに立っていた。

あろう事か咥えタバコで……。

店主の『古河　秋生』さんだ。

一見の客なら、まず「間違えました」と逃げ出しそうだが、俺はガキの頃からの常連であり、秋生さんにはよく遊んでもらっていたから、すでに免疫が出来ている。

結構いい歳なのだが、未だにガキ大将をやってるような人で、よく店番を放ったかして店の前の公園に出没しては、子供達と一緒になって遊んでいる困った人だ。

「ホラよ。今日のテメエの分だ」

まるで子分に分け前でも渡すかの様に、秋生さんが袋を投げ渡してきた。

おそるおそる中のブツを確認すると、深緑色をした物体がぎっしり詰まっている。

一応売れ残りのパンなのだが、これだけ余っていると言う事は、やはりあの人のパンは今日もまったく売れてないのだろう。

「えっと……さすがにこんなには食えないんですが……」

「ああん？育ち盛りだろうが！それぐらい食えっ！」

「いや、でも、他に配る分が無くなるんじゃ……？」
「安心しろ。ちゃんと他のにも一つずつハズレが混ざるくらいはまだ残っている」
その台詞を聞いた俺は、あの人の影を探して店の奥を覗いた。
が、残念ながら現れてはくれないようだ。
「ん？どうした？」
「いや、今のを早苗さんが聞いてなくて良かったなと」
“早苗さん”というのが“あの人”こと『古河　早苗』さん。この人の奥さんだ。
秋生さんも実年齢より十分若々しいが、早苗さんはさらに別格で、俺が物心つくかつかないかって時からまったく見た目が変わっていない。本当に仙女か女神様か宇宙人なんじゃないかと疑いたくなるほど綺麗で可愛らしい人なのだ。
これで二人には俺より二つ年上の娘さんが居るのだから、世の中不公平である。
ウチの両親なんか、俺が生まれた時からオジサンオバサンだったと言うのに……。
ちなみに、ここのパンの大半は秋生さんが焼いており、なかなか美味いのと評判なのだが、一部早苗さんが焼いたパンは破滅的である事でも有名である。
にもかかわらず、お茶目な早苗さんは毎週怪しい新作パンを発明しては、それを毎日焼いてしまう為、いつも必ず売れ残りが出る。
売れ残りのパンは閉店後に秋生さんが近所に配って回るのだが、さすがにただでも早苗さんのパンばかり配るわけにもいかないので、日頃世話になっている義理で俺が処理係をやっている訳だ。
「今のは“誰の作った”とは言ってないからセーフだろ。それに早苗は今、夕飯を作っている。渚と一緒にな」
滅多に見せる事の無い穏やかな笑みを浮かべながら、秋生さんは思いがけない事を言った。
“渚”というのが二人の娘さんで、同じ光坂高の先輩でもある『

古河　渚』さんなのだが、彼女は病気で長く床に臥せっていたはずである。

子供の頃から体が弱く病気がちだったが去年は特に酷く、ついには出席日数が足りなくて卒業出来ず留年してしまったのだ。

「渚さん治ったんですか？」

「ああ。いや、まだ油断は出来ねえが、熱はもう下がってる。暫く様子を見て大丈夫そうなら、復学させるつもりだ」

「そうですか……」

ひょっとしたら、このまま学校を辞めてしまうかもと半ば覚悟していたが……まあ、とりあえず一安心か。

早苗さんもずっと心配していたし、この秋生さんですらどこか空元気気味だったからな……長い冬が終わり、ようやくこの家にも遅い春が来たってところだろう。

「ホラ、こいつも持っていけ」

だからなのか、今日の秋生さんは気前がよく、袋をもう一つ渡された。

念の為中を確認すると、菓子パンや普段は滅多に残らない惣菜系まで入っている。

「そっちはオフクロさんにな。間違ってお前の分渡すんじゃねえぞ」

「別に、ウチの家族もとっくに了承済みですよ？」

「バカヤロウ！一個や二個なら冗談や茶目っ気で許されるが、袋の中全部早苗のパンなんて、ただの嫌がらせじゃねえか！」

じゃあ、俺はずっと嫌がらせをされ続けてたんですか……！？

そんなツッコミが喉まで出かかったその時、いつの間にか店の奥に人が立っている事に気づいた。

それは長い髪を大きなリボンで結んだ見た目ハタチ前後の綺麗なお姉さんで、実際にはハタチ近い娘の母親である、噂の早苗さんその人だった。

「げぇっ！！」

俺の反応を見て振り返った秋生さんが“しまった!!”という顔をする。
だが、もはや後の祭りだろう。
「私のパンは……私のパンは……」
案の定ショックを受けた早苗さんの瞳がうるうるとし始め、
「ただの嫌がらせだったんですね～～～～～～!!」
そして涙の雫がこぼれ落ちると同時に、叫びながら店の外へと駆け出して行ってしまった。
「早苗!んがぐぐっ!俺は大好きだ～～～～～～!!」
慌てて秋生さんも店に残っていた早苗さんのパンを口いっぱいに頬張ると、同じく叫びながら彼女の後を追いかけて行ってしまう。
そして店には俺一人……。
営業中の、それも一応客が来ている店を無人にするなんて常識的に有り得ない事だが、ここでは日常茶飯事だったりする為、ご近所さんや常連で最早驚く人はいない。
まあ、どうせすぐに二人仲良く帰ってくるだろう。
閉店間際のこの時間に客が来る事はあまり無いが、一応留守番をしておく。
最早これも俺と秋生さんとの暗黙の了解なのだ。
「お父さん、お母さん、お夕飯出来ましたよ～……あれ?」
すでに空のトレーばかりとなった見慣れた店内をぼんやりと眺めていると、背後から懐かしい声がした。
軽く驚きながら振り向くと、同じくキョトンとしていた少女は、俺を見て顔を綻ばせる。
「オーちゃん……じゃなかった。オーキ君です」
「どうも……別にオーちゃんでいいですよ」
「じゃあ、オーちゃんです」
いや、わざわざ言い直さなくても……。
妙な律儀さが微笑ましいこの人が渚さんだ。
二つ年上のお姉さん……なのだが、そのおっとりとした性格と儚

げな印象からか、どちらかと言うと守ってあげたくなる妹みたいな感じがしてしまう。

もっとも彼女にとっても俺は、年下の男の子“オーちゃん”なんだろうけど。

彼女とも十年来の付き合いで、小中高と同じ学校に通ってはいるが、特別親しいって訳でも無かったりする。

家が隣な訳でも、親が特別親しい訳でも、部活や趣味が一緒な訳でもない二つ年上の女の子との接点なんて、有って無いような物だろう？

行きつけのパン屋のお嬢さんで、友達の娘さん。顔はよく合わせてはいるが、道で会ったら挨拶する程度の関係でしかない。

「お久しぶりです。オーちゃん」

「お久しぶりです。調子いいみたいですね」

「はい。もう大分良くなりました。お医者さんとも相談して、様子を見て大丈夫そうなら、また学校にも通えそうです」

「そうですか……」

「オーちゃん、学校は楽しいですか？」

「えっ……？」

その他愛の無い世間話の一つでしかない問いに、俺はすぐに答える事が出来ず、

「……“微妙”……かな……」

と、言うのが精一杯だった。

「テメエ、ソコは嘘でも「学校超楽しいです！！俺超ハッピーです！！」って答えるトコだろうが！！」

「ぐぅっ！！」

いきなり背後から逞しい腕が首に回され締められる。

いわゆるスリーパーホールドだ。

声を聞くまでも無く、こんな事をしてくるのは秋生さんである。

直前まで気配を感じられなかったが、さては店の外から様子を窺っていやがったな！

「お父さん、オーちゃん苛めちゃダメです！私、嘘を答えられても嬉しくありません！」
娘に止められて、ようやく舌打ちしながら不良親父は腕を放した。
「たく、確かにお前、中坊の頃の方がまだマシな面してたしな…何か部活でもやったらどうだ？まだ二年になったばっかなんだし、何とかなんだろ？」
「いや、特にやりたい事も無いんで……」
「サッカーもか？」
「何度も言いましたけど、プロになれる訳でもないし、もうサッカー漬になる程やりたくはないんで……」
俺は小中とサッカーをやっていた。
大好きだったが、正直才能無くて、チームも弱かった。
それでも最後の一年間は一念発起して、これで結果が出せなきゃ止めようって自分を追い詰め……自分でも本当に頑張ったと思う。
だがその結末は……“最悪”だった。
敗軍の将は兵を語らず。
だから俺はもう、サッカーをやる訳にはいかないのだ。
「それにウチのサッカー部の雰囲気とか監督とか正直ムカツキますし、戦術も俺には合いそうにないんで……」
「じゃあ野球は？投げる方はともかく、お前バッティングはなかなかいけるじゃねえか」
「いや、秋生さんや草野球のオジサンの球が打てても、現役高校生の球が打てるとは思えないんで……」
「なぁにぃ！？上等だ！表にでやがれ！！」
「お父さん！」
「秋生さん。今から勝負だと、渚の作った折角のお夕飯が冷めてしまいますよ」
腕を掴まれ外に連れ出されそうになったところを、早苗さんがやんわりと止めてくれた。
娘命の秋生さんの泣き所を絶妙につくあたり、さすがである。

「ちっ……じゃあアレだ。彼女でも居ねえのか？」
「いませんよ……」
「じゃあ作れよ！気になってる子くらい居んだろ？とっとと告っちまえ！！んで、とっとと結婚しちまえ！！」
いや、それは電撃婚すぎるだろ！
「秋生さん、オーキ君はまだ１６歳なので結婚出来ませんよ」
早苗さん、問題はそこじゃないから……！
「お、同じ学校の方ですか？」
渚さんまで……やっぱりこういう話には興味津々ですか？
「いや、だから……そんな余裕ないんで……」
「はあ！？」
苦し紛れの俺の答えに、秋生さんは信じられない事を聞いたという顔をする。
「部活もやってねえクセに、彼女作る余裕がねえだあ！？カーーーー、信じられねえ……！俺が学生の頃は、部活やりながらだって彼女の一人や二人居たぞ！」
「二人……居たんですか？」
その失言に、早苗さんが笑顔ですごむ。
「あっ、いや、もちろん早苗と付き合い始めてからは、早苗一筋だ」
「“からは”……ですか？」
「いや、だから、アレだ。今のは彼女くらい居て当たり前って意味でだなあ……」
「ごめんなさいお父さん……私も彼氏さん居ないです……」
「お前はいいんだ渚！俺の娘なんだからな！」
よくわからん理由だが、とにかく人に取られたくは無いらしい。
すると、名案が浮かんだとばかりに早苗さんがパンと手を叩いた。
「そうだ！ウチの渚と付き合ってみてはどうでしょう？」
浮かんだのは爆弾だった！
「ええっ！？」

「なぁにいいいいいいっ!?」
渚さんは赤くなって声を裏返らせ、何故か秋生さんは俺の胸倉を掴みかかってくる。
「テンメェェェェェッ!!親の前で告るたあ、いい度胸だなあ!!」
はあ!?訳がわからねえ!!
「いや……別に……渚さんの事は……何とも……」
「何だとコラァ!?ウチの渚が気に入らねえだとぉ!?」
どっちだよ!?
「お父さんダメです!オーちゃん苦しがってます!」
「そうですよ秋生さん。大切なのは、お互いの気持ちです」
笑顔で火に油を注がないでくださいよ!!
「俺に内緒で……いつの間に両想いになりやがったんだテメェェェェェェッ!?」
それは早苗さんに訊いてくれよ!!
「止めてくださいお父さん!私、オーちゃんの事そんな風には思ってないです。あっ、でも、大切なお友達です」
「ん?そうか?」
渚さんに完璧にふられて、ようやく俺は開放された。
いや、わかっていた。わかっていたけど……。
やはり少し悲しい……。
「そうですか?それは残念です……」
心底残念そうな顔をしてくれるのは大変嬉しいのですが、もう勘弁して下さい早苗さん。
「とにかく、テメエはさっさと彼女作りやがれ!!いいな!?」
「……はい……」
「じゃあ、とっとと帰れ!店閉めて晩飯にすっぞ!渚がせっかく作ってくれたメシが冷めちまう」
「はい……じゃあ、パンありがとうございました……」
「おう!」

「おやすみなさい。また来てくださいね」
「おやすみなさいです。オーちゃん」
古河家の面々に見送られながら、追い出される様に俺は家路についた。
ドッと押し寄せる疲労感と、安堵感を感じながら……。

古河パンから歩いて5分程、学校や駅前商店街からも微妙に距離のある住宅地にある、特別大きくも無い普通の一軒家が俺の家だ。
いや、“普通”と言うには語弊があるか……。
家の近くまで来ると、ダンボールが山積みになったガレージの片隅で、一人荷物と格闘する母の姿があった。
俺の家は主に服飾関係の卸をしている。
親父は外回り中心で、商品の発注発送管理といった実質的な業務がお袋の仕事だ。
今は各取引先に送る荷を作っているのだろう。
「あら……おかえり」
こちらに気付いたお袋が、しゃがんだまま言った。
「……手伝いは……？」
「これで終わりだからいいわ。ありがと」
「……ああ、古河さんトコからまたパンもらってきたから」
「そう……また今度お礼を言っておかなきゃねえ……」
短く無駄のない、まるで業務連絡の様な会話を終えて家に入る。
長い溜息。
あの人を見ていると、いたたまれなくなる。
早苗さんと違って、ウチのお袋は日に日に老けていく。
いや、おかしいのは早苗さんの方で、それが普通なのだとわかってはいる。
わかってはいるが……。

朝から晩まで、家事をして、仕事をして、痴呆が進み始めた祖母の介護をして・・・。
この人は……幸せなのか……？
不眠症で、夜中に一人すすり泣いているのを見たのは、一度や二度じゃない。
最近ますます仕事の事で親父と怒鳴り合っている事も増えた。
「……彼女作れと言われてもな……」
笑いがこみ上げてくる。
お袋も親父も、結婚するときは幸せを夢見てたんだろう。
子供を産んで、家を建てて、事業を興して。
お袋は昼夜働き詰めで、親父は駆けずり回って頭下げて回って。
雨の日も風の日も、頑張って、頑張って、頑張りつづけて……。
そのなれの果てが今なんだ……。
笑うしかないだろ……？
誰もが幸せになる事を望んでいる。
でも、なれる人間は限られている。
自分はなる自信が有るかと訊かれたら、
はっきりと“無い”と答える他ない。
だって……俺は『社会不適格者』だ。
商売下手な親父や、お袋以上に不器用な俺だ。
学生である今ですら生き辛さを覚えているのに、社会人になって巧くやっていける自信なんて有る筈がないだろう？
ましてや他人を、惚れた女を幸せにする事なんて……絶対に無理だ。
秋生さんは本当にスゲエよ。
何だかんだで、いつもあそこの家は幸せそうだ。
あの人の様になりたいと思った事もある。
でも、俺は秋生さんの様にはなれない。
その事は嫌というほど思い知らされてきた。
結局俺は、俺でしかなく、俺として生きていく他無いんだ。

例え、身も心も不器用で人見知りで、チビで胴長短足で、何をやっても巧くいかず、オマケに呪われているのかと思う程不運であっても。
だからせめて、俺は俺の生き方を貫くと決めた。
俺が俺でいられる内は……。

まあでも、お袋が早苗さんじゃなくて本当に良かったとは思っている。
だって、早苗さんが実母だったら……、
俺はエディプスになっちまうだろ……。

4月8日：永遠の冬（後書き）

ようやく長い一日が終わりました。

智代メインと表記しつつ、2話目にチラッと話しに出ただけだったりするので、「早くだせ！」と思っている方も居るかと思いますが、登場はもう少し先になります。

1話分のテキスト量も長いし、文章も拙いので見限られないか心配ですが、オーキ共々どうか長い目で見守ってください。

4月9日：暁の明星

幼稚園に入った俺は、自転車をゲットした

オヤジが知り合いから貰ってきた、子供用の自転車だ

長い間使ってなかったらしく、埃をかぶって、所々錆ていて

それでも俺は、行動範囲がずっと広くなった事が嬉しかった

予定の無い時は、町を探検して回った

早起きをして、幼稚園に行く前も探検して回った

あの公園は割とすぐに見付かった

でも、あのお姉さんは見付からなかった

俺は出来るだけソコに通うことにした

手がかりは、ここだけだった

本当は朝だけでなく、夜遅くまでここに居たかったけど

あまり遅いとオフクロに怒られるから、チャイムが鳴ったら帰った

一人でブランコにのって、砂場で遊んで、滑り台を滑って、ジャングルジムに登って

他の誰かが来たら、退く事にしていた

誰かの邪魔はしたくないし、されたくもなかった

「あの・・・一緒に遊びませんか？」

ある時、一人の女の子が声をかけてきた

何度かここで見かけた事のある、俺より背の高い多分年上の女の子

でも俺は、女の子と遊ぶなんて恥ずかしくて

「あっ・・・！」

逃げ出してしまった

あのお姉さんには、なかなか会えなかった

あの子と顔を合わすのが気まずくて

あまり昼にはあの公園に行かなくなっていた

それでも朝だけは、毎日通っていた

そして、ある寒い冬の朝

公園の入り口から、こちらを見ているコートの女の人が居た

ゆっくりと近づいてくるその顔は
捜し求めていた微笑みそのままだった
「オーキ君・・・？」
無言でうなずく
「まあ・・・大きくなったのね」
そう言ってお姉さんは目を細める
覚えていてくれた
喜んでくれた
それが、たまらなく嬉しかった
「どうしたの？こんな朝早くに」
あの日と同じ様に、しゃがんで目線を合わせながら、優しく訊かれる
綺麗な顔が間近にあった
優しい瞳に見つめられた
困った
まさか会いたかったなんて言える筈もなく

会ってどうするのかなんて考えてもいなかった

お礼でも言おうか？

でも、それすらも気恥ずかしくて

ドキドキして

言葉が出なくて

顔が熱くなって

恥ずかしさばかりが膨らんできて

それが涙となって滲み出てきて

ますます感情が昂ってきて

嗚咽が本泣きになるのに、そう時間はかからなかった

「あら・・・ひょっとして、また帰れなくなっちゃったのかな？」

俺は困っているお姉さんにブンブンと首を振ると

「あっ・・・！」

結局、居た堪れなくなって逃げ出した

それからは、もうあの公園で待つ事は止めた

また、町を探検する事にした

もっと楽しい場所が、在るかもしれないから・・・・

ある日の休日、たまたまあの公園に行くと、お姉さんが居た

あの女の子と一緒に・・・・・・

どういう事かと呆然としていると

俺に気付いたお姉さんが、女の子の手を引いてやってきた

「オーキ君、こんにちは」

あの日と変わらぬ笑顔

でも俺はそれを、後ろめたくて直視出来なかった

するとお姉さんは、俯く俺の前にあの女の子を立たせて言った

「娘の渚です」

えっ！？

俺はお姉さんの言った意味がすぐには理解出来なかった

理解なんてしたくは無かった

でも、その時すでに知ってしまっていた

“娘”という言葉の意味と、“娘が居る”という事がどういう事かを

「こんにちわ。古河渚です」

恥ずかしそうにしながらも、女の子は礼儀正しく自己紹介をしてくれた

でも、すでに俺の耳には届いていなかった

「渚の方が二つ年上ですけど、お友達になってくれませんか？」

あの日の優しい笑顔なのに、見たくはなかった

あの日の優しい声なのに、聞きたくはなかった

もう何も見えないし、何も聞こえなかった

「「あっ・・・！」」

背後で二人の声が仲良くハモッた

俺はまたも泣きながら、逃げ出したんだ

ああっ、今にして思えば、

俺はどれだけ早苗さんを困らせて、渚さんを傷つけたんだろう？

もっとも、俺はこの後渚さんに、

さらにトンでもない事をしちまうんだが・・・・・・。

4月9日（水）

目覚ましの音で起きると、時計は二時を指していた。

当然夜中の・・・だ。

しかし悲しいかな、誤作動の類ではない。

あらかじめ自分の意思でこの時間にタイマーをセットし、コイツは忠実に職務を全うしてくれたのである。

つまり俺には、こんなふざけた時間に起きねばならない理由があるのだ。

まあ、いわゆる『早起きは三文の得』の実践である。

のそのそとパジャマから私服に着替え、顔を洗って適当に寝癖を直す。

それにしたって眠い・・・。

ガキの頃から早起きには慣れてはいたが、さすがに早過ぎだ。

かの三国志の“超世の英傑”曹操や、フランスの“英雄皇帝”ナ

ポレオンも、三時間程度しか寝ていなかったというが、その内慣れる物なのだろうか？

てか、睡眠は学校で補えばいいが、俺の場合もっと切実な問題が起きていたりする。

『寝る子は育つ』と言うのは、科学的にも実証されているらしい。

成長ホルモンが最も出るのが、夜中から朝方にかけての睡眠中なんだとか・・・・・・。

起きてますけど！！

両親も低いから遺伝的な要因もあるんだろうが、おかげで俺の成長はすでに止まった様だ。

高１の一学期に身体測定で測った時の身長は１６５ｃｍ。

で、この前あった２年の身体測定で測った身長が１６３ｃｍ・・・・・。

縮んでますけど！？

この歳で止まるどころかマイナスって・・・！？

何かの奇病だろうか・・・？

このままいくと、１０年後には１４３、１００歳になる頃には・・・・・、

うわっ！！２年前に消滅してるよ！！

いや、まあ、そんなに長く生きられる筈もないし、はなから長く生きるつもりは更々無いからどうでもいいのだが、それより、今まで四捨五入すれば辛うじて１７０だったのが、出来なくなってしまった事がショックである。

そういえば、曹操やナポレオンもチビだったな・・・・・・。

フッ・・・これも英雄としての宿命か・・・・・・。
まあ、デカイ英雄も沢山いるが・・・・・・。

春先の夜気の寒さも、満天の星空の感動も、俺の眠気を覚ますには至らなかった。
うつらうつらしながら、チャリに跨り暗い夜道を走り出す。
例えチャリでも、居眠り運転は本当に危険なので皆さん真似しないように。
気がついたら車道の真ん中走ってたとか、脇の林に突っ込んだりとか、下手したら死んでいたかもしれないと思う事も割とよくある・・・。

それでも、これから仕事だから寝ている訳にもいかない。
やや記憶が曖昧なまま、何とか仕事先に辿り着いた。
「おはようございます」
「おはようさん。いつもの様に用意出来てるから」
「すんません。行ってきます」
挨拶もそこそこに、壁にかかった自分のメットを取って駐車場に向い、そこに停めてある担当の原付のシートにまたがりキーを回す。
こっからは寝ぼけてはいられない。
エンジンの振動を体に感じながら気合いを入れ直し、俺は再び暗い夜の帳へと走り出した。
チャリに乗っている時より遥かに強い風が眠気を覚ましてくれる。
さすがに単車で居眠り運転は洒落にならないからな。
やった事あるけど・・・・・・。
本当に、未だに死んだり、人を撥ねたりしてないのは、運が良いだけだ。
まったく、こんな事に運を使ってるから、普段ついていないんだろうけど。
くれぐれも良い子もいい大人も真似しないように・・・・・・。

最初の目的地である住宅街に着いた。
原付を家の前で停め、前に備え付けられた鞄から束を取り出し、ポストに突っ込む。
そう、すでにバレバレだと思うが、俺の仕事とは新聞配達だ。
もう半年近くやっているので慣れた物だが、月毎に配達する場所が増減するので、ソコは注意しなければならない。
朝早すぎるのは辛いが、とにかく一人でやれる気楽さがいい。
コンビニでも働いた事があったが、このオーナーが盆暗で、店の金や商品が無くなっていくのを俺の所為にしたあげく、大学辞めた自分の子供働かせるから辞めろときた。
去り際に言ってやりたかったが止めておいたよ。
「パクッてんのは、アンタが一番信用してる調子のいいリーダーだよ」と。
俺は一目見て信のおけない人間だと思ったし、実際堂々と裏の倉庫にあるジュースを勝手に飲み始めたり、自分の鞄に雑誌を入れてるのを目撃した事がある。それも、そいつ一人じゃなく、バイトの同僚数名がだ。
知らぬはオーナーばかりなり。
そもそも、俺が入る前から起きていた事件の犯人が、俺の筈ないだろ？
いや、俺も紛らわしい事はしたけど。
ミスって落とした凹缶や、包装に穴を開けちまったカップ麺何かを、こっそり買い取ってたんだが、うっかり買った袋を忘れて見付かっちまったんだ。
当然、ちゃんと買った物だと言って、レジの履歴まで調べてその時の容疑は晴れたが、あれは相変わらず俺を疑っている目だったね。で、しばらくしたら突然辞めてくれだ。
俺もとうに愛想が尽きていたから渡りに船だったが、その時のオーナーの台詞がまた笑える。
「君みたいな子は、他の店に行っても多分使ってもらえないだろ

うから、仕方なく今まで使ってあげてたけどね・・・」
奇遇ですね。僕も一度やると言ってしまったので、仕方なく貴方の元で働いてました。
まあ、バイトだからって適当に選んではダメだと教訓にはなったけどね。
つっても、この町はそんなに大きな町ではないから、良い働き口あまりなく、選好みも出来ないのが現実だが・・・。
この新聞配達も、親の知り合いの知り合いって伝手でやれる事になった物だし。
高校生という事で配達のみのオミソ扱いだが、自給にすれば1，000円超えているし、毎日あるからまとまった金にはなるので、自分の食い扶持と小遣いくらいは稼げている。
だから、まあ、この仕事に有り付けた事はラッキーなんだろう・・・。
もちろん、バイトなんてやる必要ないのが一番幸せなんだが・・・・・。

仕事を終えた頃には、夜も白み始めていた。
夜と朝の境目の曖昧な時間・・・一日の中で一番好きな時間だ。
俺には仕事を終えた後、決まって行く所が二つある。
その一つが“あの場所”だ。
この町で、一番好きな場所だ。
一番好きな瞬間を、一番好きな場所で迎える。
とても贅沢だろう？
それは、町外れの森の中にある、チョットした広場だ。
昼間はたまに散歩に訪れる人や、子供達の遊び場になる事はあるが、照明などは無い為、暗い内に人が来ることは稀である。
だから俺は、ガキの頃にここを見付けて以来、誰にも教えない“秘密の場所”にしたんだ。
もっとも、ここを好きになった理由は、たんに人があまり来ない

からというだけではない。
何と言うか・・・初めてここに来た時“歓迎”された気がしたんだ・・・。
それだけでなく、ここは一種の“パワースポット”の様な気がする。
ここに来るだけで、精神が浄化され、不思議な力が身体に流れ込んで来るような気がするのは、たんにマイナスイオン云々という話だけじゃないだろう。
実際、何度かここでは不思議な体験をしているし。
サッカーをやっていた頃は、ここで毎日の様に“秘密の特訓”をしていた。
木と木の間に使われなくなったネットを張ってゴールにしたり、倒れていた木を拾ってきて多少手を加えてベンチにしたり・・・まあ、誰も見ていないのをいい事に、好き勝手にやらしてもらってた訳だ。
そのベンチに座って、缶コーヒーを飲みながら空を見上げる。
満天の星空は、すでに薄れかけている。
もうじき、星々は強烈な太陽の光に飲み込まれるだろう。
でも、そんな中で尚、東の空で懸命に光り輝く星があった。
“明けの明星”金星である。
俺の一番好きな星だ。
あの星を見る度に思う。
例え太陽や月にはなれなくとも、あの星の様にありたいと・・・・・。

山間が赤く染まり、闇が影となって伸びてゆく。
夜明けだ。
仕事の後の夜明けのコーヒーがまた格別である。
何となく報われた気がする瞬間だ。
「よしっ！」

残っていたコーヒーを飲み干し、立ち上がって瞳を閉じ深く息を吸い込む。

十分リフレッシュ出来たので帰るとしよう。

まったく、これでこの後、あの退屈な学校に行かずに済むなら最高なのにな・・・・・。

4月9日：灰色の世界

その日の3、4限目は美術だった。
あまり寝てられないのが玉にキズだが、割と好きな授業だ。
ガキの頃はよく無地の広告の裏や、カレンダーの裏に絵を書いたり、粘土で色々作ったりした物である。
まあ、それぐらいしか遊ぶ物が無かったのだが・・・・・・。
新年度最初の授業内容は校内写生に決まり、皆思い思いの場所に散っていった。
俺も目星を付けた校舎裏からの山々の景色を、鉛筆の趣くままに描き始める。
風景画はあまり得意では無いが、勢いでカバーだ。
こういう物は、あまり細部には拘らず、気分が乗っている内に一気に完成させてしまうのが吉だろう。凝りだすとキリが無いしな。
「わあ、川上君早いね。それに上手」
後ろから仁科が感心した様に声をかけてきた。
振り返ると、いつも一緒の杉坂と共に手には画材を抱えている。
まだ、どこで描くか決めかねて散策中といった所か。
「まっ、飽きる前にさっさと終わらせて、堂々と寝ようと思ってな」
「アレだけ寝ておいて、まだ寝るつもりなの？」
「まだ2時間しか寝てないだろ？」
「2時間“も”でしょ！て言うか、りえちゃんが移動教室だからって起こすまで、朝からずっと寝っぱなしだったじゃない！」
「ああ・・・いつも悪いな仁科」
「ううん、別に私は・・・」
「悪いと思ってるなら、りえちゃんに迷惑かける様なことしないでよ！」
仁科の言葉を遮り、杉坂は捲し立てる様に言ってソッポを向いた。

やれやれと仁科と顔を見合わせて苦笑する。
杉坂の気持ちも解らないでも無いが、眠い物は眠いのだから仕方あるまい。
しかし、俺が一度も起きなかったとか、ホントによく見張ってやがる・・・。
気を取り直して、再び鉛筆を走らせる。
背後から視線を感じるが、まあ他の奴のを参考にしてるんだろう。
ぐらいに考え、あまり意識しないようにしていると、仁科が意外な事を訊いてきた。
「川上君、私達もここで描いていいかな？」
律儀にそんな断りをいれられる事も意外だが、何より杉坂が嫌がるんじゃ・・・？
と思ったのだが、当の本人はムスッとしながらも、すでにここで描く準備を始めていた。
明らかに不満そうだが、いいんだろうか？
「別にいいけど・・・ここ殺風景だぞ？」
「うん。あえてこういう所を選ぶのも、川上君らしいよね」
物凄く遠まわしに確認を取ると、そんな事をクスリと笑いながら言われてしまった。
“俺らしい”か・・・・・・。
それはつまり、
1、光坂の名物とも言える桜並木の坂道や校門付近、またはそこからの町並みといった定番かつ混み合っているであろう場所をあえて避け、地味で穴場的な校舎裏をチョイスする渋さ。
2、桜や町よりも、雄大な山々をダイナミックに描こうというスケール。
3、ぶっちゃけ、細々とした物があまりなくて描くのが楽！しかも人も少なくサボるのにも好都合！などという合理的かつ姑息な魂胆。
4、1～3全てを踏まえた上でやってる計算高さ。

・・・・・4だとわかっててそんな風に笑ってくれるなら、結婚してもいいな・・・・・。

などとアホな事を考えてしまうのは、あくまで秋生さんが昨日変な事を言った所為という事で・・・・・。

まあ、仁科もあまり人の多い所は好きでは無い様なので、ここを選ぶのもおかしな事ではないか。

最近は中学からの友人だという杉坂と同じクラスになった事もあってか、見違える程明るくはなったが、去年の今頃は、ずっと塞ぎ込んでいて誰とも関わろうともせず、俺とは違った意味で浮いた存在だったのだ。

早退や欠席も多く、授業をさぼった事も何度かあった。

その頃から杉坂は、心配してクラスが違ってもちょくちょく仁科の様子を見に来ていたのだが、それでも一年の一学期に彼女の心からの笑顔を見る事は無かったと思う。

まあでも、時が解決したのか、はたまた杉坂の努力の賜物か、じょじょにだが仁科は笑うようになり、今では他の奴等とも普通に話せるし、学校をサボる事も無い立派な優等生だ。

きっと、これが彼女の本来の姿なのだろう。

そんな彼女が俺に優しくしてくれる理由は・・・・・・謎だ。

いや、たまたま同じ授業をサボって教室や屋上でばったり会ったりとか、他の奴と比べたら話す機会が多かったのかもしれないが、初めの内は明らかに俺を怖がってたし、会話と言っても他愛の無い事を2、3言話しただけで、進展も何も無かった・・・はず。

浮いてる人間同士、相憐れむ様な親近感でも持ってくれたんだろうか？

まあ、根が優しい子だし、隣がだらしないから面倒見てくれてるだけで、“俺だからって事じゃないだろう”ぐらいに思っておこう・・・・・。

それより、今はコイツを終わらせねば。

俺は邪念を振り払うように、絵に集中する事にした。

「・・・うし！こんなもんか・・・じゃあ、提出してくるは」
「えっ！もう！？」
我ながらの快心の出来に思わず仁科に一声かけると、周囲に居た他の奴らまで寄ってきてしまった。
「わあ・・・凄いね。雰囲気出てる」
「だろ？」
「なんだ・・・出来たって下書きだけじゃない」
仁科は素直に感心してくれたが、杉坂が呆れた様に難癖をつけてきた。
「いや、ちゃんと塗ってあるだろ？」
「鉛筆で濃淡つけただけじゃない。ちゃんと絵の具で色塗る事になってたでしょ？」
「俺の見ている世界は灰色なんだ」
「バカじゃないの」
白い目で暴言をはかれる。
クッ・・・所詮凡人には真の芸術はわからんのだ。
「とにかく、これ以上描く気はないから出してくる」
「勝手にすれば？絶対つき返されるだろうけど」
「フッ・・どうかな？仮にも美術の教師なんだ。きっと判ってくれる筈だ」
俺は颯爽と自分の絵を持って、巡回している教師の元へと向った。
のだが・・・・・、
「他の奴が真似するから色塗らなきゃ駄目って何だよ・・・・・・

！？」

無粋な美術教師は芸術を解さず、俺は肩を落として持ち場に戻る羽目に。

「ほら、みなさい・・・当たり前でしょ！」

ここぞとばかりに杉坂が勝ち誇る。

「そんなもん、真似する奴が悪いんだろ・・・・・・」

「つべこべ言ってないで色塗ったら？時間は有るんだし」

「色塗るの下手なんだよ・・・・・・」

「知らないわよそんなの」

そう、俺には絵を描くセンスは有っても、色を塗るセンスは無い。

今までずっとだ。ずっと下書きは上手いねと言われてきた。

そして、全て色を塗って台無しにしてきた。

だったら、初めから絵心なんか無くていいのに・・・・・・。

自分でも上手く出来たと思っている物を、

自分でダメにしてしまう悲しさは、

解る人間にしか解らないんだろう・・・・・・。

モチベーションはもはや地に墜ちた。

こんなんで良い作品なんて作れる筈も無い。

今日はここまでにして寝ちまおう。

「川上ー、さっさと色塗れー」

片付けを始めようとした所、丁度教師が巡回に来やがった。

チッ・・・相変わらず付いてない。

てか、この教師、まさか俺を見張りに来たんじゃないだろうな？

「どうしたー？絵の具くらいだせー」

モミアゲと繋がった顎鬚を蓄え、あまり抑揚の無いとぼけた感じで話すそれっぽい雰囲気の人だが、俺とは感性が合わない事は立証済みである。

「・・・忘れました・・・」

「何ー？じゃあー、誰か貸してやれー」

「あっ、良かったら私のを使って。私はまだ暫くかかるから」

本当に持ってきていなかったのだが、フランクな教師の指示にすかさず反応した仁科が、笑顔で水彩用具一式を差し出してくれた。
ありがたい。
その厚意は本当にありがたいのだが・・・・・・。
「悪いな・・・じゃあ、ちょっとだけ借りるわ・・・・・・」
「新しく買い換えたばかりだから、遠慮なく使ってね」
いや、そんな事を言われると、ますます申し訳無い気持ちでいっぱいなんだが・・・・・・。
かと言って断る訳にもいかず、複雑な気持ちでそれを受け取る。
これも宿命か・・・・・・。
観念して水を汲みに行き、そこで一人溜息をついた。

4月9日：灰色の世界（後書き）

GWなので少し早めにあげてみました。
どうでもいいですが、杉坂に下の名前が無いのが本当に不便で、勝手につけてしまおうか悩んでいたり（お

4月9日：意外な伏兵

案の定、色塗りには失敗した。
自分なりに丁寧にやっていたんだが、絵の具が跳ねて染みを作って終わった。
後はもう酷い物で、染みやはみ出た所を何とか修正しようとしては、反って傷口を広げていき、ますます凹んでまた失敗するという負のスパイラル。
まったく、仁科から絵の具を借りてなきゃ、破り捨てているところだ。
しかも時間だけは無駄にくって、結局寝る暇も無かったし。
あてつけに提出してやったが、ろくな評価はもらえんだろう。
まあ、来週も今日の続きらしいから、来週は堂々とサボれるが。
しかしブルーだ……。
さらし者にされたのだから、当然だろう？
仁科にはかける言葉も無いって顔をされ、あの杉坂にすら「本当に苦手なんだ…」と同情される始末。
こんな時は一人で屋上にでも行って黄昏るか……。
そう思いつつ俺が向ったのは一階の購買だった。
昼食は買ってあるが、ドリンクを買いに来たのだ。
自販機前の列に並びながら、修羅場と化した購買の喧騒を冷ややかに眺める。
『早い者勝ち』というルールの元、我先にとパンに群がる普段は“品行方正”が売りな優等生達。
そして、この惨状を知りながら、業者の管轄を理由に放置している教師達。
どっちも人間性を疑わざるをえない。
いや、確かに他人を押し退けてでも自分の利益を追求するその姿勢は、ある意味優等生らしいとも言えるし、放置しているのも、き

っと生徒達が将来バーゲンセールとかでも勝てる様に、世間の荒波を教えようという教師の深謀遠慮なのだろう。

まったく反吐が出る。

いっぺん、見せしめに全員薙ぎ倒していって、本当の地獄絵図にしてやろうか？

ついそんな考えが脳裏に浮かんでくるので、購買を利用するのをやめて久しい。

本当に学校って所は、どうしてこう精神安定上良くないのかねえ……。

自販機でカフェ・オ・レを購入後、鞄の中の昼食を取りに一度教室に戻ると、非常に面倒な奴が来ていた。

「あ～、オ～キくん、ヤッホ～！」

マズイッ！と回れ右をするも時すでに遅く、それまで仁科達と話していた眼鏡をかけた小柄な少女が、まるで飼い主の帰宅を出迎える小型犬の如き嗅覚と俊敏さで寄ってくる。

彼女の名は『門倉（かどくら）　実里（みのり）』

聞き込み、記事の執筆から、有事の際の実況アナウンスまでこなす報道部のエースにして、この学園のありとあらゆる情報を握る最も危険な女だ。

そしてまた、中学からの腐れ縁でもある。

「生憎と、ネタならないぞ」

「それならぁ、もう仁科さんから教えてもらったよぉ」

舌ッ足らずなアニメ声で、ニヤニヤしながら意味有り気な事を言って餌をまいてくる。

まあいい。あえて食いついてやろう。

「はっ？」

「『俺の見ている世界は灰色なんだ！　ｂｙ光坂高校番長　川上

央己』“今週の名言”はぁ、これで決まりだよぉ」
今さっきノリで言った台詞をすでに知っているとは、つくづく恐ろしい女である。
他でもなく、この女こそ俺を“番長”として広めた張本人なのだ。
ちなみに“今週の名言”とは、毎週報道部が発行している校内新聞の名物コーナーで、生徒や教師の名言珍言を取り上げる物なのだが、その七割以上が俺の発言とか訳の解らない事になっている。
「却下」
「え〜、何で〜？番長としての孤高な感じとかぁ、男の悲哀が出てて格好好いのにぃ」
横を通り抜けながらつれない態度をとるも、すぐ後ろをちょこちょことついてくる。
男の美学を解するのは善いが、それをネタにされてはたまらない。
「だから俺をネタにするなと、いつも言ってるだろ」
「それはしょうがないよぉ。オ〜キくんより面白い人ってぇ、なかなか居ないもん」
「つまらない人間ばかりだって事は認めるが、さらし物は御免だ」
「偉そうに。たんにアンタが変人なだけじゃない」
また俺の席を占領している杉坂が、待ち構えて居たかの様につっこんできた。
「人の事を売っておいてその言い草か」
「ごめんなさい。つい…」
謝りながらも仁科はクスクス笑ってるし。
お前がそんな風に笑ってると、「まあ、いいか」って気になってしまうじゃないか。
てか、さっきも楽しそうに話していたが、仁科と門倉も知り合いだったのか？
「オ〜キくんの台詞が使えないとぉ、また今週みたく校長先生か会長さんの新入生へのコメントとかになっちゃうよぉ？」
「それでいいだろ？」

「え〜、つまんないよぉ。今週の新聞イマイチだって評判悪かったしぃ」

新年度特集号として校長の言葉と春季大会の結果を載せた物だったが、確かに無難過ぎて面白みには欠けていた。

「そんなモンだろ？校内新聞なんて…」

「そんな事ないよぉ。それにオ〜キくんのファンの子って結構いるんだよぉ」

「おい、川上。ちょっと面貸……」

いきなり教室に入ってくるなり、チンピラ風に声をかけようとしてきた金髪の男が、俺の置かれている状況を見てフリーズした。

春原先輩だ。

多分今の門倉の台詞を聞いて誤解をしたんだろう。

ドアの外を見ると岡崎さんも来ていたので、とりあえずそちらに頭を下げておく。

「どうも、春原さん。何すか？」

「……面、貸してもらえませんか？」

動き出した先輩は何故か敬語だった。

まあ、丁度いいか。

門倉から早々に退散したかった俺は、渡りに船と鞄をとって歩き出す。

「あっ、オ〜キくん、記事はぁ？」

「好きにしろ。でも、番長は無しだ」

「は〜い。ありがと〜」

ああっ、俺もつくづく甘いな……。

嬉しそうに手を振る門倉に見送られながら、俺は春原さんと教室を後にした。

「クックックッ、ここで会ったが百年ぶりだな」

人気の無い特別教室棟につくと、不敵な笑みとともに春原さんは前口上を述べ始めた。
どうやらこの人とは前世からの因縁があるらしい。
とても嫌な因縁だ……。
「お前いくつだよ？てか、ここで会ったも何も、お前が連れてきたんだからな」
さすが岡崎さん、早いツッコミだ。
しかし春原さんは、それを無視して口上を続ける。
「お前さあ、最近チョーシにのってんじゃないの？」
「それ程でもないだろ？俺らにも一応敬語だし」
「さっきも女の子に囲まれてたし」
「それはたんにお前が羨ましいだけだろ」
「そもそも先輩の僕らを差し置いて、勝手に番長を名乗るって、どういう事ですかね？」
「いや、俺は別にそんなモンに興味ねえし。あと、お前が敬語になってるからな」
「岡崎、話の足折るなよ！」
「足なら折ってもよくね？」
「よくねえよ！話が先に進まないだろ！」
なるほど。こじ付けだろうが意味は通じる。
「とにかく、川上、学園最強の座をかけて僕と勝負しろ！そして僕が勝ったら、今日から僕が番長だ！」
「いいですよ」
「何ぃ！？」
あっさり承諾すると、何故かひどく驚かれた。
しかしすぐに体裁を取り繕うと、髪を掻き揚げる仕草で気取って見せる。
「フッ、面白い。この僕と戦うと言うんですね」
「戦えと言ったのはお前だからな」
「ああ、いや、今のは春原さんが番長でいいですよって意味です」

「「へっ・・・・・・!?」」
俺の言葉がそんなに意外だったのか、これには岡崎さんも少し驚いているようだった。
「い、いいの?」
「ええ。別に周りが勝手に言い出しただけなので・・・。先輩がやりたいならどうぞ」
元々、俺を番長と言い出したのは、宮沢のダチ達だった。
それで、宮沢までがたまにそう呼ぶようになり、それをうっかり門倉の前で口を滑らせ、あのメガネっ子が記事にしやがったのだ。
別に番長への拘りも未練も無い。
春原さんは脳の処理速度が追いついていないのか、暫く神妙な顔をして長考に入っていたが、
「クックックッ・・・ハーッハッハッハッ!!やったぞ!!今日から僕が番長だ!!これで杏やラグビー部の奴らにもデカイ顔させねえぜ!!」
と、とても小さな野望を高らかに宣言した。
しかし彼は知らない。
番長になったところで、別に強くなる訳では無いことを・・・。
「バカ、番長なんてやめとけよ」
春原番長の首に腕を回し、たしなめながらも岡崎さんはニヤリとした。
あの顔は、何か思いついたに違いない。
「何でだよ!?これで僕は学園最強になったんだぞ!怖い物無しじゃないか!
ははーん、さては岡崎、興味が無いとか言いつつ、本当は羨ましいんだろ?」
「んな訳あるかよ。つうか、そもそもお前、免許持ってんのかよ?」
「免許?何の?」
「番長の免許に決まってるだろ」

そう来ましたか！
「えっ！そんなのあんの！？」
「当たり前だろ？医者や教師になるのと同じように、番長になるのにも免許が要るんだよ」
「そんなの聞いた事ねえよ」
「数年前に法律で決まったんだよ。最近番長をほとんど見かけないのは、その為だ」
「た、確かに・・・川上以外に番長なんて漫画でしか見たことがない」
「昔は各校に一人は居たんですが、あまりにも番長の名に相応しくない輩が多くて、それで免許制になったんですよ」
春原さんが信じ始めていたので、俺も悪ノリしてもっともらしい事を言ってみる。
「そうなんだ。だが、あまりに試験が難しくて、受かるのは年に数人らしい」
「ねっ、年に数人！？」
「ああ。ある意味川上は、この学校の誰よりもエリートなんだ」
「なっ、何ですってぇ！？確かに、僕よりチビなくせに妙な迫力が有る方ですねと思っていましたけど・・・・・」
余程驚いているのか、すっかりおかしな敬語になっていた。
てか、言うほど身長差は無いですよ！！同じくらい…じゃないかな……？
「試験てそんなに難しいの？」
「ああ。まず面接な。どう見てもその筋の人にしか見えない強面のオッサン達が壁際にズラリと並んだ部屋で、親分の様な試験官とメンチを切りあいながら質問に答えていくんだ。当然、ビビッて目をそらしたり、おかしな受け答えをしたら即失格な」
「うっ……」
その状況を思い浮かべているのか、春原さんは渋い顔をして冷や汗を流していた。

しかし、まだ完全に闘志は萎えていないらしく、更に続きを訊いて来る。
「まっ、まあ、それはどうにかするとして…他にはどんな試験があんのさ？」
「実技は当然あるわな。実戦形式の」
「おっ！僕の得意なヤツだね！」
得意！？
「最初の内は受験者同士でやるんだが、３勝すると次はクマとかトラとか血に餓えた猛獣を相手に戦う事になる」
「クッ、クマァッ！？……それって、食べられちゃいますよねえ？」
「血に餓えてるからな」
「死んじゃいますよねぇ！？」
「心配するな！即死じゃなきゃ、ワンさんが中国四千年の秘術で治してくれる」
「誰だよワンさんて！？」
「まあ最初の面接の時に、『死んでも文句言いません』て書かれた紙にサインさせられますので、問題無いです」
「こっちは問題有り過ぎだろ！！」
「おいおい、番長目指す奴がクマぐらいでビビってんなよ。最後の相手はクマをも一撃で倒す達人だぜ」
「クマ殺しぃ！？」
誰もクマ殺しとは言って無いが、おそらくそう連想したのだろう。
「そんなのどうやって倒すんだよ！？」
「いや、さすがにコイツは一発でも当てれたら合格になる」
「なんだ。それなら…」
「オーラで生半可な攻撃は跳ね返されるけどな」
「オーラ！？」
「“氣”って、本当に飛ばしたり出来るんですよね」
「氣！？それって波〇拳みたいなやつですか！？」

「いえ、むしろ○メハメ波に近かったですね」
「ハメハメ波!?」
何ですかその卑猥な響きの技は?いや、確かにそう憶えている奴は他にも居たけど。
春原さんは目を瞑って再び長考に入った。
諦めようか悩んでいるのだろうか?
俺からすれば、こんな話を信じてる事が信じ難いのだが、岡崎さんは楽しそうだった。
きっと毎日こんなアホな話をして、春原さんをからかっては暇を潰しているのだろう。
少しだけ懐かしさと羨望を覚える。
今の俺には、そこまで何の気兼ねもなくアホな事を言いあえるダチはいない。
付き合いは長くとも、やはり秋生さんにはどうしたって気を使うし、今だって岡崎さんの話に合わせているだけだ。
まあ、そこから背を向けたのは、俺の方なのだが……。
「じゃ、じゃあ、その実技試験に受かれば合格出来んの?」
そんなに番長になりたいのか、春原さんはまだやる気の様だ。
「いや、まだ他にも試験の科目はあるぜ」
「どんなの?」
「それはだな……川上、お前の時はどうだったんだ?」
無茶振りキターーー!!
岡崎さん考えてなかったんかい……。
「えっと、俺の時は実技の前に“男気”の試験がありましたね」
俺は咄嗟に思いついた出任せで誤魔化す。
「男気?何だ、僕の為に有る様な試験じゃん」
えっと……そうなの?
「で、何すんの?」
「迫り来る暴走トラックから、子犬を助ける試験です」
「えっ…!?ハッ、ハハ……何だそれくらいなら楽勝じゃん。轢

かれる前に子犬拾えばいいんだろ？」
「ええ。ただ、助ける物はクジ引きで決まるので、クマとかの場合もあります」
「またクマ！？それってどうやって助けるんだよ！？」
「担いで」
「担いで！？クマ担げるかよ！てか、助ける前にクマにやられちまうよ！！」
「もちろん、自分でクマを殺したら失格なので、巧く当身で気絶させて下さい」
「そんな心配してねえよ！！」
「まあ、俺の時は可愛いチャイナ服の女の子でしたけど」
「えっ！？女の子の時もあんの！？」
「はい。お姫様抱っこでキス……」
「お姫様抱っこで助けたら、ほっぺにキスして貰えました」
春原さんは息を荒くして鼻の穴を大きくしていた。
自分がやっている場面を想像しているんだろう。
鞭だけでは単調になるので、ここらで少し飴もあげておくのも必要だ。
「お前、ラッキーだな」
「ええ。俺が試験に受かれたのも、たまたま運が良かっただけですから……」
岡崎さんの言葉に謙遜しつつ、さり気無く春原さんに期待を持たせる。
狙い通り、希望の光を見出した春原さんに生気が戻った。
でもこれは、あくまで次への布石だ。
「他には試験あんの？」
「えっと、次は“忍耐”の試験ですね」
「「忍耐…？」」
途端に二人の眉が寄った。やはりこの言葉は嫌いな様だ。
「１０分間座り続けていられれば合格です」

「何それ？まさか正座してればいいとか？それなら、僕らは説教でもっと長い時間座らされた事があるもんね～。なあ、岡崎」
「俺の名前まで出すんじゃねえ！」
恥ずかしい過去を友人に自慢気に語られ、岡崎さんはゲシッ！と尻を蹴り上げた。
「何すんだよ！！割れたらどうするつもりだよ！？」
「もう切れ痔にはなってるだろ」
「なってねえよ！！なってたら今頃大惨事だよ！！」
痔だけにですか。
「別に正座でなくてもいいんですが、ただ数人がかりで“袋”にされます」
「はい！？」
得意気な表情が一変青ざめる。
「何ですかそれは？」
「やったじゃねえか！お前毎日ラグビー部とかにボコられてるし、一番得意だろ！」
「毎日じゃなくて、たまにだよ！！つうか、得意じゃねえよ！！」
たまにボコられてるんだ…。
「ボコられる相手はクジ引きで決まります。当然、クマや達人もいますよ」
「またかよ！！てか、抵抗出来ないんじゃ、今度こそ喰われちまうよ！！」
「ああ、“眼で殺す”のはありなので、むしろ猛獣多いと楽ですね。奴ら自分より強いと思った相手には寄ってきませんから」
「どんな眼力だよ！！」
「ここまで来る奴は、それぐらい出来て当たり前のレベルって事か」
「俺の時は、前の試験で助けた女の子でした」
「Ｏｈー！！プリチーガールモ居マシタカ！！」
興奮し過ぎて片言になっていた。

「お前どんだけラッキーなんだよ」
「実はその子、暴走するトラックを蹴りで破壊する程の中国武術の達人でした」
「トラックを蹴りで！？」
「まあ、失敗して女の子が轢かれたらシャレにならんしな」
「永遠とも思える１０分間でした。百を超える蹴りを浴びせられ、特大の気功を食らい、さすがに何度も意識が飛びかけました」
「あ…う……」
やられている所を想像しているのか、何故か春原さんは呻き声をもらしていた。
「耐え切った時には、『よく頑張ったな』てキスしてもらえましたけどね」
「アンタやっぱラッキーボーイですね！！」
「俺はそれでもやりたいとは思わねえけどな…」
「でも、いくら達人と言っても所詮女の子じゃん。我慢出来ない事も無いと思うんだよね」
「慣れてるしな」
「慣れてねえよ！せいぜい毎日杏の投げた辞書や、美佐枝さんのプロレス技食らってるだけだよ！！」
毎日食らう様な事してるのか…。
「僕にもなれそうな気がしてきたよ。結構、運次第でどうにかなりそうじゃん」
「コイツもう女の子の事しか憶えてねえな……」
凄いな…自分に都合の悪い情報はすぐ忘れるのか…羨ましい…。
しかし、まさかやる気になってしまうとは…女の子ネタは失敗だったか？
このまま放っておくと後々面倒そうだし、奥の手を出そう。
「後は、ペーパーテストに合格すれば、晴れて合格です」
「ふうん、後はペーパーテストかあ……今何て？」
「一般常識の筆記試験ですよ。ウチの学校に入れるくらいの学力

が有れば問題ないです」
「うっ……！！」
まったく予想していなかったのか、春原さんが絶句する。
彼は元々スポーツ推薦でウチに来ているし、勉強なんかしていないだろう。
少々意地が悪いが仕方あるまい。
「そうだな。仮にも番長が常識も知らないんじゃ、恥ずかしいからな」
「……諦めます……」
その言葉が聞けて、岡崎さんと二人内心ホッとする。
番長目指して勉強するぜ！とか言われたら、もうバラすしかなかったからな。
先輩がヘタレでいてくれて本当に助かった。
「んじゃ、そろそろ俺はメシ喰いにいくわ。じゃあな川上、春原」
「どうも」
「じゃあな岡崎…って、僕を置いてくなよ！！」
慌てて春原さんが、すでに歩き出した岡崎さんを追いかける。
まったく、いいコンビだ……。
二人の背中を微苦笑で見送って、俺は一人屋上へと向った。

4月9日：桜舞う坂の上で

放課後の昇降口を出ると、辺りは何やら騒然としていた。
『何か起きている』
直感的に感じて校門の方に目を向けると、人だかりが出来いつもの流れが滞っている。
校門付近で起こる事と言えば、そう多くは無い。
「あっ、川上君。校門の所に他校の生徒が来てて、みんな怖くて出られないみたい」
「ああ。今行くよ」
見知った女子の言葉で予感が的中した事を知る。
どうやら“番長”の仕事の様だ。
まったく、マジで春原さんがやってくれても良かったんだが……。
いやダメか。あの人じゃ治めるどころか、火に油を注いでその周りで踊りだしそうだ。
てか、今回もあの人絡みじゃないだろうな？
十二分にありえるから怖い……。
そうで無くとも、この騒ぎを聞きつけて出てってしまうかもしれんし、さっさとあしらって、とっととお帰り願いますか。

事態を傍観する帰宅部達を尻目に校門近くまで来ると、桜の舞う雅な景色にミスマッチな連中がたむろしていた。
上は駅一つ先の学校の学ランを着崩し、下は複数タックの入ったダブダブのズボン。
いわゆるヤンキースタイルに懐かしさを感じつつも、まずは遠目から観察する。
人数はぱっと見八名。

内五人が前衛として校門前で中の生徒を威嚇しながら、何かを喚いている。

「髪の長いカチューシャの女を出せ！！この学校に居る事はわかってるんだ！！」

台詞の内容と、五人の内三人が腕や足に大げさに巻かれた包帯やギブスという判り易い格好をしている事から、相手の目的は言うまでも無く“お礼参り”だろう。

しかし、ウチの学校にそんなアホな事をしでかす奴が、それも女子でいただろうか？

“髪の長いカチューシャの女”というのにも心当たりは無い。

新入生だろうか？

記憶を辿る……と、1件ヒットした。

だがそれを「まさかな…」とすぐ否定する。

噂に聞いたあの少女の出で立ちがそれだったが、残念ながらウチに居る筈がない。

まあいい。誰がやらかしたかなんざ、俺にはどうでもいいことだ。

前衛の五人は下っ端で、後ろでしゃがんで駄弁ってる三人の内一人がリーダー格だろう。

さらに注視して、挙動や態度からそれを見極める。

しゃがんでいながらアフロ…いや、頭一つデカイあの男で間違いあるまい。

まずはセオリー通り、あのアフロ…いや、頭を抑えるとするか。

背筋を伸ばし、胆に力を入れ、瞳を閉じ、深く息を吸い込む。

黙想……。

世界と自分の境いに結界を張るかの様に、周囲の景色と雑踏にフィルターをかける。

俺の見立てに間違いが無ければ、特に問題はないだろう。
いつもの様にたんたんと『鍵をかける』だけだ。

「ん！何だテメエ！？あっ、おい！！」
前衛のど真ん中を堂々と素通りした所で、さすがに呼び止められる。
だがそれを、まるで知り合いにでもする様な自然さで手で制すと、呆気にとられている雑魚を置き去りにして歩を進め、獲物であるアフロの前に立つ。
「あん？何だテメエ？」
のっそりと立ち上がったアフロは、台詞は雑魚と同じだが、やはりデカかった。
目線の高さから視るに、アフロ抜きでも秋生さんよりデカそうだ。
さらに残り二人が両脇に立ち、完全に囲まれる。
どちらもアフロ程ではないが俺よりデカイ。
囲まれて見下ろされる圧迫感と屈辱。
それを一笑に付して、リーダーのみを見据え不敵に言ってやる。
「デカイな。それになかなかファンキーな頭してるじゃないか」
「テメエなめてんのか！？」
安い挑発に乗ったアフロに胸倉を掴まれ、むさ苦しい顔を近づけられる。
だが、これでいい。
これで少なくともリーダーであるコイツが手を出さない限り周りは手を出してはこない。
つまり、タイマンに持ち込めたということだ。
そして同時に、これでコイツらの底が知れた。

真っ先にデカイ体をさらに誇示し、威圧的な言動で相手を怯ませようとするのは、実はそこまで自分の実力に自信が無いからだ。
そもそも動物が威嚇する時と言うのは、出来れば戦いを避けたい時にやる物だろう？
それは人も同じだ。虚勢を張って臆病さを自他から誤魔化しているに過ぎない。
まあ、それで誤魔化されてしまう人間が多いから、効果的ではあるんだが。
その体勢のまま、至近距離で暫し無言でにらみ合う。
だが、時間が経てば経つ程劣勢に立つのはコイツの方だ。
数的には8対1。デカイアフロがチビな俺の胸倉を掴み三人で囲んでいる。
どう見ても形勢はコチラの圧倒的不利。
しかしだからこそ、屈するどころか平然と睨み返してくる俺に、相手は得体の知れない物への疑念を感じ始める。
そして疑念は次第によりネガティブな物へと変貌し、一秒ごとにその脆弱な精神をすり減らしていく。
“何だこのチビは？”
“何なんだコイツは…？”
“コイツ……ひょっとして……！？”
「なめてんのはアンタ等の方だろ？人の学校の前で騒ぎやがって…」
「ぐっ……！」
頃合を見計らい、相手を見据えたままぼやくと、小さな呻きと共に一瞬目が泳いだ。
舎弟の手前もあってか大きな動揺こそ見せなかった物の、アフロの額には汗が滲んでいる。
そろそろ落し所か。
「で、用件は何だ？」
そう訊くと、無言のにらみ合いから解放された相手の目に安堵の

色が浮かんだ。
だが、これでいいのだ。追い詰めすぎて逆ギレされたら元も子も無いからな。
「テメエんトコの奴に、ウチの舎弟が世話になってなあ。この落とし前、どう付ける気だよ?」
「ひょっとして、あいつ等が出せっつってたウチの女子にやられたのか?アンタも大変だな。情けない舎弟を持って」
「んなこたぁテメエには関係ねえんだよ!さっさと女を出しやがれ!」
「会ってどうする?その子に謝罪でもすんのか?」
「んな訳ねえだろ!こっちは三人も大怪我させられてんだよ!」
「あんな滅茶苦茶な包帯の巻き方するなんて、どこのヤブ医者だよ?大した怪我じゃねえのはバレバレだからな。それよか何?お前ら女一人に今度は八人がかりでやる気かよ?」
「こ、これは…だな……」
「やめとけよ。そんなモン勝っても負けても、アンタの名前を下げるだけだろ」
まるでダチでも諭す様に言ってやる。
すでに胸倉を掴む手に力は無い。
後は何か帰る理由を与えてやれば、これでこの件は円く治まる。
筈だった……。

その、少女が現れるまでは。

「お前達、そこで何をしている!?」

生命力に満ち溢れた声が、灰色の世界に鳴り響いた。
その声に振り返ると、一陣の光が風となって吹き抜け、周囲を包

む。
少女は眩い光の中に立っていた。
舞い散る桜の下で、長い髪をなびかせながら……。

「「「さ、坂上……！？」」」
囲んでいる三人が驚愕する声で、はっと我に返る。
俺とした事が、思わず魅入っていた様だ。
しかし…アイツがあの坂上智代なのか？
腰まで伸びる長い髪に黒いカチューシャ、すらりと伸びた肢体に遠目からでも分かる端整な顔立ち。なるほど、噂に聞いた特徴と一致する。
いや、そんな物はもはやどうでもいい。
その圧倒的な存在感と、全身に漲る自信が、何よりも彼女が“伝説の少女”である事を雄弁に物語っていた。
胸に熱い物がこみ上げ、全身に鳥肌が立つ。
ああっ、坂上智代だよ…あの坂上智代が光坂の制服を着て目の前に居るよ……。
「まさかとは思っていたが……何で坂上がここに居んだよ……！？」
アフロの疑問は同感だが、同時にコイツがわざわざ大人数でゾロゾロやって来た理由がわかった気がした。
こいつ等も坂上の転校を知っていたが、舎弟が語った特徴からもしやと思ったのだろう。
デカイ図体の割りに、中々慎重じゃないか。
「矢島さん、コイツです！俺達をやったのは、この女です！！」
包帯の男達が矢島と呼んだアフロに泣き付こうとするも、リーダーが一番うろたえていた。
坂上の顔を知っていたらしい両脇の二人も、明らかに怯えている。

この三人は昔彼女が不良狩りをしていた頃に、狩られた口なのかもしれない。
その坂上は一度ぐるりと男達を見渡すと、溜息をついてから口を開いた。

「そこのモジャモジャは見覚えがあるな。それから、そっちの三人は昨日の奴らか。やはりな…。他校の生徒が私を探して騒いでいると聞いて来てみたが、大方、昨日の事を逆恨みして、仕返しに来たんだろ？」

これだけの大人数を前にしながら、まったく意に介した様子も無く堂々と言ってのける。
「坂上、お前が何でここにいんだよ！？転校したんじゃ無かったのかよ！？」

「ああ、したぞ。この春からこの学校に編入したんだ」

「「「なっ、何だとぉ！？」」」
アフロのナイスな質問で、本人の口からチョット自慢げに事実が語られた。
ああっ、本当にウチに来たんだな……。
しかし何故わざわざ編入なんて？
まさか……本当に『自分より強い奴』＝『俺』に会う為に！？
まあ、んな訳無いだろうが……。

「それより、お前達の用が有るのは私だろ？いいだろう。相手をしてやる。だから、その男は離してやれ。無関係な生徒を巻き込みたくは無い」

その大胆不敵な発言で「あれ！？」と気付く。

俺、やられてると思われてないか？
確かにガラの悪い他校の生徒達に囲まれ、形だけとは言え胸倉を掴まれたままだ。
うわ……誰でもそう思うわな……。

「それとも、こんな馬鹿な真似はもう終わりにして、このまま大人しく立ち去るか？どうやら私だとは知らずに来たようだしな。なら、悪い事は言わない。もう止めておけ。私としても、そちらの方が助かる。編入早々、こんな事で目立ちたくは無いからな」

坂上の啖呵に野次馬から「キャー、智代さーん！！」と黄色い声援が上がった。
もう十分過ぎる程目立っている。
それにどう考えても挑発している様にしか聞こえなかった。
なるほど。これが伝説を作ってしまう少女の正体か……。
「くっ…！」
案の定、ギリギリの所で踏みとどまったプライドが、男達の奥歯を噛み締めさせる。
まとまりかけていた状況が、たちまち一触即発の状態に。
アフロが一声発すれば、乱闘が始まるだろう。
正直、“伝説となった強さ”という物を見てみたい気はする。
だが、そうもいくまい。
ウチの学校は進学校だけあって、こういった揉め事に対してかなり厳しい。
時間的にも、そろそろ腰の重い教師達が来る頃だろうし。
こんな衆目の前でやらかせば、一発退学だって有りうる。
まあそれに、このままじゃ本当に助けられた事になっちまうからな。
「言わせておけば…！！」
「矢島、こうなったらやるしかねえよ！」

「やめとけよ。女相手にみっともねえ」
いきり立つ男達を、まるで自分の子分達を制止する様な親しみを込めてたしなめる。
「ざけんな！こんだけなめられて、黙ってられっかよ！」
「てかお前、あの女が何者だか知らねえのか！？」
「知ってるよ。よくな……。悪かったな。あいつは物の言い方知らないだけで、アレでも悪気はねえんだよ。許してやってくれ」
あえて坂上に代わって謝辞を述べる事で、相手をなだめすかすと同時に先程抱かせた疑念を呼び戻し、気をこちらに向けさせる。
“そういや、何なんだコイツは？”
“あの坂上智代を知っていて、その上で女子供扱い。しかもかなり親しげだ”
“さっきも囲まれて、矢島に胸倉を掴まれながらも、まったく怯んでいなかった”
“ひょっとしてコイツ……やっぱりとんでもなく強いのか……！？”
そう、ポイントは、あまり多くを語らず、相手に想像させる事だ。
それは同時に、破れかぶれになっていた相手に、思考力を取り戻させる事でもある。
所詮は想像。だが、彼らにとっては捨て置けない疑惑。
坂上一人でも一か八か。そこに得体の知れない奴まで加わるとしたら……。
「とりあえず、智代は俺が抑えといてやるよ。アイツには俺の方から言っておくから、それで今回の事は手打ちにしてくれ」
だからこそ、彼らは俺の用意した助け舟に乗る他無い。
誰だって、出来るなら勝ち目の無い戦いなんてしたくは無いのだ。
掴まれていた手をそっと外しながら言って、ポケットに手を入れ踵を返して歩き出す。
「…お前…何者だ！？」
よくぞ訊いてくれた。

一度立ち止まると、リクエストに応え背中越しに名乗ってやる。
「俺は川上央己。この学校の番格だ」

どうやら、坂上が前の学校からの去り際に言ったとされる台詞『私より、強い奴に会いに行く』は、意外と広まっていた様だ。
「お、おい、確か坂上が転校した理由って!?」
「じゃあ、アイツが!?」
「うおっ!マジか!?」
そんなアホな会話が後ろから聞こえてきた。
これで奴等の件は片付いたと見ていいだろう。
しかしまあ、問題はこの後である。
すなわち、“伝説の少女坂上智代”を、どうやりこめるかだ。
聞き分けの良い子だと助かるんだが……。
溜息と笑いが同時にこみ上げてくる。
頭を悩ませながらも、血が騒いで仕方が無い。
久しぶりだな。この感覚。
まるで消えかけ燻っていた炉に、煌々と火が灯った様な……。

ああっ、俺……、まだ“生きて”たんだな……。

アイツの事を知ったのは、“あの頃”なのだから、これも道理か。
一度はもう叶うことは無いと諦めた、三年越しの片想い。
ぶつけてやろうじゃないか!

近付くにつれ、より鮮明となる坂上の姿はゾクゾクする程凛々しく、バックの舞散る桜と相まって、まるで映画のワンシーンの様だった。
てか、髪もなげえが足もなげえー!

彼女は蹴りが得意だと聞くが、あの足で数々の男達を葬ってきたのか。

なるほど。『あの足になら蹴られてもいい！！いや、むしろ蹴ってくれ！！』

そう思わせる程の魔性を秘めている魅惑的な足だ。

何しろ相手の方から当たりに行くのだから、そりゃあ“無敵”だわな。

顔は思っていたよりも少女の面影を残し、“綺麗”“美人”“可愛い”全て当てはまる。

なんだ…容姿まで“無敵”か？

胸も結構在るし、腰も細いし……。

確かに洒落で済ましてくれるのなら、男なら思わず飛び掛ってみたくなるかもしれん。

だからか？だからコイツにやられに行くリピーターが後を絶たないのか？

つまり、今までの情報を総合すると……、

コイツは人の形をした『ヤンキーホイホイ』だな。

「大丈夫か？殴られたりしなかったか？」

などとアホな分析をしていると、向こうから声をかけてきた。

清流の様な素直そうな声で、少し眉を寄せ本気で心配している様に。

しかし俺は、何も応えずにそのまま歩を進め、右手を出しながら彼女のすぐ目の前でようやく立ち止まる。

「ん？どうした？お礼ならいいから下がっていろ。邪魔になる」

俺の不可解な行動にいぶかしみながらも、完全に他校生とのバトルモードに入っていた坂上は、俺の肩をつかんで押しのける様にしながら、自分から一歩前に出た。

その一瞬の隙をついて、

背後からの一撃を、

脳天に叩き込む！

「喧嘩売る様な真似すんなって」

コツン

その一瞬に、その場の居た者全てが唖然とし、静寂が訪れた。

「「「あ～～～

来たんだ。それに、すでに一般の生徒にも迷惑をかけていたし、何よりお前がアイツラに捕まってしまっていた。あの場はああ言うより他に無いだろ？」

ごもっともで……。

それを言われると弱いので調子が狂う。

いっそ認めてしまうか。

「いや、助けようとしてくれた気持ちは嬉しいけどな。でも、遠目からはピンチに見えたかもしれないが、別にアイツラにやられてた訳じゃ無くて、話合ってただけだから」

「でも、胸倉を掴まれてたじゃないか」

「掴ませてやってたんだ。てか、お前が出てこなきゃ、今頃話合いで解決して、奴等も帰ってた筈だ」

さすがにこれには坂上も更に眉を寄せ、不機嫌さを顕わにして睨んでくる。

「せっかく助けてやったというのに、その言い草は何だ？そもそも、アイツラは私に用が有って来たんだ。その私が居ないのに、アイツラがそう易々と帰る訳が無いだろ」

彼女の言葉に内心ほくそ笑むも、ここではあえて伏せて置き、事情を訊く事にする。

「事の発端は？」

「昨日、この学校の女子生徒が、他校の生徒にしつこく軟派されていたんだ。それを助ける為に私が相手をしてやった」

「それで三人病院送りか？」

「正当防衛だ。先に手をあげたのは、アイツラの方なんだ。それにあの包帯は、大げさに巻いているだけだ」

「それはわかってる。お前が正しいな」

「だろ？」

あまりにも偉そうで得意気な正当防衛だったが、あえて肯定してやると更にその形の良い胸を張って見せてくる。

「でも、やり方に問題が有ったから、こんな事になってるんだか

らな。どうせさっきみたいに挑発的な事でも言って怒らせたんだろ？で、向って来た所を叩きのめした。それは正当防衛じゃなくて、確信犯だからな」

調子に乗っている様なので、一転核心を突いてやる。

すると坂上はムッとしてつまらなそうに口を尖らせたが、多少の後ろめたさは感じていたのか、言い訳をはじめた。

「……仕方がないだろ？私だって初めは何とか話合いで解決しようとしたんだ。でも、アイツラは自分勝手な事を言うばかりで、私の話なんて聞こうともしなかったんだ……」

どうやら「仕方が無い」が彼女の口癖らしい。

あと、勝手にクールなイメージを抱いていたが、意外と表情がコロコロ変わって面白い。

「まあ、その気持ちもわかるけどな。でも、お前強いんだろ？だったら、なるべく力に頼らずに解決する方法を考えろよ。でないと、いつまでたってもこんな不毛な事を続ける破目になるぜ」

「……！」

さりげなく、しかし三年分の想いを込めて、ずっと言ってやりたかった台詞で締める。

坂上は俺の言葉にショックを受けたのか、目を見開いたまま無言で俺を見つめていた。

……とてもとても照れ臭い……。

「おい、田嶋…だったか？」

彼女の視線に耐え切れなくなった俺は、思い出した様にむさい男達に声をかけた。

「矢島だ！」

「ああ、わりい。何かコイツ誤解してるみたいだから、お前からも言ってやってくれ。違うよな？お前等はお礼参りに来たんじゃなくて、“ケジメ”をつけに来たんだよな？」

「はぁ？」
アフロの頭に疑問符が浮かんでいたが、かまわず続ける。
これは衆人に聴かせるための物だからだ。
「いくら舎弟思いのアンタでも、三人がかりで女一人に負けた奴等の逆恨みに付き合ったりしないよな？まして、女一人に八人がかりなんて恥ずかしい真似、する訳無いよな？」
アフロ以下全員の顔が引きつる。
コイツラも、頭では恥ずかしいとは思っている筈なのだ。
だからまず、衆人にバラして恥を教えてやるのだ。
「舎弟のしでかした不始末に、自分も一緒に頭下げに来るなんて、出来る奴はそう居ないよな。さすが矢島だ」
ある意味これは脅迫である。
だが、もはやコイツラの立つ瀬があるとすれば、これしか無いだろう。
いくらアフロでも、それぐらいの事は解るはずだ。
「あっ、ああ、その通りだ…ウチの舎弟が悪かったな。オラッ！お前等も謝れ！」
「「「ええっ！？す、すいませんでしたーーー！！」」」
「こっちもやり過ぎちまって悪かったな。まあ、いくら強くても女の子だからな。怖くて加減出来なかったんだ。許してくれ」
「「「はっ、はいーーー！！」」」
こうして、校門前を騒がせた他校の生徒達は、謝罪だけして足早に去って行った。
「どういう事だ？」
いつの間にか復活していた坂上が、不思議そうな顔で訊いて来る。
「胸倉掴ませながら話し合った結果だ」
「…ひょっとして…お前はアイツラと知り合いだったのか？」
「いや、知り合いなら胸倉掴まれないだろ・・・。あんなのと一緒にするな」
「じゃあ、一体何をしたら、あんな風に素直に言う事をきかせら

れるんだ？」
「まっ、お前の知らないやり方も、色々在るって事だ」
坂上はイマイチ腑に落ちないという顔をしていた。
実際何もしていないのだから当然か。
それとも暴れ足りないとか？
まあ、俺の方はそれも含めての完全勝利だった訳だが。
しばし勝利の余韻に浸る。
春風に舞う桜達が、俺達の勝利を讃えていた。

「おい、川上！」

人が折角清々しい気分で居た所を、たった一声でぶち壊しにされる。
生徒達を掻き分け物々しく現れたのは、十人もの男性教師軍団だった。
ホント、いつもいつも今までどっかに隠れて観てたんじゃないかってくらい、絶妙に無駄なタイミングで現れてくれる人達だ。
「何があった？」
「いえ、他校の生徒が来てたんで、事情訊いて帰ってもらいました」
「何の用だったんだ？」
「ああ、何かウチの生徒に迷惑かけたとかで、謝ってましたよ」
「ふむ、手を上げたりしてないだろうな？」
「いや、謝りにきた奴と喧嘩する訳無いじゃないですか」
教師の追及を回避し、これで大団円と気を抜いたその時、思わぬ伏兵が現れた。
「先生、その人、坂上さんの事ぶちました」
はひ！？

見ると、坂上に黄色い声援を送っていた女子の一人だった。
まったく余計な事を……。
「ん？誰だ坂上というのは……？ああ、この春から編入してきた君か。川上に暴力を振るわれたというのは本当か？」
「いや、ただチョット軽くコツンとしただけですよ？」
「お前には訊いていない。坂上、本当なのか？」
やば……これでは坂上に生殺与奪権を握られた様な物だ。
不安気に彼女をみると、目と目が合ってニコリと笑ってくれる。
坂上……。
「ああ、本当だ」
おい！！
「だから、私がそいつを叩き返せば、それで“おあいこ”だ」
何故そんな展開になる！？
などと突っ込む暇も無く、拳を握りしめた坂上が迫る。
顔は満面の笑みだ。が、額に青筋が見える気がする。
さっきの事、やっぱ根に持っていやがったな！
「コラ、逃げるな！大人しくしていれば、すぐに済む」
「お前本気で殴る気だろ！！」
「そんな事はないぞ。ただ、そうやって逃げられると、加減が難しくなるな」
今にも振りおろされそうな拳を両手で牽制しつつ、ずるずると後退する。
それを坂上は、幾度もフェイントをしかけつつ機を窺いながら、追いかけてくる。
多くの教師や生徒達が観ている前で、一体何をやっているんだ俺は！？
「ふう、もういい。川上、くれぐれも危険な真似はするなよ」
仲が良い者同士じゃれあっているとでも見てくれたのか、教師達はお決まりの捨て台詞を残して去って行った。
「あ、はい。ウゴッ！！」

迂闊だった。
そちらに一瞬気を取られた刹那、死角から側頭部を狙い打たれたのだ。
一瞬、意識が遠のく。
先生すいません。早速危険な事をしてしまいました。
てか今の、鈍器じゃなくて素手だよな？
「…ッテェな！！俺じゃなきゃ死んでるぞ！！」
ギリ意識を保ち、足を踏ん張り倒れそうになった身体を何とか支える。
「大げさだな。でも、一回は一回だから、これで“おあいこ”だ」
復讐をとげた坂上は、いたく御満悦だった。
まったく……ひょっとして、一応かばってくれたのか？
どちらにしろ、意外と人懐っこい奴なのかもしれないな。
「坂上」
「何だ？」
「ウチの学校は喧嘩はご法度だ。気をつけろよ」
「…うん…」
「じゃあな」
拍子抜けした様な顔に背を向け、軽く後手を挙げて別れを告げる。
今日の所はこれで勘弁してやろう。
正直もう胸がいっぱいだ。
いつもと同じ坂道も、今日はいつもより鮮やかだった。

4月10日：罪と罰（前書き）

・誤字を直しました。6／14

4月10日：罪と罰

幼稚園である事がブームとなった

“スカートめくり”だ！！

何故そんな物が流行ったのか、まったくもって謎だが

突如男としての本能に目覚めた俺達は

獲物を見つけては競う様にスカートをめくりまくった

だが、事態を重く見た父兄や園側に対策をとられ、ブームは収束に向う事となる

ブルマやスパッツ、短パンの着用である

まだブルマは許せるが、短パンとかふざけるな！

子供ながらにそう思った物だ

一度クラスで一番勝気だった女の子がスパッツをはいて来て

「見たかったら、好きなだけ見なさいよ！」

などと調子にのって挑発してきたので

それならと油断している所を近づいて

スパッツを脱がそうとしたら
一緒にパンツまで降ろしてしまった
それからはもう散々だった
人生初の女の子からの平手打ちを食らい
先生にはこっぴどく怒られ
女子からはハブられ
男達は俺を“スケベ王オーキ”と呼び讃えた
でも正直その時は
『挑発してきたアイツが悪い』としか思っていなかった
もちろん今思うと、彼女にも洒落にならん事しちゃったなと冷や汗物だが……

男子からは不名誉な称号で呼ばれ
女子からは近付くだけで逃げられるという針のむしろの様な日々に
俺の心は荒み、色々溜まっていた
そんな時、ランドセルを背負ったミニスカートの女の子を見かけた

あのお姉さんの子供の、確か渚ちゃんだ

ドス黒い衝動が湧き上がる

まったく知らない子にはさすがに気が引ける

大人にやれば捕まって怒られるかもしれない

でも、あの子ならいいんじゃないか？

年上だがトロそうだし

後ろから走り抜けざまにめくって、そのまま逃げれば平気だろう

そう高を括った俺は、早速実行に移した

「きゃ！」

十分な距離をとってから、首だけひねって反応を見る

渚ちゃんは特に怒った様子もなく、ただキョトンとしていた

「へ……？オーちゃん？」

教えた憶えも無いのに愛称で呼ばれた

「こんにちは、オーちゃん」

笑顔で挨拶された

調子が狂う

キャーキャー言って怒るから面白いのに

俺は今度は前から、アタックを敢行した

「きゃ！オーちゃん？」

めくられたスカートがすっかり戻ってから手で押さえていた

これは面白い

「ダメですよ、オーちゃん。女の子のスカートをめくったりしちゃダメです」

優しく諭される

しかし俺は、それでますます調子にのった

今度はゆっくり近付いていって、堂々とめくる

「きゃ！？ダッ、ダメですオーちゃん。そんな事をしてはいけません！」

さすがに顔を真っ赤にして目を瞑り、必死に抗議してきた

だが、異常にテンションの上がった俺には、もはやその程度の事では止まらない

「ダメです！やめて下さい！」

渚ちゃんは前だけを必死に押さえているので、後ろからはやりたい放題だった

「やめっ……！」

最後はもう、スカートをめくり上げたままキープし、お尻を丸見えにしていた

「や〝め〝て〝く〝た〝さ〝い〝……ひっく……や〝め〝て〝…ひっく…く〝た〝さ〝い〝……！」

やばい！

渚ちゃんの声に嗚咽が混じり始めて、急激にテンションが冷める

慌てて手を離すも、彼女はそのままへたり込み、顔を両手で覆って泣き出してしまった

しまった

困った

どうしよう？

どうも出来ない……

結局俺は

泣いている渚ちゃんを置いて逃げ出した

４月１０日（木）

２限目が終わると、クラスメート達の多くは移動を始めた。
３～６限目にかけて体育館で部活の説明会が有るのだ。
とは言っても、２、３年は基本的に自由参加で、部活に入ってない奴や、興味の無い奴は教室で自習していても構わない事になっている。
さすが進学校、どうせなら帰らせろと言いたい。
「川上君は説明会に行かないの？」
席を立った仁科が話しかけてきた。
「ああ。ここで小説でも読んでるよ」
「そう……」
当たり前の様に答えると、仁科は何故か残念そうに表情を曇らせる。
何だろう？確かこいつも帰宅部の筈だが…。
「あのね、川上君……」
「ヤッホ～！オ～キくん、りえちゃん」
意を決した様に仁科は何かを言いかけたが、それと同時に教室に入って来た門倉の登場によって再び口を噤んでしまう。
「こんにちは。門倉さん」
「みのりんかぁ、もんちゃんでいいよぉ」
「なんだよモンチッチ」
「えへへ～、モンチッチで～す」

コイツが来た目的はわかりきっていたので、面倒そうに中学の頃のあだ名で呼んでやったのだが、モンチッチ門倉は嬉しそうにおどけて見せた。

本人公認の『みのりん』『もんちゃん』から、『モンキー』『モンモン』『サル』『メガネザル』『出目金』『ファンキーモンキーベイベー』『ミノ〇ンタ』まで、彼女のあだ名は挙げるとキリがない。

大半が男子に門倉の“モン”と眼鏡と目が大きい事をからかわれてつけられた物で、本人は嫌がっている物も多いが、俺のつけた『モンチッチ』は可愛いからいいらしい。

「そういえばぁ、りえちゃんも今日の説明会出るんでしょう？がんばってねぇ」

「え？ええ。ありがとう」

「何だ、仁科も部活はじめたのか？」

「うん…実は合唱部を作ろうと思うの。と言っても、まだ部員数も足りないし、顧問の先生も決まって無いから、本当に立ち上げられるかどうかは分からないけど……」

「へえ…！」

正直、かなり意外だった。

何しろ彼女は、つい半年ぐらい前までずっと塞ぎこんでいたのだ。

その彼女が、まさか自分から部を立ち上げようなんて挑戦的な事をしようとは…。

いや、むしろやりたい事を、目標を見つけたからこそ、か。

だとしたら……良かったな仁科。

「そっか…がんばれよ」

「はい！ありがとう！」

ありきたりな言葉に、心からの祝福を込める。

すると仁科には伝わったのか、少し頬を紅潮させながら力強く応えてくれた。

「あの…それでね、川上君。その…もしよかったら……説明会に

来てくれませんか？」
そして何故かさらに赤くなりながら、そんな事を言ってくる。
「…順番は何時頃なんだ？もう決まってるんだろ？」
「あっ、うん。新規の部は最後の方だから…」
「じゃあ、６限から行けばいいか？」
「うん、ありがとう！それじゃあ、私行ってるね」
「ああ」
「行ってらっしゃ～い」
ただ説明会に顔を出すだけだというのに、仁科は本当に嬉しそうに待っていた杉坂と教室を出て行った。
そういや杉坂の奴も、今日は遠目から観てるだけだったな…。
まあいい。それより問題は……。
「お前も記事書くのに説明会行くんだろ？始まっちまうぞ」
「平気だよぉ。報道部は私だけじゃないしぃ」
体よく厄介払いをしようとするも、やはりこの程度で追い返せる相手ではないか。
まあ仕方あるまい。
昨日の騒ぎが起きた時点で、記事にされるだろうとは覚悟していた。
「昨日の事なら、たんに他校の生徒を平和的にあしらっただけだ」
「うん。ウチの女子がしつこくナンパされてたのを智代ちゃんが助けたら、逆恨みされちゃったんだよねぇ」
真実のみを簡潔に答えてやると、微妙に噛み合わない無い核心をついた話が帰ってくる。
それはつまり……。
「一限の後にでも、坂上の所に先に行ってきたか？」
「えへへぇ」
「たく……なら別にわざわざ俺のトコ来なくてもいいだろ？記事にしてもいいから、あんま“アホな事”は書くなよ」
笑って誤魔化すモンチッチに、念のために釘だけさしておく。

まあ、コイツは他人を貶める様な記事は絶対書かない“仁義”をわきまえた奴だし、だからこそ、一歩間違えば嫌われ者に成り得るポジションでやっていけてるのである。

「うん。だから、騒ぎの事はいいよぉ。それよりぃ……智代ちゃんとの関係を訊きたいなぁ」

ついにモンチッチの皮を被った小悪魔が、ニヤリと本性を現す。

って、訊きたかったのはそれかよ！

「関係も何も、昨日あの場でたまたま会っただけだ」

「え～、その割りにぃ、じゃれあったりして、すご～く仲良さそうだったよぉ？」

どうやらコイツもあの場に居合わせた様だ。

やはり他からはそう見えたか……。

実際は、ハンマーで殴られた様な一撃を食らい、死にかけたと言うのに……。

「てか、アイツにも聞いたんだろ？」

「えへへぇ…でも、智代ちゃんはオーキくんに興味津々みたいだったよぉ？」

何！？

って、いかんいかん、動揺するな。これがこの小悪魔の手なのだ。

「そりゃあ俺みたいな人間はなかなか居ないだろうからな……珍しかっただけだろ」

「うん。“変わった奴だ”って言ってた」

「だろうな……てか、変な事教えてないだろうな？」

「え～、教えてないよう」

そんなにニコニコしながら言われても、まったく説得力がなかった。

「じゃあ、そろそろ私もいくねぇ」

そう言った途端、計った様に3限の開始を告げるチャイムが鳴りだす。

これも小悪魔の魔力だろうか？

「ああ」
「まったね～」
大げさにブンブンと手を振る門倉にチョットだけ手をあげて応え、それが見えなくなると、ドッと疲労感に襲われ溜息をついた……。

４限目も中頃にさしかかり、時計は正午を指していた。
それまで教室で大人しく読書していた俺だったが、変なタイミングで読み終えてしまい、暇を持て余し始める。
まさか訳の解らん第三者の解説が２０ページ以上もあるとは……。
それを読む気にもなれず、寝てようかとも思ったが、別の本を借りるべく図書室に行ってみる事にした。
ウチの図書室は基本的に休み時間と放課後しか開いていないので、授業中である今は閉まっている可能性が高いが、ひょっとしたら自習する生徒の為に開放してあるかもしれないと思ったのだ。
しかし、やはりドアには『閉室中』と書かれた札がかけられていた。
諦めて出直すか…と思いながら戸の端に目を向けると、ほんの少し開いている。
司書の先生でも居るのだろうか？
だとしたら、彼女とは“大体の本の好みまで覚えられている〝程度の仲だ。
注意はされるかもしれんが、特別に貸してもらえる可能性は高い。
ロマンチストな文系タイプとは比較的相性がいいのだ。
まあ、“番長”なんて物自体すでに“幻想種”だしな。
引き戸を開け、中に入る。
一応人影を探して、ざっと見渡してみた。
少なくとも閲覧席やカウンターには居ない様だ。
これはたんなる閉め忘れの線も有り得るな。

そんな事を思いつつ窓際まで歩を進めると、そこに床に座って本を読んでいる子供が居た。

……いや、ウチの女生徒か。てか、あの腕章は三年！？

しかし一瞬子供に見えたのは、可愛らしい顔や髪飾りが子供っぽいからとか、裸足で床に座っているからとか、でも胸は結構大きいとか、いやそれは違うかとか、それだけではない気がする。

何と言うか……“在り方が〝とでも言おうか。

あくまで、直感的にそう感じたというだけだが……。

まあいい。

興味は無くは無いが、相手は一応三年の女子だし、軽々しく声をかけたり出来ないだろ。

そう思い離れようとした所で、その違和感に気付く。

彼女の手には何故かハサミが握られており、何故かそれを読んでいる本に当てていた。

まさか…！？

じょきじょきじょき。

「ちょ、まった！」

咄嗟に駆け寄り、本を切り始めたその手を掴む。

「一体何……を……！？」

彼女が正気でない事は明らかだった。

その虚ろな瞳には、目の前に居る俺の事すら映ってはいなかったのだ。

そして見知らぬ俺に右手と左肩を掴まれているにも拘らず、微動だにしない。

そう、まるで“にんぎょう”の様だった。

「……きゃっ！！いやぁ！！離して！！」

虹彩がもどった。

途端、俺から逃れようと手足をばたつかせて暴れだす。

仕方なく手を離すと、敷いていたクッションに座ったままズルズルと後退していき、背後の棚にぶつかるとそこで身を竦めて小動物

の様に震えだした。
「……いじめる？いじめる？」
さすがに唖然とする他ない。
とりあえずパニクっているのを落ち着かせて、話を訊くべきか？
それとも、余計に怯えさせるだけかもしれないし、このまま立ち去るべきか？
それとも……本当に苛めちゃう？
いやいや、図書室の本を切っちゃうような悪い子に、ちょっとだけお仕置きを……。
「あっ、いや…、驚かせてすみません。ただその…この本に興味があった物で……」
馬鹿な妄想をうっちゃり、俺は活路を見出すべく、ハサミが挟まったまま床に落ちた本を拾い上げ、彼女が切ろうとしていたページを確認する。
「！」
郷愁が心を満たしていく。
奇しくもそれは、俺もよく知る人について書かれた物だったからだ。

『真理を探究する者は、傲慢であってはならない
科学の言葉で語り得ないからといって、奇跡を嘲笑してはならない
この世界の美しさから、目を背けてはならない』

この町に住んでいた世界的にも高名な理論物理学者『一ノ瀬教授』の残した至言である。
きっかけは、中学の時に視たＴＶの特集。
初めは教授が研究していた『超統一論』に惹かれ、調べていく内

にその人となりを知り、アインシュタインやホーキング等と並んで最も尊敬する科学者の一人になった。

俺が小学生の頃にはすでに亡くなっていたのだが、それが『世界の成り立ちその物を、一番綺麗な言葉で表した論文』を発表するべく海外へ向う途中の飛行機事故だったと知った時には、酷く落胆した物である。

「…俺も、超統一論には興味があって、一ノ瀬教授の事は尊敬しているんです。本当に…あんな事故さえなければ、今頃あの論文も発表されて、教授がどんな言葉を選んだのか知る事が……」

「……ごめんなさい……」

害意の無い事が少しでも伝われればと、俺は自分の感傷をそのまま口にしていたが、それは突然の謝罪の言葉で遮られた。

上から見下ろす形の俺からは、座って俯く彼女の表情はわからない。

だが次の瞬間、彼女は両手でバッと顔を覆うと、

「ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!」

謝罪の言葉を何度も何度も叫びながら立ち上がり、そのまま外へ走り去ってしまった。

後に残された、積まれた沢山の本と、彼女のクッションと弁当箱。

訳がわからない……。

いや…、だからこそ、その特異性からすぐに思い当たるべきだったのだ。

例えそれが自分にとって特別な物であったとしても、軽々しく口にせず、彼女との関連性にまで考えが及んでいれば、推理出来た筈だったのだ。

彼女こそが、この学校一の才媛であり、他でもなく一ノ瀬教授の遺児である『一ノ瀬　ことみ』である事に……。

4月10日：頂上決戦（前書き）

『修正情報』

・最後を少し直しました。

・誤字を直しました。

4月10日：頂上決戦

「まさかあの一ノ瀬教授のお嬢さんがな……」

色々とショックが重なり、最悪な気分で階段を上っていく。

見知らぬ女の子が、突然図書室の本を切り出して…。

その子はその時、目が虚ろで正気で無くて…。

正気に戻ったと思ったら酷く怯えられて…。

落ち着かせようとしたら、かえって地雷を踏んで傷つけて…。

その子はおそらく、俺が尊敬する人の娘だった…。

あの一ノ瀬教授の娘さんが、あんな事になっていた…。

『一ノ瀬ことみ』についての噂は知っていたし、一度は会ってみたいとも思っていた。

教授の娘さんで、自身も全国でトップクラスの学力を持つ秀才だが、人見知りが激しく、他人と関わろうとしないかなりの変わり者…。

アレはそんなレベルじゃないだろ……。

教授はロマンチストな科学者であり、情熱的な詩人であり、高邁な哲学者だった。

そして子供の為にわざわざ緑の多いこの町に移り住む様な、優しい父親でもあった。

それなのに……。

それなのにな……。

教授は志半ばで不慮の事故に遭い、そして恐らくその死がトラウマとなって今も娘さんを苦しめている。

だとすれば……。

やりきれなさに唇を噛む。

教授について知っていれば、そして秀才である彼女がその娘だと知れば、誰だって真っ先に話題にする筈だ。

特にウチは進学校だ。地元の著名人を知らない奴の方が少ないだ

ろう。
でも彼女は、その度に心の傷を抉られ、人を拒絶する。
その度に彼女は、“変人”のレッテルをはられ周囲から拒絶される。
まったく、救いようの話だ。
何しろ、解ったところで俺はもう“資格”を失った。
いや、初めから俺には無かったのかもしれない。
教授の事を知りすぎた俺には……。
例えまともな出会い方をしていたとしても、間違いなく俺は無神経に教授とその研究について触れてしまっただろう。
出会ってしまえば、傷付けあう事が運命付けられていたなんて、なんて酷い話だ……。

ああっ……どうしてこの世界はこんなにも……。

「待て！屋上に何の用だ？」
屋上の重い扉を開けた所で、いきなり背後から腕をつかまれる。
坂上智代だった。
すでに昼休みに入ったから居ても不思議ではないが、酷くブルーになっていたとはいえ、この俺の背後を取るとは……さすがにやるな！
「特別な用が無い限り、屋上は立ち入り禁止の筈だ」
訝しげな視線を向けられながらも、何故かコイツの姿に少しホッとしてしまう。
まったく、今日も眩しいくらいに自信満々で偉そうだ。
だからこちらも、不敵な笑みで軽口を言ってやる。
「何だ？俺を狩りに来たのか？」
「…何を言ってるんだ？」
問いを不穏な問いで返され、坂上は眉を寄せたが、俺は構わず続ける。

「とぼけなくていい。前の学校を去る時こう言ったんだろ？『私より強い奴に会いに行く』って。つまり、お前がウチに来たのは、この俺が目的と言う訳だ」

「一体何の事だ？大概の事は肯定する所だが、それは根も葉もない噂だ。そんな事を言った憶えは無い。お前の事だって、知ったのはこの学校に来てからだ」

「何？光坂の“カテナチオ”川上央己を知らんのか？」

「カテナチオ？」

「“かんぬき”の事だ。まあ、城門とか城壁とか、そういう物だと思ってくれればいい」

「門番みたいな物か？でも本当にこの学校に編入してきた目的は、誰かを倒しに来た訳では無いから安心してくれ。そもそも、誰かを倒すだけなら、わざわざ苦労してまで編入する必要なんて無いだろ？」

だから遠くに行ったと誰もが思ったんだろうけど。

「ほう…入試よか、編入試験の方が難しいと言うが、やっぱ大変だったか？」

「ああ、本当に大変だった。もっともそれは、それまであまり勉強をしてこなかった私が悪いのだけどな…」

辛い勉強漬けの日々を思い出しているのか、胸に手を当て感慨深気に言う。

まあ、その苦労は俺も多少は経験したからよく分かる。

「そうか…頑張ったな」

「うん！頑張ったんだ！」

褒めてやると、坂上は誇らしげに胸を張り子供の様に無邪気な笑顔を見せた。

やばい……可愛い……！

無性に頭を撫でてやりたい衝動にかられる。

いや、しかし、さすがにそれはマズイよな……。

昨日会ったばかり何だし……やるなら、もっと早くさりげなくや

らんと……。
「それにな、前の学校には、別れを告げる相手なんて居なかったんだ……」
俺が悶々としていると、坂上はせっかくの笑顔に自嘲を織り交ぜ呟いた。
ずっと一匹狼だとは聞いていたが、友達すら居なかったのか……。
しかし、今のコイツからはそうは見えないが…昨日も黄色い声が上がってたし。
「そっか…まあ、デマだとは思っていたが、少し残念だな」
「どういう意味だ？」
「てか俺、ケンカとかした事無いし、お前が知ってる筈ないんだけどな」
「まて！どういう意味だ！？」
意味深な発言で気を引きつつ、それを無視してぶっちゃける。
狙い通り、それで彼女の憂いはどこかへ行ったようだ。
「いや、マジで。１０代になってからは、兄弟喧嘩ですら手を挙げた事は無いな」
「ん？お前も兄弟が居るのか？」
えっ？食いつくのソコ？
「ああ、弟がな」
「奇遇だな。私にも弟が居るんだ」
何故かとても誇らしげだった。
「それより、お前はケンカもした事が無いのに、昨日は他校の奴等に向って行ったのか？危ないじゃないか」
かと思うと、ようやく餌に食いついて、もっともらしく的外れな言ってくれる。
「まるで自分なら危なくないみたいな言い草だな？」
「そんな事は言ってないだろ？私はただ…」
「それに、ケンカをした事が無いと言っただけで、俺が弱いと思ってないか？」

意地の悪い笑みを浮かべ、反論しようとしてきた言葉を見透かした様に遮る。
図星をつかれ口をつぐんだ所に、さらに問いかける。
「それとも、“たかが”ケンカで負けた事が無いからって、まさか自分より強い奴なんて居ないとでも思っているのか？」
「そんな訳ないだろ！私は自分がどれだけ強いかなんて考えた事はない。まして、自分の力を誇示する為にケンカをしていた訳では無いんだ」
うわ……尚タチが悪い……。
完全に“初めから強い奴”の台詞だ。
きっと相手の力量なんて歯牙にもかけず戦ってきたんだろう。
まったく、これで無敗なのだから、本当に運の良い奴だ。
「それに、一度だけだが、私にだって負けを覚悟した事ぐらいある」
一度だけかよ……。
「ほう、相手はどんな奴だったんだ？」
「同い年くらいの女だ。私の事を悪だと言って、いきなり刀で斬りつけてきたんだ」
話を振ってやると、やはりどこか自慢気に話始める。
しかし、悪はともかく刀って！？
「ひょっとして、謎の女剣士との決闘か？噂には聞いていたが、マジだったのか……」
中学の頃に聞かされた“坂上智代伝説”の中でも、眉唾度の高い一つだったのだが…。
「ああ、これは本当だ。刀を使われた事もあるが、スピードも技量も、今まで戦ってきた相手の中では段違いだった。相手の攻撃を避けるだけで精一杯だったんだ。あの時、避けた刀がたまたま木の幹に食い込まなければ、間違いなく私は負けていただろうな……」
坂上はその時をまるで懐かしむかの様に遠い目する。
それで何となく、彼女にとってそれは、さほど嫌な記憶では無い

のだと思えた。
「なるほどな……、まあそんな奴、俺なら5分、いや、3分で勝てるけどな」
すかさずその思い出をぶち壊しにしてやると、坂上はムッとして俺を睨んでくる。
「刀を持ってる相手を、どうやって倒すと言うんだ？」
「企業秘密だ」
「…お前はどこかの企業に所属しているのか？」
「一応、新聞屋に」
とぼけたつっこみに、とぼけたボケで返す。
「新聞屋？」
「こっちの話だ。まあ、どうしてもと言うなら、特別に教えてやってもいいけどな」
思わせぶりな台詞を残し、半分そのまま話を切り上げるつもりで、俺は向き直って再び屋上への扉を開けた。
「待て！だから、屋上に何の用事なんだ？」
そして再び腕を掴まれ止められる。
そういや、最初にそんな事を言ってたな……。
何だ？ひょっとして、マジで言ってんのか？
「一人で黄昏ようと思ってな」
「それは用事とは言えないだろ？」
「教室でやってたら、誰かが心配して声をかけてくるかもしれないだろ？」
仁科あたりが。
「別にそれならそれでいいじゃないか……」
「一人になりたいから、わざわざここに来てるんだろ？」
「…何か悩みでもあるのか？」
クッ、そうきたか……。
そう言った彼女の瞳は、真剣その物だった。
意外…でも無いか。どうやらコイツはなかなかの御節介焼きらし

い。
「ああ、たくさんあるな」
「たくさんあるのか……そうか……お前も悩み多き年頃なんだな……」
素直に答えてやると、坂上は一人で納得したように呟いてから、
「よし！私が相談に乗ってやる！」
と、誇らしげに張った胸に手を当て、思った通りの台詞を力強く言ってくれた。
「遠慮しとく」
素気無く答えて、掴まれていた手が離れた隙に、まんまと屋上への侵入を果たす。
「コラッ！立ち入り禁止だと言ってるだろ？」
慌てて小走りで寄ってきた坂上に、今度は両手でガッチリと腕を掴まれ捕獲される。
腕を組まれたみたいで、何気にチョットドキリとした…。
「それと、遠慮なんてするな。色々と悩んでいるんだろ？」
そして怒ったかと思うと、今度は憂い顔でマジで心配されてしまう。
しくじったか…？
やはり面白くなくとも、セオリー通り『悩みなんて無い！』と答えるべきだったか？
それとも、『君の存在が、俺を悩ませる』とか言ってみるか？
「ああ。でも、たくさん有り過ぎて一つや二つ解決しても大して意味が無いし。どうにも出来ない事も多いからな……気持ちだけもらっとくよ」
「いいじゃないか。悩みを人に話すだけでも、気持ちが楽になると言うだろ？」
「いいって。てか、お前メシは？」
見た所手ぶらだったので、そこをついてみる。
「購買に買いに行くつもりだったんだ。でも、階段の所で上って

行くお前を見かけて……その……何となく気になって、追いかけてきたんだ」

それでか……。

珍しく躊躇いがちな彼女の態度から、自分が落ち込んでいた所を見られた事を知る。

途端に恥ずかしさが込み上げ、たまらず遠くの空を見る振りをして視線をそらした。

「なら、早く買いに行った方がいいぞ？あそこはすぐ売り切れるし」

「うん…。でも、いいんだ。お昼ご飯より、友達の悩みを聴く事の方が大切だろ？」

はっ！？友達！？

坂上が不退転の決意と共に口にしたそのフレーズに衝撃を受ける。

……いつの間にそんなに友好度が上がったんだ……？

いや、それより、どうやら俺の悩みを聴くまで引く気は無いらしい。

さて、どうするか……？

「てか、屋上は立ち入り禁止じゃないのか？お前も完全に入ってるけど…」

「確かに本来は良くない事だが、今回は“友達の悩みを聴く”という大切な理由が有るじゃないか」

軽いジャブで揺さぶりをかけるも、まったく動じる事無く答えてくる。

やはりこの程度じゃダメか……。

仕方あるまい。

黄昏るのは諦め、ここは一つ、コイツを試してやるか。

「じゃあ訊くが…、どうして屋上に来る事が悪いんだ？」

「どうしてって…、校則でそう決まっているからじゃないか」

「だから、『ルールだから』じゃ、納得いかないと言ってるんだ。

それともお前は、何故それが悪いのかもよく解ってないくせに、守

れと目くじら立ててたのか？」
「仕方ないだろ？私はたんに、お前が校則を破ろうとしていたから注意しただけだ」
「お前は違法で無ければ人を殺すのか？」
「殺す訳ないだろ！」
「じゃあ、法によって人を殺す事を義務付けられ、教師に殺せと言われたら殺すのか？」
「何を言ってるんだお前は？屋上から話が飛躍し過ぎだ。そもそも、人を殺せなんて法律がある筈ないだろ？」
俺の屁理屈じみた突飛な話に、さすがの坂上も眉を寄せ至極常識的な事を言い出した。
だが、残念ながらここでトラップカード発動だ。
「お前こそ何言ってんだ？あるだろ？日本にも戦時中まではあったし、お隣の韓国じゃ今もちゃんとある。“徴兵制”って制度がな」
「徴兵制？…あっ！…そういう事か……」
彼女も俺の言わんとしている事に気付いたのだろう。
一瞬驚いて面白く無さそうに口を尖らせる。
「そうだ。兵隊になるって事は人を殺す術を習い、有事の際には命令されて敵を殺しに行くって事だ。でもな、それには国を、家族や友人や財産を守るって立派な大義がある。だからそれがまったくおかしな事だとは思わない」
「そうだな……。もちろん戦争をしない事が一番大切だが、確かに大切な物を守る為なら、仕方が無い事もあるだろうな……」
ここまでは坂上も納得してくれたようだ。
「でも、屋上に入っちゃダメって理屈はどう考えてもわからねえ。よって俺には、そんな物に従う義理は無い」
「それとこれとは話が別じゃないか。国防と学校の屋上では、重要度がまるで違うだろ？」
「同じ事だ。小さな事を『ルールだから』で済ます奴は、どんな大きな事についても『ルールだから』で済ましちまうよ」

「そんな事はないだろ？」

「そんな事ある。いや、そんな事ばっかだ。ニュースとか視てないのか？何か問題が起きても『昔からのルールだから』『上からの命令だから』『それは自分の管轄じゃないから』責任転嫁するだけで誰も責任をとろうとしない。世の中そんな無責任な人間ばかりだ」

「そうなんだ！私も常々それは思っていた。悪い事をしていながら、沢山の人を不幸にしていながら、どうしてあんな顔をしていられるのかと憤りを感じる事ばかりだ！」

俺の言葉に賛同し興奮した坂上が、詰め寄る様に顔を近づけてくる。

善い反応だ。

こういった話は煙たがる奴も多いだけに、乗ってきてくれるのはとても嬉しい。

最初は不安だったが、やはりコイツは“資質”を持ち合わせてる。

俺の目に狂いは無かった。

「だろ？俺はそんな人間にはなりたくない。俺達は家畜じゃないんだ！ルールだからといって、ただ従う訳にはいかない。何が正しくて、何が間違っているかは、自分で考え、心で感じて決める。人としての尊厳にかけてな」

聴いてくれている喜びから自然と熱がこもる。

その熱を静かに文言にのせ、最後は挑む様に言い放った。

目を見開いたまま押し黙る彼女を見守る。

きっと、俺の言葉の意味を、そしてそれにどう答えようかと、逡巡しているのだろう。

暫しの静寂。

うららかな春の日差しの下でみる彼女は、やはりキラキラとして

いた。

「なら逆に訊くが、お前にはそこまで屋上に拘る理由が有るのか？」

なるほど、そう来たか。

俺の主張は理解した。

だが、だからと言ってこのまま校則違反者に言い含められるのも、気に入らないってトコだろう。

「こっちに来てみ」

それだけ言って、俺は端に向って歩き出す。

「……」

坂上は無言で後をついてくる。

まあ、薄々想像はしているだろう。

でも、こいつは……。

「ほら」

きっと想像以上の筈だ。

「あっ……！」

それは淡いピンク色の道。

学校からのびる長い桜並木とその先に続く俺達の住む町並み。

小高い坂の上にある学校の、その屋上からの景色だ。

坂上でなくとも、誰だって言葉を失うだろう。

「見上げる桜もいいが、見下ろす桜も乙だろ？」

「ああ……きれいだ……」

「正直、俺はこんな学校好きじゃないんだが、ここからの景色だけは気に入ってる」

「……」

「でも、きっと多くの生徒は、この景色を知らずに卒業しちまうんだ」

「……」

「まあ、禁止されてるおかげで、俺はここを独り占め出来るんだ

けどな」
「なんだそれは？」
「いいだろ？お前には教えてやったんだから」
「まったく……仕方のないやつだな……」
呆れた様に言いながら、彼女はお返しに極上の笑顔をくれた。

「喰え」
暫く二人並んで景色を堪能していたが、メシを喰って無い事を思い出し、彼女の前にカツサンドを差し出す。
「そんな…悪いだろ？」
やはり遠慮される。だが、そういう訳にもいかない。
「いいよ。今から買いに行っても売り切れてるだろうし。悩みを聴いてくれた礼だ」
「アレがお前の悩みなのか？」
「まあ、一応悩みと言うか不満と言うか主張だな」
「そうか…でも、お前が食べる為に買って来たんじゃないのか？」
「俺一人だけ喰うのも気が引けるだろ？多少余分に買ってあるし、足りなきゃ帰りに買うから気にするな」
「…こういう時におごられるのも、女の子らしいか？」
「なんだそれ？」
妙な質問をされ、思わず吹き出しそうになって訊き返してしまった。
すると、坂上はムッとしながら詰め寄ってくる。
「おごられるのも、女の子らしいかって訊いてるんだ！」
「ああ。らしいな。男としても格好つかない」
「わかった。そういう事なら、ありがたく頂く事にする」
笑いながらそう答えると、坂上はニコニコしながらカツサンドを受け取ってくれた。

その無邪気で無防備な姿に、胸を締め付けられる。
ああっ、本当にこうしてると、コイツがこの町最強の少女だなんてとても思えないよな……。
「カツサンドだな。購買で買って来たのか？」
「いや、学校来る前にいつも他で買ってきてる」
「そうなのか。では、いただきます」
「ああ」
坂上が口を開けてパクリとカツサンドにかぶりつく。
それを見届けてから、俺も他のパンに口をつけた。
「うん！これはなかなかおいしいな」
「だろ？購買のよか美味いからな」
「そうなのか？購買のはすぐ売り切れてしまうから、まだ買えた事がないんだ」
「買いに行ったのか……大丈夫だったか？」
まさか、あの修羅場にブチ切れて暴れたりしてないよな？
「うん。私が行った時にはすでに混んでいて、並んでいた列がまったく進まなかったんだ。だから、もみくちゃにされたりはしなかった」
「そうか……」
気にしていたのはそこじゃないが、それは不幸中の幸いだったな……。
「それにしても、アレは酷いな。人がちゃんと並んでいるのに、平気で割り込んで来る奴が後を絶たなかったんだ。何度か注意してやったが、誰も聞こうとはしなかった」
「ああ。俺もムカついたから、他で買って来てるんだ」
「なるほど。お前やっぱり頭良いな」
妙な感心をされた。
やっぱりって事は、前から頭が良いと思われてたのか？
「どうしてあんな事が許されているんだ？アレでは男子はいいかもしれないが、大人しい女子はなかなか買えないじゃないか。私よ

り前に来ていたのに、ずっと空くまで待っていた子も居たんだ」
「もちろん、前々から苦情はあるさ。でも、業者の管轄って理由で、教師も生徒会もずっと放置してるから、どうにもならんだろうな」
「そうなのか……」
「お前が前居た学校ではどうだったんだ？」
「……言いたくない……」
何気なく訊いたつもりだったが、何故か坂上は俯いてしまう。
「まさか、お前が買いに行くと、モーゼのように人だかりが割れて道が出来たとか？」
「知ってるんじゃないか！！」
「うわ、マジか！？冗談のつもりだったんだが……」
やべえ、さすが坂上智代だよ。面白すぎる。
悪いと思いつつも、堪えきれず笑いがもれてしまう。
「……そこは笑う所じゃなくて、普通引く所だろ？」
「悪い。でも、楽でいいじゃんか」
「やられる方の身にもなれ！これでも傷つきやすいんだ……」
「そうだな。調子に乗りすぎた。マジで冗談のつもりだったんだ。許してくれ」
「まったく……仕方のないやつだな」
まだふて腐れてはいたが、何とか許してもらえた様だ。
「ごちそうさま。すまないな。この埋め合わせは必ずする」
残った包みを小さく畳みながら、食べ終えた坂上が改めて礼を言ってきた。
無言でゴミ袋かわりの店の袋を広げてそれを回収し、ニヤリと笑い返しながらさりげなく後ろに下がって十分な距離をとる。
「ん？」
彼女は頭に疑問符を浮かべながらも安心しきった無邪気な笑顔。
これで全ての条件は整った。

我ながら完璧だ。

さて、始めよう。

『この町最強』になる為に……！

黙想……。

「フッフッフッ……坂上智代、敗れたり……！」

怜悧な笑みを浮かべ、まずは突然の勝利宣言。

「いきなり何を言ってるんだ？」

さすがに彼女は怪訝な顔をする。

そこにさらに衝撃的な事実を告げる。

「お前が今喰ったパンにな。睡眠薬を混ぜておいた」

「えっ……！？」

「後数分もすれば、お前は強制的に眠りに落ちる。次に目覚めた時には、お前は“この町で最強の少女”から、ただの“女”になってる訳だ」

ようやく事態を飲み込めてきたのか、呆然としていた表情が一変、眉を逆立て瞳に敵意の炎が宿り、唇を噛む。

「…こんな手を使って勝って、お前は嬉しいのか？」

「当たり前だろ？労せずして最強の座が転がりこむんだ。それに、お前はなかなかいい女だしな。一目見た時から、やりたくてやりたくて仕方がなかったんだ。後でたっぷりと楽しませてもらうよ」

舌なめずりをしながら、あえて下劣な言葉で嬲る。

下を向いた坂上は、長い前髪でその表情こそ窺い知れないが、怒りでブルブルと手足が震えていた。

もう一押しか。

「まあ、安心しろ。もしもの時は、ちゃんと男として責任を……」

「……お前となら……友達になれると思ったのに……」

「！！」

気付いた時には、すでに手遅れだった。

とった筈の間合いも、まったく無意味だった。

そして何より、俺にはそれをかわす技量も、理由も無かった。

呟きを聞いたかと思うと、彼女の姿は既にそこには無く、

バキッ！！

衝撃が顔面を襲う。

俺の身体は十数メートル吹き飛ばされ、

屋上のコンクリの上を無様に転がった。

4月10日：カテナチオ

「くっ…！」

何度目かの回転後、その勢いを利用して態勢を立て直し、片膝をついて顔をあげる。

だが、警戒した追撃は無かった。

まさかと視線を向けると、風になびく長い髪が、扉の中へと消えていく。

どうやら俺を蹴った後、一目散に走り去った様だ。

マズイな……。

これは、完全に信じこんだか？

てか、まさか今の一撃で終わった事にされた？

何にせよすぐに追撃せねば、このままでは負けた事になる。

それじゃあ、全てが台無しだ。

足に力を入れ立ち上がりながら、瞬時にダメージをチェックする。

黙想……

左頬がかなり痛い。右のハイキックの威力を“殺しきれなかったせいだ。

”攻撃に逆らわず、わざと派手に吹っ飛んで尚これ程のダメージ。

なるほど、とんでもねえ蹴りだ。そして出鱈目に疾い。

確かに並みの奴等ならひとたまりもないだろう。

それと威力を逃がす為に捻った首に多少のむち打ちと、若干まだ頭がクラクラする。

後は転がった時の全身の軽い痛み。まあ、これは逆に気合が入るか。

予想以上に効いた。

おかげで、屋上から逃げられるという誤算が生じた訳だが。

でもまあ、こうしてすぐに立てるのだから、俺なら何とかなるって事だ。
むしろ、アイツの言葉の方が痛かった……。
ああっ、そうだな……だからこそ俺は、負ける訳にはいかねえんだ！
アイツに、“大事な事”を教える為にも……。

全身に力が沸いてくる。
よし、いける！
まずはアイツに追いつかねばな。
蹴られたダメージよりも、そっちの方がキツそうだが……。

階段には、すでに坂上の姿は無い。
飛び降りるように数段飛ばしで駆け下りて3階の踊り場で2択を迫られる。
俺達2年の教室があるのは2階だ。
だが俺は、迷わず3階の廊下へと躍り出た。
いた！
教室のある棟とは逆の、人気の無い特別教室棟の廊下に疾走する彼女の姿を見つける。
やはりな。喰った物を吐き出す為に、トイレに向っているのだろう。

しかしかなり離されていて、このままでは追いつけそうにない。
「コラ！廊下を走るな！」
半分ダメ元で叫んだのだが、効果は絶大だった。
坂上は一度ピタリと止まると、カクカクとぎこちない早歩きに切り替える。
まあ、人に屋上に入る事を注意するような奴だ。そうでなくては。
よし、これで追いつける。
そう思った矢先、俺の声だと気付いたのか、坂上は再び立ち止り

一度こちらを窺った。
軽い驚きと、当然の敵意。
完全に向き直ると、坂上は全身に怒気を漲らせ、仁王立ちで俺を待ち受ける。
「待てよ。アレで終わりにされても困る」
「……うざい！」
吐き捨てる様な呟きと残像を残し、再び彼女の姿が掻き消える。
瞬時にして俺の足元の死角に侵入し、そこから突き上げる槍の様な蹴りを放つ。
ガッ！！
「！」
だが、驚きの表情を浮かべたのは、坂上の方だった。
腹を貫かんとするその蹴りを、俺は咄嗟に左足を上げてブロックしていたのだ。
“目視出来ていた”訳ではない。
ただ“読めていた”のだ。
しかし、坂上も伊達に場数を踏んではいない。
瞬時にその長い蹴り足を器用にたたんで納めると、低い体勢のまま床についた手を軸に回転しながら、今度は左足で俺の軸足である右足を払いにくる。
下手なブロックや回避は間に合わない。
「なっ！？ッ！！」
俺はそれを、つま先の向きを変え踏ん張るだけで、大木の如く受け止め跳ね返してのけた。
跳ね返った力は当然彼女の足を襲う。
たまらず苦痛に顔を歪めながら、坂上は右足と全身のバネで飛び退いて距離をとる。
「大丈夫か？足」
思わずマジで心配してしまう。
彼女の細く長くしなやかな足が切れ味鋭く美しい“日本刀”なら、

俺の丸太の様な足はさながら頑丈さと重量で叩き斬る為に作られた無骨な“大剣”だ。
身長の割りに重い俺と、彼女との体重差は１０ｋｇ近くあるだろう。
武器としての性能はともかく、単純に打ち合えばどちらのダメージが大きいかは明白である。
「お前の蹴りは既に“見切った”。あの一撃で倒せなかったお前の負けだ」
痺れているのか左足を引きずる様にしながらも、鋭く攻撃的な視線で俺を威圧し牽制する彼女に対し、俺はそれをあえて見逃す余裕と尊大さを見せ付ける。
まあ、半分“はったり”だ。
だが、自分の最も得意とする武器を“見切った”などと言われれば、自信を喪失するにしろ、憤慨するにしろ、穏やかではいられまい。
そして同時にこれは、自分への暗示であり、誓約（ゲーシュ）となる。
これでコイツの蹴りは俺には効かないし、効く訳にはいかなくなった。
「せっかくあげたカツサンドを、吐き出されたらかなわんしな。どうだ？その身に時を刻み始めた時限式の爆弾を抱えた気分は？」
冷淡な微笑を浮かべながら嫌味ったらしく訊いてやる。
やばいな…悪役はまりそうだ。
「…お前の様な卑怯で下劣な男は初めてだ！」
「そいつはラッキーだったな。そう、お前が今まで勝ち続けてこれたのも、単に運が良かっただけの事。たまたま自分より強い奴と戦わずに済んできただけだ。その運も、今日で尽きたがな」
「フッ、人を騙して睡眠薬を飲ませるような男が、私より強いと言うのか？笑わせる」
ここにきて坂上は不敵に笑ってみせた。
大した物だ。

足の痺れは治まった…と言ったところか。
だがその余裕も、俺の一言で鬼の形相へと変わる。
「はあ？チョット弱みを見せて優しくしたら、コロッと騙された奴が何を言ってる？」
「ッ！！」
「これは一体何のスポーツだ？たった一人の女に数人がかりで挑むのも有り。木刀や鉄パイプ、刀を使うのも有り。だったら睡眠薬を使うのも、弱味を握ってそこにつけこむのも、本人を直接狙わず家族や友人を狙うのも、“何でも有り”じゃないのか？」
「……」
「そして、“何でも有り”なら、誰よりも卑怯で下劣な俺が“最強”だ」
「……黙れ！」
「でも、ある意味お前はラッキーだ。何しろ初めての相手が俺なんだからな。どこぞの馬の骨共に負けていれば、何人もの男達に群がられ、入れ替わり立ち代り相手をさせられていたかもしれないんだ。それと比べれば、むしろ光栄だろ？」
「黙れと言ってるんだ！！」
その咆哮と共に空気が一変し戦慄が走る。
どうやら俺は、思い違いをしていたらしい。
あの長い髪を逆立て全身からオーラを発している…かと錯覚を覚えるほどの覇気。
寒気で全身の毛が総毛立ち、同時にその全ての毛穴から汗が噴き出てくる。
その鋭く据わった眼光は、ただ目の前の獲物である俺しか見えていない様だ。
これが本当の、“この町最強の少女”『坂上智代』か。
やばい……やべえよ……！！
ちょっとまっすぐ立てなくなってきた。
生命の危険を感じ、種の保存本能がそうさせたか。

はたまた優秀な遺伝子を持つ雌を屈服させたいという雄としての支配欲か。

いや、理屈なんてどうでもいい。

俺は自分にもはや殺意にも似た敵意を向けてくる目の前の少女を、世界にただ一人立つかの様な凛としたその姿を、神々しいまでに神聖で美しく、たまらなく魅力的で、押し倒してやりたい程かっこいいと思っていた。

なるほど。こんな女を月下で見れば、甲冑を着た戦乙女にでも見えそうだ。

黙想……

一瞬だけ瞳を閉じ、右手に意識を集中させる。

君にずっと逢いたかった。

俺と同じ“灰色の世界”を見ているかもしれない君と……。

一陣の突風が巻き起こり、それが嵐へと変じる。

初手のハイキックを何とか両手でブロックするも、上がったブロックの隙間に間髪入れず放たれる蹴りの速射砲。

「ぐうッ！」

とてもガードは追いつかない。

何とか肝臓や鳩尾と言った急所への直撃だけを防ぎつつ、残りは腹筋と気合で耐える。

そしてガードが下がったと見るや、嵐は竜巻へと昇華する。

髪でその軌跡を描きながら回転し放たれるローリングソバット。

ドンッ！！

ガードした腕がミシリと軋みをあげ、そのまま後方に吹っ飛ばされながらも、それを利用して何とか距離をとった。

「どうした？私の蹴りは見切ったんじゃなかったのか？」
乱れた髪をバッと手で払いながら、見下した様に感情を殺した声で訊いてくる。
だから余裕の笑みで答えてやった。
「ああ。だから一つ忠告しておいてやる」
「…言ってみろ」
「そんな短いスカートで暴れるから、さっきからチラチラ白いの見えてるぞ」
「お前は…！！」
『何を見切ってるんだ！』とでもつっこんで欲しかったが、代わりに激昂し言葉を失った彼女の足が飛んでくる。
脇腹を狙ったそれは、何だかんだで俺の忠告を意識した物に思えた。
が、その軌道が、当たる直前で跳ね上がる。
「うお！？」
咄嗟にのけ反りながら首を捻ってそれをかわそうとするも、蹴りは俺の頬を捕らえた。
「！？」
しかし驚愕の度合いは、はるかに坂上の方が上だろう。
何しろ、俺は食らいながらも、その戻り際の彼女の足首を掴んだのだから。
まさに肉を切らせて何とやら。
彼女の蹴りが変化し、それゆえに威力が半減したからこそ出来た芸当だった。
「くっ、離せ！！」
「だから、見えるつってるだろ？」
片足を高く上げたままの体勢は、もはやチラどころの騒ぎではなく、その白きデルタ地帯の眩さにさすがに照れ臭くなって視線を逸らす。
「うわあああああああああああ！！」

「っ！？」

狂乱したかの様な叫びを上げ、坂上は片足を捕られているにもかかわらず、残りの足で踏み切り、その足で無数の蹴りを乱射してくる。

ドガガガガガガガガ！！

狙いなんてあってない様な物だが、こんな無茶な体勢から空中で蹴りを撃ちまくるとか、一体どんな身体能力してんだこいつは？

たまらず手を離すと、坂上は空中で後方に回転しながら片手のみでバク転を決めその勢いで距離をとった。

「大丈夫かお前？」

「思いっきりパンツを見られて、大丈夫な訳無いだろ！！」

羞恥と怒りで真っ赤になりながら怒鳴り返してくる。

あんな無理な体勢から蹴りを撃って、筋とか痛めてないかという意味だったのだが…まあ、特に問題無さそうだ。

抜群の柔軟性と、日本人離れ、いや人間離れした全身の“バネ”。

それが見た目は普通の少女でしかない坂上智代の、出鱈目な強さの秘密なのだろう。

早い話、天然の“ゴムゴム人間”と言えばわかってもらえるだろうか。

一度身体の隅々までじっくりたっぷり調べてみたい物だ。

「忠告しておいて何だが、今更パンツなんて気にしてもしょうがないんじゃないか？後数分もすれば、パンツを見られるどころじゃ済まなくなるんだからな」

「お前みたいな奴に……！！」

再び長い攻防が始まる。

もし傍から観ている者が居れば、どう観ても俺が一方的にやられているようにしか見えないだろう。

坂上の息をもつかせぬ疾風怒涛の攻撃の前に、俺は反撃どころか致命打を防ぐのがやっとだ。

しかし、実際精神的に追い詰められているのは、坂上の方なので

ある。
裏切られ、騙されたショック。いつ効き目が現れるかも分からない睡眠薬の恐怖。そして、どれだけ攻撃を受けようとも、倒れるどころか余裕の笑みすら浮かべる俺。
ある意味、完全に逆上しているからこそ戦意を保てている様な物だろう。
それこそが術中なのだが。
坂上は俺の三倍は疾い。
だが彼女は素直すぎる。
強すぎる瞳の光が、ダイナミックに動きすぎる身体が、オーラの様に発散される“氣”が、俺に次の攻撃の狙いとタイミングを教えてくれる。
そしてまた、彼女の攻撃は荒く、全てが思いつきだ。
そのあまりの疾さと威力ゆえに気付く人間はそうは居ないだろうが、的確にこちらの急所をついてきたり、高度な戦術性のある連続技という物が無い。
繋がっているように見えるのは、回転が速過ぎるからだ。
だから初めから食らう覚悟で、やばい攻撃のみ食らわなければ、我慢は出来る
もしこの疾さで的確に急所のみを確実な連続技で狙われれば、俺とて防ぎようが無かっただろう。
例えるなら、“ＭＡＸ１６０キロを投げる熱血超剛腕投手”だ。
ストライクに入りさえすれば、打てる人間は滅多に居ない。
運が良ければ甲子園優勝くらい出来るかもしれない。
だが、プロの世界では、それだけでは通用しなくなる。
ただ速いだけの球なら、打てる人間はごろごろいる。
コントロールが良くなければ、無駄球や四球が増え、体力の消耗が早くなる。
状況を冷静に把握し、的確な判断やかけひきが出来なければ、ベストなプレーをする事は難しく、試合に勝つ事は困難だろう。

とどのつまり、坂上智代は戦闘の『素人』だ。
その事実に、驚愕と羨望を禁じえない。
だってコイツは、天性の身体能力と格闘センスだけで“この町最強”になったのだ。
この強さで、これだけの光を放ちながら、いまだ“原石”なのだ。
こっちはすでに限界を感じているというのに、ここから伸びるばかりなのだ。
磨けばどれだけの輝きになるだろう？
ああっ、コイツの未来が見てみたいな。出来れば、コイツの傍で……。
そんな衝動が沸き起こる。
フッ…でも、もう遅いか。
どうやら俺は、またも選択肢を間違えちまった様だ。
せっかく良い雰囲気だったのに…何やってんだ俺？
まあ、女の扱いとかよく分からんし、“ガラ”じゃないから仕方無いか。
せめてこの“経験”が、彼女にとって意味のある物にならん事を……。

底無しかとも思えた彼女の猛攻が、失速の兆しをみせる。
離れていても聞こえてくる荒い息、激しく上下する肩、ぬぐった手から飛び散る汗の飛沫……。
さすがに攻め疲れたか。
まあ、あれだけ飛んだり跳ねたり蹴ったり蹴ったり蹴ったり蹴りまくったのだから当然だろう。
かく言う俺も、全身あざだらけだ。
特に盾代わりにしている両腕は、内出血で赤黒く変色している。
今は昂り気合が充実しているからさ程ではないが、暫くはチョッ

ト動くだけでも億劫になり、風呂は地獄だろう。
「もう諦めろ。大人しく負けを認めるなら、酷い事はしないと誓っても良い」
それまでの挑発的な態度では無く、諭す様に降伏を勧告する。
「だまれ…！」
しかし彼女は、毅然としてそれを跳ねつける。
「お前の様な…卑怯な男にだけは…負けてたまるか！！」
言葉で自ら鼓舞し、運命に抗おうと再び向ってくる。
そうだよな。こんな卑怯な男に屈服するような女じゃないよな。
愛おしさに胸が熱くなる。
おそらくこれが最後だ。
俺は、盾としていた両腕を、ズボンのポケットに突っ込む。
「！？」
俺の不可解な行動に、坂上は驚き一瞬その動きを止め身を引いた。
だが、二瞬目には唇を噛み締め覚悟を瞳に宿しながら、やや遠目の位置から跳躍する。
ここに来て彼女が見せたのは、空中で一度背を向けるように左向きに回転しながら、天高く振り上げた右足で大きな弧を描き、そこに跳躍力、キック力、回転力、遠心力、全体重、全てを一点に込めぶつけてくる。
大技『フライングニールキック』だ！！
ドオオオン！！
坂上が己の存在全てを乗せた一撃、それを俺は避ける事も防ぐ事もせずに真っ向から受けて立った。
“意地”と“覚悟”と“想い”で。
「うおおお！！」
胸板に炸裂し肋骨にめり込むそれを、サッカーのトラップの要領で全身で威力を殺し、残りを気合で相殺してゆく。
それでも完全には抑えきれず、俺の身体は弾ける様に斜め後方に飛ばされ壁に激突した。

体勢を崩したところに、見事なバランス感覚できれいに着地を決めた坂上が迫る。

まずは最速の腹への左の前蹴りで、俺が体勢を立て直すのを封じ、“く”の字になった所に、続けて左足が下がる反動を利用してのアゴへの右膝。

壁にもたれかかった俺は、もはや“人間サンドバッグ”と化した。

それでも、口端の笑みだけは絶やさず、彼女の目を見つめ続ける。

「一体……なんなんだお前は!?」

攻撃を続けながらも、たまらず坂上が苦渋の表情で疑問を口にする。

そりゃあそうだろう。

今までノーガード戦法を使う奴くらいは居たかもしれないが、彼女にとってノーガードノーアタックなんて在り得ない筈だ。

「私の攻撃なんて効きはしないと……馬鹿にしているのか!?」

しかしこれこそが、かの『マハトマ・ガンジー』が編み出した“究極の守り”の一つ。

『サチャグラハ』すなわち、“非暴力不服従”である。

「これではまるで……私が苛めているみたいじゃないか!!」

ついに彼女の攻撃が止まった。

伝え聞く限り、彼女が相手にしてきた敵とは、周囲に迷惑をかける人間、もしくは自分に敵意を持った人間だった筈だ。

そんな輩を倒すのに、何の疑問も罪悪感も抱かないだろう。

だったら、それを抱いてしまったら?抱かせたら?

いかに怒りで我を忘れていたとはいえ、俺に攻撃する意思が無い事ぐらい、いい加減気付いている筈だ。

『睡眠薬を飲ませたから、時間切れを狙っている』

さっきまではそれで説明がついた。

しかし、ガードすらやめてしまった今、彼女にはその理由が解らない。

疑念と無抵抗な人間を攻撃し続ける精神的負荷。

それが、どんなに俺を悪人だと思い込もうとも、ジワジワと戦意を蝕み、そこに早く終わらせようとどんなに攻撃しても倒れず、目の光を失わない不撓不屈ぶりだ。

“嫌”にならない筈はない。

もはや彼女の心に“鍵”はかけられた。

「どうして……？お前はこんなにも強いのに……どうしてこんな卑怯なマネをするんだ！？

お前なら、普通に戦っても十分強いはずだ！なのにどうして……！？」

その悲痛な問いは、心が折れかけている彼女の、最後の抗いだった。

あるいは答えようによっては、今の弱り様なら“落とせる”かもしれないな。

邪悪な考えがよぎる。

これだけの事をしたんだ。彼女との関係は修復不可能かもしれない。

だったら、例えどんな形であろうと、彼女をものに出来るならそれも有りか…？

「『戦いは必勝にあらざれば、以って戦いを言うべからず』本当に強い奴ってのは、まず自分が必ず勝てる状況を作り出してから戦う物だ。それに、こうでもしないと、お前本気で戦ってくれないだろ？」

それこそ本末転倒か。

邪心を払い、予定通りの台詞を言う。

俺が見たいのは、あくまでコイツの“輝き”なのだ。

その俺が、光を奪ってどうする。

「…そんなに私と戦いたかったのか…？」

「違う。お前に勝ちたかったんだ。“この町最強の女”にな」

俺の言葉に、彼女の失意が色濃くなり、フッ…っと俯き自嘲的な笑みを浮かべた。

「なるほど。所詮お前も、他の連中と同じだったと言う事か……」
「だって、そんな称号背負ってたら、いつまでたってもお前、普通の女の子になれないだろ？」
「えっ……！？」
驚きで顔が上がる。
「例えお前が望んでいなくとも、最強の称号がそれを求めるアホ共を呼び寄せちまう。お前はこの町に居る限り、誰かに負けるまで争いごとから抜けられないんだ。でも、今日から俺がそいつを背負ってやる。だからお前は、この学校で普通の女の子やってろ」
突然真意を語り出した俺を、坂上は大きく瞳を開いたまま暫し呆然とみつめる。
そして眉を寄せ複雑な表情を浮かべ抗議を始めた。
「何なんだそれは…？今更そんな事を言われても、素直に信じられるか……。それなら、こんな手を使わなくとも、初めから言ってくれればいいじゃないか！！」
「何て？戦いもしないで、お前は納得したか？」
「だからって、睡眠薬を飲ませる事ないだろ！！この後一体どうするつもりなんだ！？まさか、本当にHな事をするつもりじゃないだろうな！？」
「いや、てか、そもそも睡眠薬なんて入れる訳無いだろ？冗談だ」
「……はあ！？」
「冷静になって考えればすぐ分かるだろ？ここでお前と会ったのも、パンをやる事になったのも、全部偶然なんだし、ずっと近くに居たんだから、何か仕込む素振りしてたら気付くだろ？」
「……」
坂上は言われた通り記憶を辿っているのか、暫く固まった後、
ズーーーーーン！！
突然その場に崩れ落ちた。

4月10日：無骨なラーンスロット（前書き）

・5／30　若干微調整しました

4月10日：無骨なラーンスロット

「私が…私がどれだけ怖い思いをしたと思っているんだ！！」
四つん這いで下を向いたまま俺を責める坂上の声は、少し鼻にかかっていた。
少し泣かせてしまったかもしれない。
冗談だったとは言え、さすがに悪質だったかと罪悪感を覚える。
「ごめん……悪かったよ。でも、本来はそれが当たり前なんだ。普通の女の子は、いや、誰だって戦う事は怖い。何されるかわからないからな。だから争いや揉め事を避けようとするんだ。お前は怖い物知らず過ぎるだよ。それを教えたかったんだ」
「だからって…これは酷過ぎるだろ…！？本当にお前に騙されたと…裏切られたと思ったんだ……！なのにお前は、守ってばかりで反撃する素振りも見せないし……」
ようやく上がった顔は暗く沈んではいたが涙の跡は無かった。
それに少しホッとしながら、手を差し伸べる。
一瞬躊躇し俺を見据え警戒しながらも、その手を掴んでくれた彼女に、何気なく驚愕の事実を伝える。
「だって俺、女を殴ったり出来無いし」
「うわ！！」
すると、坂上はカクンと腰砕けになって俺の胸に飛び込んできた。
「っと！」
甘い香りがふわりと鼻孔をくすぐる。
反射的に抱きとめたそれは、これ以上力を込めたら壊れてしまいそうな程華奢で、たまらなく柔らかで温かい、まぎれもなく普通の少女の身体だった。
ドン！
「っ！！」
慌てて俺を突き飛ばす様にして、その反発力で坂上が離れる。

不意に痣になってる所を叩かれ、その激痛に一瞬顔をしかめたが、何とかポーカーフェイスを発動させ取り繕う。
「お、お前がおかしな事を言うから、よろけてしまったじゃないか…」
「大丈夫か？足とか痛めてるんじゃないか？」
そしてやせ我慢を悟らせぬ意味も兼ね、ずっと気がかりだった事を尋ねた。
暫し“信じられない”といった表情で坂上が俺を見つめる。
その視線にだんだん気恥ずかしさを感じ始めていると、彼女は呆れた様に微笑んだ。
「大丈夫だ。私はどこも何とも無い。まったく……本当におかしな奴だな。一方的にやられていたお前が、私を心配するなんて、あべこべじゃないか。そもそも、殴れもしない相手と戦おうとするなんて無茶……」
そこまで言って微笑みが消え、眉が寄って目が据わる。
どうやら先程の怒りを思い出したらしい。
「……だから睡眠薬を飲ませたのか？そっち方が、よっぽど酷いじゃないか！」
「ホントに飲ませた訳じゃないだろ？正直すぐばれると思ってたし…」
「いきなりあんな芝居をされて、冷静でいられる筈ないだろ！？寝ている間にHな事をするとか、パンツが見えているだとか……乙女にむかって何て事を言うんだ！」
“乙女”なのか？」
「当たり前だろ。これでも花も恥らう十六歳の乙女なんだ……スケベ！！」
「いきなり何だよ？」
「今、絶対Hな事を考えていた」
「まあな」
「認めるな！！そこは普通、嘘でも否定する所だろ！？面と向っ

て肯定する奴があるか！まったく、デリカシーの無い奴だ。一体、お前のどこが“ナイト”なんだ？」

「ナイト？」

突然出てきた思いもよらない単語に、思わず訊き返してしまう。今まで“鬼”だの“悪魔”だの“不動明王”だのと色々呼ばれてきたが、そんな格好良さ気な物は初めてだ。

「門倉が言っていたんだ。お前は“ナイトの中のナイト”の様な奴だと」

「ナイトの中の……ああ、なるほど…言い得て妙だな」

「お前の一体どこがナイトなのかと訊いてるんだ！」

“ナイト”じゃなくて“ナイトの中のナイト”だろ？要するに、良家のお坊ちゃんだとか、美形で背が高くて、エレガントで、フェミニストで、華美な装飾の剣を佩き鎧を着て、白馬に乗っている様な“乙女の幻想”とは最も縁遠い存在って事だ」

「…よくわからないが、『本当のナイトは、女の子が理想としている様な良い面ばかりでは無い』と言いたいのか…？」

「ん～、微妙に違うが、それでいい」

「適当だな…」

「まあ、とても乙女の期待にそえられる様な人間じゃないって事は納得だろ？」

「うん。お前はむしろ乙女の敵だ！」

そこだけ、とても晴れ晴れとした顔で断言された。

「でも、彼女の言い様からは、とてもそんな感じは…」

再び眉を寄せた坂上の言葉の途中で、昼休みの終わりをチャイムが鳴りはじめる。

それが鳴り終わるのを、俺達は無言で聴き入った。

「悪かったな。許してくれとは言わないが、今日の所は俺の勝ちって事で。んじゃな」

「……」

そして鳴り終わるや、すかさず勝手に勝利宣言をして、返事も待

たずに踵を返し、さりげなく勝ち逃げを決め込む。
俺の完全勝利だ。
これで3年前『坂上智代』を知ってから、ずっとやりたかった事はほぼ全てやれた。
今後どうなるかは坂上次第だろう。
どちらにしろ、俺は俺の役目を果たすだけだ。
しかし……ついに俺がこの町最強か。
これからの事を考えると、ため息しか出ない。
まったく興味が無かったと言えば嘘になるが、こんな小さな町で最強になってもな…面倒なだけだろ。
それも最強不在で盛り上がり、群雄割拠になりそうだったって時にだ。
ぽっと出の男が「テヘッ、最強になっちゃった」とか言ったら、それこそ四面楚歌になるだろ……。
まあ、だからこそ、なるべく早く坂上に勝てる機をうかがっていたのだが。
昨日の一件で、坂上がこの町に居る事はすぐに知れ渡るだろう。
そうなれば、彼女に恨みを持つ者や、名を上げようとする輩も現れるはずだ。
そして、また同じことが繰り返される。

『それにな、前の学校には、別れを告げる相手なんて居なかったんだ……』

先程の坂上の言葉を思い出す。
だが正直、今の彼女がそんな事になる様には思えない。
確かに変わってる奴だが、むしろ、そのハイスペックとあいまって、個性として人気が出そうだし、実際すでに一部ファンぽい子達もいた。
まさか短期間の間に性格が劇的に変わったとか、実は俺の前では

猫かぶってるとかいう訳ではあるまい。
にもかかわらず、彼女の周りから人が去る要因があるとすれば、やはり数々の過去の武勇伝と、それらがらみの揉め事だろう。
それが“すごい”で済んでいる内はいい。
だが、それによって何らかの不利益を被れば、人は途端に掌を返す。
坂上目当てでしょっちゅうガラの悪い他校の生徒がやって来るようになれば、そして毎回アイツがそれを力尽くで撃退するようならば、普通の人間は傍には居られまい。
そうなってからじゃ遅いのだ。
とりあえず、これで坂上が負けたって事実が出来た。
今日はもう時間が無いので、明日にでも宮沢の所に行き、この事実を伝えよう。
それが顔の広い彼女のネットワークを通じて広まれば、坂上に向く筈だった目を俺に引き付ける事が出来る筈だ。
そっからは少々面倒な事になるだろうが……まあ、俺ならどうとでもなるだろう。
ある意味坂上の最大の失敗は、いつまでも孤高の一匹狼でいた事だ。
そう例えば、倒した奴らを片っ端から配下にしてしまえば良かったのだ。
いくら強くとも一人では狙われやすい。
逆に仲間を増やしていけば、それだけで簡単には手が出せなくなるし、いちいち自分が出て行く必要も無くなるだろう。
そして倒した分だけ、いや倒さずとも勝手に戦意を喪失し、敵は減っていく。
もっともアイツの場合、仲間に簡単に寝首を掻かれていた可能性も有り得るが……。
まあ、別にそれ以外にもやり方は色々ある。
そして俺は、あらゆる手段を使って“鍵をかける”までだ。

６限目、俺は仁科との約束を果たすべく、部活説明会の会場である体育館に来ていた。
一つの部につき五分程度の持ち時間が与えられ、その中で様々なパフォーマンスを交えつつ部を紹介しアピールしていく場になっており、今日から一週間公に部活の部員募集活動が許されている。
逆に言えば、この期間を過ぎると部をアピールするポスターすら張る事を許されておらず、またこの期間中に三人以上の部員を確保出来なければ、即廃部の憂き目に遭う。
だから弱小な部程必死だ。
メジャーな部の発表はすでに全て終わっていて、俺が来てからは舞台上に上がるのは常に一人か二人、つまり廃部寸前のいかにも人気の無さそうな部や、聞いた事も無い様な部の発表が続いていたが…そこそこ面白い。
もっとも、「これ観て、はたして人が入るのか？」と疑問に思う物も多かったが……。
そうこうしている内に、合唱部の順番が回ってきた。
まず仁科が舞台に上がりすぐ後に杉坂が続く。
どうやら部員はまだ二人だけの様だ。
そういや、さっきそんな事を言ってたか。
マイクの前に立った仁科の、彼女らしい丁寧な挨拶から、合唱部の存亡を賭けたアピールが始まった。
珍しく声に熱がこもっており、彼女の真剣さが伝わってくる。
だが……正直、真面目過ぎて面白味は無い。
タイミング的な物もあるだろう。半ば捨て身で笑いを取りに来ていた連中が続いた事もあり、これが皆の印象に残るか不安を覚える。

しかし、最後に観客席から「おおおおっ！」っと感嘆の声が上がった。
仁科がアカペラで歌い始めたのだ。
マイクを通して響く彼女の歌声は高く澄んでいて、一瞬で聴く者の心を掴み、そこに杉坂の低音部が加わって、見事なハーモニーを作り上げる。
杞憂だったな……。
そう確信した俺は、一際大きな拍手を背に聞きながら、体育館を後にした。

説明会が早く終わったのか、仁科は6限目が終わる少し前に教室に戻ってきた。
「あっ、川上君……」
「ああ、なかなか良かったよ。マイク無しなら尚良かったけどな」
訊き辛そうだったので、こちらから感想を述べると、彼女は安心した様に微笑んで自分の席につく。
「そこまで声量に自信が無かったから……まだまだ練習不足です」
「やっぱ腹式ってくらいだから、腹筋とかするといいんじゃないか？」
「そうだね……川上君て普段はあまり大きな声出さないけど、実は声量も有るし、歌も凄く上手だよね」
自分の腹を叩きながら適当な事を言うと、仁科はいきなり妙な方向に話を振ってきた。
そういや一年の時、屋上で歌っているのをたまたま聴かれた事があったが……。
……あれ？まさか……？
いや、まさかな……。
「まあ、前はサッカーやってたから腹筋も肺活量も人よりあるし、

腹式呼吸も自然と出来るけど……」

「ううん。技術的な事よりも、川上君の場合、気持ちがこもってて、聴いているとそれが伝わってくるから……」

「そんなに聴かせた事あったっけ？」

「音楽の授業とかでも、川上君の声はすぐ判るよ。音楽の先生も何度か褒めてた事あったでしょ？」

「『楽器はまったく駄目なのに、歌だけは立派ね』とは言われたけど……」

「先生にそんな風に言って貰えるって、本当に上手いからじゃないのかな？あの……それでもしよかったら……一緒に合唱部で歌ってくれませんか？」

俺が予想して否定した事を、仁科は笑顔で軽く何かのついでの様に言った。

でも、机の上の手が震えている。

彼女が無理している事は明白だった。

精一杯の勇気を振り絞りながらも、“重く”ならないよう気を使ってくれているのだ。

だから俺も、なるべくさりげなく、しかし誠意をもって本当の事を答える。

「悪い……。俺は…誰かに聴かせる為に歌ってる訳じゃないから……」

「そう……残念……」

少しだけ落胆したように、しかし初めから判っていたかの様に微笑む。

その健気さに心が揺らいだが、今の俺は部活どころでは無いのだ。

「てか、部員て今のとこ仁科と杉坂の二人だけだろ？いくら頭数そろえたいからって、そこに男の俺を入れていいのか？」

「うん。そうだよね。男子一人だけじゃ嫌だよね」

「嫌と言うか……気まずいだろ……お互い……」

てか杉坂が絶対嫌がるだろ……。

「そうだよね……ごめんなさい。変な事訊いて」
「いや、いいけど。まあ、大丈夫だろ。説明会もうまくいったんだし、きっと誰か入ってくれるって」
「うん。こちらからも、知り合いを中心に、声をかけてみるつもり」
明確な根拠の無い励ましの言葉だったが、それでも仁科は笑ってくれた。
本当に好い娘だ。
立ち直り、頑張り始めた彼女を、応援してやりたい。
そう思った俺は、思わず軽い気持ちでこう言った。
「もし、それでも部員の目処が立たなかったら、幽霊部員でよければ名前を貸してやるよ」
一瞬、仁科は驚いた様に目を見開き、そして初めての心からの笑顔で、
「ありがとう」
と言ってくれた。
だが、この口約束が、後々厄介な状況に俺を追い込む事になるのだが……この時それを知るはずも無かった。

4月10日：盟友（とも）よ！

放課後、校門近くの茂みの前でしゃがみこんでいる女生徒が居た。
「ほら……おいで……」
茂みに向かって手を伸ばし、何やら呼びかけている。
まあ、犬か猫でも来てるんだろう。
そう思い、さほど気にも留めずにいると、
ザザザッ！
「あっ…！」
茂みの中から飛び出てきた“茶色くて丸っこい物”が、俺目掛けて突進してきた。
それに対して俺は、絶妙なタイミングでソイツの下に足を入れ、サッカーボールを浮かせる要領でそれを跳ね上げる！
「ぷひぷひー！」
クルクルと回転しながら丸っこい物は宙を舞い、
ガシッ！
すっぽりと俺の腕の中に納まった。
「ぷひぷ～ひ～♪」
喜んでいた！
興奮した様に丸い鼻を鳴らし、しきりに俺のにおいを嗅いでいる。
まったく、この獣め…。
お前オスだろ！
「何だお前、また来てんのか？」
「ぷひ♪」
茂みに居たのは、近所でたまに見かける猪の子供の“通称”『なべ』だった。
通称なのは、おそらくコイツは誰かのペットで、本当の名前があるだろうからだ。
それを知らないので、秋生さんが勝手に呼んでいた呼称を俺も呼

んでいる訳である。
「あ…あのぉ……」
俺となべのやりとりに目を丸くしていた先程の女子が、恐る恐る声をかけてくる。
校章の色から三年の先輩だったが、俺が怖そうに見えるのか、それともたんに内気で人見知りなのか、何やらすごく恐縮している様だった。
まあ、いきなり目の前で動物を蹴っ飛ばされれば、そりゃあ驚くよな……。
「ああ、コイツよくウチの近所で見かける奴なんですよ。珍しいですよね。うり坊なんて。多分誰かのペットだと思うんですが……」
「あの……それ……ウチの仔……なんです……」
それは衝撃の事実だ。
やべえ……いくらスキンシップとは言え、飼い主の前で蹴っちゃったよ……。
「ああ、そうだったんですか。だから、たまにこの学校でも見かけるんですね」
とりあえず適当な事を言って笑って誤魔化す。
「はい……えっと……放し飼いなので……その……たまにお姉ちゃんに……逢いに来ちゃうんです」
わざわざ付けられた“お姉ちゃんに”と言う言葉に違和感を覚える。
“三年の彼女の姉がこの学校に居る”という事にではなく、何処か余所余所しい感じがするのは、どうやら俺に対してだけでは無さそうだ。
そういや、さっき茂みに呼びかけていたのも自分のペットに対する感じでは無かったし、なべも彼女から逃げるようにして、俺の所に来ていた。
つまり……コイツはお姉さんのペットで彼女にはあまり馴れてない？

腕の中のなべを見つめる。
「ぷひ」
なべもつぶらな瞳で俺をみつめ返してくる。
独特の丸みとプニプニ感が和む。
犬や猫とまた違った趣が何とも言えない。
でもなあ……ずっとこうしている訳にもなあ…。
「えっと……どうぞ」
「ぷひ！？」
後ろ髪引かれながらも、とりあえずなべを飼い主に渡すべく差し出した。
「あっ……はい」
それに気付いて彼女も受け取ろうとしてくれたのだが、
「ぷひぷひ！？ぷひー！！ぷひー！！」
「あっ……！」
なべが嫌々をするように暴れだしたので、彼女は手を引いてしまう。
ああっ、やっぱり……。
バツが悪そうに互いに顔を見合わせて苦笑を浮かべる。
「あの……その……すみません……私、この子に嫌われてるみたいなんです……」
「まあ、相性とかありますよね……」
相変わらずなべは彼女を警戒していたが、俺に対する彼女の警戒は和らいだ気がした。
改めて見ると、多少オドオドしているが、この人もとても可愛らしい人だと思う。
肩にかからない程度の長さの髪に、右側の耳の近くだけにつけられた白いリボン。
ややたれ目がちな瞳は、彼女の大人しく穏やかそうな性格をよく表している。
どことなく感じが渚さんに似ていて、“女の子らしい”印象だ。

でも、渚さんよりもその……ややぽっちゃり目と言うかグラマーと言うか……。

「あの……」

「は、はい」

なべを撫でながら、さりげなく横目で観察していた所を話しかけられ、思わず返事が上ずりそうになる。

気づかれた様子では無いが…やばいやばい、失礼だな。

「えっと……用事を済ませたらお姉ちゃんが来ると思いますので……その……お急ぎでしたら、隅にでもその子を置いていってください。私が見張ってますので……」

気を使われてしまった。

確かに初対面の、それも異性と二人きりというのは気まずいよな…。

「またな、なべ」

「ぷひ？」

名残惜しいが、俺はなべを茂みの方に置いて、行くことにした。

「じゃあ、これで……」

「あ、はい……ありがとうございました」

ペコリとされた会釈に、こちらも頭を下げて歩き出す。

ところが、

「あっ……！」

「ぷひぷひー！！」

なべさんが後からトコトコついてきた！

すかさずそれをすくい上げる！

「ぷひぷひぷひー！！」

『飛べない“猪”はただの“猪”だ！』

とばかりに再び瓜坊は空中を舞い、俺はそれを両手でガッチリとキャッチした。

パチパチパチパチ…。

周りから拍手されてしまった。

うわ……滅茶苦茶恥ずかしい……。

「ぷひ～♪」

俺の気も知らず、なべさんはご機嫌だった。

丸っこくてラグビーボールっぽかったので試しにやってみたのだが、それ以来味をしめたのか、俺をみると毎回コイツは突進してくるようになった。

しかも最近は、蹴り上げる俺の足からタイミングよく自分も跳ぶ、つまり二段ジャンプを会得した事で更に高く飛ぶ様になったのだ。

やはりこいつは飛ぶのが好きなんだろう。

「よし、お前に『フライング・ボア』の称号を与える」

「ぷひっ！」

なべは俺の言葉が分かるのか、まるで敬礼でもするかの様にキリッと男前な顔をした。

フッ、愛いやつよ。

猪にしておくには惜しい男だ。

「あの……ぅ……すみません……」

小走りで駆け寄ってきた飼い主さんに、本当に申し訳無さそうな顔をされる。

「ああ、いや……悪いのはこいつですから」

「ぷひ！」

そして彼女の接近に気づいたなべは、ぷよぷよの体を強張らせて警戒していた。

さすがにここまで嫌っているとは……。

さて、どうするか？置いていってもまた追いかけて来そうだが……。

「えっと……あの……どうしましょう……？」

「う～ん……とりあえず、餌でもやりますか」

「餌……ですか……？」

俺はカバンから袋を取り出すと、その中にある深緑色の物体を一つ手に取る。

「ぷひっ♪」
その瞬間、なべが嬉しそうに反応した。
まったく、この食いしん坊め。
「パン……ですか？」
“ヨモギパン”です！」
早苗さんのマネで弾む様に答える。
「ああ……」
何も知らぬ飼い主さんはそれで納得して、それ以上の追求はしてこない。
ヨモギパンはヨモギパンでも、正しくは枕詞に“早苗さんの”が付くのだが……。
なべはなべで、食えれば何でもいいのか短い尻尾を振っている。
「ほら、食え」
「ぷひぷひ～♪」
鼻先に持っていくと、匂いを嗅いで“一応”食える物だと確認してから勢いよく食べ始める。
「ぷっ……ぷっ……」
「……あの……何か震えているような……？」
飼い主さんが指摘するまでもなく、なべはプルプル震えだし食うのも止まっていた。
ま、まあ、たまに起こる現象だ。
「だ、大丈夫です……な？なべ！」
「ぷひ！」
決意の眼差しと共に一声鳴くと、なべは再び勢いよく食べ始める。
そして見事それを完食してみせた。
「ぷひぷひー！！」
俺に向かって“どうだ！！”とばかりに勝者の雄叫びをあげる。
試練を乗り越えた男の貌で。
「“盟友（とも）”よ！！」
思わず俺はなべをガシッと力強く抱きしめた。

「呼んだか？」
“まさか”と背後からの声に振り返る。
そこには、お約束の様に坂上“智代”が立っていた。
「……いや、『“友”よ』と言ったんだ。お前は“智代”だろ？」
「うん。智代だ。お前は確か“オーキ”だったな？」
「え？ああ……」
マイペースな坂上との会話に少々面食らう。
呼び捨てにされた事も、そもそも呼んで無い事も、まったく気にしていない様だ。
「“オーキ”か……お前は名前も変わってるな」
「まあな。王様の“おう”に鬼の“き”と書くんだ」
「……鬼の王様と言う事か？ずいぶんと偉そうで怖そうな名前だな……」
「ああ……まっ、嘘だけどな」
「む！？なんだ……危うく信じる所だったじゃないか。普通の人ならともかく、お前なら有り得そうだからな」
名前ネタで取りあえずペースを取り戻す。
「それで、私に何か用か？ん？それは何だ？」
だから呼んでないんだが、なべに興味を持った様なのでそれでいいか。
「瓜坊だ」
「うりぼう？ああ、猪の仔か。珍しいな。実物を見るのは初めてかもしれない」
そう言いながら何気なく坂上は近寄って来たのだが……。
「ぷひー！？ぷっ……ぷっ……」
その坂上に気づくやいなや、突然なべは鳴き声をあげ、必死に隠れる様に俺の胸に顔を埋めてぷるぷると震えだした。
「あっ……！」
「えっ……？」
飼い主さんと同じかそれ以上の怯えっぷりだった。

まるで、“坂上智代”の存在その物に畏怖するかの様な……。
その反応に坂上の歩みが止まり、先輩も唖然とする。
「ん？どうしたお前……？」
野生の本能がそうさせたのだろうとは予想はついたが、坂上の手前一先ずとぼけてなべの機嫌をとろうとした。
と、その時だった。
俺の野生が尋常でない殺気を感じ、その出所に向けた視線が捉えたのは、俺に向かって投擲された黒く細長い物体。
ぶつかる！
咄嗟に俺はなべを庇って背を向け衝撃に備える。

バンッ！！

快音が鳴り響く。
しかし、高速で飛来する物体がまさに俺にぶつからんというその刹那、背中越しに見たのは、疾風の如く放たれた白く長い槍がそれを側面から打ち抜く様だった。
飛来する物に気付いた坂上が、蹴りで撃墜してくれたのだ。
なんつう反射神経と速度だよ……！！
坂上の蹴りを受けた物は吹っ飛んで行き、そのまま横の茂みの中に消えていった。
「どういうつもりだ？危ないじゃないか。いきなり辞書を投げつけるなんて」
思わず坂上に魅入っていた俺に代わり、坂上が投擲した犯人を睨みつけ詰問する。
てか、辞書だったんかアレ……。
「あんた達こそどういうつもりよ？ウチの仔を苛めるのやめてくれる！」
だが、大の男でも怯むであろう坂上の視線を受け、平然と睨み返してくるのもまた、髪の長い女子生徒だった。

えっ？てか、ウチの仔？
「お姉ちゃん……！」
「ぷひぷひ～！！」
緩くなった俺の腕から逃れ、なべが喜び勇んで現れた女子の下に駆け寄っていく。
ああっ、決定的だな。
飼い主さんもお姉ちゃんと言ってるし、彼女とは反対の位置にお揃いのリボンをつけている。双子かダブりかは判らないが、校章も三年の色だ。
「ボタ～ン。遅くなってごめんねえ。酷い事されなっかった？」
「ぷひ♪ぷひ♪」
そして俺達の時とは打って変わった優しい声と笑顔で迎え、それを抱きかかえる。
なべ、いや、『ボタン』？も俺の時よりずっと嬉しそう、いや、幸せそうだった。
「なんだ。あなたのペットだったのか。でも、私達は別に苛めてなどいない」
「嘘おっしゃい！クラスの窓から、そっちの男がウチの仔蹴っ飛ばしたの、見てたんだからね」
「そう……なのか……？」
女子生徒の目撃証言に、坂上が不安そうに俺を見る。
マズイな……蹴ったのは事実だし、飼い主に向かってアレを「スキンシップです！」と言って判ってもらえるかどうか……。
「あ……あのね……お姉ちゃん……」
「それに今だって、悲鳴を上げて私に助けを求めてたじゃない！」
え？アレそうだったんだ。
「そ……それは……すまない。私のせいだ」
坂上が悲しげに答える。
「ほら、みなさい」
「違うんだ！苛めていた訳じゃない。ただ、どういう訳だか、私

はあまり動物から好かれた事が無いんだ。私が近付こうとすると、皆怯える様に逃げていってしまうんだ……」

ああっ……やっぱそうなのか……。

俯いた坂上の背中はとても寂しげで小さかった。

きっとその度に傷付いてきたのだろう。

なべを失った寂しさと相まって、後ろから抱き締めてやりたくて堪らなくなる。

「……そう。まあいいわ。あんたの方は許してあげる。でも、そっちの男はどう説明するつもり？」

坂上の姿に同情したのか、わりとあっさりとなべの御主人は坂上を許した。

誤解しているだけで、悪い人ではないのだろう。

しかし、その矛先をこちらに向けられ言葉に詰まる。

どうにもこういうのは苦手だ。

同い年以下なら、もしくは初めから喧嘩腰でいいなら何とでもなるが、目上の人間と仲良くしようとか、うまく会話しようって事となると、途端に頭が回らなくなる。

「あの……」

「私も事情はよく知らないが、何かの誤解じゃないのか？少なくとも、私が見て居ていた限り、その仔はオーキにとても懐いている様だった」

何も言わない俺に代わって、坂上が庇ってくれた。

てか、今“オーキ”って呼ばれたな……。

二重の意味でちょっとした感動を覚える。

「誤解も何も、私はちゃんとこの目で見てたんだからね！」

「えっと……あのね……お姉ちゃん……」

「椋（りょう）、あんたも見てたでしょ？こいつがボタンを蹴るとこ」

「あ……それは……うん」

「ほら、ここに近くで見てた証人も居るわよ！」

「でもね。お姉ちゃん……」

「すいませんでした」
俺は何も言わず、頭を下げた。
「オーキ？」
「ごめん。行こう」
「え？」
そして坂上の手を掴むと、踵を返して彼女を連れて歩き出す。

「悪かったな。せっかく庇ってくれたのに……。ありがとな」
暫く手を引いていった所で、前を向いたままおもむろに謝罪と礼を言う。
「どうして何も言わず謝ったりしたんだ？例え蹴った事が本当だとしても、お前の事だ。何か理由があるんだろ？」
坂上も歩きながら当然の不満を漏らす。
「ああ。アイツとはダチなんだよ」
「友達？あの女子とか？」
彼女の驚く声に俺も驚く。まさかそう取られるとは……。
「いやいや、ウリ坊の方な」
「ああ、なんだ……」
「蹴ったってのも、抱きかかえるのに足で浮かせただけだ」
「じゃあ、それをちゃんと伝えればいいじゃないか」
「でも、俺がそう言っても、相手が納得してくれたか判らないだろ？軽くでも蹴ってるんだし」
「それはそうかもしれないが……どうしたんだ？いつものお前らしく無いじゃないか」
「……いや、基本的に目上の人と話すの苦手なんだよ。気ぃ使うから……」
坂上の鋭い問いに一瞬どう答えるか迷ったが、素直に答える事にした。

「目上の人？なんだ。やっぱり飼い主の方とも知り合いだったのか？」
「いや、今日初めて会ったけど。ウチの学校は校章の色で学年判るんだよ」
「ああ、なるほど……しかし意外だな。アレだけ口が巧いんだ。相手が誰だろうと関係無さそうだけどな」
「相手を言い負かす才能と、仲良くなる才能は別って事だ。前者はともかく、後者は俺にはまったくない」
「……まさか。そんな筈はないだろう？だって、私とは仲良くなれてるじゃないか」
その不意打ちの様な言葉に、思わず立ち止まって振り返る。
帰りの桜並木の下、坂上は自信に満ちたいつもの笑顔だった。
仲良くなってた……のか？
むしろ、あんな事をしたんだ。嫌われてても仕方が無いと思ってたんだが……。
ま、まあ、確かに今までの態度はそんな感じでは無かったけど……。
てか俺、さっきからずっとコイツの腕握ってたよ……。
改めて気付いて、途端に恥ずかしくなって手を離す。
「それに、あの仔もすごくお前に懐いていたじゃないか……」
笑顔が翳る。
拒絶された悲しさを思いだしたんだろう。
「ああ……まあ、アレだ……相手は動物だからな……においとかなんじゃないか？」
まさか「お前の強さを本能で感じ取ってるんだ」なんて言えないので、何か適当な理由をでっち挙げてみる。
「におい？……ひょっとして、私の体臭がキツイのか？これでも色々と気を使っているんだが……だとしたら、すごくショックだ……」
ああ、ますます落ち込んだ。

「いやいや、逆だ。その……人間にとって好いにおいでも、動物にとっては嫌なにおいって場合も有るし、逆も然りだ。そもそも、動物って臭いだろ？自然界じゃ、風呂なんて入ってなくて当たり前なんだし。少なくとも俺はお前はいい匂いだと思うし、俺くらい汗臭い方が動物には受けがいいのかもなって……」

話しの流れでつい“いい匂い”とか言ってしまったことに恥ずかしくなって、尻つぼみのまま視線を逸らす。

「そ、そうか……でも、お前も別に嫌なにおいって訳じゃないと思うぞ。むしろ安心すると言うか、どこか懐かしい感じがする……」

どこか遠い目をして坂上は微笑んだ。

“励ましのお返し”なんだろうが……においが嫌じゃないと言われるのは……思っていた以上にドキリとする物だと知った。

てか……成り行きで連れて来ちゃったけど……このまま一緒に帰るのか？

やべえ……どうする？まったくの想定外の事態だ……。

それに坂上はどういうつもり何だ？

この状況をどう思ってる？

そして……俺の事をどう……？

「あの、坂上さん」

悶々としていると、いきなり後ろから坂上を呼び止める声がした。

「ん？あっ……！」

振り返った坂上は“しまった”という顔をする。

彼女に声をかけたのは、三人組の女子生徒だった。

「その彼と帰るのかな？」

「あ、いや、すまない。成り行きでここまで付いて来てしまっただけで、別にオーキとそういう約束をした訳じゃないんだ。前からの約束通り今日はあなた達と帰る事にする。そういう訳だから、オーキ、またな」

「あ、ああ」

そう言って、坂上は俺の傍らから離れ、女子生徒の輪に加わって

いった。
惜しかった様な、ホッとする様な……。
唐突に出会ったかと思えば、唐突に別れが訪れる。
まあ、元々イレギュラーだったんだ。そんな物だろう。
それでも収穫は有った事だしな……。

4月11日：洗礼（前書き）

・最後の方に若干加筆しました
・誤字等を修正しました

4月11日：洗礼

渚ちゃんを泣かせて逃げ帰ってから暫くして、お袋に呼ばれた

何かと思って玄関に行くと

そこには見た事の無い、眼つきの悪い咥えタバコのおっさんと

その人と手を繋いだ渚ちゃんが来ていた

怒られる

直感で判り呆然立ち竦む

「ほら、こっち来なさい」

お袋もすでに事情を知っているのか、庇う気は無いようだ

押される様にして、二人の前に立たされる

「テメエか？ウチの娘のパンツをめくって泣かせたのは？」

上から見下ろすようにして威圧してくる

やっぱりこの人が渚ちゃんのお父さん

と言う事は、あのお姉さんの旦那さん……

親父よりも全然若いし背も高い

怖そうだが、顔もカッコいいと思う
これなら解らなくもない……
「お父さん…めくられたのはスカートで、パンツまではめくられてません……」
もじもじしながら渚ちゃんがつっこむ
「おお、そうだったな。
運が良かったな小僧、パンツまでめくっていたら、
半殺しじゃ済まなかったところだ」
物騒な言葉と上からの半端じゃない重圧感で、涙が滲み出る
「それでテメエ、この落とし前、どうつける気だ?あん!?」
顔を近づけられ、反射的に身体が反る
落とし前と言われても、よく分からないが
とにかく何か半殺しと同じくらい大変な事をやらなければ、
この人は許してくれないのだと思った
恐怖と嗚咽で息をするのも苦しくなる

「どう責任とるつもりかって訊いてんだよ!?泣いたって許しゃしねえぞ!」

「…ごめんなさい…ヒックッ…ごめんなさい……」

「ああん!?ごめんで済んだら警察も消防署もいらねえんだよ!」

「お父さん…消防署は必要だと思います…

消す人が居ないと、火事になった時大変です…」

真面目な顔で渚ちゃんがつっこんでいた

お袋は、息子が絶体絶命のピンチだというのにクスクス笑っていた

“責任を取れ”と言われても、思いつく方法は一つだけだった

アニメで見た、男が女に対して責任を取る方法

でも、それは……つまり……

「おら、どうすんだって訊いてんだよ!泣いてないで何とか言いやがれ!」

「……責任取って……渚ちゃんと……結婚します……」

咥えタバコがポロリと落ちた

「なぁぁぁぁぁぁぁぁぁにいいいいいいいいっ!?」

髪が逆立つ程の激怒っぷりだった

「何でテメエなんぞに娘をやらなくちゃならねえんだよ!?

パンツ見たぐらいで調子に乗るなよ小僧!!

俺なんかなぁ、パンツどころか今まで何度も生まれたまんまの姿を見てきてんだ!!

風呂だって一緒に入って洗いっこまでしてんだぞ!!

どうだ!?羨ましいか!?羨ましいだろ!!

つまり渚は、俺のモンだ!!」

とても得意気だった

いや、でも、そんなの親だから当たり前じゃん……

「お父さん…そんな恥ずかしい事をオーちゃんの前で言っては駄目です…!

お友達の中には、もうお父さんとは入ってないって子もいます

そんな事を言うなら、もうお父さんとは入りたく無いです」

「なあああああああああああにいいいいいいいいいいいい!!」

先程以上の、この世の終わりかってくらいの動揺ぶりだった

「まて渚、ここはじっくり話し合おう！」

怖いおっさんは、娘に激弱だった

「そうだ！帰りにおもちゃ屋にでも寄っていこう！

そこで何でも好きな物を買ってやるぞ！な？

だから考え直して、いつもの様に

『私、お父さんとお風呂入りたいです。カッコいいお父さんにラブラブですぅ』

と言ってくれ！」

怖いおっさんは、渚ちゃんを溺愛していた

「別に欲しい物はないですし、そんな事一度も言った事ないです

その代わり、もうオーちゃんを許してあげてください

オーちゃん、ちゃんと謝ってくれました

きっと、すごく反省してると思います

これ以上オーちゃん苛めたらかわいそうです」

渚ちゃんは、俺を庇ってくれた

あんな事したのに……

泣かせちゃったのに……

おもちゃまで要らないと言って……

愛娘の嘆願に、おっさんは一度渋い顔をしたが、すぐに舌打ちして

「チッ、今日のところは渚に免じて許してやる

だがな、今度ウチの娘を泣かす様な事があったら

チ○コひっこ抜いてやるからな！！」

と念を押してフイと顔をそむけた

「うん……」

「お父さん！そんなトコ抜いたら駄目です！」

親の卑猥な恫喝に、娘が真っ赤になってつっこむ

そして彼女は、泣いている俺に手を伸ばしてきた

叩かれる！

そう思って、でもそれもしょうがないと思って

目をつぶって身体を強張らせる

しかし、その手は頭にそっと置かれただけだった

そして、そのまま頭を撫でてくれた

あのお姉さんと、そっくりな優しい笑顔で

「オーちゃんは、もう女の子のスカートをめくったりしませんよね？

それと、私の方こそごめんなさいです

さっきは、突然の事にちょっとビックリして泣いてしまいました

私の方が二つもお姉さんなのに、恥ずかしいです

お父さんももう許してくれました

だからそんなに泣かなくていいですよ」

「ごめんなさい……ごめんなさい……！」

その優しい言葉に

結局俺は最後まで泣き止む事が出来なかった

それから暫く経ったある日、俺はお袋からお使いを頼まれた

パン屋に、食パンと家族の人数分の惣菜パンを買いに行けばいい

らしい

店に行った事は無いが、たまに行く公園の前にパン屋が出来てる事は知っていた

お使いをしたら、少しだけどお駄賃がもらえる

お金の入ったビニール袋を手に、俺は喜んでチャリを走らせた

「いらっしゃい……ん？」

「！！」

店に入ると、咥えタバコの怖そうなおっさんがエプロンを着けてレジに立っていた

忘れもしない。渚ちゃんのお父さんだ

どうしてここに！？ひょっとしてここの店の人！？

「てめえは確か……渚を泣かしたガキじゃねえか！」

途端に険しい表情をされる

やっぱり覚えられていた！

今すぐ逃げ出したい

でも、お小遣いも欲しい

当時幼稚園で流行っていたカードゲーム
俺だけが持ってなかった

「へっ、自分から面見せに来るとはいい度胸じゃねえか！
で、何の用だ？渚ならやらんぞ」

少しだけ見せてくれた笑みに安堵しつつ、俺はブンブンと首を振って意思表示をした

「……パン……ください……」

「あん？なんだ客かよ。おう、じゃ好きなだけ買っていけ。有り金はたいてな」

また首を振って否定してから、トレーとトングを取ると、俺はまず食パンを探した

予算は千円

そっから食パンと家族の五人分の惣菜パンを買わなきゃならない

そして、そのおつりの中からお駄賃が出る

おつりが多ければ、お駄賃も多いかもしれない

だから、なるべく安くておいしそうな物を買って帰ろう

俺は幼稚園の頃から、そういう事が分かる子供だった

だが、食パンも惣菜パンも、それなりに値が張る物だ
大したおつりは出そうも無い
安い菓子パンにしてしまおうかとも思ったが
惣菜パンと言われた以上、その通りにしないとお駄賃が貰えないかもしれない
食パンだけをのっけたまま、たくさんのパンの前で俺は悩んだ
「どうした坊主？買うモン忘れたのか？」
おっさんの接近にビクリとなる
でも、あまり怖い感じではなかった
「“にくのやつ”５こ……」
ふるふる首を振って答える
「肉のやつ？……惣菜パンの事か？ずいぶんとアバウトだな……
そうだな……カツサンドなんてどうだ？ウチ一番のお勧めだ！」
「……たかい……」
てか、カツサンド五つだと予算オーバーだ

「なに？んじゃ、定番のハンバーガーはどうだ？」

「ん～……たかい……」

「まだ高えのか？お袋さんから、いくら預かってるんだ？」

「……1，０００えん……」

「千円か……ハンバーガー五つに食パン一斤で……ぎりぎりだが買えるぞ？」

「……おつりすくない……」

「はあ？もっと安くあげろってか？」

「うん……」

「ウチで一番安い惣菜パンって言やあ……コーンマヨパンだな」

「……にくじゃない……」

当時の俺にとって、肉は貴重だった

せっかく肉が食えるのに、他で妥協する事はありえなかった

「そんなに肉が食いてえのか……じゃあ、コロッケパンならどうだ？」

「ん～……にくすくない……」

「あのな、原価ってわかるか？材料の値段だ
肉がたくさん入ってるモンは原価も高いから、それなりに値が張るモンなんだよ！」

「う～……」

それは分かっていた

だから悩んでいたのだ

ちなみに、全部同じ物でなくてもいい事に気付いたのは、また先の話

「よし！じゃあ坊主、オメエがこのパンを食ったら
全品２０円まけてやる！どうだ？」

そう言っておっさんが手に取ったのは、不思議な色をしたパンだった

ある意味きれいで

それが返って不気味な気がした……

でも、どうやら売り物らしいし、毒とかでは無さそうだ

「……ただ……？」

「ああ。コイツはサービスだ。いつも売れ残るしな……」

ただで売れ残るんなら気兼ねする事はないな……

だったら、やってやる！

俺は決意して、それを無言で受け取った

「おっ！よし、ガブッといけガブッと！」

においもあまりしないし、いくら見ても何なのかよくわからない

言われるままにガブッとしてみる

不思議なパンは……

味もやはり不思議だった……

辛いようで

酸っぱいようで

苦いようで

甘くは……無かった……

何とも言えない……

まったりとした……

……嫌な味？

でも、強烈に辛いとか苦い訳では無いので、食べられなくも無い……

無い筈……

なんだけど……

何故だか身体が震えてきた……！

冷や汗がダラダラ垂れてきた……！

何でだろう……？

よくわからないけど……

身体が「食べたくない」と言っていた……！

込み上げてくる倦怠感……

はあ……

もう嫌だ……！！

でも……残すのはもったいない事だ……

食べ物を残すのは……いけない事だ……

この世界には……食べたくても食べられない人がたくさんいるんだ……！

やせ細った子供達をＴＶで視たんだ……！

食べられるだけ、幸せなんだ……！！

「おぉっ！食いきりやがったか！」

そう言いながら、伸びてきた手に思わず目を硬くつぶる

でも、その手は叩かれたにしては痛くなく……

「てめえ、なかなか根性あるじゃねえか！！意外と将来大物になるかもな！」

しかし撫でられてると言うより頭をガシガシと洗われている様だった

お姉さんの柔らかくて優しい手とも

渚ちゃんのちっちゃくてかわいい手とも違う

大きくて、逞しい手だった

その手に撫でられていると

ぎりぎり堪えていた涙が溢れそうになった

「だが、渚はやらんけどな！！」

引っ込んだ

別に渚ちゃんは嫌いじゃないけど……

結婚すると言ったのは、責任を取る為あくまで仕方なくで……

でもそれを言うと……また怒られそうで言えなかった……

「おーい、早苗ーっ！ちょっと来てみろー！」

おっさんは俺の頭から手を離すと、店の奥に行って誰かを呼んだ

「はーい」

微かに聞こえた声に呆然となる

そうなのだ。ここがこの人の家なら、奥さんも居て当たり前なのだ

二人の前から逃げ出したあの日から

一度も会っていないあのお姉さんが……

気まずさに今すぐ逃げ出したかった……

でも、まだパン買ってない……

「何ですか秋生さん？あら……オーキ君、パン買いにきてくれたの？」

感激した様に手の平をぱんと合わせ、変わらぬ笑顔で訊いてくる

俺は……俯きながら頷くのが精一杯だった

「早苗、コイツお前のパン、丸ごと一個食いやがったぞ」

おっさんの言葉、一瞬耳を疑う

はあ？お姉さんのパン？

あの不思議なマズイパンを作ったのは、お姉さんだって！？

「まあ、本当ですか？オーキ君、どうでしたか？おいしかったですか？」

期待に満ちた瞳で見つめられる

でも、何て答えたらいいんだろう？

「それとも、おいしくなかったですか……？」

すぐに答えられずにいると、今度はとても悲しそうな目をされた

胸がズキリとした

お姉さんに、そんな顔してもらいたくなかった

でも、お世辞や嘘は言いたくなかった

「う～～～……“まあまあ”……」

“まあまあ”……ですか？“まあまあおいしい”ですか？」

笑顔でまた訊かれた！

何としてもおいしい事にしたいらしい……

「うぅ……まあまあ……」

「まあまあ……ですか……」

まあまあで押し通すと、少し残念そうな顔をされた

でも、すぐに優しいあの笑顔を浮かべてくれる

「どうぞ、ゆっくり見ていって下さいね」

「おう、そうだった。約束通り値引きしてやるから、肉のやつ買ってけ」

「約束？」

「ああ、コイツが惣菜パンは高いって言いやがるから、

お前のパンを食ったら、何でも２０円引きにしてやる約束をだな……」

そこまで言っておっさんは“しまった”という顔をする

「私のパンは……」

一方お姉さんは突然泣きそうになって

「食べると値引きしてもらえる物だったんですねーーーーーーっ！」

泣きながら外に走って行ってしまった……

するとおっさんは、残っていたあの不思議なパンを口いっぱいにほうばり

「俺は大好きだぁーーーーー！！」

と叫びながら、お姉さんを追いかけて行ってしまった……

呆気に取られてる間にポツンと一人取り残される

あれ！？この後どうしたら……！？

まだパン買ってないのに……

でも何となく解った

きっと、あのパンを食べても平気だから、お姉さんはおっさんを選んだのだと

その時は、子供心ながらにそう思った……

4月11日（金）

バイトを終えた俺は、いつもの“あの場所”に来ていた。
ただ、いつもと装いが違う。
いつもは私服だが、今日は中学の頃のウインドブレーカーを着込んできた。
昨日、坂上と戦って、痛感した事がある。
身体が思っていた以上に鈍っていて、思うように動けなかった事だ。
そんな身体で下手に反撃を試みれば、たちまちその隙を衝かれよう。
だから亀になって耐えるしか、俺には策が無かったとも言える。
お陰で全身アザだらけで、正直あまり動きたくない。
それなのにな……。
『坂上智代』は噂通り強く、そして噂以上に“凄かった”。
戦うアイツの姿は煌く様に美しく、その才能は底が知れない。
本当に、変な趣味にでも目覚めそうな程、攻撃されていながら“わくわく”した。
そしてその熱が今も身体の奥でくすぶっている。
動くたびに疼くアザの痛みも、アイツにつけられたと思えば愛おしく思える。
ああっ、マズイなこりゃ……本格的に目覚めちまったかもしれないな……。
ククッと笑いが漏れる。
とりあえず勝つ事は出来たが、これからの事もある。
せめてまともに動けるくらいには、身体を鍛え直すべきだろう。

黙想……

瞳を閉じて背筋を伸ばし、早朝の清々しい空気を吸い込む

深く
長く
この地に満ちた“気”が身体の中に流れ込み、隅々まで行き渡っていく
そんなイメージ
それが満ちたのを感じたら、今度はゆっくりと息を吐く
深く
長く
心と身体の老廃物を、まとめて吐き出す様に
揺れる木々の音
目覚め始めた鳥の声
それもじょじょに小さくなり、頬をなでる心地よい風も感じなくなった
無明無音
色即是空　空即是色
明鏡止水

何も無い世界のはずなのに
同時に世界の全てと一体となれた様な不思議な感覚
まるで世界の全てを知覚出来るかの様な……

「ちぃっす」
自主トレを終えた俺は、毎朝の日課である古川パンを訪ねていた。
ここで昼食を買っていくのだ。
「おう！ん？何だおめえ、ジョギングでもして来たのか？」
いつもの様に出迎えてくれた秋生さんが、俺のナリを見るなり訊いてくる。
まあ、朝に汗だくでウインドブレーカー着てればな。
「まあ、そんなトコです」
「ほお……何か面白い事でも見つけたか？」
そう言ってニヤリとする。
勘がいいこの人の事だ。今の俺から、何かいつもと違う物を感じたのだろう。
「まあ、そんなトコです」
「ほぉう……彼女でも出来たか？」
くっ、やはりそうきたか……。
「出来てませんよ……面白い奴とは、会えましたけどね」
「なるほどな……。まあ、彼女が出来たら、ちゃんと連れて来いよ。焼きたての早苗のパンをサービスしてやる」
「いや、それは……まあ、彼女出来たら考えます……」

「私のパンがどうしたんですか？」
無難な回答をした所で、待ち構えていたかの様にトレーにその“焼きたて早苗パン”を乗せて早苗さんが現れる。
危ない危ない……焼きあがる時間を知っていたのだろう。
ちっ、と秋生さんが舌打ちする。
「おはようございます。オーキくん」
「おはようございます」
トレーをもったままの会釈に、軽く頭を下げて応える。
「それで、秋生さん。私のパンがどうかしたんですか？」
「ああ、いや、何だ……それより、今日だったな。渚を医者に診せるの」
自分で振っておきながら、秋生さんはあからさまに話しをそらした！
でもそれって……？
「渚さん、また熱でも出たんですか？」
「いえ、むしろ逆にここの所体調が良いので、復学できるかどうか判断してもらうんです」
俺の懸念に早苗さんが明るく答えてくれた。
「ああ、そうなんですか……良かった……」
それなら来週あたりからまた渚さんも学校に通えそうだな。
何にせよ、治ってくれて良かった。
「では、オーキ君、ゆっくり見て行って下さいね」
“今週の新作パン”の所にトレーを置くと、再び会釈して早苗さんは引っ込んでいった。
「大丈夫……何ですか？」
そして秋生さんと二人きりになった所で改めて訊いてみる。
暗に“病気で留年してしまった彼女が”と、いう意味合いを込めて……。
長い付き合いからか、それともやはり秋生さんも同じ心配をしていたのか、俺の問いの意味を察してくれたらしく、ややあってから

神妙に口を開く。
「とりあえず、本人は乗り気になってるからな……まっ、なるようになるだろう。いざとなったら、お前がその面白い彼女と一緒に学校を面白くしてみせろ！」
「いや、だから……」
その軽口への反論の言葉は、それ以上出てこなかった。
アイツとならそれも面白いかもなと、俺も思ったからだ。

4月11日：君が君である為に

その日の三限目は現国で、俺にとっては貴重な読書タイムだった。
「川上、今日は何を読んでるんだ？」
名前もよく知らない現国教師が溜め息混じりに訊いてくる。
「“カラきょう”てヤツです」
「からきょう？カラキョウ……カラマーゾフの兄弟か？」
「はい」
一瞬、教師は感心した様な表情を見せた。
しかし、すぐにそれをわざとらしい咳ばらいで隠す。
ひょっとして、この小説が好きなのだろうか？
「感想は？」
「そうですね……宗教音痴な今の日本人に、この感性が理解出来るんですかね？」
「……それは確かに言えるかもしれんが、作品その物の良さとは関係ないだろう？」
「まあ、そうなんですが……」
「とにかくだ。名作を読むことは偉いが、それを授業中にやる事は感心しないな。今授業でやってる作品も、日本が誇る名作だぞ」
それは知っている。海外留学中の貧乏学生が、現地の踊り子と恋に落ち、散々つくされながらも、最後は降って湧いた良家との縁談に飛びつき、妊娠中の恋人を捨てた酷い話だ。
「はい。……教科書の作品の方で質問があるんですが……」
「何だ？」
「もし、彼がこの時栄達よりも恋人を選んでいたら……この話は名作たりえたんでしょうか？」
教師の首筋に刃を突き付ける気迫で、見識を試す様な意地の悪い問いをぶつける。
さっきは感想を訊いて俺を試したのだ。おあいこだろう。

さて先生、あなたはどう答えますか？
「そうだな……もし彼が恋人を選んでいたら……そもそもこの作品自体、世に出る事は無かったかもしれんな」
驚いた。
何だ、この人も結構ロマンチストなんじゃないか。
「そうですね……僕もそう思います」
思わず素の笑顔でそう応える。
すると教師は自分の発言に照れたのか再び咳きばらいをして、
「とにかく、今は授業に集中しろ。では次……」
と、俺の前から離れていった。

「川上君、さっきのってどういう事なのかな？」
授業が終わるなり、隣の仁科が尋ねてきた。
まあ、事情を知らない人間にはさぞかし謎なやりとりとして映っただろう……。
「ああ、この話な……一説には、作者の実体験がもとになってるんじゃないかって言われてるんだ」
「それって……！？」
「うん。だとすれば、これは……作者の後悔と懺悔だろうな……」
言いながら席を立って背を向ける。
これを書いた作者は、きっと幸せではなかったのだろう。
もっとも、幸せな物書きなんて、居ないんだろうけど……。
「ああ、仁科」
そのまま颯爽とトイレにでも行こうとしたが、思い出した様に立ち止まって尋ねる。
「現国の先生て、名前何だったっけ？」
「え？『菅原』先生だけど……」
「ああ、そうだった……サンキュ」

昼休み、俺は宮沢に会う為に旧校舎の資料室に向かった。
無論、坂上の件を伝える為、そして出来れば今後についても話し合っておきたい所だ。
いかなる戦略を立てるにしろ、彼女の協力無しでは成り立たないだろうからな。
“宮沢を利用する様で心苦しい”などとは思わない。
遅かれ早かれ、坂上がこの学校に居る事は広まるのだ。
遠慮して後手後手に回るくらいなら、先手を打って万全を期す。
それが、結果的にもっとも宮沢にも迷惑をかけないで済む方法だろう。
それに、他ならぬ宮沢のダチと坂上の間に、因縁が無いとも限らない。
どちらにしろ、彼女と色々と話し合っておく必要があるのだ。
……だったのだが……。
『資料室』のプレートの前に立つと、中に人の居る気配を感じた。
宮沢の物だけではない。他に何人か居るのだろう。
つまり、“来客中”という事だ。まったく間が悪い……。
「あっ……はーい。どうぞ」
ノックをすると、ほんの一瞬のラグの後に宮沢の声。
「いらっしゃいませ～『カテナチオ番長』さん」
扉を開けると、彼女はいつものテーブルからではなく、簡易ガスコンロの前からエプロン姿で出迎えてくれた。
他に人影は無く、代わりに食欲をそそられるイイ匂いがただよっている。
このケチャップの匂いはチキンライスか。
昼時だし、買い置きの冷凍食品を調理しているのだろう。
ただの物置でしかない資料室に、本来コンロやら調理器具やらが

有るはずが無いのだが、ここで飲み食い出来るように全て宮沢が自前で用意してきた物である。

「だから『カテナチオ番長』はやめてくれ……」

「そうですね。語呂が悪いので……『かんぬき番長』さんと御呼びしましょうか？」

「だから、『番長』をやめいっちゅうに！」

そのまま傍まで寄って行き、ペシッっとデコピンを食らわす。

「あうっ！！」

その瞬間、ピシリと空気が緊迫した物へと変わった。

何処からか向けられる俺への複数の殺気。

まあ、宮沢のダチがどこかに隠れているのをわかっていて挑発している訳だが……。

「痛いですぅ～」

「今時“何とか番長”とか、ギャグに聞こえるだけだろ……？」

ついでに、おでこをさする宮沢に前々から言っておきたかった事を言っておく。

名が売れるのはいいが、勝手に変な通り名とか付けられては堪らない。

「では、何と御呼びしましょう？」

「いや、普通に名前で呼べばいいから……それよか、話しがあるんだが……」

そこまで言って、指でクイクイと“耳を貸せ”のジェスチャーをしてみせる。

「何でしょう？」

宮沢はすぐにそれを察して、長い髪の中から可愛らしい耳を掻き分けながら、半身になって身体を寄せてくれた。

ふわりといい匂いが鼻孔をくすぐる。

当然ケチャップの匂いではなく、昨日嗅いだ坂上の物ともまた違う、宮沢の匂い。

どうしてこう、女の子ってヤツは好い匂いなんだろう？

否応無しに雄として意識させられてしまう。
そっと彼女の肩に手を置き、少し緊張しながら耳元で囁く。
「実はな……ごにょごにょごにょ……」
「……まあ！本当ですか？」
「てめえ！！ゆきねぇに何をしていやがる！？」
宮沢が驚いたのと、どこからか野太い怒声が発せられたのは、ほぼ同時だった。
そして、テーブルの下から、
本棚の影から、
窓の外から、
清掃用具入れの中から、
次々と現れるガラの悪い男達。
隠れていたのは四人……その内の一人、一際大柄な男は常連の確か『矢嶋』だ。
……あれ？『田嶋』だったか？まあ、どっちでもいいか。
これ以上の挑発は、さすがに宮沢に迷惑をかける。
引き際だろう。
「ゆきねぇさんから離れろっつってんだよ！」
「同じ学校だからって調子くれてんじゃねえぞコラッ！」
「あん！？」
「うっ……！！」
田嶋の威を借り吼える下っ端二人を一睨みで黙らせてから、不穏な空気に表情を曇らせた宮沢に目配せして、
「詳しいことは、また今度話すわ」
「はい……すみません」
後ろ手で“気にするな”と言いながら、俺はその場を後にした。

結局いつもの様に屋上に辿り着く。
その道すがら気がついたのだが……今日は金曜日だ。
宮沢と話しをしようにも、アイツのクラスを知らないし、まさか休み時間までわざわざ資料室には居ないだろうから……話すのは来週になっちまうか。
まあ、2、3日でそう変わる物でもなし、坂上が居る事は伝えたから、宮沢なら自分で判断して巧くやってくれるだろう。
眼下に広がる町並みを肴に、パンをかじりながら物思いに耽る。
新年度が始まって、急に周囲が慌しくなってきた。
塞ぎがちだった仁科は前向きになって合唱部を立ち上げ、渚さんも元気になって来週からまた学校に来れるだろう。
そして何よりあの『坂上智代』と出会えた。
退屈過ぎて生きているのか死んでるのかも分からなかった俺の“平穏な日常”。
アイツならきっとそれをぶち壊してくれるだろう。
そんな予感は、だんだんと確信に近付きつつある。
そう、アイツとなら……。
「心すれちがう……」
感傷が極まり、それが歌となって口からでた。
何度も何度も、本当にテープが擦り切れるまで聴いた“あの人”の曲だ。
何度も何度も口ずさみ、心に刻み込んだ“あの人”の歌だ。
仁科は俺の歌を上手いと言ってくれたけど、やはり人前で歌う気にはなれない。
恥ずかしいってのもあるが……いや、やっぱり恥ずかしいのが全てか。
自分の心をさらけ出す様で……。
無様に足掻いてる姿を見せる様で……。
でも、だからなのだろう。

自分を代弁してくれる“あの人”の歌に惹かれたのは……。
「君を好きだけど　明日さえ教えてやれないから……」
初めて出会えた“自分と同じ感じ方をしている”存在。
この世界に、自分は一人ではないのだと思えた。
辛く苦しい事ばかりのこの世界で、生きる力を貰えた。
そしていつか……“あの人の様に”なりたかった。
歌でなくともいい。
どんな形でもいいから、“あの人の様に”……。
……それなのに……“彼”は……。
「冷たい街の風に　歌い続ける……」
「いい歌だな」
「！！」
歌い終り余韻浸っていた所に、背後からの不意の声。
ぎょっとして振り返ると、そこにはたった今天空から舞い降りてきたかの様に、陽光を浴びてきらきらと輝く少女が立っていた。
「居たんなら声かけろよ」
「せっかく歌っている所を、邪魔しちゃ悪いだろ？それになかなか良い歌だったから、思わず聴き入ってしまったんだ。お前は歌も上手いんだな。感心した」
「……」
向き直るフリで、無邪気な彼女の笑顔に堪らず背を向ける。
恥ずい……恥ずかし過ぎる……！
てか、何故コイツがここに！？
まさか、また俺がここに来ていないか見回りにでも来たのか？
「今日も良い天気だな。絶好の相談日和だ」
しかし坂上は、さも当前の様に俺の隣に並んで手すりに寄りかかりながら、さらに意味不明な事を言い出す。
って、まさか……？
「なんだそりゃ？」
「雨が降っていたら、ここでお前の悩みを聞けないだろ？」

うわ……やっぱりそう来たか……。
「……それだけの為にわざわざ屋上に来たのか？」
「それだけって事はないだろ？友達の悩みを聞くことは、とても大事な事だ。それと、これをお前に渡そうと思ってな。昨日のカツサンドのお返しだ」
そう言って坂上が差し出してきたのは、パックのコーヒーだった。
「購買に行ったついでに買ってきたんだ。本当は、同じカツサンドを買って返そうと思っていたんだが、生憎すぐに売り切れてしまって買えなかった。今日の所はこれで我慢して欲しい」
「んなモン気にしなくてイイのに……サンキュ」
苦笑しながら、その心遣いをありがたく受け取っておく。
昨日あんな事をしたって言うのに……本当に律儀な奴だ。
当てにしていた宮沢のカフェオレにもありつけなかったし、丁度パンを食って喉が渇いていた事もあり、さっそく俺はストローを挿して飲み始める。
すると、その様をジッと見ていた坂上は、ニヤリといたずらっ子の笑みを浮かべ、大仰に笑いだした。
「フッフッフッ、川上オーキ敗れたり！」
その瞬間、俺は全てを悟った。
文字通り彼女は、昨日のお返しをする為に、ここに来たのだと……。
「お前が今飲んだコーヒーの中に、睡眠薬を入れておいた。お前の負けだ」
「そうか……」
それだけ答え、俺は平然とコーヒーを飲み続ける。
「……少しは信じたらどうだ？本当に入れたかもしれないだろ？」
動じてないのが面白くないらしく、ムッとしながら身勝手な抗議をしてくる。
「どうやって？」
「えっ！？そ、それは……“企業秘密”だ！」

いや、リアリティ持たす気有るなら、それぐらい考えておこうよ！
「……そうか。水に溶かした物を、折り返しの所から注射器で入れたのか……」
「お前、頭いいな……ああ、いや、うん！正解だ！」
素で感心して、あわててそれを取り繕う。
駄目だ……可愛過ぎる……！
コイツには人を騙す才能は無さそうだ。
いや、これで本当に入っていたら、天才だな……。
「……ならば、是非も無し……」
俺はYシャツの襟元を正し、手すりを背にして、どっかとその場に座り込む。
「ど、どうしたんだ、いきなり！？」
「どうしたって、本当に入れたんだろ？」
「う、うん……入れたんだ」
「なら、今更ジタバタしても仕方ないだろ？」
「それはそうだが……」
自分で騙そうとしておきながら、おもいっきり困惑している坂上を見上げ、爽やかに笑って見せる。
「最後の相手がお前で良かったよ」
「えっ！？」
「でも出来れば俺の手で、お前を普通の女の子にしてやりたかったんだけどな……」
「何を言ってるんだ……？」
「いずれ誰かがお前を解き放ち、そいつがお前を幸せにしてくれるだろう……」
「おかしな事を言うのは止せ！」
「それまで……負けるな……よ……」
そして俺は、ゆっくりとまぶたを閉じ、ガクンッと手すりに寄りかかる様に脱力した。
「だから、悪い冗談は止すんだ……オーキ？おい、オーキ！」

俺の異変に気付き、坂上は俺の肩を揺すって呼びかける。
だが返事は無い。屍のようだ。
「おい、返事をしてくれ！……オーキ？……うわあああああっ
オーキ！！」

4月11日：認証（みとめたあかし）

「痛っ……」

腫れ上がった頬を擦りながら恨めしそうに目で訴えてやる。

坂上は屍となった俺の胸倉を掴み何度もガクンガクンと揺すった挙句、息を吹き返すまで高速往復びんたを食らわしてくれたのだ。

まさに死者に鞭打つ所業、本当に死んだじーちゃんが見えそうだったので堪らず蘇生したが、おかげで首の方もムチ打ち気味である。

「お前が死んだフリなんてするからじゃないか！そもそも、入れてもいない睡眠薬で、どうして死んだりするんだ！？」

「いや、それはこっちの台詞だって……」

向かい合うようにして座ったままツンとそっぽを向く坂上は、先程の俺の芝居に本気で取り乱していた。

それこそ、自分から振ってきた冗談だという事すらトンでしまう程に。

感情が昂ぶると我を忘れる所があるようだが、それにしたって少し不自然な気がした。

そんなに俺の秋生さん譲りの演技が凄かったのだろうか？

「お前が突然、遺言みたいな事を言い出すからだろ……本当に何か悪い物でも入っていたのかと思ったじゃないか……」

「そりゃあだって、万一って事も有るだろ？」

「私が本当に薬を入れたりする様な人間だと思っているのか？」

「いや、だから万が一だって。実際、まったく疑ってなかったから飲んだ訳だし……」

「とにかく、私の前で死んだフリなんて性質の悪い冗談はもうやらないでくれ！私がどんな思いをしたと思ってるんだ……？」

「……ごめん……悪ノリが過ぎた」

怒っていると言うより懇願に近かいそれに、俺は素直に謝罪した。

一之瀬さんの時の様に、何が相手を傷つけてしまうか判らない。

その何かに触れてしまった時は、誠意をもって対するべきだろう。
「でも、まったく信じなきゃ信じないで面白く無さそうだったじゃんか。どういうリアクションを期待してたんだ？」
場の空気を変えるべく、少しアホな展開を期待して話しを振る。
「どうって……」
「ああ、なるほど。そういう事か……」
大方、単にやられた事をやり返してみたかっただけなのだろう。
返答に窮した坂上より早く、勝手に納得した様に頷いて邪悪な視線を向ける。
「……スケベ！お前と一緒にするな！」
すると彼女は何故か一瞬嬉しそうな顔をして、しかしすぐに白眼のカウンターを浴びせてきた。
おっ、ひょっとしてビンゴだったのか？
「まだ何も言ってないだろ？」
「お前の考えている事なんて、お見通しだ！どうせ、『お前が寝ている間に私がHな事をしようとした』とでも言うつもりだったんだろ？」
あからさまな俺の視線の意味を看破し、ちょっと得意気だった。
それぐらいは言われると予想していたのか、そして、それを言ってみたかったのか。
面白そうなので続けてみる。
「そんな事を考えてたのか……意外と大胆だな」
「違う！！お前がだ！！」
「いや、俺はやっぱり俺を狩りに来たのかと思っただけだが」
「見え透いた嘘を言うな！それにそんな事の為に、私はこの学校に来た訳では無いと何度も言ってるだろ？」
「じゃあ、昨日パンツ見られた仕返しに、俺のパンツが見たいとか？」
「そんな訳あるかーーーーーっ！！」
「うおっ！！」

立ち上がると同時に蹴りが飛んでくる。
何とかブロックするも座ったままの体勢では堪えきれず、すぐ後の柵に激突し、そのままずるりと崩れ落ちた。
「……っ、なるほど。結局俺を蹴りたかったのか……」
柵を枕にしたまま、仁王立ちの彼女を仰ぎ見る。
ああっ、今日も本当に眩しい限りだ……。
「お前があんまりにもアホ事を言うから、思わず蹴ってしまっ……うわあっ！！」
慌ててスカートを押さえながら坂上は後ずさった。
ちっ……俺の視線の先に気付いたか。
「どさくさに紛れてどこを見ているんだ変態！！」
「そんな短いスカートで、寝ている足元に立ってるからだろ？そもそも、お前が蹴るからだ」
「……確か、頭に強い衝撃を与えると、記憶を消す事が出来るんだったな……！？」
ゴゴゴゴと春晴れの空に暗雲が起ちこめる。
坂上の雰囲気が変わり、静かに、だが脅迫めいた物騒な事を口にしだした。
やべえ……マジで怒らせた？
だが、今更後には引けない。
コイツにちゃんと“人を蹴るリスク”を認識させる為にもだ。
「フッ……試してみるか？だがな……」
こちらも柵に捕まりながらゆっくりと立ち上がり、凍りつくように冷たい視線を真っ直ぐに見据え、気迫と信念を込めて言い放つ！
「例え他の全ての記憶を失おうとも……俺はお前のパンツだけは死んでも忘れない！！」
「……変態だ……本物の変態がいる……！！」
おもいっきり引かれた！
それまでの張り詰めた空気は霧散し、坂上は信じられない物を見たと言う様な表情で俯き、俺と対峙してしまった事を悔いている様

ですらあった。
さすがは俺である。
あの『坂上智代』を、たった一言で制してしまったのだ。
代わりに何か大事な物を失ったかもしれないが……。
「……お前は、そんなにパンツが好きなのか？」
そして坂上は困った顔で困った質問をしてきた。
さすがにそう面と向かってそんな事を訊かれると、俺の方も困ってしまう。
「いや、まあ……男なら皆好きだろ……」
「……本当に見えてるのか？」
「まあ……さすがに寝ている傍に立たれればチラリと……」
「ううっ……！！いや、そうじゃない……蹴った時にだ。蹴った時に本当に見えてしまっているのかと訊いてるんだ」
「まあ……ハイキックとかの時たまにな」
ズーーーーーン！！
坂上はその場に崩れ落ち、コンクリートの地面に両手両膝をついた。
どうやら彼女は酷く落ち込むと、この四つん這いのポーズになるらしい。
「それじゃあ……私は今まで不特定多数の男達に、ずっとパンツを見られてたって事じゃないか！！」
長い髪で隠れ表情はわからないが、血を吐く様な悲痛な叫びは若干鼻声になっていた。
「いや、それぐらい気付こうよ……」
「仕方ないだろ！そんな事を気にしていたら、戦ってなんていられるか！」
まあ、それもそうか……気にしてたら、何かしら対策は講じてるわな……。
「……私は……もうキレイな身体じゃないんだな……自分でも気付かぬ内に……何人もの男達に穢されてしまっていたんだ……」

いや、大げさな……。
しかしここまで派手に落ち込まれると、さすがに心苦しい。
恐らく、俺が一番穢しているだろうし……。
「まあ、何だ……良かったじゃないか？俺と戦ったおかげで気付けた訳だし」
「良い訳あるか！！こんな事、出来れば一生知りたくは無かった！！」
「でも、知らずにずっと見せ続けるよりいいだろ？」
「それは……うわあああ、見るなあああああ！！」
“見られ続ける日々”を想像したのか、さらに坂上は錯乱していた。
いかんな……辛い現実を前向きに受け入れさせる方向では難しい様だ。
仕方ない。今更だが、誤魔化してみるか……。
「そうだ。昔のお前は大体夜に戦ってたんだろ？なら、スカートの中なんて、暗くてよく見えないと思うぞ」
「……でも、昼間にも結構戦ってしまっているんだ……」
「いや、そもそもお前の動きは早いから、並みの奴じゃ見える前にやられてるし、見えても一瞬だろ？お前と戦うとパンツが見られるなんて噂、聞いた事無いしな」
「当たり前だ！！そんな噂立てられたら、もうお嫁に行けないじゃないか！！」
「だから、大丈夫だって。お前は穢れてなんていないから……今までお前の前にずっと立って居られた男は、俺以外居ないだろ？」
「……うん……」
「俺は目がいいし、相手の目や正中線、特に重心や腰の動きなんかで相手の動きを“読む”タイプだから、特別人より見えるんだと思う。その俺でもチラリとしか見えていないんだ。他の奴らに見える筈が無いから安心しろ」
「……つまり、お前がもの凄いHで、常にパンツばかり見ようと

しているからこそ、見えたと言う事か？」

「いや、あのな……」

やっと首だけ上げたかと思うと、どこをどう聞いたらそんな個人の尊厳を著しく傷つける結論に達したのか理解出来ない事を述べてくる。

つまり、全て俺の助平パワーによる物という事にしたい訳ですか……。

おかしい……どうしてこんな事に？

秋生さんや友達から“ムッツリ”だと言われた事はあったが、本来俺は紳士で硬派なイメージで売っていた筈なのに……。

こんなに助平だの変態だのと女子に連呼されたのは、幼稚園以来だ。

まあいい。

コイツがそう望むのなら、甘んじて受け入れてやろう。

あの『坂上智代』を、唯一人穢した男として……。

「もうそれでいいから……今後は俺以外の奴をなるべく蹴らない様にしとけ。な？」

苦笑しながら、我侭なお姫さまに手を差し伸べる。

すると彼女もまた、俺の顔を上目づかいで窺いながら呆れた様に笑ってその手を掴んだ。

「……“お前以外の奴を”……か……まったく、お前は本当に仕方の無い奴だな。いや、仕方の無いスケベだ」

「……」

わざわざ言い直すな……！

つっこみたかったが、機嫌が直ったようなので黙って彼女の手を引いた。

「……お前は思い違いをしているようだから、ちゃんと話しておこうと思う」

立ち上がるなり、彼女は落ち着いた様子でそう口にした。

「何が？」

「私がこの学校に編入してきた理由だ。話してはいなかっただろ？」

「ああ、そうだったな」

「お前も知っての通り、昔の私は荒れていた……心の支えとなる物が無くて、凄く不安定だったんだ。自分でも自分が分からなくて、ただ苛立ちばかりが募って……その苛立ちのはけ口を求める様に夜の街を彷徨い、不良達を狩って回った事もまた事実だ……」

俺の手から離れた坂上は、すぐ脇の柵に寄って遠くの空を見つめながら語り始める。

ああっ、やはりな……。

彼女が荒れていた理由までは知らないが、その行為がただの“八つ当たり”でしかない事は噂から推測出来ていたし、実際に対峙してそれがよく解った。

不良狩りと言われ、学校一つ廃校にしたなんて噂まで有りながら、彼女と戦って誰かが再起不能に陥るような怪我を負ったという噂もまた聞く事は無かったのだ。

何かを奪うでも無く、名声を欲するでも無く、相手を必要以上に痛めつけるでも無く。

ただ一頻り暴れて去って行く、台風の様な存在。

ストレス発散の為の八つ当たり以外の何物でも無いだろう。

不良を狙ったのは、たんに社会に迷惑をかけている連中なら気兼ねせずブチのめせたというだけ。

いや、あるいは……。

「でも、色々あって、これでも大分落ち着いたんだ。だからもう、誰彼構わず喧嘩を売る事も、まして誰かを狩りたいなんて思う事もない」

「そっか……まあ、そうだろうとは思ってたけどな。一匹狼の割りに、お前拍子抜けするぐらい人懐っこかったし」

「人を犬みたいに言うな……」

「お手」

試しにそう言いながら手を出してみる。
「……」
その手に真顔の彼女の手がポンと置かれた。
「て、何をやらせるんだ!?思わず置いてしまっただろ!!」
「プッククッ……おかわり」
真っ赤になって怒り出す坂上に吹き出しそうになりながら、今度は反対の手を差し出してみる。
「……うわっ!だから……私で遊ぶなーーっ!!」
しっかりと一度手を置いてから、ついに彼女は両の拳を握り締め、立ち上がったクマの様に襲い掛かってきた!
振り上げられた彼女のクマの掌の如き拳が、交互にテンポよく振り下ろされる。
うおっ!!
俺も咄嗟に上げた両手の平で、それを何とか受け止めガードしてゆく!
ぽかぽかぽかぽか!
それは、実に女の子らしい『ぽかぽかぱんち』であった。
ただし、威力は女らしいどころの騒ぎではないが……。
それでも、俺なら十分耐えられるし、何と言うか……十二分に可愛らしい。
「分かった分かった。で、お前がウチに来た理由って、何なんだ?」
だからと言ってずっと叩かれてる訳にもいかないので、とりあえず本題に入る様促す。
「ああ、うん……」
ようやくパンチを止めた坂上は、一度バツが悪そうに唇を噛んでから、気を取り直して居住まいを正してから口を開く。
「よくぞ訊いてくれた。最終的な目的はまだ話せないが、当面の目標は言える。『この学校の生徒会に入る事だ』」
予想外の理由に、少々面食らう。

しかし彼女の目は、真っ直ぐで挑む様ないつもの『坂上智代』の瞳だった。
だから俺も、素直に感想を述べてやる。
「いいんじゃないか？案外、お前に似合ってるかもしれないな」
「……本気で言ってくれてるのか？私は冗談で言っている訳ではないんだ」
「解ってる。お前、結構根は生真面目そうだしな」
“鉄血風紀委員長”なんてハマリそうだ。
アレッ？風紀委員は委員会か？
う～ん、なら、どうせならやっぱり……。
「でも、どうせやるなら、『生徒会長』を目指したらどうだ？」
「うん。実はそのつもりだ」
「！！」
即答だった。
あまりの淀みの無さに、逆に俺の方が衝撃を受けてしまう程に。
そして次の瞬間、
「プッ！クックックッ……ハッハッハッ……ハーーーハッハッハッ！！」
込み上げてくる“笑い”を押さえきる事が出来なっかった。
やべえ……でも、堪えられん……！
「なっ……！！……やっぱり馬鹿にしていたのか……！？」
案の定それに誤解したのだろう。坂上はショックを受けて俯いてしまう。
「いや、すまん……そうじゃないんだ……」
「私だって、今まで自分がしてきた事を思えば、似合わない事を言っているって事ぐらいわかっている。だからって……酷いじゃないか……！」
「だから違うって！！」
不貞腐れ始めた彼女に、必死に笑いを堪えながらの精一杯の一喝。
そしてビクンと上がった顔に、一息ついてから微笑んで諭す様に

弁明する。
「こいつはな……『男が男を認めた時の笑い』だ」
「……男が男を認めた時の……って、私は女だ！！」
惚けた様に反芻してから、やはりワンテンポ遅れていつものつっこみ。
よしよし、狙い通り。
「ああ、お前が男なら、“生涯の友”になれたかもな」
「……女とは友達にはなれないと言いたいのか？」
「なれなくは無いが色々出来ないだろ？裸の付き合いとか、夜通し語り明かしたりとか、拳で語りあったりとか……」
「あ、当たり前だ！！いきなり、は、裸で夜通し語り明かすなんて、出来る訳ないだろ！？……それなら、その……物には順序て物があるんだ！」
いや、男同士でそれは嫌すぎるから！！
酷く動揺しながら頬を紅潮させて俯き、最後はムキになった様に怒っていた。
「あっ！ああ、でも、お前を拳で殴る事はできるな！」
そしてそれを誤魔化す様に、うわずった声で物騒な事を言い出す。
「いや、別に殴られたい訳じゃないからな……」
「でも、お前は女の子は殴れないんだろ？なら、私が叩くしかないじゃないか」
「だから、拳で語り合うってのはな……」
「冗談だ。あまり理解は出来ないが、意味は何となく分かっている」
ボケだったのか……。
よく俺も「どこまで本気なのか判らない」と言われるが、コイツのは天然なのか、ボケなのか、天然をボケという事にして誤魔化しているのか、イマイチ判別不能である。
「とにかく、お前が本気で生徒会長目指すってんなら、応援してやるよ……“智代”」

敬意と誠意の念を込めて、初めて本当に彼女の名を呼ぶ。
「うん……ありがとうオーキ」
すると智代はお返しに、極上の笑顔で俺の名を呼んでくれた。

4月11日：傾世教育論（前書き）

・誤字修正

4月11日：傾世教育論

「でも、本当にいいのか？」

しかし智代はまだ何か不安が有るのか、表情を曇らせながら確かめる様に訊いてきた。

「何が？」

「お前みたいな奴は、生徒会とか嫌いなんじゃないのか？前も生徒会に対して不満を言っていたと思ったが……？」

「“俺みたいな”って……お前、俺をなめてないか？」

言いたい事はわかったが、不安を払拭する為にもあえてジト目を向けてやる。

「そういうつもりで言ったんじゃない……ただ……」

「言っておくが、小、中と、ウチらの代の生徒会長は、俺のダチだった」

そして彼女の言葉を遮り、まずは過去の事例で安心を与えておく。

狙い通り、少し驚きながらその表情は和らいだ。

「そう……なのか？」

「ああ。俺は別に生徒会や教師が嫌いって訳じゃない。ただ、自分の本分も全うしていないクセに、すまし顔で偉そうにしている連中が嫌いなだけだ」

「……仕事をしていないって事か？」

「いや、“一応”やってはいる……形だけはな。にもかかわらず、さも自分は立派な事をやっているって面してるから胸糞悪い」

「よく分からないんだが……」

「例えば今の生徒会長は、今まで大きな落ち度も無いし、教師からの受けもいい」

「それのどこがいけないんだ？」

「大きな失敗が無いのは、何をやるにも無難でマンネリな事しかしていないからで、教師の受けがいいのは、常に教師の顔色ばかり

伺い、生徒の側に立っていないからだ」
「……」
「例えば購買の件にしてもそうだ。あの無法地帯はこの学校の昔からの悪しき風習で、業者の管轄を理由にずっと放置されてきたってのは話しただろ？」
「ああ、昨日聴いたな」
「それでな、去年の二学期だったか……この問題を報道部が記事として取り上げた事があったんだが、その時今の生徒会長は何て言ったと思う？『“購買を利用しなくてはならない”と言う規則は無い』だ、そうだ」
「なっ！！嫌なら利用するなと言うのか！？そんなの横暴じゃないか！！」
俺の言葉では無いのだが、眉を吊り上げズイと詰め寄ってくる。
それに少しドキリとしながらも、いい食い付きだと微笑む。
「ああ。でも、一理は有るし、彼らからすれば、旨みの無い余計な仕事を増やしたくは無かったんだろ」
「生徒会がそんな事でいいのか？」
「さあな。少なくとも俺は気に食わないが、教師達は黙認しているし、生徒達も不満を言いながらも『所詮こんなもんさ』と既に諦めてるのが“現実”だ」
「……」
「おかしな話だよな？選挙では『学校を良くする』とか『生徒の為に』とか耳障りのいい言葉ばかり並べていたくせに、結局は与えられた仕事をこなすだけの『教師の犬』になりさがっている。もっとも、俺には去年の選挙の時から奴が内申目当てだって事は判っていたから、票なんて入れてないけどな」
「……」
智代は時折何か言いたそうにしながらも、言葉が見つからないのか、黙ったまま俯いて俺の話しを聞いていた。
歪んだ世界の空虚な現実と、それを諦観し容認する事が正しいと

される社会。
「まあ、実際は『与えられた仕事をこなすので精一杯』なんだろうけどな。細かい雑務やら何やらあるし、大きな行事が近くなれば何日も遅くまで残って帰れなくなる。その上で成績も落とすわけにはいかないだろうし。中学の時の生徒会長やったダチは野球部だったが、任期中はほとんど部活に出れなかったらしい」
だからと言って、約束を反故にし、信頼を裏切っていい理由にはならない。
あるいは、自分の至らなさを悔いるなら解る。
それなのに、平然と“やってますよ”という顔をしていられる傲慢さには反吐が出る。
「……そんなに大変な物なのか？」
「ああ。遊んでいる暇なんて、とても無いだろうな。どうする？それでも『教師の犬』に成りたいのか？」
「人が目標としている物を『教師の犬』とか言うな……もちろん生徒会長には立候補するつもりだ。例えそれがどんなに困難な道だろうと、この決意は変わらない」
俺の『犬になりたいのか？』発言にむくれて答えた後、存在感に満ち溢れた胸に手を当て、先程と同じ揺ぎ無い瞳で言い切った。
その眩しさに目を細める。
本当に愛い奴だ。
「そうか……まあ、なりたくなったら、いつでも言え。その時は俺の犬にしてやるから」
「だから『犬』になりたいなんて思うわけないだろ！私を何だと思ってるんだ！？」
「お手」
再び手を差し出してやると、ムッとしたまましっかり手を置いてくる。
そして一瞬の間を置いてからハッとなり、俺の手を握ったままブンブン振り回す。

「うわぁ！！違う！！これはだな……そ、そうだ！！握手だ！！お前と握手したかったんだ！！」

ムキになって無理矢理誤魔化そうとする彼女がまた可愛いくて、込み上げてくる笑いがなかなか止まらなかった。

「まったく……笑いすぎだ！」

腕を組み、ふくれっ面をツンとそむけながら智代がぼやく。

「ケホッケホッ……わりい……ケホッケホッ……」

炎症を起こしヒューヒューと音を立てる気管支を押さえ、咳き込みながら何とかそれだけ言えた。

「……大丈夫なのか？随分と苦しそうだが……」

次第に怒りよりも心配が上回ったか、寄り添って背中をさすってくれる。

「ああ、大丈夫だ……悪い……すぐ治まるから……ガキの頃喘息持ちだったから……今でもたまにな……」

と言っても、喘息が出たのも、こんなに笑ったのも何年かぶりだが。

やっぱりコイツ面白過ぎる。

「だから笑いすぎだ！まったく……仕方の無い奴だ」

いつもの呆れ顔で、いつもの決め台詞。

それでも背中に当てられた手は、優しく、温かい。

「はあ……大丈夫。もう落ち着いた。サンキュ」

「……そうか」

名残惜しいが、あまり心配もかけたくない。

智代は安心して微笑むと、俺から離れ再び隣に並んで手すりに肘を置いた。

「そういえば、お前の悩みを聴かないといけないな……相談に乗ってやる。話してみろ」

そして思い出した様に言って、偉そうに話を振ってくる。
別に相談したい訳でも、そんな約束をした訳でも無いのだが、『本来禁止されている屋上に立ち入るには、相応の大義＝友達の悩み相談が必要』と、言うのが智代の理屈だ。
拒否しても意固地になるだけだろう。
まあ……ある意味“丁度いい”か。
普段なかなか会話になりそうにない事も、コイツとなら面白そうだ。
「そうだな……じゃあ……」
俺は挑む様な気持ちで智代を見つめ、口を開く。
そう、これは挑戦だ。
この世界への……。
自らの運命への……。
「世界を変えるには……どうしたらいい？」
「えっ……？」
「悩める事ばかりのこの世界を……変えるにはどうしたらいい？」
「……」
智代は大きく目を見開いて暫く俺を見つめていたが、俯いて視線をそらすと、
「……すまない……それはむしろ、私の方が訊きたいくらいだ……」
悔しそうにそう答えた。
やはりコイツでも解らないか……。
軽い失望と、それでも真剣に受け止め素直に答えてくれた喜び。
本気にされなかったり、「何言ってんの？」って顔をされていたら、百年の恋も冷めていた所だ。
「そっか……そうだよな……」
「と言うより、話が抽象的過ぎて、言いたい事は何となくわかるが、何を答えていいのかが判らないんだが……」
「いや、だから……それを話すと長くなるから、手っ取り早い方

法を訊いたんだ」

「横着するな……ちゃんと聴いてやるから、具体的に話してみろ」

「そうだな……じゃあ、例えば、どうして“学校の勉強”はこんなにつまらないんだと思う？」

一先ず身近そうな話題に切り替える。

すると智代は打って変わって瞳を輝かせ、得意気に語り始めた。

「『勉強がつまらない』か。うん。確かに私も昔はそう思っていた。こんな事にどれ程の意味があるのかと、くだらなく思えていたんだ……」

一瞬、そらした視線と言葉に影が混じった。

だが、すぐに気を取り直したのか、智代は元の調子で話しを続ける。

「でもな、この学校に編入する為に勉強を始めて続けていく内に、次第に新しい知識を得ていく事や、今まで分からなかった事が分かる様になる事が楽しくなってきたんだ」

『私は勉強が好き』

故の自信満々。

やはりな。

それでこそ『坂上智代』だ。

そうでなくては話しにならない。

「だから思うんだが、やはり他人から押し付けられていると思うから楽しく無くなるんであって、お前は頭が良いんだ。自分からやる気になればきっと好きになれる筈だ」

「そうだ。『朝(あした)に道を聞かば、夕(ゆうべ)に死すとも可なり』と言った孔子然り、『フィロソフィア＝智を愛し求める』とまで言ったソクラテス、プラトン然り……本来知識を得ると言う事は、洋の東西を問わず至上の喜びだった」

俺の意地の悪いカウンターに、胸に手を当て雄弁に語っていた智代はキョトンとしてそのまま固まってしまう。

「小さな子供は、何にでも興味を持って、何でも覚えようとする

だろ？本来知識欲や探究心は、人間誰しも持って産まれてくる物だ。
でも、例えばこの学校の生徒で、お前みたく本当に『勉強が好きだ』と言える奴が、どれだけ居ると思う？この辺じゃ一番の進学校であるウチの生徒ですら、十分の一も居ないんじゃないか？」
「……そういう事か……つまり、お前は勉強自体は好きだが、学校の勉強が好きになれないと言うんだな？」
ようやくフリーズから解けた智代は、苦笑を浮かべながら納得した様に言った。
「でも、それこそお前がやる気を出すしかないんじゃないか？」
「だから、やる気が出ないから悩んでるんだ」
「それもそうか……じゃあ、こうしよう。今度のテストの点数で勝負して、『負けた方は勝った方の言う事を何でもきく』っていうのはどうだ？」
どこか嬉しそうに“定番の賭け”を提案してくる。
俺の為と言うより、当人がやりたそうだ。
「……“何でも”か？」
「え、Hな事は駄目だ！」
ただ聞き返しただけなのに、即ダメ出しされた！
これには日頃紳士な俺もカチンときて、思わずムキになってみたくなる。
「じゃあ、やだ！」
「どうしてお前はそんなにHなんだ！？……大体、もしお前が勝ったら一体何をするつもりだったんだ？」
狼のおばあちゃんに色々訊いてしまう赤頭巾ちゃんの如く、智代は真っ赤になりながらも、飛んで火に入ろうとしてくる。
ならば、俺は狼役をやるしかあるまい。
「それはご想像にお任せする」
「ご想像にって……や、やっぱりダメだ！そんな事、まだ早すぎる！」
どうやら期待通りの妄想をしてくれたらしい。

それを見計らい、俺は智代の肩に手を置き、フッと男前な顔で決め台詞を放つ。

「大丈夫だ。ちゃんと男として責任取ってやるから安心しろ」

「オ、オーキ、それって……やっぱり責任取らなきゃいけない事をするつもりなのかーーーっ！！」

初め雰囲気に流され硬直していた智代だったが、我に返った瞬間、肩の手を振り払いつつ、真空跳び膝蹴りを放ってきた。

「うおっ！！」

懸命に上体を反らして首を捻った所を、必殺の膝がかすめていく。

そして、

「！！」

思わずそのまま抱きかかえる様にして、智代の身体を受け止めてしまった。

「う、うわぁわあ！！」

「くっ！！」

予想外の事に驚きバランスを崩した智代が、頭にしがみついてくる。

それによって元々不安定だった俺のバランスまで崩れ、後方に倒れそうになったのを、何とか手すりを掴み柵に寄りかかる様にして防いだ。

「ふう……大丈夫か？」

「うわあああああああああああああ！！いいから、すぐに離せ！！どこに顔をうずめてるんだ！！変な所を触るなーーーっ！！」

体勢が安定したと思ったら、今度は智代が暴れだし、頭にぽかぽかパンチをしてくる。

気持ちは解る。

彼女の片膝は俺の肩の上にあり、俺の顔は自然とその……白い物の目と鼻の先にあった。

しかも彼女の体重を支える片手は、ガッチリと柔らかい太もも……のかなり上部に食い込み、更にさっきまでは頭の上に柔らかく立

派な物が押し当てられ、今も彼女の振り下ろす手に合わせて一緒にぺしぺしと頭を叩いてくる。
ああっ……例えこのまま死んでも……本望だ……。

「って、痛えよ!!離してやるから暴れるな!!」
「H!!スケベ!!変態!!痴漢!!変質者!!」
頭をぽかぽかと何度も叩かれ、マジで意識が遠のきかけた。
いかんな。自己満足で智代を殺人鬼にさせる訳にはいかない。
頭に『女子高生T、男子高校生を撲殺』というタイトルと、目に黒い棒線が引かれた髪の長いカチューシャの少女の写真が浮かんで吹き出しそうになったが、何とか堪え彼女をゆっくりと降ろす。
「……お前は女の子に何て事をするんだ……!?」
「お前から跳びかかってきたんだろ?不可抗力だ」
「だからって……あんな事を……お嫁に行けなくなったらどう責任を取るんだ!?って、うわあ、ちゃんと取るって言っていたんだった!!」
あまりの出来事に智代は錯乱し、両手で顔を覆ってその場にしゃがみこんだ。
まあ、俺の方もコイツが傍で取り乱してくれているから平静を装っていられるが、内心バクバクだし、ちょっと一部まだ納まりがついていなかったりするから丁度いい。
何気なくポケットに手をつっこんだ前傾姿勢のまま、遠くの町並みを観て気を紛らわせつつ智代の復活を待つ。
てか、話が脱線して、そのまま宇宙に飛んで行きそうだったな……。
とりあえず今したいのは、エロイ話でもエロイ事でもなく、マジな話だ。
もう十分堪能したし……。

「……と、とにかく……これでも乙女なんだ……女の子に取って大切な物を、そんなバツゲームみたいな形でなんて……私は嫌だぞ……」

「いや、だから賭けなんてしないって。てかな。俺一人がやる気になっても意味がないんだ。俺が本当に悩んでいるのは、この国の教育制度その物についてなんだ」

「……この国の教育制度その物……？」

話の修正により、ようやく智代の顔が上がる。

こっからはちゃんとした真面目な話だ。

「お前もさっき言ってただろ？昔は学校の勉強に価値を見出せなかったって」

「う、うん……」

「『何故やる気がでないのか？』『何故つまらないのか？』そして『何故価値が見出せないのか』……答えは簡単だ。今学校で習っている事は、『テストの為の知識』つまり“人を選別する為の物”であって、“本当に人を教育する為の物”では無いからだ」

「教育する物の為じゃない……？それは……」

反芻して反論を試みるも、言葉に詰まっていた。

彼女も思い当たる節があるのだろう。

「……テストの為の知識だから、テストを真面目に受ける気の無い人間や、進学する気の無い人間は、勉強へのやる気を失うと言いたいんだな？」

「ああ。でもそれは……お前バイクの免許とか持ってるか？」

「いや、持ってはいないが……それがどうかしたのか？」

「持って無くてもどういう物かぐらい判るだろ？何度も講習を受けて、実技と筆記の試験をパスして初めて取れる物だ」

「うん。それぐらいは知っている。……そうか、今の教育制度では、むしろ落ちこぼれた人間から社会に出て行く。免許とは逆だと言いたいんだな？」

智代は俺の言いたい事を理解して、得意気に微笑む。

やはり頭の巡りが良い奴との会話は楽でいい。
「……でも、やはり免許と学校を一緒にするのは無理があるんじゃないか？試験をパスしないと卒業出来ないとなると、それはそれで問題がある気がする」
「確かに中退者は増えるかもな。でも、遊んでるだけで卒業出来る方がおかしいだろ？実際、海外ではそういう制度の所も多かった筈だ」
「ああ、そういえば私も聞いた事がある気がするな……アレはアメリカの学校だったか？」
智代は暫く空を向いてあやふやな記憶を辿り、次いで腕を組んでう～んと唸る。
それを観ているだけでも微笑ましい。
「例えばお前に子供が二人居たとして……」
「こ、子供なんて居る筈ないだろ！！私は乙女だ！！」
「いや、例えだって……じゃあ、“将来”二人子供が居たとして……」
「二人か……そうだな。一人っ子じゃ寂しいだろうし……でも、もっと多くてもいいな……」
「なら、もっと頑張るか？」
「うん。頑張る！……て、乙女に何を言わせるんだ！！」
やばい……天然ボケにつっこんだら負けだと知りつつも、つっこまずにはいられない……。
「とにかく居たとして、片方は優等生で、片方がドロップアウトしたら、優等生ばかりチヤホヤして、落ちこぼれは見捨てるか？」
「そ、そんな事をする訳ないだろ！！どちらも大切な私の子供なんだ！！」
智代は例え話にに本気で怒り、再び掴みかからん勢いで詰め寄ってきた。
予想以上の食いつきに、さすがに面食らって仰け反る。
「ああ、だから、誰かを見捨てる教育なんて、そんなの本当の教

育じゃないだろって言いたいんだ」
「ああ、そうか……うん、その通りだ……」
ようやく納得して、落ち着きを取り戻す。
今の過剰な反応といい、今まで時折見せた反応といい、彼女の抱えている物がおぼろげながら見えてきた気がした。
「確かにお前の言う事はもっともだ……でも、“学校で習う事が教育の為では無い”訳では無いんじゃないか？どんな事でも知識を得る事は有意義だと私は思う」
「俺だってまったく無駄だとは思ってない。でも、それよりもまず社会人として知っておくべき事、そして人として知らなきゃいけない大切な事があるだろうと言ってるんだ」
「知っておくべき事や、知らないといけない大切な事？」
「例えば冠婚葬祭の諸々のマナーとか、敬語や電話の取り方とかな……社会に出たら必要だろ？」
「ああ、なるほど。それは確かに知っておいた方がいいな……でも、それは“知っておくべき事”なのだろ？お前の言う“知らないといけない事”とはなんだ？」
どうやら俺の論法が解ってきたらしく、先回りする様に訊いてきた。
それを嬉しく思いながら、俺はこの話の核心に触れる。
「なあ、智代、そもそも“教育”とは何だと思う？」
「“教育”か……文字通り“教え育てる事”でいいんじゃないか？」
「そうだな。じゃあ、人が育つとは、成長するって事はどういう事だ？」
「“育つ事”“成長する事か”……難しいな。知識を得る事も、身体が大きくなってゆく事も、ある意味成長だが……それはお前の望む答えじゃないのだろ？」
「もちろん……さっき孔子やプラトンの名前出したろ？教育者の祖とも言える二人は、弟子達に何を教えていた？」

「孔子やプラトンか……名前を聞いた事は有るが、それ程詳しくはないんだ……確か二人とも哲学者だったな……？」

「そうだ。二人が教育した物とは『哲学』つまり“精神”であり“心”だ」

俺の言葉に衝撃を受け、智代はまるで子供の様にあどけない表情で目を見開いた。

その顔に予感は確信へと変わり、心の中で『ようこそ』と言って微笑む。

この子は“智”においても、まだまだ“まっさら”なのだ。

この先、まるで乾いた砂が水を吸収する様に、あらゆる物を吸い込んで、どんどん成長してゆく事だろう。

やっぱり『坂上智代』は凄いな。

本当に底知れない。

「そうか。人の成長とは、“心”が成長する事であり、それがお前の言う“人として知らなければならない事”なんだな？」

晴れやかに智代は俺の望んだ答えを導きだした。

まあ、いささかヒントをあげ過ぎた感は有るが、それは問題では無い。

「ああ。本来教育とは“心を育てる事“”精神の修養”の為にあり、だからこそ個人にとっても、そして社会に全体にとっても有意義な物になる筈なんだ。そして知識とは、元来それを助ける為の物でしか無かった。でもこの国は、知識を詰め込む事に躍起になって、心を育てる事を忘れている。『本末転倒』だろ？俺はそれこそがこの国の教育システムの最大の欠陥であり、現在この国が抱える様々な問題の大きな要因だと思っている」

「知識ばかりあっても、心の育っていない頭デッカチな人間を国が作っていると言う事だな……でも、どうしてそんな事になってしまったんだ？確かにお前に指摘されるまで不満は感じても、疑問は抱かなかった。しかし、言われてみれば欠陥は明らかな様に思える」

うん、いい所に気付いた。

やはり、コイツはセンスがいい。
「善い質問だ。一つはいたずらに欧米式の真似をして、生活の基盤が違う事を考慮していなかった事にある」
「欧米との違い？」
「“宗教”だ」
「ああ、“キリスト教”と“仏教”の違いと言う事か？」
「残念ながら違う。“宗教が生活レベルに浸透している国”と、“無信教国家”の違いだ」
「ああ、なるほど……確かに今の日本人は、大半が無信教だな。でも、それがそんなに重要なのだろうか？よく治安とかは欧米に比べて日本の方がいいと言うじゃないか」
「日本の治安の良さは、むしろ『銃社会』では無い事が最大の要因じゃないか？もしこの国で欧米並に銃が普及したら、欧米より悪くなる可能性は高いと思う」
「なるほど……確かに私やお前でも、さすがに銃には勝てないだろうからな……」
てか、普通は刀にだって勝てないけどな。
「別に欧米だけでなく、宗教が半ば国教化している国は多いし、世界の大半の人間は何かしらの宗教を信じている。日本人だけだ。“宗教”と聞くとすぐオカルト教団を思い出しアレルギー反応を示すのは。そして宗教に子供の内から触れて育った子は、自然とその経典や先人達から教義や道徳を学んで育つ」
「そうか……でも無信教の日本の子達は、その機会がなかなか無い」
「ああ。それにこれは、最近子を叱れない親が増えている要因でもあると俺は思う」
「それはどういう事何だ？」
「昨日のお前と一緒だよ」
「それはどういう事何だ？」
皮肉交じりの言葉に、智代はまったく同じ台詞をムッとして繰り

返した。
「子供が悪い事をしても、それが何故悪いのか親もよく解ってないし、だから説明も出来ない。それでただ『とにかく悪いんだ』と言って感情的に怒っても、子供は怯えるか反発するだけだ。でも、宗教には神とか仏と言った人間より偉い存在が居て、悪い事をすると罰が与えられる」
「そんなの、ただの方便じゃないか」
「そう、とりあえずはそれでいいんだ。神様でなくてもいい。『自分の嫌な事は人にもしてはいけない』とかな。要は子供がその時納得出来る理由を与えてやる事が大切なんだ。本当にそれが正しいのかどうかは、大人になってから考えさせればいい」
「……」
智代は、無言で俺を凝視していた。
先程のあどけない少女の顔で。
くすぐったくなって、あさってを見ながら俺の方から話を進める。
「そして、この国が心を忘れたもう一つの理由。それは時代が変わり、共働きや片親が増え、少子化や核家族化が進み、“子供を育てられる人間が、身近に居なくなった事”だ」
「！！」
再び智代が驚愕し息を呑む。
ただそれは先程の物とは違う、どこか哀し気で、怯えている様にも見えた。
一瞬、続けるか躊躇う。
しかし、彼女の事をより深く知る為に、あえて切り込む事を決断する。
これまでに築けた絆を信じて……。
「本来、子供の一番の教育者は親の筈だろ?そして昔はおじいちゃんやおばあちゃん、年の離れた兄弟なんかも居て家族が多かったから誰かが面倒を見られた。隣人同士の結びつきも強く、子供は地域全体で育てていた様な物だった。だから、学校でわざわざ道徳に

時間をさく必要性が薄かったんだろう。でも、今の子は下手すると本当に独りぼっちだ。親にも、地域にも、学校にも育てられず、心を知らずに大人になった子は一体どうなる？」

「……」

智代は俯いて表情を隠したまま、俺の問いに答えようとはしなかった。

ただ、ややあってから顔を上げ、心底感心した様に言った。

「やっぱり、オーキは凄いな……そんな事まで考えているとは、正直思わなかった」

精一杯の、哀しい笑顔で……。

4月11日：強力！若本！！

「知識はあくまで道具でしかない。しかしそれを正しく理解し、使う為の心や精神を育てるシステムが、今のこの国には欠けているんだ。その一方で、ケータイやインターネットの普及によって、今の子供達はより早い時期から有象無象の情報に触れる機会が多くなってきている。それ一つとっても、憂慮すべき事だろう？国も、そして国民一人一人も“教育”についてもっと真剣に考え、省みるべき時にきているんだと思うんだ」

チャイムが鳴った事もあり、俺はそう結論付けて一先ず話を終えた。

「それが……お前が世界を変えたい理由なんだな……」

智代は遠くを向いたまま、どこか寂しそうに言った。

俺の話の何かが彼女の心に触れた事は確かだろう。

それが何なのかは、まだ朧気にしか見えてはこないが……。

「まあ、それだけじゃないけどな……でも、“教育”の先に“未来”が在る以上、まずすべきは、すでに時代遅れとなった“教育”の変革だろうな」

「“未来”……」

どこか心ここに在らずといった様につぶやく。

……大丈夫か？

少し不安になってきた。

「さて、そろそろ行くか」

そう促して、俺は歩き出す。

五限目の開始まで多少間があるとは言え、それなりに距離も有る。

もう戻った方が良いだろう。

「ど、どこにだ？」

智代が慌てて訊き返しきたので、立ち止まって振り返る。

どこにって……？

冗談かとも思ったが、俺を見つめる表情は真剣、と言うより必死その物だった。

まるで、親に置いて行かれそうな、子供の様に……。

「……ほら、いくぞ」

笑って見せて片手で促しながら背を向ける。

『未来へ』

なんて台詞も浮かんだが、さすがに気障だろう。

「あっ……授業か……」

智代は独り言の様に言って、小走りで距離を詰め、俺のすぐ後ろを付いて来た。

とりあえずは平気そうか……。

ホッとしつつ、彼女の存在を背に感じながら屋上を後にし、階段を下りていく。

「なあ……オーキ」

「ん？」

足を止める事無く、智代の呼びかけに短く答える。

すると、息を飲んで背後の気配が立ち止まった。

「……すまない……」

突然の謝辞に、俺も階段の途中で再び立ち止まり振り返る。

「何だよいきなり？」

「相談に乗ってやると言いながら、私はほとんど何も答えられなかった……正直、お前の話には、とてもついていけなかったんだ……」

横を向いて俯き、悔しそうに唇を噛む。

ひょっとして途中から様子がおかしかったのは、それを気に病んでたのか？

「……つまんなかったか？俺の話」

「そんな事は無い！むしろ、凄く興味深かったし、色々と納得出来る事も多かった。でも、だからこそ、尚更自分が情けなく思う。私は不満に思うことはあっても、お前の様にそこまで深く考えた事

はなかったんだ……」
「……そっか……じゃあ、良かったらまた今度も聞いてくれ」
驚いた顔が上がる。
「良いのか？私ではちゃんとしたアドバイスは、出来そうも無いと言ってるんだぞ？」
「そんな物、期待して無いっての。こういう話をすると、大抵の奴は『それが現実なんだから仕方が無い』とか『こんな所で言っても意味が無い』とか、体のいい事を言って逃げるんだ。でも、お前はちゃんと最後まで聞いてくれたし、自分なりの意見も言ってたじゃないか。それで十分だ。『悩みを人に話すだけでも楽になる』って、言ってたのはお前だろ？」
「……でも私は……お前の言う『心がちゃんと育っていない人間』だ……お前も知ってるだろ？……私がずっと荒れていた事を……」
ああ、なるほど。コイツが気にしていたのはソレか……。
どうやら俺が思っている以上に、昔の事を気にしている様だ。
“伝説”にまでなってるってのに……。
まあ、初めから望んでいた物じゃないから、誇る気も無いんだろうが、まったくの後悔しかないとしたら、それも寂しい気がした。
「お前、バカだろ？」
だからあえて鼻で笑って言ってやる。
これにはさすがに心外だったのだろう、智代はムッとして不貞腐れ始めた。
「バカって言う事ないだろ！？確かにお前程頭は良くは無いが、私だってこれでも頑張ってるんだ！」
「そうだ。お前はお前なりに頑張ってきたんだろ？荒れてた頃からずっと」
「いや、荒れてた頃は、ただ自分の嫌な事から逃げ回っていただけなんだ……」
「でもそれが、お前なりの“足掻き”だったんだろ？確かに褒められた事じゃないし、とばっちり受けた連中からすりゃあイイ迷惑

だったろうさ。でもお前は、どうしていいのか分からないなりに、何かを探してたんだろ？何かを変えたかったんだろ？だからずっと独りでも戦い続けて来たんじゃないのか？」

「……！！」

そうだ……ただ逃げ回っていただけだなんて言われたくない。

だって俺が最初に興味を持ったのは、荒れてた頃の『坂上智代』なんだ。

ずっと会いたいと思っていたのは、俺の見ている物と同じかもしれない世界の中で、足掻いていた『坂上智代』なんだ。

それが例え目をそむけ忘れてしまいたい程辛く苦い日々だったとしても。

ならば尚更、“無駄だった”で終わらせて欲しくはない。

「それにな。荒れるのは心が在る証拠だ」

「心が在る証拠？」

「そうだ。心の無い奴が荒れたりしないだろ？まず感じる心がなきゃ、荒れもしないんだ。でも、お前には感受性がある。ちゃんと色んな事を感じ取れる心がな。むしろ人よりずっと強いんじゃないか？」

「感受性……？う、うん。これでも繊細で、傷つきやすいんだ！」

そう言いながら何故か少し誇らし気だった。

まあ、可愛いので良しとしよう。

「そもそも俺が、まったく話の解らない人間に話すと思うか？“お前なら”って思ったからだ。例え今は解らなくとも、お前ならいつか解ってくれると見込んだから話したんだ。だからな、智代。もっともっと勉強しろ。学校の勉強だけでなく、色んな事を、見て、聴いて、感じて、考えて、学んでいけ。生徒会長になるんだしな」

「オーキ……」

俺を見つめる瞳が潤んでいく。

しかし一度閉じられ、再び開かれたそれには、いつも以上に強く気高い光が宿っていた。

「うん！そうだな！私はまだ、お前の言う学校の勉強すらやっと始めたばかりなんだ。今はついていけなくて当然だ。でもなオーキ、いつか必ずお前に追い着いてみせる！お前の居る“高み”にだ！！」

堂々と胸を張り、彼女はそう宣言した。

真っ直ぐに俺を見据え、挑む様に。

ゾクリと背筋に歓喜が走り、熱い想いと切なさがせめぎ合う。

あの坂上智代と『好敵手』になれた喜びと、その誇り高く健気な少女を抱きしめてやりたくなる衝動。

ああっ、本当に凄いな智代は……色々堪らなくなる。

女性として成熟しつつある均整のとれた容姿に、無限とも思える才能を秘めた身体。

素直で純真無垢で、でも負けず嫌いで強くあろうとする発展途上の精神。

憧憬、征服欲、保護欲、愛欲色んな感情が入り混じり、せめぎ合い、一度理性のタガが外れたら、自分でもどうなるか判らない。

だから俺は……。

「ああ……それでこそ、俺が見込んだ男だ」

心の平静を保つべく、そんな軽口をさりげなく言いながら、踵を返し歩きだす。

「うん……ん？待て！私は女だー！！」

そして数瞬の間を置いて、ようやく気付いた彼女が怒りだすのと同時に、ニヤニヤしながら逃げる様に階段を駆け下りる。

しかし、俺は失念していた。

クマとか猛獣の前からいきなり走って逃げるのは、タブーである事を。

「逃がさん！」

背後に目が有ったのなら、彼女の瞳が獲物を狙うハンターの如く光ったのを目撃した事だろう。

二年の教室が在る二階に俺が降り立つや否や、智代は階段の中頃から、樹上から獲物に襲い掛かる虎さながらにダイブして来たのだ。

「うおっとっと！！」
いきなり背中に圧し掛かられ、つんのめって危うく前に倒れそうになり、そのまま廊下まで踏鞴を踏んで何とか体勢を立て直す。
「何すんだよ！？」
おんぶの様なやや前傾姿勢で、背中に彼女を乗っけたまま抗議する。
「私は女だ！」
いや、普通の女の子は飛び掛って来ないからな……。
「ああ、そうだな。立派な物も付いてるしな」
“逆に意識させてやれば、自分から降りるだろう”。
そう高をくくての発言だったのだが、何故か首に回された両腕は更に深く肩まで差し込まれ、より一層ソレを強調するかの様に身体を密着させてきた。
「スケベ！お前はパンツだけでなく、オッパイも好きなのか？」
そしてとどめに、酷く挑発的な質問を耳元で囁かれる。
コイツの鈴の音の様な可憐な声で、“パンツ”とか“オッパイ”とか聴かされたら、もうそれだけで思考力大幅ダウンだ。
ここが人通りのある廊下でなければ、俺も野獣と化していたかもしれない。
てか、おもいっきり人に見られてるって！同級生が見てるって！
別の意味で堪らないだろ！
「嫌いな男なんて居無いだろ……それより、早く降りろよ。皆見てる」
「別にいいじゃないか……おんぶしてもらっているだけにしか見えない筈だ。お前が女の子をおんぶする事なんて、滅多にないんじゃないか？」
そりゃあ、小さな妹でも居なきゃ、女の子をしょっちゅうおんぶしてる奴なんて居ないだろうけどな。
「いやいや、俺が両足を抱えてないから、おんぶは成立してない。お前がぶら下ってるだけだ」

てか、男女が理由も無くおんぶしてる時点で十分注目の的だからな。

「じゃあ、私の脚も抱えるか？」

何！？いいのか！？

芸術的なまでの美しさと、“死”すら予感させる破壊力を秘めた、まさに“人類の至宝”とも言うべきお御脚を、堂々と抱えていい！？

それは俺の欲望的にはたいへん嬉しい申し出だが……。

「いや、そんな短いスカートで脚広げたら、後ろからパンツ見えちゃうんじゃないか？」

「H！さっきアレだけ見たのに、お前はまだパンツが見たいのか？」

「いや、俺は忠告してやっただけだろうが……」

もちろん何度だって見たいが……。

「冗談だ。オーキはHだけど、すごく優しい奴だからな。すごくHだけどな」

頼むから、嬉しそうに耳元でHを連呼しないでくれ……。

てか、そのHな男に後ろから抱き着いて身体を密着させてるお前は何なんだ？

ああっ、いや、まず落ち着け俺！

パニクッて心の声と、口に出してる言葉の区別がよくついて無い。

「なあ、オーキ……オーキの背中は広いな……」

などと酷く動揺している俺に対し、智代はきゅっと更に腕を力を込め、俺の首筋に自分の顔を埋めるようにしながら、うっとりとした声でつぶやいてきた。

すでに早鐘の様だった心拍数が更に跳ね上がり、内心悲鳴を挙げそうになる。

しかし背中越しに絶対ソレを聴いている筈の智代は、まったくお構いなしだ。

「オーキの背中は温かくて、広くて、大きいな……ん？オーキの背中が大きい？フフッ、オーキの背中はオーキいなぁ！」

俺の名前ネタに気付き、ツボに入ったらしい。
いたくご満悦のようだ。
まったく……本当に可愛くて仕方無い奴だ……。
……って、ヤベッ！俺まで“二人の世界”に浸ってた！！
てか、もうウチのクラスの前じゃん！！
「お、おい、智代。そろそろ……」
「チョット、何よその子？」
俺が智代を促そうとしたのとほぼ同時に、後ろから聞き覚えのある声に尋問される。
恐る恐るやや半身になって後方を確認すると、そこには腰に手を当て白眼を向けてくる杉坂と、その横で不安そうに俺と智代を見ている仁科の姿があった。
うわっ……最悪の“お約束”だ……！
「どうしたの川上くん？その子、具合でも悪いの？」
「あ、ああ。なんか調子悪いみたいで、おぶってたんだ……なあ？」
心配そうな仁科の問いに、やや引きつりながら答え智代に同意を求める。
「うん！オーキにおんぶしてもらってたんだ！」
具合が悪いどころか、むしろ元気ハツラツで答えていた！
しかも、『オーキ』とか呼び捨てにしちゃうし……空気を読んでくれ……。
「おんぶって、さっきから見てたけど、その子が背中にぶら下ってる様にしか見えないんだけど？ちっとも具合悪そうじゃないし」
さすが杉坂だ。容赦なく痛い所を衝いてくる。
「いや、それは……あれだ。スカート短いから後ろから見えると思って、廊下に出てからは脚を下ろしてたんだ。俺程になると背中に乗っけてバランス取るだけで落ちない様にする事も可能だからな。なんなら、杉坂も試しにおんぶしてやろうか？」
「ど、どうして私がアンタにおんぶされなきゃなんないのよ！い

やらしい！」

意外？と純情なのか、流石の杉坂も頬を赤らめそっぽを向いた。

う～ん、意外と効果大なら、今後コイツにもこっち方面で迎撃していくか？

……やめておこう。エロネタは諸刃の刃だという事は痛感している筈だ。

これ以上せっかく築いてきた俺の紳士なイメージが崩れるのは好ましくない。

「とにかく『坂上』、元気になったんなら降りろ。ウチのクラス着いたし、もう時期チャイムなるぞ」

「え……！？ああ、うん、すまない。お前のクラスはCだったのか。私はB組だ。お隣だな」

何故か一瞬智代は驚いた顔をしたが、すぐに気を取り直した様に回した手を解いて俺の背中から降り、他愛無い偶然に無邪気な笑顔を見せた。

いや、俺と智代は大して背は変わらないから、真っ直ぐ立てばいつでも降ろせたんだろうが、彼女を乗せたままでは“大人の事情”でそれは不可能だった訳である。

「でも、どうせなら一緒のクラスが良かったな……そうしたら、もっと早くお前と出会えたし、何かと一緒に居られる時間も多かったのにな……」

「あ、ああ、まあな……んじゃな」

「うん、またな。オーキ」

頼む！頼むからそういう嬉しい事は、人の居ない所で言ってくれ！！

とことん空気を読まない智代の台詞に曖昧に返事をしつつ、俺は逃げ込むように教室に入って彼女と別れた。

その後、何となく隣の席の仁科とは目を合わせられず、互いにギクシャクした空気の中で授業を受けた事は言うまでも無いだろう。

放課後、俺は最寄の駅前商店街に在るゲームセンターに足を運んだ。

「お！」

店に入ってすぐの所にある新作の格ゲーの列に、よく知っている顔を見つける。

「なんだよ。良いのかよ部活サボって」

「おお、オーちゃん。いやあ、説明会終わって一段落ついたから来ちゃった」

寄っていき話しかけると、憎めない人のよさそうな笑みを浮かべ応えてくる。

コイツの名は『山崎パン』……いや『山崎（やまざき）　勤（つとむ）』

中肉中背の眼鏡で、一見平均的な“光坂男子高校生”に見えるこの男だが、実際は数多くの“伝説”を持つ侮れない男である。

『ネットゲームにハマリ、何日も仮病で学校を休んだあげく、ついに親にブチ切れられてＰ○２を二階の窓から投げ捨てられ、そのショックからか「旅に出る」と言って家出をし、一週間くらいネットカフェを転々としながらネトゲをし続け、気がついたら新しいゲーム機買えるくらい浪費していた』と言う熱い逸話こそ、その最たる物だろう。

他にも、『出席日数がマジでヤバク、三学期酷い風邪をひいても休めなかった』とか『自習中突然、「や～まざき一番♪で～んわは二番♪」と歌いだした』とか、とてもとても危険な香りのする男なのだ。

ちなみに『山崎パン』はただの仇名で、親御さんは普通のサラリーマンだ。

「『イムラー』と『ナカムー』も来てんのか？」

「いや、井村君は一緒だけど、中村君は部活あるって」
「ふうん……ああ、あっちイムラーがやってんのか」
画面に目を移すと、使用キャラとそのキャラの動きだけで誰がやっているか判ってしまった。
「よっ！」
「おう、オーちゃんも来たんか」
せっかくなので、対面に向かい対戦の合間に声をかけると、やはり眼鏡の山崎よりちょっとだけ知的っぽい男が顔をあげた。
『イムラー』こと『井村（いむら）　祥弘（よしひろ）』
彼もまた数々の武勇伝を持つ“生ける伝説”である。
……“ゲーマー”として！！
格ゲーではこの町最強かもしれない実力者で、去年流行した格ゲーでは、『ワンコインで2時間以上勝ち続け、ついには疲れて止めた』程である。
「……今日これやるの初めてか？」
「いや、部活帰りにちょこちょこやってたよ」
その言葉に少しだけ胸を撫で下ろす。
今チラッと見えた連勝数はすでに１０を超えていた。
動きの方も、いくら定番の格ゲーで前シリーズと左程差異は無いとは言え、今回から導入された新システムまですでに完璧に使いこなせていたのだ。
バンッ！！
また一人、井村に手も足も出ず敗れた強面が、機体を叩いて去って行く。
まあ、無理も無い。気持ちは痛いほど解る。
俺も井村には百回に一回くらいしか勝てないしな……。
どうしてこう、俺の周りには“化け物”じみた奴が多いんだろう？
「部活の方はいいのか？」
山崎と井村はパソコン部に所属していて、テニス部の中村もだが、新年度が始まり、部活説明会やら、新入生への対応やら、更には五

月に控える創立者祭での出し物やらで、暫くは忙しいと聞いていた。
「ん？ああ、今週いっぱいは割りと暇かな」
視線を画面から逸らす事無く、プレイを続けながら答える。
「今週って、今日明日しかねえじゃん……」
「ウチの部は普段堂々とゲームで遊んでるだけだから、こういう時に体裁を取り繕わんとマズイんじゃ！」
なるほど……物凄い説得力だ……。
「まっ、仕方ねえか……忙しそうな時期に、また部室に奇襲かけるから」
「来んでいい！」
ドガガガガガーン！！
つっこみと共に放った超必殺技で、続く相手にも苦も無く一本先取。
こりゃあ、この対戦もすぐに終わりそうだ。
こっちの列に並んでも、順番が回ってくるのは当分先だろう。
俺は“この町最強の男”に挑むべく、山崎の居る対面の列に並ぶ事にした。
井村の強さに戦意を喪失したのか、観ている奴らは多いが、並んでいるのは次の山崎の他は一人だけだった。
『井村』ＶＳ『山崎』
井村が使用するのは“主人公こそが最強”もはや格ゲーの代名詞とも言える道着に鉢巻のあのキャラである。
飛び道具、対空技、あらゆる技を備え、オーソドックスで使いやすい。
対して山崎が選んだのは、赤き暴風の異名を取る屈強なプロレスラー。
投げ技主体で飛び道具こそ持たないが、とにかく一撃の威力が半端無い。
二人とも“らしい”チョイスだ。
“この町最強の男”と“最も危険な男”の戦いが、今始まる！

先制したのは意外にも山崎だった。
井村のキャラが飛び込んできた所を、心憎い“ただのチョップ”で打ち落としたのだ。
え～？という井村の嫌そうな顔が目に浮かぶ。
いや、しかし、簡単そうにやってのけたが、一瞬でもタイミングがズレていたら、打ち負けて連続コンボを食らっていたのは山崎の方だ。
『山崎勤』アホだが、やはり侮れない男である。
元々、アホだが一度ハマルと妙な集中力を発揮する奴なのだ。
アホだがこのシリーズのやり込み度も半端無く、何よりこの一年、井村と最も多く戦ったのは間違いなく彼であろう。
二人が出会ったのは高校からと言うが、ゲーセンでも、部活中でも、そして互いの家でも、アホの様に対戦してきたのである。
身近にライバルが居て、常に切磋琢磨出来る環境と言う物は、どんなアホでも成長させると言う事だろう。
と、感心したのも束の間、一本目はあっさり井村が連続コンボで持っていった。
再び飛び込んで来た所を、調子に乗って再度打ち落とそうとして失敗し、「え～！」とか言ってる間に一方的にボコボコである。
アホだ。
アホ故に迂闊だ。
あの井村がまったく同じタイミングで飛び込んで来る筈も無かろうに。
そうこうしてる間に、二本目が始まる。
この戦いは、一進一退の白熱した物となった。
互いに大きな隙が無く、まとまったダメージを食らう事無く互いに半分近くまで体力バーを削りあう。
しかし一瞬の隙をつき、井村の連続コンボが叩き込まれる。
終わったか？
そう思われたが、かろうじて山崎の体力バーは数ミリ残っていた。

それを削るべく、容赦なく井村の超必殺技が放たれる！
と、その時、信じられない事が起こった！
ドカン！ドカン！ドゴゴゴゴゴーーーン！！
ありえない距離から山崎の放った起死回生の超必殺投げが何故か決まり、しかもその一撃で半分以上あった井村の体力バーをもっていったのだ。
二本目は山崎の勝ちだ。
「うお！！勝ちゃったよ！！」
やった本人が一番驚いていた。
この妙にリアルラックが高い所が、このアホの真の恐ろしさだろう。
互いに一本づつ取り合い、勝負は最終ラウンドに持ち越された。
実力は井村の方が上。
しかし山崎には、一撃必殺の破壊力と、リアルラックがある。
ひょっとしたら、ひょっとするかも……。
手に汗握る注目の第三ラウンドの開始がコールされた、まさにその時だった！
「こら！ゲームセンターへの出入りは、校則で禁止されている筈だ！」
突然背後から上がった凛とした声音とその内容に、俺以外のその場に居た者全てがギョッとして一斉に振り返る。
「……ほら、山ちゃん、始まってるぞ」
「えっ、ああ、うん」
「校則違反だと言ってるんだ。オーキ」
その気配は『モーゼ』の如く左右に分かれた野次馬の間を威風堂々と通って、呆気に取られていた山崎に集中する様促した俺の真後に立つと、今度は名指しで注意してきた。
てか、他にもウチの制服着た奴居るの、見えて無いのか？
「すいません先生」
振り返りもせず、棒読みで応える。

「先生じゃない。私だ」
「ああ、菅原先生？」
「私だと言ってるだろ！そもそも菅原先生は男じゃないか！」
「じゃあ、大上先生？」
「大上先生も男だ」
「なんだ、幸村先生か」
「幸村先生はおじいさんじゃないか！私だと言ってるだろ！！」
「うおっ！！」
もはや幸村先生は男じゃないのかと思った刹那、強引に振り向かされ、鼻の先まで迫ってきた彼女の顔に、思わず仰け反る。
「何だよ……坂上だったのか」
「だから私だと何度も言った筈だ……声で判らなかったのか？」
俺の空々しいすっとぼけた答えに、智代は眉を寄せ不機嫌さを顕わにした。
「ああ。男性教師かと思った」
しかし俺も折角の名勝負に水を注され、少々ムカッ腹が立っていた事もあり、腹いせに結構酷い事を言ってやる。
ちなみに、結局山崎は呆気に取られてる間に先制コンボを食らい、動揺を立て直す暇も無くやられてしまった。
「……性質の悪い冗談はよせと言ってるだろ？いくら何でも、女の子の声と、男の先生とを間違える筈無いじゃないか……」
そう言いながらも確信が無いのか、智代は不安気な表情で俯く。
「何だよ？お前自分の声聞いた事無いのか？」
「だ、だから、不安にさせる様な物言いは止めてくれ。女の子に対して悪趣味だぞ」
その表情に悪戯心を刺激され、更にそれを煽る。
そして丁度山崎の後の井村の対戦相手が使用しているキャラを目にし、タイミングを見計らって言い放った！
「坂上、お前の声は……こんな声だ！」
「ザイ〝ゴグラ〟ジャー！！」

ズーーーーーーーーン！！

野太くも味の有る悪役声が響き、智代はその場に崩れ落ちた。

4月11日：クマとだんごとライオンさん

「……嘘だ……いつもの冗談だと言ってくれオーキ！」
「ああ。冗談だから本気にするな……ほら、立てよ。皆見てる」
その血を吐くような悲痛な叫びに、さすがに可哀想になってすぐ様ネタをばらし手を差し伸べる。
周囲の目も有る事だし、このまま四つん這いで居させる訳にもいくまい。
「……」
しかし智代は下を向いたまま動こうとはしなかった。
長い髪で隠れてその表情は覗い知れないが……やっぱり怒ってるよな……。
「ほら、とりあえず外出よう。な？坂上」
俺もしゃがみこんでなるべく目線を近付け、その肩に手をかけ諭す。
「……酷いじゃないか……男みたいな声だなんて……あんまりだ……！」
ダメか……完全に拗ねてしまったらしく、一向に顔を上げてくれそうもない。
正攻法では時間がかかりそうだ。
止むを得ないか。
俺は顔を寄せ、智代の耳元で囁く。
「そんな格好してると、後ろからパンツ見えちゃうぞ」
「うわあ！！」
途端に上半身を跳ね上げながら、両手でスカートの上から尻を押さえ、そのまま隠す様に座り込んだ。
そしてギラリと背後を鬼の形相で睨みつけ、男達をヒイと怯ませる。
「冗談だ。さすがに見えてないから安心しろ」

「お・ま・え・はぁ……！！」

向き直った鬼が、怒りでプルプル震えだす。

それに対し、俺も片膝になり、瞬時にあらゆる攻撃に備え構える。

「どうして、いつもいつも私を苛めるんだーーー！！」

ぽかぽかぽか！

振り上げた両の拳から繰り出されたのは、もはや定番のぽかぽかパンチだった！

だが、それへの対処法も、当然用意してある。

俺は被弾覚悟で身体を寄せて距離を潰すと、左手で彼女の右手を掴みながら、右手を立て膝になった腰に回し、自分も立ち上がりながら引き寄せる。

「！！」

「行くぞ」

驚いてる間に釣られて立ち上る形になった彼女の背を、そのまま押して促し、立てた左手と片目を瞑った頷く仕草で「ごめん。そういう訳だから」と山崎に伝え、一先ず二人並んで店を出た。

「……苛めっ子め……」

ずっとムスッとしていた智代は、店から出るや否やさっそくぼやいてくる。

「だから悪かったって。でもな、お前だって皆がゲームやってるトコ邪魔したんだから悪いんだぞ」

「そんな事は知らない……私はただ校則違反を注意しに来ただけだ」

まったく悪びれた様子の無い智代に、ただただ嘆息するしかない。

「お前なあ……てか、何でゲーセンに来たんだ？お前は見回りでもしてんのか？」

「そんな訳ないだろ？偶然、前を歩いていたお前が、ここに入っ

て行くのを見ていたんだ」
またか……ここ最近、妙に遭遇率が高いが……。
「だったら、すぐ声かけりゃあいいだろ？」
店に入る前にでも。
「遠目から見た後ろ姿だけじゃ、お前だと確信が持てなかったんだ……そのYシャツ姿は多分お前だとは思ったが、クラスの友達と一緒に帰っていたから、確かめにも行けなかった……」
忘れている人の方が多いと思うが、俺はネクタイ嫌いなので基本冬服の時期でもYシャツで、ブレザーは寒い日のコートの下とかにしか着ない主義？だ。
てか、それよりも、
「はっ？何？友達待たせてんのか？」
俺は彼女への問いと同時に、慌てて背中に当てたままだった手を離し、店の前の道に視線を向けた。
しかし、それらしき人影は見当らず、少しホッとする。
「いや、それも悪いから、先に帰ってもらった」
「悪いって、わざわざ俺を注意する為に帰ってもらう事の方が悪いだろ？約束とか有ったんじゃないのか？そもそも、俺だと確信も無いのに……」
「私だって迷ったんだ……でも、友達も多分アレはお前だと言っていたし、行っていいとも言ってくれた」
う～ん……つまり傍から見てて気を使う程後ろ髪引かれてたって事か……。
「てか、俺の名前出したのか？」
「うん。坂のトコでお前を見つけて、知り合いが居たと言ったら、誰かと訊かれたんだ。それで、お前だと答えたら彼女達もお前を知っていた。名取はお前と一年生の時同じクラスだったそうだな？」
う～ん……つまり俺に逢いに行きたそうだったから、気を使ったって事か……絶対誤解されたじゃん！！
「ああ、居たな……あまり話した事無かったが……てか、そんな

前から後ろに居たのか？」
「うん。名取は一年生の時のお前の話を色々してくれた……お前はその頃から変わり者だったんだな」
嬉しそうに人を変人呼ばわりしてくる。
まったく、勝手ってに人を後ろでネタにしやがって……。
「お前だって面白いネタはいくらでも有るじゃんか」
「何の事だ？」
「学校一つ潰したとか」
「それのどこが面白いんだ！大体それは尾ひれが付き過ぎだ。学校一つ廃校になんて出来る筈無いだろ？たまたま色々な偶然が重なって、学級閉鎖になっただけだ」
俺も眉唾な噂だと信じちゃいなかったが……。
「学級閉鎖はマジなのかよ！やっぱ面白れえじゃん！」
「だ、だから、これのどこが面白んだ！？」
吹き出しながら感心した様に言ってやると、何故か智代は照れた様にそっぽを向いた。
「いやあ、いくら不良ばっかの学校だからって、同じクラスの連中で仲良くつるみ過ぎだろ」
「つっこむ所はソコなのか？……まったく、昨日の女剣士の時もそうだったが、普通は引く所だろ？」
「何だよ？自分がそんなに凄え事したとでも、思ってんのか？」
「お、思ってる訳無いだろ！自分でも馬鹿な事をしたと後悔しているんだ……」
「バーカ。十分凄えよ」
意地の悪い事を言って、自己否定させた所を、すかさず肯定してやる。
そしてキョトンとして無防備になった心に、刷り込む様に言い聞かせた。
「いくら雑魚とは言え、何十人もの男達を相手に負けなかったお前は十分凄い。でもな、世の中には上には上が居る。例えば、何十

万って敵軍の中をたった一人で駆け抜けたり、その大軍をたった一人で橋の前で釘付けにしたりな」

「そんな三国志の英雄みたいな事、出来る筈ないだろ！」

「おっ、知ってたか」

「うん。前に読んだ事がある」

「そうか。でも仮にお前が趙雲や張飛並に凄かったとしても、心が躍りこそすれ、引くなんてありえない」

「……」

そう、智代は凄い。

でもそれによって、こいつはずっと独りだった。

その表裏一体の自負と負い目。

それが恐らく無自覚な心の壁を作っている。

自分を“特別”だと思い込んでいる。

だからこそだ。

だからこそ、俺は何度でも智代に思い知らせてやらなきゃならない。

「智代、歴史を学べ。学校が教えてくれる年表じゃなく、先人達が成した数々の偉業と、その過程における苦悩と努力を知れ。それらと比べたら、お前がやってきた事なんて、全然大した事じゃ無い」

“特別”なのは、お前だけじゃないと。

「……当たり前だ。そんな偉人達と比べられても困る。私はただの女の子なんだからな」

智代は拗ねた様に言って、最後に冗談ぽく笑って見せた。

うん。それでいい。

「その、ただの繊細でとても傷付き易い女の子に、お前はあんな酷い事を言ったんだ……」

て、ここで蒸し返された！

「……てか、今からでも友達追いかけたらどうだ？間に合うかもよ？」

「誤魔化すな！凄くショックだったんだぞ……男みたいな、それ

もよりによってあんな悪者みたいな声だなんて言われて……本当にそうなのかと不安になったじゃないか」

ええ。確かにあの方の声は最高の悪役声です。

「だから悪かったって……。そうだ。何かゲームでもやるか？奢ってやるよ」

「いらない。ゲームにはあまり興味が無いんだ。そもそも、注意しに来た私が中でゲームしていたら、ミイラ取りがミイラになるじゃないか。……なるほど。それが狙いか？」

俺のあからさまな魂胆を看破してジト目を向けてくる。

「可憐な少女を男声呼ばわりしたあげく、校則違反の共犯にしたてあげるつもりだったのか？本当に悪い男だ」

さらに自分で可憐な少女とか言ったあげく、ここぞとばかりになじってくる。

マズイな……何か突破口を見つけねば……。

「可憐か？」

「可憐だ！何か文句でもあるのか？」

「いや、まあ、可憐だな。声も可憐な女の子らしい声だから安心しろ」

「う、うん。可憐なんだ……！本当にそう思ってくれているのか？」

智代は意地を張った様に押し通しながらも、それを素直に認めてやると、今度は急にしおらしくなって上目使いで訊いてくる。

ああっ、本当に可憐だ……。

「あ、ああ。お前は見た目も声も中身も可愛いから安心しろ」

て、何言ってんだ俺は！？

不意打ち気味なその仕草と、思わず口走ってしまった本音に照れて視線をそむける。

「そ、そうか……例え私の機嫌を取る為のお世辞だったとしても、そう言って貰えるのはやはり嬉しいな……」

智代もはにかみながら頬を染めて俯いた。

甘ったるくも気まずい雰囲気。
何とか機嫌は直った様だが、今度はこの空気を何とかしたい……。
そう思いながら俺の目に入ったのは、店頭のクレーンゲームだった。
「じゃあ、クレーンゲームなんかどうだ？これなら女の子も結構やってるし、店の外にあるからセーフだろ？ほら、動物のヌイグルミとかあるぞ」
わざとらしく言いながら台の前に立ち、早速取りやすそうな物に目星をつけ始める。
「クレーンゲームか……確かに女の子もやっているが、欲しい物がなかなか取れないじゃないか……お店で買う方が、ずっと安く済むと思う」
しかし智代は、脈はありそうだがイマイチ気が乗らない様だった。
確かにクレーンゲームは取りやすい物を狙っていくのがセオリーであり、いくら欲しいからと言って取り辛い物や物理的に無理な物に手を出せば、たちまち散財に繋がる。
恐らく彼女も、それを経験した口なのだろう。
「それよりも、私はアレをやってみたいんだが……」
どこか恥ずかしそうに言いながら、彼女はクレーンゲームとは反対側を見つめていた。
「うっ……！」
その視線を辿って思わず唸る。
そこに置いてあったのは、いわゆる“プリクラ”だったのだ。
そして、それをやってみたいとはつまり……。
ピロリーン
「……どうしてクレーンゲームにお金を入れるんだ？」
問答無用でコインを投入した俺に、再び眉を寄せ抑揚の無い声で訊ねてくる。
「何となくだ。ほら、このライオンとかゾウとか取りやすそうだぞ？」

「私はプリントシール機がやってみたいんだ……女の子達がやっているのをよく見かけていて、前から一度やってみたいと思っていたんだ……」
「……やった事無いのか？」
「無い……」
まあ、ずっと友達居なかったみたいだしな……。
「じ、じゃあ、クラスの友達とやったらいいんじゃないか？名取とか」
「お前は、私とやるのがそんなに嫌なのか？さっき可愛いって言ってくれたじゃないか……アレは嘘だったのか？」
「いや、お前とやるのが嫌なんじゃなくて、プリクラ自体やるのが恥ずいんだ！前に一度やってから、もう懲り懲りなんだよ……」
すっかり拗ねてしまった智代に、何とか分かって貰おうと弁明を試みる。
しかしそれは、薮蛇だった。
「前に一度って事は、お前はやった事があるのか？」
「あ、ああ。だからもう嫌なんだ」
「誰とだ……？それだけ恥ずかしがるって事は、男同士でじゃ無いだろ？」
うっ、鋭い！
いや、男同士でプリクラと言うのも十分恥ずいが、確かにネタとして話せなくもない。
「別にいいだろ誰とでも？中学の頃の話だし……」
「……ひょっとして……恋人か？」
何故そっちに行く！？
コイツも一応女の子だから、そういう話に興味があっても変ではないが……。
「違うって……彼女なんか居た事ねえし……」
「と言う事は、今も居ないんだな？なら、別に私とやっても構わないじゃないか」

どこかホッとした様子で智代は、嬉しそうに話を振り出しに戻す。
「だから、恥ずかしいんだって……」
「どうして？あっ、さてはHな事でもしたんだろ？だから恥ずかしいんだな」
「んな訳ねえだろ？言っておくが、俺は人前ではそういう事はしないんだって」
「“俺は”って事は、まさかHな事をされたって事か？」
くっ！
今日の智代はいつにも増して鋭かった。
そしてこちらの動揺を見てとったか、疑惑の視線を向けたまま、ジリジリと詰め寄ってくる。
「どうなんだ？女の子に何をされたんだ？」
「別に大した事じゃないって」
「なら、話してくれてもいいじゃないか。お前は女の子に、一体何をさせたんだ？」
いつの間にか“させた”になってるし！
俺の身体はすでにクレーンゲームの台に密着していて、仰け反った上半身もガラス面に張り付いてこれ以上の逃げ場は無い。
にも拘らず、智代は少しずつその可憐な顔を近づけてくる。
マズイ……！
「腕でも組んだのか？」
このままでは……！
「それとも……キス……されたとか？」
前方に活路を見出したくなる！！
「わかった！Hな事でも何でもしてやるから」
「だ、誰がHな事をして欲しいなんて言った！！私がやりたいのは、あくまでプリントゲーム機であって、お前とHな事をしたい訳じゃないんだ！……でも、お前がどうしてもと言うなら、腕を組むくらいなら考えてやってもいい……」
いいんだ……。

「と、とにかく、クレーンをやってからにしよう。金もったいないし」
「まったく……仕方の無い奴だな」
それはお前だって……。
俺は動揺を抑えるべく、台の方に向き直って気持ちを切り替え様とした。
しかし智代は何を考えているのか、わざわざ俺の肩に手を置き、真後ろから覗き込む様にして俺のプレイを見ようとしてくる。
当然もう集中どころではない。
てか当たってるって！
背中にふにふにした物が当たっていて、そこに全神経が持ってかれるって！！
「……お、お前やってみろよ。これはやった事あるんだろ？」
凶悪なそのプレッシャーに敗北した俺は、攻守交替を申し出た。
「ん？やった事はあるが、あまり巧くは無いんだ。それに、お前のお金じゃないか。私がやるのも悪いだろ？」
「まあまあ、元々奢るつもりだったし」
俺がレバーから手を離して上体を起こすと、彼女は自然と一歩下がって離れる。
その瞬間にすばやく身体の位置を入れ替え、背中を押して促す。
「すぐ近くのライオンとか、真ん中のゾウとかが取りやすそうだぞ」
「うん……」
生返事で頷きながら智代はクレーンを横軸に動かしていく。
だがそれは、ライオンの位置を通り過ぎ、ゾウの座標でも止まる事無く、そのまま恐らく稼動域限界まで行って止まる。
「……一番端までいかないじゃないか……」
「いや、そりゃあな……」
ぼやきながら智代は縦軸にクレーンを進めて中頃で止め、下がったアームは折り重なった人形の上をかすめて空を掴んだ。

「……やっぱりダメか……」
「……」
ピロリーン
落胆した彼女を尻目に、俺は無言で次の百円玉を投入する。
「どうしてお金を入れるんだ？続けるとは言って無いだろ？」
「まあ、いいから。やってみ」
「……」
渋々言った風に智代は再びクレーンを操作していく。
そして一度目とまったく変わらない所で空を切り、クレーンは戻って行く。
それで彼女が狙っている物が何なのか確信を得た。
「……ほらな……ダメなんだ……」
「どうしてもクマが欲しいのか？」
「う、うん！」
やはり智代が狙っていたのは、アームの下にあった人形では無く、そのすぐ横の壁際に置いてあった茶色いクマだった。
残念だが、アレは恐らくディスプレイ用で取るのは無理だ。
意外と人気なのか、単に初めから数が少ないのか、ざっと見た所他にクマは無い。
さすがにこりゃ無理か……？
いや、待てよ……。
「でも、かすりもしないから、諦めるしか無さそうだな……」
「アレ、クマじゃないか？ゾウとか何か赤い奴の下にある茶色いの」
「えっ？どこだ！？」
食い付く様に俺の指に顔を寄せ、その先に視線を向ける。
「ん～？クマ……なのか？」
眉を寄せ目を細めながらも、智代にはやや奥にあるそれを判別出来ない様だった。
無理もない。動物の人形は色と頭と尻尾以外、ほぼ同じ形をして

いる。
その肝心の頭が他の人形によって埋れてしまっていて、見えている足先の色で判別するしかないのだ。
一応、黄色いライオン、水色のゾウ、ピンクのウサギ、赤い謎の丸い物体といった風に色別になってはいるが、色が絶対被っていないという保障は無い。
……てか、あの目だけ付いてる赤いスライムみたいのはなんだ！？
「まあ、とりあえず、上のをどかしてみよう」
「う、うん。頼む」
再び智代と位置を替わりつつ、俺は五百円を投入した。
一回百円だが、五百円だと一回分増えて、六回出来るのだ。
まずは一番上のゾウを狙ってアームを動かしていく。
まあ、逆さになってはいるが、ほぼ正面を向いているので取り易いだろう。
セオリーである首の辺りを狙い、狙い通りの場所をアームが掴んだ。
が、
「あっ……！」
持ち上がる際にするりと身体が抜けて、智代の声と同時に元の所に落ちてしまった。
どうやら思いの他身体が小さいのと、初めから重い頭を下にして傾いていたのが要因の様だ。
これは予想以上に難度が高いかもしれない。
もう一度ゾウを狙ってみる。
今度はやや手前で止め、重心であろう鼻の辺りを狙ってみた。
しかし、その長い鼻とデカイ耳に阻まれアームが下まで回らず、最後に鼻だけ掴んだが持ち上がる事もなくすり抜けてしまう。
「惜しいな……でも取れそうで取れない」
「……よし、ならこれだ」
三度目の挑戦。

「ん？少し行き過ぎてないか？」
「まあ、見てろ」
智代が疑問に思ったのも無理はない。
俺が止めた所は、あきらかにゾウのある軸と少しズレていたからだ。
だが、それも作戦の内である。
縦軸を先程と同じ鼻の軸で止め、開いたアームが降りていく。
「あっ！」
智代が瞳を輝かせながら声をあげた。
開いたアームの片側が、ギリギリ鼻と耳の間に降り、閉じて行く時に鼻の輪っかに引っ掛ったのだ。
そのまま鼻でぶら下がる様にしてゾウは持ち上がり、ブラブラと揺れながらゴールに向かってくる。
しかし、
「ああっ……！」
惜しくも手前で引っ掛りが取れて落ちてしまった。
「今のは凄く惜しかったな……残念だ」
「まあ、どかすのが目的だからな。よし、次だ」
「うん！頑張れオーキ！」
俺以上に落ち込む智代を励まし、その声援を受けながら次のターゲットに向かう。
次はいよいよ謎の赤くて半円形の物体だ。
実は先程から気になって仕方が無かった。
「あの赤くて丸いのは何だ？あんな動物いるのか？」
智代もさすがにこれには興味をそそられたらしい。
「ん～、ナマコ……？」
「ナマコは動物じゃないんじゃないか？」
「ラグビーボールっぽいのなら知ってるんだが……」
「ラグビーボール？ああ、昨日の……確か猪の仔だったな？あれは可愛かったな……出来れば私も触ってみたかった……」

「今度機会があったら色々試してみよう。餌付けとか」
「餌付けかぁ……私に出来るだろうか？」
「大丈夫だろ？あの『坂上智代』ですらカツサンドで餌付け出来たし」
「なっ！？人を食いしんぼうな動物みたいに言うなあーーー！！」
ぽかぽかぽかぽか！
「痛っ！冗談だって！わかった！俺が悪かったから！ほら、取れたし」
智代のぽかぽかぱんちを片手でガードしつつ、しゃがんで落ちてきた謎の物体を取り出して見せる。
話してる間にガッチリ真ん中を掴んだら、あっさりと取れてしまったのだ。
「どこかで見た気もするが……やはり手に取って見ても判らないな……こんな“お餅”みたいな生物居るんだろうか？」
「お餅……？ああ、“ダンゴ”か！」
「ダンゴ？お団子がどうかしたのか？」
「あったろ昔、『だんご大家族』って？」
『だんご大家族』俺が子供の頃に大ヒットした子供向けの歌である。
すでにブームは過ぎ去って大分経つが、知り合いに一人未だに歌い続けている熱狂的大ファンが居る為、俺に取っては割と身近な曲である。
「ああ……そういえば……そんな曲があったな……」
しかし、感慨深げにそう言った智代は、どこか寂しそうだった。
『誰もが知っていて、みんな笑顔になれる曲なんです』
そんな風にあの人は言っていたけど……。
「まあ、コイツは知り合いにでも渡すとしよう」
俺は智代の手にあった赤いだんごを掴むと、早々にカバンに放り込んだ。
「ほーら、ともちゃんの大好きなクマさんが出てきたぞー」

「と、ともちゃんて……変な呼び方はやめてくれ！」
そして妙な空気を払拭すべく、肩を抱いて台の方に促しながら、小さな子供に対して言う様に精一杯おどけてみせたのだが、おもいっきり引かれてしまった……。
柄にも無い事をやった恥ずかしさと、それが失策に終わったショックでかなりブルーだ。
そんな俺に、彼女は俯きながら恥ずかしそうに囁いた。
「……お前には『智代』ってちゃんと呼んでもらいたいんだ……」
後頭部を『智代のハイキック』で蹴られた様な衝撃が走る。
別に引かれた訳じゃなかった……？
てか、それって……！？
まさか……！？
「智代……！」
彼女をみつめ、万感の想いを込めて名を呼ぶ。
「なんだオーキ？」
微笑みながら、彼女も名を呼んでくれる。
「智代……」
ジッとみつめ、感無量の想いを込めて名を呼ぶ。
「だ、だから、何だオーキ？」
彼女も頬を染めながら名を呼んでくれる。
「智代……！」
真剣な眼差しで、感極まりそうになりながら名を呼ぶ！
「オ、オーキ……！？」
彼女も熱い眼差しで、切な気に名を呼んでくれる！
「……クマ、取ろう」
「……何だそれは？」
憮然とされた！！
いや、でも仕方無いだろ！？
そう、仕方無いんだ！！
少なくとも、今はまだその時期ではない。

雰囲気に流されて、取り返しのつかない事を口走る訳にいかないのだ。

「と、取らないのか？折角、上のどけたのに」

「それは取るつもりだが……バカ……」

ぼやきながらも智代はクレーンに向かい、当初の予定であるクマの攻略に取り掛かる。

その間に俺は、バクバクいってる心臓をなだめるべく、さりげなく後ろを向いて、こっそりと深呼吸をした。

「……どうだ？」

「うん……いけそうだ」

振り向き様に訊くと、いつもの自信に満ちた声と答えだった。

見るとアームがクマの頭と股の間にガッチリとハマッている。

元々アームの向きとほぼ平行になっていて、さほど難しくはなかったが、巧くないと言うより、取れない物を無理に取ろうとしたのが、苦手意識の原因なのだろう。

「よし！取れた！！」

アームが開かれ、クマが無事落ちたのを確認すると、喜々として取り出し口に手をつっこみ、念願のクマと対面するや否や、愛おしそうに頬ずりをする。

「ありがとう！！取れたのはお前のおかげだ！」

「うん。意外と早く取れて良かった」

さすがに何千円もかかったら洒落にならんからな……。

「一回分余ってしまったな……よし、今度はお前の欲しいやつを取ってやるぞ。どれがいい？」

いや、元々俺の金だし……まあ、ご機嫌みたいだからいいけど。

「じゃ、そこのライオンでいいや」

「ライオンさんだな！」

取れたてのクマを大事そうに片手で胸に抱えながら、さっそく台に向き直り獲物に狙いを定める。

そして見事にライオンの首根っこを掴み、一発で取ってのけた。

「約束通り取れたぞ！ライオンさんだ！」
得意気に胸を張り、取った獲物を差し出してくる。
きっと雄に餌を獲ってきた雌ライオンは、こんな感じなんだろう。
「ああ、サンキュ」
「うん。こちらこそ！」
ああっ、ダメだ！
自然と顔がニヤけてくる。
コイツと居ると、本当に楽しくて仕方が無い。
全てを忘れてしまいそうな程に……。

「じゃあ、そろそろ帰るか？」
クマにすっかり夢中になって、猫っ可愛がりしている少女に、頃合を見て帰宅を促す。
「えっ？そうだな……オーキの帰る道はどっちなんだ？」
「あっちだけど」
駅とは逆の、学校のある方を親指で指す。
智代の家までは知らないが、出身の中学から推測しても駅より遠いだろう。
「そうか……一緒なら途中まででもと思ったんだが、逆か……なら、仕方無い。ここでお別れだな……また明日な。オーキ」
「ああ、またな」
笑顔で別れ、智代は踵を返して歩き出す。
その背を見送りながら、彼女が相変わらずクマに夢中で振り返らない事を確信し。
俺は友の待つゲーセンへと還った。

4月11日：智代来来

何とか智代を撒いてゲーセンに戻ると、井村は負けたのか、山崎と並んで話していた。
「ああ、なんだ。戻って来たんだ」
「何とかな……」
「よく帰ってきたねえ。絶対帰って来ないと思ってたのに」
俺を見るなり意外なそうな顔をする二人に、溜息混じりで辟易した様に言うと、井村が含みの有る言い方をする。
まあ、誤解されんのも無理ないか。
「悪かったな山ちゃん。アイツが水注さしちまって」
「ああ、気にして無いけど。それより、オーちゃん坂上と付き合ってたんだ」
なぬ？
誤解はともかく、山崎も智代の事を知っていたのが意外である。
「いや、まだ彼女って訳じゃないけど……アイツの事知ってんの？」
「知ってるって言うか、俺ら一応坂上と同じクラスだし」
何ですと!?
代わりに井村が衝撃の事実を語ってくれた。
井村と山崎は共にB組で、顔を出した事もあるんだが……。
まあ、その時は、まさかあの『坂上智代』が居るなんて思いもよらなかったし、顔も知らなかったんだから気付く筈も無いが。
「あ～、そういやアイツもBとか言ってたな……」
「いや、彼女のクラスくらい覚えとこうよ……」
いや、彼女じゃないし！
とか、あまり過剰に否定しても返って怪しまれるので、ここはスルーしておく。
「てか、オーちゃんこそ、“あの坂上”といつの間に付き合いだ

したの？」
「いや、だから、まだ付き合ってないし、知り会って三日だって」
「「三日！？」」
俺の語った、俺自身も衝撃の事実に二人が同時に驚く。
そう、まだ出会って三日しか経ってないんだよな……。
俺の方は昔から意識してた事もあってか、物凄く気安く接してしまっているが……。
本来の俺なら、そして相手が『坂上智代』でなかったら、有り得ない事だ。
「はやっ！！いや、まあ、編入して来たばっかだけど、“あの坂上”を三日で落としたの！？」
「やっぱ、オーちゃん只者じゃ無いや……」
「てか、何か妙に人懐っこかったけど……？」
「人懐っこい？“あの坂上”が？」
また目を丸くされる。
いや、確かに誰に対してもあんな感じだったら少々、いや、かなり不安だが……。
「アイツって、クラスとかでどうなんだ？」
井村が連呼している“あの坂上”というフレーズも気にかかり、前々から知りたかった事を訊いてみる。
「ん～、つんつんまでいかないけど、余所余所しいと言うか、落ち着かないって感じかな？まあ、無理も無いけど。転校してきたばっかで、いっつも周り囲まれてれば」
「囲まれてる？何で？」
いや確かに、『美少女転校生』てだけで周囲に人が群がりそうではあるが、しかし、ウチは進学校だ。あまり他人に興味の無い連中が、ただ可愛いだけで群がるとも思えない。
「あれ？何？ひょっとして知らないで付き合ってんの？彼女スポーツ万能でさ。身体測定の５０メートル走やら砲丸投げやらで、軒並み物凄い記録叩き出した事で有名になって、運動系の部活から引

っ切り無しに勧誘されてるよ」
なるほどな。それは頷ける。
何か一つの事に打ち込めば、世界にだって通用するアスリートになれるだろう。
「ああ、身体能力が出鱈目なのは知ってる」
しかし……いきなり目立ってんのかアイツは……。
諸事情を考えるなら、悪戯に目立って欲しくはないのだが……。
まあ、そういう事を気にかける奴じゃ無いのは解っているけど……。
「おまけに成績の方も、この間の春の実力考査で学年４位だったし」
「４位!?アイツそんなに勉強してんのか……」
さすがにそれは予想外だ。
編入試験が難しい事は知っていたし、『頑張ったんだ!』とは聞いていたが……。
伊達に『勉強が好き』とか堂々と形の良い立派な胸張って言ってないな。
次に会ったら褒めてやるか。
今度こそ胸を、あっ、いや、頭を撫でてやって……。
「それであのルックスだし、“完璧超人”ぶりと編入生って物珍しさもあって、男女問わず常に４、５人は取り巻きがいる感じ。狙ってた奴は相当いるだろうな」
「そういや、中村君も坂上の事『萌え～っ!!』って言ってた」
『中村』は周囲の目を欺く為にテニス部に所属している長身の眼鏡で、本人はオタである事が俺ら以外にはバレてないと思っているナイスガイだ。
一年の時は同じクラスだった事もあってよく四人で遊んでいたが、中村はＥ組で部活も二人と違うし、今後あまり顔を合わす機会が無いかもしれない。
「その“完璧超人坂上”に速攻彼氏出来たって知ったら、がっか

りする奴はかなり多いと思うぞ」
「まあ、オーちゃんなら誰も文句言わないんじゃない？ちゃっかりいい女侍らしてそうだし」
「そうだな。少なくとも中村君とよりかはお似合いだな」
まあ、確かに中村君よりかは……そこは自信ある。
てかまあ……アイツはそこいらの人間にはまず手に負えないだろうけど……。
少なくとも、“完璧超人”だと思っている奴には……。
なるほどな。
何となく、アイツが俺に寄ってくる理由が判る気がした。
ぶっちゃけウザいんだろうな……表層だけしか見て無い輩にちやほやされんのが。
元々人と接する事自体、慣れてなさそうだし。
でもまあ、とりあえずは受け入れられてはいるのだから、善しとすべきか。
過去の事も今の所ばれてはいないんだろうし、一先ずは安心だろう。
しかし楽観は出来ない。
何しろアイツは有名人だ。ばれるのは時間の問題だと認識しておくべきだろう。
「「！！」」
それを如何に対処するかだな……。
「……オーちゃん……！」
過去を認めた上で、アイツの将来性を買って貰えれば……。
「……オーちゃん……！後ろ後ろ……！」
「ん？」
今後の事について物思いに耽っていると、何かに気付いた二人が小声で必死に俺にそれを伝えようとする。
ようやく二人の異変に気付いて振り返ると、そこには小さなクマの人形を抱きかかえた噂の完璧超人が青筋の浮かんだ笑顔で立って

いた。
まさに中国の諺で言う所の『曹操の噂をすると、曹操がやってくる』だろう。
「オーキ、どうしてゲームセンターに居るんだ?」
力んだ眉をピクピクさせながら、芝居がかった無邪気さで尋ねてくる。
いかんな……返答次第では噴火してまた面倒な事になりそうだ……。
「お、お前こそどうしたんだ?」
店内で騒がれると、また注目を集めてしまう。
ここは慎重に行こう。
「嫌な予感がしたから戻って来たんだ。お前の事だ、私と別れた後再びゲームセンターに入ってしまうんじゃないかと思ってな。“女の勘”と言う奴だ!」
『どうだ?女らしいだろう!!』と得意気に張られた胸が雄弁に語っていた。
いやでも、それにしては来るのにラグが有ったよな……?
「どの辺で気付いたんだ?」
「うん。駅まで行ったな……でも、あまりに気になったから確かめに戻って来たんだ。そうしたら、案の定お前が居た。どうだ?これで解っただろ?お前の魂胆なんて、私には見え見えだ!」
そこまで行っておいて、わざわざ戻って来たのか……。
なるほど、走って戻ってきたのか、彼女の額にはうっすらと雫が輝いている。
それに感動と言うか、呆れつつも可愛くて仕方が無く思えてしまう。
ああっ、中村君よ。確かに智代は“萌え~”だな。
いや最早、“萌え萌え~~~きゅん!”だ!!
「それで、お前はどうしてここに居るんだ?」
「どうしてって……“マグネットパワー”?」

「マグネットパワー？」
智代が怪訝な表情をするのも無理は無い。
何故なら……言った俺ですら意味不明だからだ！！
萌え萌え～とかトリップ気味な所に質問が来たから、何となく口から出てしまっただけだ。
いや、違うな……何か“大いなる意思”によって言わされた気がする……。
てか、大いなる意思はさておき、何かもっともらしい言い訳をせねば……。
「そうか！つまり“磁石の様に私とお前は引かれ合う”と言いたいんだな？」
えっ！？通じた！？
しかも好感触！？
俺の戯言を、智代は勝手にロマンチックで恥ずかしい感じに解釈して納得してくれた様だ。
まあ、とりあえず結果オーライか。
狙い通り“俺を出し抜いた優越感”を巧く引き出せたし、機嫌も直せた。
後は、このまま外に連れ出そう。
などと俺は何とかなった気でいたのだが……甘かった……。
「ま、まあ、そんな感じだ。だから、とりあえず外出よう。な？」
「そうか。やっぱりお前も私とプリントシール機がしたくて、ここで待って居てくれたんだな！」
「はっ！？」
しまったぁぁっ！！俺とした事が忘れてたぁぁっ！！！
勝利を確信した満面の笑みと共に切られた“ジョーカー”に、今度は俺が頭を抱えその場に崩れ落ちそうになる。
しかし俺には、それすらも許されてはいなかった。
「よし！そういう事ならさっそくやりに行こう！」
「ちょ、まっ、おい……！！」

すかさず右腕を掴まれ、俺はそのまま引きずられる様に連行されて行く。

助けて！！

堪らず俺は成り行きを傍観している山崎と井村に視線で助けを求めた。

だが、あろう事か二人は揃って視線を逸らし見なかった振りをする。

なんて薄情な！

負けて因縁をつけてきた強面から何度も助けてやったじゃないか！！

「待て！あいつらもウチの生徒だぞ！ほら、同じクラスなんだろ！？」

「ん？」

失意の俺はプライドを捨て、ついに仲間を売った……！！

振り返り二人を見て智代は歩みを止め、睨む様に眉を寄せ目を細め凝視する。

完璧超人の美しき眼光。

そのあまりの凄みに、二人はおろか周囲の野次馬達までもが立ち竦み息を飲む。

「ああ、お前達は確か……すまない。名前が出てこない」

その場に居た者が一斉にずっこけた！

ひでえ……まあ、まだ新学年が始まったばかりだし、俺もクラスの奴らの名前なんていちいち憶えちゃいないが……。

「そういえば、前もクラスでオーキと話していたな。友達か？すまないが、オーキを借りていくぞ」

ん？智代と出会ってから、アイツのクラスになんて行ったっけ？

智代の言葉に疑問を抱いた俺だったが、智代の申し出に対する二人の態度で、そんな瑣末な事は吹っ飛んだ。

「ええ。どうぞどうぞ！」

「そのままお持ち帰りでも全然構わないんで！」

この瞬間、俺と二人との友情は終わりを遂げた。
ああっ、しょせん男の友情も、儚い物だな……。
「それと、ゲームセンターへの立ち入りは校則違反だ。お前達もあまり来てはダメだぞ。判ったか？」
「「「はい！！」」」
智代のついでの様な説教に、何故か他校の生徒や一般客、さらに近くに居た店員までもが背筋を正し返事をしていた。
これが完璧超人の支配力だとでも言うのか！？
恐るべし完璧超人坂上智代……！！
「さ、行くぞ。オーキ」
「はい……」
もはや俺には抵抗する意思も無く、嬉しそうな智代に手を引かれるままに店を出た。

そして智代に妖しい個室に連れ込まれた俺は、陵辱の限りを尽くされていた……。
「なあオーキ、フレームはどれにする？」
「……じゃあ、これ……」
俺はほとんど無地のフレームを指差す。
「それは可愛くない……。うん、やっぱりこれにしよう！」
俺の意見を即却下して、智代は勝手にハートのフレームを選択して先に進めた！
決めてたんなら最初から訊くなよ……！！
そして彼女は、俺の右腕に自分の腕を絡め、抱き締める様にして身体を寄せてくる。
こ、これはまさかあの……『腕を組む』の体勢では！？
「Hなお前の為に、仕方が無いから腕を組んでやろう！特別だ！どうだ？嬉しいだろ？こんな美少女と腕が組めるなんて、お前にし

てみれば滅多に無い事じゃないか？光栄に思え！」

「う、うん……」

失意と緊張で思考力が既に無いに等しい俺は、素で頷いてしまう。

だって、やわらかいんだ！！

だって、あたたかいんだ！！

だって、いいにおいなんだ！！

だって、ふにふになんだ！！

だって、たまらないんだ！！

だって、俺にはもう……智代しか居ないんだ……！！

……あっ、一応まだ秋生さんとなべがいたか……。

「『うん』て……そ、そこはつっこむ所だろ？冗談だ……頷かれたら、余計に恥ずかしいじゃないか……でも、本当にそう思ってくれているなら凄く嬉しい……」

そう言いながら、智代は頬を染めてはにかみ俯く。

照れるぐらいなら言わんでくれ……！！

凶悪な可愛さに、右腕を包む快楽に、低く狭い天井を仰ぎながらこれに耐える。

恥ずかし過ぎる……でも気持ちいい……！！

ずっとこうしていたい……いや、でも……！！

羞恥と欲望が、欲望と理性が、脳内で果てしない激戦を繰り広げる。

落ち着け！

まずは落ち着こう俺！

このまま敗北を引きずり主導権を握られたままでは、どこに流されて行き着くか判らない。

そうだ！黙想だ！

こんな時の為に、アレを編み出した様な物じゃないか！

俺はいつもの様に右手に意識を集中させ瞳を閉じる。

黙想……

ああっ……やっぱりやわらかいな……何で女の子の身体はこうも柔らかくて心地良いんだろ……？それになんか……触れてるだけで癒される気がするな……

ああっ……ドキドキしてるな……やっぱコイツも、何だかんだで緊張してんのかな……？俺の方も凄い事になってるけどな……

ああっ……ホント良い匂いだな……シャンプーとか香水の匂いなのかな……？疎いからよくわかんねえや……でも昨日、俺の匂いも嫌いじゃないって言ってくれてたな……安心するとも……別になにもつけてないんだが……

ああっ……智代……智代……ああっ智代……智代……智代……智代……

……って、右腕抱きしめられてて集中なんて出来るかーーーー！！！

ダメだ……この状況で心を平静に保つのはとても無理だ。

俺の“精神的固有結界（はいいろのせかい）”が、こんな形で破られるとは……。

いや、ある意味凄い集中してる！！

今下見られたら、マジヤバイくらいに！！

もう、何か別の事を考えてないと、頭が智代で一杯になって理性が飛びそうだ！！

一先ず、“精神的固有結界”について考え気を紛らわせよう。

『集中するだけなら左手でもいいんじゃないか？』と思う人も居ると思うが、俺の場合は右手でなければダメなのだ。

そう、あの時光を掴んだ右手でなければ……。

“ある一連の儀式をトリガーにして、集中力を高める”つまり一

種の自己催眠、自己暗示をかけ能力を高める方法は、割と知られている。

例を挙げるなら、やはり『イチロー』だろう。

彼は打席に立つ時、毎回同じ動作をしている事は有名である。

それによって精神と肉体のスイッチを入れ、集中力を極限まで高めている訳だ。

俗に言う『ゾーン』の領域にまで。

野球で言う所の『ボールが止まって見える』だとか、サッカーで言う所の『その場所にボールが来る事がわかる』だとか、人によってはオカルトの類と思っているかもしれないが、それは本当の事だと思う。

俺の“精神的固有結界”もまた、“多分”それに近く、実際に似た様な経験をしているからだ。

“多分”なのは、何分超感覚的、精神的な物なので証明のし様が無いからである。

でもまあ、元々“ぽんこつ”とか“屑鉄”と評された才能しか持たない俺が、“ダイヤ”か“プラチナ”の智代の動きに着いていけるのだから“本物”と自負してもバチは当たるまい。

人間の能力に集中力が密接に関わっている事は、誰にだって解るだろう。

俺の場合、発動させるとまず感覚が研ぎ澄まされ、余分な物や音が聞こえなくなる。

代わりに洞察力が増し、身体的能力も多分底上げされている筈だ。

そして何より大きいのは、精神面の安定だろう。

どんな事にも動じず、どんな時にでも沈着冷静な判断が下せる事。

万事において、それに優る優位性は無く、またそれが揺るがぬ自信となる。

ただし、決して万能では無いのが悲しい所だ。

自己暗示をかけたとしても、集中力の深度はその時々で違うし、それはやっぱり“気分”に大きく左右されるっぽい。

つまり、ぶっちゃけやりたくない事を頑張ろうとしても続かないのだ。
てか、そもそも俺の奥の手なので、あまり普段からほいほい使いたくない。
まあ、気持ちを落ち着かせたり、切り替えたりする時にも軽く使うが……。
「オーキ、いつまで天井を見ているんだ？笑ってくれないと写せないじゃないか……」
やば、智代からクレームが来た。
よし！大分気持ちは落ち着いたな。
まあ、いくら相手が智代だからって、あんまテンパルな俺よ。
てか、一応可愛い女の子と腕組んだ事なら、結構あるじゃん。
相手がアイツだが……。
そういや、前の時も腕組まされたな……。
でもって、最後に……。
ちらりと智代の薄紅色の可憐な唇を意識する。
「ん？どうしたんだ？」
「ああ、いや……」
さすがにコイツは……例え冗談でもして来ないよな……？
実はさっき問い詰められた時、内心冷や冷や物だった。
てか、まさかアイツから既に聞かされてるってオチは無いよな？
証拠のシールは握られたままだし……クソッ、やはりあの時、多少無茶してでも取り返すべきだったか？
あの時の忘れられない記憶が蘇る。

アレは中三の卒業遠足、つまり学校行事として遊園地に行った時の事だった。
今にして思えば、最初から仕組まれていたのだろう。
行きのバスの中でやったゲームの罰ゲームで、前々から噂になっていた女子とプリクラを取る羽目になったのだ。

なんたって、高校入試も終わり、中学最後のクラスでの遠足である。

普段からテンション高目のアイツは、もう凄い事になっていた。

俺に抱きついてくるのは、別に普段からの事だったし。

最後に“不意打ち”を食らった時も、まあコイツなら有り得ると思っただけだった。

ホッペに軽くだったしさ。

それだけなら、別に嬉し恥ずかしいだけの良い思い出だったと思う。

それがクラス中に公開され、その噂が学校中に広まるまでは……。

「オーキ、ちゃんと前を向いて笑ってくれ。それとも、ソッポを向いたまま写りたいのか？」

「別に俺は構わないから、さっさと撮って終わらせてくれ」

嫌な事を思い出した事もあり、智代の再三のクレームについ苛立ちぞんざいに答えてしまった。

「そんな言い方は無いだろ？……それとも、やっぱり私の様な可愛くない女と、一緒に撮るのは嫌なのか……？」

さすがにこれにムッとした智代は、俯いていじけはじめる。

まったく、俺も俺かもしれんが、コイツもしょうがない駄々っ子ぶりだな。

「だから……恥ずいんだって……それに元々俺は写真とか好きじゃ無いし……」

「写真が好きじゃない？どうして？お前は本当に変わってるな……大概の人はむしろ喜んで写りたがるのに……」

俺の言葉に、腑に落ちないって顔をされる。

まあ、そうだろう。一般的にはむしろ我先にと写りたがる輩の方が多いし、どんなに大人し目の子でも、写真にすら写りたくないって子は俺も聞いた事が無い。

でもなあ……俺はガキの頃から苦手だった。

いや、そもそも俺は……人に見られる事自体あまり好きでは無かったのだ。

「俺はお前みたいに、顔もスタイルも良くないからな……」

「えっ!?あ、いや、褒めてくれるのは嬉しいが……お前だって、見てくれが悪いと言う程じゃないだろ?」

「気を使わなくていいって……チビなのは俺が一番よく分かってる……」

いじけにはいじけで対抗してみた!

てか、完璧超人がいじけても、厭味にしか見えないと言う事を解らせてやる!!

「チビ?お前がか?そんな事は無いだろ?私とそう変わらないか、むしろ少しお前の方が高いくらいじゃないか?」

しかし智代は、本気で気付いていない様子でとぼけた事を言う。

「いや、だから、女のお前と同じくらいじゃ、男にしちゃ小さい方だろ?」

「ああ……そう言えばそうだな……」

ようやく納得した智代だったが、だがしかし、彼女はすぐに俺を見つめて優しく微笑むとこう言った。

「いいじゃないか。目線が近い方が、それだけすぐお前の顔を見られる」

「!!」

「それに、お前が小さいなんて、言われるまで本当に気にした事なんて無かったんだ。それは多分、普段のお前が堂々と胸を張って生きているからじゃないか?お前は見た目よりもずっと大きくて頼り甲斐のある男だ」

うおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!!

心の中で歓喜の雄叫びをあげる。

この感動を、何と表現したらいい!?

俺の語彙には最早『智代、結婚してくれ!!』しか残っていない。

あっ、いや、まだだ!俺のコンプレックスはまだまだこんな物じ

ゃない！！
「まあ、そう言ってくれるのは嬉しいけどな……実はな。身体測定あったろ？」
「ああ、先週あったな」
「去年測った時の俺の身長は１６５あったんだ。で、今年何センチだったと思う？」
さあ、驚愕の事実に恐れおののけ……！
「そうだな……変わらなかった……とか？」
やや躊躇いがちだったのは、俺に気を使ってくれたのだろう。
だが、真実はもっと残酷だ！
「ブー。正解は１６３センチだ……」
「縮んでるじゃないか！」
ほら、驚いた！まあ、驚かなかった奴は居ないが……。
「成長が止まったのなら分かるが、お年寄りでもないのにそんな事が有り得るのか？」
「俺だって目を疑ったさ……でも、紛れも無い事実だ……」
「測り間違いや、２センチくらいなら誤差の範囲じゃないのか？ほら、足のサイズでも朝と夜とでは違うとよく言うじゃないか！」
智代は表情を曇らせ、必死に俺を励まそうとしてくれていた。
でもなあ……。
「お前身長何センチだ？」
「１６１センチだ。まだお前の方が高いから安心しろ」
「来年には同じか、下手すりゃ抜かれているかもな……」
「し、心配するな！男子に比べて女の子の方が第二次成長の時期が早い分、成長が止まるのも早いんだ。現に私の身長は一年生の頃とあまり変わっていない。そ、それにまだ、お前だってこれから伸びるかもしれないじゃないか！一年で１０センチ以上伸びる男子も居る。お前だって、来年の今頃には１８０センチ近くまで伸びてるかもしれないぞ」
そう言ってくれた智代だったが、目が泳いでいた。

「……やっぱり背が高い男の方がいいのか……」
「そんな事は言ってないだろ？」
「それに、俺がまた2センチ縮むかもしれんし……」
「だ、だから、きっと何かの間違いだ！」
「……やっぱり、自分より背の低い男は嫌だよな……？」
「そ、それは……確かに恋人や夫より背が高いと女の子らしくないかもな……あっ、いや、そんな事は無いぞ！お、お前こそどうなんだ？やっぱり、自分より背の高い女の子は嫌か？」
ボソボソと本音を言った後、慌てて訊き返して誤魔化そうとする。
「ん～、てか、恋人とか云々の話以前の問題だろうな……何しろ、このまま毎年2センチづつ縮んだら、５年後には１０センチ、１０年後には２０センチ今より縮んでるんだ……２６歳で１４３、３６で１２３しか無くなるし、その後は……」
「こ、怖い事を言うな！そんなの、明らかに病気じゃないか……大丈夫だ！きっと色々な事が重なって、たまたま結果そうなっただけだ！悪い方に考えるな……でも、もし本当に心配なら、早めに病院に行って、調べた方がいいんじゃないか？」
「いいよ……どうせ奇病の類で不治の病だろうし……」
「だから、お前は絶対に大丈夫だって言ってるだろ！でもな。例え本当に病気だったとしても、私はお前を嫌いになったりはしないから安心しろ」
ああっ……！！！！
真っ暗闇の俺の心に光が差しこみ、彼女が背中に真っ白な翼の生えた天使に見えた。
思わずその場に座り込み、十字を切って祈りを捧げた後『智代、結婚してくれ！！』と叫びたくなる。
いや、しかしまだだ！本当の悪夢は、ここからなんだ！！
「ありがとな……マジで嬉しいよ……でもな……」
「な、なんだ？まだ何か有るのか？」
「ああ……俺さ……お前と違って……脚……短いだろ？」

自分で言ってて泣きそうになる。
「脚……？」
「お前の股下どこ？」
「H！どこを見てるんだ！」
俺の視線に、慌てて智代は絡めていない右手で抱えていたクマごとスカートを押さえた。
それは丁度、俺の腰くらいの高さだ。
ああっ、そのクマになりたい……。
「股下そこだろ？ほら、腰一つ分違う……」
「だ、だからどこを見ているんだ！……本当だ。短いな……」
もう一度怒ってから、間近に並ぶ俺の脚と自分の脚を見比べ本音をポロリ。
「あっ！いや、違うんだ！！だ、だから……べ、別にいいじゃないか。私はそんな事は気にしていないし、その事だってお前に言われなきゃ気がつかなかったんだ」
「でも……やっぱ、脚長い方が格好良いだろ？」
「だ、だから、私は気にしないって言ってるじゃないか！そうだ！クマさんだって、脚はあまり長くないじゃないか！ほら、見てみろ！」
そう言いながら、俺の前に先程取ったクマを持ってくる。
こ、こいつはさっき智代の……。
思わず左手を伸ばし、密着したであろう部分を何気なく撫でた後、自分の行為を恥じてあさってを向く。
「……いや、確かにたまにクマとかパンダみたいだと女子から言われた事はあるけど……」
自嘲を込めて何気なく言った事実だったのだが、智代は無垢な少女の様に瞳を輝かせた。
「うん！そうだ！似てるな！お前はクマさんみたいだ！クマさんみたいにカワイイ！」
「……いや、可愛いと言われてもな……せめて『マラドーナみた

い』と言ってくれ」
「『マラドーナ』？どこかで聞いた事あるな……誰なんだ？」
「昔の世界最高のサッカー選手だ」
「ああ！なるほど。ＴＶで視た記憶が有る」
「小学生の頃のサッカーのコーチに言われたんだ。『お前は、体形だけはマラドーナに似てるな』って……」
「ん？お前はサッカーをやっていたのか？」
「ああ、中学までな……言わなかったか？」
「うん。初耳だ」
「まあ、サッカーの話はいい。実は問題はここからなんだ」
彼女が俺の過去に興味を抱いて何かを訊いて来るより早く、すかさず話を本題に戻す。
「さっき身長が２センチ縮んだって言ったろ？」
「うん。言ってたな。それがどうかしたのか？」
「大有りだ。何しろ、座高は１センチ伸びていたんだからな……！！」
ズガガーン！！と落雷が落ちるイメージで言い放つ。
しかし、智代は事の重大さが解っていないのか、ただキョトンとするだけだった。
「……身長が縮んで座高が伸びたと言う事は……あっ！！」
ようやくあまりに残酷な現実に思い当たり、絶句したまま悲しそうに俺を見る。
「……俺の脚は……ただでさえ短い俺の脚は……」
「もういい！いいんだオーキ！解ったから！言ったらダメだ！！」
堪らず智代は俺の両肩を押さえる様にして、俺の言葉を止めようとする。
でも……俺はコイツに伝えなきゃならないんだ……！
俺の背負う、運命の過酷さを……！！
「３センチも縮んだんだーーー！！！」
ズガガーンと再び落雷が起こり、俺を直撃する。

「俺の脚は……10年で30センチ……20年後にはもう……ほとんど……！！」

「大丈夫だ！！大丈夫だから！！例え何があろうと……私はお前の味方だ！！」

智代は俺を強く抱きしめ、そう叫んだ。

それは……俺の心までも抱きしめてくれる様な、温かく力強い抱擁だった。

「智代……！！」

俺もまた、その背に手を回し、しかしそっと抱きしめる。

それはあまりに細くて華奢で、力を込めたら簡単に折れてしまいそうだったからだ。

なのに彼女は、まるで万力の様な力で俺の身体を締め付けてくる。

その痛みより、彼女自身の身体が壊れてしまうんじゃないかと心配で、俺は強く抱きしめ返す代わりに、頭や背中を優しく撫で愛しむ。

「ん……んん……オーキ……」

熱を帯び鼻にかかった吐息がもれる。

撫でてやったのが良かったのか、徐々に彼女の身体から強張りが消え、加減を覚えてきたのだろう、万力からゴムの様な弾力性のある締め付けへと変わる。

俺なら平気だが、普通の人間ならまだ痛いかもな。

まあ、もう少し経験を積めば、それもすぐに覚えるだろう。

「オーキ……やっぱりオーキは優しいな……」

智代は耳元で囁いてから、俺の肩に埋めていた顔を上げ潤んだ瞳で見つめてくる。

ああっ、ダメだもう……この気持ちを押さえ切れない。

いいじゃないかもう……きっと、どうにかなるさ……。

いや、きっと、どうにかしてみせる……！

だから……いいよな？

「智代……」

「オーキ……」

彼女を知ってから三年間想い続けた気持ち……。

彼女に出会ってから、育んだ今の気持ち……。

そして彼女の未来に対する想い……。

ありったけの想いを込めて……。

「俺が『クマ』なら……お前は『クマ代』だな」

「……訳がわからない……！！」

伝わらなかったぁぁぁぁぁぁ！！

4月11日：智代来来（後書き）

実は2話くらいで終わるだろうと思ってた放課後編が、エライ膨らんでしまって……（お

次で長い11日は終わると思います。

そして12日には、ついにあのキャラが……！！

4月11日：超時空要塞

「それに私が『クマ代』なら、お前は『クマキ』じゃないか！」

俺の決死の告白を「訳が解らない」とバッサリ斬っておきながら、智代も似たような事を言い始める。

ひょっとして……“そこ”が不満だったのか？

いや、まあ、多分俺の真意は伝わってないんだろうけど……。

やはり、どんなに“気持ち”を込めても、あまりに遠回し過ぎるとダメな様だ。

そして俺は、伝わらなかった事にむしろホッとしている。

いや、“気持ち”は“本気”だった。

彼女が言ってくれた事、してくれた事は、それぐらい嬉しかったんだ。

でもだからこそ、その場の雰囲気に流されて迂闊な事を言うべきではなかろう。

それに……彼女に“その気”があるかまでは判らないし。

いや、好意を持ってくれているのは間違い無いだろう。

が……それはただの“友情”で、さっきの言動もただの同情や雰囲気に流されての、あまり深い意味の無い物だったのかもしれない。

そう、“アイツ”の様に……。

もちろん、例え友情であったとしても、それが愛情に昇華する可能性は十分有り得るだろうし、ちゃんとした告白がそのトリガーになる事もあるだろう。

しかし、告白によって男女の友情が壊れてしまう事もよくある話だ。

確かに智代と付き合えたら最高だろう。

ぶっちゃけ、色々凄い妄想をしたりも当然している。

でも俺はそれ以上に……見てみたいのだ。

彼女の行く末を。

行き着く未来を。
その為にも、未だ原石のコイツを磨いてみたい。
育ててみたいのだ。
まだまだ教えてやりたい事、伝えてやりたい事は山程ある。
出来得るのなら、俺の覚えた全てを……。
それにこいつは、『生徒会長』になるんだ。
恋人なんて作ってる場合では無かろう。
何より、俺自身の問題も有るしな……。
そういった諸々の状況を考えれば、やはり今は告白なんて出来るハズもないのだ……。
「うん……『クマキ』か……よし！この子の名前は『クマキ』にしよう！」
どうやら『クマキ』の響きを気に入ったらしく、智代は先程取ったヌイグルミの両脇を抱えて命名していた。
って、アレ？
「じゃあ、俺は……？」
「ん？何がだ？」
もう俺の事はどうでもいいらしい……。
さっきはあんなに強く抱きしめ合ったのに……。
今は離れてしまった身体がとても冷たく寂しい……。
「ああ、すまない……さあ、撮ろう！」
所在無さ気にしていると、ようやく思い出した様に再び腕を絡めてくる。
くっつかれたらくっつかれたで、やはり恥ずかしい。
さっきはあんなに強く抱きしめ合ったのに……。
そうだよ……抱きしめたんだ……あの坂上智代を……。
今更になって恥ずかしさが込み上げ、堪らず天井を睨む。
「オーキ、ほら、笑うんだ。どうしてまたソッポを向いてしまうんだ？」
「だから、やっぱこういうのは苦手なんだって……」

「もう、本当にオーキは照れ屋さんだな……あんなにHなクセに……」

「H言うな！」

まったく、そうやってからかうから余計恥ずかしくなるんだってのに……。

大体、そのHな男を個室に連れ込み、嬉しそうに腕を絡め抱きついてきたのは誰だ？

そんな可愛い顔をして、そんな悩ましい身体で……。

ああっ……何もかも考えずに抱き合えたなら、どんなにいいか……。

「ほぅら、いつもの様に笑ってくれ。でないと……こうだ！」

そう言いながら智代はクマキを左手に持ち替え、右手で俺の頬をつまんできた。

自然とより身体が密着し、彼女のとても女らしい部分が押し当てられる。

「ふふふっ、変な顔～」

そして目を瞑り唇を噛んでジッと耐える俺の頬を、子供の様に無邪気に笑いながら上下左右にみよ～んと引っ張り玩ぶ。

まったく……人がこんなにも苦悩していると言うのに！

「あん！！」

突然、色っぽい声を上げたかと思うと、智代は身体を“く”の字にさせながら俺から逃れる様に離れた。

「な、何をするんだお前は！？H！！いきなり変な所をつっつくな！」

「悪かったな変な顔で……お前が人の顔で遊んでるからだ」

そう、俺が掴れ完全に彼女から死角になっていた右手で、彼女の脇腹を突いて反撃してやったのだ。

それこそスカートの中に手を入れたり、本当に変な所を突いてやりたかったのだが、これでもかなり自重し妥協したのである。

「誤解をするな。“変な顔”と言ったのは、ほっぺたを引っ張っ

た時の顔の事であって、元々の顔が変と言う意味じゃない」

俺の皮肉を間に受けたのか、申し訳無さそうにそう言うと、再び右手を伸ばし俺の頬にそっと当て、微笑みながら真っ直ぐに見つめてくる。

「それにな。お前は自分で言う程変な顔じゃないぞ。確かに美形って感じじゃないが、精悍で男らしい顔付きだと思う。そして何より、その“目”だ。切れ長で奥二重のその目は、一見鋭くて怖そうなんだが、近くに寄って話しかけると、途端に険が取れて凄く優しい目でお前は微笑んでくれる。でも、本気になった時のお前の目は、誰よりも強い光を放つんだ……」

触れている彼女の手に、諭す様な彼女の言葉に、真夏の青空の如く澄んだ眼差しに、俺は息をする事も忘れて魅入っていた。

そして智代は一度瞳を閉じてタメをつくると、天上の笑みを浮かべこう言った。

「私はお前の目が好きだ。お前の笑顔が好きだ。だからなオーキ。いつもの様に笑って欲しい。お前の笑顔を、記念に撮っておきたいんだ。それに初めて撮るプリントシールなんだ。一緒に写っている相手が仏頂面でソッポを向いてるなんて嫌だぞ……」

「！！！！！！！！」

呼吸どころか、心臓までも止まりかける。

それ程の衝撃。

それ程の驚き。

それ程の感激。

智代に“好き”と言われた歓喜！

「智代……！」

想いが溢れ出しそうになるのを、何とか横を向いて視線を逸らし堪える。

落ち着け……“目が”好きなんだ。“笑顔が”好きなんだ。

“異性”としてではなく“人として”、好きかもしれないんだ。

ただたんに、プリクラをやってみたいだけなんだ……。

だとしたら……今彼女の心に応える術はこれしかるまい……。
「……そういやお前、春の実力考査で学年４位だったんだってな？」
「何だいきなり？まあ、その通りだが……」
「いや、マジで頑張ったんだなって……だからこれは、そのご褒美な」
「うん！」
何の脈絡も無い話に訝しみながらも頷く彼女に、望み通りクスリと笑いかけてやる。
いつもの、ポーカーフェイスの微笑みで……。

「次で最後だ」
「ああ」
二人仲良く腕を組み何枚か撮った後、智代にそう告げられた。
顔に出ない様に注意しつつ、この羞恥プレイもようやく終りかと内心ほっとする。
まあ、撮る事自体は恥ずかしいが耐えられない事もない。
その後の事を考えると、今すぐこの機械ごと破壊して逃げ出したくなるが……。
そう、プリクラがたんに個人で観賞して楽しむだけの物であるなら、ここまで嫌がったりはしない。
問題は……不特定多数の目に晒される可能性が有る事だ。
生徒手帳やら、専用のシール帳を女子が見せ合っているのを見た事がある。
つまりコイツとのこの仲良さ気なツーショット写真も、事情もろくに知らない赤の他人に見られてしまうと思って間違いあるまい……。
こんな事なら、初めから素直にヤンキー座りでガンタレてた方が

良かったか？
まあ、多分それも「嫌だ」とこの我侭なお嬢様は言うだろうが……。
「撮るぞ」
「ああ」
なにはともあれ、一先ずこれで最後だ。
腕組んでるくらいじゃ、勘繰られても“公認バカップッル”とまではいかないだろ。
などと、出来るだけ楽観的に考えようと油断していたその時だった。
「なあ、オーキ」
「ん？」
「ありがとう」
チュッ
カシャッ
頬に温かく柔らかい感触が触れたと同時にシャッターが下りた……。
「さ、さて、上手く撮れているかな？楽しみだ」
そして硬直している俺をよそに、真っ赤な顔でわざとらしくそんな事を言いながら、智代は逃げるように個室から出て行く。
ズーーーーーーーーーーン！！
や、やられた……またやられちまった……！！
その場に崩れ落ちた俺の脳裏に、あの日の悪夢が蘇る。
あの毎日の様に冷やかされ続けた、この上なくウザイ日々が……。
まったく、どうして女って奴は、プリクラでキスしたがるんだ……！？
「ほら、オーキ。出てきたぞ。一緒に……どうしたんだ？そんな

所で四つん這いになって……？もしかしてクマさんの真似か？」
いや、普段貴女がよくやってるポーズですよ。
暫くして出てきたシールを持った智代が、個室を覗くなり無邪気に言った。
おのれこの恨み……如何に晴らしてくれよう……！？
「智代……もう一回やらないか？」
俺は下を向いたままそう提案し、片手で手招きをする。
「えっ！！いいのか！？」
狙い通り、智代は主人に呼ばれた子犬の様に、無防備にすぐ傍まで近寄ってきた。
かかったな！！
そして俺は首だけ捻って彼女をローアングルから見上げながら、薄暗い個室の中で純白に輝くそれに向かって言い放つ！！
「ああ。記念にお前のそのパンチラ写真を撮りたいんだ！」
「一体何の記念だーーーっ！！」
「グッ！！」
つっこみの雄叫びと共に蹴りが放たれ、それを四つん這いの体勢のまま横っ腹にモロに食らい、個室の壁まで吹っ飛びボロ雑巾の様にズルリと落ちる。
「お前が馬鹿な事を言うから、思わず本気で蹴ってしまったじゃないか……大丈夫か？」
「ああ、大丈夫だ……絶対他の誰にも見せないから」
「当たり前だ！！あっ、いやっ、誰もパンチラ写真の事など心配してはいない。お前の身体の事を心配してるんだ」
「ああ、平気だ……若いからな……！」
「変態だ……本物の変態が居る……！！」
上体を起こしてその場に座り込み、親指をグッと立てながら男臭く言ってやると、智代は俺の言葉の意味を理解したのか怯えながら後ずさった。
どうやら、一応そういった知識は持っているらしい。

それならそれで、嬲り甲斐が有ると言う物だ。
「なあ、二人でプリクラを撮った記念に、いいだろ？」
「な、何を言ってるんだ変態！！い、いくら記念だからって……花も恥らう乙女に向かって何て事を言うんだ！！それも、その……そんな事に使われるって解っていて、尚更撮られたいなんて思う訳ないだろ！？」
「じゃあ、使わない。ならいいだろ？」
「良い訳あるか！！お前は絶対に使うに決まっている！！」
「てか、そもそも使うって、一体俺がお前の写真を何に使うと思ってるんだ？」
「だ、だから……男はその……あ、あまり溜まってしまうと、その……生理的にHな夢を見てしまったりするから……定期的に自分で処理しないといけないんじゃないのか？って、乙女に何を言わせるんだーーーー！！」
結局自分で言っておきながら、逆ギレして俺の前にしゃがみこみ定番のぽかぽかぱんちをしてくる。
だが、まだだ。
俺が受けた屈辱は、こんな物では済まない。
「処理って、何の事だよ？お前の写真を見ながら、俺が何をするんだ？」
「と、とぼけるな！そうやってまた私に恥ずかしい事を言わせようとしているんだろ？」
「だから、何の事だ？俺はたんに『若いから平気だ』って言っただけだろ？それを勝手にお前が変な妄想しただけじゃないか」
「や、やっぱり解っているじゃないか！！それに私は変な妄想なんてしていない！！Hなお前の考えている事はバレバレだと言ってるだけだ！！」
「俺がHだったら、お前の写真を見ながら一体何をするってんだよ？」
「だ、だから何度も言わせるな！もう、お前の手には乗らないと

言ってるんだ！！」
「俺が何をするんだ智代？」
「だ、だから……」
「智代？」
「も、もう、いい加減、この話は止めてくれ……！」
「と・も・よ？」
「一人Ｈだ！！オーキは私のパンチラ写真を見ながら、一人Ｈをするんだ！！」
ひ、開き直った！！
自棄になった様に開き直られ、驚いた次の瞬間、
ズーーーーーーーーーーン！！
今度は智代が俺の目の前で両手をつく。
「……言ってしまった……！！」
どうやら、言った事をおもいっきり後悔している様だ。
追い込みすぎたか……てか、俺最低だな……。
それで冷静さを取り戻し、途端に俺も自己嫌悪に陥る。
度重なる屈辱と、果たせぬ智代への想いが募るあまり、つい変なスイッチが入って暴走してしまった。
だからと言って、これはさすがにやり過ぎだったが……。
「ごめん……智代……」
慰める様に頭を撫でながら素直に謝る。
「お前があんまり俺をからかうモンだからさ……つい俺も冗談が過ぎた」
「いいんだ……私はどうせ男が自分の写真を見ながら一人Ｈをする事を認めるような、はしたない女なんだ……そしてどんどんエスカレートしていくお前の要求に答え、最後には『芸術だから』と乗せられて裸やもっとＨな写真まで撮られてしまうんだ……！」
うわ……いきなり妄想力豊かに……！
まあ、俺がそう仕向けたんだが……。
そして「ハァ……」と熱っぽい溜息をつくと、智代は顔だけ上げ

潤んだ瞳で懇願する様に言った。
「オーキ、お前は責任を取ってくれるつもりなのかもしれないが、やっぱり私はそれでもそういう事はしたくは無いんだ……例え恋人や夫婦の間柄であろうと、私は自分の裸や恥ずかしい写真を撮ったりしたくは無い。だから、どうか許して欲しい」
恋人や夫婦って!?
「いや、だから冗談だって……パンチラ写真なんて本気で撮る訳ないだろ?」
いや、欲しくないと言えば嘘になるが、だからと言って本気で嫌がる事はしたく無いし、元より開けっ広げよりも身持ちが固い子の方が好みだ。
「本当か?別にお前の事が嫌いと言う訳では無いんだ。むしろ、そういう目で見てくれる事は嬉しくもある。でもな、やはり人は“節度”って物が大切なんだ……」
う、嬉しいの!?
「ああ、解ってる。女の子はそれくらい恥じらいがある方が好いと思うしな」
「そうだろ?恥じらいがある方が女の子らしい。だから、私はHな写真なんて撮りたく無いんだ」
「ああ、そうだな……だから、そのキスの写真も無かった事にしよう。な?」
智代は恥じらいのある女の子だ。
だから俺は、当然この提案も解ってくれると思った。
なのに智代は、上体を起こすと何故か憮然として言う。
「どうして?それとこれとは別じゃないか」
「は?いや、こんな写真、人に見せる物じゃないだろ?」
「こんな写真て……お前はそんなに私にキスされた事が嫌なのか?」
「いや、だから、キスが嫌なんじゃなくて、他人に見られる事が恥ずかしいと言ってるんだ!」

「別にいいじゃないか。こんな可愛い子にキスしてもらってるんだ。むしろ男冥利に尽きるって物だろ？」
「いや、だからな……」
「恥じらいはどうしたんだ？」と言おうとしたが、もはや溜息しか出ない。
自分を卑下したかと思うと、今度は自信満々だし、訳がわからん……。
パンチラはＮＧだが、腕組んだりキスしてる所はＯＫとか……。
本当に女心は訳が解らん。
「とにかく、そのキスの写真は絶対人に見せるなよ」
「どうして？」
「ああ、もう！じゃあパンチラ撮らせろ！」
「だからそれは嫌だと言ってるじゃないか！！」
「だから、俺もそれと同じくらい嫌なんだ！！」
「……まったく、本当にオーキは照れ屋さんだな。仕方の無い奴だ。わかった。この写真は人には見せないようにする。でも、他のならいいんだろ？」
何故俺の方が呆れられた様に言われなきゃならん！？
甚だ疑問ではあったが、納得した様なので蒸し返すのは止そう……。
「いや、他のだって恥ずいんだぞ……でも、それは特別に許すから、くれぐれもキスした事は“二人だけの秘密”にしておいてくれ」
「うん。じゃあ、今日のキスは“二人だけの秘密”だな」
どうやら“二人だけの秘密”が気に入ったらしく、智代は無垢な少女の様に笑った。
散々いちゃついて、ようやく個室を出る。
「さあ、もう満足したろ？帰るべ」

「うん。じゃあ、一緒に帰ろう」
当たり前の様に言って、智代は俺の左腕を掴んでくる。
「なんで腕組むんだよ？」
「さっき腕を組むのはいいって言ったじゃないか」
「いや、だからアレは……て、そもそも一緒に帰るって何だよ！？お前の家逆だろ！？」
数歩歩いた所で気付いて慌てて突っ込む。
あぶねえ……毎回コイツは突込み所が多くて、大事な事を忘れそうになる。
しかし智代は、やはり当たり前の様に言った。
「うん。確かに私の家は逆方向だ。でも、お前は私が目を離すと、すぐまたゲームセンターに入ってしまうからな。だから家まで送って行ってやる」
「はあ！？いや、いいって。遠くなるだろ？」
「お前の家はここから遠いのか？」
「いや、歩いて１０分くらいだけど……」
「それぐらいなら何の問題も無い。よし、行こう！」
「いや、待てって」
勝手に俺の腕を引いて歩き出そうとするのを、こっちも掴み返して引き止める。
「どうした？遠慮なんかするな。私とお前の仲じゃないか」
「……わかった。それなら俺がお前の家まで送って行く」
「えっ！？」
俺のカウンターをまったく予期していなかったのか、今度は智代が驚く。
「私はお前を見張る為に家まで送るんだ……それじゃあ意味が無いじゃないか」
「そんなの、俺ん家まで送ったって同じ事だろ？一度帰ってからもっかいくればいいんだし」
「それはそうだが……」

「それに、普通は男が女を送って行く物だろ？女に送ってもらったら情けないじゃんか」

「確かに送ってもらう方が女の子らしいな……あっ、いや、そんな事は気にしなくていい。お前の家の方が近いんだ。それは仕方の無い事だろ？」

やはりコイツは体面とか“女の子らしい”に弱いようだ。

もう一押しか。

あんな汚い家をコイツに見られたくはない。

いつかは見られるかもしれないが、とにかくいきなりは時期早々だ。

「距離は関係無いだろ。それこそ、お前が気にする事じゃない。女の子を送って行くのは男の義務だ」

「ああっ……うん……そう言って貰えるのは嬉しい。でも、結構遠いんだ……」

「問題無いっての。さあ、行くぞ」

今度は俺が彼女の家の方に向かって手を引き促す。

だが、智代はまだ迷っているらしく、そこから動こうとしない。

「どうした？」

振り向いて訊くも、すぐに返事は返って来なかった。

仕方が無い。俺も彼女が決めるのを待つ事にする。

それは、何だかんだで俺が送ると言う選択肢を選ぶだろうと、高をくくっていたからでもあった。

しかし、ようやく長い逡巡を終えた彼女が出した答えは、意外な物だった。

「じゃあ、こうしよう。明日は土曜日で授業は午前中で終りだ。だから、私を家まで送ってくれるのは、明日にしてくれないか？丁度お前に会わせたい人も居るしな」

なんだそりゃ！？てか、

「あ、会わせたい人？」

「うん。誰だと思う？」

嬉しそうに悪戯っ子の笑みで訊いてくる。
それは送るって言うより、もはや“御呼ばれ”だよな？
それで会わせたい人って言ったらもう……ええっ！？
「か、家族……か？」
「うん。弟だ」
なんだ……弟か……。
その答えにホッと胸を撫で下ろす。
「と言っても、たった今決めた事だから、弟の都合が良ければだけどな。多分平気だとは思うが……。ああ、お前の都合をまだ訊いていなかったな。オーキは明日の放課後、何か予定はあるのか？」
「いや、無いけど……」
「じゃあ決まりだな！そう言う訳だ。今日は私が送って行く！」
やっぱそうなんのか！
「いや、もちろん明日も送ってやるけど、今日も俺が送るって」
「どうして？いいじゃないか。今日は私が送りたいんだ。それとも、私に家を知られたくない理由でも有るのか？」
その何気ない問いで俺はもしやと気付く。
ゲーセン云々は建前で、コイツは俺ん家を知りたがっているのでは？と……。
なら、下手に言い訳しても、頑として聞かない事は目に見えている。
正直に言う他無いだろう……何となくその応えも想像出来てしまうが……。
「ボロくて汚いんだ……」
「えっ？」
「俺ん家自営で、自宅兼仕事場だから荷物とか沢山在るし、両親も忙しくてろくに掃除もしていないから、見た目も中身もボロくて汚いんだ……」
俯き加減で言い辛いそうに告白する。
「そうなのか……でも、大丈夫だ。私はそんな事は気にしないぞ」

やはり思った通りの事を、思った通りの笑顔で言ってくれる。
だが……。
「お前ならそう言ってくれると思ってた。だがな。俺が気にするんだ。俺が見られたくないんだ。だから例え男友達でも、今まで自宅に呼んだ事はほとんど無い……」
「そうか……」
さっきまでの甘いノリはどこかに消え、重い空気が流れる。
頼むよ智代。諦めてくれ……。
しかし、俺の儚い願いは彼女には届かず、けれど代わりに光の在る場所を指し示してくれた。
「意外だな……私はお前はもっと自信家で、コンプレックスなんて無いんじゃないかと思ってたんだ……」
「はぁ？むしろコンプレックスだらけだ……」
「だって、お前はいつも堂々としていて偉そうだし、悩みを訊けば世界を変えたいだとか、教育を変えたいだとか言うじゃないか。だから、個人的な悩みなんて持っていないんじゃないかと思っていたんだ」
妙に偉そうなのはお前もだって……。
「別に俺の中に有る悩みの優先順位が、まず世界を変える事なだけだ。それと比べたら、個人的な悩みなんて取るに足らない事だし」
「そうだな。世界を変える事と比べたら、背が低い事や家が多少汚い事なんて取る足らない事だ。だから、あまり気にするな。そんな事で、お前の凄さが変わる物でも無いだろ？」
それは、俺の原点だった。
ともすれば、劣等感に潰れてしまいそうな心を、より大きな物に目を向ける事で支えてきた。
でも、それを他人から言われた事は初めてだった。
ああっ、智代……まったく本当に凄いヤツだ。
今日だけで、もう何度惚れ直したか判らない。
「わかった……行くぞ」

感極まる前に俺は、踵を返して自分の家に向かって歩き出す。
「うん！」
智代は元気に頷いて、腕を絡めてくる。
もう一々突っ込むのも面倒か……。
「でも、一つだけ約束しろ」
「ん？何をだ？」
「予想以上に酷くても……引くなよ」

「ああ、見えてきた。ほら……」
「もうなのか？本当に近いんだな」
見えて来た自宅を指差して見せると、智代はやや爪先立ちになって背伸びをしながら、眉を寄せて目を細める。
アレ？さすがにまだ我が家の凄さは判らないと思うんだが……。
そういやクレーンの時も思ったが、ひょっとして……？
「お前、ひょっとして目あんま良くない？」
「うん。実はそうなんだ。よく分かったな？」
「いや、たまにこうやって物見てるだろ？中学の時やってる奴居たから」
智代の真似をして眉を寄せ目を細めて見せる。
「私はそんな変な顔はしていない……」
え～？
「まあ、もうちょい近付けば、嫌でもわかる……何しろ家は『超時空要塞』だからな……」
それはかつて友人達に実際に付けられた我が家の異名である。
山と積まれたダンボール、無数の在庫の入った箱や棚、荷物によって狭くなった人一人やっと通れる通路、そして荷物を風雨から守る為に家の周囲を囲うプラ板……俺の家を観た友人達、そして俺自身帰宅する度いつも思う。ここは『要塞』だと……。

「超時空要塞？どういう意味だ？」
「ん～変形とかしそう？」
「何だそれは？」
「まあ、多分実際に銃火器を相手にしないなら、十分戦えそうな家だ」
「何だかよく分からないが、凄そうじゃないか」
「ああ、だから引くなよ……って、やばっ！！離れろ！！」
そうだ！肝心のあの人の事を忘れていた！！
見えてきたガレージの中に人影が有るに気付いて、俺は慌てて智代を振り払おうとする。
だが、智代は俺の腕を掴んだまま下がってそれをいなすと、“逃がさん！”とばかりに両手で抱き締める様にして尚更しっかりと掴んできた。
「何をするんだ突然？」
「いや、だからなって……！！」
説明する間も無く、出てきたガレージの中の人間と目が合ってしまう……。
最悪だ……！！
しかも、遠目からでもそれと判る程目を丸くした後、にこにこしながらこっちに近付いて来やがった。
「ん？ひょっとして、お前のお母さんか？」
「ああ……だから離れてくれ……」
「う、うん。そうだな」
ようやく智代が俺から離れ、やや緊張した面持ちで背筋を伸ばしてシャンと立つ。
もはや遅すぎだが……。
「あらあら、お帰りなさい。お友達？」
そのオバサンは、余所行きの普段よりやや高目の声ですっ惚ける。
「ああ……」
「坂上智代です。オーキには、いつもお世話になっています」

智代は一歩前に出ると、お袋に向かって懸念していたよりずっと行儀良くに頭を下げた。
でも、頼むからせめて『オーキくん』て……もう焼け石に水だろうけど……。
「まあ～、モデルさんみたいに可愛い子ねぇ。オーキの母です。これからも、息子をよろしくお願いしますね坂上さん」
「はい！こちらこそ、不束者ですがよろしくお願いします。お母さん」
にこやかに不穏な事を言い合いながらお互いに頭を下げあう。
最悪だ……！！マジでもう最悪だ！！
と、とにかく何か口実を……。
「それで、坂上さんは家に上がっていかれるのかしら？」
「あ、えっと……？」
どうするんだ？と目で訊いて来る。
いや、訊くなと突っ込みたい。
さすがに掃除もしていない部屋に、親公認で女の子を連れ込めるか……！！
「ちょっと待ってろ坂上」
「えっ！？あ、うん」
俺はそれだけ言って荷物の間を通って玄関まで走り、勢い良くドアを開けると、そのまま階段を駆け上る。
そして自室に着くと、目星を付けていた何冊かの本を手に取り、再び智代の待つ外へと急いで戻った。
こうしている間にも、何か致命的な会話が為されているかもしれないからだ。
「待たせたな。ほら」
案の定、二人して話し込んでいる所に割り込む様にして本を差し出す。
「ああ、オーキ。ん？本？」
「俺のお勧めの本だ。約束通り貸してやる」

「約束？そんな約束……」
「とにかく、それ読んで勉強しろ！いいな？」
「う、うん。それはわかったけど、どうしたんだ？そんなに慌てて……あっ！ちょっと！押すな！何をするんだ！？」
よく事情の飲み込めていない彼女に有無を言わさず本を押し付け、そのまま背後に回って背中を押してお袋から遠ざけていく。
「こ、こら、離せ！お母さんとまだ話しをしていた途中なんだ！」
「いいだろ？もう目的は達成したんんだから……恥ずかしいからここでな」
「どう言う意味だ？私をお前のお母さんに合わせるのが、恥ずかしいって事か？」
やっぱり不機嫌になったが、ここでごねられても困る。
「逆もだ。お前にお袋を見られるのも恥かしい」
「どうして？優しそうな良いお母さんじゃないか」
「いや、だから……照れ臭いんだ。女の子を家の前までとは言え、連れて来たのは初めてだからな……」
あえて視線を逸らしながら言ってみる。
すると智代はいつもの様に呆れながらも満足気に言った。
「まったく、オーキは照れ屋さんだな。仕方の無い奴だ。わかった。今日はここでな。お母さんにもよろしく伝えておいてくれ」
「ああ、わかった。じゃあな」
「また明日な、オーキ。ああ、放課後の約束を忘れるなよ」
「わかってる」
名残惜しそうに何度か振り返る智代に、その都度手を挙げて応えながら、その背が見えなくなるまで見送った。
戻ってこない事を警戒しながら……。

回想　～初めての男～

『この雰囲気は、あまり好きにはなれそうも無い』
それが、私がこの春から編入した光坂高校の、正直な感想だった。
この辺りでは一番の進学校で、スポーツにも力を入れており特待生も多い。
いわゆる世間では“エリート”と呼ばれている生徒達。
本来なら、そんな生徒達の中に私の様な人間が居る事自体、場違いなのだろう。
しかし、好きになれない理由は、私にだけある訳でも無いように思えた。
勉強やスポーツに打ち込む事は立派だが、何と言うか……“余裕が無い”様に思えたんだ。
休み時間になっても物静かな教室。
机に向かったまま予習復習をしている生徒が多く、騒ぐ人間はほとんど居ない。
皆自分の事で手一杯で、他人に対してあまり感心が無いのかもしれないな。
もっともそれは、私自身にも言える事なのかもしれないが……。

そんな風に思っていたのだが、私の周りだけは多少賑やかだった。
クラスでは常に誰かしら言い寄ってくるのだ。
初めは、編入生の物珍しさから。
次いで身体測定や実力考査の結果がわかると、日に日に寄って来る人間は増えていった。
正直、落ち着かない。
こういった事に慣れていない所為もあるが、何よりこうして皆が寄って来るのも、単に私の過去を知らないからだという事は解っているからだ。

荒れていた中学時代、そして進学した前の学校でも、私は独りだった。

その頃にも言い寄ってくる人間は居たし、中には友達になれそうだった子も居る。

でも、すぐに皆離れていった……。

「ごめん……やっぱり貴女にはついて行けない……」

前の学校で、唯一一学期の中頃まで友達でいてくれようとしてくれた子の、別れ際の言葉と表情が忘れられない……。

今は凄い凄いと囃し立ててくれてはいるが……私の過去を知っても掌を反さずにいてくれる人間がこの中でどれだけ居るだろう？

クラスの何人かの女子や、隣のクラスの門倉の様に、それなりに仲良くなれた子は一応居るには居るが、それを思うと素直に喜べる物では無かった。

「貴女が坂上さん？私は2年A組報道部の門倉実理。よろしくねぇ。ちょっと色々訊かせて貰ってもいいかなぁ？」

身体測定の種目の列に並んでいた時にそう話しかけられたのが、門倉との出会いだった。

小柄でクリクリとした大きな目に大き目の眼鏡をかけた、とても可愛らしくて“女の子らしい”子だ。

私も目が悪いので勉強の時とかに眼鏡をかける事はあるが、眼鏡をかけた自分の顔はあまり好きではない。

だから眼鏡のとても似合う彼女が、少し羨ましく思えた。

「では、いきなりですが、ズバリ好みの男性のタイプはぁ？」

「本当にいきなりだな……正直、あまり意識した事が無いから、よくわからない……」

私にとって“男”とは、精々“女とは身体の作りが違う生物”程度の物でしかない。

強いて言うなら、“ろくでもない生き物”だろうか？

ああ、“弟の鷹文は除いて”だな。

世間一般で言う所の“強さ”とか“逞しさ”とか“頼り甲斐”だとか……そういった“男らしい”とされるイメージを、男に対して抱いた事が無いのだ。

……そう、「坂上さんて男らしいね」とか「男勝りだね」だとか「男前だね」などと自分が言われる事はあっても……。

「ふむふむ、『よくわからない人が好み』と……」

「待て……そう言う意味で言ったんじゃない。そもそも、よくわかりもしない人間を好きになったりはしないだろ？」

「そうかな？ミステリアスだったり、影が有るくらいの方が、むしろ女の子は惹かれると思うけど？」

「そう……なのか？」

「まあ、好みは人それぞれだけどね。それで、坂上さんお好みの『よくわからない人』だけど、ウチの学校にはとびきり『よくわからない人』が居るんだよぉ！」

「だから、別にそれは好みじゃない……とびきり『よくわからない人』とは、どういう人間なんだ？」

何か酷い誤解をされた様だが、そう言われると多少は興味が沸いた。

「一言で言うと『騎士の中の騎士』みたいな人かな」

“きし”と言うのは“ナイト”の事だろ？それも『ナイトの中のナイト』と言う事はむしろとても立派な人と言う事ではないのか？どうしてそれが『よくわからない人』なんだ？」

「それは……私にもよくわからなかったり」

「何だそれは？」

「ん～何しろ相当な変わり者だからねえ……実際に会ってみるのが一番だと思うよぉ」

結局この時は、それが誰の事なのかも、どんな人間なのかも分からなかった。

ただ彼女の表情を見る限り、きっと悪い奴では無いのだろうとだけ……。

でも今にして思えば、多分これもまた“きっかけ”の一つだったのだろう。
あの風変わりな男に、興味を抱く事への……。

4月7日（月）

その男を見たのは、二度目だったと思う。
同じクラスの男子の所に来て、話し込んでいる違うクラスの男子生徒。
昼休みに他のクラスの生徒が来る事は別段珍しい事では無いのだが、何故かその男の事だけは印象に残っていた。
理由は簡単だ。
まだ冬服の時期で皆ブレザーを着ているというのに、彼だけは白いYシャツ姿。
それと……友達と話している様が“楽しそう”に見えたからかもしれない。
「あの男は前も来ていたな……」
「え？ああ、川上君ね。パソコン部の連中と仲いいみたいだから」
ふと何気なくつぶやくと、一緒に昼食を食べていた名取が素っ気無く答えてくれた。
すると、一緒に食べていた他の二人の方が興味津々といった様子で話しに乗ってくる。
「名取さん、一年の時川上君と同じクラスだったんでしょう？」
「彼ってひょっとしてオタク？」
「さあ、ゲームの話はよくしてるみたいだけど、私もよくは知らない」
「だとしたら、ちょっとショック……」
「彼、結構イケテルよね。不良ぽいけど、頭良いみたいだし……

あれで背がもう少し高ければタイプなんだけど……」
「私は正直あんまり好きじゃないな……何考えてるか判らないし。飽きっぽい性格みたいだし……」
他の二人は好意的な様だったが、一年生の時同じクラスだった名取はむしろあまり好きでは無い様だ。
なるほど。素っ気無いのはその為か。
「かなりの変わり者らしいけど、飽きっぽいって？」
「……去年の球技大会で、ウチのクラスがサッカーで決勝までいったの覚えてる？」
「ああ！うんうん、私も見てた。あの時の川上君凄かったよね！」
「でも、決勝に川上君出てなかったよね？結局それで決勝戦ボロ負けしちゃったし……どうしたの？」
「帰っちゃったのよ……『飽きた』って言って……」
「飽きた！？決勝戦で！？」
「マジ！？」
「一年で優勝出来たら創立以来の快挙だったし、クラスの皆も凄い盛り上がって“ベストメンバー”で挑もうって話しになってたのに……突然『飽きたから帰る』ってそのまま……おかげでテンション下がっちゃうし、全校生徒が観ている前で１０対０とかワースト記録樹立して大恥掻く羽目になるし……ありえないでしょ！？」
名取はその時の事を思い出したのか、相当憤慨していた。
確かにそれが事実なら、無責任にも程があるだろう。
もしかしたら、あの男が門倉の話していた男かもしれないとも思ったのだが……どうやら思い違いの様だ。
『ナイトの中のナイト』が、そんな真似をする筈も無いだろう。
話題が変わった事もあり、この時あの男に対してそれ以上興味を持つ事は無かった。

4月8日（火）

放課後の帰り道、桜並木の一本の桜の樹の前で佇む男子生徒を見かけた。
雨の中傘も差さずに、片手を幹に触れながら。
あの男だ……確か名前は『川上』。
これだけ見事な桜並木だ。普段なら立ち止まって見上げている生徒は珍しくは無い。
けれども私は、そのずぶ濡れの背中から目が離せなせないでいた。
「坂上さん、どうしたの？」
「ん？ああ、すまない。何でもない……」
一緒に帰っていたクラスの友達の声で我に返る。
何故こんなにも気になったのだろう？
こんな雨の日に、桜を見ているのが珍しいから？
いや、違う……。
うまく言えないが……雨に濡れている所為か彼の背はとても物悲しくて……泣いている様にすら見えたんだ……。
そして、きっと彼も知っているのだと思ったんだ……この桜並木が伐られてしまう事を……。

4月9日（水）

「他校の生徒が、私を探して校門に来ているらしい」
人伝にそう聞いた私は、「またか」と辟易しながら校門へと急いだ。
こういった事には慣れているが、他の生徒達に迷惑をかけるのは心苦しい。
出来るだけ手早く片付けてしまおう。

そう思っていたのだが、校門に着いた時には既に一人の男子生徒がガラの悪い他校の生徒達に囲まれ胸倉を掴れていた。
それも、あのYシャツ姿はもしや……『川上』か？
「お前達！」
前に進み出て、こちらに注意を向けるべく啖呵を切る。
すると、どういう訳か背後から歓声が沸いた。
別に見世物では無いのだが……。
まあいい。今はこいつらを追払うのが先だ。
その他校生達は、昨日私がしつこいナンパから同じ学校の女子生徒を助ける為、雨の中仕方なく相手をしてやった奴等とその仲間だった。
出来る事なら編入早々こんな事で目立ちたくは無いし、掴っている生徒も居る。
会話の通じる相手では無いだろうが、私は一応の説得を試みた。
すると、それが功を奏したのか、間も無くは川上は解放される。
だが奇妙な事に彼は、慌てるでも怯えるでもなく、のんびりと歩いてこちらに向かって来たのだ。
むしろ悠々と不敵な笑みすら浮かべて……。
「大丈夫か？」
その態度に疑問と、怪我は無さそうだと安堵を感じつつも、念の為に訊いた。
一応私絡みの事で迷惑をかけたのだ。当然だろう。
しかし彼は何も答えず、ただ黙ったまま私の前に立ち真っ直ぐに見つめてくる。
挑戦的でありながらどこか優し気で、穏やかでありながら全てを見透かす様な瞳で。
「下がっていろ」
心内までも見透かされている様な気がして、私は半ば強引に彼を押し退けた。
次の瞬間、突然頭に受けた軽い衝撃。

一瞬、何が起きたのか判らなかった。
叩……かれた……のか？この私が……？
騒ぐ観客達の野次で、ようやくそれを認識する。
「痛いじゃないか」
本当は痛くなんてなかったが、助けた相手に叩かれ、私が喧嘩をしたがっているみたいに言われた事は当然不服だった。
すると彼は諭す様に私にこう言うんだ。
「お前は正しい。でもやり方を考えないと、いつまでもこんな不毛な事を続ける羽目になる」
その瞬間、私は理解した。
彼は私の事を知っていて、全てはその上での言動だと……。

何も言い返せなくなった私は、その後観客の一人となっていた。
そして目の前で繰り広げられる、不思議な光景。
他校の生徒達は、私に謝って帰って行ったのだ……誰一人傷つく事無く。
信じられなかった。
そして何となく悔しくて腑に落ちない。
だってこれではまるで……そうまるで、私が川上に助けられたみたいじゃないか。
私が川上に負けたみたいじゃないか。
……そう……なのか？
その疑問は、間も無く先生達が現れた事で決定的な物となる。
もし奴らと戦っていれば、目撃されていたかもしれない。
複雑な心境だった。
単純に喜ぶべきなのかもしれないが、素直に喜べない自分が居る。
そんな時、思わぬチャンスが訪れた。
観客からの告げ口により、私を叩いた事を追求されだしたのだ。
ここで彼を助けてやれば借りが返せる。
ついでに叩かれた分の借りも返してやろう。

私の目論見は、見事に成功して少し溜飲が下がった。
と思っていたのだが、
「ウチでの喧嘩はご法度だ」
最後にそんな捨て台詞を残し、勝ち逃げするの様に彼は去っていったのだ。
ズルイ奴め。今度会ったらぎゃふんと言わせてやろう。

4月10日（木）

昼休みに購買に向かう途中、階段の所でYシャツ姿のあの男を見かけた。
川上だ。
三年生に用でも有るのか、階段を上っていく。
そうだ！後ろからこっそり近付いて驚かせてやるか。
悪戯を思いつき、私は気配を消して彼の背後に忍び寄る。
でも……暫く彼の後姿を見ていたら、そんな気は失せてしまった。
何か……悲しそうに見えたんだ。
ひょっとしたらこれが“男の哀愁”と言うやつなのだろうか？
それに、どういう訳か三階を通り過ぎても、尚彼は上り続けている。
この上は確か立ち入り禁止の屋上だったはず……。
「待て」
屋上の扉に彼が手をかけた所でそれを止める。
しかし次に彼が言った言葉は、あまりに意外だった。
「俺を狩りに来たのか？」
コイツはまだ私がそんな事をしていると誤解しているのか？
でも、これではっきりした。
彼は私の過去を知っているのだと。

それからは、押し問答が暫く続いた。
そして彼は見せてくれたんだ。
屋上から見る桜並木を……。
それは、弟や家族と一緒に見たあの桜とまた違った美しさがあった。
そして、家族以外の人間とこうして並んで同じ桜を見るのも“悪くない”と思えたんだ。
コイツとなら友達になれるかもしれない。
そんな予感がした。
だから、パンを差し出された時も、何の警戒もせずに口に入れたんだ。
それなのにだ。
川上は信じられない事を言い出す。
「そのパンに睡眠薬を入れておいた。俺の勝ちだ。お前が寝ている間にHな事をしてやる。男としての責任は取る。喜べ」
最低最悪だ……。
しかも、怒りにまかせて蹴り倒した筈が、吐き出そうとトイレに向かう途中で川上は追いかけて来る。
再び倒そうと私は何度も蹴った。
蹴って蹴って蹴り続けた。
だが、何度蹴ろうと川上は倒れる事無く、おまけに私のパンツまでしっかり見ている始末。
最低最悪だ……。
刻々と過ぎていく時間、磨り減っていく精神と体力。
私は負けるのか……？
何度も浮かんでくるそれを、首を振って掻き消す。
こんな形で負けるのは嫌だ。
こんな卑怯な男に負けたくはない。
それに、負けたら私はこの男に……。
嫌だ！

こんな形でなんて嫌だ！
初めてなんだ！いや、初めてじゃなくても無理矢理なんて嫌だ！
まだ、恋も知らないのに……！
……でも、もし負けたら……私は一人じゃなくなるかもしれない……。
やっぱり嫌だ！
どうしてこんな事をするんだ！？
こんなに強いのに……。
普通にやったとしても、勝てるかどうか判らない。
それなのに……こんな卑怯な事をされたら、負けるに負けられないじゃないか！
せめて普通に戦っていたのなら、お前になら負けてもいいのに……。
お前となら、そういう仲にだってなれたかもしれないのに……。
まさに私の精神の限界を迎えたその時、彼は突然種明かしを始め、こう言った。
「冗談だ」と。
最早崩れ落ちるしかなかった……。

まったく、本当にまったく、川上は仕方の無い奴だ。
でも……放課後あいつに名前を呼ばれた時、何故か妙に嬉しかった。
だから私もこれからは『オーキ』と呼ぶ事にしよう。
ただそれだけの事が何故か妙に嬉しい。
夕食の時、家族の前で話したんだ。
物凄く変わった奴が居るって。
そうしたら、弟の鷹文が笑いながら言った。
「ねぇちゃん、何か嬉しそうだね……愚痴以外でそうやって誰かの事話してるの聞くの初めてかも」
「そ、そんな事は……あるか……いや、でも、これも半分は愚痴

みたいな物だ。話す訳にはいかない様な、もっととんでもない事もされたしな……」

「どんな事？」

「だ、だから、話す訳にはいかないんだ！」

「え～、そう言われると余計聞きたくなるじゃん。ねえ？」

「そうね」

「まあ、智代も年頃の娘だからな……あまり他人に言いたくない事も有るだろう」

無責任な鷹文の言葉にお母さんが相槌を打ち、しかしお父さんは私を庇ってくれた。

まだぎこちなさはあるが、これが“家族の団欒”と言う物なのだろう。

「そう言うならもう詮索しないけどさ。そんな面白そうな人なら、一度会ってみたいかも」

「そ、そうか？うん、じゃあ機会があればな」

4月11日（金）

昼休みに購買に寄ってから屋上に行くと、ちゃんとオーキは待って居た。

今日こそぎゃふんと言わせてやろう。

そう思い、買ってきたコーヒーを渡して「睡眠薬を入れた」と言ってやったんだ。

そうしたら、あいつは突然遺言の様な事を言い出しそのまま……。

まったく、本当にあいつの冗談は悪質だ！

その後、二人で沢山話した。

そこでつくづく感じたのは、オーキの“凄さ”と、私との差。

でも同時に、その“凄い”相手に自分が認められる事の嬉しさを

知った。
オーキは凄い変わり者で、凄いHで、すぐ私をからかって苛めるけど、本当は優しくて、頭も良いし、私がいくら蹴っても平気な程頑丈だし、一緒に居ると何か安心出来る。
そうか……これが“男”なんだなきっと。
そんなオーキの傍に居ると、私は自然と普通の女の子で居られる。
隙あらば私をからかったり、Hな事をしようとするから気は抜けないが……。

放課後、あいつの背中を遠目に見つける。
クラスの友達との約束さえなければ、駆けて行きたかった。
代わりに一年生の時のあいつの話を聴けたが……。
だから、あいつがゲームセンターに入って行くのを見て、凄く迷ったんだ。
結局、友達に気を使わせてしまったな。
でも、そのおかげでクマさんも取れたし、念願のプリントシール機も一緒に撮れた。
Hなクセに意外に照れ屋な事が判ったのは思わぬ収穫だ。
私もとんでもない事を言わされてしまったが……。
それに、あいつの家やあいつ自身の事も色々と分かったし、明日は……。

あいつに、全てを話そうと思う。
私が光坂に来た目的を。
私の家族と過去に何があったかを。
心配はしていない。
あいつなら、オーキならきっと全てを受け止めてくれる。
そして出来るなら、あいつと共に戦いたい。
いや、きっと戦ってくれる筈だ。
そう、あいつならきっと……。

4月12日：クマの巣穴

一番最初の夢は“ヒーロー”になる事だった
アニメや特撮のヒーローに憧れた
あんな風に強くて格好良い人に成りたかった
そして現実にも多くの偉人達が居て、自分もいつかそうなれるんだと思っていた
特別な力なんて何も持って無いけど
ビンボーだから、凄いメカとか武器も無いけど
背だって大きくないし、力も強くないけど
足も速くないし、運動するとすぐに喘息が出るけど
喧嘩をすれば、泣かされてばかりだけど
だから余計に成りたかったのかもしれない
誰よりも強く優しいヒーローに……
物心ついた時から、俺は一人で遊んでる事が多かった

生まれつき障害を持った姉が居て

弟も産まれて

そして、人一倍恥ずかしがりやで見栄っ張りな自分が居た

よく○○っ子と言うが、俺は“一人っ子”だった

別に独りが好きな訳じゃない

ただ、大人にベタベタされたり、優しくされるのが苦手だった

甘えたり、あやされたりする事は恥だと思っていた

それなら一人で居る方が気楽だった

親からも「お兄ちゃんなんだから」とよく言われたし

誰かに甘えているヒーローなんていないだろ?

だからよく、暇な時は一人で探検して回った

“何か”を探して

“何か”を求めて

一番最初に仲良くなった友達は、“いじめられっ子”だった

凄い甘えん坊で幼稚園に来て早々「ママー」と泣き出す様な子だった

その度にみんなから「赤ちゃん赤ちゃん」と冷やかされている様な子だった

そんな時颯爽と庇って仲良く……なんて事は無かった

むしろ一緒になってからかっていた

きっかけは、覚えていない程些細な事だったんだと思う

多分行けばゲームをやらせてもらえるとか、そんな所だ

でも、今にして思えば必然だったのだろう

俺には友達を自分の家に呼ぶと言う選択肢が無かった

俺の家には何も無かったからだ

ゲームもお菓子もお小遣いも無かった

それに他の家に行っても、肩身の狭い思いをしたり

そもそも「同じゲームを持って無いから」と門前払いも少なくなかった

そんな俺が行き着いたのが「彼の家」だった

彼の家には何でもあった

優しい彼はゲームをいくらでもやらせてくれた
おばさんも優しくて、お菓子やお小遣いをくれた事もあった
天国の様な所だった
他に友達なんていらなかった
彼だけ居てくれれば、それで事足りた
でも……そんな日々はそう長くは続かなかった
暫くして彼は、引っ越してしまったんだ
俺はまた独り暇になった……

ある日、一人で公園で遊んでいると、小学生に混じって遊んでいる大人を見た

ゲッ、渚ちゃんのおじさんじゃん！

店はどうした……！？

そんな風に思っていると、俺に気付いてじろりと睨んでくる

てか、こっちに来た！

「おい、小僧！人数合わねえからテメエも混ざれ！」

逃げ出そうか迷ってると、そんな風に呼びかけられる

どうする？年上ばかりだけど……？

まあ、暇だしいっか

そうして俺は、初めて秋生さんと遊んだ

そして暇な時は……まあ、しょっちゅうここで遊ぶ様になった

ここに来れば秋生さんは必ず仲間に入れてくれたし、暇潰しにはなった

でも正直そこは、俺にとってあまり楽しい場所じゃなかった

小学生に混じって、幼稚園生に何が出来よう？

俺は文字通りの数合わせであり、“オミソ”でしかなかった

そして、俺と同じチームには必ず秋生さんが居た

完全なセットだった

つまり、俺が足引っ張って丁度良かったのだ

むしろ、それが役目だった

悔しかった

勝っても負けても悔しかった

そんなある日、負けたチームへのバツゲームがあった

そう、あの“お姉さんのパン”だ！

「ん？一個余ったか……よし、お前に喰え！」

そして何故か勝ったのにパンを渡される

腑に落ちない物を感じた

でも、腹ペコだったし、何でもいいから食いたかったりもした

「不味ーっ！何これ！？」

「うげえ……もう食べられないよ……！」

「負けたんだから黙って食いやがれ！見ろ！オーキはちゃんと全部食ってるぞ！」

「うおっ、凄え！！」

「……」

別にこんな事で一目置かれても嬉しくなかった

でも、悪い気はしなかった

こんな事でも、ちょっとだけ優越感を味わえた

“お姉さんのパン”が何となく好きになった

4月12日（土）

日課の朝刊配りと朝のトレーニング、古川パン巡りを終えた俺は、シャワーを浴びて二階にある自室に戻るや愛しの万年床に潜り込んだ。

二度寝である。

ゆっくり寝ていられる程時間に余裕は無いが、やはり寝不足で気だるいし、運動と労働の疲れを少しでも癒したかった。

まったく……これから学校なんて行きたくねえ……！！

ちなみにウチの学校は進学校だからか、このゆとり教育のご時世に半日だが土曜でも授業がある。

つまり、休みが他の学校の半分しかない。

ありえないだろそれは……！！

入学してそれを知った時は愕然とし後悔した物だ。

本当に、こんな学校入るんじゃなかったと何度思った事か……。

でも……まあ……あいつと会えたけど……。

それを思えば、悪くはなかったと思えてくる。

それに今日の放課後はあいつの家に行く事になってるし、休む訳にもいかない。

行くんだよな……あいつの家に……。

ま、まあ、弟に会わせたいって話しだから、あいつの部屋で二人っきりなんて事にはならんだろう。

そう何度も自分に言い聞かせているが、やはり意識しないなんて不可能であり、その所為もあってあまり寝ていなかったりする。
てか、やべえ!!意識しだしたら仮眠できねえ!!
折角一汗かいていい感じだったのに……。
とりあえず、目を瞑って横になってよう。それだけでも違うはずだ。
そう思い、色々考えるのを止めたその時だった。
俺の“ダメデビルイヤー”が、何者かが階段を上ってくる音を捉える。
“ダメデビルイヤー”とは、思春期の男子なら誰もが会得するであろう能力で、自分の部屋に近付く者の音は絶対に聞き漏らすことは無いという超感覚だ。
特に俺程になると、音だけでそれが家族の誰なのか判別可能である。
だが、この時の音は家族の誰の物でもなかった。
軽快で弾む様なリズム。
て、これはまさか……!?
「オーキ、おはよう!もう朝だぞ!」
問答無用でドアが開け放たれ、今まで妄想の中にいた髪の長い少女がひょっこり顔を出す。
「なっ!何でお前がここに!?てか、何勝手に入ってきてんだ!?」
「勝手にじゃないぞ。ちゃんとお母さんに上がる許可を貰った」
「いや、だからそれは家に上がる許可で、俺の部屋に入る許可は俺がしてないだろ!?」
「いいじゃないか。私とお前の仲なんだ」
起き上がって抗議するも、智代は涼しい顔をして構わず部屋に入ってくる。
ちょ、待て!何だ!?何で智代が来てる!?寝起きドッキリか!?
部屋なんて掃除してないから、普段の散らかったままだ。

ゴミの山では無いが、そこかしこに本や雑誌が山積みになっているし、ゴミ袋とか一箇所に集めているとは言え剥き出しなので正直見栄えが悪い。

まあ、本当に見られちゃマズイ物は出てはいないが……。

『心は常に戦場に在り』思春期の男子とは、何時如何なる敵（主に母親）の襲撃にも備え万全を期している物なのだ！

とりあえずそれはいいとして、こいつをどうしてくれよう？

「……そうか……これは夢か……！」

「ん？何だ、まだ寝ぼけているのか？夢なんかじゃない。現実だ。ああ、でも、こんな可愛い子が朝早くから起こしに来てるんだ。お前にしてみれば、“夢の様な事”かもしれないな」

「やはり夢か……ん」

一計を案じた俺は、いつもの様に何故か偉そうな彼女に右手を差し出した。

「何だ？」

「ん！」

「……ああ！そうだな。まずは顔を洗って来ないとな」

再度アピールすると、勝手に察して不用意にその手を掴んでくる。

かかった！！

「うわっ！！」

彼女が引っ張り上げようとするより早く、俺は彼女を引き寄せた。

そして、そのまま巻き込みながら覆い被さる様にして布団の上に押し倒し、両手を彼女の顔を挟む様について見つめ合う。

「オ、オーキ……！」

智代は抗おうともせず、赤くなって息を飲み視線を逸らしただけだった。

その仕草に、こっちまでドキリとしてしまう。

あれ……？い、いいのか！？

もう少し抵抗しようよ……な？

「……だ、駄目だ……こんな朝からなんて……」

ややあって、ようやくやんわりと拒絶してくる。
一瞬向こうも“その気”だったらどうしようかとマジで焦った……。
「べ、別にお前とこういう事はしたくないと言ってるんじゃないんだ……ただその……いきなりは嫌だ……女の子には心の準備って物が要るんだ……は、初めてなんだし……そ、それに、まず、こういう事をする前に、はっきりとさせておくべき事があるだろ？お前の気持ちをちゃんと聞かせて欲しい……！」
……やはりヤブヘビだったーーー！！
いやいやいや、落ち着け！！
これは“夢”なんだ！！
そういう設定なんだ！！
「これは俺の夢なんだから、夢の中で何しようと勝手だろ？」
気を取り直し、芝居モードへと入り込む。
「だ、だから夢じゃないと言ってるじゃないか」
「いいや、夢だ……でなきゃ、あの智代が朝っぱらから男の部屋に来る様なはしたない真似をする訳がない」
「は、はしたないって言い方は無いだろ？折角起こしに来てやったのに……」
「十分はしたないだろ……？いいか？男にとって自分の部屋や家は縄張りだ。そこに女が自分から入るって事は、発情期だから襲ってくれと言ってる様な物だ」
「は、発情期って、そんな訳が有るか！！まったく、いつもいつも乙女に対して何て事を言うんだ……！？」
「その乙女が、勝手に男の部屋に入って来るか普通？」
「それは、お前を信用しているからじゃないか！」
「ほお、Hな俺をか？」
「お、お前はHだが、無責任な事をする奴じゃないだろ？」
「さてな……てか、どうせこれ夢だし。何しても問題無い」
「だ、だから夢じゃなくて現実だ！ほら」

そう言って智代は、俺のホッペをつまんだ。
「ひひゃい……」
「ほらな？これは現実だ……わかったらどいてくれ」
「……」
加減してくれたんだろう。然程痛くはなかったが、下手に粘ると更に強くつねられそうなので、ゆっくりと彼女の上からどいて、その場に座り込む。
「まったく……本当にオーキはHだな……お前は夢の中でいつもこんな事をしているのか？」
そして起き上がりながら智代は、またそんな際どい挑発的な質問をしてきた。
「……てか、お前は何でこんな早くにウチに来た？」
『本当に夢だったら最後までやってる！！』なんて答えられる筈も無く、こっちも当初からの疑問を訊き返す。
「それは……いつもより早起きしてお弁当を作ってたんだ。お昼に一緒に食べようと思ってな。ちゃんとお前の分も有るぞ！それで作り終わってもまだ時間に余裕が有ったから、折角だからついでにお前を起こしてやろうと思ってな。わざわざ来てやったんだ。どうだ？嬉しいだろ？」
何が折角でついでなのかよく分からないが、智代は得意気でご満悦だった。
こいつ料理出来たのかとか色々つっこみたい所はあるが、まずは個人的にここをはっきりしておきたい。
「理由は何となくわかった……で、何で勝手に人の部屋に入ってきたんだ？」
「勝手じゃないと言ってるだろ？最初にお母さんがお前を起こしに行こうとしたから、遠慮して私が起こしてきますと言ったんだ。そしたら、じゃあお願いねと頼まれた。な？お前を起こすよう頼まれたって事は、お前の部屋に入る許可を貰ったのと同じ事だろ？」
相変わらず、何故か自信満々だった。

つまり、本気でそう思ってるって事なのだろう……。
これは骨が折れそうだ。
「あのな……ウチは親だってノックして外から呼びかけるだけだぞ……余程の理由が無いと中には入れないし入っても来ない」
「そうなのか……？どうして……？」
「どうしてって……じゃあ、お前の親はお前の部屋にノックもせずにほいほい入ってくるのか？」
「それはないが……別にいいじゃないか？家族なんだから」
「着替えてたりしてもか？」
「それは……もちろん嫌に決まってるじゃないか」
「だから、そういう事だろ？中で何やってるか分からないからこそ、例え家族だろうと、まずノックするのは当然じゃないのか？まして俺とお前は一緒に住んでる訳じゃないんだし」
「……でも、お前は男じゃないか。私は女だから家族であっても着替えを見られるのは嫌だが、男のお前なら別に構わないだろ？」
「ほう……そうか……やっぱり初めからそれが狙いか」
聞き分けの無い彼女にカチンときた俺は、邪悪な笑みを浮かべ含みを込めて言ってやる。
すると、俺の態度が変わったのを察知したのか、智代も表情を険しくした。
「……何の事だ？」
「俺が恥ずかしい格好で寝てる事を期待してたんだろ？裸とか、“アレ”とか」
「何を言ってるんだ？お前と一緒にするな！大体アレって何だ？」
「わかってるクセに……まあ、そんなに見たいなら見せてやってもいいぞ？」
「だ、だから、お前と一緒にするな変態！それに私は男の裸くらい弟ので見慣れてるんだ。わざわざ見たいと思う訳が無いだろ？」
「うわ……見慣れる程弟の裸見てるのか……まさか未だに一緒に風呂入ったりしてないだろうな？」

「入る訳無いだろ！！弟は事故で不自由だったから、そのお世話をしていただけだ！！さっきから一体何なんだお前は！？」
俺の下衆の勘繰りに、ついに智代も声を荒げた。
そのまま互いにムッとしたまま睨み合う。
まあ、今のは失言だったが、俺はそんなにおかしな事を言ってるだろうか？
『親しき仲にも礼儀あり』と言っているだけなのだが……。
だがそう思っていると、突如慌しく階段を上ってくる二つの足音が聞こえてくる。
マズイ！今のコイツの大声を聞かれたか！？
「ちょっとオーキ！今の声坂上さんじゃないの！？何かあったの！？」
ドンドンと叩きながら、ドア越しにお袋の詰問の声。
やはり来たか……うぜえな……。
バツが悪そうに智代を窺うと、彼女も驚いたのだろう。ドアを見つめ目を丸くしていた。
「何でもねえよ！」
「何でもないって事ないでしょ！？ちょっと、出てきなさい！！」
仕方無い。顔を見せないと流石に踏み込まれそうだ。
ドアに向かうべく、のっそりと立ち上がる。
そこで改めて気付く。
俺ズボン穿いて無いじゃん！
このまま出たら１００％誤解されるな……。
とりあえず、壁にかけてある制服のズボンをのそのそ穿き始める。
なんだか凄く情けないんだが……。
「早く出てきなさい！オーキ！」
「だから、何でも無いって……いいから戻れよ！」
「……お母さんに対して、そんな言い方はないだろ？」
何とか追い返そうとする俺の気も知らず、智代はお袋の肩を持つ。
誰の所為で来たと思ってるんだ？

てか、もうバッチリ智代にパンツ見られたな……。
まあ、トランクスだし、“おあいこ”だからもうどうでもいいか……。
「ちっ……何だよ？」
ようやくズボンを穿き終え、俺は少しだけドアを開けて親の前に顔を出す。
部屋の外には、お袋だけでなく親父までが来ていた。
「何だよじゃないでしょ！坂上さんに何かしたんじゃないの？」
「してねえよ。ただちょっと驚いてアイツが大声出しただけだって」
「驚いたって何したの！？」
「だから、してねえって……ただ、ズボン穿かずに寝てたから、それで驚いただけだよ」
「何で穿いてないの！？」
「帰ってきてシャワー浴びたんだよ！もういいだろ！？」
「坂上さん、何もされなかった？」
「あ、はい」
折角受け答えしてやったと言うのに、お袋はついに智代に直接呼びかけだした。
ヤバイ！！と内心焦る。
押し倒されたとか暴露されたら、ますますややこしい事に……！！
しかし、俺のその懸念は杞憂に終わった。
智代は俺の背後まで来ると、俺の肩を掴んで位置を入れ替わり、俺の両親の前に進み出て深々と頭を下げたのだ。
「つい大声を出してしまい、お騒がせしてすみません」
「坂上さん、何もされなかった？正直に言ってくれていいのよ？」
「いえ、本当に大丈夫です。ありがとうございました。オーキは優しい奴ですから、心配しないで下さい」
「そう……それならいいけど……ウチの子が何かしたら、遠慮なく言って頂戴ね」

「はい！お母さん、お父さん、ありがとうございました！」
再び頭を下げた智代を見て、二人はようやく階段を降りていった。
それでようやく俺も一息つく。
まったく……朝っぱらから、一体何なんだ今日は……？
「良いご両親だな……」
ドアの向こうを見ながら、智代が嬉しそうにつぶやく。
「そうかぁ？」
「他人でしかない私の事を心配して、わざわざ来てくれたじゃないか……」
「別に……普通だろ……？」
「そんな事は無い。中には自分の子供ばかり贔屓する親や、自分の子供にすら興味が無い親も居るんだ……お前のご両親は、素晴らしい人達だと思う……」
そう言った智代は、しかしどこか寂しそうだった。

4月12日：新婚ごっこ

「だったら……」

『ウチの子になるか？』と言おうとしてやめた。

またヤブヘビになりかねん。

「何だ？」

「いや、だったら、もっと息子の事も信用して欲しい物だ……飛んで来るなり俺がお前に何かしたみたいな言い方しやがって……」

「実際にしてたじゃないか」

ごもっともで……！

「……たんに浮かれて様子を見に来る口実が欲しいだけなんだよ」

「浮かれている？誰が？」

「だからウチの親……特にお袋が。親戚以外の女の子がウチに来る事なんて初めてだからな……昨日もお前が帰った後、根掘り葉掘り訊いてきてマジウザかった」

「お母さんに向かって“ウザイ”って言い方は無いだろ？……でも浮かれてるって事は、私が来た事を喜んでくれているって事か？」

「そりゃあ、まあ……じゃあ、顔洗ってメシ取ってくる」

この話も雲行きが妖しくなってきたので、席を立ってうやむやにする事にした。

しかし部屋から出て行こうとした所で智代に呼び止められる。

「ああ。……ん？取ってくる？待ってくれ！」

「……何だよ？」

「すまない。私に気を使ってくれるのは嬉しいが、お前の家の家族団欒を邪魔する気は無いんだ。だから家族と一緒に朝御飯を食べてきてくれ。私はここで待ってるから」

一瞬お袋の事をもっとつっこまれるのかと思ったが、そんな事か。

「気にするな。元からウチにはそんな物無いから」

「え？」

驚く智代を置いて、俺はその場を後にした。

下に降りて洗面所で顔を洗い、居間を通ると親父が一人パソコンの前で朝食を食っていた。

「ああ、彼女何て名前だったけか？」

そのまま無言で背後を通り抜けようとしたが、待ち受けていたかの様に画面を向いたままそんな事を訊かれる。

「坂上だよ……」

「ああ、坂上さんか、昨日母さんから聞かされてはいたが、お前には勿体無いくらい可愛らしい子じゃないか……こんな朝早くに来たのには、少し驚かされたがな」

「もう注意したよ」

「折角の彼女なんだ、大事にしろよ」

「わかってる」

今更彼女じゃないと否定するのも面倒なので、それだけ答えて台所へと向かう。

そこでもお袋が、小さなイスに座ってコンロをテーブル代わりにしながら飯を食っていた。

「あんた、坂上さん来るなら前もって言いなさいよ」

俺に気付くなりこれだ。

やはりここでも素通りはさせてもらえないのか。

「あいつが勝手に来たんだよ」

「あら、そうなの？」

するとお袋はニンマリと意味あり気でキモい笑みを浮かべる。

しかし、すぐに表情を曇らせいつもの小言を始めた。

「じゃあ、あんたの部屋も掃除してないんじゃないの？もう、だからこまめに掃除しなさいっていつも言ってるでしょ！大丈夫なの？坂上さんに嫌われたんじゃない？」

「関係ねえだろ……」
「無い訳無いでしょ！さっきもそれに驚いて喧嘩してたんじゃないの！？」
クッ、やはり智代の怒鳴り声が聞こえていたか……。
「……」
「ちょっと！どうなの！？コラ、待ちなさい！」
いい加減うんざりだ。
どうせエンドレスな小言に対して黙秘を決め込み、俺はさっさと朝食を盆に乗せその場を去る事にした。

「ただいま……って！！！？」
部屋のドアを開けた瞬間、飛び込んできた光景に目を疑う。
そこでは開かずの押入れが開け放たれ、その前で智代が封印されていた筈の大きなダンボールを今まさに開けようとしていたのだ。
「ああ、おかえり」
「何やってんだよお前は！！！？」
ガチャンと朝食の乗った盆をその辺に置き、思わず声を荒げる。
だが当の智代はまったく悪びれた様子も無い。
「お前が戻ってくる前に、布団を片付けておいてやろうと思ったんだ。けれど、押入れを開けたら一杯でとても布団を入れるスペースが無くて、よく見たらこんな大きなダンボールがあったから、これをどかして布団を入れようとしたんだ」
「誰がそんな事頼んだ！？今すぐそれを元に戻せ！！」
「結構重かったが、一体何が入ってるんだ？」
「いいから戻せっつってんだろ！！ああ、もう、どけ！！」
堪らずその間に割って入り両手を掴んで押さえこむ。
しかし智代は、やはり自覚して無いのか心外だとばかりに口を尖らせた。

「そんなに怒らなくてもいいじゃないか！」
「人の部屋を勝手にあさられたんだ！怒るに決まってるだろ！？」
「あさってなんかいない！布団を片付けようとしただけだ」
「同じ事だろ！？じゃあ、今日お前の部屋に行ったら、俺もお前の部屋を色々あさっていいんだな！？」
「良い訳有るか変態！！そんな事を言われたら、お前を家になんて呼べないじゃないか！！」
「だから……」
と、その時、またもやお袋が階段を上がってくる音が聞こえ、そのまま押し黙って振り返る。
「オーキ！坂上さんにまた何かしたの！？」
「してねえよ！何でもねえって！」
ドアに向かってぶっきらぼうに言ってから、一度智代を見てクイッとドアに向ける仕草で『お前も何か言え』と促す。
「ん……？ああ……お母さん平気です！私は無事です！」」
すぐには解ってくれず、続けて二回クイクイとやった所でようやく察してはくれたが、口から出たのはとても微妙な言葉だった。
それじゃあまるで、本当に何かしようとはされたみたいじゃないか！
「そう……坂上さん、何か酷い事をされそうになったら、すぐに言ってちょうだいね」
「はい！ありがとうございます！」
智代のはつらつとした声に安心したのか、お袋は余計な捨て台詞を残して戻っていった。
まったく……何のコントだこれは……？
しかしまあ、これではっきりしたな……。
やはり親が居る限り、ここで“下手な事”は出来ないって事だ。
例え当人の了承を得たとしても……。
「お母さんにまた心配をかけてしまったな……なるべく大きな声を出すのは止そう」

流石の智代も反省したのか、しおらしくなって殊勝な事を言った。
お前が出すからだろ！
と突っこみたかったが、また水掛け論になりそうなので止めておく。
「なあ、オーキ……そろそろ放してくれないか？」
「ん？ああ……とにかく、人の部屋の物を勝手にあれこれ触るなよ」
しおらしくなったついでに、はにかみながら言われたその言葉でずっと手を掴みっぱなしだった事に気付き、照れ隠しに注意しながらダンボールを片付け始める。
「そんな物入れたら、布団がしまえなくなるじゃないか」
しかし智代は相変わらず納得いかないらしく、再びケチを付け始めた。
「いいんだよ。ウチは万年床なの」
「そんなの良く無いだろ？」
「どうして？ベッドだって布団敷きっぱだろ？」
「それはそうだが……大体中は何なんだ？」
「何でもいいだろ」
「何でもいいなら教えてくれたっていいじゃないか。あ！さてはHな本だろ？」
悪戯っ子の笑みで言われたその言葉に、思わず閉めようとしていた手を止める。
本人は冗談のつもりだったのだろう。それを見て、智代の顔から笑みが消えた。
「ま、まさか本当にその中の物全部Hな本なのか？」
「まだ何も言ってないだろ？」
「お前だって年頃の男なんだ。そういった本の一冊や二冊はあるだろうと覚悟はしていた。でも、いくらなんでもそれは持ち過ぎだろ！？どれだけHなんだお前は！？」
「だ・か・ら、何も言って無いし。それとも、本当はそれが狙い

か？お前は朝っぱらから人の家に来て、エロ本探しに来たのか？」
「そんな訳無いだろ！何度も言うが、私は良かれと思って布団を片付けようとしていただけで、お前の部屋を物色していた訳じゃないんだ！」
「なら、もういいだろ？早く飯食わないと学校遅れちまうし」
智代が襲来してきた時点では早過ぎるくらいだったのに、今は既に丁度良いくらいの時間になっていた。
まったく、折角の朝の貴重な時間に、一体何やってんだろう？
深く考えると頭痛がしてくるので、さっさと飯を食う事にする。
「なあ……本当に家族で食べなくていいのか？」
俺がＴＶの前のゲーム機等を置いているテーブルに向かって食い始めると、すぐ隣に座った智代は不安気に先程と同じ事を訊いてきた。
「ああ。ウチは共働きでみんなバラバラだし、そもそも家族全員で食えるスペースが無いからな。正月くらいしか一緒に食うって事は無い」
「どうして？」
「どうしてって……玄関から階段上がってくる時見たろ？そこら中荷物だらけなの。ウチは家中あんな感じなんだよ。特に居間やキッチンは半分物置になってるし」
「そうなのか……でも、まったく作れない訳じゃないだろ？時間だって一人一人が努力すれば、出来無い事もないんじゃないか？私の家も前はバラバラだったが、今は出来るだけ一緒に食べる様にしている。やはり一日に一度くらい家族で食事した方が良いと思うんだ」
「別にいいよ……一人で食ってる方が気楽だし」
「どうして？味気無いじゃないか」
「てか、お前は朝飯食ってきたんだろ？」
「え？ああ、うん」
「そか。まあ、他所は他所、ウチはウチだ。でも、これでよ～く

解っただろ？ウチが人を呼べる様な家じゃ無いって事が……」
俺は妙に拘る彼女の意識をいったん逸らしてから、身も蓋も無い言い方で結論付けた。
今更ウチの家族団欒なんざ望んでないし。
親や弟と一緒に飯食った所で、かえって気まずいだけだ。
そしてそんな家族の姿も、みすぼらしいこの家も、人様にとても御見せ出来る物じゃないし、出来れば見られたくは無かった。
なのに智代は、そんな俺の気持ちなんてまるっきり理解しようともせず、屈託の無い笑みで言ってのける。
「そんな事は無いだろ。確かに荷物の多さには少し驚いたが、自営業なんだからそれは仕方が無いじゃないか。それに何と言うか…血の通った温かみのある“人が住んでる家”って感じがして、私は好きだぞ。お前の家」
この家が好き！？
そのあまりの衝撃に呆気にとられ、口に運んでいたウインナーをポロリと落とす。
「あっ！」
ハシッ！
それにいち早く反応した智代が、見事空中でそれをキャッチした！
おおっ、流石……！
「もう、お行儀悪いぞ」
「ああ、すまん」
「あ～ん」
感心している場合では無かった。
智代は立膝になって俺によりかかると、直接それを俺の口元に寄せてきたのだ。
「いや、いいから！皿に置いてくれ」
「どうして？ほら、直接食べさせてやる。あ～ん」
いや、それ一度俺がくわえたヤツなんだが……。
気付いて無いのか、それともまったく気にしてないのか、智代は

何の躊躇も無く無邪気に迫ってくる。
「どうしたんだ？こんなに可愛い女の子に食べさせてもらえるなんて、お前には滅多に無い事じゃないか？ほら、恥ずかしがらずに口を開けるんだ。あ～ん」
恥ずかしいって、分かってるんじゃないか！！
こいつまさか……全て解った上でやっているのか！？
クソ……相変わらずどこまで天然で、どこまで計算なのかわからんヤツだ。
「もういいから、お前食え……て、いや、やっぱ俺が食う！」
だから俺が一度食いかけたヤツだそれは！
て、落ち着け俺！テンパったら負けだ！
「もう、一体何が言いたいんだ？ほら、早く食べるんだ。あ～ん」
「……あ～ん……」
観念して口を開け、彼女の細く白い指につままれたウインナーに食いつく。
微かに彼女の指が唇に触れドキリとする。
「どうだ？美味しいか？」
「まあ……」
本当は味なんか判らなかったが、智代が満足そうなので何も言うまい。
「フフッ、何だかそうやって食べてると、本当にクマさんみたいだな」
そして智代はそんな事を言いながら、今さっきまでウインナーをつまんでいた指を何気なくペロリと舐めた。
お前それって……！？
「あっ！」
ハシッハシッ！
落雷を受けたかの様な衝撃に思わず落とした箸を、再び智代が空中でキャッチする。
おおっ、流石……って、まさか！？

「もう、今度は箸か。どうしたんだ?ぼうっとして……仕方が無い。よし、じゃあ私が食べさせてやろう!」

呆れた様に言いながらも得意満面の笑みだった。

やはりそうきたか!!

「いや、自分で食えるから!箸返してくれ!」

「遠慮するな。言っただろ?事故に遭って不自由だった弟を看病した事があるんだ。だから人に食べさせてやる事も割りと上手い物だぞ」

「いや、上手い下手の問題じゃないだろ?いいから返してくれ」

「いいじゃないか。私が食べさせてやると言ってるだろ?ほら、あ~ん」

ゲットした箸でウインナーをつまみ、左手を添えて俺に向けてくる。

ダメだ!コイツ俺の話聞きゃしねえ!!

エロネタによる牽制も段々効かなく……と言うか、開き直る様になってきたし。

どうする……?どうすれば……?助けてママエモ~ン!!

「オーキ、坂上さん、もうそろそろ行く用意しないと学校遅れるわよ」

「ああ、わかってる」

三度ノックされたかと思うと、今度はそれだけ言ってママエモンは去って行った。

ありがとうママエモン!いつも内心感謝してます!

「ほら、時間無いから」

智代の返事も待たずに引っ手繰る様にして箸を奪還し、そのまま朝食の残りを口にかきこみ始める。

「ああ、もうこんな時間なのか……」

少しつまらなそうな顔をしたが、時計を見て彼女も流石に納得した様だ。

しかしまあ、智代の奴どんどん調子に乗ってくるな……。

本当に今後コイツをどうしてくれよう？

数分と経たず食い終わり、既にズボンは穿いてあるのでYシャツだけ着て、盆と授業とは関係の無い本ばかり入ったカバンを持つ。

よし、準備完了だ！

「じゃあ、これ返すついでに歯磨いてくるから、先に玄関で待っててくれ」

「待て」

そう言って部屋を出て行こうとした俺を、何かに気付いた智代が呼び止める。

「ブレザーは着て行かないのか？」

「着ない。行くぞ」

「待て」

再び行こうとすると、今度は俺の手を掴んで智代が止める。

「お前が普段からあまりブレザーを着ていない事は知っている。でも、どうしてなんだ？」

「メンドイからだ。行くぞ」

「待て！面倒って、そんなに大した手間じゃないだろ？」

「ああ、もう！ブレザー着たらネクタイもしないとダメだろ？俺はネクタイするのが苦手だから手間がかかるんだよ！ほら、わかったら行くぞ」

毎度の『どうして？』攻勢にイラついて、一気にまくし立てて行こうとする。

だが、あの坂上智代がその程度で引き下がる筈も無い。

素早く俺の前に立ちはだかると、俺の両肩を掴んで部屋の中央に押し戻していく。

「なんだ、そんな理由だったのか。仕方の無い奴だな。なら、私がネクタイを締めてやろう。これで問題は解決だ」

やっぱりそうきたか！！
「いや、いいから。時間ねえし」
「そんなの、大人しくしていてくれれば直ぐに済む」
「てか、ネクタイ自体嫌いなんだよ。堅っ苦しいし」
「好きとか嫌いの問題じゃないだろ？制服はちゃんと着る物だ。先生に注意されないのか？」
「されるけど、別に校則に違反してないだろ？」
「違反してなくても注意されるなら着た方が良いだろ？そんな事で先生に目の仇にされたら、つまらないじゃないか」
「いいって、今更」
「良くない！いいから今日だけでもして行くんだ！」
ついに押し切られドンと背中が壁にぶつかる。
そこは壁に掛けられたブレザーの真横だった。
「もう好きにしろ……」
「初めから素直にそうしていればいいんだ。まったく、お前は意地っ張りだな」
意地っ張りはお前だ！！
そう思うも、もうつっこむ気力も抗う手立ても無い。
それをいいことに、智代はブレザーと一緒にかけてあったネクタイを取ると、俺の首に回し始める。
「……お前、ネクタイ締めれるのか？」
「うん。弟で練習したからな。こういった事も出来た方が女の子らしいだろ？」
「まあ……な」
息がかかりそうな程間近で微笑まれ、堪らず上を向いて視線を逸らす。
やっぱり智代は可愛いし、柔らかいし、いい匂いだ。
しかもさっき間接……いやいや、その程度の事であまり舞い上がるな俺。
「去年の父の日にな……」

「へ！？」
悶々としている所にいきなり話しかけられ、思わず声が上ずる。
「弟とお金を出し合って、ネクタイを送ったんだ」
「ああ、それでか」
「うん……」
手を止める事は無かったが、智代は遠い目をしていた。
事情はよく分からないが、ずっと荒れていたと言うしな……きっと感慨深い物があったんだろう。
その話のおかげで、俺の心も大分落ち着きを取り戻す。
「よし、完成だ！うん！我ながら上手く出来た」
最後の結び目をキュッと上げ、一歩下がって確認してから無邪気に自画自賛する。
「サンキュ」
「うん。次はブレザーだな」
「あ、ああ……」
そして当たり前の様に掛けてあるブレザーを取ると、甲斐甲斐しく袖を通し易い様に広げてくれた。
ああ、なんか本当に、これじゃあまるで……。
気恥ずかしさに耐えながら袖を通し、ボタンを留めて振り返り御披露目する。
「うん。なかなか似合ってるじゃないか。やっぱりお前もちゃんとした格好をすれば格好良いと思うぞ」
「……じゃあ、行ってくる」
「行ってらっしゃい！」
照れ隠しにそう言って、俺は一人部屋を後にした。
「……って、私も一緒に行くんじゃないか！！」
部屋を出た所でようやく聞こえてくる、後ろからの慌てた声にほくそ笑みながら。

4月12日：行こう！あの高みへ（前書き）

・修正&少々加筆しました　7／8

4月12日：行こう！あの高みへ

食器を片付け速攻で歯を磨き智代の待つ玄関に向かうと、余計な物まで来ていた。
「朝早くに突然押しかけたうえ、騒がしくしたりして済みませんでした」
「いいのよ。こんな汚い家でよかったら、また何時でもいらしてね」
「はい！是非また来ます！」
ああっ、そんな事言ったら本当にまた来ちゃうぞ……てか絶対来る気だ！
……明日は日曜だし部屋を掃除しておこう……。
などと思いつつ、無言でお袋の横をすり抜け靴を履き始める。
すると普段と違う俺の姿を見て、お袋は軽く驚きの声をあげた。
「あら、ちゃんとブレザー着てるなんて珍しいわね」
「別に……」
「私がネクタイを締めてあげたんです！」
すかさずいらん事をアピールするな！
「まあ、そうなの！？この子ったら誰に似たのかホント不器っちょでねえ……ネクタイ上手く締めれない物だから『嫌だ』とか言っていつもして行かないのよ」
「はい。さっきもそのままYシャツで行こうとしていたから、なら私がって」
「あら、そうなの……！普段は私が締めてあげようか？って言ってもやらせてくれないのに、坂上さんなら良いのねえ」
ニヤニヤしながら、いらん事をばらすな！！
「そうなのか？」
「……さっさと行くぞ。遅れちまう」
更にいらん事を確認してくる無邪気な智代についに居た堪れなく

なった俺は、急かす様に言って二人と顔を合わす事無く足早にドアから出て行く。
「あっ、こら！それじゃあ、お母さん行って来ます」
「行ってらっしゃい。気をつけてね」
「はい！」
俺の代わりにお袋と元気に挨拶を交わし、慌てて智代も家か出て来た。
しかし既に門扉の外に居た俺は、彼女を一瞥するだけでそれを待つこと無く、むしろ逃げる様にやや小走りで歩き出す。
だが、
「こら！待て！」
「！」
逃げる物を追い駆ける習性を持つ天性の捕食者（ぷれでたー）である彼女は、瞬く間に追いついてくると逞しい前脚で獲物を捕獲するかの様に俺の左腕に抱きついて来る。
「少しくらい待ってくれても良いじゃないか！女の子を置いて勝手に行く奴があるか！それに、お母さんへの『行ってきます』はどうしたんだ！？」
「時間が無いんだって！時計見ろ！」
耳元での噛み付かんばかりの抗議すら悩ましく、押し当てられる堪らなく柔らかな物に精神までも捕獲されそうになるが、羞恥に後押しされた理性と、切迫した状況がそれを許さない。
「ああっ、そうだった……！これは少し走った方がいいか？」
「そういう事だ」
そう言いながら自分の左腕の時計を見て“しまった”という顔をした智代だったが、しかし一向に俺の腕を放す気配が無い。
「……だから走るんだ」
「うん。走ろう！」
「……いや、だから、この体勢じゃ走れないだろ？」
「大丈夫だ。お前が走り出したら私も同じ速さで走れば問題無い」

自信満々で言い切った！
腕組みながら走る気かコイツは！？
「いや、走り辛いし、何より恥ずかしいから止めてくれ」
「いいじゃないか。二人三脚みたいな物だと思えばいい」
「いやいや、普通に二人三脚が恥ずかしいから」
「どうして？体育祭とかではよくやってるじゃないか……一度ちゃんとした形でやってみたかったんだ」
「いやだから、それは体育祭とかでやれよ！てか、やった事無いのか？」
「だから“ちゃんとした形で”だ。小学生の時一度有るには有るが、その時は相手の子と走る速度が合わなくて、練習で転んでしまった相手を引きずってそのままゴールしたんだ。そうしたら、何故か二人三脚の選手から外されてしまった……練習とは言え、一着だったのにだ……そしてそれ以来、二人三脚の選手に選ばれる事は二度と無かった……」
まったく自覚の無い智代は寂しそうに遠くを見つめていた。
小学生の時から、そんなだったのか……。
不憫な物である。
コイツも周りも不憫だ。
多少の規格外れくらい、誰か一人でも笑って受け入れて入れてやれば、また違ったんだろうに……。
「……走るぞ！」
「へっ？あっ！！」
告げると同時に俺は掴まれていた腕を引っこ抜き、またも智代を置いて走り出した。
こんな事をしている間に、時間ばかりが過ぎて本当にヤバクなりそうだ。
「これじゃあ、普通に走っているだけじゃないか」
「いや、それの何が悪いんだ……？」
やはり智代はすぐさま不満顔で追いついてくる。

俺も格別速いって訳じゃないが……つくづく出鱈目な速さだ。
しかし俺はここで、あえて無謀とも言える賭けを提案する。
「わかった。じゃあ、こうしよう。このまま校門まで競争して、お前が勝ったら今度二人三脚でも何でもしてやる」
「本当か？面白い、受けて立とう！約束だからな！」
もう勝った気でいる智代は、いつもの自信に満ちた笑顔と風になびく長い髪を残し、スピードを上げ俺を引き離して行く。
だが俺は、その背に向かってこう叫ぶ。
「その代わり……俺が勝ったら、わかってるんだろうな？」
「……何をする気だ？どうせHな事だろ？」
「さてな……負けてからのお楽しみだ」
やはり気になったらしく、振り向きながら走る智代に、邪悪な笑みで言ってやる。
「別に楽しみな物か！まあ、いい。負けなければいいだけの事だからな！」
向き直った智代は更にトバしていき、ますます距離は離されていった。
だがこれでいい。
狙い通りだ。
智代は確かに瞬発力は凄まじいが、持久力的に然程では無い事は前の戦いで確認済みである。
俺の家から学校までは、近いとは言え中距離走くらいの距離はあろう。
何より学校前に在るのは、この辺りのアスリートの間では“心臓破り”と名高い２００メートルの上り坂だ。
智代がいくら速くとも、そんな坂道を走り慣れてはいまい。
そして俺にとっては、ガキの頃から本当に嫌になる程走り続けた道でもある。
「勝負は……あの桜並木だ……！」
俺は自分のペースを守りつつ、虎視眈々と勝負の時を待った。

勝負所である桜並木が見えてきた。
だが、想定外の問題が二つ。
一つは……すでに俺自身の体力の限界にきてる事だ！
自分のペースは守ってきたつもりだが、やはり部活を辞めてからのブランクはデカイなあと改めて思い知った。
そしてもう一つは……、
「遅いじゃないか！勝負の事を忘れて歩いてるのかと思ったぞ！」
智代が坂の入り口で立っていた！
俺を待ってるフリして休んでやがったのだ！
そのまま無言で走り抜ける俺を待って、並んで一緒に走り始める。
ふわりと風が運んでくる彼女のにおいと、聞こえてくる息遣い。
不覚にもそれでかなり……あ、いや、少し、ほんの少しだけ元気がでた。
「……どうした？ダッシュで走っていかないのか？」
「うん。待ってる間に気付いたんだが、最終的にお前にさえ勝てればいいんだ。なら、別に初めから差をつけなくても、一緒に走ってゴールする時に先に行けばいいだけの事だろ？」
いや、それくらい走る前に気付こうよ！
相変わらず得意気で、自分の勝利を微塵も疑わない笑顔だった。
もっとも、既に体力の限界を感じている俺と、多少なりとも休んでいた彼女では、勝敗は火を見るより明らかか……。
「……てか、もう時間的に歩いても余裕じゃねえ？」
「ん？そうだな。余裕と言う程じゃないが、もう歩いても間に合いそうではあるな」
走りながら当てずっぽうで言ってみると、智代も時計を見て少し安心した様だった。
とりあえず、普通に歩いていけば遅刻する心配は無いのだ。

「じゃ、歩くか？」
「そうだな。でも、校門が見えたら私も走るつもりだからな」
「ちっ……」
「お前の魂胆なんてお見通しだ。もっとも、お前が勝負を降りると言うなら、それでも構わないぞ。ああ、もちろん、バツゲームはやってもらうからな」
俺の策を看破し、得意満面で降伏勧告までしてくる始末。
まったく……もう走る必要が無いってのに……。
ならば仕方有るまい。
「じゃあ、いいんだな？お前が負ける事になっても」
「うん。あっ、いや、Hな事をされてもいいと言う訳では無いぞ。負けるつもりが無いだけだ」
「……どうだか……！」
俺は走りながら右手に意識を集中させ瞳を閉じる。

黙想……。

俺の体力は既に限界、対して智代は一度休んでおり、勝利を確信している事もあってか気力が充実している。
つまり……この勝負俺の勝ちだ。
休んでいたという事は、智代もまた一度限界迎えたと思っていい。
その証拠に、俺に悟られまいと自然を装ってはいたが、額の汗はひいてはおらず、息も整ってはいなかった。
そして、意外と大きなポイントはその休み方だ。
彼女は立って待っていた。
『つっ立って休むな！』
運動系の部活をやっていた人間なら、誰しも言われた事があるだろう。
激しく辛い運動から解放された時、“もう動きたくない”と思う気持ちは解るが、それでも急にその場に立ち止まったり、寝転んだ

りする事はあまり身体に良くない。
人間の身体は、急な変化についていく際“負荷”が加わる。
それは始める時だけでなく、やめる時も同じ事だ。
いや、そのままもう運動しないのなら、それ程リスクは無いのかもしれない。
だが、彼女は再び走らないといけないのだ。
一度“休憩モード”に入った身体で。
完全に体力が回復しないまま。
この長い坂道を……だ。
ここまで軽いランニング程度の速さで一緒に走って来たのは、むしろ彼女の身体を思っての温情であり、やめようと言ったのも俺なりの思いやりである。
それなのに……！
コイツときたら自分が負けるなんて夢にも思っていない。
あくまで強気で自信満々なのだ。
そんな風でいられたら……もう勝つしか、勝って滅茶苦茶にしたくて堪らなくなるじゃないか！
湧き上がる欲望が、体力の枯れ果てた身体に再び力を与える。
熱く滾る胸の想いが、身体の隅々に行き渡り、眠っていた力を呼び覚ます。
人間が感じる体力の限界なんて、実は本当の限界の半分にも満たない。
リミッターを解き放て！
ここからが、この川上央己の真骨頂だ！！

「！！」
開眼と同時に、俺は走る速度を一気に上げ智代を三度置き去りにする。
残りはまだ半分以上あるが、俺はここからスパートをかけたのだ。
「オーキ！？」

それに驚き暫し呆けた智代だったが、彼女もまた再び闘争心に火がついたのか、獲物を見つけた狩人の如き挑戦的な笑みを浮べ、疾風の如き速さで追跡してくる。

「こんな所からスパートをかけて平気なのか？」

徐々に追いつき並んだ彼女の、余裕とも強がりとも苦情ともとれる台詞。

珠の汗にまみれながらも、どこまでも不敵で挑戦的な笑み。

彼女自身が大気を切り裂き生じる風によって長い尾の様になびく髪。

その長さを生かした広いストライドで、跳ねる様に地を蹴る白く美しい脚。

そして……その度にハラハラさせてくれる短いスカートと、それに合わせて確かに揺れる豊かな胸。

まったく……気を抜くと思わず見とれてしまいそうになる。

今の俺には彼女意外の全ては色の無い風景に過ぎない。

登校中の他の生徒達も、美しく咲き誇る桜さえも。

ああっ……やっぱり躍動する智代は堪らなく綺麗だ。

「辛かったら歩け」

「それはこっちの台詞だ！私は負ける訳にはいかないからな」

一進一退の攻防。

やはり体力的にキツイのだろう。さすがに智代のスピードは落ちている。

だが、それでも差はつかず、その表情はあくまで楽しそうだった。

まったく化け物め……！

そう思いながら俺もニヤリとしてしまう。

ずっとこうして……。

コイツとずっとこうして、どこまでも並んで走って行きたい。

遥かなる高みの、その先まで……。

ついにゴールである校門が見えてきた。

「「！」」

まったく同時に互いに向き合いアイコンタクトを交わすと、残る力を振り絞りラストスパートに入る。
「なっ！？」
ここにきて驚かされたのは、俺の方だった。
智代がぐんと身体一つ分前に出たのだ。
やはりトップスピードの違いか、それとも余力差か。
温情なぞ不要。むしろ裏目ったか？
だが……これで終わる俺じゃねえええええええええええ！！
「……ほら、全力で走った後急に止まったら身体に悪いぞ……掴まっていいから、このまま昇降口まで歩け」
二人でほぼ同時に校門を通過するなり、その場で前かがみになって膝に手を付き立ち尽くしてしまった智代の傍まで寄って手を差し伸べる。
「ハアハア……うん……すまない……」
肩で息をしていた智代は、それに掴まると言うより、俺の腕になだれかかって身体を預けてきた。
「ちょっ、お前な……周り人居るだろ？あんまくっ付くな。みんなが見てる」
「いいじゃないか……私が勝ったから、どうせ二人三脚するんだしな」
「それとこれとは別だろ。てか、今のは同着か最後俺がまくっただろ？」
「いいや、胸の差で私の勝ちだった」
「……胸の差か？」
「胸の差だ」
それが触れている部分に意識を集中させる。
……確かこれにはどう足掻いても俺に勝ち目が無いな……！！

「……H！」
「何も言ってないだろ？」
「今絶対Hな事を考えていただろう？顔に書いてあったぞ」
そう言いながら俺の頬に手を伸ばしてきたかと思うと、智代はそこに“H”の文字を指で書いた。
しまいには本当に揉むぞテメエ！！
「……とにかく、一先ず歩け！折角走ったのに遅れちまうぞ」
「フフッ、そうだったな」
クスクスとおかしそうに笑いながら、ようやく智代は俺の腕に掴まりながら歩きだす。
まったく、始業時間間際の駆け込み組の連中で結構人通りは多いってのに……！
「てか、あちいな！こんな日に限ってブレザーだし……」
気を紛らわせるべく、思い出し様に言ってネクタイに手をかけ弛めようとしたが、ふと手が止まる。
智代が折角締めてくれた事を思うと、やはり忍びない気がしたからだ。
しかし、俺のそんな仕草で察したのか、今度は智代が俺のネクタイにその細い指をかけたかと思うと、そのまますするりとそれを解いて微笑む。
「私への気遣いは嬉しいが、別に息苦しい時は外したって構わない。ネクタイくらい、これからは私が何度でも、毎日だって締めてやるからな」
コイツこれから毎朝押しかけて来る気だ！
そう予感し、これから毎朝この調子かと顔を引きつらせた。

4月12日：最初で最後のお花見

土曜日の一限はいきなり古文だ。
「ふむ……次、川上……は寝とるので木村」
「あ、はい」
お茶目な老教師が寝ている俺を晒し者にする度にクスクスと笑いが漏れる。
普段は極力起きている古文だったが、無理だった。
ただでさえ寝不足な上に、早朝のバイトとトレーニングに加え、朝っぱらからの智代の襲来と家から学校までの全力疾走だ。
もはや肉体的にはもちろん、精神的にも疲労のピークに達し、教室に着くやそのまま机につっぷして今に至る。
ネクタイは智代に預けたままなので、結局ブレザーも脱いだ。
「ふむ……次、川上……は気持ち良さそうに寝とるので児島」
「はい」
幸村先生、ごめんなさい。今日は勘弁して下さい。
「ふむ……次、川上……は寝とるので、起こそうとせんでよいぞ仁科」
「は、はい」
フェイントの都度起こそうとしてくれていたお隣の仁科は、赤くなりながら慌てて手を引っ込め、聞こえてくる笑い声に恥ずかしそうに肩を竦めた。
ああっ、仁科もホントすまない。
この借りはいつか必ず……。

子供の頃、ヒーローに憧れた

どんなピンチにも最後は必ず逆転する

そんなヒーローになりたかった

でも、現実はそう甘くない

身体が大きい訳でも、運動神経が良い訳でもなく、おまけに喘息持ちの俺だ

ピンチ自体は日常茶飯事だった

でも、そこから挽回なんて、出来た事なんて無い

秋生さんや他の人から助けられる事はあっても……

そもそも相手より弱いから劣勢になるんであって

相手より弱いのに、どうして劣勢から挽回出来よう？

小学生になって、それなりに苦い思いをしてきて、現実を知って

特撮物とかも嘘っぽく見えてきて

ヒーローになんて成れないんだと

本当のヒーローなんて居ないんだと

そんな事初めから解っていたさと
冷めてきていた
でも、ある日たまたまＴＶで視たサッカーのワールドカップ
そこに……真のヒーローは居た
彼は祖国の英雄だった
けれど何故かスタメンには出れなくて
それでもチームのピンチの時には現れ
そのファンタジックなプレイで、たびたびチームを救った
世界最高の選手達が集うその場所で
奇跡的とも言える逆転劇を、幾度もやってのけた
凄かった
彼が出てくるたび、胸が躍り熱くなった
そして……改めて確信した
ヒーローは居るんだと
やっぱり俺はヒーローになりたいんだと……

「オーキ、起きろ！ほら、ネクタイもって来たぞ」

名前を呼ばれながら身体を揺すられた刺激で夢から覚め、ゆっくりと顔を上げると、目の前に居たのは情熱的なエンジのブルマだった。

「……ブルマ……」

「ブルマじゃない。私だ」

そう言われて白い体操服を辿って視線を上に向けていく。

するとそこには小高い二つの山が連なり、その雄大さに思わず目を奪われた。

「おっぱいじゃない。私だ」

「いや、何も言ってないだろ！てか、智……坂上！」

美しい少女の口から飛び出た刺激的な単語に、寝ぼけていた頭脳は急激に覚醒し、ようやく今自分が置かれている状況を把握してドッと汗が滲み出る。

ここは学校で、俺の教室で、何故か他所のクラスの智代が居て、しかもブルマ姿で、他者には聞かれたくない事を口走っていて、当然目立ちまくって注目の的だ。

「今、私のおっぱいをジッと見ていたじゃないか」

「っ！！とにかく来い！！」

ああっ、また言っちゃってるよ……！！

このままここでコイツと話すのは色々とマズイ！！

そう判断した俺は、慌てて立ち上がり智代の腕を掴んで引っ張って行こうとする。

だが智代は足でブレーキをかけて歩こうとはしてくれない。

「待て。いきなり何だ？すまないが、あまりゆっくりしている暇は無いんだ。制服に着替えないとならないからな。本当は朝のホームルームの後に来るつもりだったんだが、私のクラスは一限目体育で着替えたり移動で時間が無かった」

「だったら、ネクタイはもういいから着替えろよ。そんな格好でウロウロすんな」

「そんな格好って、体育の後直接来たんだから仕方無いじゃないか……それとも、私には似合っていないと言う意味か？」

「いや、そうじゃなくてだな……とにかく今日はもういいから。お前が授業に遅れちまう」

お前のブルマ姿を他の野郎共に見せたくないだ！！

などと言えるはずも無く、俺は視線を逸らしながら智代の背後に回ると、いつもよりも薄い布越しに感じる彼女の体温と感触に内心ドギマギしながら退場させるべく押していく。

「でも、折角してきたんじゃないか」

「いいから……またいつでもやってくれるんだろ？来週から……な？」

「！」

他の奴に聞こえない様、殺し文句を耳元でささやく。

いや、出来れば恥いので勘弁して欲しいが、こんな人前でやられるよりましだ。

「うん、わかった。私の都合ですまない」

どうにか手打ちにしてくれたらしく、振り返った智代は笑顔で謝ってくれた。

その引き換えに、何か大切な物を失った気もするが……。

「じゃあ、ネクタイは返しておくな」

そう言いながら智代は、指で自分の襟首をクイッと広げたかと思うと、

「！！」

胸元から長い紐状の物……“俺のネクタイ”を取り出して見せる。

な、なんて事を……！！
てか、もしやそれをそこに入れたまま体育の授業やってたのか！？
「すまない。仕舞う場所が無かったから、一先ずここに入れてしまったんだ……皺になってしまったな……」
し、仕舞えるんだ……！！
「き、気にすんな！元々だし……！」
智代はネクタイの有様を見て本当に済まなそうな顔をしたが、俺は励ます風を装いながら彼女の温もりと芳香の残るそれをさりげなく受け取り、頬ずりして匂いを嗅ぎたい衝動と一緒に素早くポケットにねじこむ。
「それじゃあオーキ、また放課後にな」
「ああ。またな……」
長い髪を翻して去って行くその背を見送ったその後、
ギラン！！
とりあえずトイレの個室に向かった俺の瞳は、さぞかし血走っていた事だろう。

帰りのホームルームが終わるや否や、「じゃっ」と仁科へ軽く挨拶だけして足早に教室を出た。
また智代が襲撃してくる事を警戒しての事だ。
「オーキ！」
案の定、ほとんど同時に隣のクラスから出てきた智代と鉢合わせとなる。
間一髪か……危ない危ない。
「まったく一緒のタイミングで出てくるなんて、気が合うな」

「……行くぞ」
周りに互いのクラスメートが大勢居るってのに、尻尾を振る子犬の様に寄って来てそんな事をのたまうので、俺は素っ気無い態度で歩き始めた。
今更だが、校門ででも待ち合わせるんだったな……。
「こら、『行くぞ』じゃないだろ？それとも聞こえなかった？同時に出て来て、私とお前は気が合うなと言ってるんだ」
などと後悔している人の気なぞ知ったこっちゃ無い様で、小走りで隣に並んだかと思うと、同じ台詞を繰り返しながら詰め寄ってくる。
「ああ、そうだな……で、どうするんだ？直ぐに行くのか？」
面倒そうに肯定してやって、“どこに”とは言わずに予定を伺う。
「いや、先にお昼ご飯にしよう。どうせなら桜並木で食べないか？」
「ほう……花見か？」
「そういう事だ」
俺に異存が有る筈も無かった。

俺達は並木道沿いのひらけたスペースに智代が用意してきたビニールシートを敷いて陣取り、同じく彼女が持ってきた弁当を広げた。
「いい場所だな。眺めもいいし、桜も綺麗だ。さすが地元住民だな」
やはり周到に用意してきたお茶を二人分酌みながら、智代が感心してみせる。
この場所は道側が一段高くなっているので通行人からは見えずらく、また桜だけでなく外側には町の景観も望める、俺が知る上でこの桜並木のベストスポットなのだ。
「さあ、お花見を始めよう」

「ああ」
俺は自然に自分の前に置かれたコップを手に取った。
しかし、どういう訳だが智代は、何やら俺を上目使いで見つめたまま固まっている。
「……乾杯しとくか？」
「あ、ああ！うん！しよう！」
「じゃあ、乾杯！」
「かんぱ～い！」
ひょっとして、何をしたらいいか分からなかったのか？
俺が促してやると、慌てて彼女もコップを手にし、コツンとぶつけ合って口に運ぶ。
「「……ふう」」
そして互いに中身を一気に飲み干し、二人同時に息をついた。
それに気付いて顔を見合わせ、その可笑しさに笑い合う。
「また一緒だったな。やっぱり私達は気が合うんだ」
「いや、てか……」
女の子が一気飲みすんなよ！
と、突っこもうかと思ったが、飲み干すのが本来の礼儀かと思い直す。
「てか……何だ？」
「いや、いい飲みっぷりだなってな」
「乾杯は飲み干すのが礼儀だからな。念の為に言っておくが、普段は一気飲みなんてしないぞ。今のはあくまで乾杯だからだ……それとも、やはり乾杯の時でも少しづつ飲んだ方が女の子らしいか……？」
自身で作り出した“女の子らしさ”の迷宮に自らはまった様子。
まったく、微笑ましい限りだ。
「……あまり笑うな。恥ずかしいから」
「まあ、そうだな。とりあえず食べよう。いただきます」
「うん！召し上がれ！」

照れて赤くなった智代を肴に、箸を手に取る。
彼女が朝早く起きて作ってきたのは、二段重ねの重箱だった。
そこにはサンドイッチやら、唐揚げやら、卵焼きやらと言った定番のおかずがぎっしりと詰められており、一応見た目は豪華で美味そうなお弁当だ。
「……てか、よく見ると結構量有るな……これ二人前どころじゃなくね？」
「うん。ウチの家族四人で丁度いいくらいだからな」
四人分か……まあ、女性も混じってだから、実質男三人分くらいだが……。
「……ひょっとして、弟もここに来る予定とか？」
「いや、弟は家で待っている。お昼の事は訊いて無かったが、家に有る物で済ませるんじゃないか？」
「……そうか……」
智代もそんなに食う方では無いから、どうやら二人前くらいは俺が食わねばならんらしい。
そうなると……問題はやはり“味”か……。
俺には“早苗さんのパン”で不味い物に対する耐性が有るが、それでもそれを二人前以上となると、かなり厳しい戦いになるだろう。
「私は元々そんなに食べないから、遠慮無く好きなだけ食べてくれ」
智代は挑むような瞳を向け、俺に食べろと催促してくる。
どちらにせよ、食うしか道は無いのだ。
ええい、ままよ！
俺は唐揚げを一つ掴み、覚悟を決めて口に放り込む。
「どうだ？美味しいか？」
「……ふむ、普通に美味いな」
その唐揚げは、十分及第点の味だった。
味は若干薄目だが肉に下味もついてるし、からっとよく揚がっている。

うん。これなら何個でもいけそうだ。
「普通に美味しいって、曖昧だな……普通なのか美味しいのか、どっちなんだ？」
「だから、まあ、どちらかと言うと……美味い」
褒め慣れてない所為か、思わずちょっと照れて目を逸らす。
しかし智代はそれに安堵した様に胸を撫で下ろすと、嬉々として自分も食べ始めた。
「一応味見はしてきたから大丈夫だろうとは思っていたが、お前の口に合って良かった」
「このサンドイッチはカツサンドか？」
次いで気になっていたサンドイッチを手に取る。
「うん。この前のお返しにと思って、自分で作ってみたんだ」
「ほうほう……時間経ってるから少ししっとりしてるが、悪くないな」
「そうか……やっぱりな……どうしてもキャベツやソースの水分でベチョッとしてしまって、お前から貰ったカツサンドみたくサクッとしないんだ」
「いや、でも、普通こんな物だぞ？購買のと比べたら、遜色無いと思う」
「そうか……ああ、こっちの卵焼きは自信作だ」
そう言って、気を取り直して挽回しようとしたのか、出汁巻き卵を自ら掴むと、何故か左手を添えながら俺の口元に差し出してきた。
て、まさか！？
「はい、あ～ん」
「……いや、自分で食えるから」
「遠慮するな。それとも、卵焼きは嫌いなのか？」
「そうじゃなくて……」
「ならいいじゃないか……ほら、あ～ん」
「……」
何を考えてるんだコイツは！？

やはりどうやっても引く気は無いらしい。
俺は一応周囲を確認してから渋々口を開け、口の中に入れられたそれを咥えた。
「どうだ？」
そう訊いてくる頬がほんのり染まっている。
まったく意識して無くもないのか！？
もう咀嚼しながら、俺の頭の中もグチャグチャだ。
「甘い……！」
麻痺した味覚と思考力で判別に時間がかかったが、多分それは状況的な要因だけじゃないと確信を得て率直に感想を述べる。
「うん。甘くて美味しいだろ？」
「ん～、俺はどっちかって言うと、辛い方が好きかな……」
「そうなのか？」
「うん。てか、南瓜とかもそうだが、単体ならいいけど、甘い物をおかずに飯食えない性質だから……」
「そうか……覚えておく……」
自信作が不興に終わってか、智代はしゅんとなって俯いてしまった。
失敗だったか？
でも、人それぞれ好みが有るんだし、我慢するより知って貰った方がいいだろ？
まして、今後も作って貰うつもりなら……って、つもりかよ俺！？
「あ、でも……こっちの煮物はよく味しみてるし、御浸しもいい感じだぞ？」
「……」
他で励まそうとするも、反応が無い。
折角の花見なのに横でしょげられてもなあ……どうした物か……？
「智代、あ～ん」
意を決した俺は卵焼きを掴むと、今度はこちらから“お返し”をする事にした！

「ん？な、何だ？」
「あ～ん」
「べ、別に私は自分で食べれる」
「あ～ん」
「……や、やめてくれ。人に食べさせて貰うのは恥ずかしい」
「あ～ん！」
「……も、もう、仕方の無い奴だな」
人に散々やっといて、何だその言い草は！？
俺が声に苛立ちを込めると、ついに智代も観念したらしく、目を瞑っておずおずとその可憐な華の様な唇を開き始める。
「あ～ん」
俺は甘い卵焼きをゆっくりと彼女の口に近づけて行き、
「あ～ん」
ついに開ききったその瞬間、一瞬だけ彼女の口腔をかすめ、閉まると同時に反転させて卵焼きを自分の口に放り込んだ。
「うん。やはり甘いな……」
「！！」
空を食べさせられた彼女が、真っ赤になって俯きプルプルと振るだす。
そしてついにそれが臨界点に達すると、いつものぽかぽかパンチが飛び出した。

4月12日：冷徹なる刃

「ふう……食ったぁ……！」

最後のデザートのウサ耳りんごをどうにかお茶で流しこんだ俺は、そのままビニールシートに大の字に寝転んだ。

「こら、お行儀が悪いぞ。食べてすぐに寝ると、牛さんになると言うじゃないか。でも、ちゃんと全部食べてくれた事は凄く嬉しい。正直に言えば、少し作りすぎたかな？と思っていたんだ……」

「……今度作る時は、この半分くらいでいいから……」

「うん。覚えておく」

ぽかぽかとした春の陽気と心地良い風。

頭上には桜が咲き誇り、ふわりと舞う花びらが眉間に落ちる。

少しこそばゆいが、それを払う事無く目を閉じ、今この瞬間の全てを肌で感じた。

ああっ、やはりいいな桜は……。

淡く、儚く、謙虚で、健気で……だから尚更美しい……。

それに……この桜はもう……。

「オーキ？……本当に寝てしまったのか？」

その声で遠のきかけた意識が寸での所で繋ぎ留められ、ゆっくりと目を開ける。

「……良かったよ……最後にお前とここで花見が出来て……」

「最後？」

俺のその台詞に、こちらが思っていた以上に智代は驚き不安気な顔をした。

少し紛らわしかったか？

いや……でも……。

「この桜は今年で見納めなんだ……アホな伐採計画があってな…

…来年には、この桜並木は全て伐られちまうんだ……」

「……やはりお前も知っていたんだな」

あれ？
思わぬ返答に、伸ばしていた手で反動をつけ起き上がると、彼女もまた珍しく憂いを帯びた微笑を浮べていた。
それで俺も確信する。
彼女も同じ想いで、花見をしようと言い出したのだと……。
「そうか……」
「それでな、オーキ……私の家に行く前に、実はお前にどうしても話しておきたい事があるんだ……聞いてくれるか？」
思い詰めた様な真剣な表情で彼女は訊いた。
それで何か大切な話しなのだと察し、俺も居住まいを正し座り直す。
「ああ……何だ……？」
「うん。私がある目的の為に生徒会に入ろうとしている事は以前話したな？」
「ああ」
「その本当の目的についてだ。私の過去や家族の事も関係が有るから、少し長くなるかもしれない。でも、お前には知っておいてもらいたいんだ」
「別にいいよ。聞かせてくれ」
「ありがとう」
俺の答えを聞いて安堵した様に微笑むと、智代は脚を崩しながら町の方に向き変え、女座りから膝を抱える体勢、いわゆる体育座りに座り直し遠くに目を向けた。
「お前も知っている事だが……私は昔荒れていた。荒れる理由……いや、多くの人にとって、荒れないで済む理由は何だと思う？」
「ん～……“分別”？」
「……何だそれは？」
俺の身も蓋も無い答えに、智代は問い詰める様なジト目を向けて来る。
「荒れたって何の得にならないし、そんなのみっとも無いと思え

ば荒れないだろ？」
「確かにそうだが、その分別がつかないから荒れるんじゃないか」
「じゃあ……自分なんて物を持たず、周囲に波風立てず流されて生きればいい」
「それでは、周りが荒れていたら自分も流されて荒れてしまうじゃないか」
「そうだよ。だから不良の多い学校に行けば不良になる奴は多くなるし、不正の横行する組織に入れば、大抵の奴はそれに加担するか見て見ぬフリをする様になる。人間なんてそんな物だ。荒れるか荒れないかなんて、“環境”や“運”次第だろ……」
「……やっぱりお前は優しいな」
「は？」
照れた様に言って、腕を膝の裏に回し直して肩を竦めて見せた。
「荒れるのは特別な事じゃないと言いたいんだろ？荒れていた頃の自分を気にしている私を慰めようとして……。でも、今はあまり気にしてくれなくていい。そうだな。“環境”は大きな要因だな……じゃあ、質問を変えよう。お前が荒れずに済んだ理由、お前の“心の支え”を聞かせてくれないか？」
「……“分別”？」
「……もういい……」
俺のバカ正直な答えに、智代の笑みは消え去り憮然としてプイと顔を背けられる。
でも、じゃあ、どう答えろと？
「いや、てか、そもそも俺荒れてるし」
「えっ！？」
そんなに意外だったのか、俺のぶっちゃけに素っ頓狂な声を上げ、すぐさま智代は向き直り眉を寄せた。
「お前が荒れてる？」
「いや、荒れてなきゃ『世界を変えたい』なんて言わんだろ？」
「それとこれとは違うんじゃないか？むしろ、お前はこの学校の

誰よりも落ち着いていると言うか……そうドッシリと地に足のついた“重み”の様な物を持っているじゃないか」

「いや、単に周囲の迷惑も考えず暴れ回ったりしないだけだ。そんなモン、ただの八つ当たりだからな」

「……悪かったな……周囲の迷惑も考えず暴れ回って……！」

彼女と俺とでは『荒れている』のニュアンスが違っているのだろうが、それを承知の上で地雷原に踏み込むと、案の定智代は気にするなと言ったクセに不貞腐れはじめた。

が、俺はいちいちそれに構わず言葉を続ける。

「そうだ。私がやっていた事は、ただの八つ当たりだ……でも……！」

「でも、俺だって、一歩間違えてたらどうなってたか分からない。中二の頃、この町最強と噂だったお前に会いに行こうとした事もあったしな」

「何だって!?ど、どうして会いに来てくれな……あっ、いや……」

智代は言いかけた言葉を濁すと、前を向いて顔を背け唇を噛む。

今更そんな事を言っても仕方無く、またその時出会っていたとしても、今の様に親しくなれたという保障は無い。

そう、それは俺も解っている。

「言ったろ?部活やってたって……丁度先輩達も引退したし、仲間に迷惑かかるかもしれない事はやれなかったんだ。でも、やってなかったら、会いに行ってたかもな……」

「……そうか……」

それでもせずにはいられない、むしろ自分への言い訳。

もっと早くコイツと出会っていたなら……。

あの時、会いに行っていたなら……。

こうして出会えた今でも、いや、“出会ってしまった”からこそ、その想いは俺の中でより強くなってきている。

「……意外だな。てっきりお前は“信念”とか答えると思ってい

たんだ」
再び顔を上げて遠くを見ると、智代はそんな事を言った。
なるほど。そう答えて欲しかった訳か……。
でも、
「……確かに最初に浮かんだのは、理想や信念だったな。でも、そんな物持ってたら、余計荒れるんじゃないか？結局、心が満たされないから、荒れるんだろ？」
「そうだな。その通りだ。でも、同時にそれはお前の心の支えにもなっている筈だ。それにお前には、優しいお母さんやお父さんが居る。部活の仲間も居たと言っていたな。そういった人達の支えもあるんだろう。だからお前は例え心は荒れていようと、それに負けない。自分の弱さに負けずにいられるんじゃないか？」
なるほどな。
心が荒れているかではなく、それを押さえられるかどうか。
わかってはいたが、彼女が言いたかったのはつまりそういう事なのだろう。
「別に……ただ見得張って格好つけてるだけだ……」
そう必死に自分を保とうと、俺は俺でいようと足掻いてきたに過ぎない。
確かに“支え”は沢山有った。
ああなりたいと、憧れたヒーロー達の雄姿。
そして、胸に刻んだ数々の言葉や歌。
辛い時、苦しい時、負けそうな時、それらを思い起こして自分を奮い立たせた。
あんな苦しい時もあの人は負けなかったと。
こんなピンチでも、あの人は切り抜けたと。
だからこそ、自分も負けちゃダメなんだと。
「やっぱりオーキは強いな……私がみつけた荒れない為の答えは、“家族”だ。それは別に、本当の家族でなくてもいい。友人や仲間でもいい。家族の様な存在と言う意味だ。家族の支えが有れば、人

は自制して生きてゆけると思う」
そうして智代は、自分の過去を語りだした。
喧嘩もしない程夫婦仲が冷え切り、子供にも無関心だった両親。
そんな家庭で、愛情を得られず育った少女時代。
半ば自棄になり、人を遠ざけ不良狩りを始めた思春期。
二年前、ついに持ち上がった両親の離婚話。
そしてそれを止める為に、自ら車に飛び込み大怪我を負った弟。
それによって辛うじて繋ぎとめられた家族の絆。
退院した弟の車椅子を押して、家族で歩いた桜並木……。
「その時私は思ったんだ。また家族みんなで、この桜並木を歩きたいと……。でも、その時歩いた川原向こうの道の桜は、すでに伐採されてしまった。だから、せめてここの桜並木だけでも、私は守りたい」
「……まさか……その為に？」
「ああ。私はこの学校の生徒会長になって、この桜並木を守る活動をする為にこの学校に編入して来たんだ。町が変わってしまうのは仕方が無い。でも、抗えるなら抗いたい。お前の様に、桜が伐られてしまう事を悲しむ人達の為にも……」
壮烈だな……。
流石の俺も直ぐには言葉が出なかった。
いや、愛情の無い家庭に育ってグレるのはよくある話だ。
でも、捨て身でそれをどうにかした弟と。
家族との思い出にまつわる桜の為に、文字通りの必死の努力で、底辺から這い上がりこの進学校に編入し、生徒会を目指そうとしている姉。
『この町最強の伝説の少女坂上智代』らしいと言えば、これ程らしい事は無い。
猛烈に熱い物が込み上げてくるのを感じた。
『フハハハッ、やっぱ凄えなお前は！！」
思わずそう大笑いしながら、褒めてやりたくなる。

『頑張ったな』
あるいはこの愛おしさのままに、そう言って抱きしめてやりたい。
でも、
それでも……、
「無理だ」
「え……？」
「無理だから止めておけ。たかが高校の生徒会長になったところで、公共事業をどうこう出来る筈無いだろ？」」
俺は突きつける。
現実と言う名の刃を……。

4月12日：桜下の誓い

「私だって、一介の高校の生徒会長が公共事業に口出し出来るなんて思ってはいない！だから、この学校の皆の協力を得る為にも生徒会長になる必要が有るんじゃないか！」

俺の否定的な言葉を聞いて愕然とし、一度失意と悲しみに沈み俯いたが、気丈にもすぐさまキッと瞳に決意を込め反論してくる。

そうだ。坂上智代はそうこなくては。

「皆を扇動して何をするんだ？役場を武力制圧でもするのか？」

「そんな物騒な事をする筈ないだろ！！」

「お前がクーデターを起こすつもりだと言うなら、手伝わんでもないが……」

「だからそんな事をするつもりは……って、手伝ってくれるのか！？」

マジな顔で言ってやると、智代の瞳が期待でキラリと輝く。

だが、すぐにそれを自重すると再びうなだれて唇を噛んだ。

「いくら私とお前でも、そんな事出来る筈無いし、例え出来てもそんな乱暴なやり方が良い訳ないじゃないか。二人とも警察に捕まってしまう」

「でも、まともにやったってまず無理だ。それとも何かコネでも有るのか？」

「コネ？」

「地元の有力者とのコネだ。代議士とか大地主とか」

「そんな物は無い」

「じゃあ無理だ。諦めろ」

「そんなの、やってみなければ分からないじゃないか！この学校や町の人達だって、きっと桜が残って欲しいと思っている人は大勢居る筈だ。お前だってそうじゃないのか？」

「ああ、居るな。それに、伐採計画の反対運動ならずっと前から

在った」
「えっ！？」
どうやらその事実を彼女は知らなかったらしく、寝耳に水だった様だ。
「桜を守る為に活動している人達が、既に居るのか？」
「ああ。計画が持ち上がった当初からな。プラカードもってデモしたり、署名を集めたりしていた。でも、結局計画は遂行され、その人達も今じゃすっかり見なくなった……」
「……！」
そう、公共事業に反対する声なんて別に珍しくは無い。
例え身近に無くとも、ＴＶ等で聞いた事くらい誰でも有るだろう。
ダムで村が沈んだとか、干潟とか、原発とか。
だが、住民の要望が通り覆る例は稀だ。
それも、科学的な調査や裁判沙汰に持っていっての結果である事が多い。
伐採まで一年足らずの今からでは、時間が無さ過ぎる。
それにだ。
「そもそも、学校側がそんな活動を容認する筈無いだろ？」
「どうして？私はこの事を公約にするつもりだ。それで生徒会長になれたのならば、皆から私の考えが支持されたと言う事になるだろ？」
いつもの様に胸に片手を当て、持論を信じて疑わない無垢な瞳で言い切る。
やはりこいつは危うい。
「例え生徒から支持されようと、学校の許可も無しにやれる訳ないだろ」
「そんなの、私達の勝手じゃないか！」
「お前が個人でやるならな。でも、生徒会長になってその権限を利用し、他の生徒も巻き込む様なら、学校だって見過ごせないだろ」
「……学校側は活動を認めないと言うのか？」

「当たり前だ。そんな活動する暇有るなら勉強しろと言う筈だ」
「それはあくまでお前の推測だろ？桜並木を守る事は学校の為にもなるんだ。賛同して全面的に協力してくれるかもしれないじゃないか」
「無いな。いや、個人としては賛成してくれる教師もいなくは無いだろうが、進学校であるウチが学業の妨げにしかならない活動を大っぴらに許す筈ないだろ？そして賛同した生徒達だって、学校を敵に回してまで活動しようとは思わない筈だ。違うか？」
「……！！」
俺の指摘に反論出来ず、智代は悔しそうに口を固くむすんで睨んでくる。
だがそれを冷然として受け流しながら、俺は更につっこみを続けた。
「それにウチの生徒だってバカじゃない。むしろシビアで利己的な優等生ばかりだ。そんな奴等に『やってみなければ分からない』なんて子供騙し、通用すると思うか？」
「……じゃあ他にどう言えと言うんだ？とても困難な道だと言う事くらい判っている。でも、可能性は０じゃない。だから『やってみなければ分からない』としか言い様が無いじゃないか」
「だから、困難なりに先を見通して、大まかでもプランを立てろと言ってるんだ。お前の言ってる事は、“絵にすら書けてない餅”だ。それでついて来る奴なんて、余程のアホか、ヒマ人だけだ」
「……悪かったなアホで……大まかと言ったって、まず選挙に出て当選しない事には何も始まらないだろ？」
「だからな……仮に選挙に受かったとして、生徒会の仕事はどうすんだ？」
「もちろんそれはちゃんとやる」
「勉強は？成績落ちたら、個人的な活動すら禁止されるぞ」
「それも現状くらいは維持するつもりだ」
「で、それらを差っ引いて、お前にどれ程時間が残る？」

「……生徒会にどれだけ時間を割かれるかが分からない……」
「訊け！経験者にでも！」
「ああ、そうか……お前は経験有るのか？」
「ねえよ！」
前に言わなかったかそれ！？
即答すると、彼女は表情を曇らせ言い辛そうに答えた。
「……生憎、私の知り合いに生徒会長を経験者した人間は一人も居ないんだ……」
結論はやっ！！
てか、『知り合い』で検索した結果『該当者一人』とか！？
「たんにお前が知らないだけだろ……？ウチはここいら周辺の優等生の集まりなんだから、生徒会経験者くらいクラスに何人も居る筈だ」
「そうか！それは盲点だった……。やっぱりオーキは頭がいいな」
無邪気に感心されてしまい、頭痛を覚え頭を押さえる。
ったく、大丈夫かコイツ？
「後は……門倉にでも相談してみるとかな。あいつそういうのに詳しいから」
「門倉……？ああ、みのりか。そうだな。来週にでも訊いてみる」
「とにかく、中学の生徒会長だった俺のダチは、野球部だったけどほとんど部活に出れなかったって言ったろ？それくらいは忙しいって事だ。生徒会長としての職務を全うしつつ、勉強もしつつ、その上でお前は桜を守る活動するって事だぞ？それも伐られる前に。実質、今年いっぱいが期限だろう。そんな限られた時間の中で、やれると思うか？」
「……やってみせる……！」
不貞腐れたように俯きかげんで、しかし決意のこもった声で彼女は答えた。
本当に強情な奴だ。
もっとも、この程度で折れる様な奴なら、初めからやろうとは思

わ無いだろうし、この学校にも編入出来なかっただろうが。
「……じゃあ、仮に活動出来たとして、具体的に何をやるつもりなんだ？」
「そうだな……やはりまず直接役場の責任者に掛け合ってみて、それでダメなら署名を集めたりするしか無いんじゃないか？」
「んなモン、門前払いか、適当に話だけ聞いて体よく『善処します』とでも答えて帰されるだけだ」
「どうしてお前はそう悲観的なんだ？」
「お前が楽観的過ぎるんだ。それで中止になるなら、とっくに中止になってる」
「それは……そうかもしれないが……」
「そもそも、どうしてこれだけ住民が反対している計画が強行されていると思う？」
なかなか折れない智代に対し、俺はついに核心をつく過酷な問いを発する。
しかしやはり智代の表情には、これといって深刻さは浮かば無い。
「どうしてって……こっちが訊きたいくらいだ……。役場の人間は『頭が固いから』じゃないのか？」
「……主観だけでなく、色々な人間の立場になって考えてみろ……もし計画が中止になったら、誰が一番困るのかをな」
「それは計画を立てた役場の人間じゃないのか？」
案の定な答えをノーシンクで答えてくる。
「違うな。ぶっちゃけ公務員にリスクはまったく無いし、政治家にだって政策の一つや二つ潰れようが大したダメージは無いだろう。せいぜい今までそれに費やした時間が無駄になるってだけの事だ」
「それじゃあ……再開発後にここに住む予定の人達や、経済的な効果を見込む人達か？」
「そんな皮算用どうでもいい。いるだろ？もっと直接的かつ深刻なダメージを受ける人間が……計画が中止されると言う事は、工事自体無くなるって事だ。そうしたら誰が一番困る？」

「工事が無くなると困る人……？そんな人達が居るのか……？……あっ……！」

ようやく思い当たったらしくハッとなって顔が上がる。

「『実際に伐採工事をする人達』……だと言うのか？」

「そうだ。公共事業は単純にその地域にとって必要な事だけやってる訳じゃない。“仕事を生み出し斡旋する”という目的も有る。然程重要でも何でもない道を作ったり施設を建てたりしてるのは、ある意味その為でも有るからだ」

だから、建設業界と政治の癒着は産まれ易い。

そして“とりあえず何か作っとけ”と、安易で大掛かりな箱物や道路に血税を注ぎ込む事に躍起になり、本当に必要な所がおざなりになる。

結果財政は破綻し、後には莫大な借金と無駄な物しか残らない。

幾度も繰り返されてきた愚かな政治の典型であろう。

「伐採工事はもう何年も前から決まっていて、一月以上はかけてやる予定の筈だ。逆に言えば、もし中止になれば工事を請け負う会社は丸々一月以上の仕事と、その分の収入を失う事となる。下請けの孫請け中小建設業なんて、どこもかなり経営が苦しい筈だ。そんな所が一月分の収入を失えば、潰れたっておかしくない。潰れなくとも、人員削減を余儀無くされるかもしれない。そうしたらどうなる？」

「どうって……？」

「職を失い路頭に迷う人が出る。そうなれば一家離散や、最悪一家心中だってよく聞く話だろ？」

「それは……もしかしたらの話じゃないか……お前は物事を悪い方に考え過ぎだ」

「ああ、そうだな。でも、仮にお前が自分の目的を叶えられたとして、しかしその影で誰かが不幸になっていたらどうする？その恨みの矛先を向けられたら？そして……自分の所為で誰かが死んだら……お前は自分を許せるのか？」

「ッ！！」

冷徹な視線と共に“必殺”の気迫を込めて放った俺の問いに、智代は弾かれた様に息を飲んで俯いた。

公共事業は容易に潰れない。潰せない。

何故なら“人質”が居るからだ。

そう、結局皺寄せは最終的に弱者に回ってくる。

そして、同時にそれが強者の常套句であり常套手段。

『弱者の為』

いつでも彼等はそれを大義名分とする。

自分達こそがそれを盾にしていながら……。

この世に完全に正しい物など無い。

誰もが幸福になれる道など有り得ない。

メリットが有れば、必ず何かしらのデメリットは生じる。

その“現実”を理解せねば、恐らくいくら声高に叫ぼうと、例えどれだけ多くの署名を集めようと、主張だけでは届きはしないだろう。

だから知らなければならない。

自覚し悟らなければならない。

覚悟しなければならない。

世界に抗うと言う事は、多くの悲しみと不幸を背負う事だと……。

春の麗らかな午後には似つかわしくない重苦しい空気の中、智代は無言で俯き、俺もまた迷いの中で彼女の答えを待っていた。

俺は……余計な事を言ったのかもしれない。

こいつは、家族との思い出の桜を守りたいと言うたった一つの目的の為に、尋常でない努力を重ね、この学校に編入してきた。

普通の奴なら、その想いを酌み『頑張れ』と応援するのかもしれない。

なのに俺は現実を突きつけてそれを踏みにじり、やる気に水を注したのだ。
諦めさせてどうする？
やる気を失わせてどうする？
この眩いばかりの輝きを、奪ってどうする！？
……そうだ。
だからこそ、無謀な真似はして欲しくはない。
こんな勝ち目も無く、傷付くだけの戦いをさせたくはない。
頑張れなんて、安易で無責任な事を言う訳にはいかない。
よく『やらずに後悔するより、やって後悔する方がいい』などと言うが、それは本当の後悔や挫折を知らない人間の戯言だろう。
自分が心血を注ぎ時間をかけやってきた事を、努力を、想いを後悔する。
それは絶望だ。
二度と立ち直れないかもしれない程の挫折だ。
こいつに、そんな思いはさせたくはない。
この輝きを真に失って欲しくない。
そう、今なら軌道修正すれば済む。
こんな短期決戦ではなく、もっと未来に繋がる様な目的を代わりに持てばいい。
それこそ、『伐採された桜並木を復活させる』とか。
そうだ。
智代には未来が在る。
輝かしい未来が。
その為にも、今は勉強し経験を積んで力を付けるべき時期なんだ。
いくら何でも時間が無さ過ぎる。
余裕が無さ過ぎる。
こんな所で戦って、こいつの方が潰れてしまっては困るんだ。
葛藤を経て、俺は決して間違った事は言ってないと確信する。
しかし、同じく相当の逡巡を重ねたであろう彼女が口にした答え

は、やはり俺の意に反する物であった。
「……私だって、自分がやろうとしている事はとても困難な事であり、そして沢山の人達に迷惑をかける事になるだろうとは思っていた。でも、そう思いながらも、それはその人達の為にもなるんだと、自分は正しい事をするんだと、だからきっと皆も力を貸してくれるだろうと、心のどこかで自分を正当化し、安易な希望を抱いていたんだ……」
そこまで言って顔を上げ、こちらに向けく。
その表情は晴れ晴れしく誇らし気ですらあり、目には強い意志の光が宿り一片の淀みも無くキラキラと輝いていた。
そう正に『坂上智代』らしい、いつもの笑顔だった。
「お前の言葉で、目が覚めた思いだ……。でもな。もうやると決めたんだ。例えお前が反対しようとも、選挙に受からなくとも、学校が容認してくれなくとも、一人きりでも最後の瞬間まで諦めずやり抜くと決めた事なんだ」
「……誰かを不幸にしてもか？」
繰り返す極端な問いに流石に表情が一瞬揺らぐ。
「それは……わからない。もちろん、そんな事にはなっては欲しくは無いし、なってしまったら、きっと後悔するとは思う……でもな。例えそれでも、私はやるつもりだ。その為に今まで頑張って、この学校に来たんだからな」
だが、すぐにそれを消し去ると、よりいっそう瞳に力を込め、しかし柔らかく微笑みながらはっきりと決意を口にした。
無理か……。
その表情にそれを悟る。
いや、まあ、初めから解っていた事だ。
ならば俺も、改めて覚悟を決めよう。
この危なっかしく愛らしい最強の少女の盾（カテナチオ）となる事を。
「そうか……なら俺も“共犯”になってやる」
「えっ……！？」

「手伝ってやると言ったんだ……一度“反逆”とか“クーデター”とかやってみたかったしな」

「だ、だからそんな暴力で無理矢理解決したりはしない……それでも手を貸してくれるのか？」

俺の言葉に暫し呆然としていたので、半分本気の冗談を言ってやると、つっこみながらまだ半信半疑といった表情で確かめる様に訊いてくる。

「ああ、だからそう言ってる」

「でも、お前は今まで反対してたじゃないか！」

「そりゃあな。軽々しく『協力する』なんて言える事じゃないだろ？半端な覚悟じゃやるだけ無駄だしな。でも、お前が何が何でもやると言うのなら、一緒に戦ってやってもいい。お前一人じゃ危なっかしいしな」

「……私を試したのか……？」

そう低いトーンで訊きながら智代は、俯いて前髪でその表情を隠し、拳を固く握りながら身体をプルプルと震わせた。

ああ、来るな！

そう覚悟と準備をしつつ、きっぱりと答えてやる。

「当然だ」

「お・ま・え・はぁぁぁっ、どうしていつもいつも私を苛めるんだあああああああああ！！」

立膝になり、クマの如き咆哮と共に両手を上げ襲い掛かってきた！

ぽかぽかぽか！

こちらも顔だけガードしつつ、胸を気の済むまで叩かせる。

だが、直ぐにそれは止むと、突然タックルさながら胸に飛び込んで来て、そのまま両手が背中に回される。

そう、いわゆる“べあはっぐ”だ。

「私は、お前ならときっと解ってくれると思って話したんだ……なのに反対されて……どれだけショックだったと思ってるんだ！？目の前が本当に真っ暗になったぞ！」

抗議の声がくぐもっているのは、俺の胸に顔を押し当てているからだけじゃあるまい。
その頭を優しく押さえ、とんとんと背中を軽く叩きながら落ち着かせる。
か細くも柔らかい身体。
艶やかな長い髪。
そして……ん？そういや、いつもと少し匂いが違う。
制汗スプレーか何かだろうか？
そういや、朝あれだけ走ったし、体育もあったみたいだからな…
…自分の汗のにおいを気にして使ったんだろう。
……俺はいつもの智代の匂いが好きだ！！
などと言ったら、また変態呼ばわりされるだろうな……。
てか、俺も汗だくになったのにそのままだ……。
そう思うと急に気になり始めた。
訊くか？
いや、でも、『くさい』と言われたらもちろんショックだが、前みたく『お前の匂いは好きだ』とか言われたら、それはそれで困るな……。
てか、コイツも結構変態チックじゃないか！
「……こんな私について行くのは、余程のアホかヒマ人だけだとも言っていたな……お前もそうなのか？」
「変態だな！」
その顔を少し離して上目使いの問いに、思わず考えていた事を口走ってしまった。
途端、上気していた表情が凍りつき、春だと言うのに空っ風まで吹き始める。
「……そうか……そうだったな……お前は変態だったな……」
諦観した様に言いながら、智代は上体を起こし余所余所しく離れていく。
失言した自分が悪いのだが、何か悔しく寂しい……。

「そしてお前は、その変態の仲間だ！」
だから、同類だと言っておく。
「そ、それじゃあ私まで変態みたいじゃないか！……いいのか？本当に……困難な道だと言う事は、私以上に解っている筈だ……」
「信用出来ないか？」
「そうじゃない！お前が傍に居てくれるなら、これ程心強い事は無い！」
慌てて答えた智代だったが、その表情から不安気な色は消えてはいなかった。
「なら、“契”でも交わすか？」
「契か……ち、契ぃ！？」
一瞬俺の言った意味が理解出来なかったらしく、やや遅れて声を引っくり返しながら驚き、こちらを向いた顔が見る間に紅潮してゆく。
「嫌か……？」
「い、嫌と言うか……本気……なのか？いつもの冗談なら止めて欲しい」
智代は真っ赤になりながらも、警戒しながら瞳を逸らす。
まあ、いつもがいつもだから致し方あるまい。
だから、俺も真剣な想いで彼女を見つめて言う。
「ああ、本気だ……お前とならな……」
「そ、そうか……わ、私も……お前となら……」
恥ずかしそうに言った瞳が潤んでいた。
俺も感無量で胸が破裂しそうだ。
それをグッと堪え、あくまで粛々と儀式を行うべく、まずはコップにお茶を注ぐ。
「まあ、桃の花でも無いし、酒でも無いけどいいよな？」
「う、うん！……と言うか、未成年の飲酒はダメだ……」
照れ隠しのつっこみも、緊張してかどこかたどたどしい。
互いに向かい合って正座に座り直し、居住まいを正して暫し見詰め

合う。
微かに震えているのは、ガチガチに緊張しているからだけではあるまい。
ああっ、舞い散る桜の下で見る智代は、やはり絵になる。
堪らなく綺麗で可愛い。
見上げる桜に、心の中で謝罪し誓う。
例えお前達を犠牲にしようとも、俺はこの子を守り抜く事を……。
視線を彼女に戻し、アイコンタクトで頷きあって杯を手にする。
そしてそれを高く掲げ、俺は頭上の桜と“天”に向かって宣言した。
「我等、生まれた時は違えども、願わくば同年同月同日に死なん!!」
コップの中身を一気に飲み干す。
プハァ～といつも以上に豪快に一息つき顔を上げると、そこにはまだお茶の入ったコップを持ったまま、神妙な顔をしている智代が居た。
「どうした?誓いの杯だ。飲め」
「……待て!何かおかしくないか?その……それは確か、『三国志』で劉備達が言っていた台詞だった気がするんだが……?」
「ああ。今日から俺の事を義兄(あに)と呼んでくれ義妹(いもうと)よ」
親愛の情を込めて言ってやる。
しかし、愛しき義妹の目からはみるみる光が失せ、真っ白になってしまった。
「……どうして私が妹なんだ?」
「そりゃあ、俺とお前なら、俺が兄貴だろ?」
「そういう事を言ってるんじゃない」
「じゃあ、お前誕生日いつだ?俺はもう17だ」
「うっ……10月14日だ……」
義妹は悔しそうに答える。
何気にマイシスターの誕生日ゲットだ!

「ほらな。半年も俺が年上だ」
「違う……どうして私とお前が兄弟なのかと訊いてるんだ」
「そりゃあ今契を交わしただろ？義兄弟の」
「……お・ま・え・はぁぁぁぁぁぁっ……！！」
俺がぶっちゃけた刹那、智代の身体の小刻みな振動に共鳴する様に大気が振るえ、空には何処からか暗雲がたちこめ、木々がざわめき桜が乱れ散る。
「どれだけ乙女の心を弄べば気が済むんだぁぁぁあああぁぁぁっ！！」
「うごっ！！」
立ち上がると同時に放たれたのは、いつもの前蹴りでは無く、薙ぐ様なローキックだった。
座ったままの俺には、逃げる事も踏ん張って受け止める事も出来ず、
パンチラも無しだと！？
とか驚いてる間にガードの上から吹き飛ばされ、座ったままの体勢で横の樹に激突し、ボロ雑巾の様にズルリと落ちた上から大量の桜がドサ～ッっと降り積もる。
こんだけの花びら、何処にあったんだろう……？
まあ……桜に埋もれて死ぬと言うのも……また一興か……。

4月12日：水心

「まったくお前は……ハア～……」

怒りの中に様々な感情の入り混じった複雑な表情で何かを言いかけた智代だったが、それらを全て長嘆息にして吐き出すと、桜まみれの俺を一瞥して、そのまま外周の柵へと向かい、そこからの町並みに目を向けながら肘を付いた。

のっそりと立ち上がった俺は、いたる所に付いた花びらを叩き落とす。

「……なあ、オーキ……」

粗方叩き終えてその背に寄ると、遠くを見たまま智代は呟く様に俺の名を呼んだ。

「ん？」

「お前は『この世界を変えたい』と言っているが……お前と出会えて、私の世界は変わった気がする……何と言うか……今まで見てきた同じ世界でも、お前と出会う前と後では見え方が違っている気がするんだ……お前の言う“変えたい”とは少し違うのかもしれないけどな」

何気ない事の様に語られたそれに、不意打ちで後頭部に智代の蹴りを食らった様な衝撃を受け、暫し茫然とし立ち尽くす。

そして次の瞬間、

「……クックッ……クッハハハッ……そうか……変わったか！！フハハハッ！！」

止め処無く溢れてくる感動と歓喜と愛おしさ。

まったくこいつは……本当に堪らない女だ。

笑いに身を任せていなければ、後ろから抱きしめていた事だろう。

そしてそんな事をしてしまえば、最早歯止めなんて効かなくなる。

「……そんなに笑うことは無いじゃないか」

恥ずかしそうに智代は振り返った。

「ククッ、いや、だから、別にバカにしてる訳じゃ無いって……」
「それでも、そんな風に大笑いされると、自分が変な事を言った様な気になるじゃないか」
「だから変じゃないって……俺も『魚を得た水の気持ち』だ」
「ん？『水を得た魚』じゃないのか？」
「“魚”はお前だろ？」
「ふむ……そうか。『水魚の交わり』か」
そう、あの気位の高いあの男も、きっとそうだったのだろう。
自分を古の名宰相や名将に例え、「使えるに足る君主が居ない」などとうそぶきながらも、内心不安と不満で一杯だった筈だ。
自分はこのまま何もせず、何も出来ずに朽ち果てるのかと……。
だから、つい生涯をも懸けてしまったのだ。
自分の様な若造を、本気で欲した男の為に。
どんなに才があろうと、それを発揮出来る“場”が無ければ、意味が無い。
どんなに美しい水があろうと、そこに棲む物が居なければ、寂しく味気無い。
だから、この世界に命は生まれたのかもしれない。
だから、この美しき水の星は、生命を欲したのかもしれない。
何の為に在るのか解らなかった俺の人生。
ようやく今、その“意味”を得る事が出来た思いだ。
「智代」
「なんだ？」
“龍”になれ！」
「……訳がわからない……」
これだから女は……！
これ以上無いエールを解ってくれない愛しき魚に、苦笑しながら目を細め想う。
何時か魚が龍へと変じ、天へと至るその時を……。

後片付けを済まして花見を終え、予定通り俺達は智代の家に向い始める。
ついにあの『坂上智代』の家に行くのか……。
数日前までは、もう二度と会えないと思っていたと言うのに……。
まさかこんな事になろうとは、夢にも思わなかった状況だ。
まあ、あくまで弟に俺を会わせる為であり、着いたら智代と二人っきりになったりはしないだろうが……。
それでもやはり、何も無いだろうと思いつつも意識して緊張してしまう。
「……そういや、弟の名前って……？」
「『鷹文』だ」
「待っててくれてんだよな？結構のんびりしてるがいいのか？」
「ああ、その事なら問題は無い……」
そう言いながらも、智代は表情を曇らせる。
「……弟は今、車椅子で生活しているんだ……だから、学校から下校するにも普通よかずっと時間がかかる……私達もお花見をしてゆっくり帰るから、時間を気にせず気をつけて帰る様にと言ってあるんだ……」
「そうか……」
事故に遭ったのは二年も前なのに、未だに車椅子なのか……余程の大事故だったのだろう。
「実はな……事故以来、鷹文はすっかり自分の部屋に籠もる様になってしまってな……学校や病院に行く以外ほとんど外出もしないし、毎日夜遅くまでパソコンばかりしているみたいなんだ……」
「いや、車椅子ならそれも仕方無いんじゃねえ？」
「うん……そうなんだが……」

智代は言葉を濁しながら、辛そうに下を向いた。
それもそうだろう。
両親の離婚を止める為、自分達の為に弟が自分からそんな目に遭ったのだ。
弟を見る度、考える度に後悔の念に苛まれるんじゃないだろうか？
「……入院当時は、結構頻繁にお見舞いに来ていたんだ……鷹文の部活の仲間や友達がな……でも、だんだん来る回数が減っていき、退院後は恐らく誰も家に来た事は無いと思う……」
なるほどな……。
長い入院と車椅子生活で、すっかり友人と疎遠になっちまったって所か……。
有り得ることだろう。
何かと足手まといになる事を気にする当人と、怪我を気遣う周囲。
互いに気を使いあって、かえって余所余所しくなる。
よくある事だ。
弟がどんな子なのか会ってみない事には判らないが、周りに気を使うタイプの子なんじゃないだろうか？
姉がこんなだし……。
などと思いながら横目でちらりと智代を見やると、
「やっぱり、私の所為だろうか！？」
「へ？」
ほぼ同時に必死な形相でこちらに向くので、心が読まれたかとギョッとなる。
「やっぱり家には私が居るから、誰も来たがら無いんじゃないだろうか？」
「んな訳ないだろ？だったらお見舞いにだって来ないんじゃないか？それとも、そいつらに何か恨まれる様な事でもしたのか？」
「そんな事はしていない……でも、お見舞いに来てくれる回数が減っていったのも、私が居たからじゃないかと思うんだ……毎日の様に来ていた奴も居たのに、急に来なくなってしまったし……」

「そいつはたんに無事が確認出来たから、興味が薄れたんだろ」
「そうだろうか……？それまでは割と鷹文は元気で、もちろん“精神的に”という意味でだが、怪我の回復も早かったんだ……でも、お見舞いがぱったりと減ってからは、鷹文もどこか元気を無くしてしまって、怪我の治りも悪くなってしまった……本来なら、もう完治していてもおかしくない筈なんだ……」
「お前なあ……」
弟の元気が無い事や、怪我の治りが悪くなった事まで自分の所為だと思っているのかコイツは。
普段は呆れる程前向きで自信満々なクセに、こういう所はすぐ卑屈になる。
まあ、過去が過去だけに仕方が無いのかもしれんが……。
だが、智代は関係無いとは思うが、弟と友人の間には何かしら有ったのかもしれない。
まして、それが原因で未だに怪我が治らないとすれば、根が深そうだ。
「私達家族の前では空元気を見せてはいたが、看護婦さんの話しでは塞ぎがちで食欲も無いし、たまに夜中にうなされている様だと言っていた。お医者さんも治らないのは精神的な物が原因じゃないかと話していたし……でも、私達が理由を訊いても『何でもない』としか答えてくれないんだ……」
「なるほどな。それで俺に何とかして欲しい訳か」
「別にそこまでは望んではいない。ただ、お前が鷹文の友達になってくれれば、弟も元気を取り戻すんじゃないかと思うんだ」
「なあ、智代」
名前を呼んで、注意がこちらに向くまでジッとみつめる。
「な、なんだ？」
「確かに弟に元気が無くなった原因が何かしら在るのかもしれない。でも、それは少なくともお前の所為じゃ無い。あんま気にし過ぎるな」

「……うん」
そして諭す様に言ってやると、智代は安心した様に頷いて、俺との距離を詰め甘える様に腕を絡めてきた。
まだ桜並木も途中だってのに……。
まあ、半端な時間で人通りはほとんどないし、商店街まではいいか。
などと、だんだん抵抗が無くなって来ている事自分が怖い……。

智代に案内されながら来たその地域には見覚えがあった。
と言うか、今朝も来たと言うか、ほぼ毎日回っている所である。
「もうすぐだ」
と言う事は、彼女の家はあそこか……？
『坂上』なんて苗字はよくあるし、然程気にも留めてはいなかったが、それでも他の苗字よりかはずっと記憶に残っていた。
俺は半年も前から、彼女の家を、彼女の家と知らずに毎日新聞を配っていたのだ。
妙な偶然もあった物である。
「……ただいまぁ……さあ、上がってくれ」
まるで中を覗う様に小声で申し訳程度に帰宅を告げ、誰も居ない事を確認してから俺を招く。
両親は外出中らしいから、それを警戒しての事ではない。
実は、弟にちょっとしたサプライズをと画策しているのだ。
清閑として、無駄な物が何も無い玄関から続く廊下を、忍び足で歩く。
やはり俺の家と違って小奇麗で、空気も清々しい気がする。
コンコン。

「ん？ねぇちゃん？どうぞ。開いてるよ」
念の為中に居る事を確認する為のノックをして、それを不思議がっている様な声を聞いてから、一度アイコンタクトをして頷き合い、俺達は勢いよく扉を開けた。
「どーもー、坂上智代でーす！」
「ね、ねぇちゃん！？」
「どもー、川上オーキでーす！」
「あっ、ど、どうも……！」
「「カミカミブラザーズでーす！！」」
まずはお約束通り、挨拶をしながら入っていき、部屋の中央で並んで頭を下げる。
パソコンの前に座っていた弟君は、鳩が豆鉄砲だ。
よし、まずは奇襲に成功せり。
「……なあ、オーキ」
「何だい兄弟？」
「前々から思っていたんだが、どうして『カミカミブラザーズ』なんだ？台詞を噛みまくるみたいで変じゃないか？」
「いきなりコンビ名にクレームかよ！二人とも苗字に“上”が付いてるからだろ」
「それぐらい解っている。私は“サカガミ”で、お前は“カワカミ”だから、『ガミガミブラザーズ』にすべきだと言ってるんだ」
「いや、“カミ”が抜けてるし、それじゃあ口喧しそうだからな」
「なら、『ガミカミブラザーズ』でどうだ？」
「語呂が悪いからそこは『カミガミ』だろ？」
「それじゃあ神様みたいじゃないか。それに、普通はリーダーである私の名前の方が先に来るのが筋じゃ無いだろうか？」
「いや、どっちがリーダーとか無いし」
「そう言いながら、お前は自分が優位に立とうとしていないか？そもそも、どうして“ブラザーズ”なんだ？“シスターズ”でもいいじゃないか」

「いや、俺男だし」
「私は女だ！それとも、お前は私を男だと思っていたのか？」
「そんな訳ないだろ。兄弟に女は入るけど、姉妹に男は入らないってだけだ」
「本当か？」
「ああ、常識だろ？」
「本当に私の事を可愛い女の子だと思ってくれているのか？」
「そっちかよ！」
ペシッと肩口につっこむ。
すると、智代はますます口を尖らせた。
「どうして叩くんだ？やっぱりか弱い乙女として見てくれてはいないのか？」
「いや、それはもういいから。今はコンビ名の話だろ？」
「大切な事だ！私はお前に、ちゃんと一人の女の子として見てもらいたんだ……だって……私とお前は……本当の兄弟じゃないんだ！！」
「な、何だってぇ！？」
ズガガガーンと落雷が落ちたかの如く大げさに驚いて見せる。
「て、当たり前だろ！」
そしてすかさずペシリと乗りつっこみ。
「知ってたのか！」
「だから、ただのコンビ名だからな」
「なら、別にブラザーズに拘る必要も無いじゃないか」
「まあ、それもそうだな。じゃあ、お前なら何てコンビ名にするんだ？」
「うん。『サカガミシスターズ』が良いと思う」
「もう勝手にせい！」
「「ありがとうございました～」」
オチにつっこんで二人そろって頭を下げ、そそくさと部屋を出て行き、パタンとドアを閉めた。

「……ええ!?帰っちゃうの!?」
数瞬のタイムラグの後、部屋の中から弟君のリアクション。
助かった。
何も反応が無かったら、恥ずかしくて入っていけなかった所だ。
「えっと……鷹文……その……面白く無かったか？」
恐る恐るドアを開けながら、恥ずかしそうに智代が余計な事を訊いた。
それで返答に窮されたらどうするんだ!?
しかし弟君は自然に微笑むと、
「ああ、面白かったよ。それ以上にまさかねぇちゃんがいきなりあんな事するなんて思ってもみなかったから、かなり驚いたけどね」
と言ってくれた。
いい子だ……ちゃんと空気を呼んでフォローしてくれる、とても好い子だ！
「オーキがやろうって言い出したんだ。普通に挨拶しても面白くないだろうって」
「そうなんだ。あっ、川上さん初めまして。弟の鷹文です。いつも姉がお世話になってます」
そして車椅子の向きをこちらに向け、礼儀正しく頭を下げ握手を求めてくる。
好い子だ！凄い好い子だ！！
「ああ、川上だ。よろしく」
「お世話をしているのはむしろ私の方だ。今日だって朝起こしてやったし、ネクタイだって私がしてやったんだからな」
「うっ……！」
その手をとっていると、智代は心外そうに実の弟の前で余計な事を暴露してくれた。
恥ずかしさで、顔が引きつる。
てか、弟もそんな事を言われても困るだろう……。
「ああ、ねぇちゃん。悪いけど、お茶を煎れてもらえないかな？

川上さんの分と、ねぇちゃんのもね」
そう思っていたのだが、しかし弟君は笑って俺を一瞥すると、思い出した様にそう言った。
それに「そうだな」と頷いて、智代は部屋を出て行く。
「やっぱり、川上さんて凄いんだね……あのねぇちゃんにお笑いやらせちゃうんだもの」
二人っきりになるのを待っていたかの様に、弟君は口を開いた。
いや、実際待っていたのだろう。
好い子なだけでなく、なかなか侮れない男の様だ。
それならと、俺もいきなり不躾な事を言っておこうと思う。
智代から話を聞いて思った事を。
「智代から昔の話は聞いたよ」
「……そう……」
声のトーンが下がり、弟君は目をそらした。
しかしすぐにそれを隠すと、苦笑して見せ、
「自分でもバカな事したなって思ってるよ」
と自嘲する事で予防線を張る。
説教されるのは慣れっ子なのだろう。
「……本当にそう思っているのか？」
「うん……あんな事、もう二度としないよ……」
「そっか……でもな。これだけは言っとく」
「……」
「確かにお前はバカな事をしたし、沢山の人間に迷惑をかけたり、お前自身も色んな物を犠牲にしたと思う……でもな。それでもお前は、自分が命を懸けてでも守りたかった物を守れたんだ。一世一代の賭けに勝ったんだ。だからその事だけは誇りに思っていいし、少なくともお前のネーちゃんはそう思っている。『私の自慢の弟だ』ってな」
弟君は暫し俯いたまま無言だった。
彼がやった事はバカな事だと思うし、説教してやりたくもある。

それこそ、もし最悪の結果になっていたら、智代は立ち直る所か、今頃どうなっていたか判らないだろう。
それに本当に気の毒なのは、彼を轢いてしまった車の運転手だ。
でも……それでも、正直羨ましくもあった。
命を懸けてもどうにもならない事なんて、世の中ザラだろう。
コイツはそれに勝ったんだ。
そして智代を立ち直らせ、おかげで俺達は出会う事が出来た。
「……命を懸けてどうこうしようとか……そんな大それた考えとかは無かったよ……ただ無我夢中で、まともな判断とか出来なかったんだ……」
「そっか……でも、もし今度本当に困った事があったら……命を懸ける前に俺に言え。金の事以外なら大抵の事は何とかしてやるから」
「……うん。なるべくそうするよ」
ようやく弟君は顔を上げ、まだどこか自嘲の混じった笑顔を見せてくれた。
まあ、今日の所はこんな物だろう。
彼が本当に抱えている物は何であるか、今は知りようも無いだろうし。
「ねえ、川上さん。これからは『にぃちゃん』て呼んでいいかな？」
「え？ああ、いいよ」
「にぃちゃん、ねぇちゃんをよろしくね」
今はこの言葉と笑顔だけで十分だ。

4月13日：ポンコツの歌（前書き）

※細部修正しました

4月13日：ポンコツの歌

俺は小学校の少年サッカークラブに入った
難色を示した親を説得し
一ヶ月家の手伝いをして
これからもするという条件付きで
あの人の様になりたかった
あの人の様になれたらいいなと思っていた
あの人までとはいかなくとも
プロで活躍出来たらなと思った
プロに成れなくとも
チームのピンチを救う様なエースになりたかった
チームは正直弱かった
ぶっちゃけ弱小だった
試合をすればいつも負けた
いつもいいように攻められて

常にワンサイドゲームで
ボールの占有率なんてほとんど無くて
シュート練習かってくらいシュートを打たれて
大差で負けることもザラだった
そんなチームで
レギュラーにすらなれない自分がいた
ここでも俺は味噌っかすだった
温情采配で途中から出られても
ポジションはいつもバックだった

俺は足があまり速くなかった
すぐに息が上がって
酷い時には喘息が出た
ドリブルも巧く出来なかった
ボールを蹴ればノーコンで

リフティングは一番苦手で下級生より出来なかった
あの人のファンタジックなプレイとは
天と地程の差があった
背も高くないし
ガタイも良くない
ボールを必死に追い駆けるだけで
敵のマークもろくに出来ず
簡単にフェイントに引っかかって抜かれる
それでも諦めずに追い駆けた
最後の最後まで
でもムキになればなる程一人空回り
監督やコーチはそんな俺を
“ポンコツ”と呼んだ
試合には必ず誰かしらの父兄が同伴していた

他校でやる時は車での移動も必要なので仕方がなかった
車を使わ無くても誰かしら来ていた
子供の試合だ
暇なら観に来くる物なのだろう
そして普通の子供なら
自分の親に観て貰いたい物なのだろう
でも俺は……あまり観られたくなかった
チームは弱いし
俺も下手だし
恥をかくだけじゃないか
だから親にはなるべく来るなと言っていた
順番で車を出す時以外見に来るなと
ウチの小学校で試合があった
いつもより観戦者が多くて
あれ程来るなと言ったのにお袋も来て居て

その隣には

あのお姉さんと渚ちゃんが居た

目の前が真っ暗になった

何で……！？

どうして……！？

まさか……わざわざ呼んだのか！？

何て事しやがるんだあのババア！！

よりにもよって

一番見られたくない人達を連れてくるなんて……！！

「オーキ君、ファイト！ですよ～！」

他の観戦客の誰よりもとおる

俺だけに向けられた声援が辛かった

どの父兄よりも際立つその姿が

にこやかで温かなその笑顔が

見れなかった

「オーちゃん、頑張って下さい！」

お姉さんに促されて精一杯してくれた応援に

聞こえないフリしか出来なかった

そして……

次第に小さくなっていく声が痛かった

その笑顔が曇っていくのは見なくてもわかった

せっかくわざわざ来てくれたのに……

情けない姿しか見せられない自分が不甲斐無かった

悲しませる事しか出来ない自分が嫌になった

そしてお袋を恨んだ

だから……観に来るなとあれほど言ったのに……！！

こうなる事はわかっていたのに……！！

ピッピーーーーー！

何度目かのゴールを告げる笛が吹かれる

ああ……とこちらの父兄の落胆の声

もはや相手チームは点を決めた奴ですら大して喜んでいない
惨めだ
悔しさと恥ずかしさで下を向いて動けなくなる
こみ上げて来る物が今にも溢れそうになる
もう嫌だ
どうしてこんな目に遭うんだろう？
俺は俺なりに頑張っているのに
俺は俺なりに必死なのに
弱小と言われても
“ポンコツ”とバカにされても
どんなに下手クソでも
どんなに負けても
頑張っているのに
せめて心だけは負けたくないと
頑張っているのに

頑張っているのに

「みなさ～ん、ファイト！ですよ～！」

声が聞こえた

まだ帰らず応援してくれている

あのお姉さんの声

大好きなのに

普段ならその姿を見られただけで嬉しいのに

今は聞きたくない声

今は居て欲しくない姿

こんな姿を見られたくは無かったのに

公園で遊びの時ですら

お姉さんが来ると緊張するのに

自分が格好良く無いのは知っているから……

活躍出来ないのはわかっているから……

ヒーローになんてなれないから……

ちくしょう……

ちくしょう……！

ちっくしょぉぉぉおおおおおっ！！

汗を拭う仕草で目元を払い

顔を上げてボールを睨む

もうポジションも何も関係ねえ

ただ我武者羅に

ボールを追って

追って

追い続ける

俺にはそれしか出来ないから

例えみっともなくとも

誰かに笑われようとも

先にある物は敗北しかなくとも

最後まで諦めず

足掻く事しか出来ないから
俺にはそれしか無いから
華麗なプレーなんて出来なくとも
ヒーローになんてなれなくとも
せめて心だけは負けないと
せめて心だけはあの人の様にありたいと

4月13日（日）

あの後部屋に戻ってきた智代が俺達の話しているのを見るなり、
「“にぃちゃん”？お前達、もうそんなに仲が良くなったのか？でもな。私はオーキと兄弟になった覚えは無いぞ。花見の席でのあの義兄弟の契は無効だ。それとも、その……“正式な意味”でって事なのか？確かに将来的にそうなるかもしれないが、だとしても気が早すぎだ……」
「いや、たんに同じ学校でも無いから“先輩”と呼ぶのも変だし、さん付けも硬い感じするからこう呼ぶことにしただけだけど？」
などと何が“正式”なのかよくわからない事を言い出し、呆れ顔の鷹文につっこまれ、そこから何故か智代の大暴露大会が始まった。
睡眠薬を飲ませられただの、パンツを見られただの、パンチラ写

真を撮らされそうになっただの……。
その度に「凄いねにぃちゃん……！」と驚愕する鷹文。
彼の中で俺は完全に“凄い人”となった事だろう。
……色々な意味で……。
そして最後に鷹文とメールのアドレスを交換し合い、そこでまた智代が
「私はオーキの電話番号も教えて貰ってないのに……」
と不貞腐れだし、
「ねぇちゃん携帯もメアドも持ってないじゃん。ああ、これを期にねぇちゃんも持ったら？やっぱり有ると便利だよ」
「校内での携帯電話の使用は禁止されているんだ」
「持ってる分には問題無いでしょ？今時の女子高生で携帯持って無いのって、ねぇちゃんくらいじゃない？」
「何！？そうなのか！？」
「早速明日にでも買いに行ったら？にぃちゃんと二人でさ」
などと新しく出来た弟分に出汁に使われ、そっち方面に疎い智代の買い物に付いて行く破目になった。
ぶっちゃけ、“デート”と言うヤツだろう。
記念すべき人生初のデートだ。
いや、今までだって二人っきりで飯食ったり、花見したり、登下校したり、プリクラ撮ったり、バトルしたり、パンツ見たり、散々してきた訳だが……。
それでも改めてデートとなると……妙に緊張してしまう。
おかげで帰ってからも明日の事が……と言うかもう今日だが、気になって昨晩はほとんど寝付けず、ついでに色々調べ物を始めてしまい、今の朝刊配りのバイトに至る。
まあ、待ち合わせは午後からだから、帰ったら仮眠すればいいか。
いつものルートを回り、ある表札のポストの前でその家を見上げる。
「鷹文の奴……まだ起きてんのか？」

昨日上がった家の間取りから、明かりが漏れていた部屋の見当をつけ呟く。
と言うか、あそこの部屋の明かりがよく点いている事は前々から気付いていた。
流石に毎日配っていればな。
毎日という訳では無いが、週末はほぼ必ず点いている。
パソコンにかなりハマッていると聞いたが……今度ウチのパソコン部の連中の逸話でも話してやるとするか。
智代の部屋の明かりは点いていた事は無い。
まあ、普通の人間は寝ている時間だからな。
夜更かししても良い事はあまり無いし。
背だって伸びなくなるし……。
……今度その事も話してやろう。

バイトを終えいつもの場所に向かうと、こんな早朝だと言うのに先客が来ていた。
樹と樹の間に張ったゴールネットの裏側の茂み。
ガサガサと草を掻き分ける音がしたので、何かの動物かと目を向けると、白い羽を思わせる対になった大き目のリボンが草むらの間に揺れていた。
「おっかしいなあ……この辺りの筈なのになあ……？」
「何か探し物？」
「うん……サッカーボールなんだけどね……この辺に入ったんだけど見つからなくて……んん？」
近寄って声をかけてみると、その小学校高学年くらいのスカートをはいた女の子は何気なく理由を答えてくれてから俺の存在に気付

き、小さなお尻を向けたまま首だけで振り返る。
「あっ、ハーイ……じゃない！えと、おはようございます。お散歩ですか？」
「ああ、おはよう。まあ、そんなトコ」
その女の子は急いで顔を上げてこちらに向き直ると、あたふたと慌てながらも何とか体裁を取り繕い礼儀正しくペコリと頭を下げた。
澄ました態度が微笑ましい。
つり目がちで利発そうな、とても可愛らしい子である。
初めて見る子だが、この辺の子だろうか？
「ここにはよく来るんですか？」
「うん。ほぼ毎日来てるかな」
「そうなんですか！ここって凄いですよね！そこのゴールとか手作りなのに何気なく破けたりした所は直して補強してありますし、ベンチ代わりの木も元々朽木を持ってきて加工した物ですし、森のいたる所に暗号の様な物がありますし！」
「暗号と言うか、たんなる目印だけどね」
「ああ、なんだ……なるほど……！」
暗号じゃなくて少しだけがっかりしながらも、納得した様に女の子は頷く。
しかし、この子はやはり頭が良さそうだ。
俺だけに解る様に付けておいた目印に気付くとは……なかなか良い観察眼を持っているじゃないか。
将来が楽しみな子である。
「それでボールだけど、どの辺から蹴ったの？」
「えっと、ゴールのほぼ正面から……あっ、でも、ちゃんと端を狙って蹴ったら外れちゃったんですよ！」
「じゃあ……もっとこっちの方かな……？」
俺はこれまでの経験から、彼女が探していた場所よりもずっとゴールより外れた場所に見当をつけて探し始めた。
「そんなに外れてないですよ！もっとゴール寄りですって！」

だがそれは彼女にとって不服だったのだろう。
俺が茂みに入った後も、仕切にそう主張し続ける。
だが、
「これかな？」
「……あれぇ！？」
そこで見つけた物を拾い上げ見せてやると、キョトンとして小さな口と大きめな目を全開にしたまま固まってしまった。
「ほ、本当にあたしはそんなトコに蹴ってないんだからね！」
そして現実を突きつけられて尚そんな事を言ってのけた！
そうじゃないかと思っていたが、どうやらこの子はツンデレの素養もあるらしい。
本当に将来が楽しみな子である。
「ああ、草の生え方とか地形の高低によってか、どういう訳だかこっちの方に転がっていくみたいなんだよ。俺も今まで幾度と無く探してきたから」
「ひょっとして、ここはお兄ちゃんの秘密のアジトなの？」
一応フォローしておくと、女の子は期待に満ちた目でそんな事を訊いてきた。
「アジトって……まあ、昔から人の少ない時間帯に来ては勝手に色々やってるけど……」
「やっぱりそうなのね！うんうん、私の睨んだ通りだわ！昨日ここをみつけた時、『何かありそう！』って思ってわくわくしたもの！」
女の子なのに、変わった子だな……。
好奇心旺盛な彼女に相通じる物を感じ、親近感を覚える。
まあ、類は友を呼ぶと言うか、俺は変わった奴が好きなのだろう。
「サッカー、好きなの？」
「うん。サッカーなら、どこに行っても友達が作れるから！」

「あたしは『あや』よろしくねお兄ちゃん！」

朝のトレーニングは中止にして、代わりに出会った女の子、あやちゃんと暫くサッカーをして遊んだ。

彼女は数日前に近くに越してきたばかりで、その前は海外に長く居たらしく、その国での習慣やら時差ボケやらでこんなに朝早くから散策がてら遊んでいたらしい。

「少しここから距離があるけど、そこの公園なら昼間は誰かしらいると思うから」

「うん。ありがとうお兄ちゃん！おやすみなさ～い！」

流石に眠くなってきた事もあり、最後に俺の連絡先と古河パンの前の公園の場所を書いた地図を渡して、彼女と別れ“あの場所”を後にした。

それにしても……鷹文にあやちゃんか。

いきなり弟分妹分が二人も出来て、何だか面映い。

実の弟とはろくに口も利かないと言うのにな……。

奴にあの子達の様な可愛気が百分の一でもあればな……。

弟と一緒に遊んでいた頃も確かに在ったのに。

いつの間にか疎遠になって、それでいつの間にかすっかり生意気になっていたアイツの態度にイラついて、一度切れて喧嘩してそれっきり……。

今じゃ同じ空間に居るだけでイラつく存在だ。

まあ、所詮兄弟なんて、たまたま親が一緒なだけだからな。

今更関係を修復したいなんて気はさらさら無いし、おそらく奴も同じだろう。

“近親憎悪”というやつか。

他人なら気にならない事、我慢できる事でも、身内だと気に障る。

別に珍しい事でも何でもないだろう。

人類最初の殺人は“兄弟殺し”だしな。

「なんて事が智代に知られたら面倒だな……」

4月13日：義賊のすすめ

待ち合わせ場所である駅前には約束の時間より３０分以上前に着いた。
何となく、あいつの性格的に時間よりかなり早く来るんじゃなかろうか？
そんな気がして少し慌てて来たんだが……まだ来てはいないようだ。
杞憂だったか……。
まあ、遅れるよりいいだろう。
これで実は時間にルーズな奴だったら目も当てられんが……それは無いと思いたい。
むしろ生真面目ぶりを発揮して、約束の時間五分前からぴったりの線が濃厚だろう。
さて、時間までどうする……？
ゲーセン……は時間が半端になりそうだ。
コンビにで立ち読み……は日曜で読みたい物が無いな。
とすると……万一、あいつが待ち合わせ場所を間違えてるかもしれないから、駅の周りでも見て回るか？
昔のドラマとかでは、そういった切ない擦れ違いネタがよくあったみたいだが、今は情緒もへったくれも無く携帯で連絡して解決だ。
と言っても、今のあいつは携帯持って無いから有り得る事なのだが。
正直、あまり携帯は好きじゃないし、ぶっちゃけ普通に生活する分には無くてもいいと思うのだが、例の活動を始めたら必要になるだろうし、だったらこの機会に買っておくのもいいだろう。
さて、余裕の有る内に回ってみるか。
一緒に昼飯を食うのにいい所が見付かるかもしれんし。
例えその間にあいつが来たとしても、約束の時間までに戻れば問

題無かろう。
そう思い歩き始めた矢先の事だった。
「お前達、カツアゲなんて真似をして恥ずかしくは無いのか！？」
どこからか聞こえてきたその声音、その口上に足を止める。
間違いようも無く智代の物だ。
おいおい、まさか……！？
悪い予感と言うか確信に、すぐさま声の主を探して走り出す。
その腰より長い髪の少女の背中は、駅前通りから一つ入った狭い路地に在った。
彼女の前には、お約束の様に見るからにガラの悪い私服の二人組と、その奥で壁に背にして座り込むウチの制服を着た男子。
ああっ、なんて解り易い構図なんだ……。
「あん？何だよ？だったら、アンタが相手してくれんのかい？」
「なかなかイイ女じゃねえか。アンタならこっちから金出してもいいかもな」
ゲラゲラと笑い合う二人には智代を警戒する素振りすらない。
どうやら彼女の正体を知らない様だ。
だとすれば無理も無い。
見た目ただの小娘一人に負ける可能性なんぞ、微塵も考えはしないだろう。
「くだらない事を言ってないで、みっとも無い真似は止めるんだ！そんなにお金が欲しいなら、自分で真面目に働いて稼げばいいだろ？人を脅してお金を奪う事は立派な犯罪だ。お前達は泥棒になりたいのか？」
にも拘らず、智代は智代でこの調子である。
初めからズレた認識。
互いに互いを見下した価値観。
話が通じる訳が無い。
そしてその無意味な会話の結末は、
「生意気な女だな。でも、気の強え女は嫌いじゃないぜ」

「ああ。生意気な女を泣きながら謝らせるのは最高だな」
「どうやら下衆共には日本語は通じない様だな。いいだろう。泣きながら謝まるのはどちらか教えてやる」
いつでも不毛な物にしかならない。
「じゃあ、たっぷりと教えてくれよ……その身体でな！」
智代の度重なる挑発に男達の目の色が変わり、舌なめずりをしたパンチパーマの男の方が先に動く。
だが、
「おろ！？」
覆い被さる様にして掴んだ物は智代の残像。
「これで正当防衛だ」
立ったままの体勢でスライドしたかの様にそれを避けた智代が、大義名分の宣言と共に必殺の右足がカウンターとして唸りを上げる！
「うわあああああ～～～っ！！」
だが悲鳴を上げたのは、まくれかかったスカートの前を押さえる乙女の方だった。
前に回っては間に合わない。
そう判断した俺は、咄嗟に蹴りが出る寸前に背後から翻ったスカートの裾を掴んで引っ張ったのだ。
かつてあまりの危険さに封印した伝説の奥義“スカートめくり”である！
ああっ、今日も眩しいばかりの純白だな！
「くうっ、死ね！！」
「ぐっ！！」
スカートを放したと同時に殺気と共に放たれた振り向きざまの左回し蹴り。
食らう訳にはと辛うじてブロックした物の、そのまま軽く後方に吹っ飛ばされる。
久々の、初めて戦った時以来の本気の蹴りだった。
「オーキ……！？お前は何を考えているんだ！？いきなり後ろか

ら女の子のスカートをめくる奴があるか！！」
蹴った後でようやく俺に気付きキョトンとした物の、智代は殺気こそ消えたが怒りと羞恥で真っ赤になりながら噛み付かんばかりに詰め寄ってくる。
よしよし、ひとまずこれで智代の意識はこちらに向いた。
相手の男達は一瞬見せた智代の動きと、突然の乱入者の登場に面食らっている様だ。
そして肝心の被害者であるウチの生徒もまた、ボケっと成り行きを見ている。
校章の色から一年の様だが、制服を着てるのは部活か何かの行き帰りだろうか。
「ッッ……いいだろ？パンツくらい毎日見てるんだし」
「なっ……！！？」
「何だテメエは！？」
「コイツの“連れ”だよ。悪いがレンタルはしていないんでな。ナンパとかなら他を当たってくれ」
痺れた腕をブラブラさせながら、わざと男達にも聞こえる様に過激な事を言って、絶句したその肩を抱いて男達に関係者である事を見せ付けてやる。
「い、いくら毎日見ているからと言って、いきなり後ろからスカートをめくって良い訳がないだろ！？それにナンパじゃなくてカツアゲだ。早めに待ち合わせ場所に着いてお前を待っていたら、そこのウチの生徒を路地裏に連れて行くこいつ等を見かけたんだ」
俺に抱き寄せられて恥ずかしそうに文句を言いながらも、智代は嫌がる素振りも見せず事の経緯を説明してくれた。
やっぱり俺より早く来ていたのか……急いで来て大正解だったな。
「ほう、カツアゲねえ」
「何だコラ！？」
「テメエも文句あんのか！？」
関心した様に呟いて男達に目を向けると、パンチとボーズの二人

は仲良く並んでにじり寄りながら威圧してきた。
二人とも俺よりデカク、それなりにガタイもイイ。
こうやって寄ってこられると、壁が迫って来る様な圧迫感がある。
しかしまあ、智代のあの動きと蹴りを見て尚驕りが消えていない事からも、こいつらが大した事は無いのは明白だ。
それでも、結構厄介な状況ではあるが……。
「あん!?」
「「!!」」
まずは牽制の一睨みでその歩みを止めさせる。
あんまり距離を詰められると、智代がまた戦闘モードに入ってしまいかねない。
そしてそのまま暫しメンチを切り合う。
重苦しい空気。
ムサイヤロー共。
柔らかい智代の身体。
芳しい智代の匂い。
熱い智代の吐息。
マズイな……気を抜くと顔がにやけそうだ。
やはりこの場での最大の敵は智代か。
だから俺は、自身の理性の限界と相手の“焦れ”を見極め、にやけた顔で言った。
「そう言う事なら手伝おうか?」
「「「「……はあ!?」」」」
智代を含めた三人の一瞬の呆けの後の驚き。
その思考の空白に、俺は智代から離れ動き出す。
「なっ!?」
慌てて構えた二人を片手で制してその横をするりと抜け、同じく呆けて座り込んでいる如何にもウチの生徒らしい眼鏡の男子生徒の前に立ち見下ろす。
「テメエ、何座ったまま見物してんだよ?」

「えっ……!?いや……あの……」
「そうやってりゃあ、誰かが助けてくれるとでも思ってんのか?」
「それは……その……」
「見ず知らずの女が一人で助けに来て、それでもお前は逃げようとも、一緒に立ち向かおうとも、携帯でダチや警察に助けを呼ぼうともせず、ただ成り行き任せかよ?甘ったれてんじゃねえぞコラ!!」
「ひいいいっ!!」
ガンと壁を足の裏で蹴り、派手な音を立ててビビらせる。
状況を把握出来ず困惑していた表情が、恐怖と絶望の色に染まった。
まあ、無理も無いか。
助けに来てくれたと思った人間に、いきなり脅されているのだから。
「テメエ、光坂の生徒だろ?出来るのは勉強だけか?いざと言う時に自分じゃ何も考えられねえのか?だったら、とっとと金だせや!せめて他人様に迷惑かけるんじゃねえ!!」
「ひいっ!!ご、ごめんなさい!!」
堪らず一年は慌てて財布を取り出すと俺に差し出した。
それを受け取り、中を確認する。
「ほう、一万とちょっとか……結構持ってんじゃん」
「お前がカツアゲをしてどうするんだ~~~!!」
やはり疾風となって男二人の横をすり抜けてきた智代が突っ込んできた。
「一体何をやってるんだお前は!?コイツは絡まれた被害者じゃないか!!」
「じょ、冗談だ。ほら」
あまり粘っていると武力行使されそうなので、鼻が触れ合いそうな至近距離まで顔を近付けてくる智代をなだめつつ、さっさと財布を投げて一年に返してやる。

「あ、ありがとうございます！」
「「返すな～～～！！」」
今度はパンチとボーズのつっこみ。
頃合か。
「てか、お前等、ちまちまカツアゲなんてしてないで、どうせならドンと稼いだらどうだ？“一億”くらい」
「「一億！？」」
その魅惑の単語に男達は色めき立……ってはくれず、むしろ眉をひそめた。
額が大き過ぎて現実味が無いのだろう。
「テメエ、俺達をなめてねえか？」
「そんな旨い話がある訳無いだろ？」
「まあ、聞けよ。お前等、一応未成年だろ？」
「一応ってどういう意味だよ！？」
「だったらどうだってんだ？」
「もし未成年がカツアゲで捕まったら、どれくらい少年院にブチ込まれか知ってるか？」
俺の問いにパンチとボーズは互いに顔を見合わせた。
その反応から二人が何も知らない事を確信して俺は話を続ける。
「強盗恐喝罪で初犯なら半年から一年、もちろん余罪があればもっと伸びる事になる」
「「！」」
「何度もやっているのがばれたら、ムショの中で成人式を迎える事も有り得るだろうな」
二人の表情に明らかに動揺の色が浮かぶ。
別にカツアゲに限った事じゃないが、罪である事は知っていても、具体的にどれだけの刑罰が科せられるのかまで知っている人間は稀だろう。
ぶっちゃけ、俺もよく知らないし……。
そう、今までのは全てハッタリである。

「じゃあ、仮に銀行強盗をして三億盗んで捕まったら、どれくらいだと思う？」
「そりゃあ……そんだけ盗めば十年くらいは出て来れないんじゃねえか？」
「フフッ、言ったろ？強盗は初犯なら半年だって」
「「ええ！？」」
鼻で笑って断言してやると、驚く男達の瞳にそれ以外の物が見え始めた。
この話への興味と、俺に対して『ただ者じゃねえ』と一目置き始めたと言った所か。
そこで首だけ捻って背後の一年を確認すると、目が合い怯んで縮こまる。
立ち上がってはいる物の、相変わらず一緒になって俺の話しに聞き入っている様だ。
まったく、さっきアレだけ説教してやったと言うのに……。
「つまり、カツアゲして一万盗ろうと、銀行から三億盗もうと、罪は同じって事だ。だったら、三億盗んだ方がいいだろ？」
「銀行強盗が良い訳があるか！！何をバカな事を言ってるんだお前は！？」
来るだろうと予想はしていたが、案の定智代が真っ先に食ってかかってくる。
まったく、誰の為にやってると思ってるんだ？
「智代。後でたっぷり相手をしてやるから、ちょっと黙っていてくれ」
「銀行強盗をやれとたぶらかそうとしている人間を、黙って見過ごせるか！！」
「いいから、この場は俺に任せておけって」
「バカかお前？いくら盗ろうと、警察に捕まったら没収されるんだから意味がねえだろ？」
何とか智代をなだめすかしていると、驚いた事にボーズがまとも

な事を言った。
だが、ナイスだ！ここからがこの話の“ミソ”である。
「そう、そこだ。多くの人間がカツアゲはしても銀行強盗をしないのは、現行犯以外まず捕まらないカツアゲよりも、銀行強盗の方が捕まり易いからだ」
「カツアゲする人間は多くは無いだろ……」
智代がつっこんできたが、余計な事には答えない。
「でもな。仮に三億使いきって捕まった犯人は、三億返さないといけないと思うか？答えはノーだ。返せない金は返さなくて済む」
「つまり、捕まる前に使えって事か？でも、三億なんてとても直ぐには使えないだろ？それに使いきっちまったら、結局金に困るじゃねえか」
「ああ。だからこうするんだ。まず一億を絶対に見つからない場所に隠しておいてだな、残りを出来るだけ高い所から町にばら撒け」
「何い！？」
「金をばら撒けだぁ！？」
別にまだ実際にやると決まってもいない事に、男達は血相を変えた。
自分達が喉から手が欲しい金をばら蒔く。
その行為に抵抗があるのだろう。
だが、だからこそ効果が期待出来ると言う物だ。
「そんな事したら、他の奴等に拾われちまうだろ！？」
「そう、それが狙いだ。ばら蒔かれた金は不特定多数に拾われ、また散り散りになって警察が総動員しても回収するのは不可能だろう。つまり、ばら蒔かれた正確な金額も判らないって事だ。これで例え捕まっても、手元に一億残る。使えない三億をケチるより、二億をばら蒔く事で警察の目を欺く訳だ」
「おお、なるほど！！」
「でもよ。いくら何でも流石にあやしまれるんじゃねえか？折角盗んだ金をばら蒔く奴なんて居ねえだろ？」

「ああ。だからまず、金ばら蒔いたら直ぐに自首しろ」
「何だよそれ!?」
「自首してどうすんだよ!?」
「だから、捕まってもいいように金をばら蒔いたんだろ?それに自首すれば刑はぐっと軽くなる事くらい知ってるだろ?うまくいきゃあ、罰金くらうだけで済むかもな」
「マジか!?」
「銀行強盗って、そんな罪軽いのかよ!?」
「当然未成年で、殺しとかしていなければ、だ。そして、動機を聞かれたらこう言え。『義賊になりたくて五右衛門の真似をしました』ってな」
「義賊!?」
「五右衛門て斬鉄剣のか?」
「元祖の方だ。まあ、『某三世』も似たような物だが。私利私欲の為ではなく、この世知辛い世の中だからこそ義賊に憧れ、こういう事をやってみたかったと言えば、お前等は犯罪者どころか町のヒーローになれる」
「「ヒーロー……!!」」
「そうだ。ちょっと銀行襲って少しの間臭い飯を食うだけで、一億の金を得て、しかも義賊としての名声まで得られる。どうだ?悪い話じゃあるまい?」
破滅へと誘う悪魔さながらの笑みを浮かべ、富と名声をチラつかせてやる。
しかし二人は俺の誘いに迂闊に乗ろうとはしてこない。
そりゃあそうだ。
そもそもこの話は銀行強盗が成功する事が前提だし、良く考えればつっこみ所は満載だろう。
それに『やってやるぜ!!』と本気になられても困るし。
言わばここまでのは長い前フリの様な物だ。
そう、奴等からの“問い”を引き出す為の。

「そんなに旨い話だってんなら、何で自分でやらねえんだよ？」
待ち望んでいたボーズの問いに、内心ほくそ笑む。
さて、オチといきますか。
「決まってるだろ？俺にはコイツが居るからな」
「あっ……！」
そう言いながら、それまで蚊帳の外にされてつまらなそうにしていた智代の肩を再び抱き寄せる。
「もし俺が銀行強盗なんてやろうとしたら、コイツが許しちゃくれないだろうからな」
「あ、当たり前だ！お前にそんな事は絶対にさせない」
「コイツは生真面目で多少融通が効かない所があるが、健気で甲斐甲斐しいイイ女だからな。俺は一億よりも、どんな名声よりも、真っ当な世界でコイツと生きたい。だから、例えコイツにばれなかったとしても、後ろめたい事をする訳にはいかねえんだ。コイツと真正面から向き合っていく為にな」
「オーキ……！！」
ひしっと感激で瞳を潤ませ抱きついてきた智代の頭を一撫でして、同じくイイ話に複雑な表情を浮べる男共から彼女を隠す様に向きを変え、そして何気なく、しかしそれと判る様にポケットから携帯を取り出して三桁のボタンを押す。
「あ、警察ですか？何か学生がカツアゲされてるみたいなんで、急いで来て下さい」

4月13日：暗雲

「何してんだテメエ！？」

携帯を切ると同時にパンチ頭がいきり立ち今にも掴みかからん勢いで向かってくる。

それに気付き腕の中の智代が対応に出ようとしたが、それをグッと腕に力を込めて抑えると、「どうして？」と向けてくる問いの眼差しにニヤリと不敵な笑みで答え、片手を添えたまま半身になって男達と対峙する。

「悪いな。俺も一応コイツの先輩なんでね」

「何！？」

拳を振り上げながらも、パンチはまったく怯んだ様子の無い俺の目の前でその動きを止め、そのままの体勢で歯噛みした。

そう、容易には手出し出来まい。

何しろ、ここでもたもたしていれば警察が来てしまう。

何しろ、数の上でこちらが上。しかも、一人は先程自分の攻撃を余裕でかわした女と、その彼氏だと言う得体の知れない、しかも『カツアゲするくらいなら銀行襲え』とか言ってのけるヤバイ男だ。

たかがカツアゲで負うにはリスクがデカ過ぎる。

「光坂の川上だ。さて、どうする？駅前の交番からチャリでここに来るまで二、三分。それまでにどこまでやれるか試してみるか？」

「ク、クソ！！」

「覚えてろよ！！」

「ああ。忘れてくれと言われても覚えておいてやる。あんまインテリなめんなよ！」

お約束の捨て台詞を残し走り去る二人組に対し、こちらはとぼけた言葉の中に含みを持たせ釘を刺す。

これで奴等も当分懲りたろう。

後は……こっちの懲りない奴をどうしてくれようか？

「お前は何がしたいんだ？」
「え？」
ぼんやりと逃げていく男達を眺めていた智代に、皮肉っぽく訊いてやる。
「そ、そうだな……やってみたい事は色々有るが、ボーリングとかカラオケはどうだ？私は行った事が無いんだが、普通の女の子はそういう所に遊びに行く物なのだろう？」
素の答えが帰ってきた！！
「そうじゃない……お前は奴等に説教したかったのか？それとも、奴等をぶちのめしたかったのか？」
「……違う。同じ学校の生徒を助けたかったに決まっているだろ？もう私は昔の私じゃないんだ。何度も言わせるな」
今度ははっきりと言ってやる。
すると智代は一瞬ショックを受けた様に寂しそうに俯き、ムッとしながな顔を上げ不機嫌そうに答えた。
「だったら、余計な事しようとすんな」
「余計な事とはなんだ？」
「いちいち真っ正直に説教すんなって言ってるんだ」
「じゃあ、どうしろと言うんだ？」
「紙袋かパンストでも被って、背後から問答無用でぶちのめせ」
「そんな変質者みたいな真似が出来るか！！」
想像してみる。
目の所だけ開けられた紙袋を被った怪人が、そこから伸びる長い髪を振り乱し暴れ回る姿を。
「でも、それなら誰もお前だと思わないだろ？」
「そんな事が誰かにバレたら、もう生きてはいけない！それに、どうして顔を隠す必要が有るんだ？別に悪い事をする訳でも無いのに」
「人をぶちのめすのは十分悪いし、喧嘩は御法度だと言っただろ」
「だから、喧嘩する事が目的じゃないと言ってるじゃないか！」

「でも、俺が止めなきゃ確実にやってただろ？」
「だからそれは仕方が無いだろ……て、そうだ！お前は何て事をするんだ！いきなり女の子のスカートをめくるなんて！」
チッ、順当に問い詰めていたのに余計な事を思い出した様だ。
「大丈夫だ。俺にしか見えてないから」
「H！！スケベ！！変態！！変質者！！お前なら見られてもいいなんて、一言も言った覚えは無いぞ！！」
「じゃあ、誰ならいいんだ？」
「そもそもパンツは人に見せる物じゃないだろ！！折角今日は少し長めのスカートをはいてきたのに、これじゃあ意味無いじゃないか！」
おお、そういえば。
今日の智代は膝が隠れるくらいの淡いクリーム色のスカートに、上は黒いハイネックのセーターとかなりシックな装いだった。
いつもの眩いばかりの白い太ももが常に拝めないのが少々寂しいが、これはこれで悪くないと言うか、これから連れて歩く事を考えればむしろ好ましい。
「大人っぽくていいんじゃないか？」
「それは似合っていると言う意味か？」
「ああ」
「良かった……。これくらいのスカート丈の方が落ち着くんだ。お前は制服の様な短いスカートの方がいいのだろうけどな」
褒められて機嫌が良くなったのか、笑顔でそんな冗談めかした事を言った。
だが、
「……それなのに、長いと今度はめくってまで中を見ようとするのかお前は？」
やっぱり怒を思い出したらしい。
「……もし、ズボンだったらどうするんだ？脱がすのか？立派な変質者だな」

さらに酷い想像を勝手に膨らましていた！
「スカートも脱がしてやった方が良かったか？」
「良い訳があるか！そんな事をされていたら、あの場に居た者全員記憶が無くなるまで殴っていた所だ！！」
「でも、ああでもしないと、お前は止まらなかっただろ？」
「普通に『止めろ』と声をかければいいだろ？」
「それじゃあ、面白くない」
「お前は面白いからスカートをめくったのか！！」
「だからそうじゃなくて、布石だろ」
「布石？」
「そうだよ。まず、あいつ等を驚かせておく為にやったんだ」
「どうしてそんな必要が有るんだ？」
「後々の展開を優位に進める為に決まってるだろ？大体、お前はさ。あいつらにまともな説教が通じると思ってたのか？」
長い長い脱線を経て、ようやく軌道修正に至る。
「……そんなのやってみなければ判らないじゃないか」
「判るだろ。お前は人に説教するには可愛い過ぎるんだよ」
「えっ！？」
不貞腐れていた表情にたちまち赤みがさしていく。
説明する為にあまり意識せず言ったのだが……。
ま、まあ、いいか……鞭だけでなく飴も必要だろう。
「か、可愛過ぎるって……そう言ってくれるのは嬉しいが、さすがに面と向かってだと照れるじゃないか……」
「お前がゴリラみたいな女だったら、奴等も大人しく従っただろうけどな」
「ゴ、ゴリラ！？たった今可愛いって言ってくれたじゃないか！？それとも、お前はそういう女性のタイプが好みで、私がゴリラみたいな女だから可愛いと言ったのか！？」
物凄い早とちりだ。
“だったら”つったろ……お前は見た目普通の女の子だから、

舐められ易いって言ってるんだよ。それと、その偉そうな態度だ」
「偉そうなのはお前も一緒じゃないか！」
「俺のとお前のは違う。お前は自分を“正義の味方”だと思ってるんだろ？」
「そんな大それた物じゃない。ただ、カツアゲは立派な犯罪じゃないか。注意して当然だろ？」
「昔の自分の立場になって考えてみろ。お前が荒れてた頃にだって、お前に説教した奴くらい居た筈だ。その時にお前は、そいつをウザイとは思わなかったか？」
「……私はカツアゲなんてした事は無い」
「不良狩りはしてただろ……奴等にとってみれば、お前は最初から相容れない存在でしかない。そんな奴に上から物を言えば、怒らせるに決まってるだろ」
「……じゃあ、どうしてあいつらはお前の話は聞くんだ？」
「俺が奴等以上の悪党だからだ」
「悪党だから？」
「結局人は、“何を”言うかでなく、“誰が”言うかだ。つまり、相手にこちらの言い分を聞かせるには、まず相手に自分と対等かそれ以上の存在だと認識させなきゃダメなんだ。あの手の輩は、基本的に堅気を見下している。なめられたまま説教した所で聞くはず無いだろ？でも同じ悪党、特に自分よか強い奴やズル賢い奴には案外容易く従順になる物だ」
「……だからお前は、カツアゲをして見せたり、銀行強盗を勧めたと言うのか？」
「そういう事だ。まず相手を驚かせて度肝を抜き、いい女を侍らせてステータスを見せ付ける。相手に『ただ者じゃねえ』と思わせ一目を置かせ、そこであくまで“損得”を説いてやれば、言い含めるのはそう難しい事じゃない」
「……“いい女”だなんて……褒め過ぎだ……」
イチイチそこに食いつくなよ……。

「……とにかく、相手を怒らせるだけの説教するくらいなら、後ろから奇襲をかけて顔を見られる事なく倒せ。お前ならそれくらい出来るだろ？」

「そんな乱暴な事出来る訳無いだろ！さっき喧嘩するなと言ったのはお前じゃないか」

「説教して顔も見られて、それで結局怒らせて喧嘩してたら意味無いだろ？」

「だからそれはあくまで正当防衛だ」

「正当防衛だろうが、相手から恨みを買う事に変わりないだろ？もっとよく考えろよ。どうしたら戦わず済むのか。お前は強いんだから尚更それに頼るな」

「……どうして人を助けようとした私が怒られなければならないんだ……？」

人がまとめに入ろうとした所で、ソッポを向いてぼやく様にこの台詞。

さすがにちょっとカチンと来た。

この不貞腐れ娘は……今までの話全てを台無しにするつもりか？

「あのなあ……！」

「あ、あの……」

智代の態度にイラついて更に説教してやろうとしたその時、横からおずおずと割り込んでくる奴が居た。

さっきのカツアゲされていたウチの学校の一年生だ。

そういやまだ居たのかよ。

まあ、いきなり目の前で説教タイムが始まって、帰るに帰れなかったのだろうが。

「た、助けていただいて、ありがとうございました。ご迷惑をおかけして済みませんでした」

少しビクビクしながらも、俺達に向かって礼を言いながら頭を下げてくる。

「ああ、怪我は無いか？これからはあんな奴等にからまれない様

気をつけ……」

「別にテメエなんか助けた覚えはねえんだよ！」

一年を気遣う智代の言葉を遮り突き放すと、彼はうっと怯んで一歩後ずさった。

そこに俺は更に追い討ちをかける。

「俺は無鉄砲なこいつを助けたかっただけだ。お前もウチの生徒なら、あの程度の奴等にビビッてねえで、テメエで何とかしろ」

吐き捨てる様に言って「行くぞ」と智代を促す。

眉を寄せて何か言いた気にしながらも、何も言わずただ一年を一瞥して彼女も俺の後に続いて歩き始めた。

「あんな言い方は無いだろう？可哀相じゃないか」

横に並びながら、俺だけに聞こえる声で智代がとがめて来る。

あの場で直ぐそれを言わなかったのは、一応彼に気を使ったからか。

「じゃあお前は、ずっとあの一年の側に居てあいつを守ってやれるのか？」

「そんな事出来る訳無いだろ？」

「だったら甘やかすな。もしまた何かあっても、次はあいつ自身が自力で何とかする他無いかもしれないんだ。それに同情される事の方が、男には屈辱なんだよ」

「……！」

俺の言葉に智代は大きく目を見開き、そして寂しそうに微笑んで無言のまま俺の隣を歩く。

「あ、ありがとうございましたー！」

背後から、恐らく今の彼の精一杯の礼が聞こえてきた。

「そういえば、警察を呼んでおいて、待たなくていいのか？」

「いいだろ別に。かけたのただの時報だし」

結局、昼は駅前のジャンクフード店と相成る。
「こういう店にはあまり来ないんだが……意外とカップルも多いんだな」
と智代が結構入りたそうだったのでそこにしたのだが、いざ食べると、
「う～ん、少し味が濃すぎないか？あまり身体には良く無さそうだ」
などとお約束的にケチをつけてくる。
「じゃあ、今度とても身体には良さそうなパンを食べさせてやるよ」
「そんなパンが有るのか？何が入ってるんだ？」
「それは食べてからのお楽しみだ」
「……言っておくが、“睡眠薬”は身体に良いとは言えないからな」
「用量さえ間違えなければ平気だろ？ぐっすり寝れるぞ」
「正しい用量でも入れるな～！」
などと、結構和気藹々と食事を終えた。
もめた後だけに、多少ギクシャクしてしまうかとも内心心配していたのだが。
機嫌が直って何よりだ。
その後は智代の携帯を買いに行った。
鷹文と昨日の内に前もってどんな物を買うか決めてあったらしく、これも思ったよりも時間がかからずに今日の目的を達成する。
もちろん彼女の携帯に一番初めに登録されたのは、俺の番号だ。
「これで何時でもお前と連絡が取れるな」
慣れない手つきで携帯を打ちながら、無邪気に笑う智代はたまらなく可愛かった。
そんな笑顔にほだされ、ついつい俺は次にボーリング場に行く事

を承諾してしまう。
いや、カラオケと二択で、どっちも初めてだと言うので人前で歌うよかマシかとボーリングにしたのだが……やはり失敗だったと直ぐに後悔する事になる。
好きな玉を持って来いと言うと、彼女が選んで来たのは「他の女の子達が一番多く使ってるみたいだから」と一番軽い物。
悪い予感がした。
お約束のニオイだ。
でもまあ、最悪ピンを破壊するくらいだろうと高をくくり、やらせてみる。
甘かった。
速攻で後悔した。
智代の全身のバネからアンダースローで放たれたそれは、まるでソフトボールくらいのノリで大きな弧を描いて飛んで行き、
ドガーーーーーン!!
よりにもよって隣のレーンのピンを直撃した!!
ただの力任せのノーコンだったのだ!!
「済みません!済みません!本当に済みません!!」
あまりの事に呆気にとられていたお隣さん達に、平謝りした事は言うまでも無い。
その後、難色を示す智代を『ほら、おそろいだぞ』となだめながら、ボールを転がせる様になるまで一番重いボールを使わせる。
酷い試合だった。
元々俺もボーリングは苦手で、アベレージは１００行くか行かないかだったが、久々でリズムもしっかり智代に乱されガーターを連発し、８９点と９０にも届かない始末。
それでも初心者には負けないと思っていたし、現に8投目まで３０点以上差がついていた。
ところが、9投目にして初ストライクを決めた智代は、
「うん。何となくわかった気がする」

と不穏な事を言ったかと思うと、１０投目に2連続ストライクを決めてしまった。
そう、3連続ストライク“ターキー”である。
当然点数も逆転されてしまった。
「しょ、初心者に負けた……」
「あれっ？私が勝ったのか？」
あまりの結末に、思わず俺はその場に崩れ落ちた。
「くそ……化け物め……」
「なっ……！！やっぱりお前も私をそんな風に思っていたのか……？」
そしてつい失言を漏らしてしまい、それにショックを受けた智代まで落ち込み始める。
ああっ、やはりボーリングなんて来るんじゃなかった……。
「例え私が何をしようと、お前だけは私を普通の女の子として見てくれていると思っていたんだ……それなのに……化け物なんてあんまりだ……！！」
「……いや、お前が“普通の女の子”だなんて思った事無いから」
「ッ！！何だそれは……！？酷いじゃないか……！！じゃあ、今まで私を可愛いと言ってくれたのも、アレは全部嘘だったのか！？」
「違う。そうじゃなくてだな。もしお前が“普通の女の子”だったら、こんなに興味なんて持たなかった。お前は『元・この町最強の少女』で、化け物じみた才能を持ってて、だからこうして一緒につるんでんだし、それも踏まえた上で、その……例え化け物でも、そんなお前が……その……可愛いと思ってる」
真剣に彼女を見つめ、俺はありのままの素直な気持ちを告白した。
それなりに賑わう休日の町ボーリング場。
しかし急速に周囲の雑多な音は消え、周りの景色も見えなくなってゆく。
ただ目に映るのはお互いの姿だけ。
世界に二人だけの世界。

そして少女は、ゆっくりと口を開く。
「……それでも、私は化け物なんて言われたく無い」
やっぱりそうですか……。

4月13日：クマさんの森

「いいじゃなんか。ほら、あの『松坂』とかも“怪物”とか言われてるし」

「男ならともかく、女の子が“怪物”とか“化け物”とか言われて嬉しい訳無いだろ！！まったく、どうしてお前はそうデリカシーが無いんだ！？」

色々と周囲を騒がせて居辛くなった事を理由に、渋る智代の背を押してひとまずボーリング場を後にしたのだが、智代は凹んでこそいない物の依然不機嫌なままだった。

まあ、悪いのは俺だって事はわかっているが……。

「悪かったな……もうちょい俺も上手ければ、最初から投げ方とかコツとか教えてやれたんだが……最初に言ったけど、正直、ああゆう個人スポーツ的な物は苦手なんだよ」

「別に言うほど下手じゃなかったじゃないか？さっきだって、たまたま最後にストライクが三回続いたから私が勝てたが、その前まではお前の方が勝っていたじゃないか」

「隣の点数見ただろ？みんな１００超えてたじゃないか。女の子でも慣れれば１００点くらいはいく物なんだよ。昔仲間内でボーリングが流行った事があってよく行ってた時期があったが、俺だけちっとも上手くなれなくてな……勝負にもならないし、練習しようにも金かかるし、だからいつしか誘われても行かなくなった……」

「……すまない。私に付き合せて……そんなに嫌だったのなら、そう言って欲しかった……」

「いや、初心者には負けない自信は有ったんだが……俺が甘かった。まあ、今度はもっと上手い奴と来いよ。そしたら、お前ならもっと上手くなれるし、ボーリングの楽しさも判るはずだ」

気まずい沈黙。

相変わらずの自分の“ポンコツ”ぶりと、言い訳しか出来ない情

けなさに泣きたくなる。
きっと智代にとっての初ボーリング、そして初デート自体もあまり楽しくなかったって事になるのだろう。
まあ、仕方無いと言えば仕方が無いか。
お互い初めてなんだし。
気取ってエスコートしたりはガラじゃないからな。
さて、どうすっか？
このまま行き先も無く、無言で町をブラブラしてても意味が無いだろう。
「……どっか他に寄りたいトコ有るか？」
半ば『帰ろうか？』的な含みを込めて訊いてみる。
するとそれが伝わったのか、智代は寂しそうに少し俯いてから口を開いた。
「カラオケは嫌なんだろ？」
「別にお前一人で歌うつもりなら、行ってもいいけど？」
「それは恥ずかしい……お前は歌は上手いじゃないか。歌う事は嫌いじゃないんだろ？それなのに、どうしてカラオケは嫌なんだ？」
「それは恥ずかしい……」
真似をして言うと、むうと可愛く口を尖らせる。
「もちろん、お前も歌うなら私も歌うぞ？」
「いや、だから……俺の歌は人に聞かせる為の物じゃないんだよ」
「あんなに上手いのにか？」
「上手い下手は関係無いだろ？それに、最近の歌とか分からんしな」
「それなら私も同じだ。あまりＴＶも見ないし、歌謡曲には詳しくないんだ……」
ホントにこいつは歌いたい訳じゃなくて、たんに他の子が行ってるから行ってみたいだけなんだな……。
まったく、そういう事なら女友達とでも行けばいいのに。
「……もしカラオケに行ったとしたら、何歌うつもりなんだ？」

何となく気になったので訊いてみる。
「え？そういえば、何を歌うかは考えていなかったな……」
それで行きたがってたんかい！！
「……“童謡”じゃダメか？」
「童謡？……『森のクマさん』？」
「うん！！よくわかったな！！正解だ！！さすがオーキだな！！」
まさかなと思って訊いたら、案の定智代は我が意を得たりと無邪気に顔を輝かせた。
いや判り易すぎるだろ！
「ダメって事は無いだろうけど、俺以外の奴にはネタにしか思われないからな……てか、童謡なら、それこそわざわざ店に行かなくてもいいだろ？金かかるし」
「それもそうか……」
「……なら、森に行くか？」
「森……？」
「俺のとっておきの場所だ」

緑豊なこの町は、少し住宅地を離れると森が広がっている。
俺は智代を“あの場所”に連れて行く事にした。
自分からは、誰にも教えた事の無いあの場所に。
こいつなら、いいだろう。
こいつしか、いないだろう。
「なあ、森の中に何をしに行くんだ？ひょっとして、クマさんが居るのか？」
そんな物騒な事を期待を込めた目で訊くな！
「クマは俺とお前だ」

「んん？」
「今までダチにも教えた事が無い、俺の秘密のアジトみたいな物だ」
「そ、そうか……そこを私にだけ教えてくれると言うんだな……嬉しい」
どうやら“秘密のアジトを教える意味”を理解してくれたらしく、はにかみながら智代が身を寄せて来る。
そういえば今日、あまりベタベタしてなかったな……。
ま、まあ、もう林道に入ったしいいだろう。
「ここなら滅多に人が来ないから、多少大声出しても平気だ」
「なっ！？やっぱりHな事が目的で来たのか？そんな事を言われたら、行ける訳無いだろ！あ、いや、お前とそういう事をしたく無いと言ってる訳じゃないんだ。ただ、その……初めてだし、やっぱり外でなんて嫌だ。いくら滅多に人が来ないとは言え、誰か来ないとも限らないだろ？」
それは部屋の中ならＯＫと言う意味か！？
照れ隠しに含みの有る事を言うと、狙い通りの答えが返ってきた。
「それにいつも言ってるじゃないか。そういう事をするのは、まず、ちゃんとそういう関係になってからじゃないとダメだと」
「いや、歌っても平気って意味だったんだが？」
「……」
暴走している所につっこむと、半眼で睨んでくる。
「……そう言ったからには、お前も歌うんだな？」
「まあ、森のクマさんくらいなら……」
「うん！一緒に歌おう！ある～日～♪」
森に着く前に、いや、まあ、もう森の中だが、早速無邪気に歌いだした！
そんなに歌いたかったのか……？
仕方無い。俺も続こう。
「旋風舞うティーグラウンドで～♪」

「待て！何処だそれは？」
「ゴルフ場？」
「ゴルフ場にクマは居ないだろ？」
いや、例え森で遭遇しても、普通楽しい雰囲気にはならんだろ。
「俺なりにアレンジを加えてみたんだ。お前は構わず続けてくれ」
「……クマさんに～出合った～♪」
不承不承智代が歌い始める。
「天然芝のゴルフ場で～クマさんに出合った～♪」
「語呂が悪くないかそれは？」
「いや、でも『花咲くゴルフ場で』とかだと統一感が無いだろ？」
「まあ、そうか……クマさんの～言う事にゃ～♪」
「ワイはサルや！クマゴルファーサルや！！」
「待て！クマなのか、ゴルファーなのか、サルなのか判らない！」
「『サル』という名前のゴルファーなクマかな」
「クマなのに名前がサルなのか？」
「本名は『サルバトール・クマ・三世』なんだ」
「三代目なのか？」
「多分」
「そもそもクマがゴルフをやる訳……でも、それも可愛いかもしれないな……すまない。今のは無しだ」
ゴルフをやってるクマを想像して、“あり”だと思ったらしい。
「スタコラサッサッサ～のサ～♪って、ゴルフなのにスタコラサッサは変か？」
「いや、あんま気にしなくていいって……多分ＯＢ打った後の移動だ」
「なるほど」
ついに智代も意識しだした様だ。
「ところが～クマさんが～後から～ついて来る～♪」
「ヘッヘッヘッ、待てやネーちゃん」
「待つのはお前だ！クマさんはそんなにガラは悪くない。もっと

紳士的だ」
そうなの!?
「てか、次と被ってたな……」
「そうだ。お嬢さん～お待ちなさい♪」
「結婚してくれ!!」
「ええっ!?い、いきなり何を言い出すんだ?た、確かにちゃんとした関係になってからとは言ったが、さすがに……その……結婚は早過ぎだ。私達はまだ高校生じゃないか。あ、いや、お前としたく無いと言ってる訳じゃ……」
「いや、歌だから」
「へっ……!?ああ、歌の歌詞か……そうか……」
再び暴走しだしたのでつっこむと、納得してバツが悪そうに顔を背けた。
もちろん半分狙って言った訳だが……。
ヤバイ、俺も意識しだして頬が熱くなってきてる。
「白い貝殻の～小さなイヤリング～♪……ここは指輪の方がいいだろうか?」
「ん～、心がこもってればいいんじゃないか?相手もクマだから指輪は無理だろ」
「お嬢さんもクマだったのか!?」
「そりゃあ、クマが人間にプロポーズするのも変じゃないか?」
「そんな事は無いだろう?とても素敵な事だと思う」
自分がクマに告られるシーンを想像したのか、クマ娘は恍惚とした表情でそんな事を言ったかと思うと、
「クマさん、ありがとう!嬉しい。私もクマさんの事が好きだ。さあ、一緒に歌おう!ラララ～ラ～ラ～ラ～♪」
一人で五番を終わらせると、俺の両手を取り、歌いながら楽しそうに回り出した!
「ラララ～ラ～ラ～ラ～♪フフフッ、クマさん!」
すっかりご満悦の様だ。

そして、そのまま回転しながらクルンと腕を絡めてくる。
「楽しいなあ……でも、よく考えると、ゴルフはあまり関係無いな」
「ゴルフ場でプロポーズしたんだろ」
「そうか……なあ、オーキ」
「ん？」
「さっきお前は、今度は他の奴とボーリングに来ればいいと言っていたけど……確かに私はボーリングやカラオケがしてみたかった。でも、それはお前とだからだ。お前と一緒にやりたかったんだ。お前となら、きっと楽しいと思ったんだ。だって、こうしてお前と一緒に変な歌を歌ったりしているだけで、こんなにも私は楽しいんだ」
そこで智代は笑みを消して顔を上げ、真剣な表情で続ける。
「だからなオーキ。他の奴と行けだなんて言わないでくれ。別にお前が嫌な所には、無理に行かなくても構わない。特別な場所じゃなくていい。私はただ、お前と一緒に居たい。お前と一緒に笑って居たいんだ」
「智代……！」
目から鱗の思いだった。
俺とした事が、初デートで舞い上がって変に意識していたのかもしれない。
元々普通の人間が普通にやれる事が苦手な“ポンコツ”の俺だ。
無理に出来もしない普通のデートをしようとしたのが間違いだったんだろう。
俺は俺らしく、あくまで俺の得意な分野で勝負する。
世間一般のやり方だとか、流行廃りは関係無い。
それが俺だろう。
そしてここに、俺に匹敵する変わり者が居る。
こいつは規格外の化け物だ。
だからこそ、はみ出し物の俺としっくりくるのだろう。
「まあ、ボーリングとかは苦手だが、他に行ってみたい所とかや

ってみたい事が有ったら言えよ。俺も興味が沸くかもしれないし」
「うん！」
極上の笑顔で頷いて、智代は肩に頭を預けてきた。

「先客が居るな……」
“あの場所”の手前で数台の自転車が停めてあるのを目にし、俺は足を止めた。
大きさから言って小学生の物だろう。
住宅街から少し離れているので一般の公園や広場程メジャーではないが、ここもそれなりに広さはあるし遊ぶにはいい所だから、昼間に人が居る事は珍しい事じゃ無い。
「滅多に人が来ない、秘密のアジトじゃなかったのか？」
「あ、いや、穴場ではあるが普通の広場だからな……昼間はたまに誰か遊んでる」
「それもそうか……」
「俺がよくここに来るのは、日が落ちてからか、明け方だな。その時間ならほぼここを貸切に出来る」
そう答えて、ふと今朝出合った少女の事を思い出した。
古川パンの前の公園の事を教えておいたが……後で確認に行ってみるか。
「お前はそんな時間に遊んでいるのか？」
「遊んでると言うか、もっぱら秘密の特訓、自主トレだな」
「秘密の特訓？ああ、なるほど」
最初は白い目を向けて来たが、自主トレと聞いて一転感心した様に頷く。
「小学生の頃にここを見つけてから、ほぼ毎日通ってるかな」

「毎日!?そうか。ここでお前は自分を鍛えていたんだな……」
「まあ、自主トレばっかじゃないし、結構サボったりもしてるけど、何つうか、もうここに来る事が日課になってる感じだな。ここに来て、自然の中で心を落ち着けていると、天地と、世界と一体となった様な気分になる。それで色々と考えるんだ。世界についてとか、人や生命についてとか」
「自然と一体に……なるほど。やはりそうか……」
智代は何故か考え込む様子で一人何かに納得していた。
「何が?」
「いや、お前に借りた本で、昨日読んだ老荘思想について何だが……」
それを聞いて、俺もああと納得する。
金曜の別れ際に智代に貸した本。
それは『マンガ　サルでもわかる中国思想シリーズ』である。
やはり日本人のベースにあるのは古代中国思想であり、入門書としては読み易いマンガで十分だろうと言う事でチョイスしたのだ。
それを一日に一冊のペースで読むように言っておいた。
初めは“孔子”、次に“老子・荘子”、そして順当にいけば今日は“孫子・韓非子”。
「ああ、どうだった?」
「正直、孔子に比べると初め読んだ時は漠然としすぎてよく分からなかったんだ。でも、お前を見てると何となく分かる気がする。世界と一体となった様な、そんな広い心と視野を持てと言う事なのだろう?」
「まあ、そんな感じでいいんじゃないか?孔子の教えは、“真心と思いやり”だ。ただ、いき過ぎるとそれは、人を雁字搦めにする。相手を思いやり過ぎて、自分を犠牲にしてしまう。そして権力者達はその精神を逆手に取り、親や上司には絶対服従と教え込む事で人を支配しようとした歴史がある。それに対して、老荘はもっと大らかに生きようって事だ。どっちが強いとか、どっちが優れてるとか、

そんな物世界の広さに比べたらちっぽけな物だってな」
「それはそうかもしれないが、実際はそんな風にはとても生きられないんじゃないか？」
「そりゃそうだ。現実には目鼻立ちの数ミリの差に一喜一憂し、若い内からやれテストの点だの、通信簿だの、部活の成績だので将来が左右され、社会に出れば“金”でソイツの価値が決まっちまう」
「お金は確かに大切だが、それが全てと言う訳じゃないだろ？」
「でも、金がなきゃ幸せを維持していく事は出来ない。そもそも暮らしていけないのが現実だ。何のしがらみも無く生きたければ、世捨て人にでもなって自給自足の生活を送る他無い。でもだからこそ、老荘思想は根強い人気が有るのかもな。現実には無理でも、せめて心だけはそうありたいって事だ」
「心だけは……か」
「もちろん、老荘はそんな理想論だけじゃない。『弱よく強に勝ち、柔よく剛を制す』の様に逆転の発想や、物事を色んな方向から見て考える大切さを学べる。知っておいて損の無い思想だ」
「うん。難しいが、何となく解った気がする」
「そっか……じゃあ、帰るか？」
俺は広場を一度見渡して、そこに女の子が居ない事を確認してからそう言った。
「ん？広場に入らないのか？」
「ガキどもが遊んでるトコ邪魔してもな……また今度にしよう」
「ここの事をもっとよく知りたかったんだが……残念だが仕方が無いか……」
名残惜しそうに時折振り返る智代を促しながら、俺達は森を後にした。

4月13日：成人の儀

智代と別れて公園に着いた頃には、既に夕暮れ時になりつつあった。

入り口からざっと中を見回すも、居るのは遊んでいる秋生さんといつものガキ共、それと数名珍しく割と大きなガキ共も混じっていたが、今朝会った白い羽の様なリボンの少女は見当たらなかった。

「おう、オーキ！丁度いい！捕れ！」

秋生さんに見つかったらしく、そんな風に呼ばれる。

何が丁度よくて何を捕れなんだか。

まあ、彼女の事を訊いときたいから、こちらとしても丁度いいが。

「チッス、先輩。じゃあ、お願いします」

ホームベースの方に向かうと、それまでキャッチャーをしていた男の方から小走りでやってきて、長目のスポーツ刈り頭を下げながらキャッチャーミットを差し出してきた。

久々に見る顔である。

『三浦　翼』

三浦で翼なのに野球が得意な不届き者として？この辺りじゃ有名な中坊だ。

小学生の頃からリトルリーグに所属しており、この公園にも昔はちょくちょく来ていて一緒に野球をして遊んだ事もある。

その頃から打撃センスは群を抜いていたが、部活でも活躍しているらしく、スラッガーとして結構名を馳せているらしい。

「ああ。お前は捕れないのか？」

「守備は専門外なんで。さすがに“マックス”やフォークは無理っスよ」

いや、専門外って、中学でＤＨとか無いだろ……。

ちなみに“マックス”とは“秋生マックス”、秋生さんの本気のストレートを内輪で勝手に命名してそう呼んでいる。

自称『ＭＡＸ１６０ｋｍ』のプロもビックリなその直球は、草野球でも捕れる人間が居ない為、永らくストライクゾーンの書かれた簡易ネット相手に子供の前で投げて見せるくらいしか用をなさなかった。

しかしそれだけに、それに挑戦し打つ事がこの公園で育った子供達の目標、“一人前”と認められる為のちょっとした儀式になってもいる。

だが、未だそれを打てた人間を俺は知らない。

ただ一人を除いては。

「なるほど。捕れないけど、専門だから打てると言う訳か」

「そのつもりで来たっス」

生意気にも自信に満ちた表情で言い切りやがった。

なるほど、こいつらは今日はその為に来たのか。

まあ、こいつはガキの頃からずっと期待されてきたし、真面目に野球に打ち込んでそれなりに結果を出している自負もあるだろう。

「バッゲームかかってるっスからね……三人居れば誰か一人くらい前に飛ばせるんじゃないかと……」

かと思うと一点弱気になって黄昏る。

さっきのはカラ元気かよ。

「まあ、頑張れ」

「ウッス！」

翼はもう一度頭を下げて小走りで一度仲間の元に戻って行った。

「オーキ、捕球練習いくぞ！」

「捕球すか……」

秋生さんに促され、はめたミットを叩いて馴染ませながらホームベースに向かう。

まあ、実際それが正しいのだろう。

俺が秋生さんの球を捕るのは二年ぶりくらいだからな。

もっとも、正確には“逃げずに止めるのは”だが。

「久々だからな。まずは軽めにいってやる」

そう言いながらもニヤリとした秋生さんは大きく振りかぶり、
「いっくぜえええええっ！！」
と、いきなり雄叫びを上げて投げてきた！
確かに秋生マックスでは無いが、十二分に早い速球。
バンッ！！
分厚いキャッチャーミットを通して尚かなりの衝撃が手の平から伝わり、そのまま反動で後方にもってかれそうになるのをグッと押さえ込む。
さすがに速い！
そして痛え！！
でも、秋生さんはそれ程コントロールも悪くないから、ビビッて逃げ腰になり目をそらしたりしなければ捕る事はそう難しくは無いのだ。
もっとも、この速球にビビら無い事がなによりも難しいのだが。
「ヘッ、さすがにそらさねえか」
俺が投げ返した球を満足気に捕りながら、秋生さんは次のモーションに入る。
秋生マックスはゲームの様にいきなりぽんぽん投げれる物じゃなく、やはりテンションも最高潮に達してないとそこまでのスピードはとても出ない。
まずは気持ちよく投げてもらって、気分を盛り上げていく事が肝要だろう。
その後もテンポよく俺達の投球&捕球練習は続いた。
「ようし、小僧共、そろそろ入れ」
「ヨッシャー！」
秋生さんに促されてまず土に書かれたバッターボックスに入ったのは、翼では無く『遠藤』さんとこの悪ガキだった。
やはりな。
翼と同い年同じ野球部のお調子者で、こういう時に我先にやりたがるタイプだから一番はこいつだろうと思っていた。

運動神経もかなり良く、野球部では一番でショートらしい。
「お願いしまっス」
「おう」
遠藤は球児らしい坊主頭をガバッと頭を下げて、荒れてもいない足場を直すと、左手で持ったバットを伸ばし秋生さんの後方の空を指した。
「小僧が……面白れえ！」
おお、と守備についてる近所の子供達の唸り声。
挑発的なホームラン予告に、秋生さんは一度顔をしかめたが、すぐに不敵に笑いながら一度足場をならして構える。
こういう芝居染みた事がとことん好きな人なのだ。
この程度の挑発で、燃える事はあっても怒る事はありえない。
遠藤もその辺をよく心得ての事なのだろう。
ダイナミックな投球フォームからの緊張の一球目。
直球ど真ん中。
バンッ！！
意外と慎重なのか、見送ってストライク。
「はえ～！！わかっちゃいたけど、実際に打席に立つとやっぱ違うわ！」
単に予想以上に速くて手が出なかっただけか。
「まだマックスじゃ無いぞ」
「マジッスか！？」
返球しながら言ってやると、遠藤は本当に驚いているようだった。
こいつらも秋生さんとの付き合いは長いが、“本気の秋生さん”と相対するの初めてだろうから無理も無い。
秋生さんはとても大人気無い人だが、流石に子供相手に全力を出すような事は無いし、いつもはちゃんと手加減して子供がギリギリ打てる球を投げている。
そしてまた、こいつらも中学に上がってからは公園で一緒になって遊んだりはしていないだろうし、その一方で自分達は中学で部活

をやって自信と経験を積んで来た。
秋生さんを舐めていた訳では無いだろうが、どんなに速いと言っても、まさか未だに手も足も出ないとは思うまい。
バンッ！！
二球目の内角への直球に今度はバットを振るも、バットは虚しく空を斬る。
「クソ！」
何キロ出てるかは知らないし、本当に１６０出るとは思わないが、少なくとも秋生さんの球はバッティングセンターの最速設定より速いし、中学レベルでこれ以上の球と出会う事はまずあるまい。
バンッ！！
半ば破れかぶれの強振で打てるはずも無く、三球三振。
「あーチクショー！！アッキーの球マジはえーよ！！」
「カッカッカッ！当たり前だ小僧！俺様を誰だと思っていやがる！？」
いや、ただのパン屋の主人でしょ……。
「よし、次！」
「はい！」
二番手に打席に立ったのは、やはり翼と遠藤の同級生で、俺にとっては二人以上に馴染みのある奴だった。
「どうも、先輩」
「おう。今年の部はどうだ？」
「まあ、ボチボチです。相変わらず部員少ないんで、今年は沢山新人入ってくれないと厳しいかもですね」
控え目に他の二人より長めの天パー頭を下げたのは、サッカー部、つまり俺の直接的な後輩に当たる『白石』だった。
やや大人し目だが三人の中で一番背が高く、サッカー部ではその長身と長い手足を活かしてキーパーをやっている。
「行くぞー！」
振りかぶって一球目、やはりど真ん中。

バンッ！！
ビクンとそのデカイ身体を強張らせて見送ってストライク。
「マ、マジで速いっすね……！」
「おいおい、キーパーが球にビビんなよ」
「いやあ、流石にあんな速いシュートは来ませんし、球小さいんで余計速く感じます」
「でも、このスピードに慣れれば、そこらの奴のシュートなんて止まって見えるぞ」
「な、なるほど……」
そう、実際に俺は、そうやってスピードと恐怖と言う物に慣れたのだ。
あれは十歳くらいだったか。
サッカーが上手くなりたかった、そして男として強くなりたかった俺は、マンガか何かで優れた動体視力の優位性を知り、それを養うトレーニングを始めた。
踏み切りに張り付いて走る電車の窓の中を見る特訓をしたり、樹の幹を蹴って落ち葉を掴むつもりが、代わりに大量の毛虫が落ちてくる地獄を味わったりと色々やった物である。
そうして行き着いたのが、キャッチャーをやる事だった。
当然初めは子供への手加減した球。
でもそれでも、間近でバットを振られながら速球を捕ると言う事は、動体視力だけでなく判断力や反射神経、そして何より“胆力”度胸を与えてくれた。
サッカーの守備は怖い物だ。
時に目の前で打たれたシュートを、“手を使う事無く”身体で止めなければならない。
例え顔面に当たるとしても、避けたり手で防ぐ訳にはいかないのだ。
だが、もしそこで怖いからと相手にケツを向けていたら、シュートを止められないかもしれないし、何より“格好悪い”だろう。

これは意外と大事な事である。
そのプレーで味方を鼓舞し敵にプレッシャーを与えられるか、それとも点をやり“チキン”となるかが決まるのだ。
ある意味俺の“カテナチオ”の原点は、この秋生さんの球を捕る事だったのかもしれない。
やがて、ほぼ完全に俺が球を捕れる様になると、秋生さんは徐々に本気を出してそのスピードを上げていった。
さすがに初めは捕れなくて幾つも身体に痣を作ったが、絶対に恐れず、怯まず、ゴールを守っている様な意識でそれに臨み、やがてそれにも慣れ、ついには秋生マックスでもビビッて目を逸らす様な事は無くなったのだ。
バンッ!!
一応振ってはいたが、まだ白石の身体は逃げていた。
「まだ腰が引けてる」
「勘弁して下さいよ」
まあ、野球部の二人と違って打席に立つ事に慣れていないのだから仕方が無いか。
結局、白石も成す術も無く三振し、いよいよ真打登場となる。
「お願いします!」
前の二人の体たらくを見てプレッシャーで緊張したのか、翼は先程よりもやや強張った表情で打席に立った。
だが一度構えると、やはり堂に入ってると言うか、どこか雰囲気を感じさせる。
「行くぜ!」
この勝負を心底楽しんでいると判る男臭い笑み。
今まで以上に豪快な投球モーションで、秋生さんが一投目を放つ。
ど真ん中のストレート、いや、カーブ?
ガッ!!
バットの先に当たったボールは、そのまま斜め後方に飛んで行き後ろの茂みの中に消えた。

「チョッ！いきなりカーブって！？」
「別にストレートだけで勝負してやるとは言ってねえだろ？」
出た！大人気無さ炸裂！！
やや遅めのストレートと思いきや、ボールが右打席に立つ翼から逃げて行くかの様に変化したのだ。
ここに来て温存していた変化球から来るとは……あわよくば引っ掛けさせて終わりにしようとしたのだろうか？
何て姑息な。
もっとも、それだけ秋生さんも本気と言う事か。
ボールを捜しに行った遠藤と白石を他所に、注目の二球目。
内角低めのストレート。
バンッ！！
鋭い振りながらも、バットは空を斬ってツーストライク。
「まだ遅いのか……」
バットをジッと見つめながら翼が呟く。
一球目のスピードなら打てていただろうが、秋生さんの速球を打つには振り始め自体が遅いのだ。
翼が構えなおした所で、勝負の三球目。
外角低めのストレート。
カン！！
「！」
金属バットの快音が響き、おおっ！！と子供達の感嘆の声が上がる。
力強い踏み込みと共に打たれたその打球は、ぐんぐんと伸びて行き公園のフェンスに直撃した。
しかし、フェアグラウンドからは大きく右にそれての大ファール。
「やるじゃねえか。さすがにチョットヒヤッとしたぜ」
新しいボールを受け取りながら、言葉とは裏腹に秋生さんは余裕の表情。
いや、違うな。

遠目からでも解る程ギラギラとした目。
あれは、あの目はそう、ようやく、いよいよ、ついに、本当の本気になった目だ。
「来るぞ……マックス」
「はい！」
俺の警告に、翼は怯んだ様子も無く秋生さんから視線を外す事無く答えた。
さすがに中々肝が据わってやがる。
「行くぜ！！目の穴かっぽじって、その目に焼きつけやがれ！！」
いや、心の眼で見ろと？
台詞は滅茶苦茶だったが、大きく振りかぶったその背にはオーラが立ち上り、それが足を上げた“タメ”の動作でボールへと集約してゆく。
「うおおおおおおおおおおお！！」
咆哮と共にまさに入魂の一球が放たれた。
「！！」
ドゴンッ！！
勝負は一瞬。
後には周囲は静まりかえり、焼け焦げた様な臭いが鼻をつく。
ど真ん中に放られた秋生マックスは、俺のミットに到達して尚ギュルギュルと暫く回転した後、俺の握力をすっかり奪ってポロリと落ちる。
翼はバットを振ろうとしたまま、茫然として固まってしまった。
見逃し三振である。
「見たか！！俺のマックス１６０キロ！！」
お～～～～～！！
止まっていた時が動き出し、子供達の歓声が上がる。
この子達は改めて思い知らされた事だろう。
いつも自分達と遊んでくれる、おかしな不良親父の凄さを。
「ハア～……負けか……」

遠藤と白石が揃って肩を落とした。
そういや罰ゲームがどうとか言ってたな。
まあ、大体想像つくが。
「よ〜し、テメエら、約束通り早苗のパンを買っていけよ！」
ほらな。
「だが、特別にお前らにもう一度チャンスをやろう」
ん？
「リベンジさせてくれんの？」
「いや、どちらかと言やあ、リベンジするのは俺の方だ」
まさか……！？
「オーキ、打席に立ちやがれ！！俺と勝負だ！！」

4月13日：お前にラブマックス

「お前が俺に勝てたら、こいつらの賭けの分はチャラにしてやる。その代わり、俺が勝ったら売れ残りの早苗のパンをお前等で全て買っていけ！！」

「「「ええ～～～～～～！？」」」

マウンド上の秋生さんの理不尽な言葉に、中坊三人組の驚きと不満の声が上がった。

そりゃあそうだろう。

あまりにも強引な言い分で色々ツッコミ所満載だ。

「一人一個の約束じゃん！！」

「あん？だから、テメエらとの賭けは俺様の勝ちだったじゃねえか。今度はそいつをチャラにする為の賭けなんだ、レートが上がるのは当然だろう？四人で割れば一人一個が二、三個になるだけじゃねえか」

「てか、俺にメリットが何も無いんですが……」

まだ痺れている手をブラブラさせながら、肝心な事を言っておく。

だが、この人にまともな理屈が通用する筈も無く、あからさまにつまらなそうな顔をして俺を睨んでくる。

「テメエには可愛い後輩の為に一肌脱ごうって気概は無えのか！？」

「俺は極力自分のケツは自分で拭かせる主義なんで。てか、普通にもう一回づつ勝負してやらりゃあいいじゃないですか？なあ？お前らも、もう一回やりたいだろ？」

「あっ……いや……」

折角再戦出来る様に持って行ってやろうとしているのに、三人組は視線をそらしながら口を濁す。

何だ！？秋生さんにビビッたのかコイツら！？

「リベンジしたくねえのか？」

「そりゃあ、アッキーとは勝負したいんスけど……」
「負けた時の罰ゲームが……なあ？」
ビビッていたのは早苗さんのパンにだった！！
「とにかく、折角ここまでお膳立てしてやったんだ。オーキ！つべこべ言わず打席に立ちやがれ！」
「いや、だから、俺にやるメリットが無いでしょ？」
「俺様のリベンジだと言ってるだろうが！二年前、たまたままぐれでテメエに打たれて以来、ずっと勝ち逃げされたままだったからな。今日こそ雪辱を晴らしてやる！」
「でも、負けたら俺も一緒に罰ゲームやらにゃならんのでしょ？」
「当前だ。つうか、てめえは特別に今後毎朝焼き立ての早苗のパンを買っていけ！」
「「「ヒイッ！！」」」
無茶苦茶なレート？の吊り上げっぷりに、中坊達が代わりに悲鳴を上げる。
さっきからメリットが無いと言ってるのに、どうしてそんな訳の解らんデメリットばかり言うのかが理解出来ん。
「絶対やらねえ……！」
「何いぃいぃいぃ！？」
そこで驚く理由もわからない。
「仕方ねえ。なら、てめえが勝ったら俺様秘蔵のエロ本を一冊くれてやる。これでどうだ？」
そしてキリッと表情を引き締めたかと思うと、すまし顔でこれだ。
てか、後ろには小学生も居るんだが……。
「俺らにもくれんの？」
そこで食い付くな遠藤！
「ああ、一冊づつ、とびきりエロイのをくれてやる」
「いや、こいつら中学生なんだから、とびきりはマズイでしょ？」
「何言ってやがる？こいつらももう中坊なんだから、エロ本の１０や２０持ってて当然だろ？なあ？」

持ってたんかアンタは!?
……いや、この人なら十分有り得るか……。
「さすがにそんなには持って無いよ。精々四冊くらい」
「俺アッキーに入学祝いに貰ったやつだけ」
「俺は……貰ったやつ親に見つかって捨てられたから持って無い」
「「何ぃ!?」」
白石が語った悲惨な過去に、秋生さんと遠藤がハモる。
ちなみに、この公園出身の近所のガキ共に入学祝いで秋生さんがエロ本を配っている事は、公然の秘密なのでウチらの間では驚くに値しない。
「よく我慢出来るなお前等……!!」
いや、そこも驚くトコじゃねえよ!
「お袋さんに俺がやった物だってバラしてねえだろうな!?」
アンタって人は……!!
「い、言ってないよ!……友達が忘れてった事にはしたけど……」
「それならいいが……よし!じゃあ、オーキが勝ったら、てめえには特別に二冊やろう!」
「また親に見つかるとアレだから、いいよ」
「バカ野郎!その為に二冊やると言ってるんじゃねえか!一冊づつ別々の所に隠しておきゃあ、どっちか見つかって捨てられても一冊は残るって寸法だ!」
バカ野郎はアンタだ……!
「てか、俺はやるとは言ってないんだけど」
「何だとテメエ!?一冊じゃ不服だってのか!?チッ、足元見やがって……ならテメエには二冊、いや、三冊やるから、さっさと打席に立ちやがれ!」
「だから別に欲しくないですよ!今だって“預かってる”分の仕舞い場所に困ってるのに、これ以上増えたって邪魔になるだけですよ」
「なっ!?」

そうなのだ。
先日智代に発見され危うく中を見られそうになった俺の部屋に在る大きなダンボールの中身こそ、その“預かっている”大量のH本に他ならない。
そう、あくまで“預かっている”である。
昔秋生さんが「隠し場所がもう無いから預かってくれ」と言ってダンボールごと持って来たのだから、“預かっている”としか言い様が無い。
一応、一通り目は通したが……。
「むしろ、正直あの預かってるヤツ丸ごと返したいくらいです」
「エロ本なんざ要らねえだと!?テメエそれでもチ○チン付いてんのか!?それとも何か?もうエロ本じゃ飽き足らねえから、俺様の超極秘エロビデオを寄越せってんじゃねえだろうなオイ!?」
「おお!アッキーエロビデオも持ってるんだ!」
「フッ、当然だ!!」
相変わらず食い付きのいい遠藤の尊敬の眼差しに、秋生さんは胸を張って見せる。
いい大人がエロビデオでえばるなよ!!
「まあ、ダビングでいいなら考えてやらなくもねえが……画質はやっぱ劣化するぞ?」
「いや、エロビデオも要りませんから」
「な、何だとお!?」
秋生さんは信じられない物を見たとでも言いた気な目で大げさに驚愕していた。
だが、突然全てを悟ったかの様にうんうんと頷くと、とてもいい顔で微笑んで見せる。
「フッそうか……そう言やそうだったな……てめえにはもう既に生身の彼女がいるんだったな!」
「はあ?彼女なんて居ませんよ」
内心ギクリとしながらも、素っ気無く否定しておく。

秋生さんにはっきりと彼女が居るなんて言った覚えは無いはずだ。
そう、そのはずだったのだが……次に秋生さんが口にした事実には、目の前が真っ暗になった。
「とぼけるなよ。お袋さんがウチに来た時に嬉しそうに話してたぞ。お前が可愛い彼女を家に連れて来たって」
あ・の・バ・バ・ア～～～～～～～～～～～～！！！
脳裏に『ウチの子が彼女を連れて来た』と吹聴して回るお袋の姿が鮮明に映し出され、思わず崩れ落ちそうになる。
どうしてあのババアはいつもいつも人がもっとも嫌がる事を平気でしやがるんだ！？
「何でも、髪も手足も長くてスタイル抜群な人形みたいに可愛い子だって言うじゃねえか。おまけに素直で性格も良さそうだって、お袋さんべた褒めだったぞ」
「おお、マジッスか！？」
「おめでとうございます先輩！」
そしてさらに感染拡大中！
やべえ、このままじゃ母校にまで広まっちまいそうだ！
「いや、たまたま用があって家に連れては来ましたが、ただの友達ですよ！」
「別に隠すこたあねえだろ？めでてえ事じゃねえか！お前もついに“男”になったって訳だな！そんな可愛い娘と毎日乳繰り合えるんだ。そりゃあ、エロ本もエロビデオも興味が無くなるわな。だがな、ちゃんと避妊はしろよ！お互いの為だからな！！」
「毎日……！？」
「すげえ……！！」
「やってないし、そもそも付き合ってませんて！！」
後輩達の前で、早速尾ひれを付け始めた！！
「おお、そうだ！じゃあ、てめえが勝ったら避妊具を三箱やろう！超極薄のヤツをな！てめえの事だ。店で買うのは恥ずかしいだろ？」

「ああ、もう！！わかった！！やりますよ！！やりゃあいいんでしょ！！」

「ほう、やはり超極薄に惹かれたか」

「違いますよ！！勝負するからもう金輪際その話を人に広めたりしないで下さい！テメエらもだ！！」

「「は、はい！！」」

中坊共を睨みつけ震え上がらせながら、翼から引っ手繰るようにバットを受け取り、俺は足で書かれた打席に立つ。

秋生さんに乗せられるのは癪だが、仕方あるまい。

このまま放っておいたら、明日には出来ちゃった結婚するなんて話でこの界隈でもちきりになりかねん。

「初めから素直にそうしてりゃあ良かったんだ」

「言っときますけど、あの頃とは条件が違い過ぎるんで、ガッカリさせても知りませんよ？」

「何だ？やる前から言い訳か？」

「……」

まあ、こいつは愚問だったか。

そう悟った俺はそれ以上の問答を止め打席に集中する。

その事は秋生さんも解っていたから、今まで再戦の話をして来なかったのだろう。

二年前の中三の夏、俺と秋生さんは全力で勝負をして、そして俺は秋生さんの秋生マックスを打った。

それは、俺がキャッチャーとして秋生さんの球を誰よりも見てきたからでもあるが、それ以上にあの超豪速球に対応し得る程の集中力を発揮出来たからこそだろう。

ずっと続けていた部活の最後の大会を控え、ようやく見出した自分自身の強さも形になりつつあったあの頃の俺は、気力体力共に充実した最高の状態だった。

だが、その最後の大会を最悪の形で終えた俺は、いわば抜け殻も同然。

早苗さんのおかげで何とか受験は乗り切れた物の、入学してからも空虚で怠惰な日々を過ごして来た俺の心身はすっかり鈍ってしまっている。

それでもあいつと出会って以来、少なくとも気持ちは上向いている。

もちろん偶然居合わせたからでもあるだろうが、それを敏感に感じたからこそ秋生さんも再戦に拘ったのだろう。

「へッ、ようやくその気になりやがったか……手間かけさせやがって……いくぜ！！」

キャッチャーの代わりに三人組が球拾いに入り、ニヤリとした秋生さんが投球モーションに入る。

「食らいやがれぇぇえっ！！」

初球は超インハイのってぇ！？

ガッ！！

「「「うお！！」」」

秋生さんの放った超インハイ、いわゆるビーンボールは仰け反った俺の前髪をかすめ、更に後ろの簡易ネットのフレームに掠り、そのままかなり後方まで飛んでいった。

「わりいわりい！手が滑っちまった」

今のは明らかに狙っていただろう。

その挙句のシレッと口先だけの謝罪の言葉。

「とりあえず、危険球で俺の勝ちですね」

「だから、手が滑ったっつってんだろうが！今のはそこから落ちながら曲がってストライクになる予定だったんだよ！」

「そんな魔球が在るならプロになって下さいよ！！」

まったく、魔球はともかく、ホントにこの人は何でこんな所でパン屋なんてやってるんだろう？

「つべこべ言ってねえで構えろ！次行くぞ！！」

相変わらず理不尽な事を言いながら別の球を受け取った秋生さんだったが、しかしその目付きが変わった事を俺は見逃さない。

大きく振りかぶったその背からオーラが立ち上る。
来る！！
「うおおおおおおおおお！！」
読みどおり、外角高目の秋生マックス！
ボスッ！！
しかし恐れず踏み込んで振ったバットは空を切り、ボールはネットに当たって転がった。
完全に振り遅れだ。
「ああ……！」
「やっぱ先輩でもマックスは打てないのか……！」
中坊達の失意の声が聞こえる。
捕るのは面で止めればいいが、点で捉える必要のある打撃はやはり容易では無い。
だが、今ので打席に立った時のタイミングも大体掴めた。
後は……どこまで集中出来るか、イメージをどこまで再現出来るかだ。
黙想……。

想い出せ。
俺の中には何十球、何百球と秋生さん球を受けてきた経験が在る。
その速さと威力を身体で覚えてきた記憶が在る。
何より、かつてその球を打ったイメージが在る。
今の俺の身体には、あの頃程の“キレ”はない。
だが、あいつと出会って、戦って、色々競い合った事で、今の自分の能力はほぼ把握出来ている。
球もしっかり見えている。
配球のクセも熟知してるし、三人との勝負からここまで読みは外れていない。

ならばやれる筈だ。
要はタイミング。
キレが無いなら、より早く振り出すまでだ！

「流石にビビらねえか……だが！」
一球目のビーンボールでビビらせ、二球目でそれを確かめる様に外角に投げてきた。
しかし、俺は恐れず踏み込んで打ちに行った。
と、すると秋生さんが次に投げてくるのは……。
「打てるモンなら、打ってみやがれえええ！！」
ど真ん中の真っ向勝負！
ガッ！！
「「「当たった！！」」」
当たりはしたが、ボールの下を叩いた打球は右斜め後方に飛んでいくファール。
高目に浮いたのか、それとも予想以上に伸びてきたのかはわからないが、どちらにしろまだ振り遅れていた。
「当てやがったか……だが、これで追い込んだぜ」
そう言って秋生さんは悪戯っ子の様にニヤリと笑う。
確かに追い込まれた。
だが、タイミングは合ってきている。
次こそは……打つ！
「うおおおおおおおお！！」
咆哮と共にダイナミックなフォームからの四投目。
だが、
「「「マックスじゃない！？」」」
秋生さんの投げたそれは、明らかに遅かった。
ここに来てチェンジアップ！？

いや、違う！
ホームベース手前でボールが急激に落ちたのだ。
秋生さんのもう一つの決め球、“落差１メートルのフォークボール”である。
カキーン！！
「何い！？」
「「「おお！！」」」
金属バット特有の快音が鳴り響き、ボールは夕暮れの空に飛んで行く。
落ちる球をアッパースイングですくい上げる様にして打ったのだ。
マックスにタイミングが合い始めていただけに、ここらでここまで温存していたフォークが来る事は十分読めていた。
大きな放物線を描いたボールは、そのまま公園の外まで飛んで行って見えなくなる。
しかし、惜しくも切れて大ファール。
「チッ、読んでやがったか……今のはさすがにヒヤッとしたぜ。やはりテメエを倒すには、真っ向から捻じ伏せるしかねえようだな！」
そして秋生さんは……本当に本気になった。
ただこうして対峙しただけでも、その気炎が目に見える程に。
そう、燃えている。燃えているのだ。
秋生マックスにも、実は上が在る。
秋生さんが燃えれば燃える程、その威力を増していく物だからだ。
ひょっとしたら、本当に１６０キロが出るかもしれない。
だが、火が点いているのは俺も同じだ。
この勝負を始めてから、俺の集中力もまた一球ごとに研ぎ澄まされていく様に増していくのを感じていた。
今なら、出来るかもしれない。
あの時にも匹敵する境地に。
黙想……。

周囲の雑踏は消え、世界は灰色に染まり、形はやがてその輪郭すらも曖昧になって融けていく。
この世界に在るのは、秋生さんと俺だけ。
秋生さんは本当にすげえよ。
これだけの速い球を、こんな小さなストライクゾーン目掛けて投げる事が出来る。
フォークやカーブと言った、変化球まで投げる事が出来る。
俺には到底真似の出来ない芸当だ。
だが、それでいい。
俺はただ、この棒切れを振りさえすればいいのだ。
子供にだって出来る事単純な動作だ。
難しい事何て何も無い。
それだけで、この凄い秋生さんに勝つ事が出来るかもしれないのだ。
だから俺は、その子供でも出来る単純な動作に、
今の俺の全てをかける!!

「行くぜ!!」
「来い!!」
秋生さんの気炎がついに龍となり、俺の気迫が虎と化す。
もはやこれは技術では無く、心と心の、精神と精神の戦いだ。
「うおおお

！！！」

ズドン！！

不意に入ったそのあまりに美しいノイズに気を取られた一瞬の間に、秋生さんの投げた球は簡易ネットを突き破っていた……。

４月１４日焼きたて注意

歌は好きだった
歌うことが好きだった
人前で歌う事は恥ずかしかったけど
幼稚園で習う童謡は陳腐で好きじゃなかったけど
お遊戯なんてアホらしくて真面目にやってられなかったけど
歌は好きだった
親の話では
二歳くらいにはＴＶの前で歌っていたらしく
当時流行っていた女性ロックバンドがお気に入りだったそうだ
歌謡曲が好きだった
気に入った曲は歌番組をビデオに撮って覚えた
アニソンも好きだった
当時視ていたアニソンはほとんど歌えた

童謡にも好きなのはあった

“ある日パパと二人で語り合った”曲とか

“悲しみの無い自由な空へ翼はためかせ行きたい”曲とか

でも団子は子供っぽ過ぎてイマイチだった

ある日公園で何となく一人で呟く様に口ずさんでいると

「オーちゃん、こんにちは。一緒に歌いましょう！」

いきなり声をかけてきて渚ちゃんは

俺の返事も聞かずに歌いだした！

だんごだんごだんご♪

どうやらお袋→お姉さん経由で俺が歌うのが好きだと聞いたらしい

逃げても良かったんだが

前に泣かしちゃった事も有るし

悪い気がして

仕方なく俺も歌う事にした

「だ・だ・だ！だ・だ・だ団子団子！だ・だ・だ！だ・だ・だ・

だ大家族！！」

「えぇっ！？……オーちゃん、それ何か違います」

「僕等の大家ぞ～く！だ・だ・だ・だだ～んご大家族！！」

「そうです。だんご大家族はみんなの大家族です。でも、何か私の知ってる歌と違います」

「勇者王だんご大家族」

「えぇっ！？だんご達が勇者なんですか！？」

「うん」

「確かに聴いてると勇気や元気が沸いてくる気がします」

「アン団子いいな♪みったらしもいいな♪あんな団子こんな団子いっぱいいるけど～♪」

「あっ！その歌なら知ってます！でも、だんごじゃ無かったと思います」

「そ～らを自由にとっびたいな～♪ハイ！空中コンボ！！」

「……空中コンボって何ですか？」

「空中にカチ上げて、地上に落ちない様にボコボコにするヤツ」

「よくわからないけど、だんごとは関係ないと思います」

「じゃあ、ハイ！ハイになれる薬！！」

「それは何のお薬ですか？」

「気持ちよくなって、空を飛んでるような開放感が味わえるらしい」

「そんなお薬があるんですか……オーちゃん私より小さいのに物知りです！」

「残酷なだんごの様に♪大家族よ神話になれ～♪」

「ええっ！？だんご達は残酷じゃないです！とても優しくて温ったか家族です」

「燃え上が～れ～♪燃え上が～れ～♪燃え上が～れ～大家族～♪爆発～炎上～♪」

「爆発しちゃダメです！！」

でもまともに歌うのも照れくさいので

そんなアホな替え歌を歌っては

渚ちゃんにつっこまれていた

歌が好きだった

詩が好きだった
心を揺さぶられる詩に出会える事は無上の喜びだった
曲が好きだった
心に響く曲に出会えた時には一日中でも聴いていた
そして
“あの人”の歌に出会った
それは衝撃だった
感動だった
心を曝け出すかの様な
俺の心を代弁するかの様な
ここまで自分に近い感性に出会えた事は無かった
自分は世界に一人じゃないのだと信じられた
そしてあの人の歌は
俺の心の支えとなった

あの人の歌を毎日聴いていた
金が無いから借りてきたＣＤからカセットにダビングして
オリジナルのマイベストを作って
それを部屋のＢＧＭとして一日中かけていた
時折共に口ずさみながら
思わず共に叫びながら
心に刻み込むように
魂の一部となる程に
しかしあの人はＴＶにあまり出なくなっていた
“スランプ”だとか
“落ち目”だとか
“限界”だとか
かつて一緒になって「いい」と言ってた奴らまでが
そんな憶測を口にした
俺にとってはどうでもいい事だった

あの人の歌は“真実”だから
普遍な“真理”だから
あの人はそこに向かうと言った
そこを目指すと
求め続けると
そして戦うと言った
不条理な現実と
欺瞞に満ちた社会と
何より自分自身の弱さと
あの人は“同志”だった
“戦友”だった
例え傍に居なくとも
会った事すら無くとも
この世界のどこかであの人も戦っているのなら
俺も戦えると思った

負けられないと思った
なのに
それなのに
久々に視たあの人のニュースには
“逮捕”の二字が踊っていた

真実を目指すと言ったのに
どんなにそれが過酷でも
目を背けたくなる様な悲惨な物であったとしても
現実と向き合い戦うと言ったのに
例えどんなに無様で滑稽な姿を晒し笑われようとも
地面に這い蹲り砂を噛んでも
自分の弱さに負けないと言ったのに
“彼”は逃げたのだ
“彼”は目を背けたのだ

“彼”は負けたのだ
そして俺は
“裏切られた”のだ

4月14日（月）

徹夜が確定した。
昨晩、ネットで調べた情報や今後の事に事についての考えなどをノートにまとめていたら、バイトの時間直前までかかってしまったのだ。
幸いにもバイト中はさ程眠くはなかった物の、配り終わって気が抜けたからか、急に眠気が襲ってきてチャリを漕ぎながら意識を失いかけた。
まったく、こんな事を続けていたら、いつか死ぬなと思う。
こんな日は寄り道せずに帰って少しでも寝たい所だが、生憎月曜だし、“あの子”の事もあるのでコーヒーを飲みながら眠気覚ましも兼ね暫く森の中で時間をつぶす。
昨日秋生さんに訊いたのだが、そんな女の子は見かけなかったそうだ。
まあ、昼間は店番してただろうし、その頃に来ていたのかもしれないが。

てか、そもそも遊び場を教えたからと言って、彼女がすぐに来るとは限らないか。

今だってそうだ。昨日ここでこの時間に会えたからと言って、また会えるとは限らない。

それでも、教えた手前もあるし、もしも来て誰も居なかったらガッカリさせてしまうだろう。

そう言えば、昨日の勝負は、と言うか罰ゲームは結局うやむやになった。

「オッシャァァァァッ！！やったぜ早苗～～～！！」

秋生マックス、いや、“秋生ラブラブマキシマム”によって俺を見逃し三振に討ち取り、大げさなガッツポーズで喜びを表した秋生さんは、愛しの早苗さんに向かって両手を広げ走り出す。

そして早苗さんもまた駆け出した。

だが、

「早苗～～～愛してるぜ～～～オヨ！？」

その秋生さんの抱擁をスルリとかわしたかと思うと、何故か早苗さんは俺の前に来たのだ。

いや、何故かはその表情を見ればすぐに解ったが。

「ごめんなさい。私ったらつい勝負の最中に声をかけてしまって……」

案の定、長めのポニーテールを揺らしながら深々と頭を下げられる。

早苗さんとも長い付き合いだから、俺の欠点は重々承知しているのだろう。

集中すると強いが、それにムラがある事。

そして極々一部の人間の存在が、俺の集中力を著しく掻き乱す事。

「あ、いや、俺の精進不足ですから……」

「でも……」

早苗さんにそう申し訳無さそうにされると、自分の不甲斐無さに居た堪れなくなる。

「それに今のは、多分集中してても打てなかったでしょうし……」
それはお世辞では無く本気でそう思うし、事実だろう。
あの球は誰にも打てないし、誰も打っちゃいけない球だ。
「そうだぜ早苗」
早苗さんの後ろから秋生さんがつまらなそうな顔を出した。
「真剣勝負の最中に気を取られたソイツが悪い。大体、女からの声援を力に変えられねえようじゃ、男としてまだまだ半人前ってこった」
「秋生さん、それは人それぞれですから」
「いいや、俺は認めねえ！まあ、何にせよ賭けは俺の勝ちだ！さあテメエら、約束通りパンを買って行きやがれ！！」
「賭け……ですか？」
「あ、いや早苗！まあ、なんだ、ちょいとこいつらに店の売り上げに貢献してもらおうとだな……」
早苗さんの笑顔の問いかけに、秋生さんは過剰に反応して明らかに動揺を見せる。
だが、それを見計らっていたかの様に、それまで黙って成り行きを見ていた中坊共が口を開いた。
「アッキー、罰ゲームで買うパンは何でもいいんだよねえ？」
「ああん！？何を言ってやがる！早苗のパンに決まって……八ッ！！」
しまった！！と言う顔で秋生さんは恐る恐る早苗さんの様子を覗うも、当然の如く覆水盆に返らず、既に早苗さんの瞳には涙が滲んでいる。
奴等め、始めからこれを狙って、俺と秋生さんの勝負をネタに早苗さんを呼んできやがったな！
さすが中学生と言うか、すっかりこいつらも秋生さんの扱いに慣れてやがる。
「私のパンは……私のパンは……罰ゲームだったんですね～～～～～！！」

「さ、早苗！！クッ、テメーら！！」
「あ～あ、早苗さん泣きながら走ってっちゃった」
「俺らは何も言ってないよ」
「早く追わなくていいの？」
「覚えてやがれえ！！早苗～～～俺は大好きだ～～～～～～！！」
てな訳で、走り去った早苗さんを秋生さんが追いかけて行ってる間に、まんまと中坊共は遁走し、俺は毎度の如く暫く客の来ない店の番をする羽目になった。
そして奴等の分まで早苗さんのパンを沢山貰って帰る事で勘弁してもらえた訳だ。
まあ、さすがに毎日早苗さんのパンを買っていけと言うのは冗談だったと思いたい。
十分過ぎる程売り上げには貢献している筈だし。
それに……今日だって……。

ハッ！
ガクンと前に倒れそうになった感覚で目を覚ます。
どうやら落ちていた様だ。
慌てて周囲を見渡してみたが、やはりあの子の姿は無かった。
恐らく今日はもう来ないだろう。
「行くか」
時計を確認するとそろそろ開店時間だ。
今から向かえば丁度いい頃合だろう。
「さて……今週はどんなんかな……！？」
大欠伸をしながら俺は、少しの期待と大きな不安を抱えて俺は務めを果しに向かった。

「おう、来たな」
「チイッ……ふあっっっふう……」
「何だあ？朝っぱらからデカイ欠伸しやがって。締まらねえ野郎だな。シャキッとしろ！」
「寝てないんれすよお……」
「あん！？何だ？徹夜でスケベな深夜放送でも視てたのか？」
「違いますよ……まあ、色々やってたんで……」
「エロエロスケベな事をか？」
「もういいです……それよりも……出来てますか！？」
半分寝ていた身体をシャキッとさせて、マジな顔で訊いた。
「ああ……今週も出来ちまったぜ……！」
秋生さんもギランと瞳を鋭く光らせる。
そして、すでに並んでいた“今週の新作パン”を一つ取ると、ほらよと俺に投げ渡す。
そう、月曜日は今週の新作パンの更新日だ。
そしてその味見……と言うか毒見をする事も俺の仕事になっている。
今回のはやや薄くて平べったい事を除けば、見た目的にも匂いも普通のパンだ。
「ある意味今のお前には丁度いいかもしれねえな。思いっきりガブッといけ！ガブッと！眠気も吹っ飛ぶぜ！！」
なるほど。
そう言われたので俺は、恐る恐る前歯を立てた。
すると、途中で明らかにパンと食感の違う硬い物に行き当たる。
「あっ、テメエ！！何甘噛みしてやがる！！」
秋生さんは既に試食して、きっとガブッといったんだろう。
でもこれは……。
噛むポイントを横にずらし奥歯で噛んでみるとバキッと鳴って、

一噛み毎にボリボリと音がした。
ひょっとして……厚焼きせんべいか？
味は……まんま普通のパンとしょうゆ味のせんべいを一緒に食べた様な味だ。
食べれなくはないが、パンの柔らかい食感と、せんべいの固い食感が入り混じって何とも落ち着かない不協和音を奏でている。
それに何より……。
「これ……知らずに食べたら歯がイカレルんじゃ……！？」
「ああ……俺もさすがにヤバかった……特にまだしけってねえ焼きたてがヤベエ！！」
「いや、それは……」
「あら、オーキ君！おはようございます！」
売ったらヤバイと言いかけた所に、計っていたかの様に早苗さんがトレーを持って現れた。
咲き誇る向日葵を思わせる温かで優美な笑顔で。
しかし、そのトレーには出来立ての“歯殺しの魔パン”。
一応、月曜は興味本位で新作パンを買っていくチャレンジャーもいるから、また多目に作っちゃったんだね……。
「もう新作パンは試食してくれましたか？」
トレーのパンを棚に移しながら、やっぱり訊かれたくない事を訊いてきた。
「ま、まあ……」
「どうでしたか？美味しかったですか？」
可憐な少女そのままの姿で、期待に満ちた瞳を向けてくる。
俺とは倍以上歳の離れた人妻だと判ってはいても、思わずときめいてしまい視線を逸らす。
「び、微妙……かな？」
「微妙……ですか？」
俺のオブラートに包んだ答えを聞いて、落胆してしまった様だ。
いや、しかし、どう答えろと？

「どの辺が微妙でしたか？やはり、『おせんべいパン』と言うネーミングが微妙ですか？」
いや、名前は今初めて聞いたんですが。
「一応『ぱきぱきパン』と言うのも考えていたんですが……そちらの方がいいですか？」
「それは……おせんべいパンで！」
せめて名前で中身を警告しておく必要は有るだろう。
無論、出来れば販売中止が望ましいが……。
「では、そのままで販売しますね。それじゃあオーキ君、私はこれで。ごゆっくり見て行ってくださいね」
「はい。どうも」
結局本質に触れぬまま、ペコリと会釈をして早苗さんは奥に戻って行った。
そして行ったのを確認してから、秋生さんが待っていた様につぶやく。
「ったく、てめえはいつも『微妙』だな」
「じゃあ、秋生さんはいつも試食して何て答えてるんですか？」
「もちろん、『早苗、愛しているぞ！』だ」
それはもうパンの感想じゃねえ！
俺も人の事は言えないが……果して俺達が試食する意味があるんだろうか？
「俺も今度からそう答えようかな」
「ハッ！てめえにそれを言う度胸が有るかよ」
無論ただの軽口だったのだが、意外にも秋生さんは鼻で笑っただけだった。
もっと激怒すると思ったんだが。
「マジで言ったら殺すがな！」
たんにマジギレしていただけかよ！
「つうか、その台詞は彼女にでも言ってやれ。喜ぶぞ」
「いや、だから……」

「そうか。言われなくとも毎日の様に言ってるか。そいつはでけえお世話だったな。さては寝不足ってのも、バイトの時間まで愛を語らっていやがったな！」

「してませんて……それより、渚さんはどうですか？」

思いっきりわざとらしいが、気になっていた話題を振って話を逸らす。

長らく休学していた渚さんも、問題が無ければ今日から復学するはずだ。

「何い！？まさか渚に言うつもりじゃねえだろうな！？」

「いや、だからぁ……」

「冗談だ。……まあ、てめえじゃねえが“微妙”ってとこだな」

本当に冗談だったかは疑わしいが、さすがに愛娘の渚さんの事なので秋生さんも真顔になる。

「一応行く気にはなっちゃいるが……まあ、色々あるからな……これればっかりは実際に行かせてみねえ事にはわからねえ……」

「そうですね……」

一年留年して、回りは会った事も無い、そしてかつて後輩だった人間達と同学年として共に過ごす。

当人はもちろん、受け入れる側としても相当気まずい事だろう。

それに控え目な渚さんはあまり友達を作ったりは得意じゃ無さそうだし、確か部活とかもやっていなかった筈だから後輩に知り合いもいなそうだ。

そうすると、今の学校で渚さんの知り合いは、本当に俺だけって事になるのかもしれない。

それでも、当人が行く気になっているのがせめてもの救いか。

それが、親を心配させない為の空元気であったとしても……。

「まあ、なるようにしかならんだろ」

「そうですね……じゃあ、眠いので俺もこれで」

「おう！」

「……ああ、そうだ。新作パン、もう一個もらってもいいですか

？」

帰りかけてふとある事を思いつき、実行すべく訊いてみる。

「何!?まさか、ハマッタのか!?確かに今日のは比較的食える方だが……」

「あ、いや、食わせてみたい奴がいるんで」

俺の言葉に何か思い当たったらしく、珍しく秋生さんの血相が変わる。

「オイオイ、まさか彼女に食わす気じゃねえだろうな!?」

「まあ……まだ彼女じゃないですけど」

「チャレンジャーだなおめえ……どうせ余るからもう一個くらい構わねえが……それで別れる事になっても俺は知らんぞ？」

呆れ顔の秋生さんから早苗さんのパンをもう一つ貰って、俺は古川パンを後にした。

４月１４日焼きたて注意（後書き）

引き続きあくまでこちらメインでいきますが、ＤＴＣの方もよろしくお願いしますｗ

4月14日ただ今冬眠中

「オーキ！朝だぞ！」
遠くでそう呼ばれた気がした。
薄っすらと目を開ける。
白いハイソックス。
白いふとももも。
白い……。
「……何だ……智代か……」
侵入者の正体に安心した俺は、少々名残惜しい気はした物の、まぶたの重さに耐えきれず瞳を閉じる。
「うん。私だ。ほら、起きるんだ」
「……お前また……勝手に……」
「勝手にじゃないぞ。今日もお前のお母さんによろしくと頼まれたんだ」
「……クー……」
「言ってるそばから寝るなー！早く起きて朝御飯を食べないと、遅刻してしまうぞ」
そう言って智代は、俺の布団を一気に剥がしてきた。
いきなり依るべき物を奪われた俺は、全身を襲う寒気から逃れようと、団子蟲の様に丸くなる。
「んん～……寒い～……！」
「だろ？さあ、起きて着替えるんだ」
しかし、今の俺にとっては寒気＜眠気だった。
むしろ、かえって寒さで加速度的に意識が遠のいて行く。
「……眠いよパトラッシュ……クー……」
「だから寝るなー！」
ついに実力行使に出た智代は、逝きかけた俺の肩に手をかけ上体を起こしにかかる。

だが、
「うわっ！！」
半ば反射的かつ生存本能的に、逆に俺は智代を引き寄せていた。
そして俺に覆いかぶさるように倒れた智代の胸に、すがり付く様に顔を埋める。
それはまさに極寒地獄から一転、天使達と共に昇天していくかの様な心地だった。
堪らなく柔らかく、温かで、いいにおいで、とても安らげる極楽浄土。
人肌がこんなにも温かく、恋しく思った事は無いだろう。
いや、一度だけあったかもしれない。
幼い頃のもうすでに風化しつつある記憶。
形を失っても、想いだけは残っている記憶。
「オ、オーキ……！」
「ぬくぬくふわふわ～……」
「ダ、ダメだオーキ……別にお前とこういう事をしたくないと言ってるんじゃない……でも、こんな朝からなんてダメだ。学校に遅刻してしまう……」
「……ク～……」
「！！私を布団にするなー！！」
極楽気分で眠りについた俺に気付き、上体を起こそうとしながら真っ赤になって智代がつっこむ。
だが下から俺に抱きつかれている為、智代もそれ以上の身動きが取れない様だ。
「コ、コラ、いつまで抱きついているつもりなんだ？いい加減に放すんだ」
「ん～……眠いんらよ～……」
「眠くても、もう起きる時間だ。学校に遅れてしまうと言ってるじゃないか」
「学校休む……」

「そんなのはダメだ。ズル休みは良くない」
「寝てないんらよ～……」
「どうして？お前も鷹文の様にずっとパソコンをしていたのか？」
「ノート書いてた……」
「ノート？勉強をしていたのか？」
「違う……智代に見せようと思って……」
「私に？」
「机の上にある……」
「机……？」
俺の言葉を確かめようと、智代は首だけ捻りながら伸ばして机の上を見ようとする。
「ここからじゃ見えないな……オーキ、重いから放してくれ」
「ん～、ふかふか布団～」
「だから私はお前の布団じゃない！まったく……仕方の無い奴だな……ほらオーキ、布団だ。少しの間だけ返してやるから、私を放すんだ」
このままでは埒が開かないと悟ったのか、不承不承智代は布団に手を伸ばして引き寄せると、俺に掴ませようと布団を俺の頭に被せた。
「んん……布団……」
思わずそれに反応して俺が布団を手をした隙に、智代は離れて立ち上がると、机にあったノートを手に取り開く。
俺は取り返した布団を頭から被ると、その裾を掴んで巻き込み、繭の様にして全身を包む。
「これは……！！」
直ぐにその内容に気付いた智代はペラペラとページをめくって暫く中身を確かめると、感極まった様にぎゅっとノートを抱きしめた。
「嬉しい……！お前は本気で桜並木を守ろうとしてくれているんだな……！でもな、オーキ。お前が本気で考えてくれる事は本当に嬉しいんだが、徹夜してまで頑張るのはもう無しだ。お前がそれで

身体を壊してしまったら、元も子も無いだろ？」
「うん……でも、いつまでいられるかわからないし……」
「それは……どう言う意味だ？」
「……クー……」
俺の言葉に不安を感じて智代の顔が上がる。
しかし俺はその問いかけに、布団の中から寝息で答えた。
今の俺の意識は波間を漂っているかのように浮き沈みを繰り返し、ほとんど無意識の会話、いわゆる“寝言”を言ってるに過ぎない。
「オーキ……？……寝てしまったのか……」
智代は暫く所在無さ気に俺とノートを交互に見ながら逡巡していたが、しかし、うんと自分の出した答えに頷いて、俺の傍らに女座りで腰を下ろすと、そっと俺の繭に手を置いた。
「寝不足の理由は解った。私も出来れば好きなだけ寝かしておいてやりたい。でもな。やっぱりズル休みは良く無い事だ。ほら、私が手伝ってやるから、頑張って起きて学校に行こう」
そう言って智代は、俺の頭の方に移動して正座に座り直すと、そこからブルドーザーの様に前に進みながら俺の頭と肩を持ち上げてそこに自分の膝を入れ、寄りかからせる様にして俺の上半身を起こしにかかる。
「ん～ふかふか枕～……」
「だ、だから私のおっぱいは枕じゃない！ほら、起きて朝御飯を食べるんだ。部屋に来る時に持ってきてあるからな」
「んんん～……眠いんだよ～……」
「でも、朝御飯は食べないと身体に毒だぞ。ほら、私が食べさせてやるから」
「ん～ん、いらない……」
「折角お母さんが作ってくれた物をそんな風に言ってはダメだ……じゃあ、こうしよう。朝御飯を済ませたら、時間ギリギリまで寝ても構わない。それでどうだ？」
「ん～～～……食べる……」

今の俺は寝ることが最優先事項であり、その為には手段は選ばなかった。
無論、論理的思考なぞ出来ない状態だが。
「よし！じゃあ、チョット待っていてくれ。今近くに持ってくる」
智代は寄りかかっていた俺の上半身をそのまま前に倒して背後から退くと、立ち上がって側のテーブルの上に置いてあったお盆を取り、それを持って今度は俺のすぐ隣に座った。
「お待たせ！オーキ、ご飯だぞ。あ～ん」
どこか張り切った様子で智代はおかずの一つを箸で摘むと、嬉しそうに俺の口元に持ってくる。
「あ～ん……」
俺は目をつぶったまま、それを確かめもせず口を開け、放り込まれたそれを咀嚼して飲み込む。
「次はご飯だ。あ～ん」
「あ～ん……」
「美味しいか？」
「うん……」
「そうか。良かった。次はお味噌汁だ。こぼさない様に気をつけるんだぞ」
「うん……」
そう言われてもやはり目を開けることは無かったが、智代が巧く口に運んでくれた為、味噌汁もこぼす事はなかった。
「次はご飯だ。あ～ん」
「あ～ん……」
「……ふふっ、そうやってると、本当のクマさんみたいだな」
「うん……」
「それにいつもよりも素直だ……やばい、何か凄く可愛いく思えてきた……」
智代は少し困った様に言って頬を赤らめる。
「あ、いや、普段のお前が可愛くないと言ってるんじゃないんだ。

ただ、普段のお前はどちらかと言えば“意地っ張りクマさん”だからな……もう少し自分に素直になってもいいんじゃないかと思っていたんだ……あっ、だからと言って、Hな事に素直になっていいと言う意味じゃ無いぞ！」

「うん……」

「ただ、もっとお母さんに対してとか、その……私に対しても、もっと素直になって欲しいと言うか……お前の本当の気持ちを聞きたいんだ……」

「うん……」

恥ずかしそうにそこまで言った智代は、意を決した様に唾を飲み込んで俺に熱い視線を向けた。

「……なあ、オーキ……お前は……私の事……」

「うん……」

「ま、まだ何も訊いて無いじゃないか！！」

「うん……」

「……なあ、オーキ、お前はクマか？」

「うん……」

「……ハチミツが好きなのか？」

「うん……」

「……私と一緒に生徒会に入ってくれるのか？」

「うん……」

「何でも『うん』か？」

「うん……」

「……ハア……素直になり過ぎだ……」

「……クー……」

「ああっ、済まない！寝たらダメだ！ほら、ご飯だぞ！あ～ん」

今の俺に意識が無い事を知って嘆息した智代は、俺が座ったまま寝始めた事に気付いて慌てておかずを俺の口につっこんだ。

「よく頑張ったな。さあ、少しだけだが眠っていいぞ。ご褒美に膝枕をしてやろう。特別だ」

「オーキ、坂上さん、まだ居るの？学校遅れちゃうわよ！」

「！！んぐっ！！」

ドアをノックする音と共に聞こえてきたお袋の声に条件反射的に瞬時に覚醒した俺だが、しかしとてつもなく柔らかい物が顔に乗っている事に気付いてギョッとなる。

「はっ！！うわあ、しまった！！つい私までうとうとしてしまった！！」

上の方で可憐な少女の叫び声が聞こえた。

それでその声と乗っけられていた物の主は誰かは直ぐに判った物の、肝心の何故こいつが俺の部屋に居て、何故膝枕と胸の極上プレスをしていたのかが直ぐに理解出来ない。

てか、頭の中真っ白だ！

いや、落ち着け！！

思い出せ俺！！

「済まない！私が食器を下げてくるから、お前は直ぐに用意をしてくれ！」

「あ、ああ」

幸か不幸か腹筋で上体を起こし膝から退くと、智代は慌てて空の食器の乗ったお盆を持って部屋を出て行ってくれた。

どうやら朝食は済ませたらしい。

だんだんと靄のかかったままだが思い出してきた……。

確か寝てたらアイツが来て、布団取られたから抱きついて……うわわっ……！！

いくら寝ぼけていたとは言え、あまりの自分の痴態に顔から火が

出そうになる。
忘れよう……いや、俺は何も覚えていない！！
うん！何も覚えていないぞ！！
それよりも今は学校に行かねばと、自分に言い聞かせながら俺は慌しく用意を始めた。

番外編１０月１４日比翼の鳥（前書き）

智代誕生日記念作品です。

番外編１０月１４日比翼の鳥

１０月１３日

「坂上先輩、明日の放課後って何か予定あります？」
昼休み。いつもの様に生徒会室に向かう道すがら、後輩達に呼び止められた私は、今日何度目かの同じ質問を訊かれた。
「あるぞ。生徒会の仕事だ」
「えっと……じゃあ、明日先輩のお誕生日ですよね？パーティーとかやらないんですか？」
「はっきりやるとは決めてはいないが、明日の夜は家族と過ごすつもりだ」
私の答えを聞いて、後輩達は失礼しましたと足早に去って行く。
もちろん誕生日を祝ってくれようとしてくれる事は嬉しいし、少々可哀相な気もするが、明日は家族と過ごすと一年前から決めていた事だから仕方が無い。
去年の１０月１４日。
それは私にとって、初めて両親から誕生日を祝ってもらえた日だ。
両親と退院した鷹文と四人、一つの大き目のケーキを囲み、皆で分け合って食べ、三人からプレゼントまでもらった。
「誕生日おめでとう」
そう言われた時には、涙が出そうなほど嬉しかった物だ。
だから、その時心の中で祈った。
来年もまた、家族一緒に誕生日を過ごしたいと。

二年前までの私にとって、誕生日にはあまりいい思い出は無かった。

いや、正しくは“思い出に残るほどの日”では無かった。
いや、それも違うか。
“思い出したくも無い日”
それが一番正しいかもしれない。
ろくに会話もなく、顔を合わせることすらあまりない冷え切った家庭。
私に怯え、目を合わそうともしないクラスメートや教師達。
寄って来るのは、ろくでもない敵ばかり。
「私は、一体何の為に産まれてきたのか？」
疑問に思った事は一度や二度じゃない。
産まれてなど来なければ良かったと思った事すらある。
その憂さを晴らす為に、私は荒れた。
そして私は、ますます一人になった。
今にして思えば、それは当然の事だし、本当にバカな事をしていたなと思う。
でも、当時の私にとっては、それしかなかったのだ。
荒れることでしか、生を実感できなかった。
本当に、バカげた事だったとは思うが……。

１０月１４日

いつもなら決まった時間に寝る事の出来る私が、どういう訳か今日は布団に入ってもなかなか寝付けなかった。
少なからず興奮しているからだろうか？
時計を見ると、間も無く日付が変わろうとしている。
仕方が無い。
寝ることを諦めた私は、部屋の明かりを点けて、じっと明日が来るのを待った。

……後数分。
……後数秒。
……0時！
……。
あまり実感が湧かない。
まあ、当然か。
一つ歳をとったからと言って、何がどう変わる訳じゃない。
いや、これが18とか20だったら、また違うのかもしれないが
……。

17歳か……。
「坂上智代、17歳です！」
……早苗さんの真似をして言ってみたが、恥ずかしいだけだった。
そもそもこれは18歳以上の人が言う物であって、実際17歳の人間が言ってもだからどうしたという感じにしかならないだろう。
気分転換に窓を開け、空を見上げる。
よく晴れた綺麗な星空が広がっていた。
お月様も煌々と光っている。
『新月の方が、星が良く見えるから好きだ』
あいつはそう言っていたが、私はお月様も好きだ。
いくら明る過ぎて他の星が見えなくなるからと言って、邪魔者にしたら可哀相じゃないか！
まあ、あいつも『月は月で好きだが』とは言っていたが。
フフッと思わず笑みが漏れる。
あいつは今頃どうしているだろうか？
ちゃんと寝ているだろうか？
また夜更かしして、寝坊して遅刻したりしないだろうな？
今の私は、迎えに行ってやれないんだぞ……。

明日、と言うか既に今日も早いから、あまり外を眺めている訳にもいかないな。
いい加減に寝ないと、私の方が寝坊してしまいかねない。
そう思い、窓を閉めかけたその時だった。
「！！」
家の敷地内、物陰に怪しい影見た気がして手を止める。
間違いない。
窓の下に誰かが居て、相手もこちらを覗っている様だ。
「待て！！」
深夜である事も忘れて思わず制止の声をあげた。
私に気付かれた事に気付いたのか、その不審者が動き出したのだ。
だが、それで止まる筈も無く、影は敷地内から出て走り去ろうとする。
逃がさん！！
私は、躊躇なく二階の窓から飛び降りた。
着地時の衝撃で、そういえば裸足だった事に気付く。
靴ぐらい自室に置いておくべきだったか。
そんな事を一瞬思ったが、
「なっ！？」
と言う不審者の驚きの声で、もはや追跡意外の事に感心は無くなった。
男は初め停めてあった自転車に向かおうとするも、それをあっさりと断念しそのまま走り抜ける。
クッ、私がそれを読んでいた事に気付いたか。
もし乗っていれば、余裕で走り出しを捕らえられた物を。
逃亡者は私を撒く為に、闇雲に角を曲がり、細い路地を抜け、袋小路に追い詰めたかと思えば、人の家の庭を抜け、塀や柵を乗り越え、ワンワン吼える犬をかわし、猫の集会をにゃ〜ごーと追い散らし、くま……はさすがに居なかったが、中々にしぶとく往生際の悪い奴だった。

しかし、ついに直線で距離を詰めた私は、一足飛びに跳びかかる。
「おわ！」
後ろから背中に乗りかかられ、男は前につんのめりながらも倒れまいと必死に抵抗した物の、遂に力尽きてアスファルトの地面に倒れこんだ。
勝った！！
私の勝ちだ！！
「……お前しつこ過ぎ！」
「お前が逃げるからだ！」
突っ伏したままそんな事を言う不審者に、負けずに言い返してやる。
「まったく……どこまで逃げれば気が済むんだ？」
「お前が諦めるまでだ」
「違う！私がお前を捕まえるまでだ」
下から溜息が聞こえた。
「とりあえず退いてくれ。てか、お前靴履いてんのか？」
「履いている訳ないだろ。お前を見失うと思って、そのまま追い駆けて来たんだからな」
また下から溜息が聞こえた。
本当に失礼な奴だ。
「まったく、誰の所為だと思っているんだ？」
「わかったから、とりあえず退いてくれ。てか、怪我とか平気か？」
そう言われて不信な男の上から降りた私は、片足立ちで左右の足の裏を交互に確認する。
が、どんなに目を凝らしても、暗くて正直よく判らない。
「ん～……多分平気だ。少しジンジンするが、傷の痛みでは無い……と思う」
「多分て……まあ血とか出てなきゃ平気か……じゃあ、乗れ」
男は私の前で背を向けながらしゃがみこむ。

おんぶしてくれると言う事だろう。
「すまない」
その好意に甘えようと肩に手を置いたその時、ある名案がひらめいた。
「なあ、どうせなら一つお願いが有るのだが、聞いてくれるか？」

「うん！楽チンだ」
おんぶしてもらう代わりに、私は彼の両腕に抱えられていた。
いわゆる“お姫様抱っこ”だ。
「そうか？おんぶの方がお前も楽じゃね？」
「そんな事はないぞ。中々快適だ」
そう言いながらも私は、少しでも彼の負担を減らそうと、彼の首に回していた手に力を込める。
それでも全然きつくなんて無かった。
むしろ、夢の様ですらあった。
……ひょっとして、これは夢なのか？
本当は、私は既に寝むっていて、今まであった事は全て夢だったのだろうか？
「お、おい」
更に力を込め、彼をギュッと抱きしめる。
例え一夜の夢でも構わない。
彼を近くに感じていられるのなら……。

本当に、夢であって欲しかった。
「……ねぇちゃん、こんな時間に、外で何してたの？」
「散歩だ」
「裸足で？二階の窓から飛び降りて？」

「星を眺めていたら、したくなったんだ」
「まさか、夢遊病とかじゃないよね？」
「いいから、お前もパソコンばかりしていないで寝ろ！！」
「ええー、こんな夜中に呼び鈴鳴らしたの、ねぇちゃんでしょ？」
「……私じゃない……」
「え？」
「いいから寝るんだ！それと、今あった事は全て忘れろ。お前は何も見なかった。いいな？」
「いや、忘れろと言われても……まあ、父さん達に言ったりしないけどさ」
あの不審者は私を家の前まで送ったはいいが、鍵がかかっていて入れないと知るや、あろう事か呼び鈴を鳴らしたのだ。
幸か不幸か、出てきたのが鷹文だったからまだ何とか誤魔化せた物の、両親だったらと思うとゾッとする。
しかもだ。
あの男は帰り際、ポケットから鳥の翼を模ったキーホルダーを取り出すと、意味有り気に
「これ、何だかわかるか？」
と訊いて来た。
嬉しかった。
本当に、夢の様だと思った。
「ひょっとして……私への誕生日プレゼントか？」
「ブー。これは俺の羽だ。ただ見せたかっただけだ」
そう言って、あの男はそれをポケットにしまった。
久しぶりに誰かに対して殺意を覚えた。
「な・ん・な・ん・だ・そ・れ・はー！？」
だが、そんな私の乙女心をとことん弄ぶように、彼は不意に呼び鈴を押し、今度こそ自転車に乗って逃げてしまったのだ。
そうして今に至る……。
最悪だ……。

裸足で走り回らされて、ぬか喜びさせられて、鷹文にまでこんな恥ずかしい姿を見られて……。
本当に最悪の誕生日だ……。
「ああ、そうそう、はい、コレ」
俯いたままトボトボと歩いていた私をチラチラと気にしていた鷹文は、思い出した様に言って包装されリボンの付いた小さな長方形の箱と、くまのシールで封のされた手紙を差し出した。
「あっ……ありがとう鷹文!!やっぱりお前は最高の弟だ!!」
「うわっぷ!違うよねぇちゃん!僕からじゃないって!」
苦しげに吐かれたその言葉に、感極まって抱きしめた弟を放す。
鷹文からじゃない??
じゃあ、誰のだと言うんだ?
くまを破らないよう慎重にシールを剥がし、中を読む。
そこにはたった一言だけ。
でも、それで十分だった。
十分過ぎた。
慌てて私は箱の包装を破り取り、中を確認する。
やはりそれは、先程見た翼を模ったキーホルダーだった。
「ごめん。なんかねぇちゃん凄く落ち込んでたからネタばらしするけど、実は『ポストに入れておくから、明日の朝にでも渡してくれ』ってにぃちゃんから頼まれてたんだよ。でも、まさか普段は寝ている筈のねぇちゃんが起きてて、しかもにぃちゃんが見つかるなんて思いもしなかったからさ……でも、にぃちゃんから何も聞いてないみたいだし、とぼけた方がいいのかなって……ねぇちゃん!?」
「……まったく……お前達は……本当に仕方の……無い奴等だ……!!」
とても立っていられず、プレゼントを抱いて私はその場に座り込んだ。
涙が止め処なく溢れてくる。
比翼の鳥は、生まれつき片翼しかなく、つがいでないと飛べない

鳥。
この世に生を受けて、私は今日程産まれてきて良かったと思えた日は無い。
『
俺の比翼へ
産まれてきてくれて、ありがとう
』
まずはぐっすり寝て、朝起きたら両親に「ありがとう」を言おう。

4月14日姉と弟

そして今日も俺達は走って登校する羽目になる。
「起こすと言っておきながら、本当にすまない」
「気にすんな……寝てたのは俺だ」
「お前の寝顔を見ていたら、その……和んでしまってついうととしてしまったんだ……」
「……と、とにかく急ぐぞ」
そんな事を頬を染めながら言われ、こっちまで恥ずかしくなってくる。
一番無防備な姿をずっと見られてたって事だよな……。
学校とかで突っ伏して寝ているのとは違う、モロの寝顔を、それも膝枕されて超至近距離で。
てか、いくら物凄く眠かったとは言え、どうして人が入って来て起きなかったんだ俺は？
今まで親が起こしに来て、二度寝した事なんて無かったんだが……。
コイツならいいかと思っちゃったんだよな……。
……忘れよう！
湧き上がってくる羞恥を誤魔化す様に、俺は走る事に集中した。

坂の下まで来た所で時間を確認して、俺達はようやく一息つく。
後は歩いても平気だろう。
散り始めた桜の咲く並木道は、時間ギリギリ駆け込み組でごった返していた。
ちらほらと見知った顔も見受けられる。
まあ、大抵早目に来る人間は毎日早いし、俺の様にギリで来る奴

は常にこの時間帯だろうから、毎日似た様な顔ぶれ、光景になる物だろう。
しかし坂の途中、俺は思わず立ち止まる。
そんな見慣れたいつもの登校風景の中に、一人佇む彼女を見かけたのだ。
渚さん……。
立ち止まったまま、そこから動く様子が無い。
復学した感慨に耽っているのだろうか？
それとも久々に見る桜並木に見とれているのだろうか？
あるいは……？
その理由は窺い知れないが、皆上を目指して歩いている人波の中、ぽつんと立っているその後姿は、そこだけ時が止まっている様だった。
「どうしたんだ？」
急に立ち止まった俺に気付いて戻ってきた智代に声をかけられ、ふと我に返る。
いかんな。こっちもあまりのんびりはしていられないんだった。
「ああ、いや、ちょっと知り合いを見かけたから……」
「ん？そうか」
適当に事実を述べて誤魔化すと、俺は渚さんに一応声をかけるべく背後から近付いく。
「おはようございます。先輩」
「へっ！？あっ、オーちゃん！おはようございます」
驚かせてしまったのか、少し慌てて振り返った渚さんだったが、しかし俺だと気付いて安心したのかほわっと笑うと、丁寧に頭を下げてくれた。
「調子はどうですか？」
「えっと……その……久しぶりなので、少し疲れてしまいました。あっ、でも、少し休めば平気なので、大丈夫です」
「そうですか……」

渚さんは少し困った様に答えを選びながら答え、更に直ぐそれを誤魔化す様に微笑む。
それで何となく分かってしまった。
彼女がここに居た理由が、あまり好ましい物では無い事に……。
「……じゃあ、先行きますね」
「はい。オーちゃんまたです」
俺は渚さんに頭を下げて、彼女に見送られながらその場を後にする。
「……良かったのか？」
俺と渚さんのやりとりを少し離れて見ていた智代は、直ぐに隣に並んで来ると、後ろを気にしながらそんな風に訊いてきた。
誰か？ではなく、そう訊いてくるという事は、こいつも何かしら感じたのだろう。
「さっきの人、ずっとあそこに立ち止まったままの様だが……具合でも悪いんじゃないのか？」
「ああ。疲れたらしい。でも、少し休めば大丈夫らしいから……」
「そうか……でも、あまりのんびりしていると、遅刻してしまうんじゃないか？」
「別に調子が悪いなら仕方無いだろ……？」
そう言った俺は、踵を返して走り出そうとした智代の腕をすかさず掴んで止める。
「やめとけ」
「どうして？調子が悪いのなら、尚更一緒に行くべきじゃないのか？それとも、私に気を使っているのか？それなら気にするな。ただの知り合いなんだろ？あっ、いや、まったく気にならないかと言われれば嘘になるが……どういう関係なんだ？」
何だそりゃ？
「行きつけのパン屋の娘さんだよ……ガキの頃から世話になってる先輩だ」
「そ、そうか……お前がお世話になっている人なら、ますます放

ってはおけない。放してくれ」
「だから……先輩だっつってるだろ？」
「だから何なんだ？調子が悪い時に先輩も後輩も無いだろ？」
「いや、だからな……そう、例えば……お前が調子悪かったとして、鷹文に心配されたいか？むしろ心配させまいと、普段通り振舞うんじゃないのか？」
「それは……」
「俺にとってあの人は、姉貴の様な人なんだよ……」
それは智代を諭す為に方便で言った事だった。
だが、その自分の言葉に、ふと気付かされる。
渚さんが、俺に優しくしてくれる理由。
声をかけられたのに逃げたり、時に泣かしてしまったのに、それでも優しい理由。
ずっと、渚さんが特別優しい人だからと思ってきたけど……。
ひょっとしてそれは……俺を弟の様に思ってくれているからじゃないだろうか？
単純に彼女が一人っ子で、一番近しい年下の存在が俺だったから？
いや……多分それだけじゃないんだろうな……。
そしてそれは渚さんだけでなく、秋生さんや早苗さんが、何となく俺を気にかけてくれる理由なんじゃないだろうか？
俺には……二歳上の姉が居た。
産まれつき重い障害を患っていて……寒い雪の日に死んだ……らしい。
俺に彼女の記憶は無い。
俺が物心つく頃にはずっと病院暮らしで、ほとんど顔を合わす事無く亡くなったからだ。
だから俺には、感傷も何も無い。
いくら姉とは言え、所詮知らない人の死だ。
でも俺以外の人には、そうはならないだろう。
どんな噂もたちまち広まる狭い町内。

ご近所さんなら、大概家の事情は知っている筈である。
姉を亡くした弟。
そんな子供がふらふらと独りで居たら、構いたくもなるかもしれない。
あの優しい渚さんがそんな話を聞かされたなら、同情してくれるに違いない。
俺の方はまったくそんな事を考えた事も無かった訳だが……。
「つまりお前は、彼女のプライドを傷つけたく無いから、手を貸すなと言うのか？」
「彼女は元々身体が弱くて。だから、人に心配かける事を余計に病むんだよ……赤の他人ならともかく、弟みたいな俺に弱味を見せたくは無いだろ……」
「……なら、赤の他人の私なら構わないじゃないか」
「お前はもう事情を知っちまったし、後から俺の知り合いだと知ったら、彼女はどう思う？」
「……」
ようやく諦めたのか、溜息と共に智代の身体から力が抜け、全てを悟った様な顔で微笑む。
無論、それで油断する事無く、俺はその手を放したりはしない。
「……まったく……昨日もそうだったが、お前は考え過ぎだと思うぞ？」
「昨日？」
「うちの生徒をかつあげから助けた時だ。それだけじゃ彼の為にならないと言って、被害者を苛めてたじゃないか」
「……苛めてない。説教しただけだ」
「……多分、お前の方が正しいんだろうな……でも、それじゃあお前の想いは、相手には伝わらないんじゃないか？」
「はあ？……そんなモン期待してねえし、むしろ伝わらなくていい」
「どうして？お前の評判が一部で悪いのは、そういう態度が誤解

を生んでいるんじゃないのか？」
「だから、他人にどう思われようと関係ねえって……」
「あっ……！」
捨て台詞の様に言って掴んでいた手を放し、勝手に歩き始める。
誰も知らない。知られちゃいけない。
俺は俺の道を行く。
報われようなどとは思わないし、思ってはいけない。
そういう物だし、そういう物だろう？
俺の目指した物は……。
「待て！一人で行く事無いだろ？今日の所はお前の顔を立ててやる。どうだ？ちゃんと男を立ててやれる私は、とても女らしいと思わないか？」
小走りで追いついて、智代は嬉しそうにそんなしょうも無い事を訊いてくる。
期せずして交わった俺とこいつの道は……どこまで続いているんだろうか？

昇降口を抜けた先の掲示板の前に、ちょっとした人だかりが出来ていた。
そうか。今日は月曜だったな。
「あの人だかりは何だ？何か張られているのか？」
上履きに履き替えてきた智代が、爪先立ちをしながら訊いてくる。
「門倉のとこの校内新聞だろ」
「門倉？ああ、みのりの……報道部の新聞か」
門倉の名を出すと益々興味が湧いたのか、智代は背伸びをしながらふらふらと人だかりの方に向かって行ってしまう。
出来ればスルーしたかったのだが……。
渋々ながら俺も人だかりの後ろについたのだが……遠目からみた

その記事にギョっとなった。
この前あった部活説明会の特集号という事もあって通常の倍の誌面の拡大版が張られていたのだが、問題は一枚目の最初の記事、つまり一面トップ記事の見出しである。
『対決!?番長ｖｓ学園のニューヒロイン!!』
あ・の・ア・マ～～～!!
モロだった。
いや、記事にするとは聞いていたが……こんなデカイ、それもトップ記事とは聞いて無い!!
しかも御丁寧に、俺達二人が写った写真まで載せてありやがる。
俺を叩こうと智代が拳を振り上げてる所なのだが……お互い笑ってるし、完全に二人でじゃれている様にしか見えない。
「対決?番長ｖｓ学園のニューヒロイン……一体何の事だ?」
怒髪天の俺だったが、見出しを声に出して読み上げた隣の智代の方を向いて、またもギョッとなる。
いつの間にか智代が……“眼鏡っ子”になっていたからだ。
「あっ!!いや、違うんだコレは……!」
俺の視線に気付いた智代は、何故か慌ててそれを外し隠してしまう。
「いや、目悪いんだろ?別に隠さんでも……」
「眼鏡をかけた自分の顔は、あまり好きじゃないんだ……」
バツが悪そうにそんな事を言った。
つまり、俺に眼鏡っ子モードは見られたくないって事か……?
「まあ、気持ちは解るが……でも、放っとくと益々悪くなったりするんじゃないのか?」
「授業中や家で勉強する時はかけているから平気だ……それとも、お前は私が眼鏡をかけていた方がいいのか?」
「は?いや、いいって言うか……」
「お前は、みのりみたいな眼鏡をかけた女の子が好きなのか?」
いや、最初と質問の趣旨が変わってるだろ!

ズイと問い詰められた所で、周囲の妙な視線に気付く。
ヤバイ！！
当人達だと周囲に感付かれた！！
「と、とにかく、その話は後でしよう。遅れちまうぞ」
「誤魔化すな！どうなんだ？」
「いや、だからな……こんな人の居る所で言える訳ないだろ？」
「え？あっ……！」
声を殺して言った俺の言葉と目線でようやく智代も周りの視線に気付いたらしく、肩を竦めて人だかりから後ずさる。
「行くぞ……新聞なら、門倉に言えば個人用のを多分もらえるから」
「ん？そうなのか？」
こうして俺は、何とか妙な質問を誤魔化しつつ、その場を離れることが出来た。

4月14日始動

智代と別れて教室に入るなり、妙に視線を感じた。
いや、俺が過敏になっているだけかもしれないが……。
聞こえてくる話し声の全てが、俺の噂をして笑っているんじゃないかとさえ思えてくる。
何しろここの連中には、少なくとも智代の面は割れているからな……。

「お、おはよう川上君」
「あ、ああ、おはよう仁科」
お隣の仁科との挨拶もどこかぎこちない。
特に彼女には一緒に居る所を何度か目撃されてのだ。
気マズ過ぎる……。
こんな時はそう、
「寝よ……」

寝不足という事もあってか、目覚めた時には二限目も中頃だった。
当然、即寝に戻る。
今日は……今日もか、午前中は寝て過ごそう。
そう心に決めていたのだが……。
「やっほー！オーキくん、みのりんが来たよ～！」
休み時間に何か来た！
てか、ああ、そういやそろそろ来る頃だったか……。
「はい。りえちゃんにも今週の新聞ねぇ」
「ありがとう門倉さん」
「みのりんだよぉ」
「あ、ありがとうみのりん」

相変わらずのハイテンションにタジタジになりながら、仁科は門倉から差し出された新聞を受け取った。
個人向けの通常版である。
一部１０円で、前払いで１００円払えば一学期間購読出来てお得。
俺は払った事無いが……。
ネタになった個人には無料で進呈されるのだ。
また、去年一年間でもっとも紙面を賑わせた人間、年間ＭＶＰ？も一年間ただになるらしい。
しっかし、生徒会長でも部活をやってる訳でも無い人間が、一番ネタになってる学校と言うのはどうだろう？
この辺じゃ一番の進学校で、部活にも特待生を迎える程力を入れているにも拘らず、だ。
まあ、“にも拘らず”どの部も中途半端な成績しか残せてないのだから仕方が無いのだが。
“文武両道”などと“器用”な事を要求していたり、この御時勢にモロ体育会系だったり、何と言うか、生徒会含めどうにも体質が古臭い。
正直、これじゃあ才能の飼い殺しもいいところだ。
ここの誘いを蹴って別の高校に行った知り合いは、一年で全国制覇してのけたってのに……。
もっとも、家が道場のあいつには、何処の部活だろうと関係無さそうだが。
「オーキくぅ～ん、起きてぇ～」
机に突っ伏したまま寝たふりをしていると、門倉は身体を揺すってきた。
そろそろ起きておくか。
何をされるか判らんし。
「……あのな、門倉……」
重厚さを演出すべく、少しだけ顔を上げ、くぐもった声で呟く。
「なあに？」

「誰があんなデカデカとした記事にしていいっつった!?」
そして顔を起こすと同時に眉を寄せて口端を歪め、薮睨みで問い詰める。
「ごめんねぇ～。他にいいネタなかったんだよぉ」
だが、俺のドスを効かせた台詞を、門倉は容易く笑って受け流しやがった!
クッ、まあ、いつもの事だ。
「別に普通に説明会ネタでいいだろうが」
「それじゃつまんないよぉ」
こいつ……報道部が部活ネタをつまらんとぬかしやがったよ!
「それにぃ、たんに二人で協力して他校の不良を追払ったって書いただけだしぃ」
「ほう、『新しい恋の予感?』だの『二人の関係からも目が離せなくなりそう』だのが“たんに”なのか?」
「それくらいの煽り文句は普通だよぉ。誰も本気にしないってぇ……“事実”でなければねぇ」
これ以上無い程子悪魔ちっくな、いや、邪悪な悪魔その物の笑みだった!
うぐぅ、確かにそうなんだ……あれっきり何も無かったのなら、ただのゴシップ記事に過ぎないし、俺もここまで動揺しなかっただろう。
だがこいつの場合、そこまで計算してやがるから始末が終えない。
俺とあいつの関係が進展してなきゃ、恐らくトップにはもってこなかった筈だ。
てか、どこまで知ってるんだこいつは!?
こいつの話術をもってすれば、智代から洗いざらい聞き出す事なぞ造作も無いだろう。
いや、むしろ鷹文の時みたいに、自分から喋ってる可能性も無きにしも非ずか。
それだけは無いと信じたい所だが……。

「……もういいから行けよ……他のとこにも配るんだろ？」
やはりこいつとの問答は分が悪い。
そう悟って体よく追払おうといたのだが、門倉はにんまりと、
「ううん。この時間はここで終りだから平気だよぉ。配ってるのは私だけじゃないしぃ」
などと言って居座る気満々だった！
ま、まだ何かあんのか！？
身構えながら言葉を待ったが、門倉はにこにこしたまま口を開こうとしない。
嫌な沈黙に、思わず唾を飲み込む。
「……な、何だよ？」
「オーキくんはぁ、眼鏡っ子が好きなのぉ？」
ゲフゥ！！
耐えかねて訊くと、眼鏡の奥の瞳をこれでもかと輝かせながら問いで返される。
驚きのあまり、血反吐が出るかと思った。
イメージの中では出ていた。
まさか既にそんな事まで……。
「あいつのトコにはもう行ったのか……」
「うん。一限が終わって直ぐ新聞渡しに」
「そうか……」
そして新聞を餌に、新たな情報をゲットしてきた訳か……。
やべえな……本当に何もかも筒抜けになってそうだ。
そこでふと思ったのだが……こいつは智代について、どこまで知っているのだろう？
改めて門倉という人間を想う。
こいつは頭が良いし気転も利く。
何より俺に決定的に欠けている社交性と豊富な情報網がある。
これから俺達がやろうとしている戦いを想えば、味方としてこれ程心強い存在は無いだろう。

それに何より、こいつがあいつを公私共に支えてくれる様な親しい友人になってくれるなら、これ程嬉しい事は無い。
もちろん最終的には本人同士の問題だろうが……。
「で、どうなのかなぁ？眼鏡っ子は好き？」
「……それはいいから、門倉、ちょっと来てくれ」
ここらで一度どこまでこいつが知っているのか確認しておこうと思い立ち、場所を変えるべく俺は席を立つ。
「えっ……！ひょっとしてぇ、愛の告白？」
「もっと大事な事だ」
門倉の戯言を聞き流し、俺は人気の無い特別教室の方に歩きだした。

「……つうか、昔言わなかったか？眼鏡をかけてようがいまいが関係ねえって……？」
周囲に人気の無い事を確認した俺は、歩いている内に思い出した事を言ってみる。
そういえば中学の時に似た様な事を訊かれ、答えた事があった筈だ。
「気にしないのと、眼鏡っ子萌えは違うしぃ」
「だ・か・ら……別に嫌いじゃないが、萌えはねえっての」
「ええ～、そうなのぉ？ガッカリ～……」
両腕をだらんと投げ出し、門倉は大げさに肩を落として見せる。
確か、前答えた時には喜んでいたと思ったが……まあ、いいか。
「それで、お前は坂上の事をどこまで知ってるんだ？」
「ん？何でも知ってるよぉ。誕生日は１０月１４日でえ、血液型はＯ型。身長１６１ｃｍ、スリーサイズは８６、５７、８２……」
８６か……やはりデカイな……それに引き締まったケツはやっぱやや小さ目……って！

「いや、そうじゃなくて……てか、そういう事を誰にでもバラしてんのか？」

「もちろんオーキ君にだけだよぉ。心配しなくても、本人と特別親しくない人に個人情報教えたりしないよう」

「ならいいが……そうじゃなくて、あいつの過去とか、この学校に来た目的とかだよ」

「ああ、なるほど……うん。中学の頃から噂は知ってたよ。一部で有名だったし」

俺の言葉の意味をようやく理解したのか、門倉は一瞬どことなく寂し気な表情をしてから再びいつもの笑顔に戻って答えてくれた。

やっぱこいつは智代の正体に気付いてたか……。

でも、その上であいつと普通に付き合ってるのなら、やはりこいつは見所が在る。

まあ、俺で耐性が付いてるのかもだが……。

「それでぇ……この学校に来た目的はぁ、『私より強い奴に会いに行く！』……つまり、オーキ君に会う為なんだよね～」

そんな事まで知ってんのかよ！

「……あいつがそう言ったのか？」

「んと、『そうかもしれないな』……って言ってたよぉ」

わざわざ智代の声真似でクール目に言ってくれる。

これではっきりしたな……。

お前やっぱ普通に喋れるだろ！！

「そうか……じゃあ、あいつがこの学校でやろうとしている事とかは知らないんだな？」

「うん。ああ、そういえば、いつか話すとか言ってたかもぉ……」

「そうか……」

さすがにこいつにもまだ話していないと言う事か……。

“俺にだけ”ってのも何となく嬉しいが、いづれ仲間に引き込むつもりなら早い方がいいだろう。

そうだな……それならついでにあいつも……。

「なあ門倉、お前放課後少し時間とれるか？」
「えへへ～デートのお誘いかな？オーキ君の為ならいくらでも部活くらいサボっちゃうよぉ！」
「いや、てか、校内で済む用事だし」
「ええ～！？そんな学校でなんて……！」
何やら頬を染めて身体をくねくねさせているが、構わず続ける。
「まだ宮沢に確認とって無いんだが、坂上と出来ればあいつも交えて資料室で話したい事がある」
「そんな三人もいっぺんにだなんて……！！」
何やら瞳をうるうるさせ恍惚としているが、つっこんだら負けだ。
「まあ、そういう訳だから、放課後頼むな」
「うん……色々準備して待ってるねぇ！！」
何をだよ！？
丁度鳴り出した三限目のチャイムにも助けられ、つっこみたい衝動を何とか耐え切り俺は教室へと帰還した。

４月１４日始動（後書き）

ＤＴＣも久しぶりに更新したので、よろしくお願いしますｗ

4月14日不味い！……もう一個！

昼休みになると、俺はいつもの様に屋上へと向かう。
何だかすっかり日課になってしまったが……いい加減場所を変えないとな。
ゆくゆくは生徒会長になろうって奴に、いつまでも校則違反をさせられんだろ。
と言っても、あんま人目につくような所は個人的に避けたいし、宮沢みたいにどっか空き教室を占領出来ればベストなんだが……。
後で集まった時にでも相談してみよう。宮沢へは門倉が話を通してくれた様だし。
まずはあの二人を配下に、いや、仲間に引き込む事が俺の最初の仕事だ。
門倉が学校内に精通した人材なら、宮沢は学校外、特に“裏”の面子に顔が広い。
今の智代にどれだけ敵が居るのか判らないが、先週のように度々他校の生徒にやってこられれば、流石に誤魔化しきれなくなるだろう。
それを抑える為にも、宮沢とそのお友達の面々の協力は不可欠だ。
出来れば芋蔓式にこの界隈のアホ共全てを取り込めればいいのだが……まあ、各校のトップと不可侵条約さえ結べればそれでいい。
ふと屋上への階段の途中で立ち止まる。
そういや先週宮沢と話した時も、似た様な事を考えていたっけか。
フッ……と自嘲の笑みが漏れる。
結局、あいつと出会おうと出会うまいと、これが俺の役目なのだ。
部活をやっていた頃に少しだけ憧れていたアウトローの世界。
一度踏み込めば、きっと多くの物を犠牲にする事になる。
まっ、どうせちっちゃな頃から悪ガキで、十歳で『不良みたい』と呼ばれた身だ。

“みたい”が“その物”になったところで、むしろ今更だろう。
それに何より俺は“この町最強”になったんだしな。

「昨夜……眠れずに……」
そして柵によりかかって待っている間に、何となく口ずさみ始める。
忘れたくても忘れられない、あの人の歌を……。
悩み、もがき、苦しみ、それでも足掻き続ける事。
そうやって生きる事が、尊い事だと信じられた。
弱さに負けない様に。
惰性に負けない様に。
楽な方に逃げない様に。
そうやって生きる事が、強さだと思えた。
「だから……」
だから俺は、例え一人でも歩き続けるよ……。
あなたが降りた、この道を……。
「オーキ！」
唐突に背後からかけられた声に、急速に感傷から引き戻される。
振り返るとそこに居たのはやはり、購買のビニール袋を提げた智代だった。
だが、何やら様子がおかしい。
いつもの覇気が無いと言うか、妙にソワソワしていると言うか。
握った拳を胸に当て、訴えかける様な眼差しで俺を見つめてくる。
もしや、購買で何かやらかしたか！？
「どうした？何か有ったのか？」
「それはこちらの台詞だ！そんなに眠れない程悩んでいる事が有るのなら、どうして私に話してくれないんだ！？」
「はい？」

飛び掛らんばかりの勢いで詰め寄って来たかと思うと、必死の形相でそんな事を言ってきた。
その“近さ”と訳のわからなさに一瞬頭が真っ白になる。
何を言って……て、ああ、今のを聞かれてたのか。
「いや、ただ歌の歌詞だから」
「歌の歌詞……？」
「まあ、昨日ほとんど寝て無いのは本当だけどな」
智代はきょとんとした顔で暫く俺を至近距離から凝視していたが、溜息を一つついてからようやく離れ、複雑な表情のまま持参していたビニールシートを敷き始める。
そういや寝てないで思い出したが、あのノートはどうしたっけ？
眠気やら新聞やら何やらで、今の今まですっかり忘れていた。
ひょっとして……家の机の上に置いてきたか？
さっきパンを取り出す時にカバンを見たが、中に入っていたらさすがに気付くよな……？
うわ……徹夜までして書き上げたってのに……。
「今朝も言ったが、お前が私達の目標の為に頑張ってくれる事は本当に嬉しい。でも、それで徹夜したり無理はしないでくれ。さあ、食べよう。お前の分のジュースも買ってきたぞ」
あれ？
自分の迂闊さに自己嫌悪していた所に、シートの上に座った智代からそんな風に言われ、何となく曖昧な記憶が甦る。
「……ノートの事、言ったっけか？」
「何を言ってるんだ？今朝教えてくれたじゃないか。覚えていないのか？」
「いや、ほとんど寝ぼけてたから……」
「そうか……うん。そうだったな……お前が徹夜してまで書いてくれたノートは、私が大切に預かっているから安心してくれ」
「それならいいんだが……」
智代の言葉に胸を撫で下ろしながら俺もシートの上に腰をおろし、

並べられたパックのコーヒーに手をつける。
危うくまた帰りにでもこいつを家に呼ぶ所だった。
さて、気を取り直して飯にしよう。
とっておきもあるしな。
「ああ、そうだ。コーヒーも嫌いじゃないが、俺カフェオレ党だから」
「そうなのか？わかった。覚えておこう」
「それと、今朝言い忘れてたんだが、お前に食べさせようとお前の分のパンも持ってきてたんだ。それは明日にでも回して、先にこっち食ってくれないか？」
「私にか……？」
一瞬智代は嬉しそうに瞳を輝かせたが、直ぐにそれは白眼へと変わる。
どうやらまだ根に持ってるらしい。
まあ、まったく警戒されないよりマシか……。
「また何か変な物が入ってるんじゃないだろうな？」
「またって、本当に入ってた事ないだろ？」
「それはそうだが……お前の事だ。今度こそ本当に入れてるんじゃないのか？」
いつもの得意気な笑みが、「お前の魂胆なんてお見通しだ」と言っていた。
ある意味大正解だ！
何しろこれはあの“早苗さんの今週と先週の新作パン”なのだから……。
だが、だからと言って、いや、だからこそ何としてでも食わせねば！
「そう言うお前こそ、今度こそコーヒーに何か入れたんじゃないのか？」
「わ、私が入れる訳無いだろ！」
「どうだかな……まっ、俺のパンなんて食えないってんなら別に

いいけど……」
そう言いながらも、これみよがしにちゅうちゅうと音を立ててコーヒーをすすってやる。
「……わかった。ちょっと言ってみただけだ……」
暫く口を尖らせて逡巡していた智代だったが、ついに自分から手を差し出してきた。
そうだ。それでいい。
勝利に酔いながら俺は、まずは古河パンの袋から平べったいパンを取り出し手渡す。
「……見た目や匂いは普通のパンだな……何が入ってるんだ？」
「それは食ってからのお楽しみだろ？」
「むう……やっぱり何かおかしな物が入っているんじゃないのか？」
「ちゃんと市販されてる物だから安心しろ。もちろん、半分に割ったり、小さく千切ったりせずかぶりつけよ」
「そんなの女の子らしくない」
「いいや、その場の礼儀作法を重んじてこそ“本当にいい女”だ！最初の一口だけでいいから、出来るだけ大きな口を開けてかじれ」
「……」
とても納得している表情では無かったが、また暫くパンと睨み合った後、ついに覚悟を決め智代はおずおずと口を開けて平べったいパンをかじった。
「んん！？」
が、歯をたてた所で動きがピタリと止まる。
まあ、無理も無いが。
勢い良くいかなかったお陰で、歯を痛めたりしなかった分、噛み砕けないのだろう。
「んん～……！？」
そしてどうするか迷いながらも歯形のついたパンを見られるのも恥ずかしいのか、パンを口に頬張ったまま視線を泳がせ俺に訴えか

けてくる。
「そのままずらして奥歯で噛め」
「ん！」
智代は俺に言われた通りにバキッと快音を鳴らして奥歯でパンの具を噛み砕くと、そのまま憮然としながら咀嚼してゴクンと飲み込み、キッと俺を睨む。
「……何だコレは！？」
「おせんべいパンです！」
すかさず早苗さんの真似で答える。
「どうしておせんべいをパンの中に入れるんだと訊いてるんだ！？」
「それは作った人に聞いてくれ……でも、食べれなくは無いだろ？」
「味はともかく、おせんべいとパンの食感がミスマッチ過ぎる」
「知らずに思いっきり噛んだら歯折れそうだしな」
「なっ……！？私の歯が折れたら、どうするつもりだったんだ！？」
「そりゃあ、まあ、ちゃんと責任取ってやるけど……」
「！」
治療代くらい出すと言ったつもりだったんだが、何故か顔を赤くして俯かれた。
「そうだったな……でも、だからと言って痛いのは嫌だぞ」
顔を赤くしながら恥ずかしそうにそんな事を言わんでくれ！
「じゃ、じゃあ、次はこっちな」
こっちまで火照ってきたのを誤魔化そうと、俺はもう一つの深緑色のパンを取り出す。
「ん？まだあるのか？……なんだコレは？緑色をしているのは草を生地に練りこんでいるのか？」
「よもぎパンです！」
変に勘繰られても面倒なので、今度は予め名前を教えておく。

「ああ、蓬か……でも、どうせ普通のよもぎパンじゃないんだろ？」

うっ、鋭い！

まあ、誰でもそう思うわな……。

「それは食べてみてからのお楽しみだ」

「私は全然楽しくないぞ……まったく、お前は本当に仕方の無い奴だな……」

ぶつくさ言いながらも、やはり蓬だと教えたのが良かったのか今度はすんなりと口をつける。

だが、

「ん……！？んーーーーーーーーー！！！！」

一口噛んだ所で異変に気付いたか口の動きが止まり、文字通り苦虫を噛んだ様な顔で呻きだす。

まあ、無理も無い。

「ほら、コーヒーで流し込め」

「ん！！」

智代の紙パックを取ってやると、それを引っ手繰る様にして俺の手から奪い取り、凄い勢いで飲み始めた。

よっぽど苦かったんだろう。

「んくんく……ハァ！何なんだコレは！？」

「よもぎパンです！」

「それはわかってる！中に入っていた苦いのは何だと訊いてるんだ！！」

「蓬のペースト」

「蓬のって……よもぎパンと言うのは普通餡子とか甘い物が中に入れてあって、苦味と甘味のバランスがとれているから美味しいんじゃないか！！これじゃあただ苦いだけだ！！」

「ホントそうだよな……」

実にもっともな正論に、俺はただただ遠い目をするしかない。

具も蓬のよもぎパン。

……身体には良さそうだよな……。
「……本当にこんな物が売ってるのか？実は私に食べさせる為だけに、お店の人に頼んで作ってもらったんじゃないのか？」
向けられる疑惑の視線。
確かにこんな物が実際に売っているとは、とても想像し難いだろう。
だがしかし、
「悲しいけど現実だ……俺はほぼ毎日食ってるし」
「ま、毎日!？……お前はこういう味が好きなのか？」
「違うって……御近所だし、売れ残りをもらえるんだよ……」
「それでこんなパンが売れる筈無いから毎日の様に売れ残って、お前はそれをもらっていると言う訳か……」
疑惑が晴れ、今度は憐れみの視線を向けられる。
「でも、そんなパンばかり売っていて、実際に毎日の様に売れ残っているのに、それで経営が成り立つのか？」
「いや、もちろんこんなパンばっかじゃないし、他のパンは結構美味いから売れてるぞ。ほら、前カツサンドやったろ？」
「ああ、そう言えば……あれは本当に美味しかった。でも、ちゃんと美味しい物が作れるのに、どうしてこんなパンをわざわざ作るんだ？勿体無いじゃないか」
本当にな……。
「さあ……趣味じゃね？」
「趣味？」
「夫婦でやってる店なんだが、基本的に旦那が作っててそっちは美味いんだよ。でも、一品だけ奥さんが作ってて、それが今日お前に食わせた“今週の新作パン”だ」
「“今週の新作パン”？週代わりで替わるって事か」
「せんべいが今週ので、よもぎは先週のだ」
「なるほど……じゃあ、お前はこの苦いだけのパンをいくつも食べたって事か……」

言いながら智代はよもぎパンを一口かじり、すぐにそれをコーヒーで流しこむ。
「まっ、さすがに慣れたけどな……」
「お前も大変なんだな……」
しみじみと言いながら憂いを帯びた潤んだ瞳で俺を見つめてくる。
解ってくれたか。
「なあ、オーキ」
「何だ?」
「もう流し込むコーヒーが無くなってしまったんだが、残りはどうしたらいいんだ?」

4月14日擦れ違う想いと覚悟

「別に食えないなら残してもいいぞ」
正直もうネタが終わったので半分どうでも良く、軽い気持ちで言ったのだが、しかし智代は下唇を噛んで渋い顔をすると、ゆっくりと首を振った。
「……そう言う訳にもいかないだろ？世の中には食べたくても食べられない子供達が大勢いるんだ……食べ物を粗末にする訳には……」
智代はフルフルと振るえながらもよもぎパンを一口かじると、「ううっ……」と呻きながらもそれを噛んで飲み込む。
しかし、それを見て俺は少しだけほっとしていた。
俺にとって早苗さんのパンは、“パンダの笹”“コアラのユーカリ”の様な物だ。
もし「こんな物食えるか！」と拒絶されていたら、俺自身を拒絶されたみたいな気分になっていたかもしれない。
だが、一口毎にこれでは昼休みが終わってしまいそうだ。
「そういう時はな。せんべいパンを使うんだ」
「おせんべいパン？ああ、なるほど。交互に食べれば少しは味が紛れるか……」
「それでもいいが、それよりまずこうやってせんべいパンのせんべいを取り出してな……」
俺は智代から預かったせんべいパンをただのせんべいとパンに分解してみせる。
次によもぎパンの中身も取り出し、それを先程のせんべいと入れ替えた。
「さあ、これで少しはマシになった筈だ」
「う、うん……」
完成した“かつてせんべいパンだったパンに蓬ペーストを挟んだ

パン”を智代に渡すと、彼女は暫くそれを凝視して、目を瞑って勢い良くそれにかぶりつく。
「……ハア……確かに、これなら何とか食べられる……」
「ほら、口直しにせんべいも食え」
「うん……」
智代は辛そうにしながらも、テンポ良くせんべいとパンを交互に食べ始めた。
これで時間内に食い終われるだろう。
女の子らしい食べ方も何もあった物では無いが……。
「お前は……いつもこんな風にして食べているのか？」
「ん？まあ、家ならジャムとかマヨネーズかけたり、スープに浸すとかやってるけど」
「そうか……色々工夫している訳だな……やっぱりお前は頭がいいんだな」
「そうでもしないと、とても食い切れたモンじゃないからな」
それを思えば、ある意味早苗さんのパンのおかげで自由な発想力が養えたとも言えなくも無い。
人間、若い内の苦労はしておく物なのだろうか？
でも、苦労した人間が必ず成功する訳でも、恵まれた人間が成功しない訳でも無いから、人生は不公平である。
「頭がいいと言えば、お前の書いてくれたノートも良く出来ていた。休み時間に読んだが、たった数日であれだけの事を調べて今後の計画を練って来れるなんて、さすがオーキだと感心したぞ」
「そうか？あれくらい、この学校の生徒なら誰だって考え付く戦略じゃないか？」
「そうだろうか……？少なくとも私は、あそこまで具体的には考えていなかった」
いや、考えておけよ……。
まあ、リーダーは方向性を示せればそれでいいのかもしれんけど。
「とりあえず、俺が知ってる事と考えてる戦略はあんな感じだ。

もちろんより正確な情報と、それに基いた修正は必要だろうが、大まかにはアレでいいと思う」

「そうだな……」

そこで何故かそれまで笑顔だった智代の笑顔が翳る。

よくわからんが、こいつにはこいつの考えが有ったという事なのだろうか？

まあ、それはおいおい擦り合せていけばいい。

「それで、今日の放課後なんだが、暇か？」

「え？あ、いや、特に何も無いから平気だ。どこか行くのか？」

途端にぱあっと翳りが消え、餌を期待する犬の様に身を乗り出し気味で食いついてきた！

何だ？俺に不満が有ったんじゃ無いのか？

「いや、仲間を増やす必要が有るだろ？とりあえず二人ほど声をかけといたから」

「……一体何の事だ？」

正直、俺は喜んでくれると思っていた。

しかし智代は訝しげな表情で、そんなとぼけた事を訊いてくる。

「いや、だから、俺らの仲間に決まってるだろ？」

「……そんなの必要無い」

「はあ！？」

そっぽを向いて呟かれた言葉に、一瞬耳を疑う。

「お前、何言ってんの？」

「今は私とお前だけで十分だと言ってるんだ。もちろん、いつかは増やす必要が有るとは思うが、それは計画が動き出してからでいいじゃないか」

「だから、動くのに人手が要るだろ？」

「だからそれは、まずは生徒会選挙で当選しない事には始まらないじゃないか」

「別に生徒会長になる前にだってやれる事はあるし、その選挙でも協力してもらえるだろ？それとも、会長になれなきゃ諦めるのか

？」

「そうは言ってないだろ？ただ……少し気が早過ぎるんじゃないか？あっ、いや、もちろんお前がやる気になってくれている事は凄く嬉しい……でも、出来れば桜並木の事は他の生徒には選挙まで内緒にしておきたいんだ」

思わぬ智代の言い分に、今度は俺が眉を寄せる。

選挙まで内緒にしておきたいって……？

「気が早いって、ノートにも書いておいただろ？今年いっぱいが勝負だって。それと言っておくが、選挙には俺はあまり協力出来ないぞ」

「どうして！？」

余程ショックだったのか、智代は今にも飛び掛って来そうな勢いで膝立ちになって声を荒げた。

「俺はこの学校じゃ有名な不良であり、真っ向から学校や生徒会を批判してきた反体制の人間だ。当然、教師はもちろん生徒にも俺を嫌ってる奴は多い。そんな奴が側に居たら、お前まで同類に思われちまう事くらい判るだろ？」

「そんなの関係無い」

「無い訳ねえだろ？」

「そもそも、お前は自分が思っている程嫌われている訳では無いと思う」

「だとしても、お前のクラスの……名取だったか？そいつみたいのも居るし、教師の多くは俺を警戒している。選挙ってのは、要は人気投票だ。ただでさえお前は、転校して来たばかりで知名度も低いし、小中で生徒会だったって実績も無い。その上俺の仲間だと思われて敵を作ってたら、勝ち目なんて無くなるぞ」

「そんなの、やってみなければ判らないじゃないか」

不貞腐れた様に言う智代に、だんだんと俺もムカムカしてくる。

「そうかよ？なら、ますます俺が居る意味はねえな」

「だから、どうしてそうなるんだ！？」

「“やってみなければ判らない”でいいなら、俺が策を立てる必要もねえだろと言ってるんだ。最初に訊いたよな？お前に何かを犠牲にしてでも目標を成し遂げる“覚悟”は有るのかって」

「私はそういう意味で言ったんじゃない！ただ、そんな事おかしいじゃないか！お前は誰が何と言おうと私の仲間なんだ。その事で誰かに敵視されたとしても、私は一向に構わないし、そんな事で生徒会長になれるかどうかが変わる訳が無い！」

「変わるんだよ！例え実際に変わらなくても、もしお前が落ちたら“俺の所為”って事になるだろうが？」

「そんな事、私が思う訳無いだろ！」

「俺が思うんだよ！お前の足を引っ張りたくないっつってんだ」

「だったら、私が生徒会長になればいいだけの話じゃないか！」

そのあまりにもポジティブ過ぎる言い分に、俺は溜息しか出ない。どうすれば解ってもらえるんだ？

片手で髪を掻き揚げる仕草で頭を抱える俺に、智代は熱の籠もった視線を向けてくる。

「私にとって、お前が助けになりこそすれ、足を引っ張るなんて事はありえない！だからオーキ、私の傍に居てくれ。お前が居てくれるなら、それだけで私は戦い抜いてみせる」

智代の決意と想いに、心を揺さぶられない訳じゃなかった。

だが、それじゃあダメだ。

そんなの、俺である意味が無い。

今度は、俺の想いをぶつける番だ。

「別に俺は、選挙中さぼるっつってんじゃないんだ。むしろ、さっきも言った様に生徒会長にならなくてもやれる事は多い。主に学校外の事でな。だから、俺はそっちを担当すると言ってるんだ。お前はまず“内”を、生徒会長になってこの学校をまとめる事に専念しろ。その間に俺が“外”の事を進めておいてやるから」

「……私の傍には居られないと言うのか？」

「もちろん相談くらいはのる。だが、ゆくゆくはお前にも選挙を

共に戦ってくれる俺以外の仲間が出来るだろうし、生徒会長になれば、ブレーンとなるのは生徒会のメンバーだ。まずお前が頼るのはそいつらでなくちゃダメだ」

「どうして！？」

「俺にばっか頼ってたらお前の為にならないし、周りだって面白くないだろ？特に生徒会に入ろうって人間は大なり小なり自己顕示欲が強く、プライドも高い。生徒会長が外部の人間ばかり頼っていたら、捻くれて協力してくれなくなるぞ」

「そんな奴ら、放っておけばいい」

「だ・か・らぁ、一人でも多くの人間の支持が要るっつってんのに、どうしてお前は二言目には『関係ない』なんだ？」

「お前の方こそ、さっきから人の顔色を気にし過ぎなんじゃないか？」

「だから民主主義は人気取りだっつってんだろ！なら、やっぱりクーデターにするか！？ついでに国会議事堂も武力制圧して、日本を征服するか！？」

「する訳無いだろ！！どうしてお前は直ぐにそう極端な事を言うんだ！！」

互いに膝で立って怒鳴り合い、睨み合ったままハアハアと荒い息をつく。

ああっ、本当に、どうやったらこの世間知らずなお姫様に解ってもらえるんだろう？

「俺だって、ご機嫌取りみたいな事はしたくもさせたくもねえよ。でもな。今は喧嘩が、戦争が強ければ人がついて来た戦国時代とは違うんだ。金も権力も無い以上、一人でも多くの人間を味方にして、共に声を挙げてもらうしか無い。それがお前が選んだ戦いだろ？どんなに辛くとも、やり遂げるんじゃなかったのか？」

「……」

「それに、常に一緒にいるだけが“仲間”じゃないだろ？むしろ、例え離れていても、同じ目的に邁進出来る。それが“同志”っても

んだ。それとも、俺じゃ信用出来ないか？」
「そんな事……ある訳無いだろ……？でも……」
その時、昼休みの終りを告げるチャイムが智代の言葉を遮る。
丁度いい。潮時だろう。
「まあ、とりあえず放課後、二人と会ってくれ。前からお前に会いたがってた奴がいるんだ」
ひとまず話をまとめるべく、俺は立ち上がりながら諭す様に穏やかに言った。
「……私にか……？」
「それと、もう一人は門倉だ」
「ああ、みのりか……」
門倉の名を出すと少しだけホッとした様な顔をした智代も、思い出した様に上のゴミを片付けてからビニールシートをたたみ始める。
「仲間にするしないは別として、会って少し話すくらいいいだろ？」
「う、うん……会うのは別に構わない……」
シートをたたみ終えたのを待って、俺は彼女を首で促して歩き出す。
智代は俺の直ぐ後ろをついて来ながらも、教室の前で別れるまでずっと無言だった。

4月14日こんな事もあろうかと、そこには兵を伏せておきました

「資料室？旧校舎にこんな所があるのか」
ドアの上のプレートを見上げながら智代が呟く。
放課後、約束した通り俺は智代と門倉と共に宮沢のアジトである資料室の前に来ていた。
正直、また智代の奴が「会いたくない」とか言い出したらどうしようかと思っていたが、帰りのＨＲが終わるなり門倉と共に突入してきたからその心配だけは無さそうだ。
もっとも、乗り気かどうかまでは微妙な所だが……。
まあ、いい。
ここで二人を会わせるだけでも意味はある。
気を取り直してノックをしようと構えた所で、ふとある重大な事に気付く。
まさか……居ないよな？
無論、宮沢が、では無い。
宮沢の友人達である。
ゆくゆくは知られる事にはなるだろうが、いきなり他校の生徒が堂々と侵入していたら、智代でなくともこじれそうだ。
「そういや、宮沢はもう来てるのか？」
「ん～どうだろぉ？私も終わってから直ぐオーキ君のクラスの前に来たからぁ」
「そうか……」
万一奴等が来ていたとしても、宮沢が居たならうまく立ち回ってくれるだろう。
そう思い、何でも知ってそうな隣の門倉に一応確認するも、残念ながら知らないらしい。
とりあえず叩いてみるか。
どの道、宮沢が来ていなかったら鍵がかかっていて中には入れな

いだろうし。
「はーい……どうぞ」
ノックの後に聞こえてきた「はーい」と「どうぞ」までの若干の間。
やべえ……居そうだ……てか、居るなコリャ……。
どうする？今日はやめておくか？
「どうした？入らないのか？」
「あ、ああ……」
だが智代に促され、つい教室のドアを開けてしまった。
「いらっしゃいませー」
中をざっと見渡して、笑顔の宮沢の姿だけしかない事に少しほっとする。
まあ、何とかなるだろう。
宮沢も平気だと判断したから返事したんだろうし、奴等も宮沢と俺以外の奴が居たら隠れて出ては来ない筈。
むしろ二人が知己になった証人になると思えば……。
そう楽観的に考えようとしていたのだが……甘かった。
「初めまして。宮沢有紀寧です」
「坂上智代だ」
「坂上さんとは、前から一度お会いしたいと思っていたんです。よろしくお願いします」
「こちらこそ、よろしくたの……」
「げえぇっ！！坂上！！」
こちらに寄ってきた宮沢が智代と握手を交わそうとしたまさにその時、それを妨害するかの様にどこからともなく上がった男の声。
うっわ……最悪だ……！
「誰だ！？」
瞬時に智代は表情を険しくして身構え、声のした本棚の方向を睨みつける。
シンと静まり返る世界。

ピリピリと空気が張り詰め、最早仲良く談笑して親睦を深められる様な雰囲気ではない。

『奴等に伝えて無かったのか！？』

そう宮沢に目で問うと、返って来たのは冷や汗交じりの苦笑のみ。

このほんわか天然娘が……！

「そこに誰か居る事はわかっている！早く出て来い！」

今にも自分から“狩り”に行きそうな気迫で、尚も智代の追及は続く。

完全にモードが切り替わった様だ。

今更“気のせい”では誤魔化せないだろう。

仕方あるまい。

「いいだろう……出てこないのなら、こちらから……」

「待て智代！」

俺は痺れを切らした智代の腕を掴んで制す。

「どうして！？今おかしな声がしたのは、お前にも聞こえただろ？この部屋に誰か怪しい奴が隠れている筈だ！」

「ああ、わかってる……出て来いよお前達」

そして俺はさも配下に命令するかの様に呼びかけた。

ややあって、ゴソゴソと音がしたかと思うと、本棚の影から学ラン姿いかつい男が姿を現す。

「何だお前は！？その制服、光坂の生徒じゃ……！！」

すかさず智代が放とうとした詰問の台詞は、しかし驚きによって絶句へと変わる。

その学ランの男の影からもう一人、恐らく同じ学校の学ランの男が顔を出し、更にバンと勢い良く開けられた用具入れの中から一人、本棚の上から颯爽と降り立った奴が一人、中央に置かれたテーブルの下から一人、おまけに外から窓を乗り越えて来る輩が三人……総勢八名のいずれも厳ついナリをした男共が隠れていたのだ。

てか、一人じゃないとは思っていたが、これは居過ぎだろ！！

「なっ……他校の生徒がこんなに……！！お前達、一体どういう

つもりだ!?」
「それはこっちの台詞だ!!坂上、テメエが何でここにいやがる!?」
「この学校の生徒だからに決まっているだろ!」
「「「なっ、何い!?」」」
智代の答えに今度は男共に動揺が走る。
やはりまだ智代がウチに居る事を知らない奴が多いという事か……。
思ったより情報が広まるのは遅いのか?
「それより、勝手に他校に上がりこんでるお前達の目的は何だ!?」
「そんなの決まっているだろう」
そこで俺は男達に代わって彼女の前に進み出た。
そして振り向き様に言い放つ!
「こいつらは俺が配置した伏兵だ……お前を呼び出し、倒す為のな!!」
「……何を言ってるんだ?私を倒すも何も、お前はすでに私に勝っているじゃないか」
一瞬で看破された!
だが、俺の真の狙いは智代に対する物ではない。
「お、おい、今なんつった?」
智代が何気なく言った言葉に、男達の血相が変わる。
そう、俺の狙いは初めから智代に俺が勝ったと言わせる事だったのだ。
「お前達の目的は何だと訊いてるんだ!」
「いや、そうじゃなくて、その後だよ……川上がお前に勝ったとか何とか……」
「そんな事、お前達には関係無い!それより、こちらの質問に答えるのが先だ!」
「だから、俺の配下だって」

「「何時から俺等がテメエの舎弟になった!!」」」
見事にハモる空気の読めないアホ共。
「オーキ!一体どういう事なんだコレは!?」
だが、狙い通り智代の矛先はこちらに向いてくれた。
そのまま藪睨みで詰め寄ってくる。
「いや、だからひとまず落ち着け」
「奴等を見ても平気な顔をしているって事は、やっぱり何か知ってるんだな!」
更に息がかかりそうな距離まで詰め寄ってくる。
「どうなんだ?さあ、言うんだ!」
更に互いの体温が感じ取れる程の距離まで詰め寄ってくる。
近い!
近いよ!!
だがこの圧力に屈しては、アホ共に示しがつかない。
「バカ……人が見てるだろ?」
「えっ!?あっ……そ、そうだな……って、そうじゃない!」
目をそらしながら言ってやると、釣られて一瞬周囲を見渡して恥ずかしそうにしたが、直ぐに気付いてつっこんでくる。
いいノリツッコミだ。
「あの、坂上さん。この方達は私の……」
ようやくここで苦笑しながら事態を静観していた宮沢が口を開き始めた。
だが、
「うっ、ううっ……ゆ、ゆきねぇ……!」
窓際からドサッと何か大きな物が落ちた様な音がしたかと思うと、そこにはボロ雑巾の様に傷だらけで息も絶え絶えの男が呻いていた。
いつもやられて怪我をしては宮沢に介抱されてる奴で、確か名前は“須藤”だ。
「まだ仲間が居たのか……!?何だお前?血が出てるじゃないか!」

「クソッ……奴等待ち伏せしてやがったんだ……って、お前は……まさか坂上ぃ！？」

自分に近寄って来た少女の正体に気付き、ひいっと座ったままの姿勢で手足をばたつかせ凄い速さで後ずさる須藤。

結構元気じゃねえか。

「私だったら何なんだ？」

「お、お前、転校したんじゃなかったのか！？」

「ああ、したぞ。この学校にな」

須藤の反応にムッとしながらも、智代は誇らしげにその形の良い胸を張って答える。

「じゃ、じゃあ、お前が会いに行った自分より強い男ってのは……！？」

智代が前の学校を去った時の噂は知っているらしく、男達はひそひそと、そして時折驚嘆の声を上げながら、視線を俺と智代の間を右往左往させていた。

まあ、俺も宮沢から聞いたんだから当然か。

一時はどうなるかと思ったが……結果オーライかもな。

おかげで智代がウチに居て、そして俺がその智代に勝ったと言う事実を、他ならぬ智代自身の口から語らせる事が出来た。

これで眉唾の噂としてではなく、事実として俺が智代に勝った事が広まるだろう。

もっとも、智代をなだめるのには苦労しそうだが……。

「それで、結局お前達は何なんだ？」

「えっと、それはですね……」

「何だよオイ、今日はやけに多いな……おーい、ゆきねぇ居るか？って、うおっ！！ひょっとしてテメエは坂上か！？」

事態を収拾させようと宮沢が口を開こうとすると、またも窓から大柄な男が顔を出し、またまた智代の姿を見て驚く。

いや、いくら何でも来過ぎだろ？一度にこんだけ来たのは初めてじゃねえか？

「またか……一体何がどうなってるんだここはーーー！？」
もはや怒りを通り越し、頭を抱えた智代の叫びが木霊する。

４月１４日こんな事もあろうかと、そこには兵を伏せておきました（後書き）

風邪をひいた様です。みなさんも気をつけて下さい……。

4月14日結成!?二年生コミュ

「おい、まさかお前が呼んだのか?」
いくら何でも一度に集まり過ぎだと思った俺は、宮沢に耳打ちする様に訊いた。
しかし宮沢は苦笑しながら首を振る。
「私も少々驚いています。ここ最近は皆さん色々とお忙しいみたいで、あまりこちらには来られなかったんですけど……」
だから今日に限ってこんなに重なったってか?
んなアホな……。
無言で疑惑の視線を送ってみる。
「テメエ、川上!ゆきねぇに何してやがる!?」
「ゆきねぇから離れろ!!」
だがそれも目ざとい奴らのおかげで水を注されてしまった。
そして代わりに、
「……何をしていたんだお前は?」
今度は俺が智代から疑惑の視線を受ける羽目に。
まったく、どいつもこいつも……そんなに俺は信用ならんかね。
「別に話してただけだ……それより、とりあえず座って落ち着こう。な?」
「他校の侵入者が目の前に居るのに、落ち着いてなど居られるか!」
「まあまあ、こいつらは俺の手下だと言ってるだろ?」
「誰がてめえの手下だ!!」
「あっ、コラ!わかったから押すな!」
俺は智代の肩を叩いてなだめながら背後に回ると、騒ぐ雑魚共を軽く無視して半ば強引に背中を押して中央に置かれたテーブルのイスの一つに座らせた。
それに倣う様に門倉は智代の右隣に、宮沢は智代の真向かいにそ

れぞれ席に着いたので、俺も手近な智代の左隣に陣取る。
「誰がお前達まで腰を落ち着けていいと言った!?」
「あん!?」
だが、ちゃっかり野郎共が宮沢の隣に座ろうとしたのを見咎めた智代は、すぐにまた立ち上がってギロリと敵意に満ちた視線で威嚇しだす。
男達もイスを引いた手を止めて身構え、踏ん反り返りながら、あるいは猫背のまま首を傾け眉を波線にして凄みを利かせ智代を睨みつける。
再び張り詰める空気。
一触触発。
多勢に無勢。
如何にもな厳つい男達ｖｓ可憐なヒロイン。
絵になる構図ではあるが、収集がつかないので放ってもおけない。
「何でテメエに指図されなきゃなんねえんだよ!?」
「お前達は部外者の侵入者で、私はここの生徒だ!」
「だから落ち着けっての」
「お前はスカートをめくろうとするな!!」
何気無く手近にあったミニスカートの裾を軽く引っ張って座るように促すと、何を勘違いしたかそんな事を言われてしまった。
って、ちょっと待て!
今は宮沢や門倉も居るんだぞ!
「めくってねえだろ!」
「“今はまだ”だろ?どうせお前の事だ。何だかんだと理由をつけてめくるつもりだったんだろ?お前はすぐ私のパンツを見ようとするからな」
最初は白眼を向けておきながら、しかし最後は“お前のやる事はお見通しだ”とでも言うかの様に誇らしげにぶっちゃけやがった!
二人に誤解されぬ内に否定しておこうとしたのだが……トラップカードかよ!!

クッ、いや、落ち着け！動揺したら負けだ！！
ここは何くだらない事言ってんだ的に流すべきだろう。
「アホな事言ってないで、いいからすわ……」
「智代ちゃん！その話、詳しく聞かせてぇ！」
だがしかし、俺のスルー作戦は、ペンとメモ帳を手にその大きな眼鏡の奥の大きな瞳をギラギラに輝かせながら勢い良く立ち上がった門倉によって遮られ失敗に終わった。
てか、最悪だ！！一番聞かれてはマズイ奴に！！
「ああ。聞いてくれみのり」
「聞いてくれじゃねえ！お前も食いつくな！！」
「え～！だって気になるよぉ。ねえ？有紀寧ちゃん」
「そうですね。私も少し興味があります」
「ミヤザワ、オマエモカ！！」
いつもの舌っ足らずな甘え声で話を引っ掻き回す門倉に、いつもの善良そうな笑顔で乗ってくる宮沢。
やべえ……一人でも厄介な奴が三人同時に敵に……。
「つうかよ、お前等デキてんのか？」
更に、俺達がすったもんだしている間にちゃっかり椅子に座っていやがった、宮沢の友人の中でも一際大柄な男、田嶋が、何とも間の悪い事を訊いてくる。
「デキてる訳ないだろ！！」
だがそれには、肩を怒らせた智代が真っ先に否定してくれた。
良かった……また妙な事を言い出すかと……。
「私達はまだ結婚もしていないし、そもそも高校生なんだ……赤ちゃんが出来てしまっていたら、大変じゃないか！！」
って、やっぱり言いやがった！！
その衝撃的な発言に、男達は沈黙する。
そして、
「ブッ！ワッハッハッハッハッハ！！中々面白れえ事を言うじゃねえか！！」

「ゲラゲラ!!あの坂上が、赤ちゃんだってよ!!」
「ヒャッヒャッヒャッヒャッ!!あー腹痛え～!!」
男の一人が噴出した瞬間、堰を切った様に巻き起こる大爆笑。
だが当然それは、巨大な火山を噴火させる呼び水にしかならない。
「お・ま・え・た・ち……」
大真面目に答えた物を笑われ、冗談の通じない智代は屈辱でわなわなと身体を震わせる。
その怒りはゴゴゴゴと大気をも震わせ、暗雲が日光を遮り教室は急速に照度を落としていく。
最早、インドの暗黒女神カーリーが如く、全ての敵を屠るまでその怒りは解ける事は無い。
……かに思われた。が、
「でしょう?智代ちゃんはぁ、とっても面白くて、素敵な女の子なんだよ～」
今まさに智代の怒りが沸点を超えようかとした瞬間、横から門倉が緊張感の無い声でそんな事を言いながら抱きつき、文字通り水を注さしてくれた。
ナイスだ門倉!
「み、みのり……」
「それでぇ、オーキ君とはぁ、もう赤ちゃんが出来る様な事しちゃったのかな?」
ドサクサに何を訊いてやがる!?
「だ、だから、そんな事まではしていない……そもそも、私達はまだ出会って間も無いんだぞ?いくらなんでも、それは早すぎるだろ……」
「そんな事は無いと思うよぉ?出会ったその日にぃ、あげちゃったって子もいるしぃ」
「「「あ、あげちゃった!?」」」
智代と共に驚きの声を上げたのは、ガールズトークに聞き耳を立てていた野郎達だ。

見るとあからさまに興奮している奴、背けた顔やら耳やらが赤い奴がちらほらと居る。
普段はエロトークなんてしない程こいつ等は硬派なのか、それともやはり女の口から聞かされるのは格別刺激的なのか。
とにかく、そろそろ話を本題に移したい。
「てか、別に付き合ってる訳じゃねえし、俺達にはまずやらなきゃならねえ事が有るしな」
さらりとより大きな大義を掲げて、俺は健全さをアピールしつつ智代には自重を促す。
「何だよ？やらなきゃならねえ事って？」
「お前らにもいずれ分かる事だ」
「まさか、テメエと坂上でこの町をシメようってんじゃねえだろうな？」
「さてな……それより宮沢、こいつらの事説明してやれ」
男達の挑発を歯牙にもかけず、俺は宮沢に話を振った。
これでようやく話が進むだろう。
「はい。坂上さん。この方達は、私のお友達なんです」
「お前の……？こいつらはどう見ても不良じゃないか」
「なんだと！？」
素直過ぎる智代の反応に、またも男共がいきり立つ。
そう言いたい気持ちは解るが、もう少し空気読んで欲しい。
「それとも、普通そうに見えるが、実はお前も不良なのか？」
「えっと……」
「有紀寧ちゃんはとっても良い子だし、成績もかなり良い方だよ。この教室も、資料室の管理人さんとして先生から特別に任されてるの」
答えに困る宮沢の代わりに、すかさず門倉が助け舟を出す。
こいつは本当に気の利く女だ。
「……つまり、教師からも信頼されていると言う事か……なら、どうしてそんな奴がこんな不良共と友達なんだ？実は脅されている

だけじゃないのか？」
「ざけんなゴラ゛！！ゆきねぇにそんな事する訳ねえだろうが！！」
「俺等がゆきねぇとダチじゃ悪いのかよ！？」
「いちいちいきり立つなよ。お前も暫く黙って聞いてろ」
片手を突き出して男達を制止ながら、智代をたしなめる。
「しかしだな……」
「いいから！もし宮沢が脅されていたら、俺がそれを許す筈ねえだろ？」
「それは……そうか……」
「こいつ等は元々……宮沢の兄貴のダチなんだよ……な？」
「はい。そうなんです」
何とか智代をなだめつつ、一番最もらしいであろう事実を説明し宮沢に同意を求めた。
兄貴の事を持ち出す事は若干躊躇われたが、宮沢の表情に影の無い事を見て胸を撫で下ろす。
「……なるほど。私と会いたがっていたのも、そういう訳か……お前達が宮沢の友達だと言う事は解った。だが、いくら友達だからと言って、他校の生徒が勝手に校内に侵入していい訳が無いだろ！」
「俺は中退したから他校の生徒じゃねえぜ！！」
「部外者は部外者だ！！」
アホな揚げ足取りに、智代は逆鱗を逆立て一喝する。
ここは俺が話すべきか。
俺も立ち上がると、智代の背中を優しく叩いてなだめながら口を開く。
「もちろん俺も今まで散々注意してきたけど、こいつらいくら言っても来ちまうんだよ」
「だからって……お前はそれで納得出来るのか？大体、こんな事が教師にバレたら、ただでは済まないだろ？」
「俺等の中に、センコーに見つかるようなヘマする奴は居ねえん

だよ！」

「黙れ！！もしそうなったら、処罰されるのは宮沢だと言ってるんだ！！」

智代の本気の一喝に、さすがの不良達も口を閉ざす。

それは俺も何度も言ってきたし、実際に一度あった事だ。

こいつらも流石にまったく考えた事が無い訳では無いだろう。

しかしそこで、当の本人がいつもの慈愛に満ちた微笑みを浮かべて台無しにしてくれた。

「ありがとう御座います坂上さん。でも、いいんです。私も、こうして皆さんが来てくれる事が、とても嬉しいんです」

「「「ゆ、ゆきねぇ！！」」」

聖母の如き御言葉に、涙を流しそうな勢いで感激する哀れな子羊共。

この娘は……いい筈なんて何も無いのだが……。

前に俺の知り合いって事にして切り抜けた事を忘れたんだろうか？

「……本当に校内で悪さをしたりしないのか？」

門倉に気勢を殺がれはした物の、全然まったく納得はしていないのだろう。不満一杯の顔で智代は俺の耳元に顔を近付け訊いて来る。

「ああ、多分な。教師だけでなく、他の生徒にも極力見つからない様にはしてるみたいだし」

「そうか……しかし、それでもやはりこんな事は善くは無いだろ？部外者を招くなんて、校則以前の問題じゃないか！」

「まあでもぉ、それ程悪い人達じゃないと思うよぉ」

「みのり！？」

何時の間にか俺達の背後に回り、間に割り込んできた門倉。

俺達二人にまったく気付かれる事無く背後を取るとは……相変わらず恐ろしい女だ。

「……お前は、あいつ等が怖くは無いのか？」

「ん～、まったく怖くないかって言えば嘘になるかな……でもぉ、ちょっと普通の人より不器用なだけだと思うよぉ」

「不器用って……不器用ならルールを守らなくていいと言う訳では無いだろ？」

「もちろん悪い事は悪いけど……でもぉ、世の中隠れてもっと悪い事をしている人なんていっぱい居るしぃ、優等生だからって、影でタバコ吸ったり、万引きしてる子は居るしね」

「なっ！……この学校の生徒にも、そういう事をやってる奴がいるのか！？」

「うん。誰とは言えないけどぉ、結構やってるらしいよぉ」

俺はそんな情報まで握っているお前が一番怖いわ！

「人は見かけや表面的な事だけじゃ本当の所は中々解らないし、それだけで判断しちゃったら、本質が見えなくなっちゃうって私は思うの。もちろん、不良さんの中にも本当に悪い人も居ると思うけどぉ、大体は真面目な良い子でいるのが巧く出来なかったり、照れ臭いだけじゃないかな？だから有紀寧ちゃんも、あの人達と一緒に居られるんだと思うよぉ」

「……そうか……」

門倉の言葉に感じる所があったのだろう。

ようやく智代は神妙になって奴等に対する敵意を収めた。

結局、宮沢ダチが居た所為で、大した話は出来ないまま俺達三人は資料室を後にする羽目に。

まあ、仕方あるまい。

ある意味別の難関がクリアー出来た訳だし、正式な仲間にするのはまたの機会でいいだろう。

「それじゃあ、私は部室に寄っていくくねえ」

教室の片付けが有ると言う宮沢を残して資料室を出ると、門倉も忙しなく他に行こうとする。

「ああ……悪かったな。付き合わせちまって」

「なあ……みのり」
「ん？なあに？智代ちゃん」
「ひょっとして……お前も知っているのか……？昔の私の事を……」
どこか思い詰めた表情で智代は門倉に訊いた。
しかし門倉はあっけらかんと言ってのける。
「うん。智代ちゃんの事は昔から知ってたよぉ。気付いたのは、この前他校の人達がお礼参りに来た時だけどね」
「……そうか……」
何処か寂しそうに、何かを諦めたかの様に智代は呟く。
だが、それを見た門倉はにっこりと人懐っこい笑みを浮かべる。
「でも、さっきも言った様にぃ、私は智代ちゃんはとっても面白くて、凄く素敵な女の子だと思うよぉ。ねえオーキくん？」
「そうだな。確かに面白え奴だ」
「ムッ、素敵はどうしたんだ？お前はそう思ってくれて無いのか？」
「面白いは褒め言葉だと何度も言ってるだろ？」
「それはもう分かっている。でも、そういう事じゃないんだ！」
「クスクス、智代ちゃん、オーキくんはぁ、きっと照れてるんだよぉ」
「なっ！？」
「照れてる？そうか。オーキは照れ屋さんだからな」
俺をネタにして小悪魔チックに笑う門倉の言葉に、ようやく智代は満足そうに頷いた。
何か納得がいかない展開だが、智代が笑顔になったので善しとするしかないか……。
「それにぃ、オーキくんが居るから大丈夫だよぉ」
「……うん。そうだな」
俺が居るから……？
よく解からんが、智代には門倉の言った意味が理解出来た様だっ

た。

4月15日裏切りの宿業

強くなりたかった
子供の頃に憧れたあのヒーローの様に
格好良く生きたかった
小学生の頃ハマッたつっぱり漫画の主人公の様に
強さとは優しさだと誰かが言った
だから俺は誰よりも優しい人になろうと思った
涙の数だけ強くなれると誰かが歌っていた
だったら俺は誰よりも強くなれると信じた

あれは小学校高学年の頃だったか
少しでも強くなりたかった俺は
“あの場所”で自主トレに励む一方
格闘技番組を視たり
図書館や本屋で格闘技の本を読みあさった

そして実際にも見てみたいと思い
道場巡りを始めた
破りでは無い
巡りだ
基本はあくまで見学
温情で混ぜてもらえたとしても
出しゃばらず消極的に
けっして自分の強さを誇示したりせず
受けに回って見る事に徹した
入る金が無いから
昔親に少年野球もやりたいと言ったら
「じゃあサッカーやめなさい」と言われたから
だから見学
ただの冷やかし
暫く通って

正式に入らないか?と言われたらアウト
また他の道場に行くわけだ
空手に柔道に少林寺
さすがにボクシングのジムには小学生はダメだと断られたが
見学したいと言えば大抵させてもらえた
まあどこも大体の流れは同じで
ストレッチの後に基本や型の練習だったが
それで十分だった
様々な技は基本からの派生であり
基本の要諦さえ知っていれば知識からある程度は再現出来る
そもそも細かい技は一定の技量達した個人に教える物だ
習ったからって教えてもらえるとは限らない
だから文字通りの見学
見て盗むのだ

心苦しさはもちろん有った

同じ学校の知り合いが居たり

そこで仲良くなった奴も居た

親切にしてくれる師範代や先輩も居た

でも俺は……彼等の好意には答えられないのだ

だから尚更目立ちたくはなかった

少しでも長く居る為にも

なるべく放っておいて欲しかった

けれど

どんなに隅っこで大人しくしていても

しょっちゅう来て熱心に見てればやる気が有るのかと思われるのも当たり前

いつか必ず誘われてしまう日は来る

中には俺の目的を見抜いた人も居た

それは忘れもしない剣道の道場に通っていた時の事で

とても厳格そうな道場主のじいさんだった

しかもそのじいさんは

俺と同じ歳の自分の孫娘と立ち合えと言ってきた

剣道の試合ではなく

ルール無用の決闘でだ

もっともその孫娘と言うのも曲者で

既に大人顔負けの技量を持っていて

同年代に敵が居ない天才少女だと言うじゃないか

素人である俺が試合で敵うはずも無く

それでも俺にそれもルール無用でやれと言ったと言う事は

俺の力量も何もかもを見透かしていたのだろう

勝っても負けても断っても

最早ここには居られない

しかも相手は女で

とても手を抜ける相手でも無いときた

苦渋の選択

苦悶の戦い

その挙句入門してもいないのに破門され

俺は道場巡りも最後となる場所に行き着く

そこは空手や柔道と比べるとマイナーな合気道の道場で

大人や中高生は居ても同年代の奴はほとんど居らず

二つ年下のクセに俺を“下っ端”だの“下僕”呼ばわりする生意気なガキがいるだけだった

「おい、見習い！どうせ暇してるんなら技の実験台になれ！」

そんな事をいいやがるので渋々付き合ってやると

「ちょっと足開いて」

言われた通りにするとそいつは俺の背後に回り

自分の左足を俺の腿の上にかけてくる

「んで、身体左に倒して」

こんな技合気道にあるのか？と疑問に思いながらも身体を傾けると

そいつは俺の右手を持ち上げて自分の身体を通し
互いに肩を組んでる様な状態から無理矢理俺の首に手を回して締めてくる
「コブラツイスト～！！」
「やっぱりプロレス技かよ！！」
「わっしゃっしゃっしゃ～！」
その後も変な笑い声？を発しながらそいつは俺に次々と技をかけてきた
だがプロレスなら俺も得意だ
“受けの達人”として仲間内では知られる妙技でそのことごとくを破ってみせる
「オラ、どうした？次来いや！」
「おのれ～、小癪な真似を……！」
すっかり俺もテンションが上がっていた
正直少し楽しかった
だから当初の目的をすっかり忘れていた

「コラッ！ここはプロレス道場じゃありません！」

ついに怒られて我に返る

「いやいや師匠、この新人をいっちょもんでやろうとですねえ…」

「あれ？新しく入った子？」

「あっ、いえ……まだ見学です……」

思わず眼を逸らしたのは後ろめたいからだけじゃない

師匠と呼ばれたその人は

ショートカットがよく似合う綺麗なお姉さんだった

面倒見の良いその人は何かと俺を気にかけてくれた

積極的に練習に混ぜてくれて

ストレッチや組み手をやったり色々教えてくれた

「オーキ君、お姉ちゃんと一緒にやろうよ」

「えっ！？いや、でも……」

「ほらほら、立って」

その綺麗な笑顔で腕を掴まれ強引に誘われると
最早俺には断る術も無く
なし崩し的に参加する羽目に
ちなみに“師匠”と呼んでいたのはクソガキだけで
別に師範代だったりする訳では無かったが
お姉さんの実力は本物で
大人の男を相手に軽々と投げていた
ガキが尊敬するのも無理も無い
そういやプロレス技を破ってる時にちょっとした拍子で気付いたんだが
男にしては華奢だし可愛い顔して女みたいだなとは思っていたが
どうやら本当に髪の短い女の子だったらしく
名前も“カナコ”だった
「オーキ君はどうして合気道に興味を持ったの？」

ある時ストレッチをしながらお姉さんに訊かれた

「君くらいの年頃の男の子は、もっと空手とか派手な格闘技の方が好きなんじゃないかな？」

「いえ、その……空手とかもかじったんですけど、性に合わなかったと言うか……」

「ああ、それ解る気がする。オーキ君優しいもんね」

そんな事をにっこり笑って言われてしまって

ズキリと胸が痛んだ

道場が終わる時間は結構遅く

お姉さんは小学生である俺とカナコを帰りに送ってくれた

俺的には勘弁して欲しかったのだが

ああっ、つくづく俺は年上の女性に弱い

“お姉ちゃん”と言う絶対者の前には膝を屈するしかなかった

「オーキ君は彼女とか居るのかな？」

先にカナコを送り届けた帰りにそんな事を突然訊かれる

「居る訳ないじゃないですか……」

「本当に？最近の子は早いって言うし、別に隠さなくても……」

「居ませんて」

「そっかぁ……でも、好きな子くらい居るよね？」

「居ません」

「またまた～、気になる子くらい居るでしょ？ひょっとしてカナちゃんとか？」

「いや、あいつは弟と言うか……子分です」

「あははっ、それカナちゃんも同じ事言ってた。『あいつは奴隷だ！』って」

いや、子分よかもっと酷いじゃん！

「じゃあ、年上なんてどうかな？」

「えッ！？」

思わぬ展開にドキリと心臓が跳ねた

それって……

「やっぱり、年上の女の子は嫌？」

「別に……気にしませんけど……」

ドキドキしながら当たり障り無い答えを返す

緊張でとてもお姉さんの顔が見れない

「そっか……実はね……」

まさか……!?

「私……」

本当に……!?

「……には歳の離れた妹が居るんだけどね」

妹かよ!

「オーキ君より一つ年上なんだけど、人見知りでね……」

お姉さんは友達の居ない妹さんの友達になってくれないか?と俺に言った

軽い落胆とまあそんなもんかと納得

そして新たな疑問

何故俺に!?

「いや、それならまだ一応女のカナの方がいいんじゃ？」

「うん……それも考えたんだけどね……」

誰に対しても物怖じしないカナは友達多そうだから妹さんの相手は出来無そうとの事

それは同感だが……

「いや、俺もそれなりにダチはいますし……」

「でも、友達と彼女は別でしょ？」

「いや、だからって……」

「それにその……私が甘やかしてる所為もあるんだろうけど、あの子結構我が儘な所があるの」

「ああ、だから我が儘大王のアイツとは衝突するかもと？」

「大王って、そこまで言ったら悪いよ」

あいつが我が儘なのは認めるんですね

「でも、その点オーキ君なら大人っぽいし、合うんじゃないかなって」

つまりお守り役と言う訳か……

正直まったく興味が無い訳じゃない

きっとお姉さんの妹なら可愛いに違いない

一度くらい顔を合わせてみたい気はする

でも……

「すいません。信頼してくれるのは嬉しいんですが……」

「興味無い？」

「今の所は……あまり……」

「そっかぁ……残念」

そんなに残念そうにしないで下さい

俺にはその信頼に応える術も

資格も無いんです……

そこに通う事は本当に楽しかった

しかしタイムリミットは必然的にやってくる

道場に顔を出すと控え室に呼ばれ

師範からついにあの言葉を言われてしまったのだ

「すいません……」

それだけしか言えず

俺はそのまま足早に去る事にした

カナやお姉さんと顔を合わせない内に……

「あれ？オーキ君。どうしたの？」

そう思っていたのに

チャリに乗ろうとした所で少し遅れて来たお姉さんとばったり会ってしまった

一番会いたくなかったのに……まったく間が悪い

「今までお世話になりました」

「えっ！？」

それだけ言って頭を下げ

そのまま下を向いたまま

お姉さんが驚いている間にチャリをこいで擦れ違った

心の中で何度も謝りながら……

こうして俺の道場巡りは終わった

結局の所

多くの時間を浪費し

多くの人に迷惑をかけておきながら

得る物はほとんど無いと言う最悪の結末

今思えば

これが“若さ故の過ち”と言うやつなのだろう

中学の時のある休日

古河パンの近くでお姉さんを遠目に見かけた事があった

思わず物陰に隠れた事は

言うまでも無い

4月15日全てを救う方法（前書き）

※日付を入れました

4月15日全てを救う方法

4月15日（火）

いつもの様にバイトを終え、“あの場所”で夜が明けていくのを眺めていた。

儚く瞬く星々が次第に白に飲み込まれていく。

古代の人々が夜明けを星の死だと思ったとしても、なんら不思議は無い。

星は夜明けと共に太陽に飲み込まれて死に絶え、落日と共に再び産み出される。

昼と夜。

陰と陽。

生と死。

俺が生まれる何億年も前から続く連環。

俺の死後も続いていく、永遠とも思えるサイクル。

でも、それにも終りはある。

太陽の様な恒星は、次第に膨張して晩年には元の何百倍もの大きさになるらしい。

ブラックホール化するには小さ過ぎるみたいだが、地球の軌道以上に膨張する事も有るらしく、そうなれば当然地球は飲み込まれる。

そもそも地球の繁栄は太陽との絶妙な距離の上に成り立っているから、太陽にそんな大異変が起きれば、どの道地球上の生命は一溜まりも無いだろう。

この地球（ほし）にもいつか終りの日が来るのだ。

何十億年も先の事だが……。

その事実を知った時、俺は震えが止まらなかった。

地球がいつか無くなる事にでは無い。

俺はそれを“以前から知っていた”からだ。

『弥勒菩薩』
釈迦入滅後、数十億年の後の世に現れ、一切衆生を救うという救世仏。
その起源は、拝火教の主神、すなわち太陽神であるミトラだという。
つまり“救い”とは……。
やはり全てを救うとは、そういう事なのだろうか？
それしか術は無いのだろうか？

軽くストレッチをした後、太極拳の真似事を始めてみる。
これも昔道場を回ってかじった物の一つだ。
全身で清々しい朝の気を感じて取り込みながら、ゆっくりゆったりと身体を動かしていく。
想い描くは大いなる円、太陰太極図。
万物は流転し、全てが一であり、一が全てであるならば、すなわち我は天地と一つである。
「おはよう！」
「！」
振り返る事無く太極拳を続けながら言ってやると、すぐ後ろに居た白い羽の様なリボンの少女が“シェー！”のポーズで驚きを表現していた。
大方、驚かせようと忍び足で近寄ってきていたのだろう。
「凄い……！気配を消していた私に気付くなんて……やっぱりお兄ちゃん、タダ者じゃないわね……！！」
「フフッ、まあ、あやちゃんが来るかもなとは思ってたから」
「えっ……？ひょっとしてお兄ちゃん、私が来るの待ってたの？」
両手を背中で組んで上目づかいでニヤリとしがらも、その頬がほんのり朱に染まっている。

その大人ぶった所が微笑ましくて、可愛いなと素直に思う。
「そりゃあね……遊び場所勧めた手前もあるし」
「なあんだ。そう言う事……ごめんね。引っ越して来たばかりで、立て込んでたから……」
「そう。それなら別にいいんだ……場所はわかる？大丈夫そう？」
「うん。多分行けば分かると思う。方向感覚は良い方だし」
「そっか」
今まで少なからず気にしていただけに、胸のつかえが取れた思いがした。
そこでふとある事に思い当たったので訊いてみる。
「そういえば、あやちゃん家ってこの近くなの？」
「ん～、近いと言えば近いかな……自転車ならそんなにかからないし」
「そっか……」
それは当たり障りの無い答えの筈だが、何故かその時妙に彼女の家の事が気にかかった。
胸騒ぎがしたと言ってもいい。
そもそも山間の森に囲まれたこの近くには、あまり民家が無いのだ。
と言っても、彼女の乗るマウンテンバイクはしっかりした良い物だから多少の山道は苦にならないだろうし、別に少ない民家の内の一つに住んでいても何ら不思議は無いのだが……。
どうする？つっこんで訊いてみるか？
「お兄ちゃん家は、教えてくれた公園の近くなんでしょ？」
などと迷ってる間に、逆に質問されてしまった。
「ああ。割と近いけど」
「ふむふむ……そっかぁ……」
「……て、知りたいなら住所教えるけど？」
「ああ、いいから！いいから！」
慌てて断ると、あやちゃんは妙にニマニマしながらボソボソと「

こういうのは、こっそり突き止めて、いきなり押しかけるから面白いのよ……」と、はた迷惑な事を言っていたが、ここは大人としてあえて聞こえないフリをしておく。

「それより、お兄ちゃんサッカーだけじゃなくて、カンフーもやってるの？」

そして話題を逸らすべく、あからさまに別のネタを振ってくる。

「まあ、かじった程度だけどね」

「またまたぁ、達人はみんなそう言うのよね『アチョー！！』って」

多分、拳法の達人の真似なんだろうが、そのポーズはどう見てもやはり“シェー！”だった。

やべえ、この娘、お持ち帰りして本当の妹にしたいくらい楽しい……！

「プッ、ハハッ、まあ、どっちかって言うと、サッカーよりこっちの方が得意だけど」

「うんうん！やっぱりいざって時には銃を持った相手に素手で勝てるくらいの強さはないとね！」

それはどんな達人ですか！？

いや、まあ、海外の暮らしが長いみたいだけど……やっぱ日本よか銃とか身近だったのか？

「あやちゃんが前に居た国ってどこ？」

軽い気持ちで訊いたのだが、しかし彼女が口にした国名を聴いて、俺は自分の耳を疑った。

そこは、あまり耳慣れない小国……だがしかし、つい数日前にもニュースで聞いた憶えのある、“地域紛争の激しい国”と言う認識しかない国だったからだ。

「あたしのお父さん、お医者さんなの」

「……そうなんだ……」

初めて見る、彼女の少し無理をした笑顔。

その笑顔に胸が締め付けられ、言葉が見つからない。

だから代わりに、彼女の頭にポンと手をのせた。
撫でるでもなく、ただ手を置いて。
同情の色が浮かばない様に、むしろ彼女を誇らしく思いながら。
すると初めはキョトンとしていたあやちゃんだったが、にっこりと歳相応に笑らってくれる。
「やっぱり、お兄ちゃん似てる」
「ん？誰に？」
「私の初めての友達に」
「へえ……どんな奴？」
「うん。お父さんの同僚だった黒人のおじさん！」
小悪魔チックに落ちを言ったかと思うと、彼女は可笑しそうに笑いながら俺の手から逃れる様にして駆け出した。

暫くあやちゃんとボールを蹴ってから別れた俺は、毎度の如く古河パンに顔を出す。
「ちっす」
「おう、お前か……」
しかし何やら珍しく秋生さんのテンションが低い。
何かあったのか？
まさか……！？
「渚さん調子悪いんですか？」
「はあ？」
どうやら的外れだったらしく怪訝な顔をされる。
「いや、渚の調子は別に悪くねえ。今日も行くって言ってたしな」
「そうですか……」
昨日の朝の事もあって気になっていたので、放課後にも立ち寄って渚さんの事を訊いたが、多少遅刻はしたが授業は受けたと言っていたらしい。

渚さんじゃ無いとすると……まさか!?

……っと思って今週の新作パンの定位置に眼を向けたのだが、幸か不幸かおせんべいパンは健在だった。

「まあ、なんだ……女は別に一人じゃねえんだ。いつかお前も出会えるはずだ。一緒に早苗のパンを食ってくれる奴がな」

「はあ?」

男くさい爽やかな笑みで訳の解らない事を言われ、今度は俺が眉を寄せる。

「早苗のパンを食わせて、機嫌を損ねちまったんだろ?例の彼女の」

そう言われて、ああと思い出す。

昨日の放課後に寄った時にその事を訊かれて、歯切れの悪い答え方をしたからどうやら誤解された様だ。

「いや、だから、パンはちゃんと食べてくれたし、意見が食い違ったのは別件で、パンは関係無いですよ。それだって、別に喧嘩した訳じゃ無いですし」

「わかってねえなぁ……いいか?女ってのは男以上に根に持つもんなんだよ。昔の事をいつまでも憶えててな。例えその時何も無くても、後になって何かの拍子にドカンと爆発しちまうん事があるんだよ」

「まあ、そういう事もあるみたいですけど……今回のはそういうのじゃないと思います」

「そうか?なら良いけどよ……自分のパンでお前が折角出来た彼女と別れたって知ったら、早苗も悲しむだろうしな」

確かにそれは同感だ。

「だからパンは関係ないです……ってか、まだ付き合ってもいませんし」

「はあ!?まだそんな事言ってんのかテメエは!?カ〜、さっさと告れっつってんだろうが!つか、むしろ彼女も、テメエのそのはっきりしねえ態度にイラついてんじゃないのか?」

秋生さんの鋭い指摘に、俺は口を噤むしかなかった。
実際の所は解らないが、智代は俺により確かな絆を求めている気がする。
俺達は同じ目的を持つ“同志”だ。
それは俺にとって、血の繋がりよりも固い絆なのだが……男と女ではやはり違うのだろう。
でも、だからと言って俺には……。
「とにかく、ちゃんと今日中に詫びて、ついでに告っちまえ！いいな！？」
そんな事言われても、こっちにも都合ってもんが……。
バイトや自主トレ以上の疲労感を覚えながら、俺は古河パンを後にした。

4月15日失敗の本質

家に帰って汗を流し、布団に入って寝たフリをする。
今日もあいつは押しかけて来るんだろうか？
昨日気まずい感じだったから……今日は来ないかもしれない。
別に来て欲しい訳じゃ無いと言うか、いい加減マジで勘弁して欲しいんだが……。
世間の目もあるし、何より恥ずいし。
あいつにとっても、いや、生徒会長になろうとしているあいつの方がデメリットは大きいハズだ。
妙な噂にでもなればイメージダウンに繋がるし、そこから過去の事がばれるかもしれない。
そう思うのだが……あいつは一体どういうつもりなのだろう？
……何も考えてない気がする……。
考えるより先に行動するタイプと言うか、野生の勘で生きてると言うか。
歴史シミュレーションゲームで言えば、典型的な猪突武将。
もちろん、それが俺には無いあいつの良さでもあるんだが……。
そういう物だから仕方が無いと割り切った方がいいのだろうか？
元より考えるのは俺の役目、それはそれでいい。
問題は……あいつがそうは思っていない事か……。

時計を見ると、そろそろのんびり寝てもいられない時間になっていた。
やはり来なかったか……。
来なきゃ来ないで一抹の寂しさを感じないでもないが……まあ、これで良いんだ。

行く用意をするかと、布団から出て制服に着替え始める。
と、その時だった。
タッタッタッタッと何者かが高速で階段を上がってくる。
なっ！？来やがった！！
「オーキ、朝だぞ！あっ……！」
やはりノックも無くドアは開け放たれ、いつもと変わらぬ笑顔でカチューシャ頭が顔を出す。
だが、さすがに俺の姿を見て少女は驚きのあまり声を失った。
当然だ。何しろ今の俺はパンツ一張……のハズなのだが、
「何だ……もう起きていたのか……」
「って、そっちかよ！」
残念そうにそう言って構わずズカズカ入ってきた！
いや、まあ、前に見られた時もほとんどノーリアクションだったけど……。
「……だから、パンツ一張の男の部屋にほいほい入ってくるなよ」
「別に私は気にしないから平気だ。それより、ほら、朝御飯を持ってきてあげたぞ。冷めない内に食べるんだ」
俺の苦情をまったく意に介する事無く、当たり前の様にテーブルを出してきてその傍らに座り込む。
まったくいつもどうりの智代だ……。
その事に内心少しホッとしつつも、今日もこの展開かとベルトをしめながら嘆息する。
「はい、あ～ん」
俺が座るなり早速来た！
嬉しそうにおかずをつまんで差し出してくる。
「いや、いいから、箸よこせ」
「遠慮するな。昨日みたいに今日も私が食べさせてやる。あ～ん」
「ぐっ！！」
折角忘れていたのに！
恥ずかしい記憶を呼び戻され、言葉に詰る。

だが、ここで弱味を見せれば、この先ずっとネタにされかねん。
ここは毅然とした態度で対応して、禍根は断つべし。
「昨日は寝ぼけてただけだ。ほら、箸貸せって。もたもたしてると、また今日も走って登校する羽目になんだろ」
「だったら、つまらない意地を張らずに、素直に食べればいいじゃないか」
「いいから自分で食わせろっての！落ち着かねえから！」
「仕方の無い奴だな……じゃあ、この一口だけだ。それならいいだろ？」
「たく……」
仕方が無いのはどっちだと思いつつ渋々口を開けてやる。
「どうだ？美味しいか？」
「普通……ほら、返せ！」
どうせ作ったのはお袋だ。
素っ気無く答えて、半ば引っ手繰る様にして箸を奪う。
さすがにそれには少しムッとした智代だったが、直ぐに気を取り直すと今度は自分のカバンをあさり出し、中から数冊の本を取り出した。
「お前から借りていた本だ。ありがとう」
「ああ、どうだった？」
「うん。色々な考え方が有るのだな。それにずっと昔の思想なのに、十分現代にも通じる所がある。とても為になった」
「そうか……まあ、紀元前の中国は、恐らく世界でも最高の文化レベルにあったからな。いわゆる諸氏百家の時代だ。食客や諸国を回って持論を説く遊説家を国の有力者達が厚遇したり、時にそういった人間にいきなり国政を任せる様な大抜擢をする風潮があったから、大志を抱く野心家達はこぞって己の知性に磨きをかけた訳だ。もっともそれも、始皇帝の恐怖政治や儒教が国教化されるまでだけどな」
そうして自由闊達で夢とロマンに溢れた風潮は永遠に失われ、凝

り固まった思想に雁字搦めとなった文化は衰退の一途を辿り、今に至る。

「なるほど。それでその時産まれた多くの思想の中の、特に優れた物がこうして今に残っているんだな」

「ああ。特に“孫子”は、世界最高の兵法書だ。俺も座右の書として愛読してる」

「孫子か……」

俺が孫子の事を持ち出すと、智代の表情から笑顔が消え、困った様な顔になった。

どうやらあまり御気に召さなかったらしい。

「正直、私にはよく解らなかったんだが……兵法とはつまり戦争のやり方の事だろ？」

「確かにそういう物もある。でも、孫子の考え方はスポーツや学業、ビジネス、およそ人と人とが競争する物になら何にでも応用出来るし、それが孫子が現代でも評価されている所以だ」

「そうなのか……」

「まあ、向き不向きがあるから、ピンとこなくてもそれはそれでいい。ただ、そういう考え方も有るって事は憶えとけ」

「そう言う物か……」

一応フォローしたつもりだったのだが、負けず嫌いの智代は腑に落ちぬと言った顔をして、飯を食っている俺を見ていた。

「うん。これでよし！」

仕方なくネクタイを智代に結んでもらい、お袋に見送られながら二人並んで家を出る。

余裕が有る訳では無いが、どうにか今日は歩いて行けそうだ。

そう思って油断していると、ポケットに入れていた腕の隙間にすっと彼女の腕が通され、そのまま身を寄せてくる。

腕に触れるたまらなく心地よい弾力。
魅惑的ないつもの智代のにおい。
気を抜くと、このままどこまでも流されてしまいたくなる。
でも、そういう訳にもいかないのだ。
「だから、こういう事は……」
「いいじゃないか……大通りに出るまでだ」
注意しようと口を開いた所を、妥協案で遮られる。
クソ……何か俺に対する要領だけよくなってきてないか？
「人通りがどうとかって問題じゃなくて、こういう事をしてる事自体マズイんだって」
「どうして？前はかまわないって言ってたじゃないか」
「その時はその時、今日は今日」
「まったく……本当にオーキは照れ屋さんだな」
照れ屋さん言うな！
「もちろん恥ずいのも有るが、それ以上に変な噂にでもなったら、選挙に支障が出るだろ？」
「そんな事にはならないから平気だ」
「何の根拠も無いくせに、都合のイイ事を言うな」
「根拠ならあるぞ」
「何だよ？」
「その時は、お前がきっと何とかしてくれるだろ？」
俺の腕を抱きながら、智代は自信に満ちた笑顔でそんな事を言い切った。
さすがに一瞬、騙されそうになる。
だが、
「だ・か・ら、その俺の言う事を、お前はちっとも聞かねえじゃんか！それで何とか出来る訳ねえだろ！」
苛立ちを混めながら言って、フイと顔を背ける。
まったく、本当に訳がわからねえ……！
俺を信用しているとか言うクセに、言う事ちっとも聞きゃあしね

えし。

「……そんなに怒る事無いじゃないか……」

智代も落ち込んだ様に俯く。

しかし、それでも尚腕は放そうとはしてくれない。

互いにそっぽを向いて黙ったまま腕を組んで歩くと言う、奇妙なカップルの姿がそこには在った。

「……そろそろ通りに出るぞ」

暫く歩いてから、人通りが多くなる事を示唆して暗に離れる様に言ったのだが、智代は気付いていないのか、まったく離れようとする素振りも見せずに代わりに口を開く。

「お前が本気で桜並木を守ろうとしてくれてる事も、その為に私を生徒会長にしようとしてくれている事もわかってる……でもな、少し気が早いと言うか……何か焦っている様にも見えるんだ」

何を言うかと思えば、そんな事か……。

「気が早いって、お前の認識が甘いんだよ。伐採計画を止めるには今年いっぱいが勝負だっつったろ？それに選挙ってのは、選挙期間中の活動や演説だけで決まるモンじゃない。むしろ前評判や普段からの行いで、半分は結果が見えてる物なんだ。お前は編入したてでただでさえ知名度が低いのに、そこで悪い噂が立って過去がばれてみろ。もうそういう人間だと思われちまうぞ」

「そんな事はわかってる……でも、本当にそれだけなのか？」

思い詰めた様な真剣な眼差しで、智代はじっと俺の目をみつめてくる。

やはりこいつも何かを感じ取っているのだろう。

まあ、いい。

別に隠す程の事でも無いしな。

「俺はただ、何でも無い様な事や、未然に防げたはずの事で失敗したく無いだけだ。明日が必ず来るとは限らないからな」

「明日が来るとは限らないって……どういう意味だ？まさか、お前は病気なのか！？」

案の定な誤解をして、必死の形相で詰め寄ってくる。
「そうじゃない。そうじゃないが……いつそういった病気にかからないとも限らないし、健康だからって事故に遭う事もあるだろ？」
「それはそうだが……だからって……」
「例えばの話だよ……ただ、俺は一度失敗してるからな」
「失敗？」
「言ったろ？サッカーやってたって」
「ああ。それは聞いた」
「サッカーを通して俺が学んだ一番の事が、さっき言った事だ。失敗てのは、何でも無い様な事や、未然に防げたはずの事から起こる。そして、その一度の失敗で、それまでの努力も、想いも、全てが水泡に帰す事もあるんだ……」
「……」
俺が味わった挫折。
それは“絶望”と言ってもいい。
その絶望を、こいつには味わわせたく無い。
だからこそ、はっきり言っておくべきだろう。
「もう朝は家に来るなよ……」
「どうして！？」
ショックで智代が立ち止まり、絡めていた腕がするりと抜けた。
だから俺もその場に立ち止まって振り返り、尚も宣告を続ける。
「選挙に支障が出るかもしれないって、言ってるだろ？」
「出ないかもしれないじゃないか！」
「出てからじゃ遅いだろ？それに、もしそんな事になれば、俺はお前の側にはもう居られない」
「何でそうなるんだ！？例え、もし、そうなったとしても、その時の責任は私にある。私はそんな事でお前を咎めたりはしない！」
「俺が気にするんだよ……それに、そうなるとわかっていて防げなかったんなら、やはり俺の責任だ」
「そんな事、お前は気にしなくていい」

「だから、そんな事になるくらいなら、初めから来るなと言ってるんだ！お前が生徒会長になれないと、俺も困るんだよ！」

食い下がる智代を振り払う様に言い放ち、そのまま踵を返して歩き始める。

胸がチクリと痛んだが……きっと、これでいいはずだと心に言い聞かせた。

番外編日本人なら天皇誕生日だろ！

それは、彼と一緒に二学期の期末試験の試験勉強をやっていた時の事だった。
小休止に私がコーヒーを淹れて部屋に戻ってくると、思い出した様に彼が呟く。
「そういえば、試験が終わったら……」
うん！そうだ！
もうすぐ恋人達の日だぞ！
さすがにお前でもちゃんと憶えていたんだな！
「天皇誕生日だな」
「うわぁっ！！っとっと！！」
予想外の一言に肩透かしを食らって、危うく手にしていたお盆を引っくり返しそうになる。
なっ、なっ、何なんだそれは！？
「おい、大丈夫か？」
「お前は毎年、天皇陛下の誕生日を祝っているのか！？」
「いや、ただ休日だなって話だが？」
シレッとした顔でそんな事を言う。
「１２月には、それよりもっと大切な日があるだろ！？」
「ん～？そうだな……」
そうそう、あの日だ！
「終業式が終われば、冬休みはお前も暫くのんびり出来るのか？」
「違う！あっ、いや、活動の方も後は役場の正式な決定を待つだけだし、この冬休みは久しぶりにのんびり出来るとは思う」
「そうか……なら、どっか行くか？」
「行こう！！」
嬉しさのあまり、思わずテーブルに身を乗り出してしまった。
だって、仕方が無いじゃないか。

今まで本当に忙しくて、彼と出かけたりは出来なかったんだから。
「それで、どこに行くんだ!?」
「そうだな……前にお前が行きたがってた遊園地にでも行くか？」
「うん！約束だ!!」
遊園地か！
クラスの友達に聞いて一度行ってみたかったんだ！
もちろん『彼と一緒に』！
その夢が遂に叶うのだな……ああっ、今から楽しみだ……!!

「そうじゃないだろ!!」
勉強を再開して暫くした所で、肝心な事を思い出した！
「ん？どっか答え違ってたか？」
「勉強の事じゃなくて、２４日の事だ！」
「２４？ああ、イブか」
そうそう！
「そうだな。２４、２５は特に混むだろうから、遊園地は止めておいた方が無難だろうな」
「それもそうか……って、クリスマスはどうするんだって訊いているんだ！」
彼に言わせようと思ったのに、あんまりはぐらかす物だからつい自分から言ってしまった。
しかし彼は嘆息すると、憂い顔で口を開く。
「別に俺クリスチャンじゃないし、世間と一緒になって騒ぐのもな……ぶっちゃけ、浮かれ過ぎで引くって」
「引くな!!」
「だって、よく考えてみろ！サンタやケーキどころか、その日のパンにすらありつけずにいる子供達が世界中にどれだけ居る事か！いや、クリスチャンとして祝日を祝うのはいい。だが、クリスチャ

ンでもない日本人までがお祭りムードで騒ぎ立て、あまつさえ、恋人といちゃつく日みたいになっている。これはある意味、貞淑を重んじるキリスト教への侮辱だ」

「確かに世界にはそういう子供達が居るのは確かだし、私もクリスチャンでは無い……でも、いいじゃないか！一年に一度くらいそういう日があっても……」

「それに、正直俺は、“あの人”を聖人だの神の子扱いしたくはないんだ……」

そう言って彼は、寂しそうに目を伏せる。

私の心までも切なくさせる、いつもの彼の顔だ。

“あの人”は確かに偉大な人だった。彼ほど多くの人の心を救った人間はいないだろう。だが同時に、それと同じかそれ以上の悲しみと不幸が、彼の名の下に世界中に撒き散らされたんだ。彼を神の子と祭り上げた人間達によってな……」

「……だから、聖人としての彼の誕生を祝うのも嫌だと言うのか？」

「彼はただ誰よりも優しかっただけなんだ……Hな事を考えるだけでも罪とされる厳格な一神教の教えは、脆弱な精神の人間にはとても守れない。些細な罪でも地獄に落ちると言われ、多くの人々は恐怖を抱きながら日々を生きていた。そんな人達の心を救ったのが、彼なんだ。『罪を悔い改めれば、主は許してくれる』と説いて」

「……でも、人は神様の愛に、彼の愛に溺れ、驕った。神様に謝ればどんな罪も許されると。そして、それが権力と結びついた事で、大いなる不幸は起きた……だったな？」

『世界情勢を正しく知るには、まずキリスト教とイスラム教の歴史について知るべきだ』

以前そう言って彼が話してくれた事を、私は思い出していた。

愛を説いて、人々が互いに他人を思いやる優しい世界を目指したキリスト教。

より厳しい砂漠の環境に適応する為に、一神教の厳格さを受け継

いだイスラム教。
どちらもより多くの人々の心を救う為に生まれたハズなのに。
一部の人間の私利私欲を満たす為に歪められ、利用されてきた悲しい歴史を。
「人の業と言うのは、本当に深い物だな……」
何だかクリスマスだと浮かれる事が、とても罪深い事の様に思えてきた。
いや、ダメだ！
都合が悪くなると大きな事、深い事を語って私の気を削ごうとする。
これがいつもの手なんだ。
「なら、クリスマスは何もしないつもりなのか？」
「特に何も」
「……会ってもくれないのか？」
「別にそれはいい良いけど？」
「そ、そうか……」
それを聞いて少しだけ胸を撫で下ろす。
まったく、クリスマスをやる気がないなんて、いつもながら仕方が無い奴だな。
まあ、彼にその気が無くても、私だけでもケーキやプレゼントを用意するとしよう。
「そう言えば、お前はいくつの時までサンタさんを信じていた？」
「信じるも何も、家に来た事ねえし」
「そ、そうなのか？」
「家じゃパーティーとかもやらなかったし、ケーキも無かった。幼稚園のクリスマス会で初めてクリスマスとサンタを知ったんだ……その時出てきたサンタは、送迎バスの運転手だと直ぐ判ったし。初めから、そんな都合の良い存在が居るはずないと思ってたよ」
彼の意外な答えに、驚くと同時に納得がいった。
だから彼にとってその日は、初めから特別でも何でも無かったの

だ。
そうか……そうだったんだな……！
こみ上げて来る切なさと、親近感。
「実はな……私もそうなんだ……家にもサンタが来た記憶が無い。いつも、『これで好きな物でも買え』と、親がお金をくれるだけだったんだ……」
だから私も、思い出した昔の記憶を自嘲を含んで語った。
だが、
「いいじゃんか！金くれるなんてサイコーじゃん！家なんか、初めから無かった事になってたんだぞ！」
「それでも、家族は一緒に居たんだろ？私の家なんて、その日に両親が揃った事は無かったし、どちらも居ない事だってあったんだ！」
「いいじゃんか！親なんて居たって邪魔くさいだけだ」
「どうしてお前は直ぐそういう事を言うんだ？あんなに優しいご両親なのに」
「外面がいいだけだ。本当に優しいなら、クリスマスだって誕生日だってプレゼントくれるだろ普通。忙しいのはわかるが、いつもスルーだったぞ」
「そう言えば、お前は誕生日も祝ってもらった事が無いと言ってたな……」
張り合う様に彼が反論するので、何か不幸自慢みたくなってしまう。
さっきまでの暗い気持ちが、どっかに行ってしまったじゃないか。
まったく、仕方の無い奴だ。
来年の誕生日には、私がちゃんと祝ってやるからな！
覚悟しておけ！
そう思っていると、
「まあでも、どうせ近くなったらお前にはパーティーの誘いとか来るだろうし、生徒会長としての付き合いとかで行かなきゃいけな

くなるだろうから、空けといた方が無難と思うぞ」
彼は全てを悟っているかの様に、そんな現実的な事を言った。
そうか……そういう事か……。
まったく、いつもお前はそうだ。
何よりもまず私の事を考え、何食わぬ顔をして、進むべき方向を示してくれる。
時に素っ気無く、時に冷たく、時に悪者を気取って。
私が、自分で選んだ道だと思える様に。
変に期待させて、後でガッカリさせない様に。
本当に不器用で照れ屋で、本当は優しい奴なんだ。
でもな。
私はお前が本当は何をしたいのか知りたい。
お前の本当の気持ちが知りたいんだ。
「なあ……もしもだ。あくまでもしもの話だぞ？お前に子供が出来たら、あっ、いやっ、違うんだ！お前の子供が出来てしまったとか、そういう話じゃないんだ！」
自分で言ってて途中から舞い上がってしまい、つい訳の判らない事を口走ってしまった！
顔がカッと熱くなって、きっと今の私の顔は真っ赤に違いない。
「いや、出来たも何も、やる事やってねえし！」
「そ、そうだ！出来てない！もしもの話だ」
「俺達の子供が出来たらか？」
「うん。私達の子供が出来たらだ……うわあああっ！」
いつもの誘導尋問にはまってしまった事に気付いて、頭がショートしそうになる。
そんな私を見て、彼は意地悪な笑みを浮かべて“してやったり”と言う顔をしていた。
また私をからかっているんだな！
恥ずかしさと悔しさで昂ぶった感情が、臨界点を超え爆発する。
「そうだ！お前と私の子供が出来ても、クリスマスをやらないつ

もりなのか!?」
開き直って一気にまくしたててやると、流石の彼も驚いた顔をしたので、少しだけ溜飲が下がった。
そして暫くあっ気にとられていた彼だったが、真面目な顔をして答えてくれる。
「どうだろう?子供の頃は『何で家だけ?』って思った事はあるが、今となってはそれはそれで嘘を教えるより良いとも言えるし……」
「私は嫌だぞ!自分が子供の頃に寂しい思いをした分、子供達にはそんな思いを絶対にさせたくは無いんだ!」
「そうだな……じゃあ、するか!」
「うん!やろう!」
その穏やかで優しい笑顔に、二人の未来が重なって見えた。
きっとこの先も、意見が食い違う事や、時に喧嘩をする事もあるだろう。
でも、どんな困難が待ち受けていようとも、彼とならいつまでも共に歩んでいける。
いや、歩んでみせる!
だって私達は、“比翼の鳥”なのだから……。

4月15日諫言苦言

桜並木の坂道を上っていく。
既に花は大分散り、所々空白も目立って来ていた。
来週まで持つか持たないかだろう。
それでこの景色も見納めになるかもしれない。
俺達が守れなければ……。
その時、一際強い風が吹き、淡いピンクのカーテンが視界を遮る。
それが晴れると、そこには髪とスカートを押さえて身を竦めている女子生徒の姿があった。
渚さんだ。
その小さな背中が、どこか頼りなく儚気で、散り際の桜と重なって見える。
今日もここで立ち止まっているんだろうか？
秋生さんから昨日はちゃんと授業に出たと聞いてはいるが……。
それはつまり、周囲の反応や空気を直に感じたという事だ……。
「おはようございます」
後ろから挨拶をして、振り向いた所に軽く頭を下げる。
「あっ！おはようございます。オーちゃん」
俺だと判るとにこりと笑って会釈を返してくれた。
意外と元気そう……か？
少なくともその笑顔に影は見られない。
「……どうですか？」
「えっと……今日も少し休んだらちゃんと行くつもりなので、大丈夫です」
「そうですか……」
本当に大丈夫なら、こんな所で立ち止まったりはしない事はわかってる。
それでも、彼女が独りで頑張ろうとしているのなら……俺の出る

幕では無いだろう。
「じゃあ……」
「あっ、あの……古河渚です。オーちゃんにはいつもお世話になってます」
「これで」と言って行こうとした所で、いきなり渚さんが俺の背後に向かって頭を下げる。
少し驚きながらそちらを見ると、そこには同じく面食らっている智代が立っていた。
さっき俺がキツイ事を言ってから、少し距離を空けて後ろを付いてきていたのは知っていたが……しかし、渚さんには智代の事を紹介してはいない筈だが……？
秋生さんから善からぬ噂を吹き込まれていたとしても、今はそれ程近くに居た訳でも無いのに……昨日会った時に一緒に居たのを見られていたのか？
「あっ、ああ、坂上智代だ」
気をとり直して智代もいつもの調子で名乗る。
「やっぱり、貴女が坂上さんでしたか」
「ん？私の事を知っているのか？」
「はい。昨日、校内新聞で読みました」
そういう事かよ……！！
「ああ……」
「えっと……あの……これからもオーちゃんと仲良くしてあげて下さいね」
そう言って渚さんは、再び智代に対して深々と頭を下げた。
なっ、渚さん何を……！？
まるで本当の身内の様な……思いもよらぬ渚さんの行動に、ただただ唖然とする。
そして智代もまた、あんな事が有った後だけに戸惑っている様だった。
だが、それも数瞬。

「ああ、もちろんだ。私とオーキは仲間だからな」
智代ははっきりとそう言い切った。
自信に満ちたいつもの坂上智代の笑顔で。
それを聞いて、顔を上げた渚さんも「えへへ」と嬉しそうに笑う。
「いい奴だな。お前」
「えっ？」
「てか、さっきから、どうしてお前の方が偉そうなんだ？」
いい加減、二人のやりとりが恥ずかしい。
耐え切れなくなって、横からペシッと智代の頭にチョップを食らわす。
「……何をする！？痛いじゃないか」
「古河さんは先輩だって昨日教えただろ？」
「だからって、叩く事ないじゃないか」
智代が叩かれた所を擦りながら、むくれて抗議してくる。
そこまでは予想の範囲だったのだが、
「オーちゃん……女の子叩いちゃダメです」
渚さんに注意された！
「いや……でも、やっぱりタメ口は良くないと……」
「わたしは別に気にして無いです」
「ほら、古河もこう言ってるじゃないか」
「だから、呼び捨てにすんなって」
「細かい事を気にする奴だな……本人がいいと言ってるんだからいいじゃないか」
「……」
閉口して湧き上がる怒りを押し止め、嘆息と共に吐き出す。
渚さんの手前もあるし、今は何を言っても分が悪い。
「それじゃあ先輩、先、行きますね」
まあいい、渚さんの様子を窺うと言う目的は達した。
不利を悟った俺は、この場から早々に退散すべく、軽く頭を下げながら踵を返して、返事も待たずに歩きだす。

「あっ、はい。オーちゃん、またです」
「オーキ？……私もこれで失礼する」
「はい。坂上さんも、また今度お会いしましょう」
「ああ。また」
そして智代も慌てて渚さんと別れ、小走りで追き横に並ぶと、バツが悪そうにわかり切った事を訊いてくる。
「……怒っているのか……？」
「別に……」
「怒ってるじゃないか」
「お前が敬語も使えないアホな子と思われても、俺には関係の無い事だ」
「馬鹿にするな。敬語くらい使える」
「なら使え」
「……」
部活もやっていなければ、先輩後輩といった事柄自体意識した事が無いのだから、敬語に馴染みが無いのはわかる。
だが、だったら尚更今の内に慣れておく必要があるだろう。
「お前にとっては些細な事でも、それで他人を不快にさせる事もあるんだよ」
「だから使おうと思えば使えると言ってるじゃないか……」
不貞腐れた様に呟いて、それっきり智代も黙る。
前途多難なのは覚悟していたが……こんな初歩的な事でイチイチ難色を示されるとはな……。
どうせ苦労するのなら、もっと大きな事でしたい物だが……。
俺だってこんな小言を言いたくは無い。
でも、仕方が無いだろう？
のんびりとこいつの成長を見守っている時間は無いのだから……。

「ホームページ？」
四限目が終わって昼休み、俺達は今日も屋上に陣取って作戦会議を始める。
「ああ、ネット上に俺達の目的や活動報告なんかをのっけて、より多くの人達に見てもらえる様にする訳だ。掲示板やメールとかで、意見を聞いたりも出来るしな」
「なるほど。確かにそういう物があれば、町の人達にも私達の活動を知ってもらえるな」
前々から考えていたホームページを作る案を持ち出すと、まずまずの反応が返ってくる。
どうやら今回はすんなりと乗り気になってくれた様だ。
まあ、この時点で嫌と言う奴も居ないとは思うが。
「でも、私もインターネットでホームページを見た事はあるが、あれを自分達で作ると言うのは難しいんじゃないか？色々なイラストや写真なんかも載っていたのを見たぞ。それとも、頼めば作ってくれるお店があるのか？」
しかし、智代が当然の疑問を口にする。
「いや、そういうトコはあるがそれなりに高いし、自分達で管理出来ないと不便だろ」
「それはそうだが、正直、私はあまりパソコンの事は詳しく無いんだ……お前が作ってくれるのか？」
「いや、俺もお前程じゃないが、ホムペを作れる程詳しくは無い」
「じゃあ、一体どうするんだ？」
「作れる奴を仲間にする」
流れから読めそうな俺の提案に、しかし智代は表情を固くした。
仲間を増やす事にまだ抵抗が有るのか……。
だが、今日推挙する奴なら、きっと智代も喜んで賛成してくれるだろう。

「ホムペの作成と管理は、鷹文に任せようと思うんだが、どうだ？」

「！！」

自信を持って挙げたその名に、智代は目を丸くする。

大方、同級生の誰かだと思っていたのだろう。

でも、仲の良い弟の鷹文なら、智代も嫌とは言わないハズだ。

そう確信していたのだが、

「ま、待ってくれ！鷹文がパソコンをやっている事は知っているが、あいつにそんな事まで出来るのか？」

またも俺の予想に反して、智代は困惑の色を示すのだった。

「ああ。何度かメールでやりとりしたが、あいつの知識は相当なモンだ。俺なんかよりよっぽど詳しいと思う」

「そんな事をしていたのか……でも、あいつはまだ足が完全に治ってはいないんだ……そういった事は無理じゃないか？」

「もちろん、頼むのはパソコンの前に座ってやれる事だけだ。あいつが管理してくれるなら、何かと便利だろ？お前と一番近しい人間なんだし」

「それはそうだが……そうだ！写真はどうするんだ？あいつは外に撮りに行ったりは出来ないぞ」

「今は画像データとして写真くらい送れるんだよ」

「そうなのか……そうだ！でもあいつは、夜遅くまでパソコンをやるなと親からよく叱られているんだ。それなのに、これ以上あいつにパソコンをやらせるのは良くないだろ？」

「別に管理は毎日時間かけてやる必要も無いし、やる奴は管理があろうと無かろうとパソコンやるだろ……むしろ、そういう事なら親も大目に見てくれるんじゃないか？」

「だからって……そうだ！あいつは今年受験生なんだ。それなのに、そんな仕事をやらせる訳にはいかないだろ？」

「受験つったって、今から始める訳じゃないだろ？もちろん、あいつが専念したいって言い出したら他に引き継げばいい。その頃に

は仲間も増えて、詳しい人間も居るだろうしな」
「だったら、初めからそいつに任せればいいじゃないか」
「今居ないだろ？それとも、当てがあるのか？」
「それは居無いが……」
「管理を任せるからには、何より信用出来る奴じゃないとダメだろ？それにあいつは頭も良いしな。誰よりも側でお前を支えてくれるハズだ。あいつ以上の適任者は居ないんだよ」
「そうかもしれないが……でもな……出来れば鷹文には、私達の活動の事は内緒にしておきたいんだ……」
俯き加減で案の定な事を言う智代を見ながら、俺もまた頭を抱えたくなる。
訳が解らん……。
いや、身内を頼る気恥ずかしさは解らなくは無い。
だが何度も言うが、今はそんな悠長な事は言ってられないのだ。
「そうも言ってられんだろ……どの道活動を始めたら鷹文にもバレルだろし。そもそも、より多くの人間の力を借りようと言うのに、お前は自分の家族は巻き込みたくないって言うのか？そんな理屈は通じねえし。守りたいのは、お前達家族の思い出だろ？だったら、内緒にしながらコソコソやるより、家族に全て話して協力してもらった方がずっといいだろ？」
そうすれば……例え並木道を守れなくても、新たな家族の思い出にはなる……。
思い出の桜が失われても、お前の家族を大切に思う気持ちは、他でもなく家族の心に残る筈だ。
そうじゃないのか？
「……まあ、よく考えておいてくれ……宮沢と門倉の事も含めてな」
手早くパンの包みをゴミ入れにした手提げ袋につっこんで片付け、ビニールシートから立ち上がって背を向ける。
今は顔を付き合わせるより、独りで考えさせた方がいいだろう。

「ど、何処に行くんだ！？」
「もうすぐチャイムなるだろ……先に戻るよ」
「……」
時計を見ると実際にはまだ暫く昼休みは残っていたが、俺は構わず智代を置いて屋上を後にした。

4月15日Light close

5限目は音楽で移動教室だった。
頬杖をつきながら適当に教科書をめくり、神経質そうな女教師の話を聞き流す。
子供の頃から歌は好きだったが、音楽の授業はあまり好きではない。
何故なら……『音楽性が違う』からだ！
半分冗談だが、人前で歌う事は好きじゃないし、何より楽器が苦手だ。
幼稚園のピアニカの頃から、まともに一曲吹けた事が無い。
縦笛にいたってはドレミファあたりが危うく、すぐに音が割れる始末。
しかし、音楽の実技試験は大抵縦笛だ。
俺に言わせれば、あんな物音楽では無い。
手先の器用さの試験だろ。
そもそも、社会人になって縦笛なんか吹く機会ねえよ！
それなら、まだイントロクイズとかの方がよくね？
その方が、音楽に触れる機会も知識も増えるだろ。
そんな事を思っている人間の成績が良い筈も無く、筆記はそこそこマシなのに苦手な教科の一つになっている。
まあ、正直今は何の教科だろうと関係無いが……。
「……思った様にはいかねえな……」
溜息と共に声にならない声で呟く。
頭にあるのは、ここ数日の智代とのやりとりと、この先どうするかと言う事だけだ。
まさか仲間を増やす事にダメ出しされるなんて、思ってもみなかったからな……。
あれこれ注意した所で素直に聞きやしないし……。

先行きが不安と言うか、何と言うか……本当に成し遂げられるのか？と自信が無くなってくる。
いや、まあ、始めからわかっていた事ではあるが……。
あいつは今までずっと独りだった。
親の愛も知らず、仲間をつくる事も無く、自分の力のみを信じて戦ってきた。
周りは全て敵だと思ってきたんだ。
急に人の話を聞けと言った所で、直ぐには無理だろう。
元より、あの手の自信家の天才肌は謙虚さに欠ける物だし。
あるいは……例えワンマンでも、あいつならやれてしまうのかもしれない。
選挙は来週には始まる。
それを考えれば、下手に悪い面を矯正しようとするよりも、その行動力やバカ高いポテンシャルをアピールした方が良いんだろう。
だが、それじゃあ……そのままでは、あいつはずっと独りのままだ。
腰巾着は増えたとしても、本当の意味であいつと対等に付き合える人間はますます居なくなる。
……なるんだが……どうしたって、やはり時間が足り無すぎる……。
俺は……一体どうすればいいんだ？
机につっぷして煮詰まった頭を掻きむしる。
そもそも、俺だって選挙に出た事が無い。
友達だって……今はもう秋生さんと山崎達3オタくらいだ。
つうか、素行不良で人見知りな俺が、あれこれ言った所で説得力なんて無いのかもしれない。
だったら……俺は一体何をすべき何だろう？
あいつの為に……一体何が出来るんだろう？

５限目が終わり、途中トイレに寄ってから教室に戻ると、クラスメイト達がそろって窓から外を眺めているという異様な光景に出くわす。

何だ？また何か起きてるのか？

訝しく思いながら空いていた窓の端から顔を出した俺は、グラウンドを見て愕然となる。

そこに居たのは、それぞれバイクにまたがった二人の男と、長い髪の女生徒……智代だった。

「あのバカ……！！」

止めなければ！！

駆け出そうとした矢先、背後でドッと歓声が上がる。

そして再び窓から身を乗り出した俺が見た物は……バイクに乗って突進してくる二人の男を瞬く間に倒し、割れんばかりの歓声の中、悠々と戻ってくる智代の姿だった。

すげえ……！！

映画のアクションシーンさながらのその動きには、ただただ驚嘆する他無い。

しかしその感動はすぐに冷め、次の瞬間には喪失感と無力感へと変わってゆく。

「……そうか……！」

そして、俺は悟った。

自分が酷い勘違いをしていた事を……。

俺がまずしなければならなかった事を……。

俺だけにしか出来無い、ただ唯一の事を……。

先程の喧騒がまるで嘘の様に、六限目の古文はたんたんと進められ、何事もなく終わった。
終りを告げるチャイムがなり、幸村先生が教室を出た後、暫くしていつもより遅めに担任が現れる。
大方、さっきの事で何か教師達の間で通達があったのだろう。
「ああいった事態への対応は我々教師に任せ、くれぐれも危険な真似はしないように」
案の定ＨＲの始めに語られたそれは、半ば俺個人への注意だったのだろうが、ポケットに両手をつっこんだまま俯き加減で聞き流す。
その対応が遅いから、危険な真似をするバカが現れるんだろ……。
そう、あんな危険な……。
だがもう、それも終らせる。
あんなバカはもう二度とこの学校に現れる事は無い。
もう、二度とだ……。
日直の号令でＨＲが締められ、今日も放免となる。
しかし再び席に座り直した俺は、次々と教室を後にするクラスメイト達をよそに、ポケットの両手を入れたままその場に留まっていた。
「りえちゃん、行こ」
「あ、うん。川上くん、それじゃあ」
「ああ」
暫くこちらをちらちらと気にしていた仁科だったが、ついに杉坂に促されて教室を出て行った。
そして、それと入れ違う様にして、智代が小走りで駆け寄ってくる。
「オーキ！済まない。ＨＲの後、少し担任と話していたんだ。待ったか？」
「いや……」

言葉少な気に答えながら立ち上がり、俺もまた決意と共に家路につく。

「……怒っているのか……？」

ずっと黙っていたからか、校門を出た辺りで智代が恐る恐る訊いてくる。

「……別に……」

「やっぱり怒っているじゃないか……もしかして、６限目が始まる前に来た奴等の事か？あれは仕方がなかったんだ」

素っ気無く答えると、智代は不本意だとばかりに言い訳を始めた。

たむろして通行の邪魔になっていた奴等を注意しただけだと。

そうしたら、逆恨みされて、制服を憶えられ、押しかけられたんだと。

成り行きとは言え、奴等が来たのは自分の所為だから、それ以上他の生徒に迷惑がかからないように自分が出て行って、手早く片付けたのだと。

「な？仕方が無かっただろ？」

悪びれた様子も無く、むしろどこか誇らし気に同意を求めてくる。

だから俺は……つとめて抑揚の無い声で彼女を肯定してやった。

「そうだな……お前は悪くない」

「うん！そうなんだ！悪いのは全部……」

「ああ、俺だな」

我が意を得たりと、嬉しそうに責任転嫁しようとした言葉を遮って言った。

たちまち智代の笑顔が困惑へと変わる。

「な、何を言ってるんだ？この件にお前は一切関係無いじゃない

か」
「だから、俺の所為だろ……？今まで奴等を野放しにしてきた事も……そして、お前の信を得られなかった事も」
「どうしてそうなる！？お前は関係無いって言ってるじゃないか！」
「だからそれが……お前が俺を本当の仲間と認めていないって事だ」
「違う！！訳の解らない事を言うな！！」
「じゃあ、訊くが……奴等が押しかけて来た時、少しでも俺に頼る事を考えたのか？」
「それは……！」
俺の鋭い問いに、半ば感情的になっていた智代の言葉が詰る。
「……だって、これは私の問題じゃないか……！」
「そうだな……つまりお前は、ハナから俺に頼る気が無い。俺を必要とはしていないって事だ」
「違う！！そうじゃないんだ！！私は、お前に……」
「さよならだ」
「！！」
智代の瞳がこれ以上無い程見開き、言葉を失った唇が戦慄く。
「な、何を言ってるんだ……？性質の悪い冗談はよしてくれ……」
「これ以上お前とつるんでも、意味が無いだろ？俺は勝手にやらしてもらう。お前はお前で好きにしろ」
言いながら茫然として立ち尽くす智代に背を向けて、俺は歩き始める。
返事も恨み言も聞くことなく……。
俺はあいつの“騎士”では無い。
あいつの傍で、あいつを守る“盾”じゃないんだ。
俺は門。
俺は城門。
俺は城壁。

俺は堀。
ただそこに在るだけで、人知れず、外敵を威圧し、侵入を防ぎ、守りぬく防衛線。
そう、初めから俺は、そう在りたいと願っていたんじゃないか。
だからこれは、振り出しに戻ったに過ぎない。
桜の花がまた、春風で舞い、散ってゆく。
俺はこの儚く切ない景色を忘れはしない。
この胸の痛みと苦しみと共に心に刻んで……。

＜第一章　完＞

4月15日Ｌｉｇｈｔ　ｃｌｏｓｅ（後書き）

九ヶ月に渡って続けて来たこの小説も、遅筆ながらようやく一区切りつく所まで来れました。
これも読者の方々が居てくれるからこそです。
本当にありがとうございます。
いや、まだ終わった訳じゃないですよｗ
第二章開始は、リニューアル作業を挟んで、一月後半か、二月に入ってからの予定です。
それまで忘れないでいただけると幸いですｗ

第二章　4月17日春の夜の夢の如し

訳が解らなかった。
オーキが何を言っているのか。
言っている意味が理解出来なかった。
いつもの様に小言を言ってくるだろうと、そう予想していたんだ。
怒られる事は覚悟していた。
でも、きっと、ちゃんと説明すればわかってくれると思っていたんだ。
何だかんだ言いながらも、あいつは優しい奴だからな。
許してくれると、信じていたんだ。
なのに待っていたのは、唐突な別れの言葉。
冗談だと思いたかった。
でも……氷の様に冷たい感情のこもらない声が、眼差しがそうでは無いと告げていた。
何だそれは？
それじゃあ、まるで……かつての“あいつら”の様じゃないか。
そうか……。
そういう事か……。
ようやく理解出来たのは、既にあいつの姿が見えなくなった後だった。
彼は私に、興味が無くなったのだと。

4月17日（木）
あんな事があった後でも、いや、前より一層、私の周りは騒がしくなった。
「坂上さん！バスケに興味無い？坂上さんなら、ダンクだって出来るかも！」
「ダンク？ああ、直接ゴールに入れるアレか。それなら中学の頃にやった事があるな」
「マジで！？是非バスケ部に入ってよ！いや、入るべきよ！」
「待ちなさいよ！坂上さん、バレー部で一緒に全国を目指しましょ！」
「あ、いや……」
「身体測定の時の記録見たけど、本気で陸上やってみない？」
「いやいや、坂上さんはソフト部に入るのよ！エースで4番の席は貴女の為に空けてあるわ！」
「いやいやいや、不良達を一瞬でのしたあの動き、あれは格闘技経験者の動きよ。空手部はいつでも貴女を歓迎するわ」
「柔道をやってみませんか？試しに体験入部だけでもいいから」
「弱小剣道部に、愛の手を～」
校門の所で待ち伏せされたのを皮切りに、部活動の勧誘が目に見えて激しくなった。
今までは同じクラスか、せいぜい体育授業の時に一緒になる隣のクラスの女子くらいだったが、まったく顔の知らない連中までもが引切り無しに勧誘してくる。
それも、かなりしつこくだ。
私にはやる事が有ると何度も言っているのに。
それとも、私の断り方が悪いのか？
好意で誘ってくれているのだろうから、あまりこういう事は言いたくは無いが……正直、鬱陶しくて仕方が無い。
「坂上さん、モテモテだね」
「ああ、騒がしくて済まない」

一緒に昼食を食べていた同じクラスの女子『望月』の何気無い言葉に、つい恐縮して謝ってしまった。
こうも次から次へと勧誘が現れたんじゃ、さぞクラスの皆にも迷惑をかけている事だろう。
まったく、こんな事になるならあんな事……。
そこまで考えそうになって、慌てて首を振ってそれを否定する。
今更後悔した所で、後の祭りでしかない。
そう……もう全て終わった事。
あいつとの日々が、戻る訳では無いんだ。
「そう言えば坂上さん、川上君とはその後どうなの？」
「えっ！？」
そんな事を考えていると、唐突に同じく昼食を一緒に食べていた『桑野』の口からあいつの名前が出て来た事に驚いて、思わず上ずった声を上げてしまう。
「一緒に帰ったりしてたでしょ？C組の子にも、最近坂上さんがよく来てるって聞いたぞ～」
「ひょっとして、ここ数日お昼に居なかったのも、川上君と一緒に食べてたからとか？」
興味深々と言った様子で、望月も話に加わってくる。
この二人は、本当にこの手の話が好きだ。
……やっぱり、こういった話に興味を持った方が、“女の子らしい”のだろうか？
「別に、あいつとは何も無い……」
「え～、ホントに～！？」
「隠さなくてもいいじゃん！本当の事、言っちゃいなよ～！」
「本当に！あいつとはもう、何も無いんだ……」
しつこい二人の追求につい大声を出してしまい、しまったと思いながら目を伏せる。
いくらあいつの事を話題にして欲しくなかったとは言え、今の失敗だった。

案の定、二人も言葉が見つからず、苦笑しながら顔を見合わせている。
「まあ、それならそれで良かったんじゃない？」
気まずい雰囲気を破ってくれたのは、それまで黙っていた名取だった。
「あんな奴、早い内に別れて正解よ」
「そ、そうそう、坂上さんなら、絶対もっと素敵な人見つかるって！」
「ああ……そうだな……」
そうだったな。あいつは飽きっぽい無責任な男だと言っていたのは、名取だったな。
つまり、私は飽きられたんだ。
ただ、それだけの事。
名取達の話に曖昧な返事をしながら、私は自嘲的な笑みを浮かべるしかなかった。

そういえばもう一人、かなり鬱陶しいのが居たな。
金髪の変な頭の男と、背の高い連れの男……こいつは見ているだけだが、度々教室まで呼び出しに来ては、私に凄く失礼な事を言って挑発してくる様になった。
その度に蹴ってやったが、懲りもせず、休み時間になると二人組はやってくる。
それも、髭剃りやおっぱいを貸せだのと言って、私が本当に女か確かめようとしていたんだ。
今まで色々な暴言を浴びせられて来たが、そんな屈辱的な事を言われたのは初めてだぞ……。
まったく、本当に失礼な奴だ。
でも……あの二人を見ていると、何か懐かしい感じがする。

つい数日前までは、私にもあんな風に一緒に馬鹿な事をして笑い合える仲間が居たんだ。
それはまるで、全てが私の見ていた夢だったかの様に脆く儚い、ほんのわずかな期間に過ぎなかったけれど。
こんな私にも、確かに在ったんだ……心から今が楽しいと思えた時が。
それを思うと、ほんの少しだけ、あいつらが羨ましく思えた。

「ヤッホ〜、智代ちゃん」
体育の時間、グラウンドに向かう途中、後ろから呼ばれて振り返ると、小柄で大きな瞳に大き目の眼鏡がよく似合う少女・門倉実理が人懐っこい笑みを浮かべて手を振っていた。
「なんだ……実理か……」
「どうしたのぉ？そう言えばこの頃、元気無いねえ」
そう言いながら前に回り込んで来たかと思うと、心配そうに下から覗き込んでくる。
相変わらず鋭い奴だ。
「べ、別に、そんな事は無い。私は元気だ」
全てを見透かされそうな眼鏡の奥の瞳に耐えられず、思わず視線をそらしながら彼女をかわし、私はそのまま歩き続けた。
正直今は、彼女とも顔を合わせ辛い。
嫌でもあいつの事を思い出してしまうからだ。
「そお？悩み事の相談なら、いつでも乗るよぉ？」
悩み……か。
あいつとも、そんな話をしたんだったな。
その時は私を面白い奴だと言って大笑いしたクセに……たった数日で飽きるなんて、どれだけ飽きっぽいんだ？
それとも……本当は私は、とてもつまらない人間なのだろうか？

そう言えば、これと言って趣味も無いし、音楽を聴いたり、ＴＶもほとんど視ていないから、正直クラスの女子の話についていけない事も多い。

……。

「いや……本当に何でもないんだ……それより、他に用があるんじゃないのか？」

これ以上この話題に触れられたくなくて、半ば強引に話を代える。

心当たりは有ったからな。

彼女には多分、私に訊きたい事が有るはずだ。

「ん～？」

しかし、予想に反して実理は人差し指を顎に当てた可愛らしい仕草で、きょとんと考え込む。

「一昨日の事を記事にしていいか訊きに来たんじゃないのか？」

「ああ！うん。しないから平気だよ～」

「ええっ！！……どうして？」

「ん～、確かに概ねの生徒にはウケてたけど、やっぱり先生や一部の生徒には『アレはどうか？』って人もやっぱりいるから……かな？」

予想外の答えに訊き返すと、実理は曖昧な感じにそう答えた。

「でも、だったら何故、先週の事はあんなに大きく取り上げられたんだ？」

何故か私はそれに納得がいかず、更に実理を問い詰めていた。

頭に血が上って、ムキになってしまっていたんだ。

でも、実理は穏やかに微笑むと、その大きな瞳で私を真っ直ぐに見つめ、諭す様にこう言った。

「正直な事を言えば、私が書きたくないからなんだ。智代ちゃんはきっと自信が有ってやったんだろうけど、見ている側からすれば、凄く心配して、ドキドキハラハラ物だったんだからね」

ズキリとした。

それは少しおちゃらけた、とても柔らかい言葉だったが、ジワリ

ジワリと私の心に深く突き刺さっていく様で、何か気持ちの悪い。
「でも、あれは……」
「うん、別に攻めるつもりは無いよぉ。でも、バイクに向かって行くなんて危ない事、もうやって欲しく無いなぁ……事故ってね。起こしたいと思ってる人なんて居ないし、皆気をつけているつもりだけど、それでも起きちゃう物だから……」
「！！」
“事故”と言う単語を聞いた瞬間、私の脳裏に、弟の事故の時の事が鮮明に思い出された。
走る車の前に鷹文が飛び出した時、どれだけのショックを受けた事か。
そして鷹文が一命をとり留めた時、私はもう二度とこんな想いは御免だと、そう思ったんじゃなかったのか？
それなのに私は、それと同じ心配を実理に……そして恐らくオーキにも、させていたんだ。
「馬鹿だ……私は……飽きられて当然じゃないか……」
自分の愚かさが悔しくて、唇を噛みしめる。
私は何度同じ過ちを繰り返せば気が済むんだ？
そうだ。今回はたまたま運が良く受け入れてくれた生徒の方が多かった。
でも、こんな事が続けば、いづれ一人、また一人と、私に背を向けていく事だろう。
それではまた、前の学校に居た頃に逆戻りじゃないか。
当然、生徒会長になる事も出来なければ、桜並木を守るどころでは無くなる。
それは……オーキに何度も言われた事だ。
初めて出会った時から、あいつはずっと私の事を心配してくれていた。
それなのに私は……何一つとして、わかってはいなかったんだ。
あいつが言ってくれた言葉の意味も。

あいつが、どんな想いでそれを言ってくれていたのかも。
「智代ちゃん？大丈夫？」
気がつくと、心配そうに私を見つめる実理の顔が間近にあった。
「実理……私は……」
何かを言おうとした途端、色々な感情が入り混じって溢れて出し、後はもう実理の小さな身体に顔を埋める事しか出来なかった。

第二章　４月１７日謝って済むなら、誰も悲しまないのに

中学に上がっても俺は“ポンコツ”だった
体力はついたけれど
誰にも当たり負けしないパワーはついたけど
足もそこいらの奴には負けないくらいは速くなったけど
喘息もほとんど出なくなったけど
それでもサッカーは巧くならなかった
ボールの扱いが下手だった
リフティングはいまだに１００回出来なかった
加えて生意気“そう”だった事も有り
初めから先輩達の風当たりも強く
やらされるのは球拾いとランニングばかり
球拾い中に無駄に喋っていたとか
何かと難癖をつけられては走らされ
そのまま練習が終わるまで放置される事も珍しくはなかった

いつしか俺の仇名はここでも“ポンコツ”になっていた
先輩の中には同じ少年サッカークラブだった人も居たから必然だ
敬語を使わなかった事も
命令に逆らった事も
口答えした事も無かったのに
俺は一部の先輩達……特に一個上の主将から嫌われていた様だ
確かに俺は人見知りで口下手だ
目上の人間と上手くコミュニケーションが取れない
それでも相手が有る程度俺の事を知ってくれているならまだマシなのだが
俺は誤解を受け易い類の人間だから
大人しくしてても目をつけられる物なのだろう
それでも実力が有ったのならまた違ったのだろうが
何しろ俺はポンコツだ

「才能無いからやめちまえ」
そう言われた事も一度や二度じゃなかった

それでも三年が引退して暫くして
俺はレギュラーのベンチに入れた事があった
監督にはそれなりに認めてもらえていたのだろう
出番は後半の頭に回ってきた
しかしポジションはやった事も無い中盤で
どう動けばいいのかまるで解らない
それでも俺に出来る事をやるしかなかった
幸か不幸か俺に味方のパスが来る事は無いから
俺はひたすら守備的にボールを追い駆け回った
泥臭く
ボールを回されかわされても
一人空回りしているとわかっていても

俺にはこれしか出来ないから
何度も
何度も
ひたすらアタックし続けた
その甲斐あってか何度かボールを奪えた
だがそれでも
主将はパスやシュートをミスする度に罵声を浴びせてくるだけだった
その挙句
ポジションの重なる相手チームの奴までが俺に「ウゼエ」と難癖つけだし
なめられちゃいけないと軽くあしらったつもりだったが
反ってそれでムキになられたらしく
次第に際どい接触プレイが多くなり
遂には……競り合いで掴んできた腕を払った手が偶然相手の鼻に当たって流血
俺は警告を貰い代えられた

そしてそれ以降

先輩達が卒業する二年の夏まで

俺がベンチに入る事は無かった

4月17日（木）

冷たい風が路上の花弁を舞い上げ、薄桃色の螺旋を描いて消えた。
春とは言え、やはりまだ朝は肌寒い日が多い。
日光を浴びてる分にはマシだが、日陰に入ると急に冷やりとして、自然早足になる。
「ネクタイでも無いよりマシだったか……」
ポケットに両手を突込み、Yシャツの肩をいからせ首をすくめてみる。
女子のタートルネックがちょっと羨ましい。
てか、ブレザーくらい羽織ってくれば良かったか。
まあ、学校前の坂道まで来て今更だが……。
前は別に、こんなに寒いと思った事なんて無かったんだけどな……。
足を止めて見上げる。
桜のアーチは既に空の割合の方が多い。
もって数日か……。
俺は……来年もまたこの桜を見られるだろうか？
いや……。

目を伏せて再び歩き出す。
その為にあいつと距離をとる道を選んだんだ。
今度こそ……必ず成し遂げてみせる。
例え、他の全てを犠牲にしようとも……。

見慣れてきた騒がしい教室に入り、いつもの席に座る。
いつも俺より早い隣の仁科が、珍しく今日は来ていない。
まあ、今日は俺も割りと早目に来たから、こういう事もあるだろう。
ここ最近は特にギリギリだったしな……。
「おはよう、川上君」
感慨に浸りかかった所に、声をかけられ醒める。
教室に入って来た仁科だった。
「ああ、おはよ」
今日も光沢のあるサラサラな長い黒髪がよく似合っている。
などと思っていると、彼女の隣に居た杉坂に睨まれた気がした。
「りえちゃん、また後でね」
「うん。またね」
ころっと表情を一転させて仁科と挨拶を交わし、杉坂は自分の席に向かう。
本当にいつも仲が良いよな。
まあ、ここ最近の明るい表情の仁科を見ていると、ほっとするのは俺も同じだが。
そういえば……立ち上げた合唱部の件はどうなったんだろう？
うちの学校は、部活説明会から一週間以内に部員が3人以上にならないと廃部になる決まりだ。
確かそろそろ期日のはず。
「そういや、部員の件どうなった？」

「え？ああ、原田さんが入部してくれました」
出来るだけ何気無く訊くと、仁科は笑顔で答えてくれた。
「原田って……一年の時同じクラスだった？」
「ええ。説明会の時に興味を持ってくれたみたいで、話をしたら入ってくれたの」
原田か……元々他人に興味が無い性質なので、正直あまり印象に残って無くてあやふやだが、大人しい娘だった……と思う。
もっとも、一年の頃の暗く授業を休む事も多かった仁科に対して、反感を持っている者も少なからず居たが、少なくともそいつらの中には居なかったとは記憶している。
何にせよ、合唱部は廃部を免れた訳だ。
「そっか……なら、名前を貸さなくてもいいな」
「ふふっ、でも、川上君なら、いつでも歓迎しますよ」
「いや、勘弁してくれ」
女子三人の中に男子一人とか、想像するだけで居心地悪い。
ハーレムでウハウハじゃん！
などと他人事で無く喜べる人間は、実際は少数派だと思う。
てか、まあ、今の俺はそんな場合じゃ無いんだが。
「部室も旧校舎の方に決まったし、後は……顧問をやってもらえる先生を見つけるだけです」
ふと仁科の笑顔に翳が差した。
「顧問？」
「うん……うちの学校は、顧問が居る時でないと部活動が出来ない決まりだから……」
「ああ……音楽の先生とかはダメなのか？」
「杉坂さんや原田さんとも相談しているんだけど、既に吹奏楽部の顧問をやっているので難しいんじゃないかって……」
「そっか……流石に顧問は俺にはなれないな」
「ふふっ、そうですね」
「まあ、ダメ元でも訊いてみたら？掛け持ちでやってくれるかも

しれないし」
「そうですね……二人とも話し合ってみます」
軽口に彼女が笑ってくれた事に安堵しながら、俺は軽い気持ちでありきたりな事を言った。
しかしこの問題は、俺が思っていた以上に根が深く、また様々な事情が複雑に入組み、解決までかなりの時間を要する事になるのだが……この時の俺には、それを知る由も無かった。

「川上君、それじゃあ」
「ああ。また」
ホームルームが終り、仁科と挨拶を交わしてざわめく教室を出る。
するとそこには……あいつが立っていた。
出会った頃の、溢れんばかりの覇気は無く、項垂れながら。
それは……俺が奪った物だ。
「待ってくれ！」
一瞥しただけで行こうとすると、慌てて肩を掴まれる。
やはり俺に用が有るらしい。
こんな教室の直ぐ前で、勘弁して欲しいんだが……。
「行くぞ」
なるべく周囲の注目を集めぬ様、首で特殊教室の方を指し示しながら歩き出す。
「あ、ああ」
それに少しだけ嬉しそうな顔をしながら、智代は後に付いて来た。
どういうつもりだ……？
まあ、粗方予想はつくが……。
だとしたら……俺はどうする？
どうしたらいい？
どうもこうも無い。

答えは一つだ。
他に選択肢なんて存在してはいない。
俺は……俺の道を往くだけだ。
「オーキ……その……」
人気の無い場所まで来て足を止めると、智代が躊躇いがちに口を開き始める。
「すまない……お前にも心配をかけてしまったんだろ……？それなのに私は、お前の気持ちも考えずに無神経な事を言ってしまった……お前が怒るのも無理は無いな……本当にすまないと思っている……」
「……はあ？何言ってんのお前？」
しおらしくシュンとしながら頭を下げた智代に対し、俺は素っ気無く言った。
「何って……一昨日の事だ。お前は、私が危険な事をしたから怒って、あんな事を言ったんだろ？だから、それを謝っているんじゃないか」
「誰がお前の心配なんてするかよ……被害者面してんじゃねえよ」
冷たく言い放つと、智代が信じられないと言った顔で唖然とする。
「……何だそれは？」
「お前は何も解ってねえ……じゃあな」
唇を噛んで身体を震わせながらの詰問を、溜息混じりの棄て台詞で切り捨てると、俺は智代と目を合わす事無く擦れ違い、そのまま階段に向かった。
あるいはこれで、智代は立ち直れなくなるかもしれない。
生徒会の選挙に出る事も、桜並木を守る事すらも、やめてしまうかもしれない。
それでも……それならそれで構わない。
初めからその程度のヤツだったんだ……。
むしろその方が、多くの友人達に囲まれながら青春を謳歌出来るだろう。

普通の女の子として……。
だからもう、俺には構うな。
俺は子供の頃からずっと、異常で特殊な人間になりたかった。
そして今、実際になろうとしている類の人間だ。
思えば初めから、ベクトルが真逆だったんだ。
普通になりたがっているあいつと、異常に憧れていた俺と。
一点で交わる事は有っても、もう二度と交わる事も、共に歩む事も無い……。
だから……もう……俺の事なんて忘れてくれ。

第二章　4月18日逢坂の関

中学でも俺達は弱かった

試合をすれば負けた

万年一回戦ボーイ

他の部からも他校からも

部活の先輩達からすらも馬鹿にされた

1個上の先輩達は結構強かった

地区大会ではベスト4まで何度か残り

県大会に出た事もあった

特に主将は県選抜にも呼ばれる実力者で

1対1なら多少自信が有った俺だが

一度も勝てた事は無かった

そもそも勝っていいのか?とも思ってはいたが……

一軍と二軍との試合では

実力差が有り過ぎて練習にならなかった

それ程強かった先輩達だが
意外とあっさり引退した

三年最後の地区大会で予選は通過した物の
本選一回戦で負けたのだ

「ウチの部も俺等の代で終りだな。お前等じゃ強くなれねえ。まあ、無駄だと思うが頑張れ」

それが一個上の主将が最後に残した
俺達への“呪いの言葉”だった

4月18日（金）

今日も星々の光が薄れてゆくのを、“あの場所”で見ていた。
遠くで鶏が鳴いている。
付近の小学校で飼育している奴だ。
朝の訪れを感じる……と言うより、むしろ間が抜けていて脱力してしまう。
鶏の鳴き声と言えば、中国・戦国時代の斉の人“孟嘗君（もうしょうくん）”を思い

出す。

斉の王族で、数千人もの食客を抱えたと言う、『鶏鳴狗盗』の故事になった人物だ。

盛名のあった彼は、他国に招かれ殺されそうになった事があった。国外に逃げようとしたが、その国の関所は法により夜間は通行止め。

このままでは追手に追いつかれてしまう。

絶体絶命のその時、従者の一人だった物真似の得意な食客に鶏の鳴き真似をさせ「夜が明けたぞ。鶏が鳴いている」と強引に関所を開けさせ、無事難を逃れる事が出来たと言う逸話である。

思わぬ能力や人が身を助ける事もあると言う故事だが、同時にそういった事がいかに稀かと言う事でもあるだろう。

人を使える人間、活かせる人間は少ない。

孟嘗君の食客の中に、特に得意な物も無く、風采もあがらないが文句だけは達者な者が居た。

ある時孟嘗君はその男に、自領の住民に貸した金の取り立てと、その金で我が家に足りない物を買ってくるようにと頼んだ。

ところがその男は任地に着くと、金を借りた者達を集めて証文を焼いてしまったのだ。

そして、何を買ってきたかと問う孟嘗君にこう答えた。

「“義”を買ってきました」と。

当然孟嘗君はムッとしたが、彼を追い出す事はしなかった。

それから暫くして、孟嘗君は讒言を信じた斉王により罷免されてしまう。

あれだけ居た食客達は皆去り、残ったのは例のただ飯食らいのみ。

しかし、封地に帰って失意の孟嘗君が見た物は、邑の外で主君を出迎える多くの領民の姿だった。

感激した孟嘗君は、そこで初めてその食客の価値に気付くのである。

その後、孟嘗君の参謀となったその食客は、他国を巡って孟嘗君

を売り込むと同時に、斉王には孟嘗君に去られたら評判ガタ落ちですよと説いて、見事孟嘗君を復職させた。

多くの食客を世話した人間が報われた美談だが、窮地を救ってくれた人間は数千人の中のほんの一握りであり、かの孟嘗君ですら、窮地を助けられるまでその才を見抜けなかったとも言える。

それは、俺の様な人間には絶望的な確率だ。

『士は己を知る者の為に死す』と言うが、本当に自分を買って活かしてくれる人間と出会えたなら、命を懸けても構わないと言う心情は不思議な事でもなんでも無い。

それぐらい珍しく、幸運な事なのだ。

俺は……出会えるだろうか？

己を知ってくれる人に……。

そもそも、こんな俺が活きる場所が……この世界に在るのだろうか？

正直、想像も出来ない。

子供の頃は、ヒーローになりたかった。

一時期は、プロのサッカー選手になる事も夢見た。

でも、今見えている俺の未来は……。

「ホールドアップ！手を挙げろ！両手をついて跪け！」

いきなり背中に堅い物を押し当てられ、精一杯ドスを効かせた可愛らしい声でそんな事を言われる。

てか……、

「えっと……どうすりゃいいの？あやちゃん」

「どうって、跪いて靴をお舐め！……って、あたしってバレてる～！？」

あっさり堅い物……おそらく枝か何か……を手放して“シェー”っぽいオーバーアクションで驚くあやちゃん。

何か色々間違っているが、外国暮らしが長かったから仕方が無い……のか？

「どうしたの師匠？珍しく今日は背中が隙だらけだったけど……

？」

彼女が言った“師匠”とは、当然俺の事だ。

“お兄ちゃん”からクラスチェンジしたらしく、昨日からそう呼ばれている。

まあ、俺としてはどっちもこそばゆいのだが……。

「ああ……ちょっと考え事してたから……」

「考え事？」

少し自嘲気味に苦笑しながら答える。

すると彼女は不思議そうな顔で反芻してから、ガバッと俺の座るベンチ代わりの木の幹を跨いでから腰掛けると、肩を寄せて俺の表情を窺ってきた。

「わかった！何か悩みがあるのね！でしょ？最近元気無いのも、その所為に違いないわ！」

そして質問なのか何なのかよく解らない事を言ったかと思うと、両腕を組んでうんうんと一人納得していた。

その勢いと仕草に、思わず反対側を向いてクックッと笑みをこぼす。

「それで、何の悩み？恋の悩み？」

１００％興味本位の瞳を輝かせ、頬を紅潮させながら訊いてくる。

やっぱりその手の話が好きなのか……。

さて、どう答えるか？

実はあやちゃんが好きなんだ！！

……とか、冗談で言ってみるか？

「……いや、どっちかって言うと進路的な物かな」

ひかれて最悪変態扱いされそうなので止めておく。

「進路？進路と言うと……サッカー選手になるか、それとも武闘家になるかって事？」

「いや、そんな楽しそうな進路じゃないから」

「じゃあ、正規の兵隊になるか、傭兵になるか？」

「いや、日本には徴兵制はもう無いから」

「わかった！スパイになるか、マフィアになるかね！」

「いや、だからね……」
呆れながらつっこもうとして、ふと言葉に詰る。
あながち、まったくの的外れとも言えないかもな……。
これから俺がやろうとしている事を思えば……。
「フッフッフッ、どうやらビンゴの様ね！そっか……まさか師匠もスパイ志望だったとわね」
沈黙を肯定と取ったのか、彼女の暴走は止まらない。
「“も”って……あやちゃん、スパイになりたいの？」
「うゲツ！！何故それを！？」
うゲッて……。
「まさか……心を読まれた……？師匠は超能力者なの！？そうなのね！！だからあたしの攻撃を全てかわせるのね！！」
「いや、今さっき、師匠もスパイ志望だったとわって言ってたじゃん」
「うっ……そうよ。言ったわよ。言いました。自分で言っておいて気付きませんでした。滑稽でしょ？滑稽だわ。笑いなさいよ。笑うがいいわ。あーはっはっはっは～！」
あ、あやちゃんが壊れた！！
しかも、笑い出したかと思うと急に落ち込んで、俯いて何やらぶつぶつ言っている。
躁鬱の気でもあるのかこの子は……？
それとも……この子なりに元気づけ様としてくれてるのだろうか？
「ほら、一流のスパイになる為にも練習するぞ」
ポンと頭に手をのせ、先に立ち上がってあやちゃんを促す。
「あっ、はい！じゃなくて、押忍！！」
すると彼女も直ぐに笑顔になって立ち上がり、両腕を腰の辺りで構える“押忍のポーズ”で元気に返事をしてくれた。

「よっ！」
「はっ！」
「うりゃっ！」
「どりゃ～～～～！！」
「わちゃ～～～～～～！！」
「チェスト～～～～～～～！！」
「……ただの受身にそんな気合いらないからね」
次第にテンションが上がってきたのか、あやちゃんが奇声を上げ始めたのでつっこんでおく。
軽いストレッチの後、彼女には足を伸ばして座った状態から、そのまま後ろに倒れて手をつく受身の練習をさせていた。
サッカーだけでなく、格闘技的な物も少し教える事になったのだ。
呼び方が“師匠”になったのはその所為である。
「ねえ、師匠」
「ん？」
「今日は攻撃も教えてくれる？パンチとかキックとか」
倒れこんで足を高く上げたまま、あやちゃんが期待をこめて訊いてくる。
そう言えば、昨日は受身とボールを蹴っただけだった。
まあ、そうだよな……。
俺だって漫画とかの真似して色々な技やトレーニングをしていた。
その気持ちはよく解る。
だが……。
「今日も受身だけだ」
「え～～～」
素っ気無い俺の答えに、足を下ろした反動で上体を起こしたあやちゃんが口を尖らせる。
彼女の運動神経は悪くは無い。
しかし、それでもやはりサッカーをやってる時の動きとかを見ていると、運動系の部活をやってる連中に見劣りする。

まあ、小学生なんだし、当然と言えば当然なんだが。
だからまず、最も初歩である受身……と言うか、転び方を身に付けてもらおうと思った。
「まずは受身くらいちゃんと出来ないと、怪我の元だからね」
「大丈夫だよ。あたしのお父さんお医者さんだし」
「そう言う問題じゃないだろ?兎に角、今週いっぱいは基礎トレね」
「今週いっぱい……!?」
息を飲んで見開いた彼女の瞳に、一瞬絶望の色が浮かんだ。
何だ?
そんなに驚く事か……?
「……厳しいなあ師匠……でも、やっぱりそう言う物だよね」
そう言ってあやちゃんは笑ったが、その笑顔はやはりどこか寂しそうだった。

第二章　4月18日勘違いから始まる恋

「ちぃッス」
「おう……てめぇか……」
あやちゃんと別れてから、いつもの様に昼食を買いに古河パンに寄ると、秋生さんが神妙な面持ちで腕組みをしながらレジに立っていた。
昨日来た時もこんな感じだったが、無理も無い。
何でも、“あの”渚さんが、“男”を家に連れて来たらしいのだ。
学校に俺ぐらいしか知り合いが居なかった渚さんに、友達が出来た事は嬉しいのだが……。
いきなり“男”かよ……！
正直、俺としても複雑な心境だ。
子供の頃の話だが、責任を取る為とは言え、一度はプロポーズした身である。
それに、もし早苗さんと結婚したら、渚さんは年上の娘になるのか……と、考えた事も無きにしも非ずだったりもしなくもない……あくまで“子供の頃に”だが。
そんな人に彼氏が出来たのだから、もちろん祝ってあげたいのだが、まったく悔しくないと言えば嘘になる。
秋生さんは『男友達だ！！』と強調してはいたが。
しかし、それにしたって家に連れて来る程仲と言う事だろう。
……早過ぎないか？
本来なら学年も違うし、元々そういう相手が居たって話は聞いた事が無い。
つまり、渚さんが復学してここ数日の間に、そこまで親しくなったと言う事だ。
……まあ、俺も数日で智代の家行ったけど……。
智代は兎も角、渚さんはおっとりしていて優しいから、変な男に

騙されてるんじゃないか？とか、強引に迫られて断れなかったんじゃないか？とか、色々考えてしまう。

俺ですらこうなんだから、渚さんを溺愛している秋生さんとしては気が気じゃないだろう。

怒り狂って相手を追い出したんじゃないか？

……と、思ったのだが、話を聞く限りそうじゃないらしい。

むしろ、普通にもてなして、普通に晩飯一緒に食って帰したとか。

懸念を口にした俺に『他人を騙せる様な奴じゃねえ』とか言ったりとか。

ひょっとして、結構気にいったのか？と思える様な事ばかりで。

こちらとしては、何だか肩透かしを食った気分だった。

今までの俺に対する数々の“脅し”は一体何だったんだ？

そんなに俺が渚さんの相手じゃ嫌だったのか？

まあ、別にいいけど……。

それでもやはり気にはなっているらしく、こうして店番をしながらもどことなく落ち着かない様子で、時折遠くを見ては考え事をしている様だった。

「……何だよ？訊きてぇ事が有んなら言えよ」

様子を窺いながらも、無言でパンを選んでいるだけの俺の態度に業を煮やしたのか、秋生さんが不機嫌そうに催促してくる。

訊いて欲しいって事だろう。

「昨日も何かあったんですか？」

「いやな……昨日の晩、渚の帰りが遅いんで早苗と一緒に探しに出たんだが……何の事はねえ、公園であの野郎と話し込んでやがった……」

「あの野郎って……例の……銀河？さんでしたっけ？」

「銀河なんて壮大な名前じゃねえ。コスモだ！『小宇宙』と書いて『コスモ斉藤』と読ませるチンケな野郎だ……って、十分壮大じゃねえか！！」

いや、コスモ斉藤とは読まないだろ……てか、斉藤って初耳なん

だが……。

「その、斉藤さんと渚さんが話してたと？」

「斉藤じゃねえ！『大宇宙シャア』だ……って、スゲエ壮大でカッコ良い名前じゃねえか！！」

いや、シャアって……昨日から気付いてはいたが、絶対適当に名前言ってるな……。

ちなみに俺は、子供の頃に秋生さんから洗礼を受け、ファーストから００まで全て知っている。

一番好きな作品はＧ。

一番好きなキャラはハマーン・カーン。

一番好きな主題歌はＦ９１の『ＥＴＥＲＮＡＬ　ＷＩＮＤ』だ。

「で、その赤い彗星が渚さんと逢引してたと」

“あ・い・び・き”だぁ！？誰がウチの渚と逢引してやがったんだコラァ！？」

「うぐ！！」

いきなり逆上したかと思うと、両腕で胸倉を掴まれ吊り上げられる。

訳わからねえ！！

何で俺が首絞められなきゃなんねんだ！？

「だから、そいつと、渚さんが話してたんでしょ？」

「何だとてめぇ！？誰が俺の渚と話していやがったんだ！？」

「いや、だから、続きを！話進まないんで続き話して下さいよ！」

「それもそうだな」

爪先立ちで何とか耐えながらそう言うと、秋生さんはようやく俺を解放してくれた。

まったく、この人との付き合いも長いが、いまだにどこまでが本気でどこまでが冗談なのか判らない時がある。

「つっても、まあ、家に寄ってくか？って誘ってやったんだが、ソイツは俺達の顔見て直ぐに帰っちまったから、続きも何もねえんだが……」

「そうですか……」
「……それだけか？」
「は？」
マジ顔での予想外の切り返しに、思わず間抜け面で訊き返してしまう。
すると、何故かチッと舌打ちしてから溜息をつかれた。
「で、てめぇの方はどうなんだ？」
「どうって？」
「例の彼女の事に決まってんだろ？ちゃんと仲直りして、よりは戻したのか？」
またその話か……。
「だから、戻すも何も、別に付き合ってませんし」
「まぁだそんな事言ってんのかてめぇは！？若い男と女が夜の公園に二人きりで居て、何もねえ訳ねえだろ！？って、それは渚の事じゃねえか～～～！！」
「秋生さ～ん、そろそろ他のお客さんもお見えになる頃ですから、程々にして下さいね～～～」
勝手に自爆して頭を抱えながら絶叫する秋生さんに対し、ついに店の奥から早苗さんのつっこみが入る。
頃合か。
これ以上詮索されたくないし、俺もこの隙に退散するとしよう。
「じゃあ、俺もそろそろ……」
「あん？チッ、兎に角、てめぇは人の心配するより、まず自分の事をもう少しマジに考えろ」
「ええ……」
秋生さんの説教に曖昧に答えながら金を払い、俺は古河パンを後にした。

いつもの席でいつもの様に退屈な授業を寝て過ごす。
変わり映えの無い平凡な日々の繰り返し。
俺にはそれが不満で仕方がなかった。
だから、あいつとの出会いには心が躍った。
何も無い平穏な日々が終わる予感がしたからだ。
でも……それはある意味正しく、ある意味間違いだった。
こんな風に授業を受けられるのも、これが最後かもしれない。
そう思うと、無意味で無駄な事に思えた授業にも、多少は感慨深い物があった。

ホームルームが終り、放課後になる。
「川上君、それじゃあ」
今日も杉坂と一緒に、恐らく部活に向かうのであろう仁科を見送って、ゆっくりと席を立つ。
昇降口に向かう途中、そこにあいつを見かけた。
側には黒帯をつけた柔道着姿の長身のごつい男と、同じく茶帯の柔道着姿の女子が居て、何か言い争いをしている様にも見える。
男の方は一年の時同じクラスだった奴だ。
『稲葉徹也』……極太眉に坊主頭、学生の分際で顎の下にはヒゲを生やし、どう見ても教員の一人にしか見えない風貌のこの男は、男子柔道部の主将で、この春の県大会を征した強者である。
「しつこいぞ！私には柔道に興味なんて無いんだ！」
「そう言わず、今日一日、今日一日だけでも体験入部してみない？」
「男部主将の私からもお願いする」
やはり部活の勧誘か。

まあ、今の俺にはどうでもいい。
そう思い、係わり合いになる事なく通り過ぎようと思ったのだが……こちらに気付いた智代と目が合ってしまった。
「！！」
彼女は一瞬目をそらして躊躇う素振りを見せる。
だが、意を決した様に一度頷くと、必死の形相で俺の側に駆け寄り腕を掴んだ。
「オーキ、助けてくれ！こいつらしつこいんだ！」
それで柔道部の二人も俺に気付き、軽い驚きを見せる。
しかし、稲葉はむしろ微苦笑を浮かべて俺に向かって言った。
「川上、君からも頼んでくれないか？彼女の身体能力の高さは知っているだろう？部活にも入らず、このまま埋もれさすには惜しいとは思わないか？」
「何だお前達、知り合いなのか？丁度いい。お前の口からはっきり言ってやってくれ！」
智代もまた、俺の背にピッタリくっつく様にして二人から隠れながら懇願してくる。
チョコンと髪の毛の一部をゴムで結んだ女子部主将もまた、不安気に俺をみつめていた。
俺に結論を出せと？
そんな物は、最初から決まっている。
三人の視線を一斉に浴びながら、俺は淀む事無く答えた。
「いいんじゃないか？試しにやってみれば」
「え……！？」
失意の表情で智代が後ずさる。
それとは対照的に、柔道部の二人は破顔していた。
「どうして……どうしてそんな事を言うんだ！？お前は私がこの学校に来た目的を、知っているハズじゃないか！！」
唇を噛んでギロリと俺を睨み、智代が食って掛かって来る。
「だからだ。お前、部活の経験無いだろ？一日だけつってるんだ

から、やらせて貰えばいい」
「それでそのまま強引に入部させられたら、どうするんだ!?」
「そんなモン知るかよ……いや、それも良いんじゃないか？お前が真剣に柔道をやれば、オリンピックで金メダルを取る事だって夢じゃない。そうすれば……」
「誰がそんな物欲しいと言った!?もういい……お前なんかに助けを求めた私が馬鹿だった……」
俺の言葉を怒声で遮り、智代は忌々しそうに呟いて俯く。
やはりな……。
何を言った所で無駄か。
今のこいつに、俺の言葉は届かない。
いや……初めから届いてなんていなかったんだ。
俺は無言で踵を返すと、一度稲葉の肩に手を置いてからその場を去る。
「岡崎！」
背後で誰かを呼ぶ智代の声が聞こえた。
岡崎？
訝しく思い、一度振り返ってそれを確認すると、そこに居たのはやはり岡崎先輩だった。
知り合いだったのか……。
二人が一緒に居る姿を見て、何故か妙に胸がざわつくのを感じた。
だが、直ぐにそれを両手と共にポケットにつっこみ、向き直って俺は再び歩き出す。
まったく……秋生さんは勝手な事を言ってくれる。
今更、元になんて戻れるかよ。
後戻りなんて、もう出来る訳がない。
やり直しなんて都合の良い事は、効かないんだ。
だから……嫌われようと、憎まれようと構わない。
いや……むしろ、その方が都合が良い。
「あんな奴と私は無関係だ」

はっきりとあいつの口から言ってもらえれば、それがベストだ。
渚さんも、彼氏が出来たみたいだしな……。
正直……ホッとしている。
子供の頃の他愛の無い約束。
恐らく渚さんは、憶えてすらいない約束。
でも……何だかんだ言いながらも、俺は忘れた事はなかった。
ずっと、彼女の事を気にしていた。
それは……恋では無いと思う。
むしろ……こんな事を言っては凄く失礼だが……ただの“責任感”なんだろう。
控え目で……病弱で……。
彼女が次第に学校を休みがちになった事で、その思いは益々強くなった。
もしもの時は……他に居ないのなら……。
あの時の約束を、果すべきじゃないのか……？
でも……そんな大きなお世話は、もう必要無いだろう。
もちろん、今回の相手と最後まで上手くいくかは判らないけど。
きっと……大丈夫だろ……あの秋生さんが気に入ったみたいだし。
例えダメでも……渚さんは俺が思ってるよりずっと強い人だ。
可愛いくて、儚気で、ほっとけない人だから……。
きっと……誰かが彼女を幸せにしてくれるだろう……。
うん、それでいい。
これで俺は……誰にも気兼ねする事無く、一人で己の道を歩んで行ける。
後顧の憂いも、未練すらも無く……。

第二章4月18日攻撃は最大の防御

『もしもし』
『もしもし、兄ちゃん？』
『ああ、俺だ……どうした？』
『いや、どうしたって言うかさ……姉ちゃんと何かあった？』
『……なんで？』
『ここ最近元気が無い……てのとはちょっと違うか……いつもの姉ちゃんに戻ったって感じかな？先週までの明らかに浮かれた感じじゃなくて、妙に落ち着いてると言うか……』
『いい事じゃないか。浮かれてっと、何に足元すくわれるか分からんからな』
『いや、別に少しくらい浮かれてもいいんじゃない？まだ若いんだし』
『それで若さ故の過ちを犯せと？』
『いや、無理に犯さなくていいけど……』
『……』
『姉ちゃんと喧嘩でもした？』
『……そんな所だ』
『そっか……』
『……』
『……それで原因は？何で喧嘩になったのさ？』
『性格の不一致』
『いや、そんな離婚会見のお決まりな台詞じゃなくて、具体的な理由が訊きたいんだけど』
『……まあ、色々とな……』
『色々って？』
『色々だよ……』
『……』

『……』
『……』
『……まあ、話したくないなら、無理には訊かないけど……』
『色々事情が有るんだよ……俺にもあいつにもな』
『ん～……確かに姉ちゃんも相当頑固なトコ有るけどさぁ……』
『……』
『……』
『……』
『……それで、どうするの？』
『どうって？』
『だから……このまま姉ちゃんと別れるつもり？』
『別れるも何も、別につき合ってた訳じゃねえし』
『そうなの！？仲良かったから、てっきり……』
『……』
『……』
『……今のあいつに必要なのは……そんな浮ついた関係じゃないだろ……』
『……ん～……兄ちゃんには兄ちゃんなりの考えがあるんだろうけどさぁ……僕は浮かれて兄ちゃんの事ばっか話してる幸せそうな姉ちゃんを見ている方がいいよ』
『……』
『……』
『……鷹文。お前があいつを側で支えてやってくれ』
『それって……兄ちゃんにはその気が無いって事？』
『有るとか無いとかじゃなくて……言ったろ？こっちにも色々事情が有るって……』
『……そっか……じゃあ、別に姉ちゃんの事が嫌いになった訳じゃないんだね？』
『……あいつの方はどうかは知らないけどな……』
『姉ちゃん？ん～……情の深い人だから、簡単に心変わりしたり

はしないと思うけど……』

『まあ、あいつの事はともかく、お前とはダチで居たいとは思ってるよ』

『ああ、うん、それは僕も同じだよ。コアなゲームの話出来る人って、リアルには兄ちゃんくらいしか居ないし……出来れば、姉ちゃんとも早く仲直りして欲しいけどね』

『……また何かあったら電話なりメールなりしてくれ。ゲームの事でも、姉貴の事でもいいから』

『うん。そうする……じゃあ、これで』

『ああ』

夜の帳が下りると、風が変わった。

まとわりつく様に生暖かく湿っているのは、俺が川辺に立っているからだけではあるまい。

明日は一荒れ来そうだな……。

川原から遠くに見える、かつてここまで続いていた学校の桜並木に眼を向ける。

これであの桜も散ってしまうだろう。

明日の朝で、そのまま見納めになるやも知れないか……。

「待たせたな」

感傷を携帯と共に上着のポケットにしまいながら視線を土手に移す。

そこには学ランや私服を一様に着崩した、見るからにそれと判る一団が立っていた。

「……マジで俺等とやるつもりなんだな?」

聞き覚えの有る野太い声が念を押す様に訊いてくる。

一団の中でも一際大柄でリーダー格の男、田嶋だろう。

そう、こいつらは宮沢のダチで……かつてこの町で最強と謳われ

た宮沢の兄、宮沢和人の下に集った奴等だ。
「俺の実力を知りたいつったのは、あんたらだろ？」
「勘違いするなよ？てめぇに指図される義理はねえつっただけだ」
「同じ事だ。あんたらもそのつもりでこうして集まったんだろ？さあ、始めようぜ」
ジャケットと長袖のシャツを脱ぎＴシャツ一枚になって見せる。
それで覚悟と戦意が伝わったのだろう。奴等もまたいきり立ち、肌で感じられる程の敵意を向けてくる。
「ゆきねぇのダチだからって、俺等が手出し出来ねえとか思ってんじゃねえだろうな？」
「てめぇは前から気に入らなかったんだよ！坂上に勝ったからって、調子こいてんじゃねえぞ！」
「チッ、上等だ。てめえに合わせてこっちは代表を一日一人づつ出してやる。それで俺等全員に勝ったらてめぇの勝ち。一度でも負けたらそこで仕舞いだ。それでいいな？」
「はぁ？何言ってやがる？全員まとめて来いよ。かつてお前等が、坂上智代にそうした様にな」
「「「なんだとぉ！？」」」
田嶋のけして悪くはない提案に、しかし俺は挑発的な言葉でそれに応えた。
そりゃあ、一度に多人数を相手にするより、タイマンの方が遥かに楽だ。
しかも奴等の人数は２０人近い。
普通に考えれば、勝てる筈も無いだろう。
だが、俺にはこいつらだけに半月以上も費やしてられる程のんびりしてられる時間は無いんだ。
出来れば今日一日で片を付けたい。
もちろん、勝算は有る。
宮沢和人がそうであった様に、先程の田嶋の提案しかり、こいつらは卑怯な行為を好まない比較的硬派な連中だ。

腕に覚えのある奴程、プライドも高くフェアな勝負を望むはず。
基本は一人づつ、多くても下っ端が数人、丸腰相手に凶器を使ってくる確立も低いだろう。
ならば、要はタイマンを２０本やるような物。それならどうにかならなくも無い。
「なんや女一人に勝ったくらいでデカイ面しくさりおって、いてまうぞこのイチビリがぁ！」
「その女一人に、数人がかりで挑んで負けた奴等はどいつだよ？」
「それは蛭子じゃボケェ！」
「俺等を蛭子と一緒にすんじゃねえよ！」
「いや、俺等だって女だから手加減してやったんだよ！」
「鬼畜な蛭子と違ってな、俺等は紳士なんだよ！俺等が坂上に手を出さなかったのはなぁ、女を苛める様な真似したくねえからであって、ビビッてた訳じゃねえ！」
「ちょっ、待てよ！俺達だって坂上が生意気だったからちょっと灸をすえてやろうとしただけだぜ？」
「うだうだやってねえで、とっととかかって来いよ。ビビッてないならな」
何か話が蛭子いじりになって来たので、某胸に七つの傷がある男の様に右手の指をクイクイッとしてみせ“来い”と再び挑発してやった。
「てめえ、その大口、叩けなくしてやらぁっ！！」
それでついにぶち切れたか、一人の男が威勢よく叫ぶと一団から離れ、川辺に立つ俺目掛けて一直線に土手を駆け下りて来る。
「うおおおおおおおおっ！！」
男は雄叫びと共に走りながら右腕を振りかぶり、駆け下りた勢いをそのまま乗せた拳を放つ。
だが、
「！！」
ドボンッ！！

次の瞬間、男は回転しながら数メートルぶっ飛び、背後で派手な水柱を上げていた。
大した事はしていない。
かわすと同時にを足をすくってやっただけだ。
あんなあからさまな大振りのパンチ、当たれと言うほうが無理が有る。
「次！」
一応男がもがきながらも水面から顔を出した事だけ確かめてから、俺は土手に向かって次の相手を促した。
俺が多対一を選んだ理由の一つがここにある。
一対一での勝敗は、完全な決着以外有り得ない。
それには相手の戦意を喪失させるか、立ち上がれない程のダメージを負わせる必要が有る。
同等の条件下で、相応の覚悟をしている相手に対してだ。
人間と言うのは、案外打たれ強い。
始めから食らう覚悟をしていれば、ある程度の攻撃には耐えられるし、ダメージを逃がす事も難しくない。アドレナリンも出ているから、痛みにも鈍感になる。
俺が智代の攻撃に耐え凌ぎきった様にだ。
喧嘩慣れしている奴等なら、尚更だろう。
そんな相手を倒すには、『相手の覚悟を圧倒的に上回る程強烈なダメージ』を与えるか、『相手に覚悟する間すら与えない程の“疾さ”』で攻撃する他無い。
それは例え多少の技量の差が有ろうと、いや、有ったなら有るなりの対処をされる事を考えれば、一人倒す事だけでも容易では無く、加えてこちらの手の内を晒しながらの２０人抜きともなれば、それこそ至難の業である。
だが、これが多対一と言う圧倒的優位な状況ならどうだろう？
“これで負ける訳が無い”大概の人間ならそう高をくくるだろう。
そしてその瞬間、奴等は“２０分の１”に成り下がる。

その傲慢が、今の男の様に有り得ない軽率な行動を取らせる。
それはつまり、始めから覚悟させない事……すなわち『相手に覚悟する間すら与えない程の“疾さ”』を偶発的に生みだす事に他ならない。
要は相手を油断させ、本気を出される前に戦力を削ろうって腹だ。
「調子にのってんじゃねえ！うらぁっ！！」
二人目のやや小柄な男もまた、走ってきた勢いを利用して跳び蹴りで突っ込んで来る。
「グエッ！！」
身体をひねってかわすと同時に腕を伸ばした俺のラリアートをカウンターで首筋に食らい、二人目もまた跳びこんで来た勢いでバシャン！！と水際に没した。
「次！」
二人目が直ぐに立ち上がって来ないのを確かめ、すかさず土手に目を向けた。
これも多対一の利点の一つだ。
二人目はともかく、一人目は川から上がって来て「おいおい」と二人目の介抱に向かっている。
つまり、彼にはまだ余力が十分に有る訳だ。
勢いあまって吹っ飛んだだけであり、落ちた先は川だったのだから当然だろう。
タイマンであったのなら、再び俺に向かって来ていたハズだ。
しかし、彼には少なくとも今は戦意が無い。
自分の順番が終わったと“錯覚”しているからだ。
無論、これはただの喧嘩なのだからそんなルールは無いし、俺も警戒を怠るつもりは無い。
だが、田嶋の提案もあってか、この場には何となく順番に一人づつと言う暗黙のルールが出来ており、そして俺もまた矢継ぎ早に催促する事によって、その雰囲気を出来るだけ維持するよう努めている。

多対一の優位感を与えつつ、実質は一対一。俺にとって理想の状況だ。

その事実に誰かが気付いてばらすか、あるいは往生際の悪い奴が現れた瞬間この均衡は崩れ乱戦になるだろうが……それまでに出来るだけ数を稼ぎ、あわよくば幹部クラスを引きずり出したい。

そう、俺の最大の狙いはそれだ。

初めから本気で２０人全員を倒せるなんて思っちゃいない。

それどころか、田嶋をはじめとする何人かは互角か、下手をすれば俺より強いだろう。

奴等の中には形式上宮沢和人の下についている事になってはいたが、仲間内でカリスマ性のあった宮沢をリーダーとして担いだだけで実力的にほぼ同等とされていたり、あるいは宮沢に挑んで敗れはした物の互角の闘いをしたという連中も何人か居る。

だからこそ、俺はこの形式を選んだ。

出来るだけ本気の奴等と戦わない為に。

そしてその上で、俺の最大の“強み”を見せつけ認めさせる為に。

「なかなかやるじゃねえか！次は俺が相手だ！」

三人目の相手は小走り近付いて来ると、十分に距離を取った位置で身構えた。

やや細身だがかなりの長身で手足が長く、構えも様になっている。

身のこなしや、いきなり仕掛けて来ない冷静さからいっても、恐らく格闘技経験者だろう。

構え的には空手か……無論、それだけで判断するのは危険だが。

「いくぜ！」

「！！」

予想外の距離から、上段回し蹴りが伸びてきた。

かろうじてブロックが間に合った物の、疾さ、威力ともに申し分無い。

何より驚くべきはその間合いだ。

俺より頭一つ以上高い彼の長身と、確かな技術から繰り出された

それは、俺の間合いの倍近くある様にすら感じられる。
ほぼ同じ身長なのにリーチがやたら長くてとんでもなく疾い智代との闘いの経験がなければ、恐らくまともに食らっていただろう。
まだ三人目だってのに……いきなり厄介な相手が出て来やがった物だ。
例えるなら、素手で槍の様な長柄武器を相手にしている感覚。
男はこちらの攻撃が届かないのをいい事に、次々とその長い脚で技を繰り出してくる。
名前は知らないが、こいつは相当な実力者だ。
何かの拍子に最近ドロップアウトしてきた新顔だろうか？
恐らく空手の大会でも、こいつなら結構良い所まで行きそうである。
いや、むしろ完全に競技向きだろう。
「どうした？後が無いぞ！守ってばかりじゃ勝てないぜ！」
ジリジリト押され、ついに片足が水に浸かった。
長槍の刺突の如き攻撃を両手両足を盾にして防ぐ事だけで手一杯の俺に対し、攻撃の手を休める事無く余裕の表情で挑発してくる。
悔しければ間合いをつめて懐に入って来いと言う事か。
安い挑発だ。
どうせ入れる気など無いくせに。下手に入ろうとすれば、カウンターの餌食だろう。
いや、むしろ至近距離専用の技が有るのかもしれない。
長い手足を活かし、相手の間合いの外から一方的に削ってポイントを奪う。
これが空手の試合であれば、俺は成す術無くやられていただろう。
差し詰め、『攻撃は最大の防御』と言った所か。
もっとも、その本当の意味を理解する者は、そう多くは無いが。
ふと、蹴りを放つ相手の動きに、智代の幻影が重なって見えた。
可笑しさがこみ上げて来る。
一番最初に闘った相手があいつで。

次が宮沢和人の仲間全員か……。
まったく……いきなりハードル高過ぎだろう。
それまで、喧嘩なんかした事無かったのにな……。
黙想……。
目を閉じると、見えてくるのは天駆ける龍の如く飛び回るあいつの姿。
おかしな物だ。
ろくに口もきいていないと言うのに。
俺は今、こんなにも近くにあいつを感じている。
これが……かつてあいつが歩んでいた道。
これが……あいつの背負っている業。
これが……今の俺があいつにしてやれる唯一つの事。
「なっ！！」
それまでやりたい放題だった男の攻撃が、絶句と共にピタリと止んだ。
正しくは、後ろ回し蹴りにきたその長い右足を、俺が右手で掴んで止めたのだ。
「遅えよ……坂上智代の蹴りは、もっと疾くて強かった」
「ぐっ、あっ、があああああああああっ！！」
そして次の瞬間、絶叫と共に男はのた打ち回って地べたに這いつくばる。
俺が掴んだ足首を捻りながら両手で引っ張り、左脇に抱える様にしてアキレス腱と関節を極めたのだ。
いくら槍並みのリーチが有ろうと、蹴りも拳も生身の肉体である事に変わりは無い。
そしてこれは試合では無く、掴もうが投げようが極めようが何でも有りの喧嘩だ。
こちらの攻撃が相手に届かないなら、あちらから届いてくる物を攻めるまでである。
確かに『攻撃は最大の防御』だ。

そりゃあ全ての敵を攻め倒してしまえば、守る必要は無くなるだろう。

でもそれは、あくまで“全ての敵を倒せるなら”の話だ。

攻撃＞防御、攻撃が防御より強いと言う意味ではけして無い。

攻撃≦防御、攻撃もまた防御の一形態、手段に過ぎないと考えるのが正しいのだ。

守る事を忘れた攻撃は本末転倒。反撃を許した時点で、たちまち脆さを露呈する。

しかし多くの人間は、攻撃は防御より強いと勘違いしている事が多い。

だから時にあえて気持ちよく攻め続けさせ、防御を忘れさせるのもまた戦の常套手段ではあるが。

「うがあああああああああああ！！」

身体を海老反りにした男の絶叫が木霊する。

「やせ我慢してないで、早くギブアップしろ。でないと折れるぜ」

「くっ、誰が……ぐあああっ！！」

警告するも聞き入れられず、やむなくじょじょに締め付けを強くしていく。

既に極まった関節技から抜け出す事は、プロでもなかなか難しい。

加えて格闘技経験者でも派手な打撃や投げ技に比べ、地味な関節技について精通している人間は少ない。

時折身体を捻ったり、無理な体勢から空いた足で蹴ってくるが、下手な事をすれば余計に自分の首を絞めるだけだ。

「てめえ！！放しやがれ！！」

その時だった。バシャバシャと水際を駆けて来た一人の男が横槍を入れて来る。

二人目を介抱していた一人目の男だ。

だが、奇襲ならせめて音を発てずにするべきだろう。

「あてててててっ！！」

左手だけで足を極めながら、空けておいた右手で拳を受け止めこ

ちらも捻りあげる。
しかし、それで均衡が壊れた。
「うらぁっ！！」
一人目に触発されたか、続いて二人の男が仲間を助けようと土手を駆け下りてくる。
やむなく俺は、二人を引きずる様にして川の中に入っていく。
「なっ！？や、やめろ！！」
「ぐあぁっ！！うっぷ！！」
地面につっぷしていた長身の男の顔が水に浸かり、苦し気にもがく。
だが、溺れさせるのが本当の目的では無い。
そこで二人を水中に投げ捨てる様にして解放すると、間近に迫っていた二人に向けて水面を蹴った。
「「おわっ！！」」
ちょっとした津波が起こり、バッシャーンとそれをかぶった二人が思わず怯んだ。
その一瞬の隙をついてすかさず間合いを詰めた俺は、右の男に向けてローキックを放つ。
「ぎゃっ！！」
ベキッと鈍い音がした。
薪を鉈で割るイメージで振り下ろした一撃を軸足に食らい、右の男は腰砕けに倒れこむ。
これでこいつは暫く立てない……と言うか、下手すれば今ので折れただろう。
「て、てめえ！！」
そしてすぐさま左を向くと、左手で振り上げられた右腕の上腕部を制し、右手で相手の髪を掴んで引き寄せる。
「ぶっ！！」
身長差を逆に利用して鼻っ面にヘッドバットを叩き込む。
そしてがら空きとなった腹に、追撃のヤクザキック。

吹っ飛んだ男は、顔と腹を押さえてその場に蹲る。
これで5人目、四分の一か……。
しかし予想以上に早く均衡が壊れちまった……相手の出方によってはやばいか……。
そう懸念しながら、土手に視線を移す。
だが、次に出てきた男はたった一人でゆっくりと土手を降りて来ると、威風堂々と俺の前に立ち塞がった。
田嶋と同じか、それ以上の巨漢である。
ボロボロの学ランに額には白い鉢巻、肌蹴た学ランの下からは筋肉質の肉体と腹に巻かれたサラシが覗いている。
そうか……この漢があの……。
「フンッ！どうやらただのイチビリちゃうようやのぉ！じゃが、それも終いじゃい！！喧嘩十段のこのワシが、直々にいわせたらぁ！！」
「来たか……溝口……！！」

第二章　4月18日ファイターズ・ヒステリー

ボロボロの学ランに鉢巻、腹にはさらしを巻き足には下駄……このいかにも昭和のコテコテ番長ルックな男の名は『溝口誠次（みぞぐちせいじ）』数年前にふらりとこの町に現れ、当時名の通っていた男達を次々と倒し名を上げたが、宮沢和人との壮絶な死闘の末に意気投合し、そのままこの町に居ついた宮沢グループの重鎮の一人だ。

対峙しただけで今までの相手とは格が違うとわかる圧倒的な威圧感。

学ランを脱ぎ捨て露わになった筋骨隆々の体躯からは、オーラの様な物すら立ち昇っている。

こんなに早くラスボス級のこいつが出てくるとはな……。

俺のたくらみに気付いたか、それとも仲間の不甲斐無さに痺れを切らしたか。

どちらにしろ、やはり一筋縄ではいかない連中の様だ。

こっから先は相手も本気で来る。文字通りの死闘となるだろう。

「ほな……いくでぇ！！」

自らの掛け声を合図に溝口が闘牛さながらに猛然と突進してくる。

そして一気に間合いを詰めてきたかと思うと、腰の辺りに構えていた豪腕を振り上げて来た。

「虎流砕！！」

ボッ！！と拳圧が大気を貫く音が鳴った。

突進から大砲の如き右のアッパー。

辛うじて上体を反らしてかわせたが、下手にガードしていたらガードごと吹っ飛んでいただろう。

「うらぁ！！」

突き上げた拳をそのまま横薙ぎの裏拳の様にして払って来たので、後退してそれをかわす。

だが、それも溝口の手の内だった。

「チェスト！」
距離が空いたと見るや、すかさず強烈な右の蹴りを放ってくる。
ブロック越しに衝撃が身体を突きぬけ、身体がふわりと宙に浮く。
流石に重い……！
智代の蹴りが日本刀のそれなら、こいつの蹴りはまるで鎧の上から敵を粉砕する鉄槌だ。
これが重量級の蹴りと言うやつか。
しかも、溝口の攻撃はそれでは終わらない。
「チェスト！チェスト！チェスト！」
右足を下ろした反動を利用して続けざまに左の蹴り、更にその反動で再び右と、振り子の様に左右交互に連続で蹴りを放ってくる。
「チェストォォォォォ！！」
五連撃目の一際強烈な一撃に、俺は踏鞴を踏みながら後退して距離をとった。
すると、溝口はいきなりその場で腰を落として片膝をつき、腹の前で“何か”を溜める様なモーションに入る。
「終いじゃ！！ごぉっっっっっついぃ……」
な、何だ！？この距離で何を……！？
奴の次の挙動が読めず面食らう。
いや正しくは、溝口の動作から連想した物によって、余計に迷いが生じたと言うべきか。
そう、“かめ○め波”や“波○拳”……まさか、本当に“氣”を撃てるとでも言うのか！？
「タイガーバズーカじゃぁぁぁっ！！」
「！！」
雄叫びと共に溝口は、溜めていた何かを放出するかの様に左手を突き出す。
俺は思わず反射的に両腕で顔をガードした。
だが……訪れたのはただの静寂。
溝口は左手を突き出したモーションのまま動かず、氣はおろか別

段何か起きた様子も無い。
ただのフェイントかよ！
そう思いガードを下げたその時だった。
「もろたでぇ！！下駄時雨！！」
バチンと網膜に火花が散った。
溝口がその場で蹴りを放ったかと思うと、飛来してきた物体が俺の顔面を直撃したのだ。
しまった……まさか下駄……か！？
焼ける様な痛みに思わず被弾した所を押さえると、ドロリとした物が手についた。
運よく眼球はそれたが、今ので左眉の辺りが切れたらしい。
「亀がようやく顔を出しよったなぁ！今度こそホンマに終いじゃ！通天砕ぃ！！」
バキッ！！
俺の身体は鮮血を撒き散らしながら宙を舞い、ズザァァァと砂利の上に仰向けに転がった。
地面をかすめる程の超低空から突き上げる様に放たれたジャンピングアッパー。
それは咄嗟のガードおもぶち破り、俺の身体を数メートル後方に吹き飛ばしたのだった。
強ぇ……！
倒れたまま、ゆっくりと痺れの残る顎をかみ締め、舌で口の中の状況を確かめる。
幸い歯はガタついていない。切れたりもしていない様だ。
だが、ガードした瞬間、踏ん張らず半ば自分から飛んでこの威力。
まともに食らっていれば、どうなっていた事か……。
それよりも、問題は左目か。
攻撃を食らってから今までつぶったままなので血は入ってはいないが、血が止まるまでは開ける事が出来ない。
その血も興奮している今は、直ぐには止まらないだろう。

当然、止血するからタイムとかも無理だよな……。
そうなると、当分片目で、半分の視界で戦う事になる。
どう見ても『相手の弱点は狙わない』なんてうそぶく紳士には見えないし、むしろ容赦なく狙って来るだろう。
きついな……。
溝口はマジで強い。
爆発的な攻撃力に加え、あれだけの巨体と重量だ。生半可な打撃ではまず倒れないし、あの太い手足では関節も取り辛い。こちらの虚を突く狡猾さも持ち合わせている。
そして奴の後には、まだ半分以上敵が残っているのだ。
まったく……あまりの劣勢に笑えてくる。
ふと、見えている右目が、眼前の空に瞬く淡い光を捉えた。
明日の荒れ模様を予感させる漆黒の雲間から、僅かに覗く星々。
闇の光明……か。
瞳を閉じる。
黙想……。

劣勢か……。
そんな物、俺にとって珍しい事でも何でも無いだろ？
ガキの頃から、ずっとそうだった。
てか、こっちが有利だった事なんざ、一度だってねえし。
どうしようも無い程の圧倒的な戦力差。
覆す事の出来ない絶望的な状況。
初めから勝ち目の無い戦い。
そもそも勝つ事が許されてすらいない事もあった。
勝ち目があるだけマシってもんだろ。
サッカーと比べたら、喧嘩なんて簡単な物だ。
取られた点を取り返す必要も無い。

敵を潰せばそれだけ戦力を削れるし、反則を取られる事も無い。
難しい技術なんて必要無い。
才能なんて関係無い。
要は……ただ最後まで立っていさえすればいいんだ。
楽勝じゃねえか。
思い浮かべるのは“あの日”の光景。
蛍の様に漂う無数の光球。
その一つに右手を伸ばす。
そして天に輝く淡い光を、この手に掴んだ。

「喧嘩十段、どんなもんじゃあ！」
「おお、やりやがった！」
「さすが溝口さん！！相変わらず豪快だぜ！！」
右手を突き上げ勝鬨をあげる溝口に、仲間達も沸き立つ。
だが、唐突にその声がピタリとやんで、男達は息を呑む。
まあ、無理も無い。
立ち上がった俺の姿は、額の傷から流れる血で左目は塞がり、Tシャツも赤黒く染まっている。
普通なら、とても闘える状態では無いだろう。
「ほう、立ちよったか……根性だけは有る様じゃのう……！」
余裕の表れか、はたまた久々に骨の有る敵を得た喜びか、立ち上がった俺を見て溝口は不敵に笑いながら感心してみせる。
さすがにこいつは流血くらいじゃ動揺してはくれない様だ。
「さあ……第二ラウンドといこうか」
「ええじゃろう。その根性に免じて、一思いに引導を渡したらぁ！！」
溝口が先に動く。
それに対し、俺がとった行動は……まだ近くに落ちていた溝口の

下駄を素早く拾って距離を取る事だった。
「むう！？」
下駄を右手に持って構えた俺を警戒してか、溝口の突進が一瞬止まった。
下駄とは言え、先程俺の額を割った様に十分凶器に成り得る。
だがしかし、あくまで攻撃に拘ってか、溝口は再び加速して来た。
「！！」
そして溝口の間合いに入った瞬間、奴の巨体が突如視界から消えた。
「チェスト！」
「ぐうっ！！」
一足飛びに俺の左方の死角に入った溝口の蹴りが、俺の背中にクリーンヒットする。
奴が止まらなかった理由がこれか。
そして当然、溝口の攻撃はこれでは終わらない。
「チェスト！チェスト！チェスト！チェストォォォ！！」
途切れる事無く怒涛の連続蹴りが俺を襲う。
しかし、死角をつかれる事はある程度予想していた事もあり、背中から突き抜ける衝撃に耐えながらも何とか身を捻って、右目で辛うじて見える腰の動きから蹴りの軌道を予測して後続を防いだ。
「な、何やエライ器用なやっちゃのう！？」
左からの攻撃まで防ぎきった事で、初めて溝口が驚きの表情を見せる。
人が長い修練の果てに会得した物を、器用さや勘で防いだみたいに思われるのは心外だ。
などとちょっとムッとしていると、
「せいっ！！」
「！！」
一瞬の隙をつかれ、左手で右手の下駄を払われてしまった。
その刹那、再び溝口の姿が掻き消える。

「虎流砕！！」
「ぐっ！！」
左目の死角から放たれた低空アッパーを左脇腹に受け、身体をくの字にしながら踏鞴を踏む。
右手を払って注意を右に向けての、死角の左からの攻撃。
巧いな……喧嘩十段は伊達じゃねえようだ。
「逝っとけやぁぁぁ！」
ゾクリと全身に悪寒が走る。
よろけている俺の懐に入りこみ、しゃがみこむ巨体。
この構えは……さっきの超強力なジャンピングアッパーか！
終わった。
この闘いを見ていた誰もがそう思っただろう。
だが、まさにその一瞬にこそ、俺は勝機を見出す。
「通・天・さっひげっ！？」
右手を突き上げたポーズのまま、溝口の巨体がもんどりうって砂利の上に倒れた。
難しい事は何もしていない。
ただ飛び上がろうとした所に、膝を合わせてやっただけだ。
一撃目を食らった時に、足元でしゃがんでくれるので頭を蹴り易いと最初から狙っていた。
圧倒的に攻め続け勝利を確信して決めに来た所に、思いもよらぬ反撃。
ここまで完璧なカウンターだ。さすがの溝口であっても今のは効いたハズ。
と言っても、これで終わるとは俺も思ってはいない。
距離をとって額の傷と目元の血を右手で拭い、肩でしていた息を息吹で整える。
「くう……超必殺技の出がかりは、無敵なんを知らんのか？」
額を押さえて頭を振り、訳のわからない事をぼやきながら巨体がむくりと起き上がる。

押さえた手の下から、赤い筋が垂れていた。
どうやら奴も額が割れたらしい。
しかし傷は中央付近で、俺の様に視界は潰れていない様だ。
「今のは効いたわ……じゃが、所詮ただのラッキーパンチじゃい！」
パンパンと両手で自分の頬をはたいて気合を入れると、溝口は再び向かってくる。
あくまで自分のスタイルを貫き攻めの姿勢を崩さない。
その一貫したブレ無い姿は敵ながら天晴れだ。
だが……俺とて伊達に守っていた訳では無い。
「チェスト！ッ！？」
左の死角に回っての攻撃を、同時に俺も一歩左足を引いて正面で捉え完全にブロックする。
一瞬驚きの表情を見せた溝口だったが、やはり構わず連撃を繰り出してきた。
まあ、そうだろう。
こいつの連撃は自分でも止められないのだから。
「チェスト！チェスト！チェスト！チェスッ！？」
連続蹴りの４発を防ぎ、最後の一撃をブロックすると同時に相手の軸足にローキックを見舞う。
たまらず左足を引きずりながらケンケンで後退する溝口。
息もつかせぬ連撃の要諦とは、“リズム”である。
自分の攻撃の反動を利用するからこそ、素早く次の攻撃が出せるのだ。
逆を言えば、そのテンポは常に一定であり、それが崩れると続かなくなる。
溝口の連撃は確かに一撃一撃が重く疾い。
だが、その分犠牲にしている物が在る。
精度だ。
恐らく一撃目の後はほぼ反射的に出している為、例えば相手のブ

ロックを見て上下に蹴り分ける様な融通が利かない。
それは俺の左目が見えないにも係わらず、二撃目以降の蹴りのパターンが一度目とほぼ同じだった事や、俺が右手に持っていた下駄を連撃中に狙えなかった事からも明らかだ。
後から下駄を払って次の技への布石にしてきたが、攻撃が当たったのは偶然であり、連撃中に狙えるのなら、そちらの方がより確実のはず。
「悪いが……聖闘士（セイント）に一度見た技は通用しない」
「な、なんやてえ!?ワ、ワレはあの伝説のセイントなんか!?……って、んなアホな!!星座はなんじゃい!?」
「六分儀座」
「そんなけったいな星座、知らんわボケェ!!エエ加減にせい!!」
芸人魂を刺激されたか、つっこみを入れるべく向かってくる溝口。
いや、マイナーだが本当に存在するんだが……。
ちなみにラテン名は小中学生男子が喜びそうだったりする。
そう思いながら俺は……再び落ちている溝口の下駄に手を伸ばす。
「それはワシの下駄じゃあ!!ッう!?」
俺に下駄を奪わせまいと溝口の左足から放たれた下駄は、しかし直ぐに失速して地に転がった。
さっきのローキックのダメージで左足に痛みが走ったのだろう。
その隙にまんまと俺が下駄を拾い上げると、ついに溝口はその場に立ち止まった。
それは、溝口の攻勢が終わった事を意味している。
さあ、こっからは……ずっと俺のターンだ!
「な、何さらすんじゃボケェ!!」
溝口が血相を変えて怒鳴り声をあげる。
俺が拾った下駄を、いきなり川に投げ捨てたからだ。
しかし溝口は怒っていても動けない。
折角の武器になる物を自ら手放す。

俺のその不可解な行動に、疑念を抱いたからだ。
そして俺はそこに漬け込むべく、握った右腕を顔の前に構え念じる様に唱える。
「俺の右手が光って唸る……勝利を掴めと轟き叫ぶ！」
「な、なんやと！？」
「必殺！！シャァァイニング……！！」
そして右手を握ったまま俺は突進を開始する。
俺の行動が読めない溝口はやや腰を落とし、腕を顔の前に構え防御体勢をとったまま動けない。
もらった！
俺は今までの借りを返すべく、渾身の一撃を放つ。
「フィンガァァァァァァァ！！」
「ンガ！！？」
渾身の……右手を囮にしての金的蹴りが決まった！
「フィ、フィンガーちゃうやんけぇぇぇ！！」
だが、浅い。
咄嗟に内股になって蹴りの威力を半減されたのだ。
さすがに喧嘩慣れしてやがる。
しかし、俺の本当の狙いはここからだ。
「ダークネス・フィンガー！！」
「ぶっ！！」
たまらず前かがみになって両手で股間を押さえる溝口の鼻っ面に、すかさず右の掌底をブチ込みそのままアイアンクローの様に顔面を掴んで締め上げる。
「クソがぁ！！」
俺の手を払おうと、溝口が裏拳を振り回してきたので、俺も直ぐに手を離して後ろに飛び退く。
だが、
「何じゃこりゃあぁぁぁぁぁぁ！！」
俺が手を離した後も溝口は目元を押さえ続け、苦悶の声をあげた。

「め、目が……目が見えん！！何をしおったワレェ！？」
「言ったろ？ダークネスフィンガーだと。これが暗黒のフォースの力だ！」
「あ、暗黒のフォースじゃとぉ！？」
まあ、本当は右手についていた俺の血を、親指と人差し指で両目に塗りつけてやっただけだが。
視界を急に失い、冷静さ欠いた今の溝口には、それに気付く余裕は無い。
「チェストォ！！」
「グフッ！！」
縮こまって体の面積を小さくする事で少しでも身を守ろうとする溝口に対し、そのガードの隙間を狙って突き上げる様な右前蹴りを腹にぶち込む。
「チェストォ！！」
「ぐおぉぉぉぉぉぉ！！」
そして再び右のローキックでダメージの残る左足を粉砕する。
その巨体を支えきれず、遂に溝口が片膝をついた。
これで……終りだ！！
俺は数歩下がり、最後の大技を放つべく助走をつけて跳び上がる。
「シャァァイニング……！」
そして溝口の片膝を踏み台にし、
「ウィザァァド！！」
膝蹴りをその額に叩き込んだ。

第二章　4月18日男達の挽歌

荒い息を整えながら目元の血を拭い、倒れた巨体を見下ろす。
額の傷に再度膝を入れたんだ。
さすがに立ち上がってはこれまい。
「次！」
「待てや……コラッ……！」
土手に向かって呼びかける。
しかし俺の声にいち早く反応したのは背後の溝口だった。
息も絶え絶えでふらつきながらも、漢はゆっくりと立ち上がってくる。
「ワシは……負ける訳にはいかんのじゃ……！」
だが、まだ眼が塞がったままなのだろう。
溝口がおぼつかない足取りで向かったのは、俺の居る方向ではなく川だった。
一見不可解なその行動。
だが俺は、その意味を瞬時に悟った。
なるほどな……。
足が水に浸かると、溝口はバシャンと川に倒れこむ。
そしてバシャバシャと暫くもがいた後、力を取り戻したかのように勢い良く立ち上がった。
川の水で眼を洗い、混濁していた意識をはっきりさせたのだろう。
「第三ラウンドじゃい！」
水から上がってきた溝口と対峙し、睨み合う。
奴の額の鉢巻は血でにじみ、左脚を引きずっている。
俺の方も額の傷は未だに血が止まらず、今まで盾にしてきた内出血で赤黒く変色している。蓄積されたダメージはこちらの方が上かもしれない。
互いに満身創痍。

我慢比べで負ける気は無いが、奴もまた呆れる程タフな漢だ。
いや……それだけでは無いのだろう。
「……あんたにどんな想いがあるのかは知らねえ……だがな……負けられねえのはこっちも同じなんだよ！！」
「オラァァァァァァァッ！！」
俺達は同時に地を蹴った。
勝負は一合。
最早駆け引きも何も無い。
ただ己の持てる力を、想いを、全てを拳に込めて放つのみ。
バキィッ！！
時が止まった。
腕を交差させ互いの頬を捉えたまま動かない両者。
その結末が訪れるまでの数秒が、土手の男達には酷く長く感じられた事だろう。
しかしその時は遂に訪れる。
「このワシが……こないなトコで……！」
まず脚から崩れたそれは、スローモーションの様にゆっくりと倒れ伏した。
最後の一撃を放つ際のほんの一瞬、溝口は顔をしかめていた。
俺のローキックで奴の左脚は既にガタが来ていたのだ。
踏み込んだ軸足に痛みが走り、その為体重を拳に乗せ切れなかったのだろう。
それが無ければ、結果は違う物になっていたかもしれない。
「次！」
平然と土手に向かってそう言いながらも、右手を身体の影に隠しグーパーを繰り返して拳の状況を確認する。
初めて人間を全力で殴った。
正直、滅茶苦茶痛え……。
樹を叩いたりして、それなりに鍛えているつもりだったが……やはり人間は堅い。

溝口は特別堅そうだし。
手首は平気だが、指にヒビくらいは入っているかもしれない。
「どうした？もう終いか？」
再び土手に向かって呼びかけるも、直ぐには次の相手は出て来なかった。
トップクラスの実力者を倒したんだ。怖気づくのも当然か。
「あの溝口さんがやられちまうなんて……！」
「つえええ……！」
「チッ、何だよ？テメエらが行かねえなら、俺が行ってやるぜ！！」
「待て、蛭子……！俺が行く！」
出て来ようとした一人の男の肩を他の男が掴んで止め、その男が土手を降りてくる。
代わりに俺の前に進み出て来たのは……あの田嶋だった。

智代と決別したその日の遅く、俺は宮沢の友人達がたまり場にしている店を訪れた。
「ゲッ、川上！？」
最初に俺に気付いた男が驚きの声をあげた事で、途端にざわめく店内。
こいつらにとって俺がどういう存在なのかはイマイチ量りかねているが、やはり少なくとも好意を持たれてはいない様だ。
「何しに来やがった？」
「宮沢は？」
「あん！？ゆきねぇに一体何の用だよ！？」
視線だけで店内を見回す。
『家の人に心配かけないよう門限は守れ』
宮沢とはそう約束してあるから、居ないのはわかっていた。

確かめたのはあくまで念の為である。
「いや、宮沢に用は無い。居ないと思ってこの時間に来た」
「じゃあ何だよ？」
「あんたらに頼みがあって来た」
「頼みだぁ！？何で俺等がてめぇの頼みを聞かなきゃなんねえんだよ！？」
いきり立った何人かが進み出てきて俺を囲み、威圧する様にガンをたれてくる。
やれやれ、嫌われた物だ。
初っ端からこれでは先が思いやられる。
そう思っていると、
「待ちな！聞くだけ聞こうじゃないか」
その落ち着き払った声音に、男達の視線が一斉に集まる。
その視線の先に居たのは……長い黒髪をポニーテールに束ねた、大人びた雰囲気からは貫禄すら感じさせる美女だった。
初めて見る顔だが、恐らくグループの女衆を束ねているのは彼女だろう。
「で、でもよぉゴットゥザの姐御……」
「あん！？あたしは『後藤田』だつってんだろ！」
「す、すんません姐御！！」
「そいつには有紀寧ちゃんだけでなく、あんた達も少なからず世話になってんだ。話くらい聞いてやろうじゃないか」
くい下がろうとする男達を一喝して黙らせると、言い聞かせる様にそう言ってくれる。
話のわかる人が居てくれた事に、俺は内心胸を撫で下ろした。
「……ウチの学校に坂上智代が居る事はもう知ってるな？」
「だ、だから何だよ！？」
「まさか坂上と組んで、俺等をゆきねぇの部屋から締め出そうってんじゃねえだろうな！？」
いや、あの教室は別に宮沢個人の部屋じゃないんだが……。

「逆だ……坂上には今後一切手を出さないで欲しい」
「何だそりゃ？」
「あいつはもう不良狩りをしていた頃の坂上じゃない。だからあいつを刺激する様な事はしないでくれと言ってるんだ」
「手を出すも何も、今更坂上と事を構える気はねえが……」
「いや、でもよぉ……」
俺の言葉に、男達は顔を見合わせざわざわと相談を始める。
各々がうだうだと勝手な事を言い合い、直ぐにはまとまりがつきそうもない。
しかしそんな空気を、先程の声が意外な言葉でぴしゃりと鎮めた。
「気に入らないねえ……」
そう言ったかと思うと、先程の美女、後藤田が厳しい目付きで俺を見据えながら、男達を割ってこちらに向かってくる。
「どうして坂上にそんなに肩入れするのさ？」
「一応、頭張ってる身としては、ウチで面倒事を起こされたくないんですよ」
俺より少しだけ背の高いお姉さんの詰問に、思わず語尾が敬語になってしまった。
しかし俺の答えがお気に召さなかったのか、後藤田は眉をひそめて更に距離を詰めてくると、その綺麗な顔を間近に近付け更に尋問してくる。
「あたしが訊きたいのは、そんな建前じゃねえんだよ！あんた、坂上に惚れんてんのかい？」
「それは……！」
「どうなんだい！？」
「……ああ」
そのしかめっ面でなおドキドキしてしまう美人の圧力に耐え切れず、ついに視線を反らしながら素直に認めてしまった。
だがしかしその瞬間、場の空気がガラリと変わるのがはっきりと見て取れた。

「マ、マジかよ!?」
「じゃ、じゃあ、ゆきねぇの事は何とも思ってねえんだな!?」
「あいつはダチだよ」
「オッシャ〜〜〜!!」
「ひょっとして、お前等もうデキてんのか!?」
「……俺達はそういう関係じゃない」
「何だよ、さっさとデキちまえよ!この前見た限りじゃ、坂上も脈有りそうだったぞ!」
男達は興奮して沸き立ち、ピューピューと指笛を鳴らして囃し立てる者まで現れる始末。
やはりと言うか何と言うか、宮沢の近くに居る俺を恋敵とみなしての敵意だったらしい。
「ふぅっ……そうかい。あんたの言い分はよく解ったよ……」
俺の答えにか、それとも仲間の浮かれぶりにか、何故か溜息をついて後藤田は下がっていった。
周囲の空気は先程の一触即発な物とは打って変わり、むしろフレンドリーですらある。
どうやら上手くまとまりそうだ。
そう思い、一気に盟約締結に持っていこうとしたその時だった。
「待てよ……そいつが坂上に惚れてるから何だってんだよ?」
それまで事の成り行きをうかがっていた田嶋がついに動き、浮かれムードに水を注さす。
「勘違いすんなよ?元々坂上と揉めたのは一部の奴等だけで、はなからあんな女眼中にねえし、今更どうこうするつもりもねえ……だがよ、それをてめえに指図される覚えもねえんだよ!」
「た、田嶋?」
田嶋の反応が予想外だったのか、近くに居た丸刈りの須藤達も面食らっているようだった。
俺ももう少し話のわかる奴だと思っていたが……何かプライドに障ったか?

「大体よぉ、てめぇ本当に坂上より強いのか？」
その言葉で、こちらに傾きかけていた流れは再び変り、俺もその反応の意味を知った。
「番長だかなんだか知らねえけどよぉ、あんなガリ勉校の頭なんざ、誰だってなれんだよ！」
「実際にてめえが誰かとやり合ったって話は、聞いた事ねえぞ！」
「坂上に勝ったてのも、うまい事言って丸め込んだだけじゃねえのか！？」
それまではしゃいでいた者達は俺に疑惑の目を向け、何人かは思い出した様に態度をガラリと変え因縁をつけてくる。
なるほど……そういう事か……。
確かに俺はたかだかおぼっちゃん校の番格で、一度も喧嘩なんてした事なくて、智代にも実力で勝てた訳じゃない。
あまりに的確なつっこみ過ぎて笑えてくる。
さすがは音に聴こえた宮沢グループだ。
舌三寸のハッタリが効かないと言うのであれば仕方が無い……その身をもって思い知らせてやるまでだ。
「フッ……いいだろう。やってやんよ。元よりそのつもりで宮沢が居ない時間を選んだんだからな……日時と場所はお前等の都合の良い時間に決めてくれ」

目の前の男を改めてみる。
俺より頭一つ以上デカイ背丈に、溝口程ではないがガッシリとした巨躯。
その精悍な面構えと眼光には、叩き上げの軍人の如く鋭さと覚悟が宿っている。
好ましい人間だ。
俺は然程田嶋と言う人間を知らない。

それでも、この男なら信頼出来ると一目見れば判った。
間違いなく強いと直感した。
「思っていたより、お早い登場だな？」
「……てめえの力は見させて貰った……だが、こっちも舐められたままじゃ終われねえんでな……これで最後だ。付き合って貰うぜ」
そんな男と戦う事になるとはな……。
可笑しさがこみ上げ、血が沸き立ってくる。
オラ、わくわくしてきたぞってやつか。
左目の血を拭い、まだ痛みの残る右手を握り締める。
まだ血は止まっていないし、右手も動かなくは無いがあまり使わない方が良さそうだ。
ますますの劣勢。
視界は依然半分のままで、利き手が使えず、体力も既に限界が近い。
それでも何故だろう？
こんなにも血が滾るのは。
こんなにも楽しいのは。
こんなにも“生”を実感出来るのは。
「いくぜ！」
「ッ！？」
ここに来て、初めて俺は相手より先に仕掛けた。
そう初めてだ。
今までずっと守備一辺倒だった奴が、いきなりの特攻。
「チィ！」
完全に虚をつかれた田嶋は、ガードするだけで手が出せない。
そのガードの上から、構わず右のミドルキックをぶち込む。
「クッ！オラァッ！」
パンッと乾いた炸裂音と確かな手応え。
しかし、すぐさま反撃の右拳が飛んでくる。
だが、それも予想の内だ。

蹴った右足でそのまま踏み込み、体勢を低くして拳をかい潜りながら体当たりをぶちかます。
「ぐうっ！！」
巨体が踏鞴を踏み、俺達はもつれる様に倒れこんだ。
しかしそれは、俺ではなく田嶋の狙いだった。
「だっらぁ！！」
田嶋は俺の服を掴んで道連れにすると、強引に体勢を入れ替え、逆に俺に覆い被さってくる。
マズイ！
マウントに来られると思った俺は、押さえ付けに来た左手に右手を絡め、両手で肘の関節を極めにいく。
「チィッ！！」
それを嫌がり田嶋が外そうとした隙をつき、身体を回転させてそこから抜け出す事に成功する。
やはり一筋縄ではいかないか。
互いに距離をとって息を整える。
「うおぉぉっ！！」
今度は、体力に余裕のあった田嶋が先に動く。
そして体格で優る奴が選択したのは……ただ猛烈な勢いで猪の様に頭から突進してくる事だった。
「なっ！？」
対処が遅れ、そのまま押し倒される。
てか、タックルを切る練習なんて、流石に俺もやってない。
身体ごと突っ込んでくる相手にカウンターを打とうとしても、下手な攻撃は潰されるだけだ。
さすがに巧い……などと感心している場合じゃない。
上体を起こそうとした所を咄嗟に髪の毛んで頭を押さえると、自由になっていた足で腿や脇腹に膝を入れまくる。
「くっ！！うがぁ！！」
「うっ！！っ！！」

田嶋の方も、両腕で俺の脇腹を叩いて何とか頭のロックを外そうともがく。
大技を出し合う派手な溝口戦とは違い、地味で泥臭い戦いがそこにはあった。
最早単なる我慢比べ。
恐らく土手に居る奴等には、何をやっているのかよく判らないだろう。
「くあっ！！」
手打ちとは言え、何度も同じ所を叩かれれば効いてくる。
たまらず俺は田嶋の頭を放してしまった。
「もらった！！」
ついに上体を起こした田嶋が拳を振り上げる。
パンッ！！
だがしかし、それが下ろされるより早く俺の左拳が田嶋の頬を捉えていた。
当然、初めから狙っていたからこそ放したのだ。
「くっ！」
だが所詮、不意打ちとは言え手打ち。ひるませる事は出来ても倒せる訳では無い。
でも今はそれで十分だ。
膝蹴をしていた脚を振って反動をつけ、その勢いで田嶋の下から這出て逃げる様に距離を取る。
今回も何とか脱出出来たが……さすがに上がった息が戻らなくなってきた。
叩かれ続けた脇腹から肋骨にかけての鈍痛が、息をする度に更に体力を削っていく。
「チッ……」
血の混じった唾を吐きながら、田嶋が身構える。
体格的にもダメージ的にも圧倒的に彼が有利。
にも関わらず、その姿には微塵の驕りも無く、不退転の気迫さえ

みてとれる。
人に認められると言う事は嬉しい物だな……。
例えそれが敵であったとしても……だ。
「いっくぞぉ！！」
「うおらぁっ！！」
俺達はほぼ同時に走り出し、ショルダーチャージとタックルでぶつかり合う。
ドォォォン！！
まるで乗用車にでも正面衝突された様な衝撃に、肩が軋み全身が悲鳴を上げる。
それでも腰を落とし何とか踏ん張り切った。
だが、それでは終わらない。
田嶋は間髪入れず、至近距離から豪腕を振るってくる。
バキッ！！
強烈な一撃を頬に受け、俺の身体は派手に吹っ飛ばされて砂利の上を転がった。
しかし、殴ったハズの田嶋もまた苦痛に顔を歪め、その場から動く事が出来ないでいる。
俺もまた、相打ち覚悟でローキックを入れたからだ。
「ようやく……有効打ってトコか……！」
「てめえ……！」
回転を利用してすぐさま起き上がり、口の中に感じた鉄臭さを、唾に溜めて吐き棄てる。
ついに口の中も切れたか……。
全身が重い。
蓄積されたダメージと疲労は、とうの昔に限界に達してずっとピークのままだ。
上がった呼吸も、ちっとも回復しなくなっている。
だがな……まだ半分だ。
経験上、人間の本当の限界は、限界を感じた所から倍は持つ。

なあ、そうだろ……？俺の身体よ！
「チッ……しつけえ野郎だ……坂上の事もこうやって倒したのか？」
「まあ……そんな所だ」
「なるほどな……だがよぉ、ウチに上等切った以上、負けてやるつもりはねえんだよ！」
台詞と共に田嶋が走り出す。
「ああ……とことんやろうじゃねえか！」
そして俺もまた、すぐさま地を蹴った。
最早色々やれる程身体は動かない。
ただ渾身の一撃を……叩き込むのみだ。
「ウオォォォォォ！！」
「ハァァァァァ！！」
「そこまでだ！！」
両者の間合いに入り攻撃が放たれようとしたまさにその時、勝負を制止する女の声が川原に響いた。
男達の視線が一斉に声の方向を向く。
俺達もまた拳を寸での所で止め、土手の上に現れた影に目を向けた。
それは……単車に跨った特攻服姿の女、後藤田だった。
「あんた達まだやってたのかい！？サツがこちらに向かってる！とっとと逃げるんだよ！」

第二章　4月19日春の嵐

中学の頃
俺達の代にも巧い奴が居た
俺達の代のキャプテンだ
そいつは俺達とは別の小学校から来た奴で
地元では強豪で有名なクラブチーム出身で
学区の関係で俺等の代ではただ一人ウチの中学に来ていた奴だった
技術は群を抜いていて
顧問からの信頼も篤く
三年の試合にもベンチ入りし
一個上の代になると守備の要として定着していた
でも俺等の代になると
そいつが居ても俺達は勝てなかった
昔程大差で負ける事はなくなったが
そいつが守備にかかりっきりでは同じ事だった

相変わらずのワンサイドゲーム
点を取れなきゃ勝てる訳が無かった

それは夏期大会に続いて秋期大会も予選敗退が確定した帰りの事だった
校門の所で俺達は隣の中学の連中に声をかけられた
キャプテンと同じ強豪クラブチーム出身の連中が主力で
県大会の常連で
毎回優勝候補に挙げられる強豪校だった
近い事を理由に何度か練習試合をしてきたが
いつも圧倒され勝負にならなかった
あまりにも実力差が有り過ぎた
そして強かった先輩達が引退したこの頃には
練習試合すら組まれなくなっていた
この日の大会も余裕で予選突破した奴等は

キャプテンに向かって親しげにこう言った

「お前も災難だな……道一本こっちに住んでりゃ、そんな惨めな思いしなかったのに」

「何だと!?」

無言で苦笑するキャプテンに代わって

反射的に血の気の多い副キャプテンが向かって行こうとする

だが俺はいきり立つその肩を掴んで止め

「やめとけ……行くぞ」

「相手にするな」と大人の態度で皆を促すしかなかった

奴等の言った事は事実だから

どんなに悔しくても

どんなにムカついても

俺達が弱い事は

足を引っ張っていたのは事実だったから

情けなくて

申し訳なくて

だからこそせめて恥の上塗りだけはしたくは無かった

「……強くなろう……！」

そう決意を口にする他なかった……

4月19日（土）

「どうしたのその顔!?わかった!敵方のスパイと戦ったのね!どうだった!?手強かった!?」

左目の上に大きな絆創膏をつけた俺の顔を見るなり、あやちゃんは勝手に妄想を暴走させながら詰め寄って来る。

伊達に戦場の傍らで育っていない様だ。

もっと怖がられたり、心配されると思っていたんだが……こんなに瞳をキラキラされるとはさすがに予想していなかった。

「いや、さすがにスパイじゃないけどね……なかなか手強かったよ。20人くらい居たし」

「おおっ！さっすが師匠！一個小隊を一人で撃破したのね！！」

いや、軍隊でも無いから！

「まあ、俺の事はいいから、ストレッチ始めよう」

「イエッ・サー！」

シュタッと直立不動になって敬礼して見せるお茶目な弟子の可愛らしさに思わず吹き出すと、ビキッと全身に痛みが走った。

結局昨日の決着は、後藤田の報告に土手の上に居た奴らが散り散りになって逃げ出した事でうやむやとなった。
俺も河原沿いを歩いてその場を離れたが……警官の姿は見ていない。
ひょっとして……助けられた……のか？
まずそう思った。
もちろん負けるつもりは無かったが、明らかな劣勢だった事もまた事実。
それを見兼ねて彼女が助け舟を出してくれた……と思えなくも無い。
もっとも、河原で一時間近く喧嘩してれば通行人に通報される事もあるだろうし、たまたま出くわさなかっただけで警察が動いていた事は事実なのかもしれないが……。
それに、あそこで水入りにする事は、奴等にとっても悪くない落とし所だった。
元より無名の俺に勝とうと奴等に大した益は無く、もし田嶋までが負ければそれこそ宮沢グループは終しまいである。
奴等と敵対している勢力は多い。
俺と共倒れなんて事になって喜ぶのは、そいつらだけだろう。
冷静にそういった諸々の状況まで見越した上で、熱くなった男達を一言で収め、あわよくば俺に恩を売ろうとしての策だったとしたら……あの姐さん、やはり相当のキレ者の様だ。
まあ、そんな人が居ると判っただけでも大収穫か。
あの有名な宮沢グループの実力を肌で知り、そんな相手にも己の力が通用する事を知った。
そしてまた、これで俺の名も上がるはずだ……。
この勝負、ほぼ目的を果せた俺の勝ちだろう。
身体はそこら中打ち身と筋肉痛でガタガタだったが……。

風が唸り声を上げ、木々を大きく揺らしている。
空を覆い尽くす黒雲は巨大な生物の様に蠢き、今にも襲いかかってきそうだ。
「そろそろ上がろうか」
「え？もう？」
風になびく髪を押さえながら、あやちゃんが不満気に訊き返してくる。
今日も受身の練習だけしかさせて無いし、いつもより早目に切り上げ様としているのだから無理も無いか。
しかしだ。
「風も強いし、いつ降って来てもおかしくないからね。今日は止めておこう」
「……イエッ・サー」
彼女もそれはわかっているのだろう、俯きながらも素直に聞き入れてくれた。
「一人じゃ危ないから、自転車で送ってくよ」
「……うん」
そう提案すると、少しだけ笑ってくれた事が救いに思えた。

チャリを押しながら道の悪い林道を抜け、舗装された道に出た所で先に自転車にまたがり、彼女を荷台に座らせる。
俺が言うより早く、あやちゃんがしっかりと腰に手を回して背中にくっついてきたので、「行くよ」と合図してからゆっくりと発進させた。
「実はあたし……自転車ってほとんど乗った事無いの」
「そうなの？」
「うん……ほら、あまり一つの所に長く居た事無かったし、あま

り荷物になる様な大きな物は持たないようにしてたから……」
「そっか……自転車が結構貴重品なトコも有るだろうしね」
「うん……だから、こうやって誰かと自転車に二人乗りするのに、チョット憧れてたかも」
「そ、そう……」
彼女がより一層身体を密着させてきたので、不覚にも微かに背中に感じていた弾力を意識してしまい、思わず声が上ずりそうになる。
まだまだ発展途上だが、将来間違いなくいい女になるだろうな……。
謀不二子みたいになったりして。
グラマラスな女スパイとなったあやちゃんを想像してついニヤけてしまう。
その時、そんな俺を嗜める様に強い風が吹付け、バランスを崩しそうになって片足をついた。
「風強いから、危ないと思ったら降りていいからね」
「うん……そうするつもりだったから大丈夫！」
信頼されてるんだかされてないんだか……と苦笑する他無い。
本当に有望な子だ。
頭の回転も速いし度胸も有る。
体力面の強化と少し慌てんぼうな所を治せば、スパイになるのも夢では無いかもしれない。
だがまあ……やっぱり俺は……。

彼女の案内で辿り着いた所は……山奥の巨大な工事現場だった。
確か都心部からのバイパスを通す為に、森を切り開き、いくつもの山をぶち抜く大規模な工事をしていると聞いてはいたが……。
彼女を傷付けるかもと思い態度には出さないよう努めたが、正直……嫌な感じがすると言うか、妙に落ち着かない場所だった。

そう……確かここは……！

「私のお父さん、今はここに臨時で雇われてて、住み込みで働いてるの。それで、私も一緒にって訳」

プレハブ小屋の前で、あやちゃんは少し伏し目がちに話始める。

医者だと言うから、働いていると言っても作業員では無く、保険医の様な物だろう。

小屋にもそれらしき事が扉のプレートに書かれていた。

「ああ……そうなんだ」

「それでね……その仕事も明日で終りなの……」

唐突に告げられた話に面食らいながらも、そこまでで彼女が言わんとしている事は理解出来た。

嵐が通過するのは明日の朝方だと天気予報は言っていたし、用意とかもあるだろう。

“あの場所”で逢えるのも、今日で終りと言う事だ。

「そっか……」

込み上げてくる感傷は言葉にならず、僅か数日だが自分を師と呼んでくれた少女の頭を撫でた。

そういう事なら、予め言ってくれればもっと色々な事を教えたのに……。

一瞬そんな考えもよぎったが、直ぐにそれを否定する。

元より俺には基本的な事以外教える気は無かった。

これから先、彼女がどんな道を歩むのかは判らない。

だからこそ、早い時期から変な癖をつけるべきでは無いだろう。

それに何より……。

「あやちゃん、確かにスパイとかって一見格好良いけど……」

俺は彼女の両肩を掴み、真剣な眼差しでみつめながら本心を口にした。

「えっ？」

「確かに優秀でなければ成れない物だけど、所詮人に雇われ命令に従うだけの存在だ。常に命を危険に晒し、足手まといなら見捨て

られ、不要になれば始末される、ちっぽけな存在だ」

「……」

「君ならもっと凄い物になれる！俺達平和ボケした日本人には絶対出来ない経験を沢山してきたんだ。そんな人間が、一生何かに縛られ、従うだけで終わろうとするな！」

「……師匠！」

最初は驚いて戸惑っていた彼女が、俺の言葉が終わるなり首に飛びつく様にして抱きついてきた。

「凄いね師匠は……まるで本当のお師匠様みたい！」

「あのね……」

「ふふっ……師匠の事は絶対忘れないよ！」

「ああ。俺もだ」

爪先立ちして首にぶら下がる彼女を支える様にして、俺も彼女を抱きしめる。

今まで辛い体験を沢山して、悲惨な光景を幾度も見てきた彼女の存在その物を噛み締める様に。

願わくば、この子の今後の未来が幸多い物である様にと念じながら……。

あやちゃんとの別れを済ませ、古河パンでも戦勝報告をして秋生さんからカツサンドを奢ってもらってから帰宅した俺は、直ぐにパソコンを立ち上げた。

今朝行ったあの工事現場の事がずっと気になっていたからだ。

俺の記憶が確かなら……。

そして検索して出てきた物は、やはり俺の曖昧だった記憶を裏付ける物だった。

数ヶ月前に起きた落盤事故や周囲で起きた土砂崩れのニュース。
それによって大幅に遅れた工期と、それを取り返す為の夜通しの強行作業。
そして工事の安全性や事故の再発を危ぶむ声……。
嫌な予感がした。
もし、只でさえ工事によって軟弱になっている地盤に大雨が降ったら……？
考えただけでもゾッとする。
「いや……まさかな……」
流石に嵐になると判っているのに、工事を続ける訳がないだろう……。
思い浮かんだ最悪の光景を、打ち払う様に首を振って否定する。
あの子はこれまでの分も幸せにならなくちゃいけないんだ。
そう切に願いながら、何も無い事を祈る他なかった。

第二章　4月19日明けない夜

午後から降り出した雨は、午前0時を回っても尚やむ気配をみせず、散弾の様に雨戸を打つ音が、暗い部屋に鳴り響いていた。
そろそろ行くか。
布団から起き上がり、明かりをつける。
いつもより二時間も早いが、この暴風雨だ。バイト先に行くだけでも時間がかかるだろう。
それに……仮眠を取ろうにも、結局眠れなかったしな……。
やはり、バイトが終わったら見に行ってみよう。
合羽を着込みながらそう決めて、俺は嵐の中へと飛び込んだ。

新聞配達は気楽な仕事だが、こう言う日は本当に地獄だ。
風雨で視界はほとんど利かず、突風に煽られ何度も原付を倒されそうになった。
それを堪えるたびに、傷めた右手に痛みが走る。
だが、倒れればそれこそ大惨事だ。
長靴は入ってきた水で既に用を為さず、合羽から染みてくる雨と自分の汗で全身グチャグチャ。
それでも峠を過ぎたのか、後半は雨脚が弱まった為大分楽にはなった。

ようやく激闘を終え戻った頃には、いつもの仕事終りと大差が無い時間になっていた。
振舞われた缶コーヒーの礼もそこそこに、昨日行った工事現場に

向かう。
逢おうとは思わない。別れは済ませたんだ。
ただ、遠目からでも何も起きていない事が判れば、それでいい。
杞憂で終われればそれが一番善いんだ。
夜が明けたのか、世界は漆黒から薄暗い灰色へと変わっていた。
風は大分収まり、シトシトと降り続く雨も次期上がるだろう。
明けない夜は無く、やまない雨は無い。
そんな在り来たりな言葉に、今はすがりたかった。

だが、明けない夜が無い様に、やまない雨が無い様に、変わらぬ物などこの世に無い。

あまりにも様変わりしていた。
そこには何も無かった。
昨日そこに建っていたはずのプレハブが、彼女が住んでいると言っていた小屋が、周囲の地面ごと抉られた様に無くなっていた。
愕然として、次に本当にここだったかと周囲を何度も確かめ、来た道を戻る。
いや、落ち着け。
逃げてどうなる？
それよりやるべき事があるだろう？
現実から逃避しようとする精神を、冷静な脳がたしなめた。
そうだ……まだ希望は在る。
上の人間なり、現場の責任者なりが賢明なら、こんな事態を予測し、非難させたのではないか？
俺は携帯を取ろうといつものズボンのポケットに手を伸ばした。

しかしそこには、携帯どころかポケットすらない。
って、合羽着てた。
バタバタと合羽の上から携帯を探し、そういえばとジャンパーの内ポケットからそれを発見する。
濡れない様にここに入れていたんだった。
かけるのは当然警察だ。
「バイパスの工事現場で地滑りが起きてます。知り合いが巻き込まれたかもしれないので、確認してもらえませんか？」
つとめて冷静に、知っている事と、そこから見える範囲の情報、最後に自分の名前と携帯番号を伝えて電話を切った。
「危険だから絶対に近付かないように」
そう言われたが、指をくわえてぼうっと連絡待ちをしていても意味は無い。
今まで事故の通報が無かったとしたら、事の大きさに俺への連絡どころじゃなくなるだろう。
最悪、この町始まって以来の大惨事だ。
人を探して、もっと奥に行ってみるか？
それとも……？
地肌が剥き出しになって滑り易くなっている足元を確認しつつ、縁から下を見下ろす。
緑の雑木林の中に出来た茶色い急斜面の一本道。
それ程高くは無い……薄暗い中でも何とか下が見える。
が、降り続く雨と、薙ぎ倒された木々が邪魔で細部までは判らない。
プレハブは原型を留めておらず、土砂の中に大きな残骸が散らばってるだけだった。
あの中に人が居たとしたら……？
絶望的だろう。
いや……家具の隙間にうまく入り込み、助かるって事もよくある話じゃないか。

他に非難していて元気で居てくれたなら、それでいい。
徒労に終わってくれるなら、それがいい。
俺は周囲を見渡し、降りられる場所を探した。

ぬかるみに足を取られ、何度も途中の樹に身体を打ち付けながらも、何とか下まで来れた。
着膨れしていたおかげで大した怪我は無いが……この合羽はもう着られそうもないな。
まあ、今はそんな事はどうでもいい。
茶色い山肌を目印に、鬱蒼とした森の中を進んでいく。
そして目的の場所に辿りついた時、ずっと危惧してきた悪夢がそこに在った。
土の中から覗く、羽根の様な白いリボン。
激情が一気に込み上げ、全身の血を沸騰させる。
「あやちゃん!!」
駆け寄って呼びかけたが、反応は無い。
彼女の身体は辛うじて頭は出ていたが、肩から下が土砂で埋り、見えている頭部と肩口は赤く染まっていた。
「あやちゃん!!」
もう一度呼びかけ、手袋を脱いで彼女の首筋に指を当てる。
俺の手も相当冷えていたハズだが、それでも尚ゾッとする程の冷たさだった。
だが、弱いが脈はまだ有る。
まだ、かすかに息は有る。
わずかに肩が動いている。
「もしもし!地滑りにプレハブ小屋が巻き込まれて、中の人が生き埋めになってる!救急車!いや、レスキュー隊を呼んでくれ!早く!!……はっ!?バイパス工事の所ですよ!!細かい住所なんて

知りませんよ!!関係者じゃないんだから!!とにかく、来れば判るから!!レスキュー隊でも自衛隊でも何でもいいから早く来てくれ!!」

一方的にまくし立てて電話を切った。

こんな森の中に救急車なんて来れる訳もなく、この小さな町にレスキュー隊やら何やらが常駐しているとは思えない。

そしてこの悪天候と森と山に囲まれたこの場所で、はたして迅速な救助が出来るのか?

降り続く雨と空を睨む。

天よ、これがあんたの意思か!?

この子はもう、十分辛い目に遭ってきたじゃないか!

砲撃や銃弾に怯えながら、生きてきたじゃないか!

目の前で人が血を流し、息絶える陰惨な光景を散々見せられてきたんじゃないか!

それなのに……この仕打ちはなんだ!?

瞳を閉じ、拳をグッと握り締める。

まだだ!!

まだ終わらせてたまるか!!

「あやちゃん……待ってろ。今出してあげるから……」

合羽の上着を雨よけとして彼女の上に被せ、俺は土を掘り起こし始めた。

氷の様に冷たくなった彼女の身体をジャンパーで包み、抱き抱えながら俺は森の中を急いだ。

怪我人をむやみに動かしてはいけない。

それくらいの事は知っている。

だとしても、いつ来るか判らぬ助けを待っている暇は無いと判断した。

出血が酷い。掘り出した彼女の衣服は血でべとべとだった。
事故からどれだけ経ったのかも判らない。
道具も無く、素人には布で縛る以上の止血も出来ない。
そういえば、このプレハブは医療施設だったな。
それを思い出し、ざっと散乱している物の中から使えそうな物を探したが、壊れていたり、雨で濡れていたりで役に立ちそうな物は無かった。
なら、上に助けを求めるか？
試しに呼びかけたり、音をたてたりしてみたが、反応は無かった。
上に誰か来ていたのなら、俺達の存在に気付くはずだ。
まだ警察すら来ていないのか？
その事に怒りすら覚えたが、この急斜面を彼女を抱えて上に登るのは、それこそ危険だろう。
結局、俺にはこうするより他に無かった。
上から見下ろした時に、割と近くに車道が見えたのを覚えている。
そこまで出て、通りすがりの車に病院まで乗せてもらえれば……。
そんな何の確証も無い望みを信じ、木々を避け、枝をかわし、彼女を気遣いながらも出来る限りの速度で走った。
中学の頃にやっていた、木を敵に見立てた森での特訓がこんな所で役立つとは……。
「お兄……ちゃん……？」
全神経を走る事に費やしていた中、かすかに聞こえたその声に足を止める。
わずかに開かれた彼女の片目が、俺を見つめていた。
「あやちゃん！」
「どう……して……？」
「喋らないで。大丈夫。今病院に運んであげるから」
「……」
それで俺の言わんとしている事が伝わったのだろう。彼女が眠るように瞳を閉じる。

意識が戻ったんだ。大丈夫。助かる。
そう確信し、俺は再び希望に向かって走り出した。

森を抜け、車道を歩き始めてから、どれだけ経っただろう？
そもそも、彼女を発見してから、どれだけ経った？
あの場で助けを待った方が良かったんじゃないのか？
体力はとうに底を尽き、その焦りが疑惑を生み、疑惑が気力を蝕む。
車道に出ても、車はなかなか捕まらなかった。
そもそも通る数自体が少なく、普通は手を挙げたくらいじゃ止まってはくれない。
てか、彼女を両手で抱えて、どう手を挙げるんだって事に今更気付いた訳で……。
それに救急車を呼ぼうにも、ここが具体的にどこなのかが判らない。
迂闊だった……。
だが、今更後戻りも出来ない。
隣町の病院まで、何としても彼女を届けるんだ。
この辺りは山間の森林地帯で人気がほとんど無いが、人通りの多い所に出ればきっと……。
その時ふと、目の前に伸びる道の向こうから対向車が来るのが見えた。
今までは道が曲がりくねっていたから見通しが悪かったが、この距離なら……！
俺は意を決し、あやちゃんを背で庇いながら対向車の前に進み出た。
けたたましいクラクションと、甲高い急ブレーキの音。間近に迫る車の気配。

「馬鹿野郎!!死にたいのか!?」
次いでドアが開くと同時に若い男の怒声。
振り返ると、車は手を伸ばせば届く程の距離で止まっていた。
成功だ。
「お願いします!!この子を隣町の病院まで連れて行って下さい!!」
「何?……乗れ!!」
男は俺の懇願を聞いて、胸に抱いているあやちゃんを一目見て察してくれた様で、直ぐ様降りてワゴン車の後部ドアを自ら開けてくれた。
「ありがとうございます!!」
「何があった!?」
俺が乗り込むと、男は後部ドアを締めて運転席に乗り込み、発進させると同時に訊いてくる。
「地滑りです。この子は家ごと巻き込まれて生き埋めに」
「何だって!?どこでだ!?」
「この近くのバイパス工事の現場近くです」
「バイパス工事だと!?近い事は近いが、結構距離が有るぞ?そんな所からその子を抱えてここまで来たのか?」
「はい。この子の父親が医者で、住み込みで働いてたんです。それでこの子も一緒に……」
「そうか……とばすぞ!その子を落とすなよ!」
「はい!」
それは言葉少なく短いやりとりだったが、不思議とこの人ならと信頼出来た。
もっとも、今の俺には誰であろうとすがるしか無かったのだが……。

男は軽快に車をとばし、日曜で道が空いていた事もあって、順調に病院に近付いていた。
もう直ぐだ……これで助かる！
そう半ば安堵して、あやちゃんを抱きしめたその時だった。
「お兄……ちゃん……ありが……とう……」
彼女が薄っすらと目を開けながら、そう言って笑ってくれた。
「ああ……病院までもう直ぐだ……」
「うん……でも……もう……十分だよ……」
「十分？何言ってるんだ？」
その言葉に俺は何か不吉な予感を覚え、苦笑しながら訊き返す。
何か彼女の様子がおかしい。
「あたし……あのまま……一人……ぼっちで……死んじゃうと……思ってた……でも……お兄ちゃん……来てくれた……冷たい……土の中じゃなくて……こんなに……暖かい……」
「ああ。わかった。わかったから、喋っちゃダメだ」
「嬉しかった……あたし……幸せだよ……お兄ちゃん……みたいな……優しい人に……出会えたから……」
「あやちゃん？」
「でも……ごめんね……もう十分……だか……ら……ありが……と……」
「あやちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」
目を閉じた彼女の鼓動が止まった……。

第二章　４月２０日　卒業

こんにちは。初めて、そして最後のお手紙を書きます。

俺は貴方の歌が好きでした。

金が無くてＣＤは買っていませんが、

知り合いやレンタルショップから借りてきて、

テープにダビングして、

マイベストを作って聴いていました。

毎日のように、

朝から晩まで、

時に共に口ずさみながら。

俺はずっと孤独でした。

友達や家族が居ても

寂しくて仕方がなかった。

虚しくて、

切なくて、

きっと俺を解ってくれる人間なんて居ないんだと、

ずっと思ってた。

でも、

貴方の歌を初めて聴いた時、

自分と同じ感じ方をしている人と初めて出会えた気がした。

会った事も無いけど、

自分は一人じゃないと思えた。

それからはずっと、

貴方の歌を聴いていました。

貴方が居なくなってからもずっと……。

しかし今日、

ついにテープが擦り切れて中でぐしゃぐしゃになりました。

ショックでした。

でも同時に、

背中を押された気がしました。

「もう俺から卒業しろ」と、
言われた気がしました。
だから、
もう貴方の歌は聴きません。
例え一人になっても、
俺は俺の道を歩んでいきます。
だけど、
たまに口ずさむ事くらいは許して下さい。
俺にとって貴方の歌は、
もう魂の一部だから。
今までありがとう。
さようなら。
願わくば貴方の今が、
幸せでありますように。

４月２０日（日）

目覚めると、そこは一面白の世界だった。
白い天井と、四方を囲む白いカーテン。
病院……か。
じょじょに記憶が鮮明になってゆく。
ああ……そうか……。
病院の入り口で力尽きたんだったな……。
右手に感じる違和感。
視線を向けると点滴がぶら下がっていたが、それだけでは無かった。
何かに固定されていて、指が動かせない。
やはり骨にひびでも入っていたのだろう。その治療を受けて包帯でグルグル巻きって所か。
左肘をついて上体を捻りながら起こそうとする。
だがその瞬間、ビキッと痛みが走り、支えきれず布団に落下する。
身体全体が鉛の様に重くて力が入らない。
重症だなこりゃ……。
多分重度の疲労と筋肉痛だとは思うが、暫くまともに動けそうも無い。
それでも、このまま寝ている訳にもいかないんだ。
せめてナースコールをと意を決し、痛みを堪えながら錆びついたポンコツロボットの様に軋む体をゆっくりと動かしてゆく。
と、その時、サッとカーテンをくぐって誰かが入ってきた。
「ああ、丁度良かっ……」
天の助けと反射的に声をかけようとするも、その人物を視認して言葉を失う。

それは入ってきた人がナースでは無かったからでもあるが、その人がここに居る事自体が予想外過ぎて直ぐには理解出来なかったからだ。

「あっ、良かったぁ。気がついたんだ」

呆然とする俺の顔を見て、彼女はそう言って微笑む。

それはとても懐かしくて、昔と変わらず綺麗で、だからこそ余計にバツが悪かった。

「伊吹さん……どうして……！？」

「うん。祐君……ああ、貴方達をここまで運んだ人ね。彼とは知り合いで、自分は仕事だから貴方達の様子も見て欲しいって頼まれたの。そうして来てみたらビックリ！こんな所でオーキ君にまた会えるなんて思ってもみなかった」

本当に心から再会を喜んでくれている彼女に、気まずさと罪悪感を覚える。

まさか、そんな繋がりがあろうとは……。

いくら狭い町だからって……一体どんなバツゲームだよ？

それでハッとする。

そんな事を気にしている場合じゃない。

「あの、あの子は？俺が連れてきた女の子の事は何か知っていますか？」

俺の問いに、公子さんは表情を曇らせ顔を伏せる。

そして、真剣な眼差しで俺をみつめ、ゆっくりと今の状況を説明してくれた。

腕の中で命が消えてゆく。

ありがとう？

もう十分？

何だよ……それ？

もう十分って何だよ!?
「どうした!?」
込み上げる猛烈な怒りと悲しみに支配されそうだったその時、脳に直接響いてくる様な男の声がそれを止めてくれた。
後部座席の異変を察したのだろう。運転していた男性がバックミラー越しに訊いてきたのだ。
そうだ。
今嘆き悲しむのは、死を受け入れたのと同じ事だ。
「すみません……とにかく急いでください！」
「……わかった」
まだだ。
まだ抗える。
諦めてたまるか！
こんな結末……受け入れてたまるか!!
立ち上がって抱えていたあやちゃんをシートに寝かし、彼女に着せたジャンパーの前を開く。
そして呼吸を整え瞳を閉じる。
黙想……。

ＴＶや漫画で何度も見てきたから、知識は有る。
一度人形相手だが、単車の免許の講習で実技も経験した。
だからやれるはずだ。
いや、やるんだ。
必ずやってみせる。
想起するのは、あの日の光。
それはどこか温かで、優しくて……。
あれが何だったのかは判りようも無いが……。
ひょっとしたら、あれが人魂とか、人の想いの塊なんじゃないかと、ずっと感じていた。
だとすれば、それはきっと……報われなかった想いだろう。

届かず、行き場を失った想い達。
もしそんな物が在るのなら、今一度力を貸して欲しい。
この子は凄い娘なんだ。
幼い頃から父親と戦地を巡り、自分も命の危険に晒されながら、多くの不幸を、悲しみを、死を見つめてきたんだ。
平和ボケした日本に居たんじゃ死ぬまで味わえない体験を沢山してきたんだ。
そしてやっと……彼女はこの国で暮らせるんだ。
普通の平和ボケした学生として、平和な日々を過ごせるんだ。
あるいは、ぬるま湯の中で怠惰に暮らす日々に、幻滅するかもしれない。
それとも……それでもやっぱり平和が善いと笑うだろうか？
彼女の事だ。エキセントリックな刺激を求めやっぱりスパイになると言い張るかもしれないな。
そうしたら、師匠としては意地でも止めないと。
この子には可能性が有るんだ。
無限の未来が有るんだ。
こんな所で、死なせちゃいけない。
死なせてたまるか！
思い浮かべた光の球に手を伸ばし、それを掴む。
奇跡の光よ、この手に宿れと……。

「ふっざけんなぁ！！」
重ねた両手を彼女の胸に当て、そのまま全力で押し込む。
肋骨が軋みを上げ、座席のクッションの反動で四肢が浮き上がる程に。
想いの全てを、彼女の心臓にぶつける様に。
「もう十分じゃないだろ！？これからじゃないか！！」
３０回の胸部圧迫の後、顎を上げて気道を確保し、鼻をつまんでゆっくりと息を吹き込む。

それを二回繰り返した後、再び立ち上がって胸部圧迫。
「日本で暮らすんだろ?大好きな漫画も読み放題だし、友達だってきっと沢山出来る!」
逝くな!
逝くな!
逝くな!!
「あやちゃんは可愛いから、きっとモテるぞ!彼氏だっていくらだって出来る!」
届け!
届け!
届け!!
「前に話してた男の子とも、また会えるかもしれないだろ?気にしてた背だってこれから伸びるし、胸だってきっと大きくなる!セクシーになって俺を誘惑してくれるんじゃなかったのか!?前は格好つけてやらんでいいとか言ったけど、本当は滅茶苦茶期待してんだぞ!まだ何もして無いじゃないか!勝手に一人で満足してんじゃねえ!!戻ってこい!!戻ってくるんだぁぁぁぁぁぁ!!」

あの工事現場での事故については、時間の経過と共に様々な事実が判明し、マスコミも臨時ニュースとして大々的に取り上げているらしく、町は騒然としているらしい。
開発中のバイパス工事現場での大規模地滑りにより、行方不明者十数名。
雨は上がったとはいえ森に囲まれた現場には重機が入れず、二次災害の恐れもあり捜索は難航を極め、現在の所被害者で生存者として発見されたのは唯一人。
そしてその一人も……今尚生死の境を彷徨っていた。
「奇跡的に一命は取り留めた物の、今も昏睡状態が続いていて危

険な状態らしいの……」
愕然として左手で顔を覆う。
どうしてこんな事に……！？
後悔しかなかった。
やはりあのまま、救助を待った方が良かったのかもしれない。
素人が下手に手を出したから、無闇に動かしたから、後先考えず連れ出して時間がかかったから、余計に悪化させたんじゃないのか？
てか、バイトなんか行かずに、もっと早くあの場所に行っていれば手遅れになる前に救い出せたんじゃないのか？
いや、そもそも……俺はあの場所が危険だと、知っていたじゃないか。
それなのに、未然に防ごうとしなかった。
どうせ何を言っても聞く訳無いと、かけ合おうともしなかった。
きっと大丈夫だろうと根拠も無いのに楽観視する事で、迫る不幸から目を逸らそうとした。
その結果がこれだ！
「クソッ……！！」
またか！
また俺は……予測出来た事すら防げてないじゃないか！
一体何度……何度同じ過ちを繰り返すんだ！？
何度己の無力さを呪うんだ！？
何度運命に打ちのめされるんだ！？
「オーキくん……」
不意に左手にやわらかな手が重ねられ、握られる。
伊吹さんの温かさが……優しさが伝わってくる。
でも……、
「すみません、伊吹さん……ご迷惑をおかけしました……あんな強引な止め方したにもかかわらず、快く乗せてくれた知り合いの方にも、本当にすまないと思っています……」
「そんな……私も祐君も迷惑だなんて少しも思っていないよ」

「ありがとうございます……お礼の方は、また後日させて下さい……」

「本当に気にしないでいいから……病院には私も用があったから来たんだし……」

「すみません……一人にさせて下さい……」

「……そう」

慰めてくれていた手が離れていく。

きっと……きっとまた、彼女を悲しませてしまったかもしれない。

でも……今はその優しさが辛かった。

俺には、その優しさを受ける資格なんて無いから……。

「あ、ご両親にはもう警察から連絡がいっていてご存知だから。大分前に帰られたけど、先程来られて着替えを置いていかれたわ」

「そうですか……何から何まですみません……」

「ううん。いいの……ゆっくり体を休めてね」

「はい……」

彼女が去って、途端にずっと堪えていた激情が溢れ出す。

「クッ……ッ……！！」

力が欲しい……。

運命に抗う力が……！

世界を変えられる力が……！！

第二章　4月21日　熱し難く冷め難い

4月21日（月）

「あれ？ねぇちゃんもう行くの？」
玄関で靴を履いていると、後ろから声をかけられた。
弟の鷹文だ。
今起きてきた所なのだろう。パジャマ姿のままで、頭には寝癖がついている。
いまだに松葉杖をついている姿が少し痛々しくて、チクリと胸が痛んだ。
「ああ、おはよう鷹文。すまない。少し寄る所が有るから、今日も朝食は先に済ませてしまった」
「別にいいけど……寄る所ってにぃちゃんとこ？」
「どうして私があいつの家に寄らないといけないんだ？」
私がそう答えると、鷹文は少し驚いている様だった。
無理も無い。
私達が袂を分かった事を、こいつにはまだ話してはいないのだから。
「違うの？じゃあ、どこ？」
「うん。実は知り合いに遅刻の常習犯が居てな。これからそいつを起こしに行ってやろうと思っているんだ」
「えっ……？それって男？」
「ああ。知ってしまった以上、知り合いとしては見過す訳にはいかないからな」
「へ～……」
鷹文は目を丸くして感心している様だった。
まあ、昔の私からは想像も出来ない事だろうからな。
「それじゃあ行ってくる。お前も早く学校に行く用意をしないと

遅刻してしまうぞ」
「ああ、うん。行ってらっしゃい」
最後に姉らしい事を言って家を出た私は、名簿で調べた岡崎の家へと向かった。

昇降口についた頃には遅刻ギリギリの時間だった。
まったく、春原なんて起こしに行ったからだ。
友達思いなのは分かるが、あんな奴放っておいてもいいじゃないか。
靴を上履きに履き替えていると、何やら人だかり出来ている事に気付く。
恐らく掲示板に貼られた報道部の校内新聞だろう。
先週これを見た時は、あいつと一緒だったな……。
それはとても楽しくて、新たな発見の連続で、それでいて何か大きな物に包まれている様な……温かくて穏やかな日々だった。
生まれて初めて知った感覚。
でも今となっては、知らなければ良かったとさえ思う。
「同じ日、同じ時に死ぬんじゃなかったのか……？」
ただ寂しいと言うだけでなく、自分の身体の一部を失ったかの様な喪失感。
心にぽっかり穴が空くとは、こういう事なのかもしれないな……。
首を振って感傷を払う。
記事の見出しには『生徒会選挙、迫る』の文字が躍っていた。
もうすぐ選挙期間が始まる。
早く気持ちを切り替え、選挙に集中しないといけないな。
いつまでも落ち込んではいられない。
私は、その為にこの学校に来たのだから。

「智代ちゃ～ん、ちょといいかなぁ？」
三限目が終わると、教師と入れ替わる様に教室に入ってきた実理に、人気の無い特別教室棟の方に連れ出された。
一体どうしたのだろう？
校内新聞なら一限目の後にもらったばかりだし、急な用件でもあるのだろうか？
「どうしたんだ実理？」
「うん～。今日オーキ君お休みしてるんだけどぉ、智代ちゃん何か知らない？」
「あいつが……学校を休んでいる？……そうなのか？」
実理の問いに、逆に驚かされる。
正直、今はあまり出されたくない話題だった。
何故か少し後ろめたい気がして、彼女の顔を真っ直ぐに見られない。
「智代ちゃんも知らないかぁ……オーキ君のクラスの子にも訊いたけどぉ、土曜日もお休みしたみたいなの」
「そうか……いや、私も金曜に少し顔を合わせたきりだ」
「そっかぁ……」
落胆した様に溜息をつくと、何故か実理は私の顔をじっと見つめてくる。
「な、何だ？まだ何かあるのか？」
「智代ちゃんさぁ……オーキ君と喧嘩でもした？」
「！」
ギクリとして言葉に詰る。
「金曜日の体育の時も急にあんな事があったし……あの時は何でもないって言ってたけどぉ、やっぱりオーキ君と何かあった？」
「だから何でも……いや……概ねそんな所だ」
始めは誤魔化そうとしたが、直ぐに思い直して観念する事にした。

こんなにも私を心配してくれている彼女を、これ以上誤魔化すのも悪い気がしたんだ。
「やっぱりそうなんだぁ……」
「……訊かないのか？」
折角観念したのに次が来ず、思わず自分から催促してしまう。
「ん？何を？」
「だから、何で喧嘩になったのか？とか」
「あ～あ。どうしてぇ？」
「それがわからないんだ……火曜日の放課後、いきなり『お前とはもう一緒にやっていけない』って言われたんだ」
「火曜日だったらぁ、やっぱり智代ちゃんが不良を撃退した事じゃないかなぁ？」
「私もそう思って、金曜に謝ったんだ……危ない事をして悪かったって……でも、『お前は何もわかってない』って言って、許してはくれなかった……」
「う～ん……そっかぁ……」
二人して黙り込む。
お前は何もわかっていない。
そんな事を言われても、どうしろと言うんだ？
何が悪かったのか、はっきり言ってくれれば治し様もあるのに。
「……正直、私のイメージだとぉ、オーキ君て滅多に怒らない人って言うかぁ、怒った所を見た事無いんだよね……大抵の事は謝れば許してくれるんだけどなぁ……」
「……もう、いいんだ。きっとあいつは、私に厭きてしまっただけなんだ」
実理の言葉を聞いて、はっきりとそれを確信した。
誰に対しても怒らない人間が怒ったという事は、もう私の事が嫌いになったんだ。
嫌いになったから、許す気なんてもう無いんだ。
「それは無いとおもうよぉ」

どんどんネガティブになっていく私の思考を、実理はあっけらかんとした笑顔で一蹴する。
「むしろ逆じゃぁないかなぁ？智代ちゃんの事を本気で思っているから、怒ったんだと思うよぉ」
「そんな事は無い！嫌いじゃないなら、謝ったら許してくれるはずじゃないか！！」
思わず声を荒げてしまった。
しかし実理は一瞬驚きながらも、いつもの柔和な笑顔を向けてくる。
「厳しい態度をとったのも、きっと智代ちゃんにそれだけ期待しているからだと思うよぉ」
「期待しているのなら、さよならなんて言うはずは無い」
「う～ん……それは……」
私の反論に、彼女も少し困った顔をする。
私だってあいつを信じたい。
でも、あいつは……。
「やっぱり、あいつはもう私に厭きたんだ……元々厭きっぽい性格だと言うしな」
「オーキ君が厭きっぽい？それは無いよぉ」
結論になると思って言った言葉だったが、またも一笑に付されてしまう。
「オーキ君てぇ、確かに何にでも一生懸命になれるタイプじゃないけど、その分一度“やる”と決めた事には人一倍情熱を燃やせる人だと思うよ。本人も自分の性格を一言で言い表すなら、『熱し難く冷め難い』て言ってるし」
「熱し……難く？『熱し易く冷め易い』じゃないのか？」
「うん。日本人は熱し易く冷め易い人が多いけど、自分はその逆のなんだって。流行や周囲に流されず、自分自身で考え感じた様に生きられる人間で在りたいんだって」
「自分で考え感じた様に……確かにあいつもそんな様な事を言っ

ていた。でも、じゃあ、どうして厭きっぽくて無責任なんて言われてるんだ？」

「ん～、それは自分の気の進まない事は、始めからやる気が無いからじゃないかなぁ？」

「そうじゃない。同じクラスの女子から聞いたんだ。あいつは一年の球技大会で決勝までいきながら、『厭きた』と言って帰ってしまい、その所為でチームは大敗してしまったって」

「あ～あ、うん、クラスが違ったから詳しい事はわからないけど、それは私も知ってるよぉ」

「相手チームはとても強くて予選で一度負けていたから、勝ち目が無いと思って逃げたんじゃないかとも言っていた……これでは厭きっぽくて無責任だと言われても、仕方が無いじゃないか？」

「ん～ん……」

そうだ。

あいつは大事な決勝戦でもすっぽかす様な奴なんだ。

でも、顎に指をついた可愛い仕草で暫く考えていた実理はにっこりと笑うと、こんな提案をしてきた。

「じゃあ、他の人からも話を聞いたらどうかな？」

「他の奴からも？」

「うん。だって智代ちゃんがその話を聞いたのは、そんなに沢山の人からじゃないでしょぉ？」

「あっ、ああ。名取からだけだ」

「じゃあそれは、あくまで名取さんの主観であって、事実じゃないかもしれないし」

「名取が嘘を言っていると言うのか？」

「そうじゃないよぉ。名取さんは嘘をつく様な人じゃないと思う。でも、報道に関わってるから解るけどぉ、当事者って意外と客観的に事態を把握出来てる人って少ないし、まして自分に都合の悪い事を話したがる人ってほとんどいないから……」

「……名取が話してない事実があると言いたいのか？」

「もしくはぁ、もう忘れちゃってるとかぁ。だから、もっと色んな人から話を訊いてみたらどうかなぁ？智代ちゃん、お昼時間有る？」

「ああ。今日は特に予定は無い」

「じゃあ、お昼に有紀寧ちゃんの所に行ってみようよ。有紀寧ちゃんも一年生の時オーキ君と同じクラスだったし」

「宮沢の所か……」

正直、あの場所に行くのはあまり気が進まないが、仕方が無い。

昼休みに実理と会う約束をして、私達は自分達の教室に戻った。

第二章　4月21日　稀によくある話

お昼休みになり実理と合流した私は、購買で昼食を買ってから宮沢に会う為に旧校舎の資料室に向かった。
前に来た時の事を思い出す。
あの時は、ガラの悪い他校の生徒達が沢山隠れていた。
「なあ、実理……あいつらがまた居たらどうするんだ？」
不安に思って並んで歩いている実理に訊いてみる。
先週はあいつにはぐらかされたが、いくら宮沢の友人だからと言って、今日も居たら見過す訳にはいかない。
しかし実理はあっけらかんと答えた。
「大丈夫だよぉ。あの人達は、有紀寧ちゃん以外の人が居る時は隠れてるはずだからぁ」
「何だそれは……？この前はぞろぞろと出て来たじゃないか」
「あれはぁ、智代ちゃんに驚いて声出しちゃったから仕方なかったんだよぉ」
「じゃあ、例え姿は見えなくても、またどこかに隠れているかもしれないと言う事か？それは覗かれているみたいで嫌だ……」
「そうだねぇ。あんまり際どいガールズトークはぁ、やめといた方がいいかもしれないね」
「ん？どうしてだ？女の子が女の子らしい話をする分には別にかまわないんじゃないか？確かに男が聞き耳立てているかもしれないと思うと嫌だが、それはどんな内容でも同じ事だ」
「ふふっ、そうだねぇ」
何故か可笑しそうに笑う実理を不思議に思っている内に、目的の資料室の前についてしまった。
ノックをしようとした手を止め扉越しに気配を探っていると、代わりに実理が叩いてしまう。
「はーい。どうぞ」

直ぐに中から声が聞こえた。
中で人が激しく動いている様な気配は無い。
良かった。奴等は居ない様だ。
内心胸を撫で下ろしつつ教室の扉を開けたのだが、しかしそこには宮沢以外にもう一人別の人間の姿があった。
その人はうちの制服を着た長い黒髪をお下げにした、この前の連中とは月とすっぽん、いや、それではすっぽんが可哀相か……とにかく上品で落ち着いた感じの女生徒だった。
「ああ、坂上さんとみのりんさん、いらっしゃいませ～」
こんな人もここに来るのか。
そう思って呆けていると、宮沢が笑顔で迎えてくれる。
「こんにちわぁ有紀寧ちゃん。あっ、後藤田先輩、お久しぶりです」
「あら、貴女は確か報道部の……」
「門倉実理で～す」
「ああ、門倉さんね。そちらは……」
実理が後藤田と呼んだ女生徒は、私の方に視線を向けるなり立ち上がって近寄って来る。
「貴女が坂上智代さん？」
そう問われて軽いショックを受ける。
まさかこの人も私の過去を知っているのか？
「そうだが……私の事を知っているのか？」
「そりゃあ、あれだけ派手な事をしていればね。校内新聞にも出ていたし」
「ああっ、そういう事か……」
よかった。それなら仕方がないかとほっとする。
しかし、先客が居たのか。
これではまた今度にした方がいいかもしれないな。
そう思っていると、
「それじゃあ、お邪魔みたいだから私はもう行くわね」

後藤田の方から先にそう言ってくれた。
「すみません先輩」
「貴女の方が先に来ていたんだ。お邪魔したのは私達の方なのだから、気を使わないでくれ」
「いいのよ。有紀寧ちゃんの顔見に来ただけだし。それに有紀寧ちゃんに同じ学年の女友達が出来る事は、私としても嬉しいしね」
「マチさん！もう、女の子のお友達もちゃんと居ますって……」
「ふふふっ、じゃあ、またね有紀寧ちゃん。坂上さんと門倉さんもその内またゆっくりお話しましょ」
「すまないな。ああ。その時は是非」
「今度先輩の取材もさせて下さいねぇ」
「取材も何も、私部活も何もやってないわよ？」
「“我が校の綺麗なお姉さん特集”っとかぁ」
「ふふっ、それは遠慮するわ」
実理達と軽いジョークを交えたやりとりをしながら、後藤田は颯爽と去っていった。
「……この学校には、あんな出来た人も居るんだな……」
きっと“育ちがいい”とは、ああいう人の事を言うんだろう。
私はただただ感心する他なかった。
だが、実はそんな彼女にも裏の顔が在る事を知ったのは、これより大分後の事だった。

「一年生の時の球技大会の事……ですか？」
テーブルにランチを広げ、宮沢の淹れてくれたコーヒーで一息ついた私達は、宮沢にここに来た目的をきりだした。
「ああ……良かったら話してくれないか？」
「いいですよ。あくまで私の知っている範囲でよろしければ、ですが……」

そう前置きをしてから、宮沢はゆっくりと語り始めた。

そうですね。あの時の事を順を追って説明するなら、まず、種目ごとのメンバー決めの所から話さないといけないと思います。

去年の球技大会の種目は、男子はサッカーとバスケ、それと男女混合のバレーボールだったんですが、私達のクラスにはバスケ部とバレー部が二人、サッカー部が一人居たんです。

大会には現役で部活をやっている人はバスケが二人、バレーとサッカーが三人までしか出られないルールがあるので、部員が居るクラスはそれだけ有利な訳です。

そこで、クラスの中で見込みの有りそうなバスケとバレーに運動の得意な人を集めようって話になったんです。

「ん？オーキの種目はサッカーだったんじゃないのか？」

「はい。川上君はサッカーでした。ただ、唯一クラスでサッカー部だった中野君は『たまには他の種目がやりたい』と言って、バスケに入ったんです」

「ちょっと待て、それじゃあサッカーには部活をやってる奴が居なくなってしまうじゃないか」

「はい。でも、中野君に文句を言う人は居ませんでした。それだけ皆サッカーには期待していなかったと言う事です」

「他のメンバーもぉ、余っちゃったあんまり運動が得意じゃない子ばっかりだったしねぇ」

「えっ！？そうか……バスケとバレーに戦力を集めるという事は、そういう事か……でも、オーキは決勝までいったんだろ！？」

「まあまあ、順番に聴こうよぉ」

「あっ、ああ……すまない。続けてくれ」

皆がサッカーに期待していなかった理由の一つに、組み合わせが悪かったのもあるんです。

大会は四クラス総当りの予選と、トーナメントの本選があるんですが、サッカーの予選では優勝候補の二年生のチームと同じリーグだったんです。
サッカー部のキャプテンを含む三人が居て、戦力的に頭一つ抜け出ていました。
そして大会当日、初戦でその二年生のチームと試合だったんです。

「勝ったのか？」
「いえ……負けてしまいました。１０対１で」
「１０対１！？サッカーの事は詳しくはないんだが、あまりいい結果じゃないんじゃないのか？」
「ん～、超ボロ負けだねぇ」
「超？」
「サッカーで二桁得点なんて凄く珍しいんじゃないかな？普通の試合はどんなに戦力差が有っても大体５点以下、１点も入らない事も珍しくないくらいだよぉ。球技大会の予選は前後半１０分づつだしねぇ」
「そんなに酷い結果なのか……オーキは何をやっていたんだ？」
「凄く頑張ってたよぉ。オーキ君はゴールキーパーやって、何度も何度もシュート止めてたし」
「それなのに、そんなに点を取られてしまったのか？」
「そりゃあぁ、ず～～～～～と相手チームの攻撃だったからねぇ。オーキ君でも流石に何十本も自由にシュートを打たれたら、全部止めるのは無理だよぉ」
「そんなに弱かったのか……一体それでどうやって決勝まで行ったんだ？」

川上君が文字通り孤軍奮闘していましたが、前半だけで５失点。
丁度バスケの試合が始まった事もあって、クラスの大半の人たちの興味はそちらにいってしまい、ほとんどの人達はサッカーに見向

きもしませんでした。
でも、大会初日が終わってみると、クラスメイト達は耳を疑い、沸き立ちました。
力を入れていたバスケだけでなく、サッカーも予選二位の成績で予選を突破していたんです。

「凄いじゃないか！……でも、何があったんだ？他の相手がもっと弱かったのか？」
「それは無いよぉ。他のチームも二人くらいはサッカー部は居たしぃ」
「多分、川上君がキーパーではなく、前に出てきたからだと思います」
「それだけで、そんなに変る物なのか？」
「オーキ君の本職は元々ディフェンダーだからねぇ。それにオーキ君以外ゲームをコントロールして攻められる人が居なかったからぁ」
「攻められないんじゃ負けるに決まっているじゃないか！どうして最初からオーキが前に出て来なかったんだ？」
「多分、作戦なんじゃないかなぁ。他のチームを油断させる為の」
「油断……？」

私もそう思います。
敵を欺くなら、まず味方からとも言いますし。
反撃の狼煙は、実は初戦から上がっていました。
終了間際に味方のゴール前で相手からボールを奪った川上君は、そのまま一人で攻めて行って相手をどんどん抜きさり、ついには相手のキーパーまで抜いて点をきめてしまったんです。

「それは凄いのか？」
「ん～、プロの試合でやったら、歴史に残っちゃうだろうねぇ」

「そんなに凄い事なのか!?そんな事が出来るなら、ちゃんとやれば勝てたんじゃないのか?」
「それは、あくまで相手が油断しきっていた隙をついたから出来たと、川上君も言っていました」
「そういう物なのか……?でも、１０点も差がついていたんだろ?１点ぐらい取り返しても、焼け石に水じゃないのか?」
「それは大分違うと思うよぉ。例え一点でも一矢報いた事も、一桁差で抑えられた事も気分的には大きいし、それがスーパープレイなら尚更だと思うよぉ」

そうですね。みのりんさんの言う通りだと思います。
実際、あれだけ大差で負けたにも拘らず、サッカー組の人達はやる気を失ってはいませんでした。
そして、そこから快進撃が始まったんです。
とは言っても、どの試合も一つとして楽な試合はありませんでした。
戦力的に厳しく、常に押され気味で。
でも、川上君を中心に、チームは一丸となって相手の猛攻を懸命に防ぎ続けました。
そして少ないチャンスを物にして、接戦を制してゆく。
その様はとても劇的で、ついには決勝まで勝ち進んだ彼等を“奇跡”とすら言う人も居ました。
でも、午後に決勝戦を控えたお昼休みに、あの事が起きてしまったんです。

「オーキが帰ってしまったんだな?」
「はい。でも、それにはちゃんとした理由があったんです。始まりは、中野君が自分も決勝戦に出ると言い出した事でした」
「ん?そいつは確か、自分は出ないと言っていなかったか?」
「はい。しかしバスケが準々決勝で負けてしまった事もあって、

出る事は出来たんです」
「そんな事許されるのか？」
「メンバーチェンジ自体はルールで禁止はされていないし、どこのクラスもやってたからねぇ」
「はい。その事は、当事者である川上君達の意見を聞く事も無く、クラスの雰囲気的に決まってしまいました。そして、だったら運動の得意な人達で固めようって話になって、結果、川上君ともう一人のサッカー経験者だった足立君以外入れ替える事になってしまったんです」
「何だそれは！？そこまで戦ってきたのはオーキ達なのに、他の人間が勝手に決めるなんておかしいじゃないか！」
「その通りですね。でも、一年生のチームでの決勝進出と言う快挙にクラスはすっかり盛り上がってしまい、何が何でも優勝しようって雰囲気になっていたんです……そして、そこで初めて川上君は立ち上がって口を開きました。『あきたから帰る』それだけを言って、本当に帰ってしまったんです」
「どうしてあいつは文句を言わないんだ……？そんなのおかしいって、言えばよかったんだ」
「多分、言っても無駄だと思ったんじゃないかなぁ？そんな話になっちゃったら、そこまでやってた人達はやる気無くなっちゃっただろうし」
「だからって……」
「そうして、川上君抜きのベストメンバーを組んだ私達のクラスは、順当に勝ち進んできた予選の初戦で負けた二年生のチームと決勝を戦い、１０対０という校史に残る大敗をしました」

第二章　4月21日　それぞれが背負う物

壁にかけられた秒針の音だけが教室に響いていた。
オーキは悪く無い。
いくら勝つ為とは言え、それまで一緒に頑張ってきた仲間を勝手に代えられたんだ。
仲間思いのあいつが怒るのも当然だろう。
でも……、
「やはり私は、厭きられた……いや、愛想を尽かされたのだな……」
結局、それは同じ事だった。
むしろ、あいつが厭きっぽい訳では無く、私が失望させたのだと思い知らされただけだった。
「愛想をつかされた？」
「オーキ君とぉ喧嘩しちゃったみたいなの……」
不思議そうな顔をする宮沢に、代わりにみのりが珍しく神妙に答えてくれた。
「まあ、そうだったんですか……よろしければ、事情を詳しく聞かせてもらえませんか？」
「……詳しくも何も、先週の火曜日の放課後に、一方的に別れを切り出されたんだ……さよならだって……」
「先週と言うと……ああ、バイクに乗った方達が来られた時の事ですね……？」
あまり訊かれたくはないが仕方ない。
無言で頷くと、宮沢は納得した様に一度頷いてからまるで諭すかのように穏やかに話し始める。
「確かにあれは、川上君は怒るかもしれません。私も教室から見ていましたが、とても危険だと思いましたし、大勢の人が見ている前で闘ってしまった事も、よくなかったと思います。何か学校側か

ら罰を受けたりはしませんでしたか？」
「いや、何も……事情を説明したら、教師はわかってくれたんだ……でも、あいつは……」
「そうですか……ひょっとしたら、だからこそ尚更厳しい態度を取ったんじゃないでしょうか？坂上さんに反省してもらう為に」
「反省ならしたし、ちゃんと謝ったんだ！なのにあいつは、『お前は何もわかって無い』って、『被害者面すんな』って私に言ったんだ！前は自分が悪いみたいな事を言っていたくせに……訳がわからない……！」
思わず荒げてしまった声を押さえながら、直ぐに直情的になってしまう自分が恥ずかしくなって宮沢から視線を逸らす。
きっとこんな事だから、あいつに愛想を尽かされたんだろう。
すると、一瞬の間の後みのりが「あ～あ、そういう事かぁ」と感嘆の声を上げた。
「何がそういう事なんだ？」
「つまりぃ、『被害者面するな』って事はぁ、『自分が加害者になる事も考えろ』って事じゃないかなぁ？」
「私が……加害者に……？」
「私もそう思います。もちろん坂上さんに怪我が無かった事が一番ですが、お咎め無しで済んだのも、相手の方達にもそれ程怪我が無かったからじゃないでしょうか？」
「先に仕掛けて来たのはあいつらだから正当防衛だ。それにちゃんと手加減くらいしている」
私が加害者呼ばわりされるのは心外だ。
早とちりした私は思わずムッとなってしまう。
だが、次に宮沢が語った話に、私は強い衝撃を受ける事となる。
「坂上さん。私には兄が居たんです」
「ん？ああ、そう言えばそんな話をしていたな。あいつらもお兄さんの友達だとか。それがどうかしたのか？」
「兄は……バイクの事故で亡くなりました」

「えっ……！？」

一体何を言われたのか、直ぐには理解出来なかった。

あるいは、脳がその単語を認識したくはなかったのかもしれない。

なくなった……？

死んだって事か？

宮沢のお兄さんが……！？

バイクの事故で……！？

「兄がバイクに乗っていて運転を誤ったのか、それともバイクに追突されてしまったのかは分かりません。事故の事は誰も話したくない様で、訊いても皆さん口を閉ざしてしまうんです。ただ、バイクと言うのはそれだけ危険な物だと言う事です。乗っている側であっても、倒れた時に打ち所が悪かったり、下敷きになってしまう事だって有ります」

伏目がちで辛い話をしながらも微笑を絶やしていない宮沢が、かえって痛々しかった。

私が鷹文を亡くしかけた時と同じ、いや、それ以上の悲しみを、彼女は味わっていたのか。

「もちろん、一番悪いのは脅しとは言えバイクで人に向かっていった相手の方達です。でも、例えそうだとしても、もし誰かが大怪我を負ってしまっていたら、そして万が一最悪の事態が起きてしまっていたら、果たしてお咎め無しで済んだでしょうか？周りの人達も、それまで通り坂上さんに接する事が出来るでしょうか？何より、坂上さんはご自分を許せますか？」

「……」

直ぐには言葉が出なかった。

もし相手を死なせてしまったら？

そんな事、微塵も考えた事も無かった。

悪いのは、自分勝手で他人の迷惑を考えない奴等の方で。

そんな奴等がどうなろうと、知った事ではなかった。

痛い目に遭うのは、自業自得とさえ思っていた。

「あのね。智代ちゃん……これは私の知ってるおじさんの話なんだけど……」

宮沢の話に呆然としている私に、今度はみのりがそう前置きしてから語りだす。

「もう１０年くらい前の事なんだけど……その人は車を運転中に子供をはねてしまったの」

「えっ……！？」

子供を……はねた……！？

鷹文が車の前に飛び出した時の光景が脳裏に甦り、私は蒼白になってうろたえた。

「信号を無視して自転車で飛び出してきたから、避けようが無かったみたいで……それ程スピードは出てなかったんだけど、倒れた時の打ち所が悪くて……その子は亡くなってしまったの」

まさか鷹文をはねた人の……？

初めそう思ったが、続きを聞いて違うと気付く。

そういえば、１０年前と言っていたんだった。

「それでね……そのおじさんがどうなったかと言うと……勤めていた会社を首になって……相手の遺族への賠償とかもあったから、とても暮らしていけなくて……それが原因で次第に奥さんともうまくいかなくなって、結局、離婚して家族はバラバラになっちゃった……」

それは、不慮の事故で全てを失った男の話だった。

みのりの表情は普段の明るい彼女からは考えられない程暗く、どこか寂しげだった。

「でもそのおじさんは、今でも罪の意識に苛まれてて……遺族への償いを続けてる……オーキ君はきっと、智代ちゃんを守りたかったんだよ。それは単に他校の人達からってだけじゃなくて、あらゆる物から、智代ちゃんの可能性を……未来を守りたかったんだよ……」

「私の……未来を……？」

その瞬間、あいつが今までかけてくれた言葉の波が私を包んだ。
そうだった……。
オーキは、いつも私の事を考えてくれていた。
私の事をあれこれ心配してくれていた。
それは、他でもなく私の願いを叶える為。
私の未来を守ろうとしてくれていたんだ。
初めて出会ったあの日も……。
いきなり私を騙して喧嘩を売ってきたあの時も……。
あいつは私に普通の女の子で居ろと言ってくれた。
その為に、どんなに私が攻撃しようとも、倒れずに居てくれた。
この学校に来た目的を話した時も、真剣に考えてくれて、私の覚悟を試しながらも、最後は協力してくれると言ってくれた。
そして、徹夜までして今後の計画や必要な情報をノートにまとめてくれた。
仲間を増やそうと、みのりや宮沢を紹介しようとしてくれた。
あいつは本当に全力で私を手伝おうとしてくれていたんだ。
それなのに……私はいつしか、あいつが隣に居る事が当たり前だと思っていた。
何があってもずっと傍に居てくれるのだと、あいつの優しさに甘えていたんだ。
そして私は、全校生徒が見ている前で軽率に闘ってしまった。
一歩間違えれば、取り返しのつかない事になっていたかもしれないのに。
「私は……あいつに裏切られたとさえ思っていた……私の目的に協力してくれると言ったのに……何があっても私の味方でいてくれると信じていたのに……どうして『さよなら』なんて言うんだと……でも……先にあいつの想いを裏切る様な真似をしたのは、私の方だった！あいつは、オーキは常に私の為を想って色々してくれていたのに、私は……自分の事しか考えていなかったんだ！最低だな……愛想を尽かされて当然じゃないか……！」

あいつが言った通り、私は何もわかっていなかった。
昔あんな思いをしたと言うのに。
あの頃の私じゃないと思っていたのに。
危険な行動でみのり達を心配させた。
オーキの想いを考えもしなかった。
その自覚さえなかった。
何も変われていないじゃないか！
同じじゃないか！
他人の事なんて考えない奴等と。
自分の事しか考えない奴等と。
一体どこが違うと言うんだ！？
「大丈夫だよぉ。オーキ君は智代ちゃんの事を想って怒ってるだけだからぁ、きっと仲直りできるよぉ」
「うっ……うわぁぁぁぁぁん、みのりぃぃぃっ！！」
立ち上がったみのりが、背後から包むように抱きしめてくれる。
その温もりが心に染みて、寸での所で堪えていた堰を決壊させた。

「落ち着いたぁ？」
「ああ……すまない。取り乱してしまった……」
私が泣き止むまで抱きしめてくれていたみのりが離れていく。
目の前には、宮沢が淹れ直してくれたコーヒーが湯気をたてていた。
二人とも優しいイイ奴だな。
私の過去も知っているし、そして宮沢は……。
そこでふと思い当たる。
ひょっとしてオーキは、宮沢のお兄さんの事を知っていて私と引き合わせてくれたのか？
似た想いを共有出来る存在として……。

あいつなら有り得る。いや、あいつの事だ、きっとそうなのだろう。

ああっ、ダメだ。

感動したらまた目頭が熱くなって……。

「それでぇ、オーキ君も協力する事になってた智代ちゃんの目的ってぇ、何かなぁ？」

みのりの問いで気が紛れる。

助かった……と思って隣を見ると、大きな眼鏡の奥の大きな瞳を好奇心でキラキラさせた、いつもみのりがそこに居た。

少しだけ不安を覚えた。

「……お前達になら教えてもいいだろう。どの道すぐにわかる事だからな。二人はこの学校の前の桜並木が伐られてしまう事は知っているか？」

「うん。知ってるよぉ」

「はい。とても残念ですが……」

「そうか……私がこの学校に編入してきた目的は、その伐採計画を止め、桜並木を守る事だ。その為にまず、今度の生徒会選挙に生徒会長として立候補しようと思う」

「……」

「……」

胸を張って答えると、二人は余程驚いたのか、無表情で言葉を失っていた。

それも仕方がないだろう。私の過去を知る二人なら、尚更驚くはずだ。

しかし暫くすると、何故か二人は苦笑を浮かべて顔を見合わせる。

「智代ちゃ～ん……それはオーキ君怒るよぉ」

「えっ？」

「生徒会長目指してる人が、皆の前で喧嘩したらダメだよぉ」

「さすがにそれはちょっとマズイですね」

「わ、わかってる！だから、その事はもう十分反省したんだ！」

第二章　4月21日　奇跡の種明かし

お昼休みが終わる少し前に二人と別れ、私は自分の教室に戻った。
ある連中から話を聞く為だ。
教室を見渡して、机で話している三人組を見つける。
一人は知らない顔が居た。
他のクラスの生徒なのだろう。三人の中で一人だけ立っているその男は、スラリと背は高いが、後は眼鏡をかけている事くらいで他にこれといって特徴も無い男だった。
と言うか、三人とも眼鏡だな。
まあ、別におかしな話をする訳ではないのだから、聞かれてもかまわないだろう。
「すまない。少しいいだろうか？」
「えっ？」
「うおっ！坂上智代じゃん！！」
声をかけると、その知らない奴にフルネームを呼ばれて驚かれる。
失礼な奴だ。
こういった反応には慣れてはいるが、当然いい気はしない。
と、そう思っていたのだが、
「初めまして！中村です。よろしく！」
突然両手で私の手を握ろうとしてきたので、反射的に後ずさって避ける。
どうやら悪意は無い様だが、いきなり女の子の手を握ろうとする奴があるか。
おかげで、何となく話辛くなってしまったじゃないか。
「……で、坂上何か用？」
「あっ、ああ。お前達に訊きたい事がある」
その空気を察してか、座っていた……ええっと……名前が出て来ないが、とにかくオーキの友人の一人が促してくれた。

「何？」
「オーキが学校を休んでいるようなんだが、お前達何か知らないか？」
「えっ？そうなの？」
まずは気になっていた質問をしてみたのだが、三人は驚いて顔を見合わせるだけだった。
何も知らないと言う事か。
「土曜日から休んでいるようなんだ」
「へえ……そう言えば土日集まろうかって話も無かったね」
「……お前達、オーキの友達なんだろう？気にならないのか？」
「いやあ、てっきり……」
そう言って、座っている二人は意味有り気に私を見る。
てっきり……何だと言うんだ？
「えっ？どういう事？まさか、やっぱり川上君と坂上って付き合ってるとか！？」
そう言う事か……。
一人慌てた様子の長身の男の言葉で、ようやく腑に落ちる。
「別に私とオーキは付き合っている訳では無い……」
自嘲で目を伏せながら本当の事を答えた。
すると、長身の男は何故か胸を撫で下ろす。
「よかったぁ。じゃあ、坂上は今誰とも付き合って無いんだね？」
「ああ。それがどうかしたのか？」
「だったら、僕にもチャンスが……」
「いや、中ちゃんには無いから」
「無いね」
「ええっ！？そんなぁ……」
二人からつっこまれ、中ちゃんと呼ばれた長身の男は勝手にうなだれていた。
「まあ、後で携帯ででも本人に訊いてみるよ……って、坂上はオーちゃんの携帯の番号知らないの？」

「携帯!?……ああ、そういえば、すっかり忘れていた……」
あいつと買った携帯電話の事を思い出す。
そういえば、買ったきり一度も使っていなかったな。
買った日は説明書を読んだりしていて遅くなってしまったから迷惑だろうとかけなかったし、次の日も学校でギクシャクしてしまったから、何となくかけ辛かったんだ。
そしてそれ以降は、電話どころでは無かった……。
「知ってるなら、自分でかけてみたら?」
「ああ。そうする事にする」
家に帰ったら、あいつにかけてみよう。
これでひとまず収穫が有ったな。
「……それだけ?」
「えっ?ああ、すまない。もう一つ訊きたい事が有ったんだ」
再び促されて、もう一つの目的を思い出す。
オーキに電話をかける事で頭がいっぱいになっていた。
「宮沢から聞いたんだが、お前達は一年生の時オーキと同じクラスで、球技大会の時も一緒だったんだろ?」
「うん」
「それで……お前達はどう思ってるんだ?その、決勝でのオーキ行動とか、他のクラスメイトに対してとか……?」
「決勝?ああ、あれね……」
他の生徒達の耳が気になって、語尾が小さく曖昧になってしまった。
横目でそれとなく周囲を窺う。
今の私の行動を、名取達が知ったら気を悪くするだろうか?
でも、どうしてもこいつらからも聴いておきたかった。
人の数だけ主観があり、例え同じ物事でも捉え方は人それぞれ違う。
そんな当たり前の事を、私は解っていなかった。
知ってはいたが、直ぐに忘れてしまう程度の認識だった。

だから自分で確かめもせず、簡単に人の話を鵜呑みにしていたんだ。

名取はオーキを、決勝を直前で投げ出した無責任で飽きっぽい男だと言った。

宮沢の話では、それまで一緒に戦ってきた仲間を外された事に抗議する為に、勝利の栄光を棄てた仲間想いの男だった。

じゃあ、実際にあいつと共に戦ったこいつらは、一体どう思っているのだろうか？

「まあ、しょうが無いんじゃない？それまで見向きもしてなかった人間に、急に決勝になって横から口出されたら、そりゃ怒るよ」

「……えっ？」

思わず私は訊き返していた。

“仲間”と言う単語が一つも出なかったからだ。

私はまた、オーキは仲間や己の道義を貫く為に試合を放棄したのだと思い込んでいたのだ。

「直前でいきなりメンバー代えて、勝てる訳無いしね」

「待ってくれ！その……よりチームを強くする為にメンバーを代えたんじゃないのか？」

「あ～、まあ、普通はそうなんだろうけど、オーちゃんに言わせたら『多少動けたって、所詮サッカーの素人は大した戦力にならない』らしいよ」

「よく解らないんだが……そう言う物なのか？」

「まあ、要するにバスケとかバレーと違って、サッカーって基本的に足でやるじゃん？だから他のスポーツと勝手が違うし、フィールドも広いから経験者でないと“どう動いたらいいか”がまず判らないんだって。野球みたいにただ飛んできたボール捕ればいいって訳でも無いしね」

３人の中で一番仕切っている感じの奴の説明で何となく言いたい事はわかったが、それでも私は小首をかしげる。

「そうだろうか？私もサッカーは子供の頃に男の子に混じってや

った事があるが、ほとんど何も知らなくとも何とかなっていたと思う。それに、お前達だって本格的にサッカーをやっていた訳では無いのだろ？」

「まあ、そうなんだけど、少なくとも僕等はオーちゃんの戦術を理解してたから」

「戦術？」

「今、子供の頃は知らなくてもやれたつってたけど、それって戦術も何も無い草サッカーの話じゃん？で、球技大会も所詮学校行事だから、本気で戦術とかまで突き詰めてやってくる所は無い。それじゃあ上手い奴が多いチームが勝つに決まってる。だからオーちゃんは言ったんだよ。『アソシエーション・フットボールをすれば、例え戦力で劣っていても勝ち目はある』って」

「ん？アソシエーション？サッカーじゃないのか？」

「サッカーの正式名だね。ここでは“組織的なサッカー”って意味だろうけど」

「組織的な……それで勝てるのか？」

「実際決勝までいったし」

「ああっ、そうか……」

「まあ、もちろんオーちゃん個人の実力あってこそだったけどね。相手も動き回ってパスを回せる人間は数人だけだから、エースを経験者の足立君にマークさせて、僕等でパスコース潰して、後はオーちゃんが何とかするみたいな」

「何とかって……」

「いやぁ、しちゃうんだよあの人。結局、サッカー部でも1対1で抜けたの居なかったし」

「そうそう。本当に『カンナバーロ』に見えた時あったね」

「カンナバーロ？」

「えっと、イタリアの選手だっけ？」

「うん。イタリア代表の世界屈指のセンターバック。オーちゃん昔目標にしてたらしい」

「山ちゃんもサッカー結構詳しいよね」
「観るのは好きだからね」
「ああ、それと、球技大会みたいな試合は、きっちり守った方が勝つ……らしいよ」
「そうなのか？」
「草サッカーって、皆が皆攻めようとするか、あんまやる気なくて後ろに居るかのどっちかじゃん？本気で体張ってまで守ろうって奴は居ない。つまり、どのチームも守備はザルなんだよ。だから、皆できっちり守って、攻めあぐねて相手が前に出てきた隙をついてカウンターしかければ勝てるって訳」
「まあ、カウンターは割と国際試合でもオーソドックスな戦術だしね。イタリア伝統の“カテナチオ”とか」
「カテナチオ……？」
「“かんぬき”って意味で、まるで城門に鍵をかけた様な堅い守りと、そこからの速攻がアズーリ、イタリア代表伝統の戦術。オーちゃんもイタリアファンだから、真似したんだと思う」
「まあ、オーちゃんは格ゲーとかでも守り重視でカウンター狙いだけどね」
「ああっ、そう言えばそうだったな……」
あいつと戦った時の事を思い出す。
あの時もあいつは守ってばかりだったな……。
「そうか……お前達が決勝まで勝ち進めた理由は何となく分かった。でも、それだけの事が出来るんなら、決勝だって勝てたんじゃないのか？」
「いや、だからそれは無理だって。てか、ぶっちゃけ元のメンバーでも無理じゃね？って思ってたし。まあ、中野君だけ入れ替わるなら有りだろうけど、他は余計だったね」
「戦術に対する向き不向きも有るしね。ゲームでも戦士とかアタッカーばっかりじゃ勝てないじゃん？格下相手なら攻撃力で圧倒出来るけど、ボスとか格上とやる時はまず相手の攻撃を受けても崩れ

ない盾役とそれをフォローする回復補助役が居無いとダメだし」
「すまない。ゲームはあまり詳しくは無いんだ」
「ん～、運動が得意な奴って攻めたがるじゃん？でも、不用意に攻められると、そこに穴が出来てそっから崩れるから、それなら積極的に動かない人間の方がマシって事。事前に指示しても、ぶっつけ本番じゃ理解出来ないだろうし、何より守るの嫌がるしね」
「なるほど……では、やっぱりオーキは勝ち目が無くなったから見限ったと言う事か？」
「ぶっちゃけね。もちろん余計な口出しされて、それまで積み上げてきた物を台無しにされて怒ったってのもあるだろうけど」
「それまで一緒に戦ってきたお前達を代えられた事に、腹を立てたんじゃなくてか？」
「ん～、それも有るかもだけど、さすがに勝てると思ったらやってたんじゃない？『これだから物事を表層でしか判断出来ない奴等は困る』とか大会の後ゲーセンで言ってたし」
ズーーーーーン！！
「「「うお！？」」」
目の前が真っ暗になり、耐え切れず私は膝から崩れ落ちた。

家に帰ってからも、私の気分は沈んだままだった。
ぼんやりと携帯電話を眺めながら、昼休みにオーキの友人達から聴いた話を思い出す。
勝ち目が無くなったから見限った。
余計な事をされて、積み上げてきた物を台無しにされた。
表層でしか物事を判断出来ない奴。
全て私にも当てはまる事じゃないか！

見えかけていたあいつの事がまた解らなくなった。
いや、違うな。
私は自分に都合の良い答えを、それが真実だと思いたかっただけだった。
みのりや宮沢は励ましてくれたけど、やはり私にはもう……。
ブーン！ブーン！ブーン！ブーン！
「うわあ～～～ぁ！！」
持っていた携帯電話が突然震えだした。
「しまった！驚きのあまり放り投げてしまった！壊れていないか？」
これがバイブレーション機能と言う物か。
という事は……誰かからの電話がかかってきたって事じゃないか！
でも、私の携帯電話の番号を知っているのは……まさかオーキ！？
天井に当たって床に落ちた携帯電話を慌てて拾い上げ、急いで通話ボタンを押す。
「もしもし？私だ！オーキか！？」
「ええっ！？……何言ってんのねぇちゃん？僕だよ」
しかし電話から聞こえてきた声は、弟の物だった。
そう言えば、オーキの他にも家族には番号を教えてあったんだった。
「何だ鷹文か……どうしたんだ？お前も家に居るんじゃ無いのか？」
「いや、急いでたから、電話の方が早いと思って……それより、ねぇちゃんテレビつけてよ。〇チャンネル」
言われるままにほとんど視る事のないテレビをつける。
するとそこに映っていたのは、病院のベッドの上でインタビューを受ける男性の姿だった。
目元がモザイクで隠されていて、声も加工されている。
でも……まさか、この男は……！？
「これって、にぃちゃんじゃない？高校生のK君ってなってるし」

鷹文の言う通りＴＶの彼の顔の下には、『事故現場から女の子を救った高校生Ｋ君』と書かれていた。
間違いない。オーキだ。
でも、どうしてあいつが病院に……！？
事故現場……！？
まさか……何か事故に巻き込まれたのか！？
「ねぇちゃん？ちょっと、ねぇちゃん聞いてる？」
電話からの弟の声が聞こえない程、私はニュースに釘づけになった。

第二章　4月22日　死と再生の花

子供の頃Ｆ１が好きだった
一番好きだった選手は“音速の貴公子”
当時はＴＶ中継もよくやっていて
海外のレースが多いので時間が深夜だったりする事も多かったが
彼のレースみたさに頑張って起きていた
でも
あるレース中継の冒頭で
彼の事故が伝えられた
レース中に壁に激突したと言う
彼がクラッシュした瞬間の映像と
グシャグシャになった車体が何度も繰り返し映し出され
それでも彼はきっと大丈夫だと
クラッシュくらい日常茶飯事だと
はじめはそう思っていた

番組の途中で彼の訃報を伝えるニュース速報が流れた
彼のレースはもう永遠にみられない事を知った
それからＦ１はみていない

小学生の頃Ｋ－１をよくみていた
強くなりたかった俺にとって
それはとてもいいお手本だった
何度倒れても敗れても
不屈の闘志で戦う“青い眼の侍”
かくありたいと思った
でも
暫く彼の姿を見なくなった
大会にもまったく出て来なくて
どうしたんだろう?と思っていた
彼を見なくなってから一年以上経ったある日

彼が病気で死んだ事を知った
それからはＫ－１をみても
どこか物足りなくなった

“あの人”にとって恐らく現役最後のワールドカップが迫っていた
俺がサッカーを始めたきっかけとなった人だ
彼は天才的なイマジネーションと、それを可能にする神がかった
テクニックを持ち
ストイックな人格者で
祖国の至宝で
世界中から愛され
しかし監督にだけは嫌われた
彼は凄すぎたのだ
組織に彼を入れれば、チームは彼を中心にする他無い
監督の戦術も采配も無い

勝てば彼のおかげ

そして負ければ、彼を活かせなかった監督の所為

自分の手腕に自信を持っている監督程、彼を嫌った

加えて彼は怪我が多かった

それも仕方が無い

彼を止めるには、彼の身体を潰す他無いからだ

そういった要因からか

彼は代表から遠ざかっていた

それでもワールドカップでは

彼の出場を世界中が熱望した

彼もまたゴールラッシュで猛アピールをしていた

しかしまたも悪夢が彼を襲う

再び脚に全治6ヶ月の大怪我を負ってしまったのだ

ワールドカップどころか、選手生命すら危ぶまれた

終わった

誰もがそう思った

だが、それから僅か2ヶ月後

世界中は奇跡を目の当たりにする

彼はピッチに帰ってきた

常人の三倍の早さで怪我を克服して

いや、違う

奇跡なんて陳腐な物じゃない

これはいわば必然だった

誰もが諦めるであろうあの状況にあっても絶望せず

絶対の信念を持って治療とリハビリを続けた

あくまでその結果だ

“努力”

その言葉の本当の意味を教えられた

復帰早々ゴールを決めるその姿は

不死鳥その物だった

涙が止まらなかった
けれど
それでも
それでも彼が代表に呼ばれる事はなかった
一つの幻想が砕け散った

4月22日（火）

ガタが来てちゃんと閉まらなくなった雨戸の間から、光が差し込んでいる。
自宅で夜明け後に起きたのは、いつ以来だろう？
……まあ、新聞が休みの日はちょくちょくあるが……。
目覚まし時計の針は、もうじき一直線になろうとしていた。
軽く走ってくるか……。
ここ数日は古河パンにも顔を出していなかったしな。
そう決めて布団からでると、ジャージに着替えて家を出た。

日曜日に病院で目を覚ました俺は、そのまま一泊したのだが、そこで面倒な事が起きた。
事情聴取に来た警察と、どこからか俺の事を聞きつけたマスコミ

が病室にやって来たのだ。
正直、ＴＶに出るなんてゾッとする。
それでも……俺は話さなくちゃいけなかった。
俺の知っている事実を、伝えなければならなかった。
「あの事故は……天災では無く、明らかな人災です。あの場所の地盤が弱い事も判っていたし、あんな嵐の中でも避難せず、工事を続けた事は無謀以外の何物でも無いでしょう」
名前を伏せ、顔にモザイクをかける事を条件に受けたインタビュー。
それにあえて淡々と答える。
でも、これでいい。後は適当にメディアが煽ってくれるだろう。
『ずさんな安全管理が多くの命を奪い、彼女をあんな目に遭わせたんだ！！』
激昂してそう言ってやるのは容易い。
でも、それではダメだ。
感情で物を言っても、一時ほんの一握りの人から同情されるだけだろう。
あくまで論理的に、理性的に、そして現実的に、この町が抱える問題を明るみにする事が大切だ。
今は小さな火種を植えつけられればそれでいい。
それに点火して炎上させるのは、今では無く、俺でもない。
小一時間程して、ようやく彼等は帰って行った。
病室に一人になると、自嘲が込み上げてくる。
相変わらず……汚い男だ。
俺はあの子の身に起きた不幸を、逆に利用しようとしている。
多くの人命が失われた事故を、体制を壊す楔にしようとしている。
いや……。
ギリっと奥歯をかみ締める。
これは彼女の仇を討つ為でもあるんだ。
多くの犠牲に報いる為にも……ただの事故で終わらせてたまるか。

世界が不条理で理不尽だからと言って……泣き寝入りしてたまるか。
その為なら……俺は何だって利用してやる。
そう、あいつの想いさえもだ……！

寝込んだ後だけに、軽く汗を流すだけにしておこう。
そう思って“あの場所”に来たのだが……。
動けなかった。
身体が動かなかった。
『お兄ちゃ～ん！』
聞こえて来る、自分を呼ぶ少女の声。
『師匠～！』
元気に走り回る少女の姿。
『ありがとう…もう十分だよ……』
そして……腕の中で冷たくなっていく少女の命……。
一度瞳を閉じ、かつ目して感傷を振り払う。
まだ、あやちゃんは死んじゃいない。
彼女は今も戦っているんだ。
戦い続けているんだ。
俺も立ち止まっていられるか。
そう自分を叱咤する。
それでもやはり身体を動かす気にはなれず、結局そのまま古河パンに行く事にした。

さて……ここ数日顔を見せなかった事を、何と言って誤魔化すか……？

道すがらそんな事を考えていたのだが、

「いらっしゃ……おっ！？何だお前……もう退院したのか？」

店に入ると、おもいっきり拍子抜けした様な表情でそんな事を訊かれた。

入院した事を知られていた……！？

何故だ！？まさかインタビューでモザイクかかってなかったのか！？

「あの……俺が入院したって誰から……？」

「あん？お前のお袋さんからだが？」

またかあのババア……！

「早苗のパンを持って見舞いに行ってやろうかとも思ったが、丁度渚の奴も体調崩しちまってな……お前は大した事無えとも聞いてたし、『まあ、いっか』ってな」

それは渚さんに感謝せねば……って、

「渚さん、また体調悪いんですか？」

「ああ……いや、今回はただの風邪で、もう回復したから心配はいらねえ。土日ちょっと寝込んだだけで、昨日も学校に行かせたしな」

「そうですか……」

それを聞いてホッと脱力する。

今までが今までだけに、渚さんにとってはただの風邪でも油断は出来ない。

軽い口調で話してはいるが、秋生さんも相当心配していたんだろう。

「まっ、てめえは渚の心配よか、自分の心配してろ。怪我の方はもういいのか？」

「ええ……まあ……」
「そうか……」
秋生さんはどこまで俺の事情を知っているんだろう？
気になったが、それ以上訊かれる事もなかったので、俺も話さなかった。

先週の嵐で桜が全て散っている事は、遠目からでも判っていた。
それでも改めてこうしてその下を通ると、やはりどこか物悲しい。
でも、こいつらも……死んだ訳じゃないんだ……。
枝と幹だけになった裸の木々に、あやちゃんの姿が重なってみえる。
こいつらも生きている……伐られたりしなければ、また来年花を咲かせる。
そして彼女も……。
桜よ。
例え儚く散ろうとも、再び花を咲かせる死と再生の花よ。
俺がお前達を守ってみせる。
だから……あの子にお前達の生命力を分けてあげてくれ。
この木々を守れば、彼女もきっと目覚める。
何となくそんな気がして、心の中で祈った。

第二章　4月22日　負けられない理由

すっかり葉桜になってしまったな……。
学校へと続く坂の途中、私は今日も感慨で足を止めてしまう。
これは、弟や家族で見た思い出の桜ではないけれど、代わりに守ると決めた桜だ。
そして……あいつとの誓いの桜だ。
あの日の誓いを、私だけでも守り抜いてみせる。
『言葉より、行動で示すのが一番』
みのりや宮沢にそう励まされ、私は改めて決意した。
軽率な行動で招いた失態は、やはり行動で挽回する他無いだろう。
そうすれば、あいつもきっと……。
今はそう信じる他無かった。
そう言えば、あいつは大丈夫なのだろうか？
昨日のニュースでは、病院のベッドでインタビューを受ける青年の姿が度々放映されていた。
大規模な地滑り事故から女の子を救助した、勇敢な青年として。
本人の希望により、顔には目元にモザイクがかけられ、声も変えられていた。
でも、鷹文も言っていた様に、あれはあいつだ。
電話をしてみたがつながらなかったので確認出来てはいないが、私はそう確信している。
あんな事をする人間、出来る人間は、私の知る限りあいつだけだ。
『これは不慮の天災では無く、起こるべくして起きた人災です』
インタビューでそんな事を答えるのも、実にあいつらしい。
何より、昨日あいつは学校を休んでいた。
状況的証拠からも、あいつしか居ない様に思える。
鷹文はメールで直接本人に訊いてくれると言ってはいたが、私も自分で調べてみるつもりだ。

こういう事は、やはりみのりが一番詳しいだろうか？
「智代っ」
「ん……」
不意に名前を呼ばれてそちらを向き視線を少し上げると、そこには見知った顔があった。
岡崎じゃないか……今日はちゃんと遅刻せず登校して来たんだな。
感心感心。
それでこそ、昨日迎えに行ってやった甲斐があったと言う物だ。
「岡崎か。おはよう」
「頼みがあるんだ。ぜひとも、おまえの力を借りたい」
何だこいつは？会った早々藪から棒に？
まあ、それは何時もの事か。
そして、こいつの方から話しかけてくる時は、大抵ろくでもないあの男絡みだったな。
周囲を見渡したが、隠れているのかあいつの姿は見当たらない。
「またあいつが、良からぬことを考えているんじゃないのか？」
「違う。あの馬鹿は関係ない」
「本当か？」
「ああ」
「おまえの頼みなのか？」
「ああ、俺の頼みだ」
「そうか……仕方のない奴だな。おまえの頼みだったら、聞いてやらないこともない。言ってみろ」
「生徒会を変えてくれ」
朝からあの不愉快な黄色い頭を見ずに済んだ事に、内心ほっとして気をよくした私だったが、この男が言う事はやはり突拍子も無かった。
「よくわからないな……まだ私は、生徒会の人間じゃない。目指しているだけだ。そんな私に何をしろと言うんだ？」
「じゃ、まず、入ってくれ。今直ぐにだ」

「おまえは……」
あまりに無茶な言い分に、怒るよりあきれてしまう。
生徒会に入る順序を知らないのか？
私は岡崎に大まかな順序と日程を説明してやった。
「そうか……結構待たないといけないんだな……」
「後ひとつ付け加えてやろう。私が当選するとは限らない」
落胆している所に悪いが、私は一番肝心な事をはっきりと告げた。
もちろん、初めからダメだなんて思ってはいない。
ただ、厳しい戦いになる事は確かだ。
軽々しく約束出来る事では無いだろう。
「いや、おまえなら当選するって」
しかし岡崎は、事も無げにそう言った。
「根拠でもあるのか？」
「ない」
「だろ」
なんだ……何となくで言っただけか。
「でも、当選して生徒会入りしたら、変えられるんだろ？」
「そんなの事による。何を変えろと言うんだ？」
「この時期の部員募集を認めて欲しいんだよ」
「なんだ、部活を作るのか？」
「作るんじゃない。再建だよ、演劇部。昔あったんだ、この学校に」
「……演劇部？」
なんだ？役者にでもなりたいのか？
改めて岡崎の全身を値踏みしてみる。
「まあ、おまえは背も高いし、それなりに男前だからな……舞台映えはするかもしれないな。うん……とてもいいことだと思う。是非支援しよう」
どんな目的にせよ、それに向かって努力する事は大切だからな。
「いや、俺じゃない」

「え？違うのか？じゃ、誰なんだ？」
「あいつ」
振り返った岡崎が指差した方向に立っていたのは、意外な事に私にも面識のある女生徒だった。
「古河、来いよ」
「はい」
岡崎に呼ばれて駆け寄って来るなり、その人は私に向かって深々と頭を下げる。
「おはようございます。坂上さん」
「ああ、おはよう……ございます。古河さん」
「って、知り合いかよ！」
岡崎がつっこんでいたが、それはこちらの台詞だ。
「はい。坂上さんとは先週お会いしました」
「いや、知り合いだったんなら、最初から話に加わればいいだろ？」
「でも、岡崎さんに、『ここで待ってろ』と言われたので……」
岡崎は複雑な表情でうろたえていた。
相変わらず可愛らしい人だ。
「何だ。古河さんは岡崎とも知り合いなのか？あっ、いや、お知り合いなんですか？」
「はい。岡崎さんにはとてもお世話になってます」
「そうか……」
岡崎にもそういう人が居たのか……。
そしてそれが古河さんだったなんて、人の縁とは妙な物だな……って、しまった！
「じゃなくて、そうですか」
「……おまえさっきから変だぞ？」
岡崎が訝しな視線を向けてくる。
迂闊だった……やはり同年代の人を相手にすると、気を抜くと敬語が出てこない。

「坂上さん、普通に喋ってもらっていいですよ。私は別に気にしてません」
「いや、そういう訳には……いかないんです。先輩には敬語を使えと言われているから……」
「はぁ？俺等にはモロにタメ口じゃんか」
「無理を言うな。おまえ達の一体何を敬えと言うんだ？」
「くっ、反論出来ねえが、あの馬鹿と一緒なのが屈辱だ」
抗議に白眼で返してやると、岡崎が本当に悔しそうに呻く。
まあ、でも、こいつも悪いヤツではないからな。
「ふむ、確かに春原と一緒は可哀想か。私が柔道部に勧誘されていた時も助けてもらったしな……よし！じゃあこれからは、名前だけ『岡崎さん』と呼んでやろう」
「名前だけさん付けかよ！いいよ、岡崎で……落ち着かねえから」
「あの、それなら私も岡崎とお呼びした方が良いですか？」
「ああ。呼び捨てにしてくれ。おまえの方が年上だしな」
「えっと……じゃあ……岡崎！」
古河さんは恥ずかしそうに少しもじもじした後、意を決し多た様に目をつぶって拳を握り、力一杯岡崎の名を叫んだ。
何事かと、周囲の生徒達の目が一斉にこちらに向けられる。
「あの……やっぱり、悪い気がします……」
「ああっ、もう、さん付けでいいから！普通に呼んでくれ」
慌てて岡崎の泣きが入る。
ふふっ、あの岡崎が形無しか。
「古河さん……岡崎と居て、楽しい……ですか？」
「え？」
少々唐突な質問だったか、古河さんは私の問いにきょとんとする。
でも、私の答えは既に出ていたから、これはあくまで確認に過ぎない。
「楽しいですか、と訊いたんです」
「ええ……はいっ。それは、もちろんですっ。毎日、楽しい事ば

かりですっ」
「そうか……なら、頑張りましょう」
「え？」
「私は生徒会を目指す。貴女は、演劇部の再建を目指す。お互いの目標に向けて、邁進しましょう。それでいいですか？」
「坂上さんは、生徒会を目指していらっしゃるんですね。是非とも、頑張ってくださいっ。わたしも、がんばりますからっ」
「うん……やはり貴女は、いい人だ」
「そんなことないですっ……坂上さんのほうが立派です」
「いや……あいつが、オーキが貴女を実の姉の様に慕っているのも、わかる気がします」
「ええっ！？オーちゃんがですか？こんな頼りないわたしなんかを、本当のお姉さんだと思ってくれてるなんて……とっても感激ですっ」
古河さんは本当に感激しているらしく、顔を真っ赤にしながら少し涙ぐんでいた。
本当に何にでも一生懸命な人だ。
「さ、坂上さんも、とっても綺麗ですし、生徒会なんて、すごいところを目指してるんですから……オーちゃんととってもお似合いだと思いますっ」
「そうだろうか……？」
「もちろんですっ」
「……うん。ありがとう。お互い頑張りましょう」
「はいっ」
「じゃあ」
あいつとお似合いか……。
そう言われた嬉しさと、現状への虚しさをおぼえて、私は二人と別れた。
いや……あいつとも、きっとやりなおせる。
そしてまた、あの二人の様に、楽しい日々に戻るんだ。

今はそう信じて全力を尽くす。
古河さんは子供の頃から病弱で、学校も休みがちだとあいつから聞いている。
そんな彼女が、部活を再建しようと頑張っているんだ。
そしてそれを後押し出来るのは、私だけかもしれない。
「また一つ、負けられない理由が出来たな」
見上げた葉桜に、笑顔で呟いた。

「古河さん！」
「坂上さん？どうかしたんですかっ？」
一度校門の前まで行った私は、ある事に気付いて来た道を走って戻った。
「オーキの事、何か知りませんか？」
あいつと親しい彼女なら、何か知っているかもしれないと思ったんだ。
「オーちゃんの事ですか……？えっと、ガンダムが好きです。昔はよく、うちのお父さんとガンダムごっこしてました」
「……ガンダム？」
訳がわからなかった。
「……いや、そういう事ではなく、オーキが学校を休んでいる理由を知りたいんです」
「え？オーちゃん、お休みしてるんですか？」
しかし、残念ながら問いには問いが返ってきた。
「そうか……古河さんも知らないのか……ですか……」
「ごめんなさいです。わたしは何も聞いてないです」
「いや、謝らないで下さい。わかりました。それじゃあ」
「家に帰ったら、家のお父さんやお母さんに訊いてみますっ」
「ありがとう」

恐縮する彼女に何か悪い気がして、彼女の好意に手を振って答えながら、私は足早にその場を後にした。

第二章　4月22日　巨乳式スリーパーホールド

三日ぶりの昇降口には、いつもの日常がそこにはあった。
淡々と自分の教室に向かう者。
友人と一緒登校し、あるいはここで見つけて、並んで世間話に華を咲かせる者。
見納めかもしれない並木道の桜が散った事も、この町の片隅で大惨事が起きた事も。
まるで別の世界の話であるかの様に、彼等は何一つ変わっていない。
そこにいつも以上に疎外感を感じながら、俺もまた機械的に靴を履き替える。
下駄箱を出た先にある掲示板には、今週の校内新聞。
見出しだけを目で追い、そこにあいつの名前が無かった事だけを確認して歩き出す。
……としたのだが、視界の隅に入った別の掲示物が気になり、踏み出した足を止めた。
それは、色とりどりの潰れた楕円形の物体と、その中心に書かれた演劇部部員募集の文字。
……部長・古河渚!?
驚きと訝しさで眉をひそめる。
何かの間違いか、誰かの悪戯かとすら思えた。
こんな大胆な事をする人だったか？
だが、紙面に踊る“だんご”達が、これが渚さん本人が書いた物だと雄弁に語っている。
でも、今の時期に部員募集は禁止されているはずだ。
特例が認められたとは考えにくい。だとすると、知らずに書いたんだろうか……？
彼女の落胆する姿をおもい、唇を噛む。

渚さんは、どれだけの勇気と覚悟でこれを書いたのだろう？
だがそれはきっと、歪な世界の馬鹿げたルールに踏みにじられる事になる。
悪いのは、いつだって何も知らない弱者だ。
いや……あいつが生徒会長になればあるいは……。
フッ……結局そこに行き着くか……。
己を鼻で笑いながら、俺は自分の教室へと向かった。

何となく入り辛い空気の中を押し入る。
「あ、おはよう川上君」
「ああ、おはよう」
自分の席に辿り着くと、隣の仁科がいつもの様にいつもの笑顔で声をかけてくれた。
「体調の方はもういいの？」
「まあ、学校に来れるくらいにはな」
「その手……平気？」
右手に巻かれた包帯に気付いて、彼女の表情が曇る。
大げさに中で固定されているので、親指しか満足に動かない。
「ああ、ちょっと不便だが問題無い」
「でも、それじゃあノートとれないんじゃ……？あっ、もしよかったら、私が代わりにとっておこうか？」
「ああ、いや、いいって。悪いし」
「それは気にしないで。二冊分とれば、それだけ頭に入るから」
「いや、どうせ普段からとって無いし」
「そう……？じゃあ、何か不便な事があったら遠慮なく言ってね。私でよければお手伝いするから」
「ああ。ありがとう」
彼女の親切に感動しつつ、ただただ恐縮して答える。

やっぱり仁科は優しいな……。
その優しさだけで、十分癒される気がした。
しかし、俺の心穏やかな時間は、長くは続かなかった。
「川上、後で職員室に来るように」
ＨＲで担任に呼び出しをくらう。
大人しくそれに従うと、担任に案内された先に待っていたのは、学年主任と生活指導だった。
「何故、金曜も学校を休んだのか？」
「何故、前日学校を休んだ人間が、翌朝災害現場に居たのか？」
「何故、重傷の被害者を勝手に動かしたのか？」
どうゆう経緯かはわからないが、俺があやちゃんを助けた事は学校にも伝わっていたらしい。
だが正直、事情聴取に来た警察の方がはるかにフレンドリーだった。
まるで犯罪者扱いの、教師達の尋問。
特に普段から俺を目の仇にしている生活指導は、終始威圧的な態度で難癖をつけてきた。
まあ、あんまりやりすぎて、学年主任と担任からたしなめられた時は吹き出しそうになったが。
取調べから戻ると、仁科から不在の間に門倉が来た事を聞かされた。
門倉か……。
ここまで情報が洩れているとなると、奴には変に誤魔化すより、ぶっちゃけて言い含める方がいいかもしれないな……。
こんな事になるならインタビューなんて……。
いや……今更どうしようも無いか。
割り切るしかないと思いつつも、頭が痛かった。

最悪の気分で迎えた二限目を寝てやり過ごすと、少し尿意をもよおしたので席を立った。
教室のドアを開けようとすると、絶妙なタイミングで自動的にそれが開く。
「！」
思わず面食らい、外側から入ってこようとして来た女生徒と鉢合わせしたまま硬直する。
久々に嗅ぐ甘い香り。
腰まで届く長い髪にトレードマークのカチューシャ。
小さくまとまった鼻梁に薄紅色の唇。
まだ幼さの残る大き目の瞳を更に見開き、彼女も俺を凝視している。
ああっ、智代だ。
三日ぶりの坂上智代だ。
「オーキ！」
いきなり詰め寄られ両腕をつかまれる。
それで我に返って、状況の不利を悟った。
ヤベエ。
「その手はどうしたんだ？怪我したのか？」
「大丈夫だ。大した事無い」
「でも、学校を休んでいたじゃないか」
「利き手がこんなだからな」
「昨日まで入院していたんじゃないのか？」
「……誰が言ってたんだそんな事？」
こいつも知っているのか！？
その動揺を微塵も見せず、やんわりと否定する。
しかし、この程度で引き下がる智代ではなかった。
「ＴＶのニュースで視たんだ。お前が病院に居る所を」
「見間違いだろ。それより、こんなトコに居たら邪魔だ」
「あっ、ああ、そうだな」

こんなトコでばらすんじゃねえ！
と内心つっこみつつ、周囲を横目にあくまでクールに首で促しながら先立って歩き出す。
それで俺の意図がわかったのだろう。智代も大人しく後についてきた。
だが、どうする？
ニュースで視たと言っていたが……やはりモザイク程度じゃばれる物なのか……？
だとすると、今ここで誤魔化しても意味は無いか……。
でも、そうすると土曜休んだ辻褄が合わないんだよな……。
「ああ。一泊だけだが、入院してた。でも、ただの疲労で倒れただけだ。この手も大げさに治療されて固定されてるが、直ぐに外れる」
人気の無い所にくるまでに考えをまとめ、振り返りざまにそう答えた。
結局、事実だけ認める事にする。そして余計な事は一切言わないのが一番だ。
「じゃあ、お前が事故に遭った女の子を助けたと言うのも？」
「ああ……」
「そうか……」
すると智代は表情を曇らせ俯いた。
あやちゃんが未だに意識不明の重体である事も知っているのだろう。
こんなに大人しくなるなら、言って正解だったか……？
そう思ったのだが……甘かった。
いきなり智代の手が伸びてきて、俺の頭に回されたのだ。
そして呆気にとられている間に抱き寄せられ、極上の柔らかさに包まれる。
「オーキ……」
まさに天国と地獄。

物凄い力で締め付けられ、胸の弾力は際限なく俺の顔面を包みこみ、その痛みと息苦しさと心地よさから、このまま彼女の中に取り込まれる様な錯覚すら覚えた。

「うっ……くっ……！」

このままでは本当に昇天しちまう。

一瞬それもいいかとも思ったが、そうもいかないので空いている左手で智代の肩を軽く叩き、タップの合図を送った。

「オーキ……」

「うくっ……！？」

更に締め付けてきた！

どうやらタップを知らないらしい……。

むしろ抱擁に答えたと思われたか？

やばいぞ……押し付けられてて声は出せないし。

このままでは、本当に落とされるのも時間の問題。

どうする？どうする！？

「はうっ！こ、こら、くすぐったいじゃないか……」

智代が甘い声を上げ、少しだけホールドがゆるむ。

髪と背中の間に手を回し、背筋をつうっとなぞってやったのだ。

「大変だったな……こんな時に、何て言ったらいいかわからないが……元気を出してくれ」

「いや、わかったから、待っ……！」

だが、一息ついたのも束の間、再び抱きしめられる。

こいつなりに慰めようとしてくれてるみたいだが、これは勘弁してくれ！

しかし……あれだけキツイ事を言ったのに、どうやら嫌われてはいない様だ。

それとも……何気に復讐されてる？

まあ、そんな器用な事が出来る奴じゃないか……。

その事にほっとして、喜んでいる自分が居た。

それに気付いて醒める。

「あっ！こ、こら！」
「わかったから、やめろ」
「っ！！」
頭を胸にこすり付ける様にして何とかすり抜けると、冷たく一喝した。
それに智代はビクンとなって手をひっこめ、肩をすくめる。
「……すまない。私なんかに抱きしめられて、迷惑だったか？」
「別に……ただ、お前には関係無い事だ」
「そんな言い方無いだろ？私とお前は……その……少なくとも知り合いではあるんだ。知り合いが大変な目に遭ったんだから、心配するのは当たり前じゃないか……」
「他人の心配より、自分の心配をしろ。選挙近いんだろ」
「……なんだ、私の心配をしてくれるのか？」
まるで一分の救いを見つけたかの様に、少しだけ智代が顔をほころばせる。
「もう諦めたんなら、それはそれでかまわんがな」
「諦めてない！」
そして俺の言葉を即答で打ち消すと、彼女は背筋を伸ばして胸を張り、俺を見据えて言った。
出会った頃の、自信に満ちた眩しい笑顔で。
「オーキ、私は必ず成し遂げてみせる。生徒会長になる事も、あの桜並木を守る事もだ」
「……そうかよ。せいぜい頑張れ」
捨て台詞にそれだけ言って、俺は智代に背を向け歩き出す。
「ああ、頑張るぞ！だから、お前も見ていてくれ！」
胸に湧き上がる感動を、必死に抑えつけながら。

第二章　4月22日　倒すべき敵

「それで……どのくらい噂は広まってる？」
「ん～、この学校ではそんなでも無いけどぉ、中学の時の子からの問い合わせが多いかなぁ……何人かから電話で訊かれたよぉ」
三限の後、やってきた門倉を連れ、人気の無い特別教室棟の前に来ていた。
なるほど……地域の情報網を甘くみていた……。
クラスや部活が違えばほとんど個々の面識が無い高校での俺の知名度なんて高が知れてるが、地域ぐるみで付き合いのある小学校・中学校となると、変わり者である俺の事は父兄を含めほとんどの人に知れ渡ってしまっている。
まったく親しくも無い奴のおばさんとかに、いきなり挨拶されたりする事も珍しくない。
そんな所では、誰かが“俺ぽい”と思った瞬間、“俺じゃないか？”に変わり、“俺だろう”と噂が広まっていく。
それに何より、“お袋”が居るからな……。
『うちの子が女の子を助けた』
などと自慢気に言いふらしたりはしないだろうが、入院した事くらい井戸端で話してそうだ。
既に秋生さんは知ってたし……。
まあ……不本意ではあるが是非も無いか。
学校で騒がれないだけマシだろう。
「そうか……とりあえず、訊かれたら適当に誤魔化しておいてくれ。ＴＶに出た感想とか聞きに来られてもウザイしな」
「うん。わかったよぉ」
口止めすると、門倉は素直に頷く。
こいつは俺の性格も解ってるし、これで大丈夫だろう。
「それにしても……大変だったね……」

「……大変なのは俺じゃねえよ」
「そうだね……」
「それより、話は変わるが、選挙の候補者について何か知ってるか？」
これ以上は気持ちが沈むだけだろう。
そう判断して、時事ネタに話題を変える。
「ああ、うん……生徒会長に立候補する予定の人で私が知ってるのは、今の所智代ちゃんと『山下』君だけかなぁ。当日になったらもっと出てくると思うけどぉ」
こいつ、智代が選挙に出る事を知っているのか。
まあ、それは選挙も近いし不思議でも何でもないが、それより問題は挙がったもう一人の名だ。
「そうか……やはり“奴”が出るのか……」
「うん……前々から彼も言ってたしね」
『山下　登』
名前は逆に今時珍しいくらい平凡な名だが、その人となりは傑出していると言っていい。
家は代々の大地主で父親は代議士、成績は常にトップクラスでスポーツ万能、留学経験も有り数ヶ国語を話せ、空手や剣道の段持ちだとも聞いている。
おまけに長身で美形。当然女子にモテモテで、教師からの信頼も篤く、小中でも生徒会長だったらしい。
まさに完璧。エリート中のエリート。生まれながらの支配階級。
それが山下という男だ。
「あんなに胡散臭い奴は他に居ないのにな……凡暗な輩にはそれがわからんらしい」
「あ、あはは……」
やべっ、つい本音が……。
まあ、わざとだが。
苦笑を浮かべる門倉も、奴の信者と言う訳ではないから、これく

らい平気だろう。
奴とは同じクラスになった事も無いし、正直、面識は無いに等しい。
そう、それこそ一度擦れ違っただけじゃないだろうか？
数人の取り巻きの女子と談笑しながらやってきた奴と、擦れ違いざまに一瞬目が合っただけ。
だが、それで十分だった。
明らかに人を見下した視線。愉悦に歪んだ口元。耳障りな下卑た笑い声。
俺は直感で理解した。
ああっ、こいつ見てくれだけで中身腐ってるな、と……。
「でもぉ、智代ちゃんにとっては、かなり厳しい戦いになると思うよぉ……」
「だろうな……」
それでも、奴に人気が有るのは事実だ。
何しろ、これ程わかり易い人間は他に居ない。
生まれ、成績、経歴、肩書きだけは最強だ。
奴をよく知らない人間程、奴を支持するかもしれない。
成績はともかく、知名度も、経験も無い智代にとっては、もっとも厄介な相手になるだろう。
「ねえ、オーキ君……」
「ん……？」
「……ううん、やっぱりいいや……」
真剣な表情で何かを言いかけて、しかし門倉は首を振って曖昧に微笑む。
彼女が言おうとした事は何となくわかる。
だが、俺は、
「……そっか……じゃあ、悪いが噂の件頼むわ」
「うん。またねオーキ君」
気付かぬふりをして踵を返す事で話を切り上げ、後ろ手を振りな

がら教室へと戻った。

教室に戻ると、ふとある事が気になって、当人に訊く事にした。
「……何だね？」
やはり邪魔なのだろう。ノートの手を止め不自然に長い前髪をかき上げながら、席の前に立った俺を眼鏡越しに男が睨む。
「いや……そういや、お前は選挙に出るのかな？って思ってな」
「……ふうっ……ああ。副会長に立候補するつもりだ」
暫くの沈黙の後、一息ついてから末原は面倒そうにそう答えた。
ほう、副会長か……。
「何だ？言いたい事があるなら言ったらどうだ」
「いや、らしいと言えばらしいんじゃないか？」
「別に俺は、トップになる事に執着していないだけだ」
「……」
微妙に噛み合って無いが、聞きたい事はあちらから全て喋ってくれた感じだった。
さすが末原だ。話が早い。
「邪魔したな」
「ふん」
俺が去ると、彼はツンとしながら再び予習の続きを始める。
こいつも気障ったらしい奴で、主に男子の一部から嫌われてはいるが、俺は不思議と憎めない。
それは多分、彼から陰湿さの様な物を感じないからだ。
別に俺は真面目な優等生は嫌いじゃない。
真面目な優等生“ぶってる奴”が嫌いなだけだ。
「偽者なんかに負けるなよ」
「え？川上君何か言った？」
「いや、何でも無い」

「そう」

席に座ると同時に思わず出た呟きを仁科に聞かれ、火照った顔を寝る振りで隠した。

第二章　4月22日　来襲！岡崎パーティー

ようやく帰りのHRも終り、晴れて苦役から開放される。
何かひどく疲れたな……寝てばっかだったのに。
気疲れからか、いつも以上に長く感じた一日だった。
「川上君、お疲れ様」
「ああ、またな」
「うん。また明日」
労いの言葉をかけてくれた仁科に軽く手を挙げて応え、教室を出る。
すると、何やら廊下の空気が妙な事に気づく。
明らかにいつもとは喧騒のトーンが小さく、代わりにひそひそ声が聞こえて来る。
何だ？と訝しげに廊下の先に目を向けると、直ぐにその正体にいき当たった。
長身の岡崎さんと金髪……春原さんの三年問題児コンビだ。
上級生の不良二人が二年の教室棟来たのだから、穏やかな空気で無いのはわかる。
しかし、この時はそれだけではなかった。
彼等の前には、並んで歩く三人の少女達。
渚さん……！？
その中の一人に渚さんが居た事にまず驚く。
だが、サプライズはそれだけでは終わらなかった。
……と、あれは確かナベの飼い主さん達に……まさか、一ノ瀬さん！？
渚さんの隣には以前会ったナベの飼い主の双子の姉妹、それと岡崎さんの後ろに隠れるようにもう一人、一ノ瀬さんまでが一緒だった。
見事に見知った顔ばかりだが、あの人達知り合いだったのか……？

同じ学年なんだから不思議は無いが……。
てか、一ノ瀬さんに見つかるとマズくないか!?
「あっ、オーちゃんです」
と思ってる間に見つかった!
「ん?オーちゃん?……って、川上じゃんか!」
「どうも」
「えっ?何?渚ちゃん川上とも知り合いなの?」
「あれ?あんた確か……ボタンを苛めてた奴よね?」
「違うよお姉ちゃん。ボタンがお世話になってる人だよ」
「っ!!」
「ど、どうしたことみ?」
「いじめっ子……!」
暫くぼ~としていた一ノ瀬さんが、急に岡崎さんの後ろに隠れてしまう。
俺に気付いたのだろう。やはり彼女には嫌われてるか……。
すると、ボタンの飼い主さんの髪の長い方の確かお姉さんに三白眼で睨まれる。
「何?あんたことみの事も苛めてた訳?」
「い、いや……その……色々ありまして……」
「色々って何よ?」
何と答えていいかわからず、苦笑する他ない。
事情を説明しようにも、あれを言う訳にもいかないだろうし……。
「杏ちゃん、待ってください。オーちゃんは女の子をいじめたりする子じゃないですっ」
もう謝って逃げるか?と思っていたら、ありがたい事に渚さんが擁護してくれた。
ありがとう渚さん!
「どうかな?川上だって男だしね。ことみちゃんにHないたずらでもしたんじゃないのぉ!?」
「なんですってぇ!?」

しかし、それに感動したのも束の間、興奮して鼻の穴を広げた春原さんが指をわきわきさせながら余計な口をはさみ、それに激昂した飼い主さんに更に詰め寄られる。

気が強そうだが、この人もなかなか……などとアホな事を考えて現実逃避してる暇は無い。

ここは天下の往来。遠巻きに人だかりも出来始めている。

これではまるで、本当に一ノ瀬さんに悪戯して咎められてるみたいじゃないか！

マズイ！マズ過ぎる！！

あやちゃんを助け出した事が広まる前に、痴漢野郎として認知されかねない。

こうなっては、是非も無し。

た、助けて～渚さ～ん！

プライドをかなぐり捨てて、哀願の視線を渚さんに送る。

それに気付いてくれたのか、息を飲んだ彼女は眼差しは“任せて下さい！”と言っていた。

頼みましたよ渚さん！

「ま、待ってください！これにはきっと何か訳があるんだと思いますっ！私も昔オーちゃんにスカートをめくられてしまいました。でも、男の子は好きな女の子を苛めたくなる物だって、お母さん言ってましたっ！」

「それ、幼稚園の頃の話ですから！！」

これには堪らずつっこんだ。

ああ、もう、まったく鎮火になっていないどころか大炎上。

それじゃあ、俺が痴漢の常習犯＆一ノ瀬さんを好きみたいじゃないですか！

てか、あの時の事憶えてたのか……。

「な、渚ちゃんのスカートめくったってぇ！？」

「あんた、スカートめくりなんて子供みたいな事まだやってんの！？」

いや、確かに最近やりましたけど。
「いや、だからそれは、子供の頃の話ですよ。一ノ瀬さんとは、本屋でちょっと一悶着ありまして、誤解されたと言うか……」
「本屋……？」
「一悶着って何よ？」
「……川上、ちょっと来てくれ」
「あ、はい」
それまで事の成り行きを傍観していた岡崎さんが、急に神妙な顔つきで俺を手招きしたので、ひとまず助かったとそれに続く。
「と、朋也くん……？」
「ちょっとこいつに話があるだけだ。直ぐ戻る」
隠れる場所を失い不安そうな声をあげる一ノ瀬さんを置いて、岡崎さんは一団から少し離れたトイレ前のへこんだスペースに俺を連れてくる。
「少し変な事を訊くが、違ってたら忘れてくれ。本屋での事って、ひょっとして、“ハサミ”と関係あるか？」
その単語を聞いた瞬間、たちこめる暗雲が魔法のハサミによってジョキジョキと切り裂かれ、光明がさすイメージ映像が脳内でながされる。
俺の苦悩をわかってくれる人が、ここに居てくれた！
「は、はい！そうです！」
「やはりそうか……おおよその理由はわかった。お前も災難だったな」
「まあ……慣れてますけどね」
岡崎さんの溜息に苦笑で応え、俺達は誤解を解くべく皆の元に戻った。
「おい、ことみ。その……なんだ、やっぱりお前の早とちりみたいだぞ」
「……いじめない？」
「いじめない。こいつはそんなに悪い奴じゃねえって」

「そうですよ、ことみちゃん。オーちゃんはとっても優しい良い子です」
「……」
二人になだめられ、ようやく渚さんの後ろに隠れていた一ノ瀬さんが顔を出す。
しかし、飼い主さんはそれでおさまってはくれない。
「二人で何話してたのよ？」
「男同士の話だよ」
「そういう言い方されると、余計あやしく思えてくるんだけど？」
「そうだよ！男同士の話なら僕も混ぜろよ！で、その時の渚ちゃんのパンツの色は？」
「え？ええっ！？」
「最低ね……」
「ちげえって！誰がわざわざ呼び出してパンツの色を訊くんだよ！本屋の一件について訊いただけだって」
「それなら別にここで話せばいいじゃない」
「いや、だからそれは……お前がそうやって詰め寄って来るからだろ」
「何よ？あたしの所為だって言うの？」
「杏ちゃん、いじめっ子？」
「違うわよ！」
ひとまず窮地は脱した様だが、依然矛先が二転三転するカオスな展開が続いている。
てか、誰かこの状況を収拾してくれ。
春原さん……には期待出来ないし、飼い主さんの妹さん……はオロオロしてるばっかか。
……俺がやるしかないか……。
「あの……それでみなさん何故ここに？」
俺は必殺『本題に入りましょう』を使った。
「ああ、そうだった。こんな事してる場合じゃねえよ」

「そうですっ。仁科さんまだ教室に残ってくれてるでしょうか？」
「仁科？」
渚さんの口から、また思いもよらない名前が出てきた。
接点なんて無さそうだが……この人達が仁科に一体何の用だ？
まさかシメに……て、渚さんと仁科に限ってそんな訳はないだろうが……。
「オーちゃんお知り合いですか？」
「え、ええ。同じクラスです。さっきまで居たんで、まだ居ると思いますが……」
「そうですか。ありがとうございます」
「いや……じゃあ、俺はこれで……」
「はいです」
気にはなったが、ここが引き際と俺はみなさんに頭を下げて退散する事にした。
まあ、問題になるような事は起きないだろう。
この時の俺は、そう気楽に考えて帰宅したのだが……。

第二章　4月23日　浪漫非行

俺等の子供の頃にも“ガンダム”はあった
といってもそれはパロディー色の強い“ＳＤ”で
話もわかり易い子供向けの物だった
あんな物ガンダムじゃねえ！！
そう言った秋生さんが開いた劇場版ファーストの上映会
しかし子供達には「画が汚くて古い」と不評で
それを聞いた秋生さんは当然ブチ切れ
続きをみせてくれる事はなかった

それから数年経って
新しいガンダムシリーズがＴＶで始まった
特にＧは後半面白くなって
仲間内でも結構評判が良かった
ある雨の土曜日

少年サッカーの練習も休みとなり暇をもて余していた俺は
古河パンに行って「ガンダムがみたい」と言った
みんなはつまらないと言ってたが
俺はずっと続きが気になってた
確かに古くさかったが
“シャア”はカッコいいと思ってた
秋生さんは喜んで部屋に通してくれた
前みんなでみた時は居間だったから
初めての秋生さんの部屋だった
開けた瞬間タバコくさくて
棚には沢山のプラモデルが並べられていた
そしてビデオを用意してくれると
秋生さんは店番に戻っていった
タバコくさい部屋に一人取り残され
リモコンを操作してガンダムをみはじめる

部屋を見渡すと無数のガンプラと漫画本
物珍しいものばかりだった
正直ガンダムよかそっちが気になって
アッキーの部屋なんだからあさっちゃダメだと自分に言い聞かせ
下手に触っちゃダメと伸ばした手を引っ込め
元に戻せば平気だろうと思った所で
カチャリとドアが開いた
ビクッとなって慌てて元の位置に座る
「オーちゃん、こんにちは」
渚ちゃんだった
「こ、こんにちは」
「私も一緒にみてもいいですか?」
「えっ?……うん」
頷くと渚ちゃんはニコニコしながらやってきて
わざわざ俺の隣に座った

姿勢ただしく正座だった
滅茶苦茶真剣にみていた
こっちは緊張して気まずくて
汗だくになりながらＴＶの画面に集中するしかなかった

秋生さんに揺り動かされて気がつく
どうやらいつの間にか寝てしまってたらしい
画面をみるととうに消されていて
キュルキュルとビデオが巻き戻される音だけがなっていた

秋生さんは当然不機嫌で
クドクドとなじられたが
晩飯に誘ってくれた
恐縮して一度は断ったが

「困ったわ。オーキ君の分も作ってしまいました」
と早苗さんに困った顔をされては

断れるはずも無かった

しかし食卓について気がついた

早苗さんの料理？

血の気が引いていく

やばいんじゃないか？

早苗パンには慣れてはきたが

笑顔で食いきる自信はまったくない

それでも今更逃げる訳にもいかず

決死の覚悟で「いただきます」をして

震える手でおかずをつまみ口にいれ

失礼に思われないようかんだふりをしながらご飯をかきこんだ

んん？

まずく……ない……？

てかむしろ……

一度飲みこんで今度はおかずだけを口に入れる

驚きだった

うまいじゃん

あれ？早苗さんが作ったんだよな……？

秋生さん店番だったんだよな……？

え！？なんで！？

「オーキ君、おいしいですか？」

「は、はい」

軽くパニックになりながらも素直に頷く

嬉しそうに微笑む早苗さんの視線が照れくさくて

食う事に夢中になってるふりをした

食べ終わると早苗さんから風呂を勧められた

寝汗が凄いからと

当然帰って入ると断った

しかし風邪をひいてしまうといけないからと目をうるうるさせて

言われ

思わず頷いてしまった

「じゃあ、私も一緒に入りますね」

「え……ええっ！？」

「ぬあにいいいいいいいいいっ！？」

物凄い形相で秋生さんが立ち上がり

「てんめえぇ……俺の早苗と一緒に風呂に入るだあっ！？」

大の大人が小学生の胸倉を掴んで脅迫してきた！

「は、入らない！入りませんよ！！」

「でも、オーキ君はまだ小さいですから……」

「小せえデケエの問題じゃねえ！！小さくたって硬くはなるだろうが！！」

何の話だ！

「じゃあ、お父さんがオーちゃんと一緒に入ればいいと思います。わたしはお母さんと入ります」

「それもいいですね」

「な、何を言ってる渚!?風呂はいつも父さんと一緒に入ると決めてるじゃねえか!!」

まるで世界の終りの様な取り乱し方だった

「渚ももう小学四年生ですから、丁度良いかもしれませんね」

「いい訳ねえだろ!渚、お前からも言ってやれ!『わたしお父さんと一緒がいいですぅ。一生お父さんと一緒にお風呂はいりますぅ』て」

「でも、そうするとオーちゃんとわたしとお父さんの三人で一緒に入る事になります。それはちょっと恥ずかしいです」

「渚と一緒に風呂だとぉ!?てめえ、まだ渚の事を狙ってやがったのか!!」

「狙ってない!てか、一人で……入れる」

「ん?そうか」

ようやく開放されて軽く咳き込む

「大丈夫ですか?やっぱり私と入った方が……」

「いや、平気です!幼稚園の頃からほとんど一人で入ってますから!」

首を絞められる前に速攻で答えた

しかし俺の言葉を聞いて渚さんは目を丸くする

「幼稚園の頃からですかっ？オーちゃんとっても偉いですっ。わたしなんか二つもお姉さんなのに恥ずかしいです……」

「き、気にすんな渚！他所は他所！家は家って言うじゃねえか！」

「それちょっと違うと思います……クラスの女の子達も、ほとんど一人かお母さんや姉妹と一緒で、お父さんとは入らないって言ってました……」

「な、なんだとぉ！？そんな馬鹿な事があってたまるか！娘と一緒に風呂に入るのは、父親のロマンだろうが！！」

秋生さんは膝をつき頭を抱えて天を仰いでいた。

渚ちゃんが心底可哀相に思えた

「あの……やっぱり悪いんで帰ります」

「そうですか？じゃあ、気をつけて帰って下さいね」

秋生さんが落ち込んでる間にと

俺はそそくさと古河家を後にした

4月23日（水）

今日もバイトは休みを貰っていたので、起きて軽く汗をながした後直接古河パンに向かう。

「ちぃっス」

「おう。来たか……」

店に入ると、秋生さんは腕組みしながら神妙な面持ちで俺を待っていた様だった。

何だ？

また渚さんに何かあったのか？

「おーい、渚！オーキの奴が来たぞ！」

そう思っていると、秋生さんは振り返って大声で渚さんを呼んだ。

ややあって、「はーい」と返事をしながらパジャマ姿の渚さんが現れる。

「おはようございます、オーちゃん」

「おはようございます」

「オーちゃんは昔から早起きさんですね。わたしは今さっき起きた所で、寝癖を直すだけで手一杯で着替えられませんでした」

「ああ、いや……」

物凄いのが2本出てますよと言いたくなったが、多分それは遺伝なのでやめておく。

しかし、わざわざこんな時間に俺に会いに来るなんて何の用件だろう？

まさか、昨日仁科に会いに来た事も関係有るのか？

「えっと……オーちゃんにお話したい事があります」

シリアスな話を予想していたのだが、渚さんは恥ずかしそうにもじもじしていた。

少し顔も赤い。

何だろう？

これじゃまるで……。

「渚、みなまで言うな」
と、そこで秋生さんが口を挟む。
「えっ？」
「お前の気持ちなら、わざわざ口に出さずとも俺には伝わってる。『お父さん大好きですぅ。オーキや岡崎より１００倍カッコイイですぅ』だろ？」
「違いますっ」
「違うのかぁ！？」
話の腰を折った挙句自爆していた。
でも、今岡崎つったな……秋生さんが知ってるって事は、前渚さんが連れて来た男って、やっぱ岡崎さんなのか？
「あ、でも、お父さんの事は大好きです」
「だろ？娘よ、俺も大好きだぜ！」
すぐに立ち直ってグッと親指を立ててみせる親父。
幸せな人だなぁ……。
「けど、今オーちゃんに訊きたいのはそういう事じゃないです」
「えっと、なんでしょ？」
「その……オーちゃん、演劇に興味はありませんか？」
演劇？
ああ、そういえばと昨日見たポスターの事を思い出す。
「ん～、それなりにありますよ」
「本当ですかっ？」
無難な答えを返すと、渚さんは破顔して少し詰め寄ってきた。
「じゃ、じゃあ、演劇部に入ってくれませんかっ？」
「それはちょっと……」
やはりそう来たかと、苦笑しながらやんわりと断る。
「そうですか……とても残念です……」
消沈してしゅんとなる渚さん。
ぬか喜びさせちゃったかと心が痛んだが、人前で芝居なんて死んでも御免だ。

「昨日一緒だった人達は、部員なんですか？岡崎さんとか」
「岡崎さんや杏ちゃん達は部員集めを手伝ってくれてるだけで、部員じゃないです」
「そうなんですか……じゃあ、部員は……？」
「今の所わたしだけです」
あれだけ居てみんな手伝いって……。
う～ん、そういう事なら……。
「なら、もし頭数が足りないようなら、名前だけでも貸しましょうか？幽霊部員て事で」
「出来ればそういうズルはしたくないです……仁科さんは頑張ってちゃんと部員を集めてましたし……」
「そうですね……」
その言い分はとても渚さんらしいなと思いつつも、それが少し切なかった。
「わかりました。それじゃあ、わたしは戻りますね。お時間とらせてしまって申し訳無いです」
「ああ、いや……力になれなくてすみません」
「そんな事ないです。オーちゃんは真面目に答えてくれましたし、名前だけならとも言ってくれました。とても嬉しかったです。ありがとうございます」
「あっ、いえいえ、すみません」
深々と頭を下げられ、こちらも何となくまた謝ってしまう。
俺と彼女はいつもこんな感じだ。
「それじゃあ、またですオーちゃん」
「はい。また」
もう一度ペコリと礼儀正しく会釈して、渚さんは奥に戻っていった。
途中から無口になった秋生さんは、複雑な表情でその背を見送っている。
それで秋生さんが、渚さんが部活をやる事をけして手放しでは喜

んでいないのだと感じた。
そしてそれは俺も同じだ。
出来るだけ彼女の望みを叶えてあげたいと思う反面、やはり身体の事を心配してしまう。
「じゃあ、これで」
「ああ」
淡々と会計を済ませ、俺達は言葉少な気に別れた。

第二章　4月23日即席ネゴシエーター

その日は朝から、妙な違和感を感じていた。
「……よっ」
「あっ、おはよう川上君」
いつもは先に挨拶してくれる仁科が珍しく隣に座っても俺に気付かず、そのかげりのある笑顔で元気が無いのは直ぐにわかったが……。
何となくそれだけじゃ無い様なと気になりながらも、もやもやしたまま午前の授業が終わった。
さて、今日はどこに行くか……？
そう思案していると、二人の女子が囲む様に俺の机の前にやってくる。
「あの、川上君。ちょっといいかな？」
一応顔はわかるが、名前が出てこない。
その程度の、ろくに話た事も無い女子生徒。
何だ？何かのクレームか？
「ああ、何？」
悪い事を想像しつつもそれを表情に出す事なく、威圧しないよう自然に応対する。
すると二人は互いに顔を見合わせた後、何故か仁科の方を一瞥してから、躊躇いがちに「ここじゃあチョット……」と言った。
人に聴かれたくない話と言う事か？
「じゃあ、場所を移すか」
そう言いながら俺が立ち上がると、丁度隣の仁科も弁当を抱えて杉坂の所に向かうのが見えた。
それで、ああと気付く。
いつもは仁科にべったりの杉坂が、今日は一度も仁科の傍に来てなかった事に。

例の如く、内密な話をする為に特別教室の前に二人を連れてくる。
しかし余程言い辛い事なのか、二人はここに来ても黙ったまま視線で語り合うばかりだった。
「それで……？」
重苦しい空気から、どうやら俺へのクレームじゃ無さそうだと察した事もあり、こちらから促す。
すると、先程も俺に声をかけてきた、どちらかと言えば仕切ってそうな方が意をけっして重い口を開いた。
「杉坂さんが……大変なんです」
「は？」
あまりに唐突で、穏やかでは無い話だった。
「実はさっき、変な人に変な事を訊かれて……それで、怖くてつい杉坂さんの事を見たって答えちゃって……どうしよう！？杉坂さん、あの人に酷い事されるかも……！」
「いや、まず落ち着け。順番に話してくれないか？変な人って誰？」
「あの、三年の金髪の人です。不良だって言われてる……」
やばそうな案件である事は十分わかったが、血相を変えてテンパリだしたのでなだめてやると、もう一人の方が代わりに答えた。
どうやらこちらの方が冷静で話が聞き易そうだ。
変な人と言うから余所者の変質者かと思ったが……可哀相に。
「それで、春原さんに何を訊かれたんだ？」
「昨日の放課後か今日の朝早くに、三年生の下駄箱に二年生が居た所を見てないかって」
「実際、杉坂が居たのを見たのか？」
「うん。昨日の部活帰り私達一緒に帰ってて、三年生の下駄箱に杉坂さんが居たから変だねって二人で話してたから……」

「それを答えたら、今度はそいつは合唱部かって訊かれて、はいって言ったら、やっぱりねって言って不気味に笑ったんです。『うへへ、さ～て、どうしてやろうかな～』って」

「それで最後に、念の為って私達の名前も聞かれたんです。最初はラブレターを出して杉坂さん名前を書き忘れたのかな？とも思ったんだけど、とてもそんな感じじゃなかったし、相手も相手だし、だとすると、あの人に酷い事されるんじゃないかって……」

いつの間にかつなぎあっている手が、二人の不安を伝えていた。

つまり、チクッちゃったから、怖くなって俺の所に来た訳か。

だったらはじめから言うなよ……と言いたい所だが、俺に相談に来ただけマシだろう。

「大体わかった。まあ、あの人はそんなに悪い……人だけど、そのなんだ……あんまり大それた事は出来ない小……あっ、いや、まあ、あんま凶悪な事を考え付く人じゃないから安心しろ。俺からも話しておくし」

失言しそうになった口を押さえながら適当に気休めを言うと、二人は肩の荷が下りたように俺に礼を言って去っていった。

だが……何だ？何が起きている？

何か妙な事が起こっているようだ。

杉坂が三年の下駄箱で何かしていて、春原さんがそれについて嗅ぎ回っていた。

そして恐らくそれは……昨日渚さん達が仁科を訪ねて来た事と関係が有るのだろう。

これは傍観している訳にもいかないようだな……。

まずは春原さんに会ってみるか。

と言ってもクラスもわからないし、会えるアテなど無かったが、とりあえず俺は三年の教室に向かう事にした。

そうして春原さんの姿を探していた俺は……、
「こんにちは、はじめまして。3年A組の一ノ瀬ことみです。趣味は読書です。もしよかったら、お友達になってくれると、うれしいです」
「え、えっと……どうも。2年の川上央己です。趣味はゲームと読書……かな？こちらこそ、よろしく……お願いします」
旧校舎の旧演劇部室で、互いにガチガチに緊張しながら一之瀬さんと自己紹介をしていた。
なんでこうなったかと言えば、春原さんを探してたら渚さん達を見かけて声をかけた所、ここに連れてこられたと言う訳だ。
「はあ？ゲームはともかく読書って、あんた不良でしょう？」
「お、お姉ちゃん、失礼だよう……」
すかさず、なべのペットのお姉さんの方が、趣味について怪訝そうにつっこんでくる。
まあ、俺にとっては慣れっこの質問だ。
「杏ちゃん、オーちゃんは小さい頃から御本が好きな、とってもお利口さんな子でした」
「あっ、いや……」
べた褒めだった。
自分で答える前に渚さんに答えられてしまい、かゆくなった頭を掻きながら苦笑する。
だが、渚さんの言葉を聞いてもきょうちゃん？先輩の疑念は揺らぐ様子がない。
「ふ～ん、じゃあ、どんな本が好きなのよ？ああ、言っとくけど、陽平みたく漫画やHな本って言うのは無しだから」
「何気に本人の居ない所で不名誉な趣味が暴露されたな」
本当にお気の毒に。
「えっと、歴史物や哲学系が好きですね……文学系もたまに」
「哲学ぅ？じゃあ、最近読んだ本のタイトル言ってみなさいよ」
「え～っと、最近読み終わったのは『カラキョウ』ですね」

「何それ？聞いた事無いわね……ことみ知ってる？」
一ノ瀬先輩がふるふると首を振ると、きょう先輩がほらみなさいよと言った顔をする。
しまった。略語じゃ通じないか。
「頭“空”っぽの“杏”の事じゃないよな？」
「へ～、朋也ぁ……そんな本があるなら是非一度読んでみたいわねえ……それとも……あんたもあたしの事馬鹿にしてるの！？」
「じょ、冗談だ冗談！」
「違いますよ！『カラマーゾフの兄弟』の事ですよ！」
岡崎さんの軽口に、その長い髪は天を衝き、釣り上がった目はギラギラと怪光を発していた。
今にもブチギレそうな大魔人に恐れおののき、俺は急いでタイトルを訂正する。
「ん？それは何か聞いた事あるわね」
「『カラマーゾフの兄弟』フョードル・ドストエフスキー作。１８７９年に新聞に連載され、１８８０年に単行本として出版された。『罪と罰』と並ぶドストエフスキーの最高傑作とされ、『白痴』、『悪霊』、『未成年』と併せ後期五大作品と呼ばれる……」
「ああ、わかった。わかったからな？ことみ」
途端に一ノ瀬さんがすらすらとうんちくを語りだしたのを、岡崎さんが急いで止める。
「そんな難しそうな御本を読んでるなんて、やっぱりオーちゃんお利口さんですっ」
「あっ、いや、でも、漫画やラノベなんかも好きですよ」
渚さんがあんまり感心してくれるので、思わず変な誤魔化し方をしてしまう。
正直、手放しで褒められるより、疑念を持っててくれた方がまだマシだ。
「何かよくわからない奴よねぇ……まあ、いいわ。渚の幼馴染だって言うし、ボタンも懐いてるみたいだから、悪い奴じゃないんで

しょ……。ああ、私は藤林杏。椋とは双子の姉妹よ」
まだ腑に落ちないと言った様子ながらも、藤林先輩はようやく笑顔で自己紹介してくれた。
どうやらつっこみはキツイが、サバサバしている人らしい。
「あの……藤林椋です。先日はボタンがお世話になったのに、すみませんでした」
次いで妹さんがいきなり謝るので、一瞬何の事だかわからなかったが、どうやら初めて出会った時の事を言ってるらしい。
「あっ、そうそう、あんた何で悪くもないのに謝って逃げるのよ？おかげで、椋に説明してもらうまで誤解しちゃったじゃない」
「お、お姉ちゃん……重ね重ね姉がすみません……」
「いえ、俺も悪かったんで……」
しかし、それでお姉さんが再び思い出した様に俺をなじりだしたので、妹さんはひたすら後輩の俺に恐縮して頭を下げてくる。
初めて会った時の印象そのままの、お姉さんとは反対に大人しい人のなのだろう。
「まあ、ひとまず自己紹介も終わった事だし、本題に入るか。川上、お前が春原を探してたのって……？」
「同級生の女子から、春原さんから変な事を訊かれたと聞いた物で……事情を訊こうと」
一応言葉を選びながら？答えると、場の空気が一瞬にして緊張に包まれた。
ビンゴ。
やはりこの人達も春原さんの件に関わっているみたいだ。
「やっぱりな……古河、例のやつ川上に見せてやったらどうだ？」
「えっ？でも……」
「こいつももう少なからずこの件にかかわっちまってるんだし、下手に隠して春原が下級生から変態だと思われても、お前は嫌だろ？」
「それは……はい」

最早手遅れだけどな。
岡崎さんの心の声が聞こえた気がした。
何はともあれ、渚さんは説得をうけ、躊躇しながらも手紙を取り出して俺に手渡す。
それは……脅迫状だった。
「……バカな事を……」
溜息しか出ない。
許されるなら、くしゃくしゃに丸めて棄てたくなる。
そんな陳腐な事実だった。
「えっと……その、春原さんからコレを出した犯人について何か聞いてますか？」
「ああ。既に犯人だって名前も聞いてる」
「そうですか……合唱部と何かあったんですか？」
俺は言葉を選ぶのをやめて、単刀直入に訊いた。
すると、渚さんが弾かれたように立ち上がる。
「違うんですっ……悪いのは多分、部員が集まってもいないのに、後から幸村先生に顧問を頼んだわたし達なんです……」
「渚、それとこれとは別だって言ってるでしょ？こんな卑劣なマネする奴等に、遠慮する事ないわよ」
俯き加減の渚さんは相手を庇うような発言をするが、話が飛んでいて事情がよく飲み込めない。
「顧問？」
「ああ。部を立ち上げるには、最低部員3人と、顧問が必要らしいんだ」
「でも……先生方の中で手が空いているのは、幸村先生以外は校長先生と教頭先生だけみたいなんです……」
「それで、合唱部と顧問の取り合いになったと？顧問のかけ持ちとかはダメなんですか？」
「前例も無いし、うちの学校は顧問が居ないと部活出来ない事になってるからダメだって。まったく、毎度の事だけど、ホント頭の

固い学校よねぇ」
そういう事か……。
理不尽に対する怒りと悔しさで歯噛みする。
何故こんなバカげたルールで、優しい渚さん達と仁科達が争わねばならない？
そして杉坂の軽率な行動には、憐れみすら覚えた。
どうするべきか……？
決まっている。
「あの……今回の件、俺に任せてもらえませんか？あいつらクラスメイトなんで……」
ここは止むをえないと判断し、俺は介入させてもらう事を申し出た。
「いや、俺達は別に事を荒立てるつもりは無いんだが……」
「“相手がまたちょっかい出してこなければ”だけどね」
「杏ちゃん、わたしは仁科さん達と喧嘩したくないですっ」
「そうならない為にも、間に誰か入った方がいいと思うんです。出すぎたマネだとは思いますが……」
「そんな事無いですっ。でも、オーちゃんにはいつもお世話になりっぱなしで、何か悪いですっ」
「いや、そんな事……俺も古河家には散々世話になりましたし……」
「まあ、確かにこのままじゃ、まともな話し合いも出来そうもないけど……そいつに任せて大丈夫なの？」
渚さんの恐縮を恐縮でかわした所で、またも藤林杏先輩の疑念が当然のように立ちはだかる。
「“いける”……と思います。嫌われるのは慣れてるんで」
「はぁ？」
「まっ、こいつは他所の連中が来た時も、ちょくちょく追い返してるからな……平気だろ？」
「……まあ、オーキと親しいあんた達が信用して任せるって言う

なら、あたしは文句無いけど……」
俺の素直な答えに眉を寄せた藤林さんだったが、岡崎さんのフォローで何とか突破出来たようだ。
あと、何気に名前で呼ばれてしまった……別にいいけど。
よし、これでこの件に対する名分は得られた。
「じゃあ、俺はこれで」
「ああ。頼んだぜ」
「オーちゃん、お願いしますっ」
「頑張って下さい」
「オーキ君、さようなら」
「またね」
早速俺は任務を果すべく、一つ会釈をしてから先輩達の期待を背負い踵を返す。
あの杉坂を説得するのは骨が折れそうだが……俺が何とかするしかあるまい。
「ああ、そうだ。春原さんは何て？」
ドアを開けた所でふと足を止め、半身を捻って懸念を問う。
女子には安心させる為にああ言ったが、まったく気になっていないと言えば嘘だった。
だが、それに対して岡崎さん肩をすくめてみせる。
「俺達がやりかえさないつったら、勝手にしろってさ。まあ、一応後でお前の事も伝えとくが、ほっといても平気だとは思う」
「そうですか……それじゃあ、失礼しました」
岡崎さんの話に胸を撫で下ろすと、もう一度頭を下げ、俺は旧演劇部室を後にした。

第二章　4月23日　海星記念日

先輩達から真相を聞いた俺は、足早に旧演劇部室を後にした。
杉坂も馬鹿な事をしてくれる。
しかし、確かにきつい所はあるが、陰湿な事は好まない奴だと思ってたんだが……。
状況証拠だけで決め付けるのもよくないしな。
何にせよ、双方から話を聞くべきだろう。
彼女は教室に居るだろうか？
どの道飯もまだだし、いったん戻ろう。
などと考えながら旧校舎の廊下を進んでいると、
「あの……」
不意に背後から声をかけられた気がした。
足を止めて振り返る。
するとそこには、長い髪を先の方で大きなリボンでまとめた小さな女子が立っていた。
丁度あやちゃんくらいの……小学生でも通用しそうな背丈の子だ。
校章から一年だとわかったが、それよりも、
あれ……今擦れ違ったか？
声をかけられるまで気配をまったく感じなかった事に違和感を覚える。
後を追い駆けてきたという様子でも無く、脇の教室から出てきたのかとも思えば、彼女の背後の教室の扉は閉じられていた。
「あの……どうぞ」
「ん？」
まあ、きっと考え事していたから気がつかなかったんだろう。
自分の中でそう結論づけていると、少女は唐突に俺に向かって何かを差し出してくる。
それは文字通りの荒削りで手作り感満点の、木彫りの星？だった。

何だ？ティッシュ配りみたいな何かの宣伝か？
好意的なプレゼントにしては物が怪し過ぎる。
それになんかこの子……。
よく言えばミステリアス、ぶっちゃけ得体が知れん。
出会い頭の件もあるし……何者だ？
もう少し観察しようと彼女に目を向けると、挑みかかる様な目つきで俺を凝視している。
とりあえず、適当にとぼけて反応をみるか。
「これは……五芒星？」
何か呪術めいた物を感じたので、試しにそう答えてみた。
すると少女は真顔で言う。
「ごぼう製じゃないですっ、惜しいけど違いますっ、材質は木製ですっ」
いや、惜しくはないだろ。どんだけ太い牛蒡だよ。
「そうじゃなくて、ペンタグラム？」
「ペッ、ペペペンヒャッ！ン～～～～～～～～～！！」
後ろに向かって駆け出したかと思うと、少し行った所でしゃがみこんでうずくまる。
おもいっきり舌を噛んでいた。
どうやらそっち系じゃなさそうだな……。
「ペンヒャムひゃなひれふっ、れんれんひはいまふっ」
暫くして復活してもどってはきたが、涙目で痛そうに口をすぼめている。
しかもガンダムみたいになってるし……。
「じゃあ……ヒトデ？」
「ヒンフォンヒンフォーンッ！せいはいれふっ！」
「えっ……？」
星じゃなさそうって事で適当な事を言ったら、当りだったらしい……。
「正解者の方には、記念品としてこのヒトデとっ、風子の姉

の結婚式にご招待しますっ」
風子?は嬉しそうに両手で持ったヒトデ?を更に押し付けようと突き出してくる。
やはり釣りだったか。
お姉さんの結婚式ねえ……親戚の冠婚葬祭ですら興味無いのに、知らない人を祝えと言われても……。
あれ?てか、ひょっとして俺達過去に会った事あるのか?
まさかあかの他人を結婚式に呼ぶとも思えんし、俺を知ってるから声をかけてきたと考える方が自然か?
いやでも、こんな風変わりな子を忘れるハズはないと思うが……。
「えっと……何処で?」
知り合いである可能性を考慮し、且つ遠ければ足が無い事を理由に断るべくそう訊いた。
「この学校です」
滅茶苦茶近かった。
て事は少なくともうちの関係者だよな……?
そもそも学校で結婚式とか出来るのか……?
「お姉さん先生なの?」
「はい。おねぇちゃんは、美術の先生です」
「へえ」
美術教師に女の先生も居たのか……。
「三年前に辞めましたけど……」
「いや、それじゃあ知る訳無いって」
「やっぱり、そうですか……でも、もしよろしければ、一緒に祝って欲しいです」
「う~ん……」
女の子は一度しゅんとなって下を向いたが、すぐに気を取り直して食い下がる。
一生懸命さは伝わってくるが……。
「式の日取は?」

「創立者祭です」
「創立者祭か……まあ、当日用事が無ければ」
「来てくれますかっ？ありがとうございますっ！」
どうせ登校するついでなら、まあいいか。
真剣さにほだされ軽い気持ちで了承すると、少女はヒトデを突き出したまま深々と頭を下げた。
表彰状を貰う小学生みたいで、何となく微笑ましい。
「それで……お姉さんの名前は？」
「伊吹公子です」
「えっ……！？」
思いがけず出てきた名前に、暫し呆気にとられる。
公子さんがお姉さんだって？
「じゃあ、公子さんの妹さん？」
あまりの衝撃に、つい当たり前の事を訊いてしまった。
「はい。おねぇちゃんをご存知なんですか？」
「ああ……なら、お相手は……芳野祐介、さんか？」
「わあっ！ユウスケさんの事まで知ってますっ。驚きですっ！」
「そうか……」
喜ばしい事であるはずなのに、何故か素直に喜べず曖昧に頷く。
そうか……公子さんと芳野祐介が……。

あの時止めた車に乗っていたのが、かつてハマッていたあの芳野祐介だったと知ったのは、入院中に彼が見舞いに来てくれた時の事だった。
ただただ彼女の事に必死で、運転手の顔なんて気にしてられなかったんだ。
だが彼が病室に現れた時、その容姿を見てまさかと思い、声を聴いて確信する。

本物の、『芳野祐介』だと。
どうして彼がここに!?
感動と言うよりも驚愕。
嬉しさよりも戸惑いが優り、正直その場から逃げ出したかった。
公子さんに紹介され、ぎこちなく頭を下げ合う。
「わあっ!本物の芳野祐介さんだぁ!ファンなんです!」
なんて言えるはずも、死んでも言いたくも無く。
俺達は互いに、初見の人間同士の対応に終始する。
彼は言葉数少ないながらも、俺を気づかいねぎらってくれた。
そして去り際に、「何かあったら連絡してくれ」と名詞を渡される。
そこに書いてあったのは、電気工事関係らしき社名。
そう言えば、あの時乗せてくれた車も作業員が移動に使ってそうなワゴン車だった。
やるせなさと少しの安堵。
彼が引退して数年。
今何をしているんだろう?なんて考えた事もあったが……。
まさかこんな近くに居たとは……。
ひょっとしたら、もっと前にも何所かで作業中の彼と擦れ違っていたかもしれない。
かつてあれだけ惹かれ、そして裏切られた芳野祐介と……。

その芳野さんと昔一時世話になった公子さんが恋人同士で、もうじき結婚を間近に控えたこのタイミングで再会するとはな……。
これも何かの縁なのだろう。
「わかった……そういう事なら出席させてもらうよ」
「やりましたっ!来てくれる人一人ゲットですっ!」
ヒトデを両手で掲げるようにして万歳をして全身で喜びを表す妹

さんが微笑ましい。
余程公子さんの事が好きなんだろう。
もっとも、ヒトデを持ってはしゃぎまわるその姿は、やっぱり高校生には見えないが……。
「じゃあ、これで」
話も終わった事だし、あまりのんびりもしていられない。
俺は止めていた足を再び教室に向かわせようとする。
「待ってくださいっ」
しかし数歩行った所でまたも呼び止められた。
そして小走りで寄って来た彼女は、例のヒトデを突き出してくる。
「これ、お礼ですっ」
「いや、別にいいよ」
苦笑しつつ、やんわりと押し返しながら即答した。
「どうしてですか？おねぇちゃんの結婚式に来てもらうのに、何もお礼しない訳にはいきません。風子、とても義理堅いです。近所でも、あの子はとても義理堅いとよく言われてます」
その歳でか……。
「そ、そう。でもほら、俺は公子さんの知り合いな訳だし、行くのは当然だからさ……」
「それでは風子の気がすみません。それとも、ヒトデ、欲しくないですか？これは自分でも、とっても可愛く素敵に彫れたと思います。自信作ですっ」
「いや、だったら尚更自分で持っておけば？記念に」
「記念？何の記念ですか？」
「えっと……ヒトデ記念？」
「ヒトデ記念ですかっ！？」
冗談のつもりだったんだが、彼女は真に受けたらしく大袈裟に驚き、
「……」
はにゃ～んとなって、そのまま動かなくなった。

「……」
「……」
「……」
……まあ、ここなら滅多に人も通らないし、ほっといて平気だろう……。
一応「じゃ」と一声かけて、俺は逃げるようにその場を立ち去った。

第二章　4月23日　譲れない想い

教室に着いた物の、杉坂や仁科の姿は無かった。
今までは、よく俺と仁科の机をくっつけて二人で食べてたんだが……。
まあ、顧問の件とかもあるし、先輩達の様に部室で食べてるんだろう。
仕方なく自分の席に座り、昼食のパンを食い始める。
ここで食うのもなんか久しぶりだ。
周囲に大勢居る中での食事は、何となく落ち着かない。
よく、食事は大勢で食うほうが……なんて言うが、俺には解らない感覚だ。
そもそも、飯食ってる所なんて、人に見せる物じゃなくないか？
サッカーをやってたから大勢で飯を食う機会が無かった訳では無いが、尚更独りの方が誰にも気兼ねしなくていいから楽だと思っている。
仁科達は昼休みが終わるまで戻ってこなそうだな……。
決戦に備え英気を養うべく、食い終わって余った時間を、腕を組んだ姿勢で寝て過ごした。

仁科達が戻ってきたのは、五限目が始まるぎりぎりだった。
この時間に杉坂と話をつけるのは無理そうだな……。
「最近は他で食べてんのか？」
「えっ？ああ、うん。今後の事で話し合わなければいけない事もあったから、部室で」
五限目の後杉坂を借りる事を、一応言っておいた方がいいだろう。
浮かない顔で次の授業の用意をしている仁科に話しかけると、無理をして微笑んでくれる。
彼女は杉坂の件を知っているんだろうか？

それはまず無いとしても、例の件は彼女達にとっては深刻な問題なのだろう。
それこそ、脅迫まがいな事までする程の……。
「それって、顧問の問題か？」
「どうしてそれを……！？」
「古河先輩とは家が近所で、昔からの知り合いなんだ。大体の事情は聞いてる」
「そう……なんだ……」
一瞬、失望の色が浮んだ。
そして、それを隠すように仁科は前を向いて顔をそらす。
「だから俺としても、どっちかが身を引くような決着は望んでない。俺も一緒に何かうまい手を考えるつもりだ」
「うん……そうだね……ありがとう」
誤解させたかと思いフォローを入れたのだが、彼女は俯いたまま頷くだけだった。
……失言だったか？
しかし、隠しておくような物でも無いし、俺のスタンスを理解してもらう為にも前もって伝えておくべき事だろう。
そうこうしている間に、教師が現れ授業が始まる。
誤解されたままかもしれないが……って、肝心の杉坂の事言ってねえや。
まあ、授業中に話かけると仁科にも迷惑かかるし、目立つからな……。
仕方無いかと割り切り、五限目を寝てやり過ごす事にした。

号令をして五限目が終わると同時に席を立った俺は、そのまま真っ直ぐ杉坂の机に向かう。
「な、何よ？」

「ちょっと面貸してくれ。話がある」
杉坂は俺の顔を見るなり、威嚇する犬の様にあからさまに身体を強張らせて睨んでくる。
バリバリに警戒されてるな……。
ただ、それが後ろめたい事があるからなのか、それとも単に俺が嫌いなのかはわからない。
自分の嫌われっぷりと、杉坂の硬質な態度に、思わず溜息が出る。
「昨日の放課後の件についてだ……」
「！！」
彼女にだけ聞こえるぎりぎりのトーンでつぶやくと、途端、目に見えてに顔色が変わった。
ダメだな……どうやら嘘をつくのはあまり得意では無いらしい。
「わ、私が何したって言うのよ？」
「だから、俺にもわからないから、それについて話を聞かせてくれと言ってるんだ」
動揺しながらも一層逆ギレ気味になる彼女に対し、俺はかなり言葉を選びながら、最後は目を伏せ溜息混じりに言った。
暫しの静寂。
周囲も俺達の雰囲気に気付いたのか、声をひそめてこちらをうかがっている。
真っ直ぐ俺に敵意を向けてきていた杉坂だったが、一瞬視線が泳いだかと思うとハッとなって下を向き、覚悟を決めたようにようやく重い腰を上げた。
「いくわよ」
先だって歩き始めた杉坂は、遠い方の扉に向かっていく。
もう一方に目を向けると、不安そうに俺達を見つめる仁科の姿が視界に入った。

無言で彼女の後に従うと、旧校舎の一室まで連れて来られる。
それだけ誰にも聞かれたくないと言う事か……。
机と椅子は重ねられて後ろに寄せられ、半分程になった教室は、しかし二人では広すぎて。
近くに何も無いと言うのは妙に落ち着かなかった。
「訊きたい事って何よ？」
背中を向けたまま、ぶっきらぼうに尋ねてくる。
しかしその小刻みに震える細い肩が、それが彼女の精一杯の強がりだと伝えていた。
「三年の春原先輩……金髪の人な。あの人がお前の事をかぎ回ってるそうだ」
「！」
あえて脅かすような事を言ってやると、スレンダーな身体がビクンと反応する。
「……だ、だから何？」
「俺なりに調べてみたが、どうやら演劇部の先輩の所に脅迫状が届いたらしい。で、昨日の放課後お前が三年の下駄箱に居るのを見たって証言があった」
「そ、そんなの、ただ下駄箱を間違えただけじゃない！」
「かもな……でも、状況的にも動機的にも、お前が一番怪しいと思われてる。少なくとも春原さんは犯人はお前だと思ってるみたいだ」
「な、何よそれ……？それで、あんたも私がやったと思ってる訳？」
頼りない背中越しに俺を見ながら、そう尋ねてくる。
正直、俺も黒だろうと確信はあるが……それを言っても意固地にさせるだけだろう。
「さあな……問題はもうそこじゃない」
「どういう意味よ？私が真犯人かどうかなんて、どっちでもいいって事！？」

「そうだ。演劇部の先輩達の所にも行って話を聞いてきたが、先輩達は事を荒立てる気は無いそうだ。春原先輩にもそう言い含めてあるから、特に何かされるって事は無いとは思う……」

「そ……そう……」

俺の話を聞いて杉坂は肩の力が抜けたようで、声には少しの落胆と安堵の色がうかがえた。

そこを逃さず、俺はガードの緩くなった所に言葉をねじ込む。

「そうなると、立場が悪くなるのは、お前等合唱部の方だ」

「な、何でよ!?」

俺の言葉が余程予想外だったのか、杉坂は思わず半身で振り返る。

「よく考えろ。いくら事を荒立てたくないと言ったって、脅迫されて先輩達の気分が良い訳が無いだろ?脅迫に屈しないって事は、あちらが折れる事も無い。今後は徹底抗戦しかないって事だ」

「そ、そんなの、私がやった訳じゃ……」

「だから、お前がやったかどうかなんて、もう問題じゃないって言ってるんだ」

目をそらしながらまだとぼけ様とする彼女に、もう一度念を押して黙らせる。

「それにな。もしこの事が仁科や幸村先生の耳に入ったらどうする?仁科が喜ぶと思うか?あいつの事だ、むしろ身を引くんじゃないのか?先生だって、快く顧問を引き受けてくれると思うか?更に、これが噂にでもなってみろ。お前だけじゃなく、合唱部全員が脅迫状を出した卑怯者にされるんだぞ」

「じゃあ、どうしろって言うのよ!?」

一気に追い込むと、杉坂は逆ギレしてヒステリックに怒鳴ったかと思うと、詰め寄って来て俺のYシャツの胸ぐらを掴む。

「あんたなんかに、私達の気持ちなんてわかる訳無いわよ!!りえちゃん、先輩達に気を使って身を引こうかって言ってたんだよ!!何とか必死に説得して止めたけど、このままじゃりえちゃん、諦めちゃうかもしれないんだよ!?折角、元気になって昔のりえちゃ

んに戻ってきたのに、一年の頃のりえちゃんに戻っちゃってもいいの!?」

「だから、このままじゃ仁科にも不利だって言ってるんだろ?」

「そうよね……あんたはいいわよね!その方がりえちゃん一人占め出来るもんね!!」

訳がわからねえと思いつつも、言葉が出なかった。

間近にある瞳には光る物がにじみ、声も鼻にかかってきている。

ああっ、ホント女は卑怯だ。

泣きゃあ何とかなるんだから。

「……とにかく、古河先輩に謝っちまえ。先輩は優しいから、それでチャラにしてくれるハズだ」

目をそらしながらなだめる様に言ったのだが、しかし杉坂の目はきっと釣りあがる。

「それじゃあダメなの!何とかして先輩達が諦めてくれなきゃ!」

「どうして、どっちかが我慢する事しか考えられないんだよ?何とか両方部に昇格出来れば、それが一番だろ?」

「そんな都合のいい事が出来るなら、初めから悩んでないわよ!!顧問になれるのは幸村先生だけなんだから、部になれるのは残り一つだけなの!それなのに、私達が先に幸村先生にお願いしたのに、何で先輩だからって譲らなきゃいけないのよ!?」

「いや、だからな……」

ダメだ……頭に血が上っていて会話がループしてる。

休み時間も残り少ないし、今日はこの辺にしておいた方がいいだろう。

「もうじきチャイム鳴るから戻ろう。一人でゆっくり考えといてくれ。先輩達の所に行くなら、俺もついていってやるから……」

両手で顔を覆いながらも杉坂が頷いたのを見届けてから、俺は先に旧校舎の教室を出た。

まったく……浅はかと言うか、やるならせめて後先考えてから脅迫しろよ。

いや、もちろん脅迫なんて真似自体善くは無いが。
まあ、言いたい事は言ったし、あいつもそこまで馬鹿じゃないだろう。
それより問題は……このままじゃ、俺が杉坂を泣かせたみたいに思われそうだって事か……。

第二章　4月23日　蒼穹の太陽

帰りのHRが終り、皆それぞれの場所に散っていく。
それを横目で見ながら、俺は直ぐには動く気にはなれず、暫くイスに座っていた。
今日も俺は、一度帰ってから隣町の病院まで行くつもりだ。
あやちゃんは……いつ目を覚ますのだろうか？
手術から丸三日、彼女はずっと眠り続けている。
大事故の後、意識が戻らないなんてのはよく聞く話だが……。
このまま目を覚まさなかったら……？
容体が急変したら……？
そんなよくない事ばかりが何度も頭をかすめる。
どうしようもない。
彼女の生命力を信じて待つしか、祈る事しか出来ない。
だが……、
「川上……ちょっと」
横から声をかけられ、感傷から覚める。
見るとそこに立っていたのは、思い詰めた顔をした杉坂だった。
その雰囲気だけで察し、ほとんど空のカバンを掴んで俺も立ち上がる。
「りえちゃん、ごめん。今日は部活出れないかも……」
「えっ……？ええ……」
仁科も杉坂の表情からただ事じゃないと感じているのか、曖昧に了承した後不安そうに俺を見つめる。
それに一度頷いて見せ、俺は杉坂と共に教室を出た。
「あっ、オーキ！よかったら一緒に……！」
廊下に出るなり、主人をみつけた犬の様に智代が駆け寄って来る。
しかし何故か急に尻切れトンボの言葉と共に失速し、少し手前で止まった。

「何だよ？」
「……ひょっとして、その人と一緒に帰るのか？」
「は？」
「そんな訳無いじゃない！ただちょっと話があるだけよ。変な誤解しないで」
あからさまに落胆している智代の問いに、何言ってんだ？と思った俺に代わって杉坂が力一杯否定した。
すると智代はホッとしたように破顔する。
「そ、そうか」
「でも、いつ終わるかわからないから、急ぎの用じゃなきゃ帰れよ」
「ああ。わかった」
それに水を注す様に俺は付け加えたのだが、智代はそのまま嬉しそうに素直に頷く。
少し訝しく思ったが、まあ、いいかと、深く考えずに俺は彼女の横を通り過ぎた。

「私決めたわ……こんな学校辞めてやる……！」
「はぁ！？」
人気のな旧校舎の一室に着くなり、杉坂はあまりにも突飛過ぎる事を言い出した。
「いや、何をどうしたら、急にそんな結論が出る？」
「だって、それしかもう方法が無いじゃない！先輩達には弱味を握られてるんだし、このままじゃ、りえちゃんまで共犯にさせられちゃう……それだけは絶対に嫌！だから、そうなる前に私が責任とって辞めれば……」
「いや、だからな……そこまでせんでも、先輩達に謝れば済むったろ？」

「嫌よそんなの！！」

あまりに極端な言い分に辟易しながら俺は唯一とも言える打開策を提示してやったのだが、彼女はそれをヒステリックに拒絶する。

「そもそも、先に脅迫してきたのは、あっちじゃない！」

「……先輩達に何かされたのか？」

「言われたわよ……顧問の取り合いだって……でも、僕たち先輩だしなって……」

“僕たち”って……ああ、春原さんか……まったく余計な事を……。

「それって、春原さんが勝手に言ってただけだろ？他の先輩達には、そんなつもりはねえって」

「そんなつもりじゃない？ただでさえ先輩ってだけでも気を使うのに、あんな大勢で、それも有名な三年生の不良の人達まで連れて来て、それが脅しじゃないって言うの！？」

興奮気味な彼女の訴えに、俺は目眩を覚え頭を抱えた。

なるほど。そういう点からすれば、はじめから合唱部は分が悪かったと言える。

ただでさえ遠慮がちな仁科なのに、相手が先輩では尚更だろう。

そして脅迫観念に囚われた杉坂は、その劣勢を覆そうと考えあぐねた末に、こんな事しか思いつかなかったと言った所か。

だからって、脅迫状なんて卑怯な物は容認出来ないし、やり方も稚拙過ぎるが。

「別に部活のメンバーが付き添いで来ただけだろ？そもそも、お前が学校やめてどうすんだよ？それこそ合唱部の頭数が足りなくなっちまうだろうが」

「……あんた、あの坂上って子と付き合ってるの？」

「はい！？」

杉坂はそれまで俺を睨みつけていた視線を横に逸らしながら、また突然何の脈絡も無さそうな事を訊いてくる。

「別に……付き合ってねえよ。ただのダチだ」

「そう……ならあんたが合唱部に入ればいいじゃない」
「……はぁ？」
それとこれと何の関係があるんだ？と訝しく思いながらも事実を告げると、杉坂は目を伏せ何処か諦めたように、また訳のわからない事を言ってきた。
「確かに名前を貸してやるとは言ったが、そういう問題じゃねえだろ。お前が学校辞めたら、仁科はどうすんだよ？」
「だから、りえちゃんの事はあんたに任せるって言ってるんでしょ！！」
放課後の旧校舎に、癇癪をおこした杉坂の叫びがこだまする。
いくらこの教室には俺達だけとは言え、放課後のこの時間は旧校舎を部室にしている連中が結構居るんじゃなかろうか？
まったく……キレたいのはこっちだ。
「勝手な事言ってんなよ。お前が辞めた所で何の解決にもならんし、それで仁科が部活なんてやってられる訳ねえだろ？それこそ、あいつまで責任感じて辞めるって言い出しかねないぞ」
「じゃあ、一体どうしろって言うのよ！？」
「だから、とりあえず先輩達に謝れつってるだろ」
「謝ったって、どうせ顧問を譲る事になるだけじゃない！あんたどっちの味方なのよ！？」
「あのなぁ……いいか？お前等の敵は演劇部じゃなくて、融通の利かない学校や生徒会なんだよ。分が悪いって判ってんなら、潰し合う事より協力する事を考えろ」
「学校や生徒会が悪いって言ったって、どうしようも無いじゃない！」
「有るだろ？今の生徒会はもうすぐ任期が終わる。選挙で生徒会が一新されれば、双方の要望が通って校則だって変わるかもしれないだろ」
「！」
ハッとなって言葉を失った杉坂だったが、うなだれながら「無理

よ」と呟く様に言った。
だが、相手が冷静になったと見た俺は、すかさず諭しにかかる。
「無理じゃない！少なくともまだ可能性が有るんだから、自棄になるなよ。それに演劇部の先輩達も合唱部と争う事は望んでないんだ。でも、今のままじゃ話し合いなんて出来ないだろ？な？変な意地張っても、益々こじれるだけだぞ」
急に音が遠くなる。
西日の射す普段は使われる事の無い薄暗い教室。
そこに独りたたずむ少女の姿に寂寥感を感じ、絵になるなと思った。
「とにかく、学校辞めるなんて馬鹿な事はもう言うなよ。それと、今からでも部活には出とけ。仁科達が心配してるだろうからな」
背を向けて歩き出しながら最後に念を押し、ずっと黙り込んでいる杉坂と別れた。

まったく……話をややこしくしやがって……。
靴を履き替え、溜息をつきながら昇降口を出る。
まあ、今度こそ大丈夫だとは思うが……杉坂の言い分にも一理無い事も無い。
結局の所、現状では顧問の取り合いになるしかないんだろう。
それこそルールが変わらなければ……。
ん～……こんな事なら智代を待たせて……、
「オーキ！」
って、居たし！
校門で待っていたらしく、近くに来ると本人が小走りで駆け寄って来た。
驚きとあきれと嬉しさとバツの悪さがないまぜとなり、複雑な表情でそれを迎える。

「……急ぎの用じゃなきゃ帰れつったろ？」
「うん。だから、今日中に話したい事があったから、待ってたんだ」
半分照れ隠しの皮肉を言うと、何故か得意気な笑顔でそんな事を言いながら、クルリと長い髪をひるがえし、当たり前の様に智代は俺の右隣にピタリと並ぶと、ポケットに入れていた包帯の巻かれた腕をとる。
「怪我はどうだ？痛くないか？」
ああっ……こうなると坂上智代は無敵だな……。
懐かしい感覚に苦笑する。
はたから見たら腕を組んでるようにも見えそうだが、杉坂との舌戦で疲れていた事もあり、俺は無抵抗でいる事にした。
「平気だ。もうじきギブスも取れるしな。で、用件は何だよ？」
「うん。いよいよ明日から選挙戦が始まるな」
「だな」
「暫くは選挙活動で帰るのが遅くなると思う。だから今日は、お前と一緒に帰りたかったんだ」
「……それだけ？」
「それだけって言い方は無いだろ？女の子がわざわざ一緒に帰る為に待っていたんだ。もっと嬉しそうな顔をしたらどうなんだ？……それとも、やっぱりさっきの人と帰るつもりだったのか？」
右手をポケットにしまいながら、いつもの自信満々の智代節にあきれ顔で受け答えしていると、急にしおらしくなってそんな事を訊いてくる。
たまたま一緒に居ただけで勘繰るなよとも思ったが、渡りに船でもあった。
「違うつったろ？まあ、丁度いい。お前にも話しておきたかったからな」
「ん？私にか？」
俺が否定して話を振ると、途端に機嫌を良くして食いつく様に身

を寄せてくる。
　完全に肩は密着し、風に揺れる髪が頬に触れ、少し首を傾ければ頭同士も触れ合いそうだ。
「実はな……新規に部を立ち上げたいって所が二つあってな。でも、顧問になれる先生が一人しかいないんで、ちょっともめてるみたいなんだ」
「なるほど。お前はその相談にのっていた訳だな」
「まあ、そんなとこだ。お前ならどうする？」
「そうだな……顧問を掛け持ちしてもらうとかはダメなのか？」
「うちの学校は顧問が監督してないと部活出来ないし、前例が無いからダメだとさ」
「前例が無いなら、自分達が前例になればいいじゃないか」
「今の事なかれ主義の生徒会にそれを期待しても無駄だな」
「そうか……なら、私が生徒会長になって、前例を作る他無いと言う訳だな」
　相変わらずどこから出てくるんだ？ってくらいの揺ぎ無い自信に満ちた笑顔で、智代は言い切る。
　その眩しさに目を細めながら俺は「そういう事だ」と言って空を見上げた。
　どこまでも澄んだ穏やかな春の午後の蒼天に、暫し目を奪われる。
　ああっ、そういえば……ここ最近、空をみていなかったな……。
　そんな心の余裕すら無かった事に気付き、思わずフッ……と自嘲の笑みを洩らす。
「どうしたんだ？」
「いや……とにかくそういう事だから、選挙頑張れよ、智代」
「ああ。もちろんだ」
　やっぱりこいつと居ると、気が晴れるな……。
　暗く分厚い雲に被われていた長く陰鬱な春の嵐が去り、ようやくうららかな太陽をみた気がした。

第二章　4月23日　路傍の道標

「そういえば昨日、相良さんの所に行ってきたんだ」
一緒に並木道を帰っていると、智代はおもむろにそんな話題をしてくる。
「……誰？」
「相良美佐枝さんだ。この学校で初めて女子で生徒会長となり、そして、伝説の『全校生徒無遅刻無欠席ウィーク』を達成した人だ。知らないのか？」
「ふ～ん」
「ふ～んって、興味が無いのか？経験者から話を聞けと言ったのはお前じゃないか」
素っ気無い態度をとると、可愛く口を尖らせ抗議してくる。
ああっ、そういう事か。
「実理に相談したら紹介してくれたんだ。今は男子寮の寮母していてな。早速昨日の放課後訪ねてみた」
「寮母？へえ～！」
「……驚く所はそこなのか？」
大仰にリアクションしてやると、今度は眉を寄せられる。
どうすりゃええねん！とエセ関西弁でつっこもうかとも思ったが、ここはやめておく。
「進学校のここで生徒会長までやった人なら、普通大手企業やら、弁護士やらって、それなりの職についてる物だと思うだろ？」
「それはそうかもしれないが、寮母さんだって立派な仕事じゃないか」
「いや、寮母さんを馬鹿にしてる訳じゃなくて、ただ、面白そうな人だと思ってな」
「うん。そうなんだ。とても気さくで素敵な人だった」
真面目に答えてやると、智代は我が事の様に誇らし気に胸を張っ

てみせる。
どうやらその人を相当に敬愛しているようだ。
あの坂上智代が一度会っただけでこれ程入れ込むとは、それだけでもただ者じゃないと判る。
「それでな。どうやって全校生徒無遅刻無欠席ウィークを達成したのか聞いたんだ。そうしたら、彼女は何て答えたと思う？」
「ん～……『運がよかっただけ』か？」
「……正解だ」
子供のような得意顔が一転、智代は子供のようにつまらなそうにそっぽを向いた。
子供クイズよろしく正解しちゃマズかったらしい。
「何だ……お前も美佐枝さんを知ってたのか？」
「いや、今初めて聞いたけど」
「なら、何でわかったんだ？相良さんは『たまたま』だと言ってたんだ」
「実際そうなんだろ？元々遅刻や欠席はズル以外はイレギュラーな物なんだし、狙って出来る物じゃないだろ？まあ、うちは進学校だから、他所の学校よりかはやり易いかもしれんけど」
「それはそうだが……じゃあ、他の生徒会長が同じように挑戦しながら出来なかったのも、たまたまか？」
「それは違う。失敗した大多数の奴等には、“はじめから無理だった”んだよ」
「はじめから無理だった？どういう事なんだ？美佐枝さんはみんな躍起になりすぎて反発されたからじゃないかと言っていたが……そんな、はじめから無理なんて事が有るのか？」
仮にも先輩である歴代生徒会長達をまとめて斬って捨てた俺に、まるで自分が否定されたかのようにムキになって智代は食いついてくる。
「それはその相模さん……」
「相良さんだ」

「相良さんが“やれる人”だったからで、確かに一理はあるが、あくまで成功者側の意見だな。本質的な失敗の理由は他にある」
「それは……束縛や強要しようとしたからか？」
「それに近いな」
「近い……？」
「要はな、やる前から誰かに嫌われてたら無理なんだよ」
「ああっ！なるほど。そういう事か」
「別にサボりとかでなくても、熱っぽいとか、軽い頭痛とか、気合で何とかなりそうだけど、出来れば休みたいなって時は誰だってある物だろ？病気や事故よりもずっと日常的にな」
「つまり、そこで頑張って登校しようとしてくれるかどうかが、勝負の分かれ目って事だな」
「そういう事だ。別に好きな人間が躍起になってても、協力しようと思うだけだろ？そこで反発するのは、そいつに対して前から何かしら不満があるからだ。例えば普段偉そうなのに、こういう時だけ下手に出たりとかな」
「普段からみんなとどう接していたかが問われる訳か……」
「相良さん？て人は、相当慕われていた……と言うか、敵が居なかったんだろうな。恐らく本人にはあまり自覚無いんだろうけど」
「うん。そうだな……」
そこまで言葉のキャッチボールを続けると、智代は急に押し黙って逡巡を始めた。
こちらも無言で歩きながら、彼女の考えがまとまるのを待つ。
正直、はじめは地味な伝説だなと思っていたが……なるほどこれは至難の業だ。
よくもまあ、こんな無駄に大変な事をやろうと考えた物だと感心する。
いや、実際その相良さん？は出来るかどうかなんて、考えてもいなかったんだろう。
ただ、『やってみたら運よく出来た』くらいなもんなんだろうな

……。

男子寮の寮母か……。

機会があったら、一度会ってみたい物だ。

「はじめから難しい事だとは思っていたが……やはり今の私には無理そうだ……」

あの智代が珍しく諦観を呟く。

まあ、そうだろう。全校生徒全てから支持を集めるなんて、人間業じゃない。

「でも、どうして他の生徒会長は、こんなに難しい事に挑戦したんだろうか？自分は全校生徒に慕われていると自信が有ったのか？」

「別に、そこまで深く考えてなかったんだろ？ただ上辺だけ成功した人間の真似をしようとして、ボロが出て失敗しただけだ」

「そういう物か？」

「お前だって、失敗した人間の事までは考えてなかったろ？」

「それは……」

「成功した人間の真似は誰でもしようとするが、他人の失敗から何かを学ぼうとする人間は少ないからな。だから、歴代の盆暗はまったく同じ失敗を繰り返し続けて、相対的に成功者の名が上がって“伝説の生徒会長”なんて言われる様になったってトコだろうな」

「なるほど」

「まあ、俺ならやらないし、やらせない」

「どうしてだ？もちろんそれがどれだけ難しい事なのかはわかったが、挑戦するくらいイイんじゃないか？」

どうやら智代は無理だと言いながらも挑戦したいようだった。

こいつらしいと言えばこいつらしいが、もちろん理由はある。

「もし実際にやって、残り最後の一日って所で急病で休んだ奴が居たらどうする？」

「どうって……それは残念だが、急病じゃ仕方無いだろ？」

「お前はな。でも、その休んだ奴はどう思う？自分の所為で達成出来なかったんだぞ」

「そうか！その生徒は責任を感じて、気に病んでしまうかもしれないな……」

「それに、『あいつの所為だ』って周りから非難されるかもしれないし、逆に無理に学校に出てきて病気を悪化させる事だって有り得る。そういったデメリットもあるのに、無理にやる程の物じゃねえだろ？」

「お前の言うとおりだな……でも、それならどうして美佐枝さんはやったんだ？」

「その人もそこまでは考えてなかったんじゃない？あ～、いや、むしろ言い出しっぺは教師かもな」

「先生方がやらせたって事か？」

「ほら、清掃強化週間とかよくあるだろ？あれのノリで」

「ああ、なるほど……先生方から提案されたのなら、やるしかないな」

何を聞いていたのか、やる気に満ちた挑戦者の瞳でそんな事言う。

そんなにやりたいのか……。

半ば呆れつつもそんなところも可愛く思えてきて、ふっと鼻から笑みが漏れる。

「やってもいいが、目標を見誤るなよ？」

「もちろん、私の目標は忘れてない。でもな、それとは別に、美佐枝さんに会って思ったんだ。どうせなら、彼女の様な生徒会長になりたいって。ダメだろうか？」

目をつぶり豊な胸に手を当てながら智代は想いを語ると、懇願するような瞳を向けてくる。

なるほどな。同じことをやりたがったのは、その人への対抗意識からか。

これもまた、こいつの天佑なのだろう。

そんな身近に最高の手本となる人物が居て、選挙を控えたこのタイミングで出会えるとは。

「好きにやってみろ」

「うん。やってみる」
何故かとても自信有り気な笑みで頷く智代を見て、改めて確信を得る。
こいつもまた、相良さんと同じく何かをやれる人間なのだと。
「やっぱり凄いな」
遥か先にある頂を見上げているかのように、智代が感嘆の声をあげた。
「ああ、相良さんは大した人みたいだな」
「そうじゃない。いや、もちろん美佐枝さんも凄いが、今凄いと思ったのはお前に対してだ」
「俺？」
「美佐枝さんから直接話を聞いて、確かに色々と感じる事は多かった。でも、それはあくまで感覚的な物で、漠然としていてはっきりと形が見えてはいなかった。私と美佐枝さんに差が有る事はわかっても、それがどれだけの物なのかまではわかっていなかった。それは深い霧のたちこめる山の中で、どちらにあるのかも分からない頂を目指す様な物だ」
そこまで言って、智代はクルリと俺の前に回りこんだかと思うと俺の両手を掴み、真っ直ぐ俺をみつめて続ける。
「でも、お前と話して意見を聞けた事で、それが晴れた気がする。オーキはやっぱり凄いな。いつだって私に、歩むべき道を指し示してくれる。今の私にとって、美佐枝さんは遥か先に見える頂の様な物だ。でも、目指すべき場所が見えたなら、必ず辿り着ける。いや、必ず辿り着いてみせる！だから……だからなオーキ……これからも、私の……」
言いよどんだ智代の唇が振るえていた。
どうする？
どうする？
どうする？
その先の言葉を予感して返答を考えようとしたが、頭がうまく回

らない。
だが、
「……何かあった時は、また相談させてくれ」
智代は一度うるんだ瞳を閉じて昂ぶった感情を飲み込むと、下手な作り笑いでそう言った。
思わず抱きしめたい衝動にかられ、唇を噛んでそれに耐える。
折角智代が言わずにいてくれたのに、俺が流される訳にはいかないんだ。
「ああ」
「あっ、もちろんお前の悩みも聞いてやるからな。遠慮しないでいつでも言ってくれ」
「そうだな」
俺は路傍の道標。
一時お前が迷わないように先を示すだけの存在だ。
だから、あまり俺に構わず、己の道を行け。
二人が共に歩める道は、今の俺にもわからないから……。

番外編　海熊

「あぢい～」
まだ“朝マック”をやってる時間帯だと言うのに、真夏の太陽は早くも全開だ。
ザザーンと定期的に聞こえて来る涼やかな潮騒。
着ているのはTシャツとトランクスタイプの海パン。
更に海の家の裏手の日陰の中。
にもかかわらず……何なんだよこのクソ暑さは！？
じっとしてるだけでも汗が止めどなくにじみでてくる。
てか、日陰でこれじゃ、砂浜は直射日光と照り返しの相乗効果で灼熱地獄と化してるに違いない。
ああっ、もう何でもいいから早く帰りてえ……。
「待たせたな」
カチャリというドアノブの音に目を向けると、暫し暑さを忘れ魅入ってしまう。
真っ白な素足にビーチサンダル。
長くしなやかな脚線美を下からたどると、肝心な所には心憎い赤いパレオ。
しかしその先には、抱き寄せればすっぽり片手におさまりそうな魅惑のくびれ。
そしてその上にある、見ているだけでよだれが出そうな、みずみずしい二つの果実。
颯爽と現れたのは、真夏の戦乙女だった。
「みんなで買いに行った時に実理が選んでくれたんだが……どうだ？似合っているだろうか？」
出来れば隠したい手を片手で制する様なポーズで、恥じらいながら訊いてくる。
いや、似合ってるも何も……。

俺は真っ先に思い浮かんだ言葉を素直に告げた。
「けしからん！」

ＣＬＡＮＮＡＤ　～Ｌｉｇｈｔ　ｃｏｌｏｒｓ～　番外編『海熊』

きっかけは、智代が宮沢から海の家の手伝いをしていると聞いてきた事だった。
「だから、一緒に海に行かないか？」
「……宮沢が働いてる所に顔出すだけなら」
「なんだそれは？お前は折角海まで行ったのに、海の家にだけ寄って帰るつもりなのか？それとも、何か海に嫌な思い出でもあるのか？」
「……実はな、子供の頃、家族で海の側でキャンプをした事があってな」
「うん」
「テントの中はムシ暑くてな……なかなか寝付けなくて、ついに俺はテントを抜け出して、夜の砂浜に出たんだ」
「そこで、何かあったのか？」
「ああ。その日は丁度新月でな……灯りと言えば遠くで回ってる灯台と、点々とある民家か車くらいでな……」
「ど、どうなったんだ？」
「見上げると満天の星空だった。波打ち際に立つと、空と海の色が同じで、水平線が曖昧でな……まるで夜空が足元まで押し寄せてくるようだった……溢れる涙が止まらなかったよ。世界はなんて美しいんだってな……」

「そんなに感動的だったのか……って、それのどこが嫌な思い出なんだ？」

「それと同時に思い知ったんだ。己の矮小さと、人間という種の愚かさをな……だってそうだろ？あの夜空は、昔ならどこででも見られる物だったんだ。でも、それを難しくしたのは、他でも無く人間だ。この町は田舎だからまだ空は綺麗な方だが、あの日の星空には劣るし、都会じゃほとんど星が無いらしい。馬鹿馬鹿しいと思わないか？」

「人がどれだけ罪深い種であるかと言う事と、海が嫌いな事は関係無いだろ？」

「……だって暑いし」

「だから、海に入れば冷たくて気持ちいいだろ」

「どうせモロ混みだし」

「それは仕方が無いが、少し沖に出ればいいんじゃないか？」

「泳ぎ苦手だし……」

「……結局、それが本当の理由か！わかった。なら、丁度いいじゃないか。私が泳ぎを教えてやろう」

「いや、いいから」

「遠慮するな。こんなに可愛い女の子が、手取り足取り教えてやろうと言ってるんだ。光栄に思え」

こうして、俺は図らずも海水浴に来る破目に。

まあ、他の奴等を連れて行くのは何とか阻止出来たが……。

智代に手を引かれながら泳ぎの練習とか、死んでも知り合いには見せられんからな。

「ところで、鷹文や実理達も誘った方がいいだろうか？」

「ん、そうだな。どうせなら……あっ、いや、やっぱり二人だけで行かないか？」

「二人っきりでか？うん！実は私もそうしたかった！みんなで遊ぶのも楽しいが、やっぱりお前とのデートが一番楽しいからな。お前も同じ想いでいてくれて嬉しい」

おかげで、ますます深みにはまったぽいが……。

で、当日。

海水浴場が混む前にと結構早目に出発した俺達は、電車とバスにゆられて現地についた。

「いらっしゃいませ～。お二人とも来てくれたんですね」

聞かされていた店に顔を出すと、接客中の宮沢がエプロン姿で迎えてくれる。

調理場に立っているのは、お約束のようにいかつい男達。

他のウェイトレス達も身なりは普通だが、何気無い挙止にヤンキー臭がかくせていない。

まあ、宮沢の“お友達”がやってると聞いてたから予想はしてたが……。

「な、なあ、有紀寧。あいつらに作らせて大丈夫なのか？お前が作った方がいいんじゃないか？」

厨房を見て心配になったらしく、智代が不安気に宮沢に訊いた。

しかし宮沢はいつものほんわかスマイルで言う。

「大丈夫ですよ。みなさん“プロ”ですから」

えっ……それって……まさか……？

……あまり深く考えるのはよそう。

「プロ？それは、あいつらは調理師の資格を持ってるって事か？」

いや、だから深く追求しちゃダメだ！

「はい。まだ見習いの人も居ますが、みなさん本職の方ばかりですから」

「そうか。それなら安心だな。言われてみれば、まだお昼には早い時間なのに結構お客さんが居るな」

本職ってカタギのって事だろうか？とか気になったが、とりあえず味は悪く無さそうだ。

智代の言うとおり、既に店内の三分の二程度はテーブルがうまっている。

これからますます混むだろうし、あまり長居すべきじゃないだろう。

「じゃあ、また飯時にでも顔だすわ」

「はい。ああ、よろしかったら、お店の更衣室を使ってもらってもかまいませんよ。裏手から直接外にも出れますし、備え付けのシャワーもありますよ」

おっ、マジか？

公共の更衣室とシャワーは凄まじく混むから、それはとてもありがたい。

「いいのか？店の人間でもない私達が使って……」

「お二人なら全然かまいませんよ。みなさん了承済みですし、お店の方が一段落するまで、使う人もいませんから」

「なら、使わせてもらうか」

「すまないな有紀寧」

渡りに船と宮沢の厚意に甘える事にした俺達は、外でおち合う約束をして、店内にある男女別の更衣室で着替える事にした。

「けしからんって、どういう意味だ？似合ってないって事か？」

白いビキニに腰に赤いパレオを巻いて更衣室から出てきた智代は、先に待っていた俺の素直な感想にむくれてすねて見せる。

「そうだな。こんな大胆な水着は、私みたいな人間に似合う訳が無かったな。いつも制服ばかりだから、手足にだけ日焼けの痕がついてしまっていて凄く格好悪いし……」

「てい」

「うわぁっ！？」

ペシッとパレオをめくってやると、智代は慌てて上から両手で押さえた。

一瞬垣間見えた白いデルタ地帯に、パンツじゃないとわかってい

てもドキリとしてしまう。
「女の子のパレオをめくる奴があるか！」
「男のパレオめくる趣味は無い！」
「そもそも男がパレオなんてつけるか！」
「別にいいだろ？どうせ水着なんだし」
「良い訳あるか！水着だとしても、やっぱり恥ずかしいんだ」
「なら、上はいいのか？」
首を伸ばして上から見下ろすようにガン見してやると、暫くジッとしてはいたが、耐えられなくなったのか両手で隠して背を向けてしまう。
少し残念だが、肩や背中のラインにそれはそれでそそられた。
「あまりジロジロ見るな！上だって恥ずかしくない訳ないだろ」
「じゃあ、もっと布地の多いのにすればいいだろ？」
「それだと可愛いのがあまりない……」
ミニスカートと同じ理屈か。
「それに、お前はオッパイが好きだからな。喜ぶと思ってこれにしたんだ」
「ほう……ならもっと見せろ！」
挑発的な悪戯っ子の笑みと理屈にカチンときて、俺は背中から抱きしめる様に襲いかかった。
「こ、こらっ！手をどけようとするな！」
「俺に見せる為にこれにしたんだろ？」
「違う！いや、違わないが……どうしてお前はそうデリカシーが無いんだ！？」
「見てほしいけど、見られたくない、微妙な女心か？」
「うん！その通りだ」
こんな状況であっても、何故か少し得意気に頷く。
その無邪気さに毒気を抜かれ、俺は両手を放した。
そしておもむろに……Tシャツを脱ぐ。
「な、何でここで脱ぎ始めるんだ！？」

「ほら、着ろ」
そしてそれを、何を勘違いしたのか赤くなって動揺している彼女に放って渡す。
「何だ突然？……やっぱり、似合ってないから隠せって事か？」
「似合ってなきゃ無理矢理見せろなんて言うかよ」
「……それだけ似合っているって言いたいのか？」
「まあ……な。出来れば俺の部屋で二人っきりの時は、ずっとその格好で居て欲しいくらいだ」
「そんなにか……でも、さすがにそれは凄く変態チックだから、勘弁して欲しい」
「遠慮するな」
「変態だ……どうして私はこんな変態の為に……」
乙女は後悔の念にさいなまれ、膝から崩れ落ちた。
今更だが、何でも変態扱いされるのはこちらも心外である。
女心うんぬん言うなら、照れ隠しでつい滅茶苦茶言ってしまう男心もわかって欲しい。
「でも、海居るのは俺だけじゃないだろ？その……他にも野郎はいるんだし……な？」
「他の男達には、私を見せたくないって事か？」
「お前が注目浴びてビーチの主役になりたいってんなら、止めんが……」
「そんな物になりたくはない。私もお前以外の男になんて、出来れば見られたくは無いんだ。でも、いいのか？お前のTシャツを借りてしまって？」
「いいよ。元々余分に持ってきてるし。ああ、でも汗臭いかもしれんが……」
「……うん。お前のにおいがするな。ありがたく着させてもらう」
わざわざTシャツのにおいをかいで嬉しそうにしないでくれ！
気温とは別の熱さを感じ、背を向けてそれを隠すと、立てかけておいたパラソルを抱えた。

「よし、じゃあ、帰るぞ」
「うん。そうだな……って、待て！帰るって何だ？」
俺のTシャツに首と肩だけ通した智代に、肩を掴まれつっこまれる。
これはこれで胸が強調される感じになってとてもセクシーだ。
「もう目的は果したんだし、帰りの電車が混む前に帰ろう」
「まだ海に入ってないだろ！泳ぎの練習もしていないし、半分も果たしてないじゃないか」
ちっ、なし崩しに帰ろうと思ったのに……。
「だから、続きは俺の部屋でいいだろ？」
「一体何が“だから”なんだ？お前の部屋では水着にならないと言ってるだろ！」
「え～」
同時に智代がTシャツを下ろして胸を隠してしまった事もあり、ガッカリの相乗効果でうなだれて持っていたパラソルを落とす。
「そんなに残念そうな顔をしないでくれ……仕方の無い奴だな。じゃあ、泳ぎの練習をしたら、一度だけお前の部屋でも水着になってやる。どうだ？」
なんだって！？
思いも寄らぬ智代の妥協案に、さすがに食指が動く。
いや、でもな……あの海に入って泳ぎの練習するのか……。
俺は腕を組み、冷静客観的かつ様々な角度から熟考を重ねてみる。
・すげえ暑い……－１Ｐ
・人が大勢いる……－１Ｐ
・練習とか恥ずい……－１Ｐ
・智代の水着……隠れてしまったので＋－０Ｐ
・俺の部屋で水着……３Ｐ
「……」
「そ、そんなに考え込む様な事なのか？」
「なあ、やっぱり海で遊ぶだけにしないか？当然、部屋で水着に

はなってもらう」
「ダメだ。もう、こんな事をしていても仕方無いだろ?行くぞ」
遂に業を煮やしたのか、智代は落ちているパラソルを片手で軽々と抱えると、もう片方の手で俺の腕を掴んで強引に引きずりながら歩き始める。
クソッ、このままでは傍から見たら、女に手を引かれ荷物まで持たせる情けない男じゃないか。
「俺が持つ」
仕方なく足を速めて隣に並ぶと、パラソルを掴んで海へと向かった。

あちい……てか、いてえ……。
遮蔽物の無い砂浜に出ると、天然のソーラー・レイに焼かれ、体力がみるみる削られていく。
しかし、まずはパラソルを立て自分達の陣地を作らねばならない。海まで程よい距離で、なるべく汚れてなくて、空いてそうな場所を探して彷徨い歩く。
「これは暑いな……大丈夫か?ここまで日差しが強いと、何も着ていない方があついだろ?私も初めからTシャツを着てくるべきだったな」
隣の智代が済まなそうに俺を気づかう。
元々俺でも大き目だったTシャツは智代にはブカブカで、本来太ももまで隠す程長い丈を腹の所で縛って止めていた。
「そういえば、日焼け止めは塗ったか?」
「いや……」
「それはいけないな。男でも塗った方がいい。場所を決めたら塗ってやろう」
「ああ……」

「なあ、この辺りでいいんじゃないか？」
「ああ……えっ？」
生返事をしながら少し歩き、立ち止まって聞き返す。
「ここでいいんじゃないかと言ったんだ。大丈夫か？何だか辛そうだ」
「ああ、少しぼおっとしてた。ここか？ちょっと混んでないか？」
水辺まではそれ程遠く無いが、前にも横にもパラソルが連なっている。
俺としてはもうちょい人のいない所の方が落ちつくのだが。
「これからますます混むだろうし、どこでも同じじゃないか？それにお前も辛そうだ。早く場所を決めて休んだ方がいい」
「そうだな……ここにすっか」
「うん」
俺がパラソルを立てると、すかさず智代がその下にビニールシート敷き、瞬く間に俺達の陣地が完成した。
「はぁ……」
その日陰に倒れこむように寝転がる。
「って、あつっ！！」
じわりと伝わってきた熱に跳ね起きた。
まるで焼けた鉄板だ。
ああ、そうか……今の今まで直射日光浴びてたんだから、そりゃ直ぐには冷めないよな……。
「大丈夫か？確かにこれは直にだと熱いな」
智代もしゃがんでシートの温度を確かめる。
おのれ、こんなトラップカードが伏せてあろうとは……。
これじゃあ休めないじゃんか！
「クソッ、どうすれば……？」
「海に入るしか無いんじゃないか？時間が経てば冷めるだろう」
「うぐぅ」
最早それしかこの灼熱地獄から逃れる術は無いのか……。

「ああ、日焼け止めを塗らないとな。ほら、塗ってやるからじっとしていろ」
既に抵抗する気力も無く、日陰の中で智代にされるがままに全身に塗りたくられる。
手遅れな気もするが、塗らないよりましだろう。
智代は何が楽しいんだってくらい御機嫌で。
実は俺の方も、彼女の手は柔らかくひんやりしていて、とても気持ちが良かった。

海に入ると、ようやく生き返る。
「どうだ？気持ちがいいだろ？」
「ああ」
「じゃあ、早速練習を始めよう」
「いや、いいって」
「ダメだ。ほら、いくぞ。まずはバタ足からだ」
智代が向かい合って俺の両手を取り、バックしながら非情にもより深い沖の方へと俺を誘う。
それに対し、俺もジャブジャブと水を掻き分けながら進んで行く。
「……どうして歩いてきちゃうんだ？」
「いや、足着くし」
「そういう事か……なら！」
「お、おい！」
俺の戯言に一瞬智代はキランと目を光らせると、急激に引っ張る速度を上げてきた。
腰から胸、首と次第に水位が増してゆき、
「ちょっ待っ！！ゴボゴボゴボ……！！」
段差で一気に足がつかなくなり、俺の体は頭まで水中に沈んだ。
「ブハッ！！殺す気か！！」

たまらず両手両足で水を掻き、必死にもがいて何とか海上に顔を出すと、飲んだ海水を吐き出しながら某上島ばりに叫ぶ。

しかし智代は、何故か少しつまらなそうな複雑な顔をしていた。

「そんな訳無いだろ。もちろん溺れたら直ぐに助けてやるつもりだった。でも、何だ。足がつかない所でもちゃんと浮かべてるじゃないか」

「あのな……」

溺れて欲しかったてのか……。

色々言いたい事はあったが、とりあえず立ったまま平泳ぎをする感じで足の着く所まで戻る。

「泳げてるな……まったく泳げないという訳じゃないんじゃないか？」

「だから苦手は苦手だっての。別に不恰好でいいなら、多少は泳げる」

「それならそうと先に言ってくれ。泳げないと思ったから、特訓した方が良いと思ったんじゃないか」

「じゃあ、もういいだろ？適当に遊ぶだけにしようぜ。既にかなり疲れたし」

「……仕方の無い奴だな」

さっきのダウンもあってか、渋々ながらも智代は折れてくれた。

それから俺達は、腰くらいの所で定番である水のかけっこを始める。

「オラッ！」

バシャ！

「やったな！」

バシャーン！！バシャーン！！

「くっ……！」

バシャ！バシャ！

「わぁっ！負けるか！」

バシャーン！！バシャーン！！バシャーン！！バシャーン！！

「おのれ！！」
バシャーン！！バシャーン！！
「これならどうだ！！」
バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！バシャッ！！
普通に水を手ですくってかけ始めた俺に対し、智代はしょっぱなから前傾姿勢になって全身で懐にある海水を丸ごと放ってくる。
しかも一度攻撃すると、ムキになって常に倍の回数を反撃してくるのだ。
これでは割りに合わないと、俺もガードを棄て同じ前傾からの全力攻撃に切り替える。
だが、奴にはまだ一回変身が残っていたらしく、速射モードと化して俺に反撃する間を与えてはくれない。
「……」
最早棒立ちになって、あいつが疲れるまで水の砲撃を受け続けるしかなくなった。
だが、それで冷静になってハッと気付く。
俺達は周囲から滅茶苦茶注目されていた！
やべえ……周りにすげえ迷惑かけてるよ。
非難してくれていたのか、近くにこそ人はいなかったが、余波だけでも相当な物だろう。
どうやら智代との水のかけ合いは、近くに人の居る所ではやってはいけないようだ。
「そろそろ飯にしない？」
「まだ始めたばかりじゃないか」
「いや、ほら……」
「あっ……」
ようやく攻撃がやんだ所を見計らい、そう提案する。
はじめはムッとした智代だったが、顎で周りを指してやると、よ

うやく自分が注目の的になっている事に気付き、バツが悪そうに寄って来たので、一緒に小さくなって小走りで浜に上がる。
「お昼には少し早いが、仕方無いか」
「混むと並ぶかもしれないしな。宮沢の所でいいだろ？」
「そうだな。ん？」
「キャーーー！！」
遠くから聞こえて来た悲鳴に、俺達は何事かと沖の方に視線を向ける。
そこに見えたのは、海上を走り回る二台の水上バイクだった。
遊泳区域内を、それも他の海水浴客のスレスレを、むしろビビらせて楽しんでいるかのように走り抜けている。
なんて危険な真似を……！
「おいおい、ヤベーよあいつら」
「まったく、マナーを守れよな……」
見ると前でボードを抱えた二人のサーファーっぽい奴等が勝手な事を言っていた。
いや、お前等もこんな人の多い所でサーフィンすんなよ！
俺が心の中でそうつっこんでいると、いきなり智代はそいつらに向かって走りだす。
「すまない！借りるぞ！」
「えっ！？ちょっ、おいっ！！」
そしてサーファーの一人からボードを擦れ違いざまに奪うと、反転して戻ってきて、そのまま海に向かっていく。
まさか……！
嫌な予感、いや、確信を覚える。
智代は水上バイクを撃退に行くつもりだ。
案の定、ある程度行った所で彼女はボードにのってパドリングをはじめる。
無理だ！
あいつが無茶なのはいつもの事だが、今回ばかりは不可能だ。

サーフィンであいつ等に近付き攻撃？するつもりなんだろうが、そもそも海水浴場というのは比較的波の穏やかな場所を選んで設置されている物だ。
それこそ嵐かどこかで大地震でも起きない限り、乗れる程の波なんて滅多に来ないし、そんな波が来る日は遊泳禁止になっている。
波が来ないのでは近づけても、ボードに立つ事はおろか、かえって危険なだけだ。
「クソッ！！」
智代を止める事も、助ける事も出来ない自分に歯噛みする。
だがその時、俺は水辺に異変が起きて始めていたことに気付いた。
水際が……遠い！？
まさか潮が引いているのか！？
当然引いた分は、それだけ一度にまとまって返ってくる物。
つまりこれは……大波が来ると言うのか！？
再び智代に視線を戻した時、俺は目を疑った。
それまで穏やかだった海に、智代の身体を飲み込む程巨大な波を見たからだ。
それに乗り、ついに彼女はボードの上に立ち上がり、正面から水上バイクに迫る。
そして、
「うおっ！？あぶねえ！！」
「危ないと思うなら……」
ボードから跳躍すると、
「はじめから遊泳区域に入ってくるなぁぁぁ！！」
擦れ違い様の強烈な飛び回し蹴りを放った。

歓声に沸く浜辺に、スーパーヒロインが帰還する。
「よくやった！」

「可愛い～！」
「付き合ってくれ～！」
群がり、口々に勝手な事を言い合う野次馬ども。
「すまない。通してくれ」
それを掻き分けながら、彼女は俺の前に現れた。
「……すまない。仕方が無かったんだ」
そして俺の表情を見るなり、いつもの言い訳をはじめる。
言いたい事は沢山ある。
今起きた奇跡への感動と、坂上智代という少女の持つ天運への畏怖、だとしても無謀で危険な行動への怒り、そして無力な自分への憤り。
だが、今はそれどころでは無い。
「逃げるぞ」
「えっ？あっ！！」
俺はおもむろに智代の腕を掴んで走りだす。
幸いバイクに乗っていた男は、吹っ飛んだ直後もう一台のバイクに拾われ去っていった。
多分死んではいないだろう。
だが、
「ど、どうして逃げる必要があるんだ？」
「アホか！ライフセイバーとかに見つかったら叱られるだろうが」
「でも、悪いのはあいつらじゃないか……」
「本気で怒るぞ？」
「……すまない……」
そのまま俺達は走り続け、ひとまず宮沢の働く海の家に逃げ込む。
神ならざる身の俺に出来るのは、こんな事だけだ。
それでも俺は、このやんちゃな女神を守りたい。
人に可能な範囲内の、あらゆる手段を用いて。
その後、人一倍目立つ智代を連れて浜に戻る訳にもいかず、俺が

一人でこっそりパラソルを回収して、結局俺達は昼前に帰る事になる。

どうやら智代的にはそれが一番こたえたらしく、崩れ落ちる程落ち込んでそれを慰めるのに苦労したのは言うまでもない。

第二章　４月２４日　実は重力使い！？

繁華街には原色の光が溢れ、雑踏もスーツ姿ばかりが目立つ様になってきた。

息がつまりそうな居心地の悪さを感じながら目印の建物を頼りに路地に入ると、途端に辺りは薄暗く人もまばらになる。

脇道に入っただけで、まるで違う世界のようだ。

その物寂しい世界の方が落ち着く自分を、ふっと鼻で笑う。

「ここか……」

目的地らしい店をみつけ、街灯の灯りを頼りにもう一度メモの切れはしを取り出し確認する。

こんな所で客が来るのかと疑問に思ったが、だからこそたまり場には丁度良いんだろう。

黙想……。

目を閉じて、これから起こるであろうあらゆる事態を想定し……。

最後にそれらを全て忘れて、俺は扉を開けた。

「あんたが赤壁（あかかべ）さんか？」

店の一角を占領しているガラの悪そうな一団をみつけて、リーダー格らしき男に声をかける。

炎の様に逆立てた赤い髪に尖がったサングラス。

間違えようの無い風貌のこの男は名は『赤壁』。“この町の底辺”“不良率１２０％”などと揶揄されるこの町の工業高校の実力者の一人だ。

あそこは不良が多いだけに一つにまとまっておらず、いくつかの派閥が出来ており、こいつはその中の一つのトップと言うわけだ。

「何だぁテメエは？あん！？」

ジロリと一睨みしただけの男の代わりに、手前に座っていたデカイ角刈りが立ち上がり威圧してくる。

しかし俺は一瞥くれただけで、真っ直ぐリーダーを見据えて名乗

った。
「光坂の川上だ。須藤から話は聞いてないか？」
「ああ、テメエが川上か……思ってたより小せえから、わかんなかったよ」
グラスの中身を飲みながら言った赤壁の軽口に、どっと下卑た笑いが起こる。
「まあ、よく言われるよ。聞いてるなら話は早い。今後はウチの生徒、特に坂上との揉め事は無しにしてもらいたい」
それを一笑で受け流し、俺は単刀直入に用件を切り出した。
とたんに笑いが止み、再び敵意しかない視線を集める。
「何勝手な事ほざいてんだコラ！」
「さ、坂上だぁ！？あんな女眼中にねえんだよ！」
「ちょっと勉強が出来るからって、工業高校なめてんじゃねえぞ！？」
しかし、凄みながらも皆一様にその額には冷や汗が滲んでいた。
やはりまだ、俺より『坂上』の名の方がはるかに効き目があるのか……。
その事に対する複雑な思いを込め、しみじみと諭す様に言う。
「この中には、あいつと何かしらの因縁がある奴も居るとは思う。でも、そいつは水に流してもらいたい。ウチにはあんたらと揉める気は無いんだ。もちろん坂上にもな」
「水に流せだと？俺達が坂上にどんな目に遭わされたかわかってんのかよ！？」
「そんな与太話、信じると思ってんのか？この前も坂上がバイクに乗った奴等をボコッたって聞いたぞ？大体、テメエだって宮沢のトコとやりあってんじゃねえか」
「ああ。だからなんだ？」
奴等の負け犬根性が露呈したのを見て、俺はここが勝負所と視線に力をこめ声を低くして居直る。
「やりあう気は無くとも、ウチにちょっかい出す奴等は当然潰に

決まってるだろ？宮沢のトコとの経緯は、須藤から聞いてねえのか？」

「し、知るかよ……ただ、テメエがあいつらとやりあったとしか……」

「なら、あいつらに言った事と同じ事を言ってやる……坂上智代と戦いたいなら……この俺を倒してからにしろ！」

4月24日（木）

バイトが無いと朝は随分余裕が有る。

夜は9時くらいに寝て、朝は5時くらいに起き、外で軽く汗を流す。

おおっ、凄まじく健康的だ！

あまりに健康的なので、余った時間を布団に寝っ転がりながらゲームをして過ごす。

まあ、こうしてのんびり出来るのも、今週いっぱいだからな……。

来週からまたバイトが始まる事を考えると、気が重くて溜息が洩れる。

しかしまあ、ここ最近入院費とかで出費がかさんでるから、稼がない訳にもいかない。

ああっ……どうして俺の家は大地主とか大財閥とか石油王じゃねえんだろ……？

「おはよう、オーキ！あっ……さだぞ……」

「……」

いつもの様にノックも無く元気にドアを開けて顔を出した少女は、寝転がる俺と目が合うなり何故か表情を曇らせる。

「なんだ……起きてたのか」
「起きてちゃ悪いのかよ……」
「そう言う訳ではないが、お前の寝顔はなかなか可愛いからな。どうせなら見たかったんだ」
智代は相変わらず勝手な事を言いながら勝手に入ってきて、寝ている俺を他所に立てかけてあるテーブルを組み立て始めた。
短い制服のスカートがヒラヒラとゆれ、眩しい太ももが男の邪心をくすぐる。
しかし、今の体勢からはどんなに首を引いたり捻ったりしても肝心な物が見えそうで見えない。
クソッ……チラリズムとは智代のくせに生意気だぞ！
「スケベ」
そして、白眼と侮蔑と共にドンと目の前にテーブルが置かれた。
「黒」
「白だ！って、乙女に何を言わせるんだお前は！？」
「見えてないから安心しろって事だよ」
「そもそも女の子のスカートの中を覗こうとするな！どうしてお前はそうHなんだ？」
「エロイ男が嫌なら来るなよ！てか、何で来てんだ？今日から選挙が始まるんじゃないのか？」
「そんな言い方はないだろ？今日の昼休みに説明会があるんだ。それで明日の朝に立候補者の告知がされるから、本格的な選挙活動は明日からだな」
「あのな……」
今日の朝からじゃないのかよ！
いや、まあ、色々あった事もありスケジュールを把握してなかった俺も迂闊だったのだが……。
「だから、朝一緒に登校出来るのも今日までかもしれないんだ……今日ぐらいいいだろ？」
「なら、パンツくらい見せろ」

「どうしてお前は……そんなに女心がわからないんだあぁぁぁっ！！」

「うおっ！！」

俺の冗談を間に受けたのか、智代は怒りの咆哮と共に跳んだかと思うと、寝ている俺の顔面めがけ蹴りを放ってきた。

智代の固有スキル“グラビティージャンプ”発動！！

ドッシーン！！

ギリギリ転がって避けた所にハイソックスの足が踏み下ろされ、布団が足型にめり込み衝撃でビリビリと一軒家が揺れる。

布団の上からこの威力……食らってたらやばかった。

「何すんだ！？」

「そんなにパンツが見たいなら見せてやる！だから避けるな！」

なるほど！って、完全にブチ切れてやがる。

どうする？

あの蹴りを力の逃げ場の無い寝ている状態で受ければ、マジで死にかねない。

まさにデス・オア・グローリー。

いや、デス・オア・パンツ。

などとアホな事を考えている間に、再び智代は宙を舞う。

ベキッ！！

「グッ！？」

鈍い音が鳴った。

咄嗟に両腕をクロスして蹴りを受けた物の、その衝撃で右手のギプスが粉々に砕けたのだ。

それでも凄まじい衝撃が俺の身体を貫く。

まったく、なんつう破壊力だよ！

てか、病院行ったら怒られるんじゃないかコレ？

そう思いながら見上げると、智代は呆然としたまま固まっていて。

確かに白だった。

「ちょっとオーキ！何ドタバタしてるの！？」

ドンドンと扉が叩く母の苦情で互いに我に返り、智代は後ろに跳び、俺は転がって離れる。
そりゃ、あんだけ家が揺れれば、お袋も来るわな。
「何でもねえよ！ゲームしてただけだ」
「ゲームしてて家が揺れる訳無いでしょ！！坂上さんの声も聞こえたけど、あんた何かしたんじゃないでしょうね！？」
「ウィーだよウィー！！体動かす奴あるだろ？ゲームで興奮しただけだって。わかったから、行けよ！」
「……時間もそんなに無いんだし、早くゲームは切り上げて学校に行きなさいよ」
何とかお袋を撃退して、階段を下りていく音にほっと一息つく。
するといつの間にか寄ってきていた智代に、すっと右手を取られた。
「すまない！！お前は怪我人なのに、つい本気で蹴ってしまった……頭に血が上って、見境が無くなってたんだ……どうしよう？怪我を悪化させてしまったかもしれない……うわぁぁぁ！！私は何て事をしてしまったんだぁぁ！！」
「大声だすなって！」
包帯の巻かれた俺の右手を抱きしめ取り乱し始めた智代の口を、慌てて左手で塞ぐ。
お袋が戻ってきたらどうすんだよ！
何気に右手がとても気持ちよかったが、それ所では無い。
「大丈夫だ。ギプスが壊れただけだから」
そして外の気配を探りお袋が来ない事にほっとすると、不安気にみつめる智代をなだめながら手を放す。
「でも、ベキッって凄い音がしていたじゃないか……本当に大丈夫なのか？」
「大丈夫だって……ほら」
俺は智代の胸に押し当てられていた手の指をわきわきと動かしてみせた。

「あっ！こらっ！何処を触ってるんだ！」
「元々大袈裟にギプスさせられただけだからな。別に何ともない」
それで惜しくも開放されてしまった手をそのまま彼女の目の前にかざし、改めてグーパーをして健在さをアピールしてから、用済みになった包帯を解きにかかる。
「いいのか？包帯を取ってしまって」
「いいだろ？もう意味ねえし。あ、ゴミ箱取って」
智代が取ってくれたゴミ箱の上で包帯を解いて、改めてまっさらになった右手を智代に見せた。
それでようやく安心したのか、智代の顔に笑顔が戻る。
「じゃ、さっさと食って行くか」
「うん」
そうして、俺はようやくテーブルについたのだが、そこでギョッとなる。
恐らく先程衝撃による物だろう。味噌汁やおかずがこぼれ、ご飯茶碗が倒れていた。
改めてその破壊力にゾッとしながらも、まあ仕方無いかと箸を取った俺の手と、横から伸ばされた智代の手が何故か重なる。
「……何だよ？」
「お前は手が不自由で箸が使えないだろ？私が食べさせてやろう」
「いや、もう右手普通に使えるし」
「あっ……しまった！折角、食べさせてやろうと思って箸にしたのに……！」
うわ……そんな魂胆かよ……！
明らかな自爆によって策が破れ、少女が両手をついて落ち込んでいる隙に、俺は飯をかきこんだ。

第二章　４月２４日　最近は芳香剤も……

智代が来た時に“だけ”わざわざ玄関まで来るお袋に見送られ、学校へと並んで歩き出す。

「……それでな。岡崎が遅刻の常習犯だと聞いた私は、わざわざあいつの家まで迎えに行ってやったんだ」

昨日の帰りもそうだったが、道すがら智代はずっと話通しだった。

あの決別の日からこれまでの事を。

まるでその空白の間を、埋めようとするかのように。

まったく以前と変わらぬ、無邪気な笑顔で。

あんだけきつく突き放したってのに……。

絶交も覚悟して違えた道。

それでも何だかんだと理由をつけて再び傍に居ようとしてくれる事は凄く嬉しい。

でも同時に、このままでいいのか？と言う思いにもさいなまれる。

最早俺も後には引けない所に足を踏み入れてるんだ。

一歩間違えば、俺自身がこいつの障害になりかねない。

それを避ける為にも、俺達は距離を置くべきなのに……。

「……だからな。春原に言ってやったんだ。『頭を下げれば、触らせてやらない事もない』って。そしたら、春原はどうしたと思う？ベッドの上で土下座しながら『お願いします』って言ったんだ。それまで人を男じゃないかと疑ったり、おっぱいを貸せとか言って奴がだ」

「……触らせろ！」

反射的に思わずボソッとつぶやいてしまった。

やばっと思いながら智代を確認すると、俺の言った事が理解できなかったのかキョトンとして、次に少し困惑を浮かべたが、何か思いついたらしくにんまりと笑うと、

「まったく、お前も本当にスケベだな。Ｈな所だけは、春原とい

い勝負だ」
「はっ？って！？」
春原さんと同レベル！？
妙な屈辱感を覚えて何かを言おうとしたのだが、それは智代によって阻まれる。
ポケットにつっこんだ俺の右腕に、いきなり抱きついてきたのだ。
そして俺の肩に頭を乗せながら、悪戯っ子の笑みで言う。
「ほら、触らせてあげたぞ。春原の時は手しか触らせなかったんだ。手も体の一部だからな。でも、お前には特別サービスだ。ありがたく思え」
「これは俺が触ってるんじゃなくて、お前が俺に触ってるんじゃねえか！」
「いいじゃないか。お互いの体が触れ合ってるんだ。触らせているのも同じ事だろ？」
確かに二の腕に柔らかい物が当たってる……って、そうじゃねえだろ！
墓穴った……。
距離をとらなきゃと思ってた矢先に、逆に密着してるし。
でも正直……先輩達に少し嫉妬した。
俺と喧嘩してた間、随分先輩達と楽しそうにしてたんだなとムッとした。
だから男の部屋にのこのこ行くな！とムカッとした。
冗談でも触らせてやるなんて言うんじゃねえ！とプチンと切れた。
ああっ、まったく俺もしょうもねえ……。
「それでな。そうしたら春原の奴は怒りだして、私に飛びかかって来たんだ。だから……」
智代は得意顔を急に曇らせ黙り込む。
まあ、展開は予想出来るが……。
ここまでの話では、春原さんに喧嘩を売られた所から始まって、度々酷い事を言われたとだけ聞かされている。

しかしにもかかわらず、こいつは時折ムッとはしていても、終始得意気な笑顔だった。

こいつの性格的に言われっぱなしな訳が無いし、何よりそんな悪口を言う相手を起こしには行かないだろう。

つまりは……きっちりやられた以上の報復をしているんだろうとは思っていた。

「どうしたんだ？」

「……思わず蹴ってしまった……でも、襲ってきたのはあいつなんだ！正当防衛だろ？」

いや、そもそもお前が男の純情を弄ぶからだろ。

「……で、今まで何回くらい春原さんを蹴ったんだ？」

「そんなの数えてない……」

「つまり、数えきれない程蹴ったんだな」

「あいつが懲りずに失礼な事ばかり言って向かって来るから、仕方が無かったんだ！」

俺の誘導尋問にあっさりひっかかり、智代は必死にいつもの弁解をしはじめる。

まったく……懲りない奴だ。

「そ、それにな。あいつには変な趣味があって、蹴られるのが好きみたいなんだ。この前も私に蹴られている最中に『サイコー！』と言っていた。なっ？変態なんだあいつは」

お前は、春原さんを喜ばせる為に蹴ってたのか？

あきれて果てて臓腑を吐き出す程長い嘆息をする。

人間、根っこの部分はそう簡単に変わらない物だ。

それをわかっていても、俺が断腸の想いで諫めた事は何だったんだと虚しくなる。

「怒って……いるのか？」

何も言わず溜息をつくだけの俺に不安になったのだろう。しゅんとなって恐る恐る訊いてくる。

まったく効果が無かった訳でもない……か。

でも、俺が怒るからしおらしくなるって……子供かよ。
まったく、身体の方は育ち過ぎなくらいに育ってるてのに……。
「別にな。本当に身の危険を感じたなら、その時は全力で自分の身を守って構わない」
「う、うん！正当防衛だったんだ」
「春原さんが怖いのか？」
「あんな奴、怖い訳が無いだろ？ああ、でも、蹴られるのが好きと言うのは、気持ち悪くはあるな……これからは少し蹴る時に躊躇ってしまうかもしれない」
「正当防衛じゃ……ねえじゃんか！」
悪びれもせず調子にのってるそのおでこにズビシとチョップを見舞おうとしたが、しかしそれは素早く離れてかわされる。
おのれ、左手でキレが無かったとは言え、俺のつっこみをかわすとは小癪な。
やはり、バレバレな頭に対する攻撃よりも、不意をつき易いスカートにすべきだったか？
「何をするんだ？」
「正当防衛と過剰防衛は違うっつったろ？まったく……あんまり足癖悪いと、しまいにゃその長い脚なめるぞ！」
「なっ……！？お前まで変な趣味があるのか！？」
やべえ……つい日頃常々やってみたいと思っていた願望を口走ってしまった。
さすがに引かれて智代はうっと後ずさる。
言った瞬間後悔したが、最早後戻りは出来ない。
ならば……死中に活を求めるのみ！
「趣味じゃねえ！罰ゲームだっての。じゃあ、“脚をなめられる”のと、“プリクラでパンチラを撮られる”のと、“おしりペンペン”と、“ぱふぱふ”どれがいい？」
「どれも嫌に決まってるだろう！？それに、“ぱふぱふ”って何だ？何だか凄くHな事の気がするんだが……」

助かった……！
どうやら智代はあれを知らなかったらしい。
いや、まてよ……知らないとなるとむしろチャンスか？
悪戯心に火の点いた俺は、よせばいいのに少し悪乗りする事にした。
「いや……昔子供に大人気だった漫画やゲームでもやってたネタだから、そんなでも無いぞ」
「その漫画やゲームって何だ？漫画やゲームには、Ｈなやつもあるらしいからな」
とぼけつつも隙あらばと思っていたが、智代は『お前の考えはお見通しだ』と言わんばかりの笑顔で疑念の視線を向けてくる。
だが、残念ながらここは俺の勝ちだ！
「ドラＯンボールとか、ドラＯンクエストだ。聞いた事くらいあるだろ？」
「ああ、それならあるな……確か子供の頃、鷹文もやっていたと思う」
「だろ？小さい子でもやれる物なんだから、大した事じゃない」
「そうなのか……？なら、具体的どんな事か教えて欲しい」
だが俺が勝利を確信したのも束の間、智代も痛い所をついてくる。
「それは選んでからのお楽しみだ。まあ、マッサージみたいな物だ」
「怪しいな……Ｈなお前が提案する事だ。ただのマッサージで済むとは思えない……」
「てか、そういう事じゃなくてだな……とにかく、罰ゲームが嫌なら気をつけろって言ってんだ」
「う、うん。すまない……」
俺は智代の追及を振り切るべく、ぶっきらぼうにそうまとめた。
それで俺も少し冷静になり、俺は何言ってんだと崩れ落ちそうになる。
叱るつもりが、ついまたアホな話を……。

いかんな……ただでさえ色々と悩ましいのに、嫉妬からくる妙な対抗意識までからんでちょっとおかしくなっている様だ。

「それで……選挙の方はどうなんだ？協力してくれる奴とか居るのか？」

このままでは自己嫌悪でどうにかなりそうだったので、話題を変える事にする。

すると智代は一瞬寂しそうな目をしたが、すぐに普段の調子で淡々と話しはじめた。

「うん。クラスメートの何人かが手伝ってくれると言ってくれた。実理は報道部としての立場上、宮沢は資料室から離れられないから直接は協力出来ないが、応援はしてくれると言ってくれた。まあ、これは仕方が無いな。後は……そうだ。古河さんと岡崎からも頑張ってくれと言われたぞ」

「古河先輩からか？」

「うん。何でも一度廃部になった演劇部をもう一度創設したいそうなんだ。でも、今の生徒会にはダメだと言われたらしい。だから、私には是非生徒会長になって欲しいと言われた」

「ああ……そうか。先輩から話を聞いてたのか」

「やっぱりお前も知っていたのか」

「昨日、合唱部から相談受けてたって言ったろ？」

「うん。そういえば、その部も似た様な状況みたいだな」

「ああ。そこと顧問の取り合いで揉めてるのが、演劇部だ」

「そうだったのか……！お前も大変だな」

お前が一番の悩みの種なんだけどな。

ありがたいねぎらいの言葉に、苦笑で応える。

「俺に出来るのは、互いの仲がこじれないない様にする事だけだ。結局どうにか出来るのは……」

「私が生徒会長になるしかないって事だな？」

「そういう事だ」

「古河さんと約束したんだ。『お互いに頑張ろう』って。だから

彼女の為にも、選挙が始まったら全力を尽くすつもりだ」
「ああ、よく肝に命じておけ。お前はもう、色んな人間の想いを背負ってるんだ」
「だから、軽率な事はするなと言うんだろ？お前の言いたい事はわかってる」
不貞腐れた様に口を尖らせながら言って、すぐに笑顔に戻って身体をすり寄せてくる。
まったく……わかってると言いながらどうしてくっつくかなこの娘は？
じゃあ、アホな事したら“ぱふぱふ”な！
そう口まで出かかったが、縁起でも無いし、何よりあまり意識すると視線でバレそうなので唾と共に飲み込んだ。

第二章　4月24日　悲しい優しさ

教室の前で智代と別れると、中に入ってふうっと溜息をつく。
まったく……あいつと居るとホント調子が狂う……。
気を抜くとあいつのペースに乗せられそうになるのは毎度の事だが、暫く距離を置いていた所為か少しパワーアップしている様にも感じた。
てか、今日は俺の方がテンパリ気味だったからかもしれんが……。
まあ、明日から選挙だと言うし、こんな事も今日までだろう。
……なんだよな？
「おはよう。川上君」
「ああ……おはよ」
今日も声をかけてくれる仁科に挨拶を返し、もう一つ溜息をつきながら自分の席に着く。
ああっ、やべっ……これじゃあ、如何にも声をかけて欲しいみたいじゃないか。
そう後悔したが時既に遅く、案の定優しい仁科は心配して話しかけてきた。
「どうかしたの？」
「ん？ああ、いや、この頃色々とあってな……」
「そう……そういえば……」
何かを言いかけて、仁科ははっとして急に微笑を曇らせ口を噤んだ。
そして一度視線を泳がせると、噛んだ台詞を言い直すかの様に同じフレーズを繰り返す。
「あっ、そう言えば、手のギプスもう外れたんだ。よかったね」
「ん？ああ、元々大した事無かったからな」
外れたんじゃなく、破壊されたんだが……。
彼女が話を誤魔化したのには気付いたが、智代とのやりとりで疲

れていた事もあり、言い辛い事にあえてつっこむ事もないと、それには触れる事無く話を切り上げる。
ひょっとして仁科が言いかけたのは……杉坂の事か？
俺がそれに気付いたのは、一眠りした後だった。

今日も杉坂は、学校には来ていたが仁科とどこか余所余所しく、休み時間になっても彼女の側に来る事はなかった。
仁科の方もそれを気にしているからか、やはり元気がない。
う～ん……杉坂の事について仁科に適当にそれっぽい言い訳をしといた方がいいかな？
でも、それも何か変か……。
それより、杉坂にどうするつもりなのか訊いておくか？
でも、またキレられるかもだしな……。
心苦しいが、ここは静観しておく方がいいかもな。
そういえば、先輩達の方はどうなってんだろう？
今朝は渚さんとも会ってないし、一度経過報告しておくか……？
そんな事をうだうだ考えてる間に四限目が終り、待望の昼休みとなる。
演劇部の部室に行けば会えるだろうか？
三年の教室に行くのは気が引けるので、かつて拉致られた部室の方に行ってみる事にした。

しかし、旧校舎の演劇部室には誰も居なかった。
まあ、先輩達が毎日ここで食べてるって保障は無いか……。

少し待とうかとも思ったが、来るかどうかもわからないので戻る事にすると、少し行った所で、新校舎へと続く廊下の向こうから見知った顔の二人組が歩いてくる。
一人は弁当を抱えた仁科だったが、しかしもう一人はいつも一緒の杉坂ではない。
もっと大人しそうな……一年の時同じクラスだった……仁科が合唱部に誘ったっていう……名前なんだっけ？いかん、ど忘れした。
まあいい。それよりも杉坂が一緒に居ない事が気になる。
「ああ、仁科」
「あれ？川上君、杉坂さんと一緒じゃないの？」
俺が訊くより早く、もう一人の女子部員の方からそう尋ねられ、おや？と思う。
どういう事だ？
「いや、ここに来たのは別の用件だけど、何で？」
「だって、杉坂さん今日もお昼用事が有るって言ってたから……また昨日みたいに川上君と居るのかなって」
「ああ……いや、あれだ。お前等と演劇部の件で色々とな。話を聞いてたんだ」
「そうだったんだ」
俺が一応仁科への言い訳用に考えていた文面を答えると、仁科はほっとした様に微笑む。
やはり杉坂の事が心配だった様だ。
「でも、ただ相談にのってたって割には、昨日から杉坂さん大分様子がおかしかったけど……目が赤かった事もあったし」
しかし、もう一人の部員がいらんつっこみを入れてくる。
まあ、それも想定済みだ。
俺は腕を組み神妙な顔つきで、弁解しつつもさりげなく女子生徒を諭しにかかる。
「まあ、結構キツイ事も言ったからな……ほら、相手は先輩だし、なんて言うか、有名な人達も居るだろ？あいつもそれをえらく気に

して、強引に顧問をとられるんじゃないかって思ってたみたいだけど。でも、そんな風に最初から相手を敵視していたら、まとまる物もまとまらないだろ？」

「そうだけど、私もやっぱり少し怖いかな……」

「岡崎さんも春原さんも、優等生ばっかのうちでは相対的に不良扱いされてるけど、他所じゃあれぐらい普通……まあ、ちょい悪くらいなもんだ。今回だって、友達の部の立ち上げを手伝ってる。根は悪い人達じゃない。それに部長の古河さんは、どちらが上級生だとかは関係なく、あくまで対等な立場で話し合いたい、そして出来ればどちらもうまくいく様に願ってる。大切なのは、一人の顧問を取り合う敵としてでなく、同じ問題を抱えた者同士協力し合う事じゃないか？」

「そうだね……私も古河先輩と同じ思いです。みんなで話し合えば、きっと良い案が出ると思う」

先に仁科が同意してくれた。

それでもう一人も「仁科さんがそれでいいなら……」と頷く。

よし、うまく話を摩り替えられたな。

「じゃあ、俺も用事あるから」

「ああっ、ごめんなさい。引き止めてしまって……色々と力になってくれて、ありがとう」

「別にお前等の為だけでも無いし、勝手にやってる事だ。気にすんな」

「じゃあ」

杉坂の事も気にかかるし、長居して話を蒸し返されてもなんだ。

仁科達に後ろ手で応えながら、俺は颯爽とその場を去った。

その後俺は、先輩達と杉坂の姿を探して、駆け足で校内を回った。

杉坂の用事とは、先輩達の所に行ったんじゃないか？と思ったか

らだ。
いや、もしそうだとしても、単に謝罪に行ったのならそれでいい。
だが、嫌な予感がする。
廊下で仁科達の姿を見た時から、そこに居るべきはずの物が無い事に違和感を覚えた。
やらかしてくれるなよ……！
食堂にどちらも居ない事を確認し、他に昼食を食ってそうな所はどこか？と考えながら動き出す。
三年の教室……なら安牌だろう。流石に上級生の教室で喧嘩を売るような真似はしない筈。
部室……はさっき行ったし、遠いから後回しだな。
屋上……は立ち入り禁止だから、そこに居ると確信が無い限り杉坂も行かないだろう。
後は……中庭とかか？
気になって廊下の窓から中庭を見下ろしてみると、ビンゴだった。
中央の花壇の縁石に腰かけている、渚さんと岡崎さんの姿を発見する。
杉坂は……ここからはその姿は確認出来ない。
ひとまずセーフか……。
だが、出来るだけ急いだ方がいいだろう。
俺は依然感じ続けている予感に急かされるように、再び走り出した。

昇降口で靴に履き替え中庭に向かった俺は、しかしその入り口で立ち止まる。
先輩達の前に立っているショートカットの女子生徒……杉坂が既に来ていたからだ。
そして場所を変えるのか、杉坂は渚さんと岡崎さん、それとやは

り俺が来るまでの間に来たらしい春原さんの三人を連れ立って歩き始める。
どうする？割って入るか？
いや……単に謝るだけかもしれんし……。
迷った俺は、とりあえず杉坂にみつからないように後をつける事にした。

四人が向かったのは、人気の無い校舎裏だった。
俺は角に隠れながら、趣味が悪いと思いつつも聞き耳を立てる。
そこでまず、脅迫状は自分だと素直に白状した杉坂だったが、しかし次に彼女が語ったのは、謝罪の言葉では無く、仁科の過去だった。
仁科には音楽の才能が有り、子供の頃からヴァイオリンでコンクールに何度も入賞していて、将来を嘱望され、高校も海外留学をする予定だった。
しかし、それが決まる直前に仁科は事故に遭い、ヴァイオリンを弾けなくなる。
それで彼女はこの学校に来る事になったが、色々な物を失ったショックで元気を失くしていた。
だが、幸村先生に音楽の素晴らしさをもう一度教えられ、楽器が弾けなくても歌う事は出来ると仁科は立ち直り、彼女は合唱部を作る事を目指した……。
「お願いします。りえちゃんの邪魔をしないでください」
「古河、言う事をきくなっ！」
一通り話し終えた杉坂に対し、激昂した春原さんが叫ぶ。
「そんなハンデで、人の同情を誘うような奴は卑怯者だ！そんなハンデでっ……ひいきされたいなんて考えが甘すぎるんだよっ！そんな……ハンデでっ……！」

まずいか！？
いつでも飛び出せるように臨戦態勢で居た俺は、駆け寄ろうと身を乗り出す。
だが、聞こえてきた渚さんの言葉が、その足を止めた。
「そんなの……そんなのわたし、断れないです」
渚さんはそう言った。
ああっ、クソッ……！何やってんだ俺は……！？
自分の不甲斐無さに歯噛みする。
思わず俺も杉坂の話に聞き入ってしまった。
そんな話をされれば……あの優しい渚さんが同情しないはずが無いのに……！
話始めた時に直ぐ、止めるべきだったのに……！
「あきらめます」
ついに渚さんは言ってしまった。
その優し過ぎる優しさが、悲しかった。
「ありがとうございます」
杉坂は礼を言って顔を上げ、澄んだ表情で校舎に戻っていく。
「馬鹿野朗！」
人気の無い裏庭に、春原さんの罵声だけが木霊していた。

第二章　4月24日　穢された聖女

杉坂め……やってくれる……！
事の一部始終を盗み聞きした俺は、ひとまず教室に戻る事にした。
ズキズキと痛む、まだ完治していない無い右手を、強く握り締めながら。
まさか開き直って情に訴えかけてくるとは……。
だが、優しい渚さんに対しては、脅迫なんかよりもずっと効果的な策だ。
クソッ……！！
やり場の無い怒りに、廊下の壁に八つ当たりしたくなる。
仁科の過去の話は、やはりそうかと納得のいく物だった。
一年の頃の儚気な彼女を知っていれば、何か事情が有る事くらい容易に想像出来た。
片手が悪い事にも気付いていた。
でも……俺が知る限り、仁科がそれを何かの言い訳にした事は無かった。
どんなに物を運んだりする時に不便していようとも、授業を休みがちな事で陰口を叩かれようとも、例えそれで孤立しがちになろうともだ。
それを……。
あいつは、仁科を可哀相な子にしたんだ。
無断で勝手に、他人に触れられたくない過去の傷を晒したんだ。
例えそれが仁科の為であろうと、それを交渉のカードにしていいハズが無い。
春原さんが怒るのも当然だ。
もし、渚さんが同情しなかったら、どうするつもりだったんだ？
クソッ……！！
俺の所為だ。

俺が渚さんは優しいとか言ったから、こんな手を……。
自分の愚かさに反吐が出る。
慢心だ。
最近、それなりに事が運べていたから、今回も説得すれば解決出来ると思っていた。
杉坂もそんなに悪い奴じゃないからわかってくれると、どこか楽観的に考えていた。
あいつの仁科への、合唱部設立に賭ける想いの強さを、見誤っていた。
その結果がこの様だ。
俺に任せてくれとか言っておきながら、最悪じゃねえか。
先輩達に合わせる顔が無い。
靴を上履きに履き替え、下駄箱を抜ける。
そこでは選挙の準備なのだろう、掲示板の前で何人かが作業をしていた。
智代……。
あいつの顔が思い浮かぶ。
情けない。
散々偉そうな事を言っているくせに、結局あいつを当てにしている自分が笑えてくる。
俺には、このまま何も出来ないのか……？
いや……何かあるはずだ。
俺にしか出来ない事がきっと……。

珍しく自分の教室で飯を食い、そのまま昼休みの終りを告げるチャイムを聞く。
暫くして、先程の事などまるで嘘だったかのように杉坂は仁科と共に戻ってきた。

「じゃあ、りえちゃん、また後でね」
「あ、うん……」
と言うか、“ルンルン”なんて擬音が似合いそうな程浮かれていた。
気後れした仁科が戸惑っているのもお構いなしに、軽やかに自分の席に戻っていく。
もはや眼中に無いのか、俺には一瞥もくれずに。
あんな事をしておいて……どうして喜べるのか気が知れない。
「ふうっ……」
「川上君、どうかしたの？」
やれやれと溜息をつくと、気付いた仁科が訊いてくる。
しかしその瞳は、俺を心配していると言うより、溜息の意味を直感的に察したのか、豹変した杉坂について何か知っていたら教えてほしいと言っていた。
「杉坂から、何か聞いてるか？」
「う、うん……演劇部の先輩達が、身を引いてくれるって……」
「ああ……そういう方向に傾いてる。先に幸村先生に頼んだのはお前等だしな」
「杉坂さんからもそう聞いたけど……本当にそれでいいのかな……？」
事が自分達に優位に動き、目の上のたんこぶが無くなったというのに、仁科の表情は浮かない。
ほらみろ……こいつはそんな他人の不幸を喜べる人間じゃないんだ。
渚さんが仁科に同情した様に、彼女もまた同じ様な立場の先輩達に、同類相憐れむ的な物を感じているのだろう。
ああっ、まったく二人とも損な性格だよな……。
杉坂が形振り構わず仁科を守ろうとする気持ちもわかる。
でもな……それには、仁科だけを見ていたんじゃダメなんだ。
そんなやり方じゃ、彼女を本当の笑顔には出来ないんだよ……。

「やっぱり……スッキリしないよな？」
「うん……もう一度、古河さんとよく話し合った方がいいと思うんだけど……」
「そうだな……先輩達に会ったら、伝えとくよ」
「うん。ありがとう」
ようやく仁科は少しほっとしたように微笑む。
彼女の為にも、やはりこのまま渚さんに諦めてもらう訳にはいかないと、改めてそう確信した。

帰りのＨＲが終り、担任が教室を出て行く。
行くか……。
事は急を要している。合わせる顔が無いとか言ってられんだろう。
正式に演劇部の廃部が決まってからでは遅いんだ。
「オーキ、一緒に帰ろう」
「……」
そう決意しながら早足で教室から出たのだが、いきなり無邪気な笑顔に出鼻を挫かれる。
またかよ……！
「……選挙は？」
「活動は明日からなんだ。だから今日もお前と一緒に帰れる」
やはりそうきたか……。
だが、こっちはそれどころじゃないんだ。
「これから行く所が有る」
「ん？どこだ？」
「演劇部の部室だ」
「演劇部？ああ、古河さんの所か。うん、いいぞ。私は別に構わない。一緒に行こう」
「いや、だから、大事な話だし、長くなるから」

「気を使ってくれなくていい。終わるまでちゃんと待っていてやる。演劇部の部室と言うのも、なかなか興味深いしな」
気を使って欲しいのはこっちなんだが……。
相変わらずまったく空気を読んでくれない智代に、俺は頭を抱え嘆息するしかない。
まあ……こいつともまったく関係の無い話でも無いか……。
「……行くぞ」
「うん」
このままここで話していても注目を集めるだけだろう。
俺が促すと、智代は嬉しそうに頷いて隣に並んだ。

「そうか……そんな事になっていたのか……」
俺は道すがら、渚さんが合唱部に遠慮して演劇部を諦めようとしていると智代に教えた。
もちろん杉坂や仁科の過去には触れずに。
「でも、どうして急にそんな事になってしまったんだ？つい先日までは、古河さん、頑張ろうとしていたじゃないか」
「それは……もう三年だから大して部活する時間も無いとか、幸村先生に顧問を頼んだのは合唱部が先だったとか色々理由はあるが、結局は合唱部に同情したんだろ」
「同情？」
「合唱部の部長の方も、ここまで漕ぎ付けるのに色々苦労があったんだよ。古河先輩はそれを知っちまって、自分達が身を引けばそれで合唱部は何の問題も無く活動出来るからって思ったんだろ」
「それじゃあ、古河さんが可哀相じゃないか」
「ああ、だから……考え直してもらわないとな」
「うん。私も古河さんとは『一緒に頑張ろう』と約束したんだ。それなのに、こんな事で諦めて欲しくは無い。二人説得しよう」

こうして、意気込んで旧校舎の演劇部室に向かった俺達だったのだが、しかし拍子抜けにも、部室のドアをノックしても返事は無く、ドアの小窓から覗いた中はもぬけの殻だった。

「誰も居ないみたいだな。どうする？少し待つか？」

「そうだな……」

背後の壁に寄りかかって頷きながらも、先輩達は今日はもう来ないような気がしていた。

どうする？渚さんの家を直接訪ねてみるか？

まあ、それには一度家に帰って、こいつと別れないとな……秋生さん達にはこんな姿とても見せられん……。

同じように壁に寄りかかりながら身を寄せてくる智代を肩に感じながら、つくづくそう思った。

第二章　4月25日　覚醒

強くなりたかった
例え圧倒的な力の前に幾度倒れようとも
凄まじい技の前にどんなに傷つこうとも
諦めず
怯まず
何度でも立ち上がるヒーローの様になりたかった
でも
生身の身体はやわくて
脆くて
怪我も簡単には治らなくて
無理をすればいつかツケが回ってくる物で
やっぱり漫画やアニメのようにはいかなくて
けれど
それでも

少しでも強くなりたかった

度重なる怪我で選手生命を危ぶまれようとも

何度でも甦る“あの人”の様に

スポーツに怪我は付き物だ

俺は割りと怪我には強い方だったが

それでも１０年近くもやってれば、所々ガタがくる物だ

特に左足首の捻挫は

完治せぬまま騙し騙し使っていた所為もあり

すっかり癖になっていた

やめて一年以上経つ今でもたまに痛みがある

まあ、やりたくない体育の授業をサボる言い訳には使えるが……

完全なオーバーワークだったのだろう

他にも足の小指がいつの間にか骨折していたり

膝下が成長痛で痛んだり
いつもどこかしか痛くて
湿布をはっていない日は無いくらいで
包帯やテープピングも巧くなった
「このまま無理を続けると、身長が伸びなくなるよ」
医者にそう脅されても
身体を痛めつける事を止めなかった
おかげで本当に止まったけど
でも、別にそれが特別な事だとは思っていなかった
俺はポンコツで才能無いから
人の何倍も練習しなければ上達しなかったし
無理をしていたのは俺だけではなかった
みんな、自分がどれだけ無理をしているかを自慢しあい
見栄を張ってやせ我慢しあった
そんな気合の入った俺達だったけれど

相変わらず試合には勝てなかった

それは

冬季大会も予選敗退で終り

春季大会と進級を一月後に控えた

真冬の事だった

部活から帰り、夕食の後もう一汗と思った俺は

“あの場所”に来ていた

ほのかな月明かりと

微かな遠くの灯りを頼りに、俺は手作りのゴールへボールを蹴り始める

小学生からずっとディフェンダーだった俺だが

いや、だからこそ、“必殺シュート”が欲しかった

一番の理由はもちろん自分も点を取りたかったからだが

ウチのチームの弱さは点が取れない事だった
守備は俺やキャプテンを中心にそれなりに守れても
攻撃陣が弱くてほとんどボールを支配出来ず
いつもワンサイドゲーム
これではいくら俺等が奮闘しようとも
いつかは点を取られて負けるに決まっていた
でも、ワンチャンスで点を取れるようなシュートが有れば
凄いフリーキックとかでも蹴られれば
それで勝てるんじゃないかと
安易に思っていた
おもいっきり漫画やアニメや
至高のフリーキッカーでもあった“あの人”の影響だ
この世に生を受けた瞬間に定められた
俺とあの人との間に在る“絶対に越えられない壁”
あの人の様にはなれない事なんて

ずっと前からわかっていた
それでも
一生に一度だけでいい
ほんの一瞬
ただ一蹴りだけでも
あの人の領域まで
昂まれ
俺の小宇宙（コスモ）
目覚めよ
セブンセンシズ！！
ボーン！
思いっきり力んで蹴ったボールは
ネットのはるか上を飛んでいった
必殺シュートどころか
コントロールすらままならない

悔しさに舌打ちしながらボールを捜しにいく
鬱蒼と茂った森の中だ
完全に見失うと、昼間でさえなかなか見つけられない事もよくある
まして明かりもなしに見つかるハズもない
どれだけ時間が経っただろう
ウインドブレーカーはすっかり草まみれになり
かいた汗が冷えて寒気を感じてきた
もう明日の朝にでもするか……
そう思い顔を上げた時
ボールはみつかった
一本の樹の傍らに
どうして今まで気付かなかったのか疑問に思える程分かり易く
転がっていた
よかったとホッとしながら草を掻き分け
正面が開けていたので

森の中ボールを持って歩くのも邪魔なので、ひとまず広場に蹴り
入れておこうと
駆け寄る勢いをそのまま助走にして
軸足を踏み出した瞬間
世界が反転した

やっちまった
地面に大の字に倒れたまま
今自分の身に起きたあまりの事態に
愕然として動けなかった
踏み込んだ所が丁度浮いた樹の根だったらしく
滑って捻った足首に
全体重と蹴る勢い全てが乗っかり
左足首が９０。以上ひん曲がったのがわかった
痛みは無かった

感覚が麻痺していて、膝から下が無くなった様だった

ああっ……

終わった……

少なくとも捻挫

最悪骨折や靭帯断裂って所だろう

次の大会にはまず治らない

下手するとこのまま引退も有り得る

いや……

上体だけでも起き上がろうとしたが

それすらも金縛りにあったように出来なかった

どうやら当分動けそうも無い

それはつまり……

下手すると、このまま動くこともできず

森の中で独り、真冬の夜を過ごすと言うことだ

“死”

背筋に氷のように冷たい物が走る

寒い……！！

運動による身体の火照りは完全にクールダウンし

なお、夜気と汗が体温を奪い続ける

何だよ……？

何だよこれ……？

何なんだよ……？

何でこんな事になるんだよ！？

俺はただ……

憧れただけじゃないか

夢みただけじゃないか

望んだだけじゃないか

目指しただけじゃないか

少しでも強くなりたいと

一歩でも理想に近付きたいと

自分なりに考えて
工夫して
頑張ってただけじゃないか
つっぱってただけじゃないか
努力してただけじゃないか
そりゃあ、人にも沢山迷惑もかけてきたかもしれないけど
こんな危険な所で独りでやってたからかもしれないけど
ポンコツのクセに身の程知らずなのかもしれないけど
仕方ないじゃないか
俺には何も無いから
不器っちょで人が簡単に出来る事も出来なくて
空中戦に有利な上背も、相手を置き去りに出来るようなスピードも無い
気持ちだけは負ける気はないけどさ
それだけじゃプロどころか中学レベルですら並程度だ

家も貧乏だしさ

親は仏教徒だからサンタも来た事無いしさ

みんなが持っている物を、いつも俺だけ持っていなかった

幸い親もあの人の事は知っていたおかげで

サッカーだけはやらせてくれたけどさ

スパイクもあまり高い物をねだる訳にもいかず

あの人のユニフォームのレプリカとかも欲しかったけど買えなかった

サッカー以外でも、やってみたい事はあった

野球は……バッティングは秋生さんから筋がいいと言われたんだ

サッカーではいきなり才能無いって言われてたのにな

でも、どっちか選べと言われれば、好きなサッカーを

夢だったサッカーを選ぶしかないじゃないか

格闘技も何か本格的にやっておきたかった……

剣道は……師範のじいさんに追い出されちまったけど

合気道は続けたかったな

公子さんには本当に悪い事をした……

カナコの奴は……今頃どうしてんのかな？

まあ、あいつの事だ……相変わらず無茶苦茶やってんだろう

練習そっちのけでプロレスごっこをやっていたのを思い出し

ふふっと少しだけ笑えた

ああ、なんか色々思い出してきた……

ひょっとしてこれが……走馬灯ってやつなんだろうか？

まったく楽しい事が無かった訳でもないけどさ

やっぱり……辛い事の方が多かった

悔しい事ばかりだった

俺は何も持っていないから

力が欲しかった

強くなりたかった

上手くなりたかった

そしてこのどん底から……這い上がりたかった

ポンコツだけど
貧乏だけど
それでも俺は負け犬なんかじゃないって
証明したかった
だから
俺は俺なりに必死でやってきたのに
何一つ報われず
何も得られず
何も出来ないまま
終わるのか……？
こんな所で？
こんな形で？
ふざけるな……
ふざけるな……！！
こんな……惨めなだけの人生をおくる為だけに

誰かに馬鹿にされる為だけに

誰かの噛ませ狗になる為だけに

俺は生まれてきたってのか！？

こんな不条理があるか！？

こんな……

こんな……！！

俺はこみ上げて来る感情のままに

声を張り上げて泣いた

悔しさ

悲しさ

惨めさ

虚しさ

憤り

恐怖

今まで溜め込まれた全ての感情が一気に噴出したかのような

激情のままに
泣いて
わめいて
泣いて
吼えて
泣いて
泣きはらしたその目に飛び込んできたのは
吸い込まれる様な星空だった

綺麗だ……
素直にそう思った
こんな状況に陥って尚
俺がこんな目にあっていると言うのに
世界はこんなにも広く

変わらず美しい……

枯れたと思っていた涙が溢れてくる

ふざけるなよ

こんな理不尽な世界は、こっちから願い下げだ

俺を必要としていないこんな世界……

こんな……不幸と悲しみに満ちた世界

憎い

俺はずっと……心のどこかで世界を呪ってきた

何一つ思い通りにならないこの世界を

非情で非道なこの世界を

でも

始めは違ったんだ

ヒーローになりたかった

どんな強敵にも立ち向かう

そして

この世界を守るヒーローを
そんなスケールのデッカイヒーローを
カッコいいと思った
なのに
リアルの俺はたまらなくちっぽけで
何をやってもダメで
それに負けたくないって
足掻いて
足掻いて
足掻いて
足掻き続けてきたけど……
ああっ……そうか……
こんな時になってようやく気付いた
俺はずっと……自分自身と戦ってきた
足枷の多い、不自由な自分と

でもそれじゃあ……俺は俺自身の限界を超える事は永遠に出来ないだろう

世界はこんなにも広大で深遠なのに……

大の字のまま瞳を閉じ

周囲の音に耳を傾ける

不思議と恐怖も憤りも消え

心は穏やかだった

このまま自然に抱かれて逝くのも一興とすら思えてきた

でももし、俺に“明日”があるのなら

ヒーローになりたい

この世界の美しさを……守れるような

ゆっくりと目を開けると

異変に気付いて目を見開く

それまでの漆黒の世界が一変していた

まるで空の星が落ちてきたかの様に

無数の光が頭上にただよっていた

雪……？

一瞬そう思ったが、直ぐに違うと気付く

光は落ちてくる訳でもなく、蛍の様に空中を漂っていたのだ

でも当然、真冬の今に蛍が居るハズがない

じゃあ、この光はいったい……？

不思議に思いながらも力をこめ

最も近いそれに向けて、懸命に右手を伸ばす

そして、その光を掴んだ瞬間

強烈な光があふれ出して俺を包んだ

第二章　4月25日　今日から二人は恋人同士

4月25日（金）

『強くなければ、生きていけない。優しくなければ、生きている資格がない』

初めて聞いたその時より心に刻み付け、何度も反芻してきたフレーズだ。

でも……たまにそれが虚しく思える時もある。

優しい人は悲しい。

いつも誰かに遠慮して、自分を殺してしまう。

甘えさせて、許しすぎて、自分を失くしてしまう。

いつも誰かの強引さの、“強さ”の犠牲になる。

強くなければ生きてもいけないんだ。

“強さ”があってこその“優しさ”なのだ……。

渚さんは……もう諦めてしまうかもしれない。

杉坂のやり方は気に入らないが……。

冷静になって考えれば、その方がいいのかもしれないと言う思いもある。

三年で部活をやれる時間は、どんなに長くても二学期までだろう。

進学とかを希望していれば、一学期や二年で引退も有り得るんじゃないだろうか？

だから二年の仁科達に譲るべきだ……とは言えないが……。

渚さん自身がそう思っても不思議ではないし、そういう事も思いやれる人だとも思う。

まあ、渚さんの進路を俺は知らないけど……。

その辺、どうするんだろうか……？

進学校の光坂を選んだって事は、俺みたいに“近いから”とかでなければ、少なくとも入学当初は大学に進学するつもりだったんだ

とは思うが……。
身体の事を考えると、進学は厳しいかもな……。
元々病弱ではあったが、去年の様に長く体調が悪かった事は今まで無かったと思う。
その原因はいまだ不明だとも母から聞いた。
つまり……治ったかどうかも判らないって事だ。
完治したのかもしれないし、たまたま今は小康状態なだけかもしれない。
それを考えると……進学出来るかも微妙だし、部活どころじゃないんじゃないか？
いや、だからこそ、彼女のささやかな望みを叶えてあげたいとも思うけども……。
ああっ……堂々巡りだ……。
がりがりと煮詰まった頭をかきむしる。
昨日聞いた仁科の過去と、合唱部に賭ける彼女と杉坂の想い。
渚さんの優しさと、彼女の抱える事情。
『そもそも演劇部は正規の手続きを踏んで作ろうとした物では無かった』
そんな風に自分に言い訳してしまえば、納得してしまえそうだ。
どの道、俺にはもうどうしようもない……。
渚さんや先輩達が決める事だ。
結局そんなわかりきった結論しか出ぬまま、いつの間にか古河パンの前に来ていた。
「ちいス……」
「おう……なんだぁ？今日はいつにも増してシケた面しやがって、エロ本でもお袋さんにみつかったか？俺も経験有るが、ありゃあキチィよな？人が必死に隠しておいたモンをわざわざこれ見よがしに机の上とかに置きやがって！どうしろってんだよ！？気不味いだけなんだから、見て見ぬ振りしてくれりゃあいいのによぉ。なあ？」
秋生さんは勝手に納得して腕を組んでうんうんと頷いたかと思う

と、握り拳で力説し始める。
だが、悪いが今はつっこむ気にもなれない。
「はぁ……」
「はぁ……じゃねえだろ！お前に預けてある俺のエロ本は無事かって訊いてんだよ！」
「ええっ！？」
そういう事かよ！
相変わらず理不尽な怒りを向けてくる人だ。
まあ、これがこの人なりの発破のかけかただって事はわかっているが。
「大丈夫ですよ……デスなノートくらい厳重に保管してありますから。親にも勝手に部屋に入るなって何度も言ってますし」
「それならいいけどよ」
「それより……その……昨日の渚さん、どこか変わった所は無かったですか？」
「……その事か……」
俺が渚さんの名前を出すと、急に秋生さんは神妙な顔つきになって腕を組む。
ビンゴか。
やはり渚さんは昨日の事で落ち込んでいるんだろう。
それとも……ショックでもっと酷い状態に……？
「思えば、あいつが家に帰ってきた時から既におかしかったんだ。いつも以上にぼうっとしていやがって、店に入ってきても俺が声をかけるまで気付かなかったみてえだし、かと思えば妙にそわそわもじもじしてやがるし」
……そわそわもじもじ？
「夕飯時になっても心ここにあらずって感じでな。ほんのりと顔も赤いし、瞳も潤んでいやがった。それで俺にはピンときたぜ。これは“恋する乙女の目”だってな」
……恋する乙女？

秋生さんの表情に妙な自信の色が混じる。
何だ？
この人は何の話をしてるんだ！？
「フッ、モテる男は辛いぜ。だが、愛する娘の恋心を無碍にする訳にもいかねえ。丁度早苗の奴が『秋生さん、渚、お風呂わいてますよ。どちらか先に入って下さい』って言ってきたから、俺の方から切り出す事にしてやったんだよ。『愛する渚よ。どうだ？一緒に風呂に入らないか？』てな」
いやいやいやいや……。
裏声での早苗さんの声真似までまじえて、秋生さんは自慢気につっこみ所しかない話を続ける。
かに思えたのだが……、
「そしたらよ、あいつはこう言いやがったんだ！『えっ？お父さん、何か言いましたか？』『渚、お風呂わいてますよ』『あっ、は～い。じゃあお父さん、わたし先に入りますね』『いや、だから一緒にだな……』『お父さんとはもう一緒に入らない約束です』て、どういう事だてめえ！？」
「知りませんよ！」
いきなり理不尽過ぎる怒りのままに胸倉を掴まれ、ようやく独り芝居にオチがついた。
え～と……つまり……渚さんはあんま落ち込んでる感じでは無い……のか？
てか……岡崎さんと何かあったのか？
恐らくあの後に……。
……。
まさか春原さんって事は無いよな？
「まあ、渚さんが元気そうなら、それでいいんです」
「いい訳ねえだろ！！渚が俺以外の男を好きかもしれねえんだぞ！？はっ！！その余裕……まさかテメエかゴルァッ！！」
「ちょっ！違いますって！！」

胸倉を両手で掴まれたまま吊り上げられ、首を絞められたままブンブンと揺さぶられる。
この人は家族の事が絡むと尋常でないパワーを発揮するのだが、いつも八つ当たりされる身としてはたまった物じゃねえ。
「おかっ……岡崎さんじゃ……？」
「岡崎だぁ！？誰だそいつは！？」
「前、渚さんが……ここに男連れて来たって……秋生さんだって……薄々気付いてたでしょ？」
「まあな」
俺の言葉に、秋生さんはあっさり認めて手を放した。
ようやく苦しさから解放され、胸元を押さえながらケホケホと咳き込む。
ったく、この人は……とぼけるだけならともかく、どうしてわざわざ首絞めたりするかな？
「まあ、渚の方はそんな調子だ。で、てめえの方は、一体何を心配してたんだ？」
そして、これまでの事など全て無かったかのような、落ち着いた年上の雰囲気で訊いて来る。
初めからそうしてくれよ……。
「演劇部の件でちょと……」
「演劇部？」
「ほら、前に俺も誘われてたじゃないですか」
「ああ、あれか……」
言われて思い出したかの様な素っ気無さと、感情のこもらない乾いた声。
それに違和感を覚えながらも、そのまま続ける。
「一度廃部になってた物を渚さんが再建しようとしていたんですが……今、唯一の顧問候補を他の部と取り合う形になってまして。それで……渚さんは相手に譲るって言ってしまったんです」
「……なるほどな。なら、もうお前が悩んだって仕方ねえだろ？

部活はやれなくなっちまったが、代わりにあいつには彼氏とラブラブでイチャイチャな学園生活が待ってるんだ……って、俺の渚とラブラブでイチャイチャだとぉ！？ふざけんなぁっ！！」

「いや、だから、いちいち自分で言った事に切れないで下さいよ」

まあ、確かにそういう事なら……もうこの件はいいのかな……？

少なくとも、生徒会選挙が終わるまでは進展する事は無さそうだし。

結局俺的には……渚さんが元気そうなら、正直何でもいい。

「じゃあ、これで」

「おう」

どこかスッキリしない物の、秋生さんも言うように俺がうだうだ考えていても仕方が無い。

昼食のパンを手早く選んで、俺は古河パンを後にした。

第二章　4月25日　騎士の本懐

とんとんと小気味良い軽快なステップが聞こえて来る。
家族の誰の物でも無い、階段を上ってくる音。
やはり来たか。
その襲撃を読んでいた俺は、今日は狸寝入りで待ち構える事にした。
「おはよう、オーキ。今日も迎えに来てやったぞ」
やはりノックも無くドアを開け放たれる。
しかし、ここはグッと怒りを堪えて寝た振りを続ける。
「何だ？寝てるのか？珍しいじゃないか。いつもは直ぐに起きるのに……」
俺が寝ているのを見て、嬉しそうな気配が近付いて来る。
テーブルを組み立てて朝食の盆を置き、布団の傍らに座った。
「ひょっとして、今日も寝不足なのか？」
まったく無反応な俺の様子に不安を覚えたのか、声のトーンから軽やかさが消えた。
心配させているのは分かったが、それでも目は開けない。
「ゆっくり寝かせておいてやりたい所だが、それでは学校に遅刻してしまうな……ほら、オーキ、もう朝だぞ。起きるんだ」
「ん～……ん……」
体を優しく揺さぶられる。
一応それらしく反応はしておくが起きない。
「起きないな……よし、少し可哀相だが仕方が無い。起きろー！遅刻してしまうぞ！」
布団の裾を持って立ち上がると同時に引っぺがされる。
今起きればローアングルからの絶景が見られるかもとも思ったが、その誘惑にも負けず目は開けない。
「まだ起きないのか……そういえば、前もずっと寝ぼけていた時

があったな……寝起きはいいが、その分眠りが深いという事だろうか？それとも……まさか、具合が悪いのか？」

今度は枕元に腰を下ろした気配が、更に近付いてくる。

両手をついて見下ろされ、長い髪がふわりと顔に落ち、鼻孔をくすぐる。

それが取り払われると、彼女の体温が感じられる程の距離に迫り、そしてついに触れた。

重ねられた額と額。

伝わる体温。

脈動の早さでばれやしないかと焦りながらも、じっと羞恥に耐える。

「……やはり、少し熱っぽい気がするな。体温計でちゃんと計った方がいいかもしれない。この部屋には……有るはずがないか。お母さんに事情を説明して、置き場を聞いてこよう」

「ん、ん～ん……」

それは勘弁！

NGワードが出たので、立ち上がった智代を止めるべく、のっそりと起き上がる。

お袋に出てこられると、話がややこしくなるからな。

「ああ、起きたか。おはよう、オーキ」

「……ん～……おふぁよう……」

それに気付いて振り返った彼女と、わざとらしく伸びをしながら欠伸混じりの挨拶を交わした。

すると智代は戻ってきて俺の傍らに立膝になると、もう一度確かめる様に右手を俺の額に、左手を自分の額にあてる。

「珍しく今日はお寝坊さんだったな。体調でも悪いのか？」

「いや……寝足りないだけだ」

「そうか。それならいいんだ。なら、朝食は食べられるだろ？冷めない内に食べた方がいい」

「ああ」

「よし、じゃあ私が食べさせてやる」
そう言って俺の返事もまたずに跳ねる様に立ち上がった智代は、朝食の乗ったテーブルごと布団の脇に置きなおすと、再び俺の隣に腰を下ろした。
「あ～ん」
そして嬉々としながら箸をとっておかずをつまみ、左手を添えながら問答無用で向けてくる。
それを俺は……
「ん」
素直に口を開けて受け入れた。
「どうだ？」
「普通」
「またそれか……まったく、お前はいつも『普通』だな。仕方のない奴だ。あ～ん」
「ん」
次のご飯も、その次の味噌汁も差し出されるがままに口に入れると、味噌汁の椀を置いた智代は手を止め、いきなり顔を寄せてきて俺の顔まじまじと診はじめた。
「な、何だよ？」
「どうしたんだ？今日はいやに素直じゃないか。私が部屋に入って来ても怒らなかったし……やっぱり、どこか具合が悪いんじゃないのか？」
「違うって……どうせもう暫くは来なくなるだろ？だから、今日くらいお前の好きにさせてやろうって思ってな」
「何を言ってるんだ？そんな言い方されたら、明日から来辛くなるじゃないか」
「……」
彼女の戯言に、俺は沈黙と憮然とした表情で答える。
普段から空気の読めない奴だが、流石にそれでしゅんとなって箸を置いた。

「……判ってる。今日の放課後からちゃんと選挙活動をするつもりだ……でも、お前は選挙を手伝ってはくれないんだろ？」
「俺には俺の仕事があるからな」
言い訳じみた反論を一蹴しながら、どさくさ紛れに箸を奪取し、自分で飯を食い始める。
すると智代はムッとしながら俺の手を両手で掴み、箸を取り返そうとしてきた。
交差し絡み合う腕と指。
「今日は私の好きにさせてくれるって言ったじゃないか！」
ムキになった智代が身を乗り出した拍子にムニュッと柔らかい物が密着し、俺が硬直した隙にまんまと奪い返される。
クソッ……わざと押し付けてきてないか？
「ほら、あ～ん」
「ん……言っとくが、今日つっても、この部屋を出るまでだからな」
勘違いされては困るので、咀嚼しながらも得意気な所に釘をさす。
「今日一日私の好きにさせてくれるんじゃないのか？」
「んな訳ねえだろ？言葉のあやだ。それより次」
「ん？ああ、あ～ん……じゃあ、一緒に登校もしないのか？」
「それはいいけど、必要以上にくっついたりは無し」
「どうして！？」
「それについては、もう何度も説明してる」
「……」
俺の身も蓋も無い言葉に、智代はむうっと黙ったまま手だけを動かしていた。
無言で飯を差し出し、無言でそれを食うという異常な光景。
「そういえば、あれから古河さんとは会ったのか？」
その空気に耐えられなくなったのか、智代は一瞬俯いた後、思い出した様に言った。
昨日は、一緒に古河パンに行きたがったのを『病院に行くから』

と適当に誤魔化したからな。
まあ、こいつに隠す様な物は何も無いけど。
「今朝パンを買いに行ったが、親父さんにしか会えてない」
「そうか……あ～ん」
復活した『あ～ん』で差し出された餃子を口にくわえる。
「先輩の様子を訊いてみたけど、何かぼ～っとしてたそうだ」
「ぼ～っとしてた……？そうか……やはり相当落ち込んでるみたいだな……」
「かもな……」
秋生さんは『恋する乙女の目だった』とか言ってたが、ぼ～っとしていたのは単に目標を失った虚脱感による物かもしれない。
いや、岡崎さんと本格的に付き合いだしたって線はもちろん濃厚だし、正直、俺は前々から二人はそういう仲だと思ってたから、今更だったが。
ただ、確証も無いのに誰かと誰かが付き合いだしたとか、そういう話はしたくない。
部活の代わりに彼氏ゲットとか。
人が落ち込んでる所につけこんでとか。
そういう見方も出来なくも無いしな。
まあ、確証があっても人の色恋沙汰なんてわざわざする物でも無いが。
「オーキ、古河さんのクラスは知っているか？」
「先輩の？さあ……？」
「お前は、実の姉の様に慕っている人のクラスも知らないのか？」
智代はジト目を向けてくるが、自慢じゃないが実の弟のクラスや何部活やってるのかも俺は知らん。
「実里に訊けば知ってるだろうか……？」
「やめとけ」
嫌な予感がしたので、とりあえず否定しておく。
「どうして？古河さんが落ち込んでいるなら、知り合いとして励

ましてあげるべきだろう？」
やっぱりか。
事情を知らないとは言え、相変わらずお節介な奴だ。
「それでクラスにまで押しかける気か？迷惑だからやめとけ」
「でも、登校する時に古河さんに会えるかわからないじゃないか。昼休みや放課後は選挙の会議や活動が有るし、確実に彼女に会いに行けそうなのは休み時間くらいなんだ」
「だからいいって……そっとしとけ」
「どうして？そんなの古河さんが可哀相じゃないか」
「同情するなら、お前はお前のやるべき事をやれよ！！」
“可哀相”にカチンと来て、思わず声を荒げる。
それにビクッとなった智代だったが、すぐに不貞腐れた要に口を尖らせ反論してくる。
「だから、選挙活動はするって言ってるじゃないか！」
「励ますって、何て言う気だよ？自分が生徒会長になって部活出来る様にしてやるとでも言う気か？それでお前が落選したらどうするんだよ？二度先輩を落胆させる事になるだろうが」
「だからって、お前は落ち込んでいる古河さんを放っておけと言うのか？」
「別に後輩のお前がする必要は無いっつってんだ」
「人を励ますのに先輩後輩は関係無いだろ？お前はそういう事を気にし過ぎだ」
口論をしながらも智代は手を止めず、俺に飯を食わせている異常な光景。
まったく、俺達は何をやってるんだろう？
辟易しながら溜息をついて脱力する。
仕方無い。
あまり話したくはないが、こいつになら渚さんの身体の事を伝えておいてもいいだろう。
「お前にはまだ言ってなかったかもしれんが……先輩は病気で去

年ダブったんだ……」
「身体が弱いって、そんなになのか！？」
「だから……部活がダメになって、正直、ほっとしてる部分もある」
俺の告げた事実がショックだったらしく、智代の持つ箸が餃子をつまんだまま止まっていた。
それが落ちないかと内心冷や冷やしていると、何故かひょいと餃子を口に入れてから、フッと呆れたように微苦笑する。
俺の餃子……！？
「……お前達は、本当によく似ているな」
「えっ？な、何が？」
餃子を食われた事でややパニクった所に、更に脈絡の無さそうな事を言われ、処理速度が追いつかない。
そんな俺を他所に、智代は諭す様にしみじみと続ける。
餃子を食べた口で……。
「お前と古河さんがだ。それと、鷹文とも似ているな」
「いや、だから何が？」
「自分よりも他人の事を優先してしまう、優しい所がだ。でもな。だから私はお前の事が心配だ。いつか……いつか鷹文の様に自分を犠牲にしてしまうんじゃないかって、不安なんだ……」
バラバラになりかけた家族を守る為に、車道に出した智代の弟の鷹文。
その光景を目の当たりにしたこいつの心には、きっと深い傷が残っているんだろう。
こいつの予感はある意味正しい。
でもな……。
「俺と鷹文とは別物だよ。俺のは優しさとかじゃない……」
こいつの前では、そんな言い訳しか出来なかった。

第二章　4月25日　くさい仲

「はー……くんくん……」

智代はしきりに自分の手に息を吐きかけては、その臭いを嗅いで確かめていた。

餃子を食ったからだ。

「……なあ、本当に臭くないか？」

「大丈夫だっての……食ったの一個だけなんだし。コーヒーも飲んだし、歯だってみがいただろ？」

もう何度訊かれたわからない質問に、前とほぼ同じ文面を答える。

あの後は本当に大変だった。

智代は無意識に餃子を食った事に気付いて絶叫するわ。

それを聞いてお袋はやってくるわ。

そのお袋に、“あ～ん”をやってた事をばらすわ……。

最悪だ……！！

「大体、一個で臭ったら、四つ食った俺はどうなるんだよ？」

「お前は男だからいいじゃないか。でも、女の子にとってにおいは、とても気を使う物なんだ……どうしよう？今日から選挙戦だと言うのに……活動は来週からに延期すべきだろうか？」

「おいおいおい……」

「大勢の生徒の前に立つ必要があるのに、にんにく臭いと思われたら嫌だろ？決して良い印象を持たれる事は無い筈だ」

「だ・か・ら……俺、臭いか？」

「ん？」

呆れながらそう言うと、不意に智代は胸元に顔を寄せてきてにおいを嗅いできた。

ふわりと香るいつもの甘いにおいが、心の琴線を掻き鳴らす。

まったく……何が臭いんだ。

「うん。いつものお前のにおいだな」

「それは、いつも俺は臭いって事か？」
にこにこしながらそう言われ、照れ隠しについ自虐的な事を言ってしまった。
だが、
「そうは言って無いだろ？香水とかのにおいでは無いが、男の人のにおいだな。うまく言えないが……嗅いでいてどこか安心する、頼もしいにおいだ」
完全に墓穴った！！
言葉通りの信頼しきった笑みでダメ押しされ、走って逃げ出したい衝動に目をつぶって耐える。
「お、お前もいつもと変わらないから、安心しろ」
「そうか……でも、自分のにおいには慣れてしまうと言うしな。もし、私もお前もにんにく臭かったら、私達ではわからないかもしれない」
「だから、気にすんなって……」
結局、こんなやりとりをエンドレスで繰り返している内に、校門に着いてしまった。
渚さんとは会えなかったな……。
「古河さんと、会えなかったな……」
校門をくぐると、智代が独り言の様に呟く。
丁度同じ事を考えていたらしい。
もっとも、俺の方はむしろ会ってどうするんだ？って思いの方が強いが……。
だって、どうするよ？
渚さんに彼氏出来ましたか？とか訊くのか？
岡崎さんとつき合ってますか？なんて、訊ける訳無いだろ。
一緒に登校してくれてたりすれば、わかり易いけど……。
「そう言えば、前にこの辺りで古河さんと会ったんだが、あの時は岡崎と一緒だったな。なあ、二人は付き合っているのか？」
「えっ……？」

って、目撃者が直ぐ隣にいた！
「さあ……でも、古河先輩が家に岡崎先輩を連れて来たって話は親父さんから聞いた」
「やはりそういう仲だと言う事か……どうりで仲が良さそうだった訳だ」
お前だって俺ん家来てんじゃん！
なんてつっこみそうになったが、きっと薮蛇なので慌てて言葉を飲み込む。
「……だから私が古河さんを励ましに行く事を止めたのか？古河さんには、岡崎が居るから……」
少し考えてから、不自然な程切なげに智代が訊いた。
「ああ……いや、岡崎さんだけじゃないけどな。他にも演劇部仲間は居るみたいだし」
「そう言う事なら、初めからそう言ってくれればいいじゃないか。それなら、お前と言い争いになる事も無かったのに」
「不確かな事言えないだろ……本当に付き合ってるのかどうかまでは、わからないんだし」
「それはそうだが……多分、そういう仲だと思って間違い無いと思うぞ。“女の勘”だ」
どうだ！と女である事を誇示するかの様に智代は胸を張る。
何だ？触って欲しいのか？
とか言ってやろうかとも思ったが、ここは校内なのでアホな事は止めておく。
「そういう事なら、古河さんの事はそれ程心配しなくても良さそうか。あれで岡崎は、結構頼りになる奴だからな。噂程悪い奴じゃない」
「知ってる……」
つまらなそうに言いながら、昇降口を通って下駄箱で一時別れる。
真正面の掲示板には、かなりの人だかりが出来ていた。
選挙のポスターでも貼ってあるんだろう。

「校内選挙が始まりま～す！報道部のアンケートに御協力くださ～い！」

靴を履き替えていると、何やら間延びしたアニメ声が聞こえてきた。

見ると、掲示板の隣に設置された長机に見知った顔が立っている。

また門倉が何かやってんだろう。

「凄い人だな……実里が何かやってるようだが、何をやってるんだ？」

廊下で人だかりを眺めていると、同じように靴を履き替えた智代が寄って来る。

「アンケートつってたな……よくＴＶとかでやってる、事前調査じゃないか？」

「この学校はそんな事もやっているのか？」

「いや……去年はやってなかった……と思う」

単に興味が無くて気がつかなかっただけかもだが……。

「「智代先輩、応援してます！頑張ってください！！」」

二人して人だかりに目を奪われていると、いきなり背後から興奮気味な声がハモる。

向き合うように振り返ると、そこには一年生らしき二人の女子が、握り拳で立っていた。

知り合い……じゃ、ないよな？

例のファンてやつか？

「ああ。ありがとう」

「「きゃー！」」

智代が男前にそれに応えると、一年達は黄色い悲鳴を上げながら逃げていった。

そういえば……こいつ結構人気あるんだよな。

他校の奴等とやりあった時も、きゃーきゃー言われてたし。

「実里に挨拶してくる。ここで待っていてくれ。それとも、お前も一緒に来るか？」

「いや……」
「そうか。じゃあ、ちょっと行ってくる」
そう言って智代は、小走りで報道部の方の人だかりへと突入して行った。
取り残された俺は、選挙のポスターに目を向ける。
皆すまし顔で写っているが、その中でも一際目を引くのは、やはりあいつのポスターだった。
何と言うか……こうして改めて見ると、そこらのグラビアアイドルなんかよりずっと可愛い。
まあ、あいつからすれば、そんな事で人気を取りたくはないだろうが……。
でも、実際何の実績も無い智代の支持層は、圧倒的にそのミーハーな連中になるだろう。
そういう人間は、流行に飛びつくのは早いが、その分冷めるのも早い。
そして……冷めた時の奴等は、恐ろしく残酷だ。
「わかってんのか……お前」
前々から予想していた苦戦を予感し、少女のポスターにつぶやいた。

第二章　4月25日　月下の剣士

昼休みになり、自販機でドリンクだけ買って屋上に出る。
今日は生徒会選挙の事以外、普段と何も変わった事はなかった。
昨日の事など何も無かったかの様に、杉坂も仁科と談笑している。
あいつのやり方は気に食わないが……。
だからと言って、どうこうする気も起きない。
どうせ、今は何を言っても無駄だろうしな……。
いや……。
始めから、俺にはどうも出来なかったんだろう。
それなのに、出しゃばった真似をして杉坂を追い詰め、あんな強硬手段をとらせちまった。
まったく……俺は何をやってるんだろうな……。
鎌首をもたげてきた自己嫌悪を、カフェ・オレとともに飲み下し、顔を上げる。
澄んだ青い空の果てを見据え、瞳を閉じて網膜に焼きついた蒼で心の蒙さを染めた。
いかんな。
まだ俺にはやれる事があるんだ。
へこんでる場合じゃない。
今日は放課後予定もあるしな……。
宮沢のグループの一人、須藤のツテで他校の奴等と会う事になっている。
まあ、例の如く話をつけに行くだけだが、それでも弱気は禁物だ。
こちらがビビッて弱腰だと、なめてつけ上がってくるのは、人も動物も同じである。
もっとも、毅然とした態度でいれば危害を加えられないと言う訳でもないのも、動物と同じだが。
「何事も無く終わってくれればいいがな……」

あの須藤のツテと言うのが不安だが……。
まあ、それでも杉坂を相手にするより楽だろう。

その日の月は、とても美しかった。
“妖艶”と形容したくなるほどに魅惑的で、川辺の静謐な世界を淡く照らしている。
不思議な物だ。
あの光は、単に太陽光の反射に過ぎないと言うのに。
人間と言う生き物はそれに特別な物を感じ、神秘的な力が宿ると考えてきたのだ。
かくいう俺も、何となく何かのパワーをチャージした気になって、何となく何かがみなぎってきている。
「う〜ん、さみ〜な……少し風が出てきやがったか？」
相手方……他校のそれなりに名の知れたグループとの交渉場所として指定された川原に、いつものタンクトップ姿で来やがったマッチョな坊主頭は、身震いしながらそんな事を言った。
何だ？
つっこめばいいのか？
昼間は大分温かくなってはきたけど、まだ四月ですよ？
「橋の影にでも行っときます？」
「いや、もう約束の時間だろ？気付かなくて行き違いとかになったら悪いからな」
律儀な人だ……。
宮沢グループの須藤さんは、強面な外見の割りにとても人がいいと一部で評判である。
そして、そのお人好しが災いしてか度々騙まし討ちに合い、心身

の癒しを求めてしょっちゅう宮沢の所に来ている資料室の常連だ。
初めは単に宮沢に会う口実だと思ってたんだが、どうやらマジらしいから驚きである。
グループの中では話のわかるいい人なんだが……ちょ～っとアホなのがな……。
ちなみに須藤さんの方が年上なので、基本俺の方が敬語である。
「しかし遅えな……早く来てくれねえかな」
「ですね……」
寒さもあってかそわそわし始めた須藤を尻目に、俺は先程提案した橋の影を凝視していた。
周囲には俺達以外に人気は無い。
だが、かえってそれが妙だと思えてくる。
どうやら、最初から覚悟していた最悪の展開になりそうだ。
「おっ！来たか」
橋の反対側からザッザッと言う砂利を踏む音。
振り返ると、フウドにマスクをしたパーカーやら、手に鉄パイプを持った皮ジャンのフルフェイスヘルメットやら、見るからに不穏な風体の男達がこちらにゆっくりと向かってくる。
「な、何だお前等！？」
あからさまに動揺する須藤に、むしろ溜息をつく。
やれやれ、やはりこうなったか。
どうやらこの交渉は“罠”だったらしい。
「何者だてめえら！？村越はどうした！？」
「……」
須藤が相手方のリーダーである『村越』の名前も出すも、奴等は無言で近付いてくる。
しかし俺は冷静に背後の気配をうかがった後、右手の土手に向き直り呼びかけた。
「出て来いよ村越！ただの闇討ちじゃ、てめえの手柄にはならんぜ」

すると、土手の上にもゾロゾロと人影が現れる。
かなりの数だ。
ひょっとしたら奴等のグループだけでなく、この闇討ちの為に人を集めたのかもしれない。
その先頭に、幽鬼の様にひょろりとした長身の男が現れる。
「村越！これはどういう事だ！？」
「ひっひっひっひっひっ、須藤よぉ、どうもこうも、この状況でわかんねえのか？」
須藤の怒気のこもった詰問に、村越は耳障りな甲高い声で愉快そうに答え、土手の上がどっと沸く。
如何にもな悪役幹部とその配下といった感じだ。
「まさか騙した……のか？」
「おいおいおい、たかだか一度飲み明かしたくらいで、もうダチ気取りかよ？本当にたった二人で現れるとはな、聞いてた以上の馬鹿だ」
「何だと！？まさか、初めから騙すつもりで声をかけてきたのか！？」
「当然だろ？しかも、それにのこのこ付いて来るとは、ひひっ、川上も実は大した事ねえようだなあ。一応礼は言っておいてやるぜ須藤。お前のおかげで、明日から俺の天下だ！」
「チクショウ！！すまねえ川上、また騙されちまった！」
裏切られた悔しさに地団駄を踏む須藤は、本当に人がいい。
「いえ。それより、どうしますか？」
「どうって、この人数相手じゃ逃げるしかねえだろ？」
前からは武装した１０人、左手は川、右手の土手に居る村越本隊の正確な数はわからないが、十数人は居るだろう。
そして……あからさまに空けてある退路。
絶対、橋の影に伏兵が居るな。
前々から怪しいと睨んでいた。
ここまで用意周到に策を練ってきた奴等だ。居ない訳が無い……

のだが、
「川上、こっちだ！」
やっぱり、身をひるがえして須藤さんは橋に向かって駆け出してしまった。
ああっ、判り易過ぎです須藤さん！
「ひっひっひっ、追え！逃すな！」
村越の号令により、前方と土手の部隊が一斉に追撃にかかってくる。
マズイな。
だが、今更戻れと言ってももう遅い。
居るとわかっている伏兵を、突破するより他無いだろう。
数が多ければそれだけこちらにばれ易くなる事を考えれば、伏兵はあくまで奇襲と足止めが目的で、それ程数は多く無いはずだ。
踵を返してすぐさま須藤に追いつき、いつでもフォロー出来る様臨戦態勢をとる。
そして橋の欄干に差し迫ったその時、
「ぐおおおおお！！」
「ぬお！？」
「危ない！！」
橋の影から須藤さんより一回りデカイ巨体が、両手を広げ俺達の前に立ち塞がった。
咄嗟に彼の肩を掴んで自分が前の出ると、相手の攻撃に備える。
だが次の瞬間、俺は信じ難い光景を目の当たりにする事となった。
「！？」
ふらふらと数歩進んだ所で前のめりに倒れこんできた巨体。
だが、それをさっと避けると、男はそのままドシャッっと砂利に頭からつっこみ、そのままピクリとも動かなくなってしまった。
「す、すげえな川上！今の一瞬で倒しちまったのか？」
「あっ、いや……！」
何が起きた？

須藤の賛辞で何とかフリーズしかけた所を持ち直した俺は、眼前の橋の下で何か異常な事が起きている事に気付いて目を向け、そしてその正体を知って本格的に固まった。

その暗がりに立っていたのは、長い髪をリボンで一本にまとめた袴姿の女だった。

手には竹刀が握られ、足元には無数の凶器と男達が死屍累々と転がっている。

この女が先程の巨漢を含めた伏兵部隊を一人で片付けたのは疑いようも無く。

そしてこの女が誰なのか、俺が忘れられようも無かった。

「お、女ぁ!?」

「お前……何やってんの?」

「おい川上、お前の知り合いなのか?」

「話は後です。後続、来ますよ!」

そう言うが早いか、女はうろたえる男二人を一瞥する事もなく、一陣の風となって追撃部隊に斬り込んでいった。

第二章　4月25日　美しき刺客

それはまさに、感じる事は出来ても不可視の“風”その物だった。
「ん、何だ？ギャッ！！」
「どうした！？グワッ！！」
「か、川上か！？グフッ！！」
脇を疾風が駆け抜けていったかと思うと、次々と後方で上がる男達の動揺と呻き声。
それに振り返ると、追撃してきた男達がほとんど棒立ちのまま順に倒れていく。
疾い……！！
夜目と動体視力には自信の有る俺が、遠目ですらその動きを追いきれていない。
剣道特有の足運びとそれを隠す袴により、さながらホバーの如く地面を疾駆するその動きは、馴染の無い者にとっては挙動が読めず、気付いたら目の前に居たという錯覚を生じさせる。
奴等にとっては、さながら得体の知れない幽鬼か何かに襲撃されている気分だろう。
そしてそこから放たれる一閃は、神速にして正確無比。
闇に紛れ更に見えにくくなった竹刀は的確に急所を打ち抜き、一撃の下に武装した男達を打ち伏せていく。
強い……！！
明るい昼間ならともかく、この薄暗い中であの攻撃を凌ぎきる事は、俺にも出来ないだろう。
例えるならば、智代が天賦の才能とガンダムと言う当時ではずば抜けてハイスペックな機体のおかげで次々と敵を撃退出来たアムロ・レイなら、こいつは神がかったテクニックで量産機とさして変わらぬ性能の士官用ザクを『三倍速い』と言わしめたシャア・アズナブルだ。

「失礼な……彼の様な悪党と一緒にしないでください！」
道着姿の女シャアは、わざわざ足を止めてそんな事を言った。
闇に溶けそうな漆黒の髪を、束ねてそこに留め置く赤いリボン。
その鬼神の如き鋭い眼差しは、心の深奥までも射抜き、そこにある邪悪までも見透かすようだ。
無骨にして神聖な白い道着と紺の袴のコントラストは、彼女の清冽で頑な心を体現し。
月明かりに照らされたその姿は凛として気高く、それだけでチンピラ共を怯ませ寄せ付けぬ威風をまとっていた。
「お、女！？」
「まさか、坂上か！？」
「……生憎、私は坂上さんではありません。もっとも……あなた方を狩る者である事には変わりませんが」
「ひ、ひいいいいいいいいい！！」
男達は完全に恐慌に陥っていた。
俺達を騙して罠に陥れ、伏兵まで置いた必勝の布陣。
奴等は初めから勝ちを確信し、逃げる獲物を一方的に狩る狩人気分でいたはずだ。
にもかかわらず、気が付けば化け物じみた女の前に成す術なく、自分達が狩られる立場に。
覚悟の無い者達の集団ほど、脆い物は無い。
「こ、こんなの聞いてねえぞ！！」
「一方的にボコれるんじゃなかったのかよ！？」
「オ、オレは抜けさせてもらうぜ！！」
一人が逃亡したのをきっかけに、男達は次々と武器を投げ捨てて逃げ出し、あるいはそこに留まった者も、動揺の内に“月夜の狩人”に屠られていく。
「な、な、な、何だ……？何がおきてる！？」
「そちらが罠を張って伏兵を用意していた様に、こっちも伏兵を用意していた。ただそれだけの事よ」

「か、か、か、川上!?」
そして俺は、この隙に後方で茫然とする村越の前に現れ、某チート軍師の様に自信満々で出まかせを言い放った。
「もっとも、俺の方はそっちの伏兵をも読んで、逆に利用させてもらったがな。この町一番の進学校光坂を仕切るこの俺が、この程度の策を見抜けないとでも思ったのか?」
「ば、ば、ば、馬鹿な!?須藤の奴は俺の事を完全に信じていたはずだ!!」
「まあ、あの人はな。だが、この俺まで保険をかけないとでも思っていたのか?あの人のお人好しは有名だからな。テメエみてえな人間のクズがすぐ寄ってきやがる」
むろんそれは、村越以外の奴等にも聞かせる為のはったりだ。
土手に居た部隊は大半が逃げ出した様だが、奴の側には側近と思わしき男達が数人残っている。
まずはこいつらの戦意を更に削ぎ、一気に大将戦に持ち込んで方をつけるつもりだ。
「さて、村越。この謀略戦、大将同士のタイマンで決着をつけようか」
「お、お、お、おい!お前等何をしてる!?今はこいつ一人だ!!やっちまえ!!」
俺が大仰に構えてみせると、村越は取り乱しながら側に居た男の腕を掴んで無理矢理前に出し、背を突き飛ばしながらそう焚きつけると、自分は後方に駆け出した。
仲間を盾に自分だけ逃げようってのか……とことん性根が腐ってやがる。
「う、うわーーーー!!」
突き飛ばされた男が、破れかぶれに殴りかかってきた。
その大振りの拳を斜に身を屈めてかわしつつ懐に肩を入れると、そのまま捻りながら相手の勢いを利用して、右腕一本で吹っ飛ばす。
「わあ!!」

ズシャ！！
向かってきた男は暫く空を飛び、砂利の上に墜落した。
「つ、つえぇ……！！」
一撃で、それも派手に相手をぶっ倒す事で更に相手をびびらせる。
伝説の坂上智代を破り、この町最強となった男。
村越の必勝の策を看破し逆に陥れた智謀の士。
坂上の他にも、たった一人で数十人の男を蹴散らす女を従えている。
もはや彼等の中の俺のイメージは、勝手に凄まじい物になっているはずだ。
実際に、村越の側近達は身構えてはいる物の皆腰が引け、もはや戦意は感じられない。
それを見極め、俺は勧告する。
「やめておけ。あんなクズの為に怪我したかないだろ？どの道、あの男はもう詰んでいる」

逃亡した村越は全速力で土手を駆け上がり、走りながら首を捻って背後を確認すると、追っ手がいない事を知って足を止め、絶え絶えの息を整えようとしていた。
「チッ……チクショウ！！ハアッ、ハアッ……川上め！！今にみていろ……！！」
その村越が顔を上げると、前方の闇からぬっと人影が現れる。
この４月の寒い夜に、マッチョな肉体を誇示するかのような白いタンクトップ姿の坊主頭。
我等が御大将、須藤だ。
「げえええっ！！す、す、す、須藤！？」
「一つ聞きてえ事がある」
驚愕する村越に、須藤は有無を言わせぬ迫力で問い詰める。

「一緒に飲んだ時、お前が語ってた事は本当か？お前にも兄貴の様に慕っていた男が居たが亡くしちまって、だから俺等の気持ちはよくわかるって話だ」

「あ？あーあー、も、も、も、もちろんだ！な、なあ、兄弟。今日はほんのちょっと魔が差しただけなんだ。み、水に流しちゃくれねえか？な？な？」

「そうだな……」

「……なんて、言う訳ねえだろこのボケがぁ！！」

須藤が油断したと見るや、村越はポケットから折り畳みナイフを取り出すと同時に切りかかった。

ザクッ！！

その一閃は須藤の胸元を切り裂き、タンクトップの右の肩紐を切断する。

だが、

「ぶふっ！！」

それと同時に、須藤の鉄拳が村越の顔面に深々とめりこんでいた。

「よくもまあ、あんな口から出任せを……」

夜気その物の様な呟きに背筋がゾクリときて、慌てて振り返る。

そこには、たった今一人で死屍累々を築いた少女が、表情も無くいつの間にか立っていた。

「まあ、はったりも時には大事だろ？無駄な血は流したくない」

「それは、私への当てつけですか？」

「まあな」

「なっ……！」

道着姿の少女は何かを言いかけたが、苦い顔でそれを飲み込んだ。

現れてからずっと眉一つ動かさなかっただけに、少しだけ溜飲が下がる。

「てか、お前はこんな所で何をやってんだよ？衛武（えいむ）」
この少女名前は『衛武（えいむ）　舞（まい）』
剣道では小・中、そしてインハイでも連覇を続ける、全国でも有名な天才剣術小町だ。
中学が一緒だったが、彼女と初めて会ったのは小六の頃にやってた道場巡りの時で……まあ、その時一悶着あった事もあり、中学時代は何かと目の仇にされていた。
「たまたま部活の帰りに、あからさまに不穏な格好をした一団が、貴方の名前を出しながら歩いているのを目にした物で」
「いや、だからって……まあ、一応助けられたんだから礼は言うが、部活やってるお前が喧嘩しちゃマズイだろ？」
「貴方には関係有りません。それより、最近妙な噂を耳にしたので、聞きたい事があります」
「何？」
「貴方が、あの坂上智代さんを倒したと言うのは、事実ですか？」
「ああ」
「そうですか……では、貴方に決闘を申し込みます。私と戦って下さい」
そのとてつもなく不穏な少女は、竹刀の先を俺に向けながら、とてつもなく物騒な事を言ってきた。

第二章　4月25日　筋肉達磨は見た！

江戸時代から続いている……らしい、由緒正しい剣道場『衛武館』。

俺は小学生の時にその門を叩いた。

入る為では無い。

見学する為だ。

その頃の俺は、少しでも強くなりたくて色んな道場を見学して回った。

もちろん何か本格的にやれたら良かったんだが、習い事は一つだけと親に言われていたので、せめて見るだけでもと、考え付いた苦肉の策だ。

そこで俺はとんでもない逸材を目の当たりにする。

それまで既に空手や柔道と言った幾つもの道場を巡っていたが、正直言って同年代で本当に強いと思った奴はいなかった。

だが、そいつだけは別格、別次元の存在だった。

その美しい立ち姿、そのキレのある挙止、そのまとっている雰囲気。

そして何より、他の門下生を寄せ付けない圧倒的な強さ。

俺は一目で魅せられたと言っていい。

「あんた強いな！俺は川上。まだ正式に入門した訳じゃないが、よろしく頼む」

一試合終えたその背に、興奮のあまり思わず声をかけてしまった。

しかし、振り返って面をとったその顔を見て「しまった」と後悔する。

女だった。

防具をつけていたし、男子と試合をしていたからてっきり男だと思い込んでいたが、ややきつく冷たい印象ではある物の、ドキリとする程の美少女だった。

「そうですか。こちらこそ、よろしくお願いします」
「あ、ああ……」
さして興味も無さそうに、ドギマギしている俺を置いて彼女は行ってしまう。
それが、“天才剣士”衛武舞との出会いだった。

「いっつっつ、切られちまった……こりゃあまた、ゆきねぇに治してもらわねえとな……って、へへっ、こんな遅くじゃもう帰っちまってるか……」
自分を騙し嵌めようとした男を倒しはした物の、タンクトップのよく似合うマッチョな体と、それに似合わぬ繊細な心に傷を負った坊主頭の須藤は、鮮血の流れ出る傷口を押さえながら川原へと向かっていた。
あの坂上智代を倒し、自分達とも大立ち回りを演じて実力を示した川上に、突然現れ出鱈目な強さで敵を薙ぎ倒した謎の女。
「まっ、もう終わっちまってそうだけどな」
あの二人なら大丈夫だろう。
そう思いつつも多勢に無勢だ。一抹の不安は残る。
事の顛末を見届ける為にも、須藤は傷の痛みに耐えながら川上との合流を急いだ。
しかし、土手の上に辿りついた須藤はそこで、予想外の光景を目撃する。
「なんだ!?まだ終わって無い……!?て、あいつら何やってんだ!?」
初めから嫌な予感がしていた。

確かに衛武の自宅兼道場からここは割と近く、加えてこいつは不良と言う人種を蛇蝎の如く嫌っており、あそこまで頭の悪そうな連中を見かけたら問答無用で叩きのめしてもおかしくない類の人種だ。

だが、だからと言ってただ俺を助ける為にこいつが現れたとは考えにくい。

何しろこいつからすれば、俺も奴等と同類だろうからな。

つまりこいつの狙いは、初めから奴等でなく俺の方で、加勢してくれたのも邪魔者を始末したに過ぎないのだろう。

「アホな事言ってんなって。それより、遅いんだから早く帰れよ。道場の練習とかあるんじゃないのか？」

とりあえず俺は、常識を盾に冗談として受け流す体で答える。

元より女と戦う趣味は無いが……それでなくても、こんな奴と戦いたかねえ！！

さっきの動きからして、中学の頃より更に強くなっているのは間違いない。

それに……その……なんだ……智代とのバトルは色々と見えたり触れたりと言った“不可抗力”の特典が付いてくるが、袴に道着の下には黒いアンダーシャツを着たこいつにはお色気シーンは期待出来ず、そもそも精神までも完全武装している様な女だ、下手な事をしたら本気で殺されかねない。

そして忘れちゃならないのが、さっきの質問だ。

どうしてこいつの口から智代の名前が出たのか？

衛武の中学は俺と同じだから、あいつとは違う。

部活でも無いから、接点が有るとすれば……ただ一つだろう。

前々からそうじゃないかとは思っていたが……間違い無い。

智代も話していた、かつて智代と真剣で戦った女剣士とは、こいつの事だろう。

「……今日は道場の練習はありません……それよりも、もう一度言います。私と戦いなさい。たった今、暴漢に襲われていた所を助けてあげたばかりでしょう？」

淡々とした声音で、無茶苦茶な理屈を押し通そうとしてくる。
助けてくれたのは恩の押し売りの為かよ！
こいつは頑固爺を絵に書いた様な祖父から厳格に育てられた所為か、生真面目で融通が利かず、自身のジャスティスを他人にも押し付けようとしてくる所が有る。
しかし、この時ばかりは少し違和感を覚えた。
台詞の前の若干の間……普段キッパリとした物言いが売りの衛武が言いよどんだのだ。
たまたま練習が無い事が、そんなに言い難い事だろうか？
まさか……サボりとか？
「俺は女とは戦わない主義だって、前から言ってるだろ？」
「坂上さんとは戦ったのに、私とは戦えないと？」
「坂上とお前じゃ、立場が全然違うだろうが……部活やってる、それも部活推薦で学校行ってる人間が、喧嘩していい訳無いだろ？お前は全国区で有名人なんだし」
「貴方には関係の無い事だと言ったつもりですが？」
「無い訳ねえだろ！一応知り合いなんだし……それこそ恩を仇で返す事になるだろうが。それとも初めから勝気が無いのか？」
苛立ちでかゆくなった頭をがりがりとかきながら、さりげなく川を背にして衛武と対峙する様な立ち位置を取る。
こいつは一見落ち着いていて慇懃な物腰だが、その実かなり気性が激しくすぐに手が出る……実力行使、鉄拳制裁を得意とする烈女だ。
何とか今は会話で牽制出来ているが、いつ業を煮やして襲って来るかもわからない。
もちろん戦闘を回避出来ればベストだが、こいつが現れた時から“もしも”の事態も想定済である。
「言ってる意味がわかりませんが？」
「お前、坂上を倒した事で、俺がこの町最強になったって事わかってる？」

「ええ。だからこうして貴方に決闘を申し込んでいるんです」
「いや、だからな……もしお前が俺に勝ったら、当然お前が喧嘩したのが広まるし、今度はお前がさっきみたいのから狙われる事になるんだぞ？」
「そんな事まで心配してもらわなくても結構です。貴方の方こそ、私に勝つ自信が無い様に聞こえますが」
「当前だろ？たかだかこんなちっぽけな町の不良共の中で一番になったからって、全国制覇したお前に勝てる訳ねえだろ？心配しなくたって、お前の方が強えって」
「それでも、貴方は私に一度勝っています」
「小学生の時だろ？それもこっちは何でも有りの喧嘩殺法だったんだし」
衛武の実家でもある道場に通っていた時、俺はただ一度こいつと本気で戦った事があった。
道場主である彼女の祖父に、俺の目的を見透かされたからだ。
その上で爺さんは、俺に孫娘との試合を強いた。
剣道じゃ敵う訳が無いので、ルール無用でかまわんと。
そのまま戦わずに去る事も出来ただろう。
でも、その時は衛武と本気で戦ってみたいという気持ちが勝ってしまった。
どうせ最後なら、惹かれていたその強さを肌で感じたかったからだ。
そして俺は、あくまで剣道で戦おうとする彼女に奇策に奇策を重ね、一瞬の隙をついて組み伏せ勝ちを収めた。
「わかりました。なら、潔く戦って、負けてください」
「何もわかってねえだろ」
「私は中学の時に坂上さんにも負けた事があります。その坂上さんに貴方は勝った。なら、貴方には私の挑戦を受ける義務が有ると思いませんか？」
「んな義務ねえよ。てか、真剣使って負けたのって、お前だろ？」

「……その事まで知っていましたか……ええ、その通りです。私は真剣まで使いながら、坂上さんに負けました」
「違うだろ？“真剣なんか使うから”負けたんだ」
やや自嘲のこもった言葉を、俺は自分なりに分析した結論で打ち消す。
暗くて彼女の表情はよくわからなかったが、その険しい眼光が少しだけ和らいだ気がした。
「……どういう意味ですか？」
「いくらお前でも、竹刀程真剣に慣れてる訳じゃないだろ？形が似てても、リーチや重さは違うだろうし、それに刃は光を反射して夜だと逆に目立つ。お前がいくら速くても、見えているなら坂上の反射神経を持ってすれば避けられるだろ。それにだ……そもそも、お前坂上を殺したかったのか？」
「そんな訳が無いでしょう？当時、何かと世を騒がしていた彼女を、少し懲らしめたかっただけです」
「だったら、殺す気も無いのに刃物使うなよ。その分攻撃出来る部位も使える技も限られるじゃんか。つまり、お前は慣れない武器で坂上を殺さない様に手加減しながら戦った訳だ。でなきゃ、お前があんな素人に負ける筈が無い」
「素人？」
「あいつは虎とか熊みたいな物なんだよ。身体能力は人間離れしてるが、ちゃんとした武術を習ってる訳じゃないからテクニックは無い。まあ、それでも十分過ぎるくらい強けどな。でも、お前が竹刀を使っていれば、問題無く圧倒出来ていた筈だ」
「……」
『坂上智代は、素手で真剣を持った達人にも勝った』
半ば都市伝説となっている坂上最強伝説の一つだが、その事実はこんな所だろう。
“刃物を持った方が強い”
その固定観念は根強いが、それはあくまで殺人を是としたネジの

とんだ人間が持った場合の話で、真っ当な人間には逆に足枷にしかならない。

衛武がなんで真剣なんて持ち出したのかが甚だ疑問だが……これで頭に血が上ると結構無茶する奴だからな……。

中学でクラスメイトとして再会した俺達は、事あるごとに度々衝突した。

まあ、主にこいつが一方的につっかかってきてたのだが……。

生真面目な頑固娘とアウトローの対立は、神話の時代から続くお約束だろう。

当時はうんざりする事も多かったが、今思えば悪くない関係だったと思える。

「なるほど。そうやって、坂上さんの事も丸裸にして勝った訳ですか」

「まあ、そんな所だな」

「相変わらずHな人ですね」

「ええっ！？」

「冗談です……まさか、本当に裸にしたんですか？」

「してねえって！」

疑惑の白眼を向けながら、冗談なのか本気なのか判らない事を言ってくる。

こいつは武道家のたしなみで基本ポーカーフェイスな上に冗談なんて滅多に言わない奴なので、本当にわかり辛い。

「まあ、そういう事だから、坂上よりお前の方が強いよ。実際戦った俺が保障してやる。『勝敗は兵家の常』だ。たまたま一度や二度負けたからって、いちいちそれに拘るなよ。じゃあな」

「じゃあな、じゃありません！！」

必殺“イイ事言ったどさくさに撤退”は失敗し呼び止められる。

腐れ縁だけあって衛武もまたこちらの手の内を知り尽くしており、やはり一筋縄ではいかないようだ。

「あくまで勝ち逃げをするつもりですか？」

「いや、だからな。俺達がやりあった所で、お前にも俺にもメリットなんて無いだろ？」
「……わかりました。なら、もし貴方が勝ったなら、私の事を好きにしてかまいません」
「はあ？」
衛武がまた真顔でとんでも無い事を口走りはじめた。
呆れつつも、同時に少しだけこの勝気な美少女を屈服させた図を想像してときめき、しかし理性が鳴らす警鐘でいやいやと冷静になる。
確かにこいつは美人だが、この性格だ。下手に手を出せば火傷どころか炎上しそうだ。
どうやら相当キレかかってやがるな……どこかで落とし所を見極めた方が良さそうだ。
「アホな事言ってんなよ」
「貴方と坂上さんは……その……恋人同士だと言う噂も聞きましたが、本当ですか？」
暗くて顔色こそわからないが、衛武は珍しく照れている様な素振りを見せる。
「いや、付き合ってないけど……」
「なら、例え私と貴方がそういう関係になっても、何の問題も無いはずです」
いや、無い訳無いだろ……。
「……お前、俺が好きなのか？」
「なっ、何を言ってるんですか!?やれば絶対に勝つ自信があるからです！おかしな事を言わないで下さい！」
俺の揺さぶりに、今度は暗がりでも完全にそれと判るほどの動揺が見てとれた。
つけこむなら、テンパッてるここがチャンスか。
「わかったよ。そこまで言うならやってやる。ただし、制限時間は5分な」

「5分ですって!?それは、あまりにも短過ぎます!」
「そうか?剣道の試合って確か5分だろ?」
「決勝は10分、延長に3分あります」
「5分だ。その代わり、やるからには逃げ回ったりしないから安心しろ」
「……」
「まっ、嫌なら俺は別にいいけどな。じゃあっ!?」
なら交渉決裂だと再び帰ろうとした瞬間、返答の代わりにザッと砂利が鳴った。
咄嗟に後方に飛んだ俺の残像を、紫電の如き一撃が袈裟斬りに両断する。
バチャッ!
そのまま俺の足は川に浸かり、たちまち冷たい水が靴の中に入り込む。
「覚悟!!」
川に入った事で素早く動けない俺を狙い打つべく、衛武は間髪入れず次の斬撃を放とうとする。
だが、ここでトラップカード発動!
ほくそ笑みながら俺は、浸かっている右足を振り上げる。
バッシャーン!!
カウンターの水の弾幕。
そう、初めからこれが狙いの位置取りだ。
如何に衛武と言えど、これは流石にかわせまい!
だが、水の壁が無くなると、そこにずぶ濡れになった筈の彼女の姿は無かった。
「やべっ!!」
振り上げた反動を利用して軸足でバックステップして何とか二撃目をかわすも、バランスを崩して片手をつきケツが半分水に浸かる。
冷てえ!!てか、アレをかわすのか!?読まれていた!?
驚愕しながらも追撃に備えて慌てて立ち上がったが、それが来る

事は無かった。
衛武は仕切り直しとばかりに水辺から少し離れた所で待ち構えている。
どうやら俺の狙いは的を射ていたらしい。
機動力を最大の武器とし、また袴姿でもある彼女は、濡れる事を嫌い川に入る事は出来ないのだ。
「卑怯な貴方の事ですから、そう来ると思っていました。さあ、上がってきなさい」
「断る」
「逃げないと約束した事を、もう忘れたんですか！？」
「ああ、逃げんよ。食らえ！！」
彼女が向かってこないのをいい事に、俺は再び水面を蹴り飛ばした。
「ちょっ！ふざけないで下さい！」
この距離でも飛沫は届くのだろう。
片手で顔をガードしつつ、文句を言ってくる。
だが、そんな物は覚悟の上だ。
「こっちは攻撃してるじゃんか。お前の方こそ向かって来いよ。このままじゃ、俺の判定勝ちだぜ。っと、時計を進めないとな」
「どこまで卑劣な……！！」
「お前が勝つには残された道は二つ。袴のまま水に入るか、袴を脱いで水に入るかだ！！」
携帯のアラームをセットしながら、既に俺の勝ちだと宣言してやった。
衛武の怒気が空気を通して伝わってくる。
だが、何をしたって勝ちは勝ちだし、俺とて負けられないんだ。
これで呆れてくれて、二度と俺と戦おうなどと言う気が起きなくなれば、それが一番だ。
などと俺は思っていたのだが、それは甘かった。
そもそも、この程度で終りにしてくれるなら、俺達の縁はとうに

切れている。
「ふっ……ふっふっふっふっ、いいでしょう！貴方の土俵に付き合ってあげます！」
えっ……衛武が壊れた！！
あまりの事に、呆気に取られるしかなかった。
突然笑い出したかと思うと、彼女は袴の紐を解き、脱ぎ始めたのだ。
ストンと落ちた袴の下から現れたしなやかな脚線のシルエットは、普段隠しているのが罪だと思える程見事な物であり、胴着の間からわずかに覗くデルタ地帯に心臓が驚喜する。
そこまでして俺に勝ちたいと言うのか！？
や、やべえ……なんか、惚れちゃいそうな程男前だ！！
「お、お前、正気か！？」
「何を言うかと思えば、こうしろと言ったのは貴方じゃないですか。どうせ暗くてよく見えないでしょうし、ま、負けたらどの道見られてしまう物ですから……。ならば、肉を切らせて骨を断つまでです！」
いやむしろ暗いからこそ、逆に妄想を掻き立てられてエロチック！などと思ってる場合じゃない！
バシャバシャと躊躇無く川の中を彼女が向かってくる。
袴を脱いだ事で、もはやイニシアチブは無いに等しい。
バシッ！バシッ！バシッ！
「てってってっ！」
放たれる連撃を必死に両腕でガードするも、ガードの隙間を的確に打たれ、後退を余儀なくされる。
流石に自慢の運足は使えないらしく、手打ちなので威力も無い。
とは言え、やはり彼女の方が速く、何より竹刀の分リーチが違い過ぎる。
このままではジリ貧だ。
「形勢逆転のようですね！」

「フッ、どうかな！」
何とか体勢を立て直した俺は、後退しつつ再度水の弾幕を張る。
バッチャーン！！
「きゃあ！！」
既に膝辺りの深さまで入り込んでいた事もあり、流石に逃げ切れなかったのだろう。ようやく衛武に水がクリーンヒットした。
頭から水をかぶり、怒りと寒さでブルブルと振るえ出す。
「貴方って人はぁぁぁぁぁぁっ！！」
そしてついに憤激しながら、水に浸かっていた竹刀を振り上げ水の飛沫を飛ばす。
目元を撃つ水に、たまらず俺は手でそれを拭った。
だがそれは、ただの目くらましであり、あくまで次の一撃への布石だった。
「はあぁぁぁぁぁぁっ！！」
もはや技術うんぬんはそこには無く、弓反りから必殺の気合と共に怒りの一撃が放たれる。
殺られる！！
俺は死を覚悟した。
まさにその瞬間だった。
「おーい、お前ら何川で遊んでんだよ？」
衛武の背後から聞こえてきた間の抜けた声に、竹刀が額に触れるか触れないかという所でピタリと止まる。
そして首だけで振り返ると、
「きゃーーー！！」
川辺に人影が在る事に気付いて、衛武は少女らしい悲鳴を上げて俺に抱きついてきた。
「うおっ！？」
そしてドキリとして棒立ちになった俺を支点に、隠れる様にクルリと背後に回った。
そこでようやく俺も岸に目を向け、その正体に苦笑する。

肩紐の一つが切れたタンクトップを着た坊主頭、須藤さんだった。
「まだ4月だぞ。寒くないのか？」
いや、あんたにだけは言われたくない。
「だ、誰ですか？」
俺の上着を握りしめ背中にピッタリとくっつきながら、衛武が訊いてくる。
「知り合いだよ。さっき俺と一緒に居たろ？」
「見ている人が居たなら、早く言って下さい！」
「いや、今来たんじゃないか？さっきまで居なかったし」
「そ、そうですか……」
「暗いから、別に見られても平気なんじゃないのか？」
「それとこれとは話が違います！」
どうやら須藤さんの登場で彼女の気勢は完全にそがれたらしい。
こうしていると普通の女の子っぽくて、妙に可愛く思えてしまう。
そしてその時、
ピッピッピーーー！
“３分間”に設定しておいたゲーム終了を告げるホイッスル風アラームが鳴った。

「やはり貴方とは、いつかちゃんとした形で決着をつけないといけないようですね」
並んで立つ男二人の背後で袴をはきながら、衛武は愚痴る様に呟く。
とりあえず俺の上着を腰に巻いて、更に俺を盾にしながら川から上がった彼女は、横槍を入れた須藤を物凄い形相で睨みつけ、時間が短かった事を指摘してきた物の、戦いを続けようとは言わなかった。
まあ、お互いすっかり濡れ鼠なので、早く風呂にでも入りたいの

だろう。
「じゃ、今度は昼間の川の中でやるか」
「なら、下に水着を着て来ないといけませんね」
「まあ、どちらにしろ、もっと暖かくなってからだな」
背中越しの軽口の言い合いに、懐かしさを覚える。
ウザくもあるし、色々あったが、俺はこいつの事が嫌いじゃない。
どこかで通じる部分がある様な気がするからだろうか。
「風邪ひくなよ」
「貴方こそ、今日みたいな事にならぬ様、気をつけなさい。私以外の人に負けたら、承知しませんから」
最後にほん少しだけ微笑んで、孤高の天才剣士は去っていった。

番外編　新春クイズ・ペンタゴン

１２月２４日クリスマスイブ。
私はホテルのおしゃれなレストランに居た。
店内は照明が抑えられキャンドルがムードを演出し、テーブルには豪華な料理がのっている。
そして目の前に座るタキシード姿の“あいつ”。
まるで、クラスの女の子達に勧められて、乙女の嗜みとして最近読みはじめた少女マンガやドラマに出てくる様なシチュエーション。
私も女の子だからな。こういうのに憧れていなかったと言えば嘘になる。
でも正直、イブの日にこんな高そうなレストランで食事なんて、かなり無理してるんじゃないかと心配だ。
私はただ、“あいつ”がそばに居てくれさえすればそれでいい。
“あいつ”と一緒にクリスマスを過ごせる。私にとっては、それが何より嬉しい事なんだ。
「さてと、じゃあそろそろお披露目といくか」
そう言うと、“あいつ”はおもむろにテーブルの影から何かを取り出す。
それは、今まで一体どこに隠していたんだ？と疑問に思う程大きなクマのみいぐるみだった。
「これ何だか知ってるか？」
「もちろんだ！『でとっくま』だろ？可愛いな」
『でとっくま』とは、誰もが思わず毒気を抜かれてしまう程間の抜けた表情や仕草をしたクマのキャラクター、いわゆる“ゆるキャラ”と言うやつで、そのグッズは女の子の間でとても人気がある。
私もかなりの数を集めてはいるが、こんなに大きいのは見た事も無かった。
「ありがとう！とても嬉しい」

感激して、当然の様に私は礼を言いながら手を伸ばす。
だが私の手が届くより一瞬早く、“あいつ”はおあずけをする様に『でとっくま』を引っ込めてしまった。
そして、イブの日にはとても似つかわしくない、いつもの意地の悪い笑みを浮かべる。
「なんだ？くれるんじゃないのか？」
「フッ、ただじゃやれないな」
「どういう意味だ？まさか、また何かHな事を要求するつもりなのか？」
「失礼な。俺がいつそんな物要求した？」
「いつもしてるじゃないか」
「うん。してるな」
「あっさり認めるな！そ、それで……今度は一体何をさせるつもりだ？」
「そうだな……なあ、俺達、そろそろいいんじゃないか？」
“あいつ”は急に真顔になって、真剣な眼差しで言った。
それに思わずドキリとしてしまう。
何しろ今日は『クリスマスイブ』なんだ。
私にだってそれなりの知識はあるし、覚悟もしてきた。
してきたはず……なんだが、やっぱり面と向かって言われると、恥ずかしさで顔から火が出そうだ。
「そ、それってやっぱり……その……アレか？」
「ああ……新春恒例クイズ大会～！！」
「ええっ！？」
思いもよらぬ言葉に驚いた瞬間、突然どこからかパチパチと拍手が鳴り響き、周囲がパアッと明るくなって一瞬目が眩む。
それに目が慣れた私は……いつの間にかＴＶでよくある回答席の一つに座らされていた。
「な、何だ！？一体何が起きて……！？」
「新春クイズ『ペンタゴン』では、解答者の紹介です。まずは、

一ノ瀬ことみさ～ん」
「一ノ瀬ことみです。趣味は読書です。私もクマさん欲しいの」
何が起きたか理解出来ず動揺する私と違い、一ノ瀬さんはまったく普段と変わらぬ調子だった。
そして、他の解答者もまた、私がよく知る人達ばかりだった。
「続いて、藤林杏さ～ん」
「何だかよくわからないけど、まっ、面白そうだから付き合ってあげるわ」
「伊吹風子さ～ん」
「風子はもう大人なので、子供っぽいクマのぬいぐるみよりヒトデが欲しいです！」
「古河渚さ～ん」
「ふ、古河渚です！わたしもどちらかと言うとだんご大家族の方が欲しいです」
「そして、坂上智代さん。以上の五人で、賞品の『でとっくま』を目指して争っていただきます！」
「待て！一ノ瀬さんはともかく、他の人は別にクマを欲しそうじゃないじゃないか！！」
「それでは早速第一問、『クイズ、五人くらいに聞きました』～！」
私のつっこみを完全に無視して、あいつは司会を進める。
「まずはＶＴＲをご覧ください！」
司会の背後の大きな画面に、一人の人物が映しだされる。
くわえタバコにエプロンというちぐはぐな格好をした、どこかで見た様な男だった。
「あっ、お父さんです」
どうやら古河さんのお父さんらしい。
その脇には、テロップで『ファーストガンダム以外で、あなたの一番好きなガンダムは？』と書かれていた。
恐らくこれが質問なのだろう。

「あん？ファースト以外で一番好きなガンダムだぁ？そうだな…
…ファースト以外となるとドングリの背比べって所だが、『W（ウイング）』や
『シード』はなかなか良かったんじゃないか？」
うん。私も子供の頃にシードは視ていたな。
特にヒロインのポニーテールの女の子は可愛かったと記憶してい
る。
続いて、古河さんのお父さんの後ろから、一人の女性が顔を出し
た。
「お母さんです」
あれが古河さんのお母さんなのか……それにしては随分若くて綺
麗ひとだ。
「え？ガンダム、ですか？そうですね……ＯＶＡでもよければ、
『第０８ＭＳ小隊』が私は好きです」
古河さん家は夫婦そろってガンダムが好きなのか。
次いで画面が切り替わり、今度は学校近くの見慣れた風景に、見
たくもない金髪の男がしまりの無い顔で立っていた。
「ガンダム？そりゃあもちろん、『Ｖガン』でしょ！！光の翼！
！ヴイ～～～ン！！」
春原は訳のわからない事を叫ぶと、両手を翼の様に広げジグザグ
に走りながらフェードアウトしていった。
まあ、春原の事などわかりたくもないが……。
その次に映し出されたのは、作業服にヘルメットをかぶった若い
男だった。
「あっ……祐介さんです」
どうやら風子ちゃんの知り合いの様だ。
「そうだな。どれも甲乙付け難いが、やはり『W』が一番だろう。
特に主人公でもある……」
腕組みをしながら語り始めた作業服の男だったが、音声は途中で
絞られ彼の口だけが永延と動いていた。
これで『W』が二票……と言う事だろうか？

次が五人目だ
パッと画面が切り替わり、五人目が現れる。
そこに映っていたのは、幼稚園生の制服を着たとても可愛らしい小さな女の子だった。
「え～とねえ～……」
「はい、では問題です。この後、この女の子は何と答えたでしょうか？」
ピンポン！
私が女の子に見とれている隙に、風子ちゃんに解答ボタンを押されてしまった。
「伊吹さん」
「ヒトデです！！」
ブー！
勢いよく立ち上がって答えた物の、不正解のブザー。
「惜しいけどヒトデじゃありません。問題をよく読んで下さい。では」
ピンポン！
続け様に風子ちゃんがボタン連打する。
「はい、伊吹さん」
「惜しいなら、やっぱりヒトデです！！」
ブー！
「いや、だから、ヒトデじゃないです」
ピンポン！
「はい、藤林さん」
「あの子幼稚園生よね？じゃあ、知ってても『ＯＯ（ダブルオー）』とかじゃない？」
ブー！
「常識的な良い答えですが違います。でも、さすが保母さんを目指すだけあって、着眼点は凄くいい！」
ピンポン！

「はい、坂上さん」
「えっと、あれだ。『ケロロ軍曹』の後にやってる三国志みたいなヤツじゃないか？」
「おお、それは何？」
「やはり正式名称を答えなければダメか……う～ん、何だったかな……？ケロロ軍曹のついでにたまに視てるだけだから……」
ブー！
ここまで出掛かってると言うのに、無情にも不正解ブザーが鳴らされる。
軍曹の事なら私もそれなりにわかるのだが……。
「今考えてる所じゃないか！」
「時間切れです。でも、惜しい所まで来ている！」
ピンポン！
「はい、一ノ瀬さん」
マズイ！思い出す前に一ノ瀬さんに押されてしまった！
「『ケロロ軍曹・乙』って言うかぁ、深夜放送？」
ブー！
「深夜放送は子供はみません！」
ピンポン！
「はい、藤林さん」
「後のは知らないけど、ケロロ軍曹は面白いわよね。特にくの一の子とか」
ブー！
「ケロロの感想は聞いてません！でも、ケロロくらい幅広い年齢層から支持されてる番組です」
ピンポン！
「はい、古河さん」
「はい。幅広い年齢層から支持されてると言えば……だんご大家族です！」
ブー！

「えっと……あれはアニメじゃないですし、今ブームの物です」
ピンポン！
「はい、伊吹さん」
「なら、ヒトデです！！」
ブー！
「だからヒトデじゃ無いってばよ！」
ピンポン！
「伊吹さん、ヒトデじゃないですよ？」
「それはＮＡＲＵＴＯです！」
ブー！
「いや、今のは別にナルトの真似でも、クイズでも無いから。でも、かなり惜しい所まで来てます。あくまで幼稚園くらいの女の子が好きそうなアニメです」
ピンポン！
「はい、藤林さん」
「小っちゃい子が好きそうなアニメと言ったら……えっと、プリキュア？だっけ？」
「おおっ！プリキュアの何？」
「えっ？プリキュアって一つじゃないの？」
「ああ、残念！」
ブー！
「正確な番組名でお願いします！」
ピンポン！
「はい、坂上さん」
「ハートキャッチプリキュア！」
ピンポンピンポーン！
「正解！」
「よし！」
嬉しさのあまり、私は思わずグッとガッツポーズをした。
藤林さんのお陰で、たまたまどこかで聞いた覚えのあるタイトル

を思い出せたんだ。
いや、でもまてよ……。
「ガンダムじゃないじゃないか！」
「はい、では、正解のＶＴＲをみてみましょう」
やはり私のつっこみを無視して、止まっていた画面が動きだす。
「え～とねえ～、ともね～、ハートキャッチプリキュアが好きだよぉ」
うう……可愛い……！！
あまりに無邪気なその笑顔に、細かい事なんてどうでもよくなってくる。
しかも、あの子の名前も『とも』というのか。
何か運命的な物を感じてしまうな。
「それでは正解した坂上さんには、プリキュアの一人キュアサンシャインのコスプレをしてもらいましょう！」
「ちょっと待て！それではまるで罰ゲーム……って、うわぁぁぁっ！！いつの間にか着替えさせられてる！！」
気付いた時には、既に私はひまわりの様な黄色い衣装を着せられていた。
かなり短めのギザギザなミニスカートに、飾りのついた上着も丈が短くおへそが出ている。
おまけに髪まで頭の上で二つに結わえられ、いわゆるツインテールにさせられていた。
「では、このまま次の問題です。次は最終問題なので１００万点入ります。つまり、誰にも逆転優勝のチャンスはあります！」
「一問目はなんだったんだ！？と言うか、まだ二問目じゃないか！！」
「けっしてクイズネタを考えるのが面倒になった訳ではありません！兎に角、これに正解した人が優勝です！では問題、『この……」
ピンポン！
「はい、伊吹さん」

「ヒトデです！！」
風子ちゃんの答えに会場が凍りついた様に静まりかえった。
まったく、風子ちゃんも仕方が無い子だな。
一体何度ヒトデと答えれば気が……。
「正解！！」
ピンポンピンポンピンポーン
「なっ……！？」
割れんばかりの拍手と歓声が上がり、風子ちゃんの上から花吹雪、いや星、もといヒトデ吹雪が舞い散る。
「正解がヒトデって、どういう事なんだ！？」
「問題は『この番組のタイトルにもなっているペンタゴンと言えば……五角形の事ですが、ペンタゴンの通称で呼ばれる、テロの標的にもされたアメリカの施設と言えば……国防総省ですが、日本の函館にある、幕末に新撰組の土方等幕府方の人間が最後まで抵抗した地としても有名な五角形の建物と言えば……五稜郭ですが、主に海にいる五角形の生物と言えば？』という事で、答えは『ヒトデ』です」
「そんな事を訊いてるんじゃない！」
「それでは、優勝者の伊吹風子さんには賞品のでとっくまのぬいぐるみを差し上げます」
「わあ……コホン、風子大人なので本当は要りませんが、どうしてもと言うのなら仕方ないので貰ってあげます」
「ああっ……」
大人ぶって気取った態度をとりながらも、ぬいぐるみを抱く風子ちゃんの顔はにやけていた。
何か腑に落ちないが、これも仕方ないか……せめてその子を大切にしてくれ……。
「続いて、準優勝の坂上さんにも記念品があります！」
「私も何か貰えるのか？」
ひょっとして、小さなクマか？

勝手にそう思い込んで、私は胸を高鳴せたのだが……。
「今コスプレしているプリキュアの衣装と、副賞としてヒトデ一年分をプレゼントです！！」
「ええっ！？」
そんな物要るか！！
そうつっこもうとしたが、背後に気配を感じて振り返ると、そこには私の身の丈の倍以上にも積まれたヒトデの山が。
嫌な予感がした。
そしてそれはすぐさま現実の物となり、ヒトデはこちらに向かってガラガラと崩れだす。
「う、うわあああああああああああああああああああ！！」

「うわっ！！」
私はベッドから跳ね起きた。
暫く頭の中がぐちゃぐちゃになっていたが、荒い息が整うにつれ思考も鮮明になってくる。
夢……？
そうか……夢か！そうだよな。あんな事、あってたまるか！
脱力してベッドに倒れこむ。
しかし、初夢がこんな悪夢なんて……最悪だ。
「まったく……こんな夢を見たのも、お前の所為だぞ」
枕元に置いてある人形を手に取り、布団の中でぎゅっと抱きしめる。
“あいつ”がクリスマスイブの前日にクレーンゲームで取ってく

れた『でとっくま』の人形だ。
お互い付き合いもあるだろうから、二人っきりで過ごせないのも仕方無い。
でも……、
「レストランで食事とかは要らないから、来年こそは一緒に居てくれ。コラ、ちゃんと聞いているのか？」
見るからにやる気の無さそうな人形に“あいつ”を重ね、私は再び眠りについた。

第二章　4月26日　はくちゅん大魔王

4月26日（土）

「ハッ……クチュン！」

トレーを持っていて両手がふさがっていたので、出そうになったくしゃみを咄嗟に肩口で押さえる。

マズイな……川に入って濡れて帰ったせいか、昨晩から少し風邪気味だ。

「てめえ……」

「あ、すんません」

見ると古河パンが誇る不良店主が、険しい顔をしてた。

くわえタバコはどうなんだ？とは思うが、やはり食品を扱ってる所でくしゃみはマズイわな。

「女みてえなくしゃみしてんじゃねえ！！」

ええっ！？キレるとこそこ！？

「男ならもっと豪快にやりやがれ！いいか？こうだ！ぶえっっっきしっ！！」

難癖をつけてきた秋生さんは、すかさず演技指導とばかりに往年の加藤茶を思わせる豪快なくしゃみで唾を飛ばしまくる。

いち早く身の危険を感じて飛び退ったから良かった物を、つっ立って居たらモロにかぶっていた所だ。

「さあ、やってみろ！！」

「いや……無理にやるもんじゃ無いでしょ……」

「なにい～！？」

「秋生さ～ん、お店で派手なくしゃみはやめてくださいね～」

“俺のくしゃみがやれないのか！？”的な理不尽な怒りを向けられた所を、店の奥から現れた優しい声に助けられる。

早苗さんが来てくれた！

助けられた安堵と、顔が見れた喜びで、思わず顔がほころぶ。
朝はパン作りや家事が忙しいのか、あまり出てきてくれないのだ。
「くちゅんっ」
気が抜けた途端にまたくしゃみが出そうになって、片手で口を押さえる。
一晩寝れば治ると思っていたが……これは朝飯食ったら薬飲んどいた方が良さそうだ。
「オーキ君、風邪ですか？」
「ええ。すいません」
「生理現象ですから、気にしないで下さい。それにオーキ君は、子供の頃から咳やくしゃみをする時も、ちゃんと周りに配慮して手で押さえてくれますから」
そう言いながら少し昔を懐かしむように目をつぶると、聖母の様に微笑む。
褒められた気恥ずかしさと、この人にとって俺は永遠に子供なのだと改めて思い知らされ、苦笑しながら恐縮するしかなかった。
「そういう時こそ早苗のパンだ！早苗のパンにかかりゃ、風邪のウイルスなんざイチコロだぜ！さあ、ここにあるやつ全部買っていきやがれ！！」
「さすがにそんなに食えませんよ」
つっこみつつも早苗さんをちらりと見ると……、
「そうだ！では、来週の新作パンは、オロナミンパンにしましょう！」
と、何故かパンと手を打って瞳を輝かせていた。
どうやら、滋養強壮に効くとかいい方に意味をとったらしい。
いや、“ウイルスをも死滅させる破壊力”とか思ったのは俺の深読みかもしれんし、特に今日は走っていかれると困るんだが。
「オーキ君、どうでしょう？」
「あ、いや……」
「それとも、リポビタンパンの方がいいですか？ユンケルパン…

…だと、少しコストが高くなり過ぎてしまいますね……」
栄養ドリンクそのまま入れるんかい！
「いいです！大した事無いんで、直ぐ治ると思いますから！」
「そうですか？デカビタパンなら、割とコストも抑えられると思いますけど……」
「いえ、気にしないで下さい！」
どれを入れるか本気で悩んでいる早苗さんに、引きつった笑顔でご遠慮願う。
いや、ちゃんと作れば結構うまそうな気もするが、早苗さんだからな……。
「早苗、赤まむしパンなんてのはどうだ？」
きりっとした男前の貌で秋生さんが言った。
どうだ？じゃないだろ。
「まむしパンですか……精はつきそうですが、まむしなんてこの辺りに居るでしょうか？」
いや、それ違います！てか、現地調達！？
さすがは早苗さん、ボケにボケで切り返した！
「じゃあ、一個だけ……」
このままでは収集が付かないので、とりあえず香ばしい湯気をたてている早苗パンを一つトレーにのせた。
「ありがとうございます！」
「あん？一個だあ？半額にまけてやるから、全部買っていきやがれ！」
開店したばっかで焼きたてパン半額セールかよ！
「まあまあ、秋生さん。もし売れ残ったら、またお宅の方に届けてあげましょう」
１００％届く訳ですね……。
「それじゃあ」
「おう」
「お大事にしてくださいね」

「はい」
早苗パンとミートパイ、それと体に良さそうなシナモンロールを買って、古河パンから一度帰宅した。

布団に入って、時間ぎりぎりまで仮眠する。
まだひき始めって所だが、学校行きたくねえな……。
まったく、何でうちの学校は土曜が休みじゃないんだ？
まあ、その辺まったく調べず入った俺が悪いのかもしれんが……
今時有り得なくね？
明日からバイトも始まるし、大事をとって休みたい所だが……気になる事もあるしな……。
昨日、門倉達がやっていたアンケートの結果は知っておきたい。
実際の選挙でも選挙前調査は当たり前の様にやってはいるが……。
あれと同じ物だと思ったら大間違いだ。
アンケートの結果次第では、あいつにとっては更に厳しい戦いになるだろう。
まったく、報道部も余計な事をしてくれる……。
あいつは……今日は来るだろうか？
出来れば、一緒に結果を見てその場で対処したいが……。
せっかく昨日我慢してこれで終りって雰囲気にしたってのに、その矢先にこれだ。
まあ、来ないなら後で話をすればいいし、その方がいいのかもしれんけど……。
色々考えながらうとうとしていると……トントンと階段を上がってくる音が。
さすがは天下のＫＹ娘。あの程度の事じゃ通じないようだ。
「おはよう、オーキ」
「おはよう」

当然ノック無しで元気にドアを開けて入ってくる長い髪のＫＹ娘に、起き上がりながら普通に挨拶を返す。
すると、何故か少女は呆然とその場に立ち尽くした。
「どうした？」
「あ、いや……おはようオーキ」
智代は少し戸惑いを見せたが、気を取り直した様に笑顔で再び挨拶を言いながら入ってくる。
一応は、邪見にされるとでも思っていたんだろうか？
いや、いつもならする所だが、今日は特別なだけだ。
テキパキと折りたたみテーブルの用意を始める智代を、無言のまま眺める。
主に短目の制服のスカートの裾辺りを中心に。
相も変わらず脚長いな……。
脚繋がりで、昨日見た光景を思い出す。
網膜に焼きついた魅惑のシルエット。
まったく期待していなかっただけに、あれは衝撃的だった……。
衛武とどっちが長いだろうか？
胸は智代の方がデカイと思うが……。
「はっ……くちゅん」
川原の寒気や水の冷たさまで思い出してしまい、思わずくしゃみが出た。
「今のくしゃみはお前のか？」
振り返った智代は、驚き顔でそんなわかりきった事を訊いてくる。
今までネタにされた事は何度かあるが、そんなに俺のくしゃみは変なのか？
「可愛いくしゃみだな。女の子みたいだ」
「悪かったな」
「誰も悪いなんて言ってないだろ？むしろ褒めてるんだ」
「だから、男は可愛いなんて言われても……」
ムッとした俺の言葉を、伸びてきた智代の手がさえぎる。

「風邪か？熱は無さそうだな……」
俺のおでこにあてた手を、前髪を上げながら自分のおでこにあてて確かめると、安心した様に微笑む。
直接おでこをくっつけられるよりは１００倍マシだが、それでもやはり照れくさい。
「そうだ。伝染るからあんま寄るなよ」
「そんなのかまわない」
「選挙どうすんだ？」
「問題無い。これでも体力には自信があるんだ。風邪なんかに負けないし、例えひいたとしても、この選挙は戦い抜いてみせる」
「……」
智代は胸を張り自信に満ちた瞳で言い切った。
絶対根拠なんかねえだろうに……。
そう思いつつも、久々に自信満々な彼女を見て、対処に迷った。
やっぱり、こいつには偉そうなくらいの方が似合っている。
俺とて、こいつの鼻っ柱を折るつもりは毛頭無い。
だが……。
「……すまない。怒ったのか？」
沈黙に不安を覚えたのか、急にしおらしくなって恐る恐る訊いてくる。
「別に……心当たりがあるなら、やる事やれ」
「ちゃんとやってる！来週からは朝も選挙活動をする予定だ。だから、朝迎えに来れるのも、今日が最後なんだ……」
そう言った智代は、ドナドナの幻聴が聞こえそうな程寂しそうだった。
いやな。俺とて来てくれるのは凄く嬉しい。
あれだけ拒絶したのに、またこうして懐いてくれてる事に感動すら覚える。
許されるなら、今すぐにでも抱きしめて、そのまま押し倒して色々やりたい。

でも、それは許されない。
誰よりも、俺が許さない。
「もういいから。さっさと飯食って学校行くぞ」
「風邪の方は大丈夫なのか？」
「大した事無いから平気だ」
「そうか。でも、無理をしてはダメだぞ。風邪はひき始めが肝心だからな。はい、あ～ん」
智代は布団の脇に置かれたテーブルにお盆を置くと、条件反射の様に箸を取り、おかずをつまんでそれを俺の口元に差し出してくる。
「あーんは昨日で終り」
「どうして？今日までだって言ってるじゃないか！」
「ダ・メ・だ。ほら、返せ」
唇を尖らせて食い下がろうとした智代だったが、俺が箸をつまむんで眉を寄せると、渋々と手を離した。
だが、直ぐによからぬ事を思いついて立ち直ると、人が食ってる前に身を乗り出してくる。
「じゃあ、選挙が終わった後ならいいだろ？」
「……気が向いたらな」
「うん、約束だ！ゆ～びき～りげんまん……♪」
無理矢理俺の手を掴んで小指を出させると、智代は強制的に誓約を交わした。
もちろん不本意ではあるが……それでモチベーションが上がるなら善しとしよう。

第二章　4月26日　川上リテラシー

いつもと変わらぬ長い長い坂を上りきると、校門の方から声が聞こえてきた。

「光坂の伝統をリスペクトして踏襲しつつ、みなさんがよりよい学園生活を送れるよう……」

「みなさんの清き一票を、どうかよろしくお願いします」

それぞれの名前の書かれた襷をかけた男子と女子が、数人のお供を連れて仁王の様に校門の左右に立ち、大声で登校者に向けて演説をしていた。

あれは確か……生徒会長候補の二人だ。

名前までは覚えていないが、顔は選挙ポスターで見た憶えがある。

時折足を止めて聴いている者も居なくもないが、ほとんどの生徒は興味も無さそうに素通りしていく。

それでも彼等は、まるで競い合う様に自分のアピールを続けていた。

「もう朝から演説をしている生徒が居るんだな」

「お前のライバルだ」

足を止めて彼等を眺めながら他人事のように言う智代を置いて、そのまま足早に校門をくぐる。

嫌な予感がした。

聴こえて来た演説の内容その物はあたり障りの無い凡庸な物。

しかし、『兵は拙速を尊ぶ』と言うだろう。

多少拙くとも、いや、拙いなら尚の事、速さで勝負と言うのは悪くない。

例えまともに演説を聴いていなかったとしても、一番乗りと言うだけで生徒の記憶には残るはずだ。

いや、問題はそこでは無い。

俺が気になったのは……彼等の“声”だ。

選挙は始まったばかりだと言うのに、彼等の声にはどこか切羽詰った様な物を感じた。
いくら隣に別の候補者居るとは言え、必死過ぎる気がする。
「待て！先に行く事ないだろ」
すぐに智代も小走りで追いついてきて、文句を言いながら隣に並んだ。
それにかまわず、むしろ振り切る様に歩くペースを加速させる。
「怒っているのか？」
だが、足の長さの差ゆえか苦もなく追いつかれ、不安顔で覗き込まれる。
「昨日のアンケートの結果が気になる。急ぐぞ」
「アンケート？ああ、実里達がやってたアレか」
仕方なく目的を言うと、さして興味も無さそうな返事が返ってきた。
自分も関わるアンケートすら、まったく気にもかけていないとは……。
こいつらしいと言えばらしいし、いたずらに気にしすぎるよりマシかもしれん……が、その大物ぶりが仇になる事もある。
「お前の事だろうが……」
「それはそうだが。でも、選挙はまだ始まったばかりなんだ。現状を把握する目処にはなるかもしれないが、あまり意味は無いんじゃないか？」
「３０点」
「３０点って一体何の事だ？私の答えがって事か？」
「とにかく、続きは結果を見てからだ」

下駄箱で靴をはきかえ、既にかなりの人だかりの出来ている掲示板を爪先立ちで確認する。

そこに張られたアンケートの結果は……やはり俺が懸念していた通り最悪の物だった。

生徒会長候補
・坂上智代…３４％
・山下登……３１％
・武藤吉秋…１１％
・森喜子……８％
・無効票……１６％

副会長候補
・末原悠仁…２２％
・斉藤三平…１６％
・無効票……６２％

・　・　・

「坂上先輩！おめでとうございます！」
「ああ……でも、これで選挙に受かった訳じゃない。本番はまだまだ先だ」
「本番でも、絶対先輩に一票入れますね！応援してます！」
「ありがとう」
背後から聞こえてきた会話に振り返ると、丁度後輩と話し終えた智代と目が合う。
「あまりいい気になるなよ」
「何だいきなり……いい気になんてなってない。さっきも言った様に、今一番になったからって本番で勝てるとは限らない事ぐらい、私にだってわかっている」
「だから、その認識じゃ３０点だって言ったろ？お前はこれでま

すます窮地に立たされたんだ」
「!?どういう事なんだ?説明してくれ」
元よりそのつもりの俺は、首でくいっと智代を促し、場所を変えるべく歩きだした。

「まず、あのアンケートだが……昨日門倉達がどうやってアンケートをとっていたかが問題だ。憶えてるか?」
智代を人気の無い特別教室棟に連れてくると、俺は某池上氏ばりの解説を始める。
「ああ。確か、掲示板の横で選挙の告知を見ている生徒達に協力を呼びかけてたな」
「そうだ。つまりあのアンケートは、ランダムに選ばれた人間でなく、答える側が任意で答えてた訳だ。じゃあ、例えばお前が選挙に出てなくて、特に入れたい奴も居なかったらどうする?答えようと思うか?」
「思わないな」
「だろ?でも、まだ演説も何もしてない内から、候補者の名前とポスターだけ見て誰が役員に相応しいかなんて決められる訳が無いよな?」
「その通りだ」
「て事はだ。要するするにあれは、ただの選挙前人気投票だ。個人的に応援してる奴が居る奴しか答えてない。その証拠に、副会長以下の大半が無効票だったろ?恐らく、あれは空欄やまだ決めてないと書いた奴が多かったからだろう。もちろん、適当に答えた奴も居ただろうけどな」
「なるほど……でも、それで一番になった事で、どうして私が窮地に立たされるんだ?」
「まず、あのアンケートから解るのは、お前のファンが３０人くらいは居るって事だ」
「そう……だな。ありがたい事だ」

「でも、本番の選挙でそっから票が増えるかはまた別だ。３～４０票で勝てる訳が無い」
「うん。それぐらいはわかっている」
「しかしだ。じゃあ、他の候補者からしたらどうだ？実態はどうあれ、現時点ではお前が一番手強い相手だと認識されると思わないか？つまり、有名無実なアンケートのおかげで、何の経験も実績も無いお前が、他の候補者から追われる立場になったって事だ」
「なるほどな……」
一通り解説を終えると、智代は表情も変えず納得した様に頷く。
「つまり、これで他の候補者も私に負けじと必死になるって事だな。そう言えば、さっきも校門の所で二人演説していたが、アンケートの結果も影響しているんだろうか？」
「６０点」
「えぇ！？」
俺が溜息混じりに点数を告げると、彼女はキョトンとして素っ頓狂な声を上げた。
「……違うのか？」
「ただ発奮して躍起になるだけならいい。問題なのは、お前の足を引っ張る為に粗を探しに来ないかって事だ」
「私の粗？」
「お前の過去に決まってるだろ」
「ああ……」
「もしバレて噂でも流されてみろ……票を集めるどころか、お前のファンだって離れていくかもしれない」
「考え過ぎじゃないか？いくら生徒会長になる為とは言え、そんな事までするだろうか？」
「甘いな。“この町一番の進学校”光坂の生徒会長だ。ある意味一生を左右するだけの箔付く。引っ張れる足はいくらでも引っ張られると思え」
「そんな物か……」

ようやく事の重大性を理解したのか、智代は表情を曇らせ黙り込んだ。
丁度その時、始業を告げるチャイムが鳴り始める。
「まあ、今更どうしようも無いが、覚悟だけはしておけ。行くぞ」
「あ、ああ」
言いながら踵を反すと、それで初めて予鈴に気付いたかの様に、少し慌てながら智代も後からついてくる。
俺が言った事について逡巡しているのか、教室までの道すがら彼女は無言だった。
「じゃあな」
「オーキ」
しかし、そのまま挨拶だけして教室に入ろうとした所で呼び止められる。
振り返って何気なく合った彼女の瞳の熱さにドキリとして、言葉が直ぐに出ない。
「……何だ？」
「すまない。お前は私の事を色々と心配してくれているのに、私は自分の事しか考えていなかった」
「いいよ別に……」
「今の私には、友達や応援してくれる後輩も沢山いる。でも、こうやって私の悪い所や気付いていない所を指摘してくれるのは、お前だけだ。やはり、私にはお前が必要なんだ。だから……」
「わかったから、早く教室行け！先生くるぞ！」
「うん！またな」
堪らず続く言葉を遮り、教師をダシに追払う。
それでも彼女は元気に頷くと、満面の笑みで跳ねるように自分の教室に向かった。
まったく……人の教室の入り口で、何を言ってくれるんだ！
確認するまでもなく、思いっきりクラス中の注目を浴びている。
俯いて火照った顔をなるべく隠しながら、俺は自分の席についた。

第二章　4月26日　無情

朝のＨＲが終り、一限目の古文の授業に向けて机に入れっぱなしの教科書を取り出す。
「はくちゅっ」
それで埃でも舞ったか、鼻の粘膜を刺激されくしゃみが出た。
スンッと出そうになった鼻水を軽くすすって引き戻しながら、鼻と口を被った手の甲でさりげなく鼻の下を拭う。
鼻風邪だなこりゃ……。
鼻をかみたい所だが……どこかにポケットティッシュでも入れてなかったか？
思い返しながらブレザーのポケットを探っていると、
「クス」
と、小さな吹出し笑いが聞こえた気がした。
「あっ、ごめんなさい。川上君のくしゃみが可愛かったから、つい……」
俺の視線に気付くと、お隣の仁科さんまでがそんな事を言う。
どうして女子はすぐ何でも『可愛い』なんだ!?
「別にいいけど……トイレ行ってくる」
「ああ、うん」
居た堪れなくなって、わざわざ断りを入れながら席を立つ。
ついでにトイレットペーパーで鼻をかんで来よう。

「オーキくんヤッホ～」
男子トイレの入り口にある角を曲がった所で、間の抜けた声に呼び止められる。
身体を弓形に反らせて首だけ廊下に出すと、こちらに向かってく

る女子の一団から眼鏡っ子が手を振っていた。
ネタになる所には何処にでも現れ、時に自らネタの種をふり蒔く報道部の期待の星、門倉だ。
普段なら面倒な奴に見つかったと思う所だが、今日ばかりは丁度いい。
「ああ、門倉。後でちょっと話がある」
「うん、いいよ～。でもぉ、私達これから体育だからぁ、二限目の後でいいかなぁ？」
「ああ」
「じゃあ、着替えあるからまたねぇ。他の子も居るから覗いちゃだめだよぉ」
「覗くか！」
歩きながら俺との簡潔で他愛ないやり取りを済ませ、そのままクスクスと笑い合う女子達と共に門倉は通り過ぎていった。
それを見送ってから、改めてトイレに入ろうとすると、
「覗くなよ」
「……」
門倉とのやりとりを聞いていたのか、やはり数人の取り巻きを引き連れながら後から来ていた智代に、擦れ違い様同じ事を言われる。
おのれ……二人して人前でいらん事を……！
苦々しく思いながらも、笑い声に囲まれた長い髪を睨む事しか出来ない。
「くしゅん！」
まだネタにされてるのか、またくしゃみが出てきた。
まったく……勘弁してくれ。
とっとと鼻かんで戻るとしよう。

二限目が終わると、約束通り門倉と合流して人気の無い所に連れ

て行く。
余計なおまけが一人付いて来たが……。
「お前まで何で居る？」
「いいじゃないか。今朝のアンケートについての話なんだろ？なら、私にだって関係が有る事だ」
どういう訳だか智代までが一緒に来ていた。
門倉と二人だけの方が話が早いんだが……。
まあ、来ちまったもんは仕方ないか。
「それで、あのアンケートはどういう意図でやったんだ？」
気を取り直して、単刀直入に話を切り出す。
昨日からずっと腑に落ちないでいた。
ただの選挙前人気投票でしかないあんな物は、ネタにはなっても正直何の意味も無い。
そして、結果次第では智代に不利に働く物であり、実際危惧していた通りになっている。
その程度の事を、俺が知る中では屈指の切れ者である門倉がわからないはずも無い。
と思っていたのだが……、
「ああ、あれは先輩達の発案だからぁ」
門倉があっけらかんと告げた真実は、実にシンプルな物であった。
そうだよな……報道部は門倉だけがやってる訳じゃないよな……。
「それにしたって、あのやりかたは無いだろ？答えたい奴だけが答えたんじゃ、偏るに決まってんじゃん」
「うん……私も今回の企画は失敗だったと思ってるよぉ。正確な標本調査にならない事は部長も指摘してたんだけどぉ、ランダムで答えてもらうにしても無理強いは出来ないし、目安にはなるから無効票ばかりより良いんじゃないかって多数決でやる事に決まっちゃって……まさか智代ちゃんが一位になっちゃうとは思わなかったし……ごめんねぇ」
「別に気にするなと、さっきから言ってるだろ？実里に悪気が有

った訳じゃないんだ」
すまなそうに頭を下げる門倉を、智代は本当に何も気にしていないとわかる不敵な笑顔で慰める。
門倉を責めないのはいいのだが、もう少し気にはして欲しい……。
「まあ、俺も一位になる確率は低いと思ってたからな……」
「そうなのか？」
何故か少し不満そうな顔をされた。
「当たり前だろ？何で編入したてのお前が一位になるんだよ？」
「そんなの、私に訊かれたってわからない」
「ん～、智代ちゃんはぁ、下級生や運動部の子達に人気が有るみたい」
「……あのアンケートって、朝練始まる頃からやってたのか？」
「うん。かなり早い時間からやってたよぉ」
「それも関係ありそうだな……」
思わず溜息が出てくる。
まったく、意図的かと思える程ピンポイントじゃないか。
「どういう事だ？」
「要するに、アンケートに答えた奴が丁度お前の支持層ばっかだったって事だ。部活の勧誘とかされてたろ？」
「ああ。さすがに立候補してからは減ったが、今でもたまに来るな」
選挙に落ちたら入部してくれって事か？
嫌過ぎる奴らだ……。
「体動かすのが好きな奴は、やっぱりガリ勉よか運動出来る奴に親近感を覚える物だろ？お前の運動神経の良さは既に有名だからな。で、朝練が有る部活はほとんどが運動部だ」
「つまり、朝の部活練習に来ていた連中が、私に入れてくれたと言う事か？」
「今さっき門倉がそう言ったろ？」
「ああ、なるほど」

智代が本当に理解したのかは疑問だったが、門倉の話を聞いて俺の方はようやく半分納得した。
たまたま偶然が重なって、結果智代にとって不利に働いたと言う事なのだろう。
……本当に偶然か？
何か出来すぎてやしないか？
アンケート結果の改竄や、組織的な票の操作は無かったか？
「そろそろ戻るか。次の授業も有るし」
「そうだな」
「だねぇ」
疑念を残しつつも、俺はここらで話を締める事にした。
それを門倉に訊くべきか、そしてそれを智代に聞かせるべきか迷う。
門倉の事は信用しているが……生き馬の目を抜く進学校だ。どこに悪意が潜んでいるかわからない。
報道部に智代の敵が居る可能性も有り得る。
そして仮に不正があったとすれば、その首謀者は十中八九あの男だろう。
……と言うのは、俺の考え過ぎだろうか？
正直、優等生のお坊ちゃんである事と、直感的に気に食わないと感じた事以外、山下がどういう男なのか俺もよく知らない。
とにかく、もう少し自分なりに情報を集めて、考えをまとめる必要がありそうだ。

学校が終わると、栄養ドリンク等を買い、家で安静にしていた。
と言っても、布団に寝転がりながらゲームをしてたんだが……。
バイトも始まるし、来週から益々忙しくなりそうだ。
風邪なんてひいている場合じゃない。

ぐだぐだと土曜の午後を満喫し、バラエティー番組も終わったのでそろそろバイトに備えて寝ようとＴＶを消そうとした所、短いニュース番組が始まったのでリモコンを持ったままそれを聴く。

「……の工事現場で起きた大規模地すべりによる被害者の捜索が、本日をもって打ち切られました。事件から一週間が経ち、土砂に埋まった被害者の生存は絶望的とされ……」

リモコンが、握力を失った手から滑り落ちた。

第二章　4月28日　生かした者の責務

覚悟はしていた。

プレハブが建っていた地面ごと崖下に落ちたんだ。生存者が居るはずもない。

実際に、この一週間の捜索で新たな生存者が発見される事はついに無かった。

次々と読まれる死亡者リストに、あやちゃんの父親らしき名前は無く。

身元不明の遺体の中にそれがあるのか、まだ土砂の中に埋まっているのか。

ただ一つ確かな事は……彼女は父親を失ったのだ。

唯一の肉親かもしれない父親を……。

公子さんと吉野さんが時折様子を見に来てくれていると、看護師さんから聞いた。

他に彼女を見舞いに来ている人間は、恐らく俺だけだとも……。

少し考えれば分かりそうな事だった。

何故、彼女の父親は、幼い彼女をずっと連れていたのか？

愛娘と片時も離れたくなかった?

ただの放浪の旅なら有り得るだろう。

だが、戦地に足手まといにしかならない幼子を連れて行くだろうか?

“連れて行くしかなかった”と考えるのが普通だろう。

母親は生きているのか死んでいるのか。

祖父母は?父親の兄弟とかは?

どんな事情なのかは分からない。

それでも……最早そんな都合のいい希望を当てにする気にはなれない。

ずっと、考えないようにしていた事がある。

災害現場であやちゃんを見つけた時は無我夢中だった。

腕の中で命の灯が消えそうだった時には、自分の命を分け与えてでも救いたかった。

病院で目を覚ました時には、彼女が一命を取り留めた事に安堵した。

でも……、

未だに目覚めず、何本もの管につながれた姿はあまりに痛々しく。

例え目覚めても、重大な後遺症が残るかもしれない。

その上……父親を失い、身寄りも無くなった彼女は、

これから一体どうやって生きていけばいいのだろう？

俺がやった事は……

正しかったんだろうか……？

4月28日（月）

3限目が終わると、俺は門倉と共に例によって人気の無い特別教室棟……ではなく、堂々と教室の前の廊下で話していた。

今朝登校すると、智代の選挙ポスターに落書きがされていた件についてだ。

予測はしていたが、あまりに卑劣で稚拙なやり方と、“それをやらせた人間”に憤りを覚える。

「あいつとは話ししたのか？」

「うん……『放っておけ』って……事実だからって……」

「そうか……」

何ともあいつらしく男らしい言葉だ。

まあ、あいつが直接解決出来る物でも無いし、下手に抗議したり、見苦しい真似をするよりずっといいが……。
「選管や、教師達の動向は何か掴んでいるか？」
「ポスターは新しい物にするみたい」
「犯人探しは？」
「どうだろぉ？そこまではしないんじゃないかなぁ？」
「見て見ぬ振りか？筆跡鑑定でもすりゃ一発だろうに。教師なら、誰の字かぐらい見当がつくだろ」
「それはそれで、やったら問題になるんじゃないかなぁ？」
「選挙ポスターへの落書き自体、立派な犯罪だ。それを指導もしないつもりかよ」
「確か公職選挙法だったかなぁ？実際それで捕まったってニュースもあったと思う」
「報道に携わるんだから、法律くらい頭入れとけよ」
「えへへぇ、後でちゃ～んと調べておきますぅ」
「まあ、俺も細かい事まで憶えてないけどな……だが、町一番の進学校の生徒が、選挙ポスターへの落書きが犯罪である事すら知らないんじゃ、いい笑い者だな」
「ちょっと恥ずかしいねぇ」
「……とまあ、こんな所か。じゃあな」
「うん。貴重なご意見ありがと～」
俺はひとしきり言いたい事だけ言って、後ろ手を振った。
それをメモに書き留めながら、門倉は礼を言う。
これは密談ではなく、あくまでインタビューだからな。
彼女はきっと中立的な立場で、うまく記事にしてくれるだろう。

昼休みになり、確認しに行くと、門倉が言っていたとおりポスターは張り替えられていた。

果たしてこれで収まるのか、はたまた……。
とりあえず、今は様子を見る他無い。
自販機でカフェ・オレを買い、屋上に向かう。
誰も居ない吹きざらしのコンクリートは物寂しく。
柵越しの眺望は実に清々しい。
やはり俺には、ここが一番落ち着く。
ここに独りで居る事が……
「ホールド・アップ！」
一瞬、心臓が凍りついた。
誰も居ないと思っていた所に、不意に背中に突きつけられた“何か”。
だが、それ以上に、聞き覚えのあるその台詞と声が、幻聴かと思えた。
それを確かめるべく、俺はおもむろに振り返る。
「ちょっと！何で手を挙げろって言ってるのに、普通にこっち向くのよ？」
そこに不満顔で立っていたのは、小学生くらいの女の子……ではなく、見覚えの無いうちの制服を着た女子生徒だった。
いや……似ている……気がする……。
あれ……？
誰……に……？
「あなた、川上君よね？」
「え……？うん……」
脳がまだ混乱しているのかまったく働かず、そこに名前を問われ、つい間抜けな返事を返してしまう。
ああ、いかん！落ち着け！常在戦場！戦場では常にクールに！
まずは相手の観察からだ。
ツリ目がちな大きな瞳に、智代並に長い髪の両端には羽を思わせる白く大きなリボン。
スタイルもなかなかの物だ。背は俺よりやや低い＝智代より低い

が、胸の方はほぼ互角……

「ちょっと、どこ見てるの？」

「校章だ。タメみたいだな」

胸への視線に気付かれ白眼に晒されながらも、動じずクールに返す。

しかし、こんな美少女、あっ、いや、浸っていたとは言え俺の背後を易々と取れる女が、まだこの学校に居たのか……。

もしや、智代と同じく二年からの編入組か？

「ふ～ん……まあ、いいわ。そういう事にしといてあげる」

俺の切り返しがお気に召したか、女生徒はフフッと笑みを見せた。

自信満々でも智代のそれとはまた違う、“余裕の笑み”と言うやつか。

「何で俺の名前を？」

こいつ……やはり出来る……！

そう判断し、こちらも当たり障りの無い質問で探りを入れてみる。

すると、彼女はその長い髪をクルリとひるがえし背を向けると、

「そりゃあ、なかなかの有名人みたいだし……」

と、含みのありそうな事を言って、校舎に向かって歩き出す。

「ああ、あたしは朱鷺戸沙耶（ときとさや）。よろしくねオーキ君」

そして思い出した様に首だけ捻って名乗ると、朱鷺戸沙耶は扉の中に消えた。

「何だったんだあの子は……？」

屋上の柵に寄りかかり昼食を食いながら、さっき出会った少女の事を振り返る。

智代と並べても遜色無いくらいの美少女だ。

本来なら出会えてラッキーと思う所だろう。

なのに、この妙な違和感と言うか、腑に落ちない気持ち悪さは何

だ？

その答えを探そうとするも、考えようとしても頭がズキズキと痛み、思考力を殺いでいく。

ひょっとして……風邪をぶりかえしたか……？

そう思ったら、少しだけ楽になった気がした。

ここは風があって寒いからな……体が冷えたかも。

額を触ると、やはり熱く感じる。

熱が出てきたかもしれない。

さっさと教室に戻って寝るか……。

そうしようと、少し早いが教室に戻る事にした。

しかし、階段を下りる途中でポスターの事が気になり、念の為にもう一度掲示板を確認しに行く。

すると……張り替えられたはずの智代のポスターには、また落書きが書かれていた。

それも、完全に智代の過去を暴露する内容の文が書き加えられている。

この短時間で……。

一度だけなら、ただの気の迷いで済むだろう。

だが、これは明らかで執拗な悪意に他ならない。

そう言う事なら、こちらにも考えがある。

俺はそのまま、掲示板の前でタイミングを待った。

チャイムが鳴り、他の生徒が帰った後もずっとその場に留まる。

「おい、川上！もう授業は始まってるぞ。戻れ！」

ようやく、たまたま近くを通った教師が俺を見つけてくれた。

それも、おあつらえ向きに普段俺を目の仇にしている二年の生活指導だ。

こういうのも、“ついている”と言うんだろうか？

自嘲の笑みを押し殺しながら、異変を感じた教師がこちらに向かって来るのを見計らい……俺は智代のポスターを破り捨てた。

第二章　4月29日　おにいちゃんとは呼ばないで

「貴様、何をしている！？」
「落書きが目障りだったから、剥がしたまでですが？」
狙い通り激昂しながら飛んで来た生活指導に、“当然”と言う貌で智代のポスターをつきつけて制する。
教師は引っ手繰るようにそれを俺から奪うと、それと俺とを交互に藪睨みしながら、
「落書きがあった物は、選挙管理委員に貼り替えさせたはずだが？」
「新しいのに貼り替えてありましたが、昼休みの間にまた書かれたみたいです」
「まさか、お前が書いた訳じゃないだろうな？」
「僕の字はもっと汚いですよ。知ってるでしょ？先生なら……」
高圧的な言葉と視線をとぼけた台詞と薄ら笑いで受け流し、互いの出方を探り合うように暫し無言で睨み合う。
てか、自分で書いといて、それをわざわざ教師の前で剥がすとか、意味わからないだろ。
「選挙委員でも無いお前が勝手な事を事をするな！今回は大目に見てやるから、直ぐに教室に戻れ」
ポスターを丸めながらそれだけ言うと、生活指導は背を向けてしまう。
普段はくだらない事でネチネチと執着してくるくせに……。
まあ、授業始まってるし、当然の反応か。
だが、こっちはこれで終わってもらっては困るんだ。
「どう対処するつもりですか？」
追い駆けながら食い下がる。
「次の休み時間に、新しい物を貼っておくように伝えておく」
「選挙妨害、いや、選挙違反に対しての対処はどうするんですか

？と訊いてるんです」
「何！？」
挑発的な俺の物言いに、教師はついに多少苛立ちながら足を止め、こちらの心胆を見透かす闇魔の如き視線を向けてくる。
だが、こちらとて半端な覚悟で絡んでいる訳じゃない。
「何か事件が起きたら、まずそれで誰が一番得するかを考えるのが推理の基本では？」
「勝手な憶測を口にするな。推理小説の読み過ぎだ」
「一度目ならただの悪戯かもしれませんけどね……うちの生徒だって、馬鹿ばかりじゃないでしょ？」
「……とにかく、お前は余計な事をするな。この件は他の先生方とも協議して対応する」
「お願いします」
“そちらが動かないなら、こっちは勝手にやらせてもらう”
言外に含めた俺の意向は伝わったらしく、忌々しそうに教師は当たり障りの無い逃げ口上をのたまう。
まあ、こんなもんか……。
出来れば停学でも食らいたかったんだが、それなりの手応えは得られたので、これでよしとしよう。
これで何の手も打ってこないなら、校長室にでも乗り込むまでだ。

4月29日（火）

ハア……ハア……ハア……

荒い呼吸

薄暗い世界に響く靴の音

俺は走っていた
何かから必死に逃げていた
狭い通路の様な場所を
何故？
何から？
そんな事はわからない
とにかく逃げていた
逃げなければならなかった
誰かの手を引いて
誰の？
手にすっぽり収まる小さな手
間違いなく少女の物だ
この夢のヒロインの
そう、これは夢だ
俺は夢の中で逃げていた

理由なんてわからない
ヒロインが誰かもわからない
これはそういう夢なのだ
ならば走り続けるか
覚める事を望むしかあるまい
向かう先に光が見える
あそこまで辿り着けば
もう少しで
あと少しで
逃げ切れる！
次第に視野が開ける
出口だ！
光だ！
途端
足場が

天井が
世界が音を立てて崩れ落ちた
……
……
……
息苦しい
シーンの暗転後
俺は崩壊した世界に埋もれていた
ああっ
またか
また俺は逃げ切れなかった
そうだ
あの子は？
ヒロインはどうなった？
腕の力で少しだけ上体を起こす

そこには……

「お兄……ちゃん……」

あの日の彼女が居た

プハッ……！ハア……ハア……。

息苦しさを跳ね除け目を開けると、眼前には巨大な丸みしかなかった。

離れたくとも、頭はガッチリと固定され、ほとんど身動きが取れない。

祝日で休みだからニ度寝していたと言うのに……。

どうしてくれようか？と膨らみを凝視する。

「やっと起きたか。おはよう、オーキ。もうお昼過ぎだ」

頭の上から声が聞こえ、両腕のロックが外された。

真に惜しいが、これ以上は理性のタガが外れそうなので止めておこう。

「何で隣で寝てる？」

「折角来てやったと言うのに、お前がなかなか起きないからだろ」

「それで、何でお前まで俺の布団で寝てる？」

答えになってないので、もう一度問いただす。

「お前の寝顔を近くで見てやろうと思ったんだ。そうしたら、お前がうなされだしたから……心配してやったんじゃないか！」

そう言うと、智代は頬を赤らめながら口を尖らせる。

いや、だからって……なあ？

火照ってきた頭を切り替えるべく、むくりと起き上がる。
大分寝汗をかいたらしく、特に下半身がグチョグチョで気持ち悪い。
……汗……だよな？
少し心配になって、トランクスの中に手を突っ込んでみる。
「寝汗が凄いな。私が拭いてやる。パジャマを脱いでくれ」
「うえっ！？わかってるからいいって！！」
同じく起き上がった智代がハンカチを取り出して汗を拭きに来たので、それをもう片方で制しながら慌てて手を引っこ抜いた。
「どうして？そのままにしていたら、風邪をひいてしまうぞ？先週も風邪気味だったじゃないか」
「シャワー浴びて下着も替えてくるから、いい！」
丁重に断りながら立ち上がり、そそくさと部屋を出る。
あのまま部屋に居たら、そのうち強制的に脱がされかねない。
湿ってるのは汗だったが、形状がマジヤバイって！
「随分うなされていたが、悪い夢でも見たのか？」
「……忘れた。てか、何で……」
ピンポーン
ところが後からついてくるクマ娘につっこもうとしたが、チャイムの音で遮られる。
誰だろう？
まあ、お袋が応対するだろう。
「お客さんみたいだが、出ないのか？」
かまわず風呂場に向かおうとする俺を呼び止める様に、智代が訊いてくる。
「お袋が出るだろ」
「ああ、お母さんとお父さんなら、私と入れ違いで買い物に出かけたぞ。少し遅くなるから、昼食は私に任せるとも言っていた」
「はあ？」
それを早く言えよ。

あまりパジャマ姿で出たくは無いが、まあ、仕方無い。
再び鳴った催促のチャイムに、俺をやむなくUターンして扉の縁に手をつきながら玄関を開けた。
「こんにちわ、オーちゃん」
渚さんだった。
後ろには岡崎さんや藤林先輩達の姿も見える。
大勢で何だろう?俺に用だとは思うが……。
「丁度よかったぜ。川上、智代から話は聞いてるか?」
「話?」
上体だけ捻り、背後の智代に目で問う。
すると智代は、わざわざ俺の背中にかぶさる様に寄りかかり、肩の上から顔を出した。
ちょっ!先輩達に変に思われたらどうする!?
てか、当たってる!!当たってるって!!
「ああ、すまない岡崎。まだ話して無いんだ」
「何だよ。頼むぜ?ダメなら他を当たらなきゃならねえんだし」
「ああ、わかってる。実はな、オーキ。お前に頼みが有るんだ」
智代はそのまま首だけ捻って耳元で囁く。
いや、だから……わざとやってんのか!?
「私と一緒に、サッカーの試合に出てくれないか?」
「はあ!?」
とりあえず、大仰に驚いた振りをしながら直立して背中の荷を落とす。
「試合って、どこと?」
「サッカー部だ」
「サッカー部……?」
俺は首を傾げながら外に目を向け、春原さんの姿を探した。
先輩とサッカー部との因縁は俺も聞いているが……今更係わり合いになりたいとは思えない。
案の定、春原さんは一番後ろで不貞腐れているようだった。

となると……

「お前、今度は何やらかした？」

「何もしてない。私はただ、こいつらがサッカー部と揉めていたから、仲裁しただけだ」

「それで何で試合する事になるんだよ？」

「サッカーの決着は、サッカーでつけるべきだろう？」

「……」

面白カッコ良すぎる少年誌的発想に、ただただ閉口する他無い。

「えっと……」

「全部わたしが悪いんです！」

困惑して岡崎さんにでも説明を求めようとした所、渚さんの影から女の子が現れた。

一瞬、その姿が夢と重なり、目眩を覚える。

そういえば……昨日もこんな事があったな……。

いかん……切り替えろ。

見覚えの無い子だった。

まだまだ幼い顔立ちだが、小学生高学年から中学生くらいだろうか？高校生には見えない。

この場の誰よりも思い詰めた表情をしているが……わたしが悪いとは？

「わたし、春原陽平の妹で、芽衣って言います」

春原さんの妹！？この可愛らしい子が！？

是非、ウチの弟とチェンジしてもらいたい……。

「そうなんだ。で、何があったの？」

「実は……」

妹さんの話はこういう事だった。

自堕落な生活を送るお兄さんを心配した彼女は、春原さんがサッカー部に復帰出来るよう頼みに行ったらしい。

だが、サッカー部の連中は顧問含めかつての遺恨を引きずっており、取り合おうともしなかった。

それでも、熱意を認めてもらおうと、岡崎さんや渚さんと共に球拾いをしたりしたが、結局話は聞き入れてもらえず、部員が妹さんに手荒な事をしようとした事に春原さんがブチ切れ乱闘になった所に、

「お前がしゃしゃり出たのか」

乱闘中の部室に颯爽と登場した場面が目に浮かび、溜息が洩れる。

「仕方が無かったんだ。サッカー部の奴等は、芽衣ちゃんや古河さんにわざとボールをぶつけたりしていたんだ。私も遠目から見ていたが、奴等の所業はあまりにも目に余った。でも、暴力で解決するのもよくないだろう？だから、試合で決着をつけろと言ったんだ」

「……」

ここは、暴力で解決しなかっただけ成長したと褒めるべきなのか？

大体の事情はわかった。

正直、俺もサッカー部の連中は好きじゃない。

いまだに悪しき体育会系のノリを引きずっており、おかげでサッカーをやめる決心がきっぱりついたくらいだ。

そんな奴等に一泡吹かせてやるのも一興だろう。

だが、だからこそサッカー部がただで試合を飲むとは思えない。

「それで……サッカー部の連中はどんな条件を出してきたんだ？」

「それが……」

芽衣ちゃんが俯いて口篭る。

やはり俺の嫌な予想は的中したようだ。

隣の智代を“言え”と睨みつける。

「もし私達が負けたら、私が選挙を降りる事が条件だ」

第二章　4月29日　フライング・ヒューマノイド

オーキの家を追い出されてしまった私は、仕方なく岡崎達と合流して、男子寮に向かう事にした。
また、怒らせてしまったな……。
覚悟はしていたが、あいつなら、それでもきっと力を貸してくれると思っていたんだ。
それなのに……「出て行け」の一点張りで、取り付く島も無かった。
「それにしても、あんたの彼氏も薄情よね……自分の彼女がピンチだって言うのに」
藤林さんの姉の方、杏（でいいと言われた）が歩きながらぼやく。
彼氏……か。
前に古河さんにもそう言われた事があったが、ここは『まだ正式に付き合ってる訳では無い』と断りをいれておくべきだろうか？
あ、いや、私は別にかまわないのだが……。
「だから言ったじゃん。勝手にあんな賭け受けたって知ったら、僕が彼氏でも怒ってるよ」
一番の当事者のはずの男が、我関せずと言った体で勝手な事をほざく。
そもそも、こんな事になったのは、一体誰の所為だと思っているんだ？
「気持ちが悪い事を言うな。お前が彼氏だなんて、考えただけでもゾッとする」
「例えでも嫌って、酷くないスか！？」
「あたしでも嫌ね」
「えっと……その……私も……」
きっぱりと断言した姉に続き、妹の方も遠慮がちにだが春原を拒絶する。

まあ、当然だ。春原と付き合いたいと思う女の子なんて、この世に居るとは思えない。
一ノ瀬さんはよくわかっていないのか、相変わらず岡崎の隣でぼ～っとしていたが。
ん？
ここで私は、一緒に居たはずの古河さんが居ない事に気付く。
そう言えば、芽衣ちゃんの姿も見当たらない。
「古……」
「俺も嫌だな。気持ち悪りい」
「僕だって岡崎とは嫌だよ！！」
二人が居ない事を告げようとしたが、岡崎の馬鹿げた言葉に遮られる。
よかった。本当にそう言う仲だったら、同じ空気を吸うのも嫌だった所だ。
「で、実際どうすんのさ？頼みの綱の川上に断られたんじゃ、勝ち目なんて０だよ。それとも、例の落書きの件で皆に過去がバレちゃったし、もう生徒会長になるのは諦めた？」
「諦めてなんていない。それとこの件とは別問題だ」
「いや、だったら尚更あの賭けはマズイだろ」
岡崎までがそんな事を言うのか……。
私だって売り言葉に買い言葉だったと反省はしているが、
「仕方が無いだろ？サッカー部の奴等が試合を受ける為に出してきた条件なんだ」
「そんなの断ればいいだろ！そもそも、なんで部外者が勝手に試合で決着つけようとか言ってんだよ！？」
「あそこで私が出なければ、サッカー部と喧嘩になっていたじゃないか！」
「はいはい、やめやめ！今更あんた達が揉めても意味無いでしょ？確かに、負けたら立候補を辞退するってのはやり過ぎだけど、話し合いは通じなかった訳だし、サッカー部と乱闘なんてしてたら、

それこそ大事じゃない。そこは智代に感謝してもいいんじゃないの？」

春原と言い合いになりそうになった所に、パンパンと手を叩きながら杏が割ってはいる。

どうやら、彼女だけは私の気持ちがわかってくれてるらしい。

「そういや、杏は割と乗り気だよな」

岡崎が思い出したように訊いた。

すると杏は、何故か妹を一瞥してから苦笑して答える。

「まあねえ。前々からあそこの部長の事は嫌いだったし、その上、渚や芽衣ちゃんを球拾いにかこつけて虐めたとあっちゃねえ……一度“ギャフン”と言わせなきゃ、気が済まないでしょ！」

「『勝てれば』の話だろ？こっちが言わされたんじゃ、たまったもんじゃないよ」

「勝てばいいじゃない。あいつらって大して強くないんでしょ？」

「そうだ。勝てばいいんだ」

うん。やはり杏とは気が合うようだ。

勝てないかどうかなんて、やってみなければ判らないじゃないか。

「あんたら、サッカーなめてませんかねえ」

しかし、春原は半眼で私達を睨みながら凄んでみせる。

もちろん、まったく迫力は無い。

「お前だって、合唱部を見返す為にバスケ部と試合しようとか言ってたじゃんか。それが、サッカーに代わっただけだろ」

「岡崎、あんたどっちの味方だよ？」

「わりい、少なくともお前の味方じゃねえな」

「味方しろよ！お前だって、今さっきマズイって言ってただろ！？」

「だから、バスケだろうとサッカーだろうと、素人が現役に勝てる訳ねえんだから、正直、俺はどっちも勘弁して欲しい」

なるほど。岡崎はどちらにしろ乗り気では無いと言う事か。

「はあ？朋也、あんたも渚達と一緒に居たんでしょ？悔しくない

の！？」

「そりゃあ、春原や智代が来てなかったら、俺がキレてたトコだったけどよ。どんだけムカついても、勝てなきゃ意味ねえだろ？せめてバスケとか野球なら、まだ勝ち目があるけどな」

「それじゃあ、意味が無いだろ」

「そうよ。それにそんなフェアな条件、あいつらが受ける訳無いじゃない。どっちにしろ、もうやるしかないんだし、覚悟を決めなさいよ。それとも陽平、あいつらに頭下げる気有る？」

「どうして僕が？悪いのは勝手な事した芽衣や智代じゃんか」

「てめえ、まだそんな事言ってんのか！誰の為だと思ってやがる！」

「芽衣もお前も、余計なお世話だって言っただろ！」

「お前は……少しは芽衣ちゃんの気持ちも考えろー！！」

「うごっ！！」

私は怒りのあまり、思わず春原を蹴り上げる。

「渚だって、あんた達兄妹の事を、本気で心配してんでしょうが！！」

「ぶべらっ！！」

そして空中の春原に向けて、杏がどこからか取り出した辞書を投げつけ、見事顔面に命中させる。

「そしてこれが……この俺の怒りだぁぁぁっ！！」

「ほげっ！！」

最後に落下してくる春原を力いっぱい岡崎が殴りつけ、ブロック塀に叩きつけた。

うん。どうやら私達三人のコンビネーションは完璧だな。

これならサッカー部との試合も、どうにかなるんじゃないだろうか？

この時の私は、そんな根拠の無い自信を何となく抱いてしまった。

現実と言う物がどれだけ厳しい物であるか、判ってはいなかったんだ……。

「あっ、古河先輩と……妹さん……」
再び鳴ったチャイムに出ると、そこには渚さんと春原さんの妹さんが立っていた。
少し伸びをして二人の背後を確かめるが、智代や他の先輩達の姿は見えない。
「オーちゃんと少しお話したくて、芽衣ちゃんと二人できました。かまいませんか？」
それで気付いたらしく、渚さんがそう説明してくれる。
ああ、やはり渚さんは優しいな……。
単にもう一度頼みに来たってだけでなく、俺と智代の事も気にしているのだろう。
「ええ。それで、なんでしょ？」
大よその目的は判っていたが、あえてそう訊いて促す。
すると、渚さんの影から妹さんが進み出て、俺に向かって深々と頭を下げた。
「ごめんなさい！悪いのは全てわたしなんです！わたしが勝手な事をしたから……。坂上さんはわたし達を助けてくれただけなんです！だから、坂上さんと、彼女さんと仲直りしてあげて下さい！そして出来たら、わたし達に力を貸してくれませんか！？」
「オーちゃん、わたしからもお願いします。もし試合に負けてしまったら、坂上さん選挙を辞退しなくちゃいけなくなります」
「……すみません。いくら渚さんの頼みでもそれは出来ません」
予想していた通りの願いに、前もって用意していた言葉を答えた。
それでも、妹さんは頭を下げたまま上げようとせず、渚さんはとても悲しそうに俺を見つめる。
まるで俺が虐めてるみたいだな……。

二人を悲しませていると思うと、心臓を鷲掴みにされる程に辛い。
けれど今は、それにぐっと耐える他無かった。

第二章　４月３０日　鷹の目の皇帝

幸にも俺の足は折れてはいなかった

かなり酷い捻挫で、大分腫れたが

それでも数日後に行われた練習試合には出ていた

テーピングでガチガチにして

他校への送迎に車を出してくれた部員の親父さんにやってもらったんだが

上手いテーピングは全然違った

走る事も出来なかったのに

ボールを蹴るとちょっと痛いくらいになるのだ

新品のテープを半分以上使っていたが……

こんなトコでも貧乏性は敵だと知った

練習試合はやっぱり勝てなかった

一敗一分け

得点０

いつもの様にワンサイドゲーム

守れるけど攻められない

攻められっぱなしじゃ、どうしようも無い

カウンターの一発を期待出来る程うまいフォワードも居ないし

せめて中盤でボールを持てる奴が一人居ればなと思っていた

その考えはどうやら顧問も同じだったらしく

思い切ったコンバートが行われた

ディフェンダーだったキャプテンを中盤のミッドフィールダーに上げる

本来彼は中盤の選手だったが

そのサッカーセンスを見込まれ、一個上の代から守備の要として起用されていたのだ

だから、それ自体は妥当な物だった

思い切ったと言うのは

そのキャプテンに代わって、俺がディフェンス陣を統率する事になった事だ

戸惑いしかなかった

サッカーを始めてずっとディフェンダーだったが

俺はずっと相手のフォワードをマークするポジション・ストッパーだった

いつも俺の後ろには、全体のフォロー役・スウィーパーである誰かが居た

先輩だったり、キャプテンだったり

いつも誰かの指示で動いていた

だから他のやつの事なんて、気にした事も無かった

大してうまくも無い俺が、他人のプレイにアレコレ言う資格は無いと思っていた

そんな俺に、いきなり仲間を指示しろと言われても

それも皆から信頼厚いキャプテンの代わりに

守備の最後の砦となるスウィーパーをやれと言われても

大会まで一月も無いのに

俺なんかでいいのか？
俺経験無いよ？
俺下手クソだよ？
俺センス無いよ？
俺ポンコツだよ？
何をしていいのか
何をしたらいいのか分からず
それまで比較的安定していた守備すらガタガタで
周りからは「指示しろ」「指示しろ」と急かされオロオロするばかりで
大会直前の練習試合は久々にボロ負けした

情けなかった
負けたのは
こんなに点を取られたのは俺の所為だ
今までは、自分のミスでなければ俺の所為じゃなかった

俺の所為じゃないと思っていた

でも、もう違う

例え味方のミスであろうと

敵の神がかったスーパープレイであろうと

点を取られたら俺の責任

やはり、俺なんかがやるべきじゃないんじゃないか？

一対一なら負けない自信はある

中学の試合で当たり負けした事は無い

体力だって、試合終了まで走り続ける自信はある

でも、それだけだ

俺はキャプテンとは違う

彼ほどのテクもセンスも無い

自分のポジションの動きすらよくわかってない

何より、今まで皆をまとめてきた訳じゃないんだ

そんなんで、他人を指示なんて出来るはず無いだろ

「俺には出来ません」と言うべきだろうか……？

……

……

……

そんな恥の上塗りが出来るか！！

後ろ向きな考えを、プライドと責任感が叱咤する

その台詞を言えば、もう部にはいられない

俺がやるしか無いんだ

強くなる為には

勝つ為には

点を取る為には

攻撃陣を厚くする他無い

キャプテンにゲームメイクをしてもらうしか無いんだ

そして、どれだけ彼の守備の負担を減らせるか

ゲームメイクに専念させられるかで、勝敗が決まる

俺は彼程うまく無い

ずっと才能無いと言われ続けてきた

それでも、こんな俺を顧問の先生は信頼して任せてくれた

そして仲間達もそれに不平を言わず、指示を要求してくる

やるしかないだろ

男なら

腹は決まった

だが、それだけでどうにかなる訳でもなく

手探りのまま大会を向かえ

リーグ戦を一試合残し

予選落ちが決まった

何をどうしたらいいのだろう?

本とかでも調べたが、いまいちピンとこなかった

と言うか、理屈だけ述べられても、実際のやり方がわからないし

そもそも、高度な戦術以前の話であるように思えた

ノーマークの相手を見つけたら、マークにつくように指示している

オフサイドのラインも意識している

抜かれたりすれば、そのフォローもしている

それでも、いいようにやられてしまう時が有る

俺がフォローに行けば、どうしたってスペースが生まれてしまう

抜かれたり、競り負けたりする仲間に、絶対に負けるなと言っても仕方ないし

やはり個々がレベルアップする他無いのだろうか？

途方にくれて天を仰ぐ

よく晴れた春の青空

だと言うのに、俺は一人暗闇の森に居るようだった

そう、“あの日のあの場所”の様に……

目を閉じ、“あの時”の事を思い返す

真っ暗な森の中で死すら覚悟したあの時

俺は……

俺は……

俺は……

網膜の裏で光が弾けた

試合中なので、こみあげてくる笑いを必死に堪えた

ああっ、俺は本当に馬鹿だ

あの日気付けた事を、もう忘れてやがる

本当に愚鈍だ

本当に、まったくもって才能ねえ……

8年近くサッカーをしてきて、ようやくそれを自覚出来た

どうやら俺は、自分で思ってる以上にテンパリ易いらしい

俺はずっと、ボールしか見えてなかった

マークする相手の事しか見えてなかった

ただ相手を止める事しか、守る事しか、その場を凌ぐ事しか考えてなかった

ただガムシャラに、必死に、一所懸命に
そうすれば、漫画やアニメの主人公の様に
その内活路が見い出せるんじゃないかと
彼等の様な特異な才能も力も
ご都合主義な幸運も無いと言うのに
思い出せ
森の中での特訓を
かじってきた武道を
森の中では、目の前の木にばかり気を取られれば、他の木にぶつかってしまう
武道でも、相手の拳や蹴りにばかり気をとられれば、その動きに惑わされる
なら、サッカーも同じではないか？
選手個々ではなく、味方を一つの、敵を一つの生き物と捉えろ
全体の動きを、その流れを、
把握し

読み

掌握せよ

はるか天空から俯瞰するかの如く

よくサッカーでは、優秀なゲームメイカーにはそういった能力が備わっていると言われている

“ホークアイ”

漫画とかでも頻繁に、「そんなにごろごろ居るかよ」とつっこみたくなる程出てくる能力

俺にある訳も無く、ＤＦだからあまり関係無いと思っていた能力

でも、もしＤＦにそれがあったなら？

いや、そこまで大それた物は要らない

視界も悪くプレッシャーのきつい中盤と違って

ＤＦの俺は全体が見える位置に居るのだから

“観の目”で十分だ

そして俺には、経験が有る

８年間、ずっとずっと負け続けてきた経験が

あらゆる敵の攻撃を、試合中嫌って程受け続けてきた経験が
もちろん、その一つ一つを憶えている訳じゃない
だが、脳内に記憶しているはずだ
その屈辱を
その悔しさを
その怒りを
その辛さを
その悲しみを
辛酸と共にあった体験を、完全に忘れるはずが無い
そしてそれは、俺がキャプテンよりも優っているであろう唯一の物だろう
まったく、何だよそれ？って感じだが
それでも……ずっと重ねてきた想いを、無駄にはしたくない
それらを思い出せ
いや、その必要は無い

考えるな

感じろ

全身の感覚を研ぎ澄まして

敵の動きを

試合の流れを

そして情報と経験から、危険の芽を導き出せ

常に“最悪の事態”を想定せよ

感じるな

考えろ

思考をひらめきにまで昇華させろ

そして、それを元に味方を動かし

俺が試合をコントロールするんだ

そうか

俺が目指すべくは、至高のファンタジスタであった“あの人”では無く

もはや伝説となった往年の名ディフェンダー。

最後尾からフィールドを支配する“皇帝”その人か

第二章　４月３０日　弱い者達が夕暮れ

４月３０日（水）

坂の前で立ち止まり、桜の散った並木道を見上げる。
物心ついた時から、ずっと見てきた桜並木。
ここに在るのが、当たり前だった桜並木。
来年にはもう、無いかもしれない桜並木。
わざわざ編入までして、智代が守りたいと言った桜並木。
（そうじゃなかったのかよ？）
わからない。
あいつの事も。
俺が何をどうすべきなのかも。
かつて“こいつなら”と感じた予感。
あれは……間違いだったのだろうか？
それとも……あいつの選んだ選択肢の方が正しいのか……？
論理的にとか、倫理的にではなく、結果的に、この件があいつにとってプラスに働くと言うのか？
だとしたら……。
どれだけ凝視していたか。
それでも木々は、ただそよ風に僅かに揺れるだけで、何も語ってはくれない。
泰然自若、あるがままにそこに在るだけだ。
長嘆息して歩き出す。
馬鹿みたいだな……俺……。

昇降口前の掲示板には、また人だかりが出来ていた。

どうやら選挙ポスターの他に、報道部が校内新聞の新刊を張り出しているらしい。
爪先立ちでそれにざっと目を通す。
どうやら、選挙のネタと、例の落書きの件が書かれている様だった。
それだけ確認して、その場を後にする。
今日も落書きが有ったのか、あいつのポスターは無くなっていた。

その日は、担任が来るのがいつもより少し遅く、ホームルームでは選挙ポスターへの落書きに対する注意が行われた。
報道部にまでネタにされたんだ、さすがに教師も動かない訳にはいかなくなったのだろう。
ホームルームの終わり際に担任に呼ばれ、直々にお言葉を賜ったが……。
まあいい。
“もたもたしてると俺に無茶をされる”
そう認識されて煙たがられる分には、何の問題も無い。
むしろ好都合だ。
これで恐らく落書きは無くなると思うが……。
智代の過去が多くの人間にばれた事に変わりなく、噂の類までは防ぎようが無い。
だと言うのに……まったく……。
「まさかあの落書き、あんたの仕業なの？」
担任に呼ばれた事で勘繰られたか、嘆息しながら椅子にもたれかかると、隣の仁科のとこに来ていた杉坂に随分と的外れな事を訊かれた。
「……犯人が判ってたら、わざわざホームルームで言わんだろ？」
「じゃあ、先生に何言われたのよ？」

「別に……大した事じゃない」
曖昧に答えながら『もう訊くな』とばかりに机に突っ伏して寝に入る。
本当の事を言った所で、また優しい仁科さんに心配かけるだけだろう。

昼休みになると、俺は旧校舎の資料室に向かった。
サッカー部との試合は、今日の放課後に行われると渚さんから聞いている。
何かしらの手を打つなら、今しかないだろう。
「春原先輩とサッカー部との確執はぁ、単純に一つの大会に出場停止になったってだけじゃなくてぇ、もっと根深い事情があるみたいなのぉ」
事前に情報収集を頼んでいた門倉が、俺の隣で広げた弁当を食べながら間延びした声で報告をはじめた。
エプロン姿の宮沢は、教室の隅に置かれたガスコンロで、冷凍物のピラフを炒めている。
なんだか緊張感に欠けるが、パンをかじってる俺も人の事は言えない。
「だろうな。プロ野球やサッカーで例えれば、県外からのスポーツ推薦て、助っ人外人みたいなモンだからな……それが問題起こして部活も辞めたんじゃ、ただの契約金泥棒だ」
岡崎さんもそうだが、あの二人が実情以上に不良扱いされているのは、その辺りの事情も有るのだろう。
町一番の進学校である光坂に、特待生として恐らく入試も無く入学しながら、部活も勉強もせずに遊び歩いている。
自分達はやりたい事もやれず、我慢して勉強してると言うのに……。

そのやっかみを、多くの人間は彼等を“落ちこぼれ”と貶める事でしか解消出来ないのだ。

わからない事じゃない。

俺だってタメで特に親しくもなかったら、抱いたかもしれない感情。

もっとも、逆を言えば彼等はそんな針のむしろの中で、高校生活を送ってきたと言う事だろう。

「うん……それでぇ、春原先輩や岡崎先輩の件もあって、学校側はスポーツ推薦に対して消極的になったみたいなのぉ。特にサッカー部はぁ、成績が芳しくない事もあって、私達の代から推薦枠をカットされちゃったらしいの」

「そんな事情があったんですか……」

作り終えたピラフをテーブルに置き、エプロンを外しながら宮沢も俺の向かいに座った。

「で、それもこれも全部先輩の所為か」

「顧問の先生はぁ、学校側から結果を出す事を求められてぇ、今まで以上に厳しくなったみたい。その一方でぇ、そのストレスを上級生が下級生にぶつける“下級生いびり”も酷くなったらしくてぇ、そんなんだから辞めちゃった子も多いのぉ」

「悲しい負の連鎖ですね……顧問の先生は部を強くしたくてより厳しくしてるんでしょうけど……」

「指導者として無能なんだろ。今時スパルタが通用するのは、部員の大半が推薦の超強豪ぐらいなもんだ。うちは進学校なんだし、無駄に厳しくしたって進学したい奴は辞めるに決まってる。大体、自分達の弱さを、いまだに春原先輩の所為にして逆恨みしてる時点で終わってる」

「ははぁ……」

俺が歯に衣着せず両断すると、門倉は乾いた笑声をあげ、宮沢も苦笑しながらピラフを口に運んだ。

春原さんは、本当に凄い選手だったのだろう。

他県から呼ばれた時点で、ここまで名が知れ渡っていたと言う事だし。

そして彼を失っただけでチームがガタガタになり、他の部員が腐る程の影響力を持っていたのだ。

「まあ、でも、これで春原先輩をサッカー部が受け入れるはずが無い事は明白だろ。つまり、賭けなんて成立しないし、顧問にチクるだけで無かった事に出来るって訳だ」

そう結論を出し、宮沢の淹れてくれた温めのカフェ・オレを飲んで一息つく。

この会議の議題は、『如何に智代を勝たせるか』ではなく、『如何に賭けをぶち壊すか』なのだ。

そもそも、春原さんに部に戻る意思も無いのに、勝ったって意味が無い。

それで、負けたら智代が全てを失い、しかも相手の土俵で勝負とか、理解不能だろ。

確かにこれで勝ったら、これ以上無い程痛快だろうけどな……。

現実はそんなに甘くねえんだよ!!

ほっとしたら怒りがぶり返してきたので、食いかけパンと一緒にカフェ・オレで飲み込む。

だが、それもほんの束の間、門倉の報告にはまだ続きが有り、それが全てを台無しにしてくれた。

「でもぉ、サッカー部の顧問の先生、今日出張でいないみたいなのぉ」

「はぁ!?」

顧問が出張で居ないから、お遊びの試合が出来る。

少し考えればわかる事だった。

結局、俺達は確実な手を打つ事も出来ずに、放課後を向かえてし

まう。
試合の場所はグランドの片隅。
２０ｍ×４０ｍのコートに、通常の物の半分程のゴール。
あまり弾まない小さ目のボール。
サッカーと言っても当然１１人でやる方ではなく、５人制の“フットサル”形式である。
コートの外で練習している智代達の中に、一人見慣れない女性の顔があった。
“女生徒”ではなく、“女性”である。
まだ若く長身で学校指定のジャージを着ているが、雰囲気的に高校生って感じじゃない。
先輩達もどこか気をつかってる感じだし、誰かのお姉さんか、知り合いのＯＧだろうか？
その他のメンバーは体操着姿から判断するに、智代と岡崎さんに春原さん、それと杏さん。
制服のままで練習にも加わっていない渚さん、椋さん、一ノ瀬さん、春原さんの妹さんは出無いだろう。
５人丁度か……。
サッカーと違って、フットサルはバスケの様に何度でも同じ選手の交代が出来る。
交代要員は少しでも多いに越した事は無いのだが……この短期間では仕方無いか。
「川上君」
背後から名前を呼ばれ振り向くと、仁科と杉坂、そして……確か原田が居た。
合唱部がこんな所で揃ってどうしたんだ？
「何だ？お前等も見に来たのか？」
「古河さんに、『もしよかったら試合をするので見に来て下さい』と、誘われたから……」
「一体どういう事？サッカー部とサッカーの試合して、勝てる訳

ないじゃない」
「俺が知るか」
当たり前過ぎる杉坂の問いに、そっぽを向く体で前に向き直る。
だが、思いがけない続く問いに、俺は再び彼女の方を向く事を強いられた。
「何よ？まさか、あんた出ないつもりなの？自分の彼女が立候補を取り消すかもしれないのに」
「彼女じゃねって。つか、賭けの事まで古河先輩から聞いたのか？」
「えっと……誰だっけ？」
「古河さんは言ってなかったと思う。原田さんに教えてもらったんじゃ……？」
「えっ？私もクラスの子がたまたま話してたのを小耳にはさんだだけだけど……」
噂はこうやって広まっていくのか……。
マズイな……ギャラリーらしき連中もちらほらと集まってきている事には気付いていたが、賭けの事まで広まっているとなると、ますます賭けを反故にし辛くなる。
しかし……一体誰がリークしたんだ？
普通に考えればサッカー部だろうが……。
「それで、賭けの事は事実なの？」
「まあな」
「ふ～ん……じゃあ、もし勝ったら何か有る訳？サッカー部の顧問の先生が、演劇部の顧問になってくれるとか？」
その手があったか！！
「いや、そんな事有り得ないだろ」
「じゃあ、何の為に試合すんのよ？」
「……名誉？」
「はぁ？何よそれ？」
「だから俺に聞くな。こっちが知りたいんだから……」

何だか言ってて泣きたくなってきた。
顔を背けるように向き直って溜息をつく。
「川上君……本当にいいの？」
今度は仁科が背中越しに問いかけてくる。
彼女が心配してくれている事は、切なげな声だけでわかった。
でもな……。
「無茶苦茶でも、それを受けたのはあいつなんだ。どうなろうと自業自得だろ」
「……そう……」
「行こうりえちゃん。一応、古河さん達に挨拶するんでしょ？」
「うん……」
杉坂に促され、三人は連れ立って先輩達の方に向かってくれた。
正直、今ばかりは素っ気無い杉坂に感謝したい。

それから暫くして、試合は始まった。
先輩チームからのキックオフ。
「杏！」
まずは春原さんから、やや後方左サイドに開いた杏さんにパスが通る。
「朋也！」
直ぐにプレッシャーをかけてきた敵のフォワードより早く、杏さんがさらに後ろの岡崎さんにボールを下げる。
「智代！」
岡崎さんのロングキック。
あまり正確ではないが、丁度いい具合に敵陣の誰も居ないスペースに転がった。
そしてそのボールには、誰よりも早く智代が追いつく。
「ヘイッ！智代ちゃん、パスだ！！」

そしてゴール前に走りこむ春原先輩めがけ……
「春原ーーー！！」
ドゴンッ！！
智代の弾丸シュートが放たれた！？
「ひぃっ……！！」
その一撃は見事に春原先輩の顔面を捕らえ、彼の身体は錐揉みで派手に吹っ飛び、
「ピッピ～～～！」
なんとボールは相手ゴールに入っていた……。

第二章　4月30日　僥倖真理

どっと歓声がわいた。
試合開始早々、鮮やかなパスワークでボールを繋ぎ、智代のセンタリング（？）を春原さんがヘッド（顔面）で直接押し込む見事なゴール。
それを素人集団と思われていた演劇部チームがやってのけたのだ。
観客が驚かないはずもない。
「キャー、智代せんぱーい！」
一年の女子達もきゃっきゃと黄色い声を上げている。
例の落書きと噂でかなり智代シンパも減っただろうと思っていたが……。
揺れるたびに陽光に煌く腰より長い髪に、男のみならず女にとっても理想とも言えるスタイル。
エンジのブルマが脚線美をこれでもかと主張し、それでいながら凛として気高く、一度その肢体が躍動すれば、そこに驚きと熱狂が生まれる。
その姿は圧倒的にカッコよく、こんなのを見せつけられたら、どんな悪い風評もどこかに吹き飛んでいってしまうかもしれない。
“このまま彼女のターンが続くのなら”の話だが……。
「あちゃ～、もう先取点決まっちゃったのぉ？見逃しちゃったよ～」
まったく残念そうに聞こえない声に首だけ捻ると、校舎の方から門倉と宮沢が歩いてきて俺の右隣並んだ。
「決めたのは坂上さんですか？」
「いや、春原さんだ」
「春原さんだったんですか。てっきり……」
宮沢が勘違いしたのも無理は無い。
観客の歓声は智代に対する物ばかりで、春原さんの“す”の字も

出てこない。
しかも決めた本人はまだ事情を飲み込めていないのか、身体を起こしながら智代に文句を言っている。
おっ、点が入った事にようやく気付いたか、周囲を見渡してから岡崎さんに向かって『ぼく？』って感じで自分を指差した。
「うっひゃほっほ～～～い！！」
そして岡崎さんが頷くと、その喜びを表す為に奇声を上げながら飛び上がりコートの周囲を走り回りだす。
もうセンターにボールが戻ってるんだが……。
「相手が油断していた所に、うまい具合にパスが繋がったわね」
その声で、数日前に出会った少女……朱鷺戸沙耶がすぐ隣に居た事に気付く。
いつの間に……？
まあ、観客はどんどん増えてきているから、それに紛れて来ていたのかもしれないが……。
「ああ……最悪の展開だ」
気配を察知出来なかった事がちょこっと悔しかった事もあり、そんな意味有り気な事を言ってみる。
「あら、意外ね。てっきりあなたは演劇部の方を応援してるんだと思っていたけど？」
「まあ……見てればわかる」
ピーーー！
素直に食いついてきた所をもったいぶっておあずけし、丁度鳴ったホイッスルに視線を戻す。
って、春原さんまだ外でカズダンス？っぽい事して……こけた！！
踊ってる最中に試合が始まって、慌てて足がもつれたらしい……。
「ちょっと、陽平！早く戻りなさいよ！」
「杏、ほっとけ！来るぞ！」
「えっ！？あっ！」
「クソッ」

春原さんがまだ戻ってない上に、恐らくミッドフィルダー（フットサルではアレ）の杏さんは春原さんに気を取られてる間にあっさり抜かれてしまう。
そして焦って止めに行ったディフェンダー（フィクソ）の岡崎さんをあざ笑う様なパス。
「しまった！美佐枝さん！」
「ちょっと、あっさり抜かれ過ぎよ！」
キーパー（ゴレイロ）のお姉さんが身構えるも、一対ニ。
しかも、動きから慣れていないのが丸わかりだ。
ピッピーーー！
シュートと見せかけたフェイントで体勢を崩され、更に横にパスを出されて同点ゴール。
「あ～ぁ……」
「何やってんだよ春原！」
「陽平！あんた真面目にやりなさいよ！」
「お前は一体何を考えてるんだ！」
「何だよ！悪いのは僕が戻ってないのに勝手に始めたあいつらだろ！」
たちまち声援は落胆と春原さんへの叱責に変わった。
「ありゃぁ……」
「あっさり追いつかれてしまいましたね……」
「最悪の展開って、これを見越していたって事かしら……？」
「いや……今のは予想以上に酷いが……最悪はむしろこっからだ」
ピーーー！
暫く揉めていたが、気を取り直して演劇部のキックオフで再開する。
ガッ！
「ぐっ！」
すかさずボールを持った春原さんに対し、サッカー部のキャプテンが強烈なチャージ。

よろけながらも春原さんはボールをキープしようとするが、そこを狙っていた敵の7番にボールを奪われてしまう。
「何をしてるんだ！」
たまらず左ミッドフィルダーの智代が中央に止めに行く。
だが、その空いた左サイドのスペースに走りこんだ相手ディフェンダーの2番にボールを回され、その2番を止めに岡崎さんが向かうも、中央へ折り返しのセンタリングを出されてしまう。
またもキーパーのお姉さんと、相手のキャプテン（10番）と7番の一対ニ。
パスを受けたキャプテンが自分で行くと見せかけてキーパーを十分に引き付け、7番にラストパス。
バシッ！
誰もが決まったと思った瞬間、一陣の風が吹き抜け相手のシュートしたボールを蹴り返しゴールを防いだ。
ここまで戻ってきた智代だった。
「キャ～～～智代せんぱ～～～い！！」
ファインプレーに歓声が上がる。
しかし、サッカー部はすぐさま7番のキックインでリスタート。
最後尾のディフェンダー4番を中継し、中央のキャプテンにボールが渡る。
そのマークには、杏さんがついていた。
「毎度毎度問題児共のお守りたぁ、お前も大変だな」
「うっさいわね！あんたには関係無いでしょ！」
「何だよ。人が折角同情してやってんのに……それよりよ、“例の件”どうなってんだよ？」
「はぁ？何の事よ？」
「だからその……大分前に手紙渡しただろ？まだ、椋ちゃんから返事もらってねえんだけど」
「そんなの私が知るわけないでしょ！それと、椋ちゃんとか呼ぶのやめてくんない？」

「そうか……よ！」
「あっ！」
１０番は暫くのらりくらりとキープしながら杏さんと何かを話しているようだったが、それで油断を誘っておいていきなりトップギアに。
緩急をつけた切り替えしに、杏さんは振り切られてしまう。
続いてそれを止めに行った岡崎さんを、右方向へのフェイントから強引に左側へ身体を割り込ませるようにして弾き飛ばし、一対一でキーパーもかわしてボールは無人のゴールへ。
ピッピーーー！
圧倒的な実力差を衆目に見せ付ける様な個人技での逆転ゴール。
やはりな……。
「あの１０番、なかなかやるわね。テクニックだけでなくパワーとボディバランスもかなりの物よ」
「ん～、先制して勢いに乗れるかなぁとも思ったけどぉ、やっぱり現役は強いねえ」
「当然だ。何だかんだで、鬼監督の厳しいシゴキに耐えてきた連中だ。人並み以上の体力や根性は持ってるだろうし、個々のタレントもそう悪くないんだ、弱いはずが無い。実際、大きな大会では結果は残せてないが、勝率は7割近いしな」
「へえ……随分詳しいのね」
解説してやると、まるでこちらの意図を全て見透かしているかの様な意味深な笑み。
やはりこの女も、油断ならない……。
そんな事を思える事が何か可笑しくて、フッと笑みが洩れる。
だがその楽しさは、長くは続かなかった。
「門倉の受け売りだ」
「門倉？」
「……こいつ」
「あれぇ、オーキ君のお友達？」

この学園一顔の広そうな門倉を知らない？
意外に思いつつ反対に居る門倉を親指で指すと、門倉の方もまるで今始めて朱鷺戸に気付いたかの様だった。
何だ？
いくら間に俺が居たからと言って、この距離で気付かないって事があるのか？
「報道部の『門倉実理』です。よろしくねぇ」
「『朱鷺戸沙耶』です。こちらこそよろしく」
「『宮沢有紀寧』です。よろしくお願いします」
当たり前の様に互いに自己紹介をしあう三人の姿に、俺は妙な違和感を感じていた。
そもそも、これほどの美少……こんな目立ちそうな奴を、門倉が知らないなんて事があるのか？
朱鷺戸沙耶……一体こいつは……？
ピッ！
「キャ～～～！！」
笛の音と甲高い悲鳴で思考が中断される。
サッカー部の猛攻を、また智代が自陣ゴール前で防いだらしい。
朱鷺戸の事はかなり気になるが、今は試合に集中した方がいいだろう。
先制しながら逆転されすっかり勢いが削がれた演劇部に対し、サッカー部の容赦ない攻めが続いていた。
攻撃の基点である春原さんには常に一人はマークにつき、時には二人がかりで徹底的に潰しにきている。
杏さんはよく動いてはいるが、相手のキャプテンとのマッチメークは流石に荷が重く、岡崎さんも相手の個人技やパスワークに翻弄され、まったく止められていない。
キーパーのお姉さんも、遠目からのシュートは何とか防げてはいるが、距離を詰められるとどうしようも無かった。
そして智代も守備にまわらざるをえず、すっかり自陣ゴール前に

張り付いてしまっている。
「さすがに押されてますね……」
「むしろ演劇部はよく凌いでるって言った方がいいわね。ほとんど坂上さんの身体能力頼りだけど」
「智代ちゃん、凄いよねぇ！スーパープレイ連発！」
「下手だから、いつもギリギリ追いついて派手なプレイに見えてるだけだ」
「はは……」
相手のシュートをゴール寸前で蹴り返して防ぐ様なプレー。
それは観客や苦笑する門倉的には派手な方が見応えがあっていいんだろうが、既に守備が崩壊しているから智代が水際で止めるしかないのが実情である。
もちろん、あいつの凄まじい瞬発力と長い足があってこそではあるが……。
俺からすれば、『何でわざわざそんな非効率的な事をやっているのか』甚だ疑問だ。
「手厳しいわね。確かにそれは真理の一つだけど……まあ、攻め手は完全に封じられているし、このままじゃ失点は時間の問題ではあるわね」
「大分疲れも見え始めてきてますし……大丈夫でしょうか？」
「まっ、後2～3点とられれば、この攻撃も止むだろうけどな」
「へえ、その根拠は？」
「相手はなめて油断してた所にラッキーパンチを食らって、衆人の前で赤っ恥かいたんだ。そりゃあ、ムキにもなるだろ。気が済むまでこの攻撃は続く」
「ああ、なるほど。先制した所為で本気にさせちゃったと。だから最悪の展開って訳ね」
「そこで相手の攻勢を凌げるなら、逆に浮き足立たせる事も出来ただろうがな……」
分不相応の幸運は、時により大きな厄災を招く物だ。

それに相手の実力を実感出来ていない開始直後のラッキーパンチは、『大した事ない？』などといった変な幻想や油断を生む事にも繋がる。

僥倖は僥倖。

そんな物を当てにして調子に乗ったら、待ってるのは破滅しかない。

「でもぉ、後2点も取られたらぁ、ますます勝つのが難しくなっちゃうよ？」

「まあ、それはそうよね」

「いや、もう既に絶望的と言うか、端っから勝ち目なんて無いだろ」

「そうかなぁ？意外とこの面子なら“ひょっとしたら”って思ったんだけど」

「……」

“ひょっとしたら”……か。

試合前に宮沢や門倉達も言っていた言葉だ。

でも、

「お前、坂上や岡崎さん達とも知り合いなのか？」

「え？ううん、直接会った事は無いけど、何て言うか雰囲気があるじゃない。色々噂は聞いてるしね」

「まあ……な」

「それより、あなたはどうするの？」

俺の勘繰りを見透かした上で、逆に挑みかけてくる様な視線で、朱鷺戸は問いかけてくる。

俺より少し背の低い美少女の挑発的な上目使い。

それは反則的に魅惑的で……。

男であるなら、この期待に答えてこそ……。

『危ない！！』

ブオンッッッ！

宮沢と門倉の警告に、俺は咄嗟に朱鷺戸にかぶさる様にして身を

かがめ、その直ぐ上を弾丸が通過していった。
「すまない。大丈夫か？」
そして智代が謝りながら駆け寄って来る。
もしかしなくても、今のは智代が蹴ったボールだった様だ。
「ああ、俺は別に……朱鷺戸は？」
「あたしも大丈夫よ。ありがとう」
「そうか……すまなかった」
俺達が支えあって立ち上がったのを見届けると、智代は言葉とは裏腹にプイッといった感じで長い髪をなびかせ戻っていった。
ん……？
何だ……？
ひょっとして……？
わざと狙いやがったのか！？
「あら……坂上さんに誤解されちゃったかしら？」
そう言いながらも、朱鷺戸はやけに満足そうなにやけ顔だ。
面白がってやがるなこいつ……。
「どうするも何も、俺は部外者だ」
「ふうん」
俺的には素っ気無い返事をしたつもりだが、朱鷺戸は相変わらず含みのある笑みを浮かべただけだった。

前半開始から１０分以上が経過し、得点はいぜん1対2のまま。
だがしかし、戦力差は得点差以上の物だと言う事は、誰の目にも明らかだった。
試合のほとんどが演劇部側のコートで行われているワンサイドゲーム。
時折、単発で攻める事も無くはないが……。
「へい！智代ちゃん、僕の前に出せ！」

「春原！」
「うごっ！！」
智代から春原さんへのパスは何故か全て春原さんの顔面を捉え、しかし、それが相手ゴールに入るようなミラクルは最初の一度きりだった。
「だから前に出せつってんだろ！！せめてゴロだよゴロ！！」
「こっちはボールの扱いに慣れてないんだ。経験者のお前がどうにかしろ！」
そしてそのたびに言い争う両者。
また、長いサッカー部のターン。
パスワークに翻弄され、走り回らされる岡崎さんや杏さんは既に足が止まりがちだ。
逆にお姉さんは、何かすっかりキーパーに慣れてきたらしく、この短期間で見違える程上達している。
そりゃあ、これだけシュートが飛んでくれれば、いい練習にはなるわな。
そして智代は、相変わらずお姉さんが止められなかったボールをカバーリングして叩き落す曲芸を披露し続けてる。
内容自体はダメダメながらも、試合は膠着状態に陥っていた。
このまま一点差で終盤までいけば、あるいは、ひょっとしたら、まさかの、ニ度目のミラクルが起こり得るかも？
そんな淡い期待がちらつきはじめたその、ついに均衡は崩される。
それは、飛び出してきたキーパーをかわす為に7番が放った浮き球、ループシュートだった。
大きな弧を描いて落下をはじめたボールはゴールの上部ギリギリに入っていたが、そこにはカバーに入ったスーパーヒロイン坂上智代の姿が。
少し高目だが、彼女ならきっとジャンプ一番止めるだろう。
シュートを放った7番を含む誰もがそう思っていた。
だがしかし、何を思ったか坂上智代は飛び上がる事はなく、

ただゴールに吸い込まれていくボールを見送っただけだった。

第二章　4月30日　ボールと勇気だけが友達

それは、誰もが不思議に思う出来事だった。
それまでスーパープレイで何度もゴールを守っていた坂上智代が、何でもないような浮き球を見送ってゴールを許してしまったのだ。
「どうした智代？怪我でもしたか？」
心配しながら岡崎さんと杏さんが智代に駆け寄る。
「いや、大丈夫だ。すまない。どうしたらいいか分からなかった」
それに対し、智代は首を振ってばつが悪そうに答えた。
しかし、それを聞いた二人はますます困惑して思わず顔を見合わせる。
「どうって……ヘディングでクリアすりゃいいんじゃなかったのか？」
「あれは怖い」
「怖いって……」
「はぁ？あんたサッカーなめてませんかね？」
かつて多くの不良どもを狩り、最強とまで謳われた坂上智代が語った意外過ぎる理由。
キョトンとする二人の背後から、上半身を直角に曲げポケットに入れる代わりに腰に手をあてたチンピラモードの春原さんが因縁をつけはじめる。
「まあまあ、仕方無いわよ。女の子にはさすがにヘディングは抵抗あるもの」
「そうだ。女の子には抵抗有るんだ」
険悪なムードにキーパーのお姉さんがフォローに割って入ったが、それを援護射撃と思ったのか智代は自分の方が正しいと言わんばかりに春原さんを睨み返す。
「そうよね。あたしもやれるかって言われたら自信無いし、普段から顔を鍛えてるあんたとは違うのよ」

「別に顔なんて鍛えてねえよ！」
「えっ！！違うの！？いつもあたしが投げた本顔で受けてるから、てっきり修行の一環か何かだと思ってたんだけど……」
「私の顔への蹴りも避けようともしないな」
「あんたらがいつも僕の顔狙ってるだけでしょうが！！」
「そうだぜ。こいつのは修行じゃなくて、ただの趣味なんだ」
「うわ……！」
「気持ちが悪い奴だな……！」
「すみません。修行でいいです……」
智代と春原さんの対立でますます雰囲気が悪くなるかと思われたが、杏さんと岡崎さんがうまく？場を濁してくれた様だ。
多勢に無勢で圧倒され、春原さんが肩を落ながら定位置に戻った所で試合は再開される。

「坂上さん、どうしたんでしょうか？まさか怪我でもしたんじゃ……？」
「別に……ビビッてヘディング出来なかっただけだろ」
やはり心配していた宮沢に、それは無用だとあえて素っ気無く断言する。
コートの中の会話が聞こえていた訳では無いが、身体のどこかを気にしている様子も無いし、まず間違いないだろう。
初心者にはありがち、と言うより、経験者でもヘディングが“ちゃんと出来る”奴はあまり多くない。
「坂上さんが……ですか？」
「と言うより、迷って身体が硬直しちゃった感じね……オーキ君が言ってたとおり、派手なプレイばかりに目を奪われがちだけど、あれで彼女、来たボールを蹴り返すだけでサッカーに慣れてるって感じじゃないもの。咄嗟に『ヘディングをする』って選択肢が浮かばなくても、不思議じゃないわ」

意外そうな顔をする宮沢に、朱鷺戸が俺の代わりに解説した。
やはりこいつ、なかなかいい眼をしている。
それに着眼点や口ぶりからして、かなりサッカーに詳しそうだ。
「別にビビッてるのは坂上だけじゃないけどな。岡崎さん達も足先だけで取りに行ってるから、ちょっとしたボールタッチで抜かれるし、抜かれた後も体勢が崩れてて直ぐに追いつけない」
やや誇張して棒立ちから上体を反らし足だけ伸ばす仕草を実演して見せる。
これも実に初歩的な、初心者にありがちな拙いディフェンス例だ。
“サッカーは足でやる物”と言う概念と相手に接触する怖さが先立ってか、例え運動神経に優れていても、身体が逃げて足先だけでボールをとろうとする人間は多い。
だがそれは、ある程度ボールの扱いに慣れた者にとっては格好の餌だ。
相手が格上なら、尚更小細工など通じず“身体で止める”以外に無い。
まあ、それ以前に“不用意に相手からボールを奪いにいくべきでは無い”んだが……。
とどのつまり、演劇部のディフェンスは基本からしてなってない。
そういった事はまず経験者の春原さんが教えるべきなんだが……
彼は天才肌なＦＷっぽいから人に理屈を教えるのは苦手なのか、はたまたメンバーに春原さんをリスペクトして教えを請う気が無いのか……。
その両方っぽいから救いが無い……。
「野球やテニスの様に道具も無く、そもそも人間が最も頼りにしている手が使えないんだ。ビビッて当然だろう。でも、その恐怖と条件反射がサッカーでは邪魔になる。『“手以外の全身を使う”って非日常的な動作が体に染み込んでいるかどうか』それが経験者とそうでない奴との決定的な差だ」
「『ボールは友達』ってやつね。でも、その普段からサッカーを

やってる子達だって、目の前でボールを蹴られると大抵は反射的に身体を庇っちゃうもの。言うほど簡単な事じゃないわ」

「ああ。だからぶっちゃけ素人抜くのに一番いいフェイントは、“シュートを打つ振りをする”だ。そしたら大抵の奴は向こうから避けてくれる」

「それでも避けない子が居たら？」

「本当に一発ぶちこんで、恐怖を植えつける」

「あははっ、それ知ってる！『キャプテン翼』の日向君がやったやつね！」

実は女子3人に囲まれ少し居辛さを感じていたので、ちょっと引いてもらおうと粗暴なネタを言ってみたのだが……。

引くどころか腹を抱えて屈託なく笑いだした朱鷺戸に、こちらが驚愕を禁じ得ない。

しかも往年の名作“キャプつば”の小学生編の事まで知っているだと！？

マジでこの女何者だ……！？

「でも、今のシュートはそんなに怖いと言う程威力は無い様に見えましたけど？」

「だからこそ、逆に考えちゃったんじゃないかしら？手を伸ばせば取れるようなイージーなボールだっただけにね」

「あいつはギリギリ届くか届かないくらいのボールの方が得意なんだよ。そしたら足伸すしかないから」

「智代ちゃん、足凄く長いし綺麗だもんねぇ」

「いや、まあ、確かにあれだけ長けりゃ多少は有利だろうが……」

それでどうにかなるようなレベルの問題じゃない。

スコアは1対3。

これ以上点差を広げられると、本当に打つ手が無くなる。

そう思っていたのだが……幸いこの得点を境にサッカー部の攻勢はスローダウンしてくれた。

少々強引にでも点を取りにきていた今までと違い、パスを回し続

けながら時折遠目からシュートを撃つだけであまり攻めようとしてこない。
勝利を確信し、疲れない程度に流しだしたのだろう。
だが、それに翻弄される側の演劇部にとっては地獄であった。
ボールを取りに走ってはパスを出されてかわされ、また走らされる。
しかも、既に足が止まりかけているところを走らせる為に、わざと足を伸ばせば届きそうなクサイ所を通しているようだった。
たまにそれをカットする事もあるが、それで春原さんにボールが渡っても周りに援護をする余力も無く、独り囲まれては潰される。
智代は智代で、いい位置でボールを持ってもゴールのはるか上にふかすか、春原さんの顔にぶつけるかでまったくゴールの枠に入らない。
演劇部に万に一つも勝ち目が無い事は誰の目にも明らかだった。
黄色い声は野次へと変わり、今はそれすらも飽きられ、一人、また一人と背を向けていく。
そしてダメ押しの４点目が決まると、智代に声援を送っていた一団すらもじょじょに数が減っていった。
勝手な幻想。
無責任な期待。
そして、あまりに面白味の無い現実。
終わったかもな……坂上智代は。
仮に賭けをうやむやに出来たとしても、あいつは『学園のヒロイン』から『ただの人』、いや『ただの不良』に成り下がるだろう。
当然、あいつの“目的”もこれで潰える。
馬鹿げた話だ。
あまりに愚か過ぎて笑えない。
あいつはこれまでの努力を、ただの思いつきで棒に振るのだ。
「オーちゃん……」
さっきまでの喧騒の中では聞き取れなかったであろう消え入りそ

うな声に振り返ると、渚さんと春原さんの妹さん、それに一ノ瀬さんに椋さんまでが連れ立って来ていた。
皆一様に今にも泣き出しそうな、すがる様な表情で。
もうそれだけで用件が判り、勘弁してくれと思う。
「川上さん、お願いです。今からでも試合に出てくれませんか？もうおにいちゃんの事はいいんです。でも、このままじゃ……このままじゃ坂上さんまで選挙を辞退しなくちゃいけなくなります！」
「……だからそれは、あいつが自分で蒔いた種だから、気に病む事は無いって」
「でも…本はと言えば全部わたし達が悪いんです！それなのに坂上さんはわたし達の為にあんな賭けを……」
「オーちゃん……オーちゃんは、またサッカーをやりたくはないんですか？もしここからでも挽回出来たら、春原さんと一緒に……」
「昨日も言いましたが、無いです。俺はサッカーはもうやめたんです」
昨日聞かされた、渚さんの思惑。
それは、春原さんだけでなく、出来れば俺もサッカー部に入部させたかったらしい。
まったく、お節介にも程があるだろう。
「そうですか……でも、サッカー部に入る気は無くても、やっぱり試合には出て欲しいです。みなさん頑張ってはいますが、今のままじゃ試合に勝つのはとても難しいと思います。でも、オーちゃんが居てくれたら、きっと逆転する事も出来ると思います！」
「あの……私からもお願いします。体力的にも、お姉ちゃん達はもう限界だと思います」
「朋也くんや杏ちゃん達を助けて欲しいの」
４人がかりで頭を下げられ、とても居た堪れず溜息をつく。
何でだ？
藁にもすがる想いとは言え、何でこの人達は俺なんかにここまで期待している？

実際の俺のプレーなんてろくに見た事ないだろうに……。
「勘違いしてるみたいですが、俺が出たってどうしようも無いですよ？俺は県の選抜に選ばれてた春原さんと違って、チームはずっと万年一回戦ボーイ、俺自身もずっと才能無いと言われてきたんですから」
「そんな事無いです！昔見た試合でのオーちゃん、凄く一生懸命でした。お父さんやお母さんもオーちゃんはサッカー頑張ってるって、いつも褒めてました」
「うちのおにいちゃんも、川上さんが居ればなんとかなる……かも……って言ってました！人の事なんて褒めた事無い兄が、川上さんの実力は認めてるんです！」
「そりゃあ、経験者だから多少はマシかもしれない。でも、俺はどっかの天才プレイヤーでも何でも無いんです。精一杯頑張った所で、人並みがやっとだったんですから……」
「そんな事ないよぉ、オーキ君はぁ少なくても守備に関してはこの学校で一番だと思うよぉ」
先輩達に変に期待をさせない方がいい。
そう思いやや自嘲気味に答えていたと言うのに、その背後から門倉がいらん事を言い出す。
「オーキ君が入ればぁ、それだけで守備はずっと安定すると思うよぉ」
「守れたって、点を取らなきゃ勝てないだろうが」
「そうでしょうか？守備が安定すれば、それだけ攻撃のチャンスも増えると思います」
恨めしそうに門倉を睨むと、今度は宮沢までが澄まし顔で先輩達の肩を持ち出す。
いや、まあ、こいつらの真意は端から知っていたけど。
周囲を女子に囲まれ、まるで俺が責められてる様じゃないか。
何だ？俺が悪いのか？
チラリと唯一俺責めない朱鷺戸に、アイコンタクトで援護を要請

してみる。
　すると彼女がにこっとしたので、“おっ！”っと一瞬期待したのだが……
「編入したてのあたしとしても、是非見てみたいわね。オーキ君のプレイ」
　この女、あっさり裏切りやがった！
　まさに四面楚歌！
　抜山蓋世も、時、利あらず。
　そして更に、女子連合軍には手強い援軍の姿が……。
「川上君、私も川上君がサッカーをしている所、また見たいです」
「仁科……」
「私が合唱部を創るか迷っていた時、川上君が球技大会で何度も何度も相手に立ち向かう姿を見て『私も頑張らなきゃ』って、とても勇気づけられたんです。だから、その姿をもう一度、坂上さんや演劇部のみなさんにも見せてあげて欲しいんです」
「……杉坂は“いいのか？”」
「えっ？」
　仁科の懇願に耐えられず、最後の砦である杉坂に視線を移す。
　一瞬何の事かわからなかった様なので先輩達を顎で指すと、何となく伝わったのか杉坂はムッとして顔を背けた。
「……そんなの、あんたの好きにすればいいじゃない！」
　怒った様なぶっきらぼうな答え。
　いいんだな？演劇部に肩入れしても。
　それで潰れかかってる演劇部が再生し、また顧問を取り合うかもしれなくても……。
　俺は確認したからな。
　後で文句言っても知らんぞ。
「わかった。やりますよ。でも、負けても知りませんよ？こっから勝つには、奇跡を3回くらい起こす必要があるんですから……」
　最早俺には、負けた時の予防線を張っておくぐらいしかなかった。

第二章　４月３０日　天使ちゃんマジペテン師

中学の時に使っていたスパイクを履き、紐を結ぶ。
合戦を前にした武士が鎧を一つ一つまとうように。
紐の一締めとともに引き締まる精神。
湧き上がる感慨と感傷。
傷だらけとなり所々薄くなった革と、補強でシューズに巻いたテーピング。
磨り減った靴底のポイント。
日々の練習と幾度の戦場を共にした、うん千円の俺の鎧にして刀剣。
こいつを履くのも、これが最後かもしれない。
ふっ……。
自嘲しながら立ち上がり、俺はグランドに向かった。

点差は3点。
ギリギリだが、追いつけない事もない点差で折り返してくれた。
これも坂上智代の天運と言えるのかもしれない。
残る問題はあと一つ。
先輩達が俺の指示に従ってくれるかどうかだ。
正直、それが一番のネックである。
一人で敵を圧倒出来る様なテクも無い俺が、どんなに奮闘したところで高が知れてる。
それこそ前半の智代の様に、ゴール前に張り付くしかない。
そもそも、ここから無失点に抑えるだけじゃ負けなんだし。
ゲームの流れを掌握する為にも、最低限味方には組織的に、こちらの予想通りに動いてもらえないと厳しい。

渚さん達はうまくやってくれただろうか……？
やや不安に思いながらグラウンドに着くと、何やら揉めている様だった。
「はあ？どうして試合に出てないメンバーまで罰ゲームの対象になんのよ！」
「俺らと演劇部の試合なんだから、当然だろ？こっちは前半の点数チャラにしてやるって言ってんだし」
大柄で見るからにガラの悪そうなサッカー部キャプテンと、威嚇する猫の様に肩を怒らせた杏さんが言い争っている。
そういえば、試合中にも何か話しているようだったが……あの二人の間にも何やら因縁が有るっぽいな。
「オーキ！」
俺に気付いた智代が、弾む様な小走りでやってきた。
ぴちっとした体操着のおかげか、ご自慢の物をいつもより余計に弾ませながら。
一瞬それに目を奪われたが、直ぐに目を閉じて緩んだ気と表情を引き締める。
この程度のお色気で、容易くデレてたまるか。
「試合に出てくれるんだろう？ありがとう。お前が一緒に戦ってくれるなら……」
「それより、どうしたんだ？」
心底嬉しそうな智代の言葉をあえて遮り、先輩達に視線を向けながら事情を訊く。
「ああ、あれか……サッカー部がまた別の賭けを持ち出してきたんだ。前半の点差を無かった事にする代わりに、負けた方が勝った方の言う事を何でもきく事でどうかと言ってきた」
「そうか……」
やはり勝ちを確信してレートを上げてきたのか。
まったく、如何にもな小悪党ぶりである。
「坂上、お前は受けるよな？このままじゃ、どうせ負けなんだし」

杏さん相手では埒が開かないと思ったのか、キャプテンがこちらの方に話を振ってきた。

「私は……」

「あんたの目的はどうせ椋でしょ！魂胆が見え見えよ！兎に角、こっちはそんな馬鹿げた賭け受ける気無いんだから、早く帰んなさいよ！」

「てめえには訊いてねえよ。薄情な先輩だよなぁ。お前は選挙がかかってるってのによ。」

させじと杏さんがまくし立てたが、尚もキャプテンはそれを鬱陶しそうに避けながら智代に答えさせようとしてくる。

すると、智代は一度俺の顔をジッと見つめてから、自信に満ちた笑顔でキャプテンに言い放った。

「私は、どちらでもかまわない。どうせ勝つのは私達だからな」

「はぁ？……お前、頭大丈夫か？言っておくが、最初の一点みてえなビギナーズラックは、もう二度とねえからな」

「そんな物、初めから期待していない。前半は初めての試合に慣れていなかっただけだ。後半からは、こちらも本気を出す。それに……後半からはオーキも出るしな」

「……」

まったく、毎度毎度どっからそんな自信が……って、俺の名前出すなー！！

智代の口上を聞いて、キャプテンが無言でムッチャ俺を睨んでくる。

あんまり同じ学校の先輩を敵に回したくないんだがなぁ……。

「お前達こそ、せっかく広げたリードを無くしてしまっていいのか？負けたら、あの春原を部に復帰させる事になるんだぞ。その覚悟は有るんだろうな？」

「ふん、たかだか川上一人加わったところで、どうにかなる差じゃねえだろ。いいぜ、点差はこのままだ。坂上、てめえこそウチらが勝ったら本当に選挙降りてもらうからな！」

唾を吐き捨てながら踵を返すと、キャプテンは自陣に戻っていった。
リセットの方が楽だったのに……。
まあいい。
三点差がある事前提で策は練ってあるんだ。
プランを変更せずに済んだだけの事。
「どうも」
後頭部に手をあてペコリと平身低頭で先輩達の輪に入る。
「おお、よろしくな」
「あんたねえ、来るのが遅いわよ！」
「……」
岡崎さんと、機嫌が悪いながらも杏さんは受け入れてくれている様だ。
しかし、肝心の春原さんは面白くなさそうに口を尖らせている。
ん？
そこで俺はもう一人のメンバー、キーパーをやっていたお姉さんが居ない事に気付く。
トイレにでも行ったのだろうか……？
「……まあ、美佐枝さんもう帰っちゃったし、加わるのはいいけどさ……」
帰った？
春原さんのぼやきを聞いて、思わず隣の智代に小声で尋ねる。
「帰ったって、さっきのキーパーやってた人か？」
「ああ、うん。あの人が相楽美佐枝さんだ。前に話しただろ？」
「えっと……元生徒会長のＯＢ……いやＯＧか？」
「そうだ。今は男子寮の寮母さんをしている。忙しいところを無理言って来てもらったんだが、お前が出るなら仕事が有るからって帰られた」
「そうか……」
いきなり計画が狂った。

運動神経は良さそうだし、体力を一番温存してるから戦力として期待してたんだが……。

何よりフットサルは何度でも選手交代可能だから、交代要員が一人居るだけで交代で休ませる事が出来る。

しかし、それが出来ないとなると、後半もメンバー全員を給油無しで走らせるしかない。

ただでさえ、前半でバテバテだと言うのに……。

「って、早速二人でいちゃいちゃですか!?」

春原さんの突込みで思考を中断される。

おちおちヒソヒソ話も出来んのか。

「ああ、いや……相楽さんの事聞いてた物で……」

「……それより、試合に出るのはともかく、途中から来て仕切らせろってどういうつもりですかねえ?後輩のクセに……」

「おにいちゃん!それはさっき説明したでしょ!」

「そうだ。試合に勝つには、もうオーキに任せるしかないんだ」

いや、ごもっとも。

と思ったのは俺だけなのか、不平を漏らした途端に妹さんや智代からバッシングを受ける春原さん。

不幸だ……。

「いや、あの……仕切るって言うか、コーチングするだけなんで……」

「せっかく川上さんが出てくれるって言ってるんだから、おにいちゃんは文句言わないの!」

「大体お前は、経験者のクセにほとんど何もしてないじゃないか!」

「それは、お前らが僕の話ちっとも聞かないからだろ!」

「当然だ。お前の指示なんか、初めから当てにしてない」

「陽平に指図されるのって、何か屈辱的なのよね」

「自己嫌悪で死にたくなるよな」

「そこまで嫌ですか……!」

何とか俺はなだめようとするも、要らぬ援護射撃の嵐で春原さんは蜂の巣にされる。

不憫だ……。

出来れば春原さんにも納得してもらった上で始めたかったんだが……この雰囲気じゃなし崩しでいくしかないか？

そう苦々しく思っていると、意外なところから助け舟が出た。

「あの、春原先輩」

「き、君は……天使！？」

春原さんがそう錯覚したのも無理はない。

彼の前に突如現れたのは、ボリュームのあるサラサラな長い髪の両端に白い大きなリボンを2つつけた、どこかこの世ならざる雰囲気を持つ神秘的な美少女だったからだ。

「はじめまして。朱鷺戸沙耶と言います。春原先輩って、地元じゃ有名なストライカーだったんですよね？」

「まあね～。これでも地元じゃ背番号9を持つ真のスーパー・エース・ストライカーとして有名だったよ」

朱鷺戸があからさまにおだてると、グロッキー状態だった春原さんはたちまち息を吹き返し鼻高々になった。

おおっ！ナイス朱鷺戸！

その心の中での賞賛が伝わったのかの様に、彼女はチラリとこちらを見て得意気にウインクして見せ、籠絡を続ける。

「すっごーい！春原先輩のスーパープレイ、是非見てみたいな～」

「ふっ、任せておくれよセニョール。奇跡の逆転ゴールを、君に注ぐよ」

「えっ……？あ……あはは……」

「おにいちゃん……セニョールは男の人の事だよ……」

妹さんは深い溜息をつき、朱鷺戸も春原さんがどういう人か理解したのか笑って誤魔化すしかなくなってきているのが見て取れた。

いかんな……長引くとボロが出るぞ朱鷺戸。

「でも、どんなに凄いストライカーでも、守備がザルだったり、

パスが回って来なきゃ活躍出来ないと思うんですよ。だから、ここは川上君に守備やゲームメイクは任せて、先輩は前線でど～んと構えていればいいんじゃないかな～なんて……」

調子が狂ったのか、はたまた流れが強引過ぎたと自分でも思ったのか、朱鷺戸の台詞は先輩の顔色をうかがいながらの尻つぼみになってしまっていた。

ど、どうだ？

「川上……お前……」

クッ、さすがに朱鷺戸が俺の回し者だと気付かれたか……！？

「作戦はお前に任せた！」

「ありがとうございます！」

春原さんがダメな人で助かった！

アイコンタクトを朱鷺戸と交わし、目立たないように腰の位置で“グッジョブ！！”と小さく右手の親指を立てる。

これでようやく始められるな。

奇跡の逆転劇……の演出を。

「では、まずポジションですが……春原さん最初キーパーお願いします」

「ＯＫ！このグレート・スーパー・エース・ストライカーに任せて……って、キーパー！？フォワードの僕がキーパーやってどうすんだよ！！」

食いつかんばかり春原さんが詰め寄って来る。

やはり簡単には納得せんか……。

「いや、まずは皆さんに守備の基本を覚えてもらって安定させたいので……」

「だからって、僕が居なきゃ誰が点取るんだよ！！」

「今オーキに任せるって言ったばかりじゃないか。黙って従え」

「いや、でも、さすがにフォワードが居ないのはマズくないか？

何だかんだで、サッカー部の奴等春原を警戒して常に一人はマークをつけてたから、全員で攻めてくる事が無かった訳だし」

相変わらず春原さんに冷たい智代に対し、さすがは岡崎さん、見るべき所は見えていたってトコか。
春原さんと岡崎さんの言い分はもっともである。
だが、前半と同じ布陣じゃ埒が開かない。
まずは流れを変える為にも、開かない埒を無理矢理こじ開ける必要がある。
それには……。
「フォワードには、坂上に入ってもらいます」
「私か」
「確かに智代ちゃんはスピードもキック力も有るけど、コントロールは小学生以下だよ。すぐふかしちゃうし」
「小学生以下とはなんだ!?練習では、結構枠にいっていたはずだ」
「試合でやれなきゃ意味が無いんだよ!前半一本もゴールの枠に行かなかったじゃないか!!」
「仕方無いだろ!こっちはサッカー自体あまり慣れていないんだ!」
「よせ坂上、下手糞は何の自慢にもならん」
「……」
俺がたしなめると、智代はむくれて恨めしそうに俺を睨んでくる。
まったく……チーム全員の協力がなきゃ、勝てないと言うのに……。
「ですが……こいつを何とか矯正しない事には、使い物になりません。逆に少しでもコントロールがつけば、相手にとって十分な脅威に成り得ます。なので、後半最初の課題は『守備の安定』と、『坂上のコントロール』のニ点でいこうと思います」
「でもなぁ……」
「キーパーって、確かチームで一番運動神経がいい人がやるんですよね?そうなると、先輩以外に適役っていないんじゃないですか?あたし先輩のスーパーセーブも見てみたいな～」

「えっ？そう？」

「そうですよ。暫くしたちゃんとフォワードに入ってもらいますんで、まずはキーパーのお手本を見せる意味でもお願いします」

あまり乗り気でなさそうな先輩を俺と朱鷺戸で何とかなだめすかし、その後簡単にディフェンスの仕方を説明しただけでインターバルは終わってしまった。

第二章　4月30日　超ローカルルール

ハーフタイムが終り、フィールドに出てきた相手チームのメンバーは、前半とまったく違っていた。
前半は三年ばかりだったが、ニ年主体に総入れ替えしてきたらしい。
厄介だな……。
こっちは5人丁度だってのに、向こうは大人気なく総力戦で来るつもりらしい。
ニ年だから三年より弱い……といいんだが、そう言う訳でもあるまい。
実際の試合でツートップを組むニ年コンビ、中野と荒川は中学の時それぞれの学校でエースを張っていたそこそこ有名な奴等だし、他の三人もキーパー以外レギュラーのはずだ。
てかまあ、こちらとあちらの戦力差に比べたら、三年とニ年の差なんて誤差みたいな物だし……。
しかも、始まる前からヘラヘラしていた三年と違い、ニ年からは妙な緊張感を感じられる。
何か言い含められたか……？
三点差が有る事を考えれば、単に俺を警戒しているからと言うだけではなさそうだ。
ふう……。
あまりの絶体絶命ぶりに溜息しか出ない。
まったく、俺の人生こんなんばっかだな。
常に劣勢。
いつも負け戦。
戦いってのは、勝つべくして勝つもんだろう。
たまには余裕で楽勝とかしてみたいもんだ。
瞳を閉じる。

さて、試すとしようか。
どこまで“奇跡”に迫れるかを。

ピーーー！

相手のキックオフで後半が始まった。
中野（９番）がいったん後ろの５番にバックパスを出し、荒川（１１番）と共に両サイドに展開。
隣の８番を経由して右サイドの荒川にボールが渡る。
「！」
ボールを受けた所で荒川の動きが止まった。
岡崎さんがその前に立ち塞がったからだ。
前半と違い、一定の距離を保ちながら。
慎重にも荒川はいったんボールを下げ……ると見せかけて、ボールを切り返し突破を図る。
だが、十分に距離をとっていた岡崎さんは直ぐにそれに追いつき、ピッタリと並走し中に入れさせない。
「くっ」
前半と違い簡単には抜けないと悟った荒川は、今度こそ８番にボールを戻す。
その８番には、すかさず智代が詰める。

ピッ！

智代が自慢の長い足を伸ばしてボールをつつき、ボールはタッチラインの外へ。
「オッケー、それでいい」
声をかけてやると、褒められた犬の様に自慢気に尻尾を振った。
「次、始まるぞ」
放っとくとそのまま餌をねだりに寄って来そうだったので、試合

に集中させる。
　8番のキックインを、センターサークル付近まで引いた中野が受ける。
　その動きに、中野のマークをしていた左サイドを守る杏さんもついていく。
　すると、左サイドにスペースが出来、そこに5番が走り込みノーマークでパスを受ける。
「そのまま9番ついて」
　持ち場のテリトリーを侵された杏さんが5番に向かおうとしたのを止め、あえてそのまま攻めさせる。
　完全フリーの5番。
　彼はパスの出し所を探してチラリと中央を確認したが、自分で少し持ち込みシュートを打った。
「任せろ！」
　春原さんが正面でガッチリキャッチ。
　元々小さいフットサルのゴールは、角度のある所からシュートされても怖くは無い。
「ナイスキー！打たせて取っていきましょう」
　中央からノーマークで打たせなければ、春原さんなら止めてくれる。
　そう信じ、むしろ打たせていい所は打たせていくつもりだ。
　それが、彼の調子を上げていく事にも繋がるだろう。
　先輩はこのチームのエースだ。
　だが、ニ年のブランクと相手からの執拗なマーク、そして、その……“ヘタレ”がすっかり染み付いてしまっているおかげで、今のままでは本来の力は発揮出来まい。
　後に追い込みの際の切り札となってもらう為にも、まずはキーパーとして体力を温存しつつ気持ち良く活躍してもらうとしよう。
　その間に、打てる布石は全て打つ。
「走れ！」

ゴールエリアの脇で先輩からパスをもらうと同時に号令を発っする。
智代が右サイドを駆け上がり、両サイドの岡崎さんと杏さんがパスがもらえる位置に開く。
その瞬間、俺の目には相手ゴールの一点に向けて走る集中線が見えた。
いける！
迷わず撃鉄に見立てた右足を起こす。
まだ自陣の深い所に居る所為か中野、荒川はパスコースを消すだけで詰めてはこず、８番は智代を追い駆け、攻め上がっていた５番も戻りきれていない。
そして相手陣地にほとんどディフェンスが居ない為、その空いたスペースを詰めるように相手キーパーは前目に出ている。
つまり……キーパーの頭上を越す様なシュートならば、決められると言う事だ。
「っけ！」

ボッ！！

偽・ドライブシュート！！
弾丸の如く中心を爪先で蹴られたボールは大きな弧描き、自陣を飛び越え敵領空を侵犯する。
そう、これは本当のドライブシュートではなく、爪先で蹴ったいわゆるトゥキックだ。
日本では使う事すらタブーとされている、あの素人キックである。
だが……そんな物はただ迷信に過ぎない！
コントロールが難しく、また爪先を痛める可能性もあるので確かに素人には向かない。
が、普通のキックよりコンパクトなモーションで打つ事が出来、使いこなせればドライブっぽい球や最近流行りの無回転ぽい球も蹴

る事が出来るのだ。
　また、ボールが弾まない＝重く、選手が密集しがちなフットサルとは相性が良く、割と普通に使われている立派なテクでもある。
「うおっ！？」
　キーパーがボールに手を伸ばすも届かない。
　強力な縦回転によって程よく落ちたボールは、そのままゴールへ吸い込まれ……

　ガッ！

　なかった！
　ボールはゴールポストに当り、惜しくもゴールならず。
　だが次の瞬間、地上に現れた流星が長い尾を引き相手ゴールに飛び込む。

　ピッピーーー！

「キャ～～、智代せんぱーい！！」
　深々とネットに突き刺さったボール。
　久々の黄色い歓声。
　誰よりも早くゴール前に詰めていた智代が、スライディングで滑り込み跳ね返ったボールを押し込んだのだ。
「オーキ！」
　起き上がるや、真っ直ぐこっちに駆け寄ってくるごっつぁんゴーラー。
『どんなボールでも追いついて、どっからでもシュートしろ』
　そう指示はしていたが、あれに追いついて決めちゃうのか……。
「凄いな、今のパス！まさかゴールに当てて私の前に跳ね返すなんて、思ってもみなかったぞ！」
　パスじゃねえよ！

その体操着の一番ぱっつんぱっつんなトコにつっこんだろうか！
「……まだ一点返しただけだ。次来るぞ」
「うん！」
なんて事を公衆の面前でやれる訳もなく、皮肉を言う奴でない事もわかってるので、頭をぽんぽんと叩いて軽く労うにとどめる。
サッカー部がこのまま終わるとも思えんし、集中を切らせる訳にはいかない。
「おいニ年、４０周～！」
智代の得点に思わず立ち上がったキャプテンが、苛立った様子で謎の言葉を発してから座った。
４０周……罰走か。
一点取られて４０と言う事は、前半と同じく3点差つけないと一点ごとにグラウンドを１０周させられるってトコだろう。
後輩を鞭で脅して死力を尽くさせ、自分達は高見の見物。
クソだがうまいやり方だ。

ピーーー！

試合再開。
と、同時に中野がドリブルで切り込んでくる。
どうやら、様子見はもう終りのようだ。
「あっ！」
「しまった！」
５番とのワンツーで杏さんと智代を一瞬で抜きさり、中野がゴールエリア付近まで迫る。
だが、ここまでだ。
「くっ……！」
展開を読んでいた俺がすかさず距離を詰めて中野を牽制し、速攻を許さない。
「杏さん下がって5番、岡崎さん中気をつけて」

1対1。

俺に背中を預けながら隙をうかがう中野に対し、俺は動きを抑えながらも全体を把握し指示を出す。

「ちっ……」

抜く事を諦め中野が荒川にパスを送る。

マークの岡崎さんをサイドに流れながら振り切り、荒川がシュート。

「川口！」

誰かの名前を呼びながら春原さんが倒れこんでキャッチ。

んん？俺……じゃないよな？

元・日本代表のキーパー？

「智代ちゃん！」

俺が余計な事に気を取られている内に敵の隙を見つけたか、春原さんはセンターライン付近の智代にロングスロウを送る。

バスッ！

智代はそれを直接シュート！

『ゴールが見えたらとりあえず打て』

どうせドリブルとか出来ないのだから、彼女にはそう指示してある。

まだ距離はあったが、智代のキック力なら余裕で届く。

ピッ！

と言うか、有り過ぎてボールはゴールのはるか上を越えていった……。

「キッー！何やってんだよ、このノーコン！！」

「うるさい！もっとゴールに近い所にパスを出せばいいだろう！」

う～ん……わかってはいたが、本当にノーコンだな……。

素人が力いっぱい蹴っ飛ばしてるだけなんだから、当然と言えば当然なんだが……。

さっきの得点も、外しようが無い程至近距離だったから入っただけだろうし。

前半考えていた策を、試してみるか……。

「坂上」

「ん？何だ？」

相手チームがボールを取りにいってる間に、智代を手招きして新たな作戦を伝える。

「……それでいいのか？それじゃあ、狙い通りの所に飛んでも、点が入らないんじゃないか？」

「枠に飛ばないよりは全然いい。狙ってみろ」

「わかった」

ボールが戻ってくると、相手キーパーはボールを持ったままやや下がって助走をつける。

フットサルではゴールキックの代わりに相手キーパーが投げて試合再開するが……来るな。

ツートップの中野と荒川が走り出し、それに合わせてキーパーがロングスロウ、直接こちらのゴール前にセンタリングを上げてくる。

「春原さん！」

「キエエエェェ～～～ッ！」

奇声と共に飛び出した春原さんが、中野との空中戦を制しパンチングでクリア。

しかし、そのボールは8番に拾われ、そのパスを受けた荒川が無人のゴールにシュートを打つ。

バサッ！

ゴールネットが揺れる音。

だがそれは、ゴールの外側のサイドネットだ。

俺がフォローに向かっていたので、隅を狙うしかなかったのだろう。

しかし、今のは少しヒヤッとした。

空中戦になると、こちらがかなり不利である。

てか、そもそも俺も背が低いから苦手だ。

荒川は長身で、中野も俺より高い。

俺より低い杏さんには競り合いは辛いだろうし、智代はヘッドを嫌がる。

唯一上背で負けていない岡崎さんも、サッカー流の競り合いには慣れていないだろう。

となると、頼みの綱は春原さんだけだが、キーパーが飛び出せる範囲は決まっているし、今の様にゴールが無人になるリスクを伴う。

フットサルではボールを上げ辛くヘッドも威力が出ないが、それでも頻繁に狙われるとヤバイ。

「杏」

春原さんのパスで試合再開。

俺には中野がマークについていたので、春原さんは杏さんにパスを出す。

だがそこに、敵の5番が迫る。

「ああ、もう、仕方無いわ……ね！」

パスを出せない杏さんは、適当に前に思いっきり蹴る。

『迷ったら外か前にクリア』

これも事前の決め事だ。

ただの苦し紛れだが、ただ相手に取られるよりマシである。

蹴ったボールは不意をつかれた5番の足に当たり、誰もいないセンター付近に。

それを俺と中野が同時に取りに行く。

ガッガッ！

中野は腕を使って俺をブロックしにきたが、逆にそれを吹っ飛ばしてこちらの体をねじ込む。
「智代！」
カッ！
爪先差で競り勝ち、ボールを敵陣の空いたスペースに蹴り出す。
そこには一瞬にしてマーカーを置き去りにし走りこんだあの女！
追いつくと同時に軸足を軸に回転し、竜巻さながらに長い髪を巻きながらシュートを放つ。
ボンッ！！
走ってきた勢いと回転力を加えた凄まじいシュート！
は、やっぱりゴールのはるか上を飛んで行った。
……う～ん……作戦失敗か？
「すまない……また外してしまった」
バツが悪そうに智代の方からやってくる。
「ちゃんとキーパー狙ったか？」
「ああ。これでもお前に言われた通り、相手にぶつけるつもりで蹴ったんだ」
そう、俺が考えた作戦は、『キーパーを狙って打て』である。
前半を見ていて、春原さんの顔面にのみピンポイントで百発百中だった事からどうかと思ったのだが……あそこまで外れるとなると違いそうだ。
相手が春原さんでないとダメなのか？
てか、何で春原さんには狙って当てられるんだ？
「よし、じゃあ、次は相手のキーパーを春原さんだと思ってやってみろ」
「あいつを春原にか……？わかった。やってみる」

だが、再びボールを奪い智代にパスを回すも、彼女は相変わらずふかしてしまう。
ダメか……。
なんとかこいつのシュートを枠に飛ぶようにしたいんだがな……。
これは、春原さんを早めにトップに持ってくる必要があるかもしれない。

再びキーパーがロングスロウを狙ってきた。
荒川へのパスだったが、飛距離が足りずマークしていた岡崎さんがヘッドでクリアする。
しかし、それを8番がフォローし、前方にフィード。
そこに走りこんだ中野は、直接左足でシュートと見せかけてトラップし、それに釣られた杏さんをかわしてシュートにいく。

ガッ！

それを読んでいた俺がブロックし、ボールはタッチラインの外へ。
だが、5番が早いリスタートで8番とワンツー。そのままドリブルで斬り込んでくる。
春原さんと1対1。
5番は春原さんをかわそうと外へ逃げる。
それに合わせて春原さんは十分に腰を落とし身構えながらにじり寄っていく。
そして、十分に春原さんをひきつけ5番は……中央へのパス。
「させるか！」

なんと、そのパスを読んでいた春原さんが足でそれを止めた！
中野が詰めていたが、ボールに抱きつく様にしてそれを防ぐ。
「ナイッキー！！」
「ナイスガッツ春原！」
「おにいちゃ～ん、ナイスセーブ！」
「春原さん、凄いです！」
「キャ～先輩カッコい～！」
これには内輪だけではあるが、次々と賞賛の声が上がった。
まさか、ここまで体を張ってくれるとは……。
このままずっとキーパーやってもらうか……？
などと思っていると、
「ふっ、このグレート・ティーチャー・春原が居る限り、ゴールはわらせないぜ！」
教師なの？と誰もがつっこみたくなるが、それどころではなかった。
何を思ったか、春原さんのパスは荒川の足元に。
「しまった！間違えた！」
当然、荒川は即シュートを打つ。

バキッ！！

「ぐへっ！！」
至近距離からの強烈なシュートだったが、全身で止めにいった春原さんの顔面を直撃！
こぼれ球は俺が大きくクリアし、敵陣のタッチラインを割った。
あっぶね～！！
「何やってんだ春原！！」
「おにーちゃん！かっこ悪いなぁもう……」
調子に乗せ過ぎると、今みたいな大ポカが有るのか……。
やはり、１つのミスが失点につながるキーパーよりフォワードに

すべきかな……。
いや、今ので点が入らなかったのもまた春原マジックの気がするが……。
「ドンマイ。気を取り直していきましょう」
そろそろタイミングを見てポジションチェンジを考えた方が良さそうだ。
5番のキックインで試合再開。
中盤までボールをもらいに行った中野がスルーし、クロスするように走りこんだ8番が受けると、そのまま上がってきた。
前には荒川、後からは中野と5番がフォローに上がってくる。
ついに波状攻撃できたか……！
試合開始から大分経ち、敵にもかなり焦りが見える。
俺はあえて右サイドをきりつつ8番に詰め寄った。
すると8番は左前方にフィード。
「春原さん！」
春原さんがクリアに飛び出る。
だが、それより早く中野が追いつき、春原さんを抜いてシュートにいこうとする。
「よっ！」
だが、ボールが流れた隙を背後から来ていた杏さんがつきボールを奪った。
二対一を作れると踏んでいたが、うまい具合にいってくれた様だ。
「ナイスカット！」
すぐさま走りだし、その杏さんからパスを受ける。
敵は急いで戻り始めているが、全員こちらの陣地内。
対してこちらには、あの伝説の大砲少女が前線に残っている。
決定的なカウンター。
なので俺は……確実に自分で持ち込む事にした！
5番が体を寄せてくる。
それに対し、おもむろに俺はシュート体勢に入った。

「なにっ！？」
だが、これはフェイント。
ブロックに足を伸ばしてきた所を切り返し、５番を抜きさる。
“キックフェイント”
いわゆるシュートやパスを出す振りだが、俺が唯一得意……と言うか唯一まともに出来るフェイントだ。
だが、この最も単純なフェイントも、布石次第で強力な物となる。
自軍のゴール前からのロングシュートだ。
あの一発は点を取る事よりも、相手に俺のキック力を見せ付ける為に打った物である。
それにより、相手は俺の何処からでも打つ可能性があるシュートを警戒し、フェイントにかかり易くなっていた。
まあ、もちろん何度も同じ手が通じる訳ではない。
“たまに”だから効果的なのだ。
智代のマークにつこうとしていた８番がこちらに来る。
相手がシュートブロックにいけるギリギリの間合い。
そこで俺は右足を振り上げる。
「くっ！」
またもフェイント。
必死に足を伸ばしてきた所を、冷静にかわしていく。
残るはキーパーのみ。
そしてこちらには、横に智代が居る。
「クソッ！」
最後の一人、キーパーが突っ込んでくる。
そこで俺は……ここで智代に無情のラストパスを送った。

ザザーッ！！

「オーキ！？」
はじめからファール覚悟だったのだろう。

パスを出した直後、俺は足に相手キーパーのスライディングを受け倒される。
だが、これで確実に一点返した。
外したら、ただじゃおかねえぞ。

ピッ！

そう思いながら倒れこむ俺の耳に、妙な笛の音が聞こえた。
まさか外したのか！？
急いで顔を上げると、ボールはまだ智代の足元に有る。
まさかファール！？アドバンテージだろ！
だが、この審判の判定は、俺の予想の遥か上を行っていた。
「オフサイド」

第二章　4月30日　切り札登場！

オフサイド……？
ありえない判定だ。
「ふざけんな！！フットサルにオフサイドは無いだろ！！」
抗議しにわざわざ飛んできた春原さんが言うように、フットサルのルールにオフサイドは無い。
てか、有るなら今まで何度もオフサイドになる場面はあった。
審判はサッカー部の三年だから、あちらに有利な判定くらいしてくると思ってはいたが……リードしているこの状況で、ここまであからさまにやってくるとはな……。
「どういう事だよ！？今のは完全にこっちの得点だろう！！」
「そうよ！！あんた審判のくせにルールも知らないの！？」
「オ、オフサイドっつってんだろ！審判に逆らうなら退場にすんぞ！」
岡崎さんに羽交い絞めにされながらも怒鳴る春原さんと詰め寄る杏さんの剣幕に、審判の男は気圧されながら泳いだ視線でキャプテンに助けを求める。
「誰がオフサイド無いっつったよ？うちらのルールではあるんだよ！」
面倒そうに立ち上がった黒幕が開き直った。
この学校が誇る不良生徒である俺達三人だが、絶対やつらの方がガラ悪いだろ。
春原さんがそれにますます激昂しない訳が無い。
「ざけんなよてめえ！！」
「待て春原、落ち着け！退場になっちまうぞ！」
「放せよ岡崎！！こんなの、おまえは許せんのかよ！？」
「おい、サッカー部。オフサイド有りって事は、そっちのもちゃんととるんだよな！？」

「あ、ああ、とってやるよ」
飛び掛らん勢いの春原さんを抑えながら、それをなだめるべく岡崎さんは確認の言質を取る。
だがその声には、傲岸なキャプテンを怯ませる本気の気迫がこめられていた。
彼も相当怒っているのだろう。
「どういう事なんだ？」
で、俺はと言うと一番の危険人物を抑えるべくマークしていたんだが……表情こそ険しい物のどうやらよく事情が飲み込めていないらしい。
「フットサルにオフサイドなんてルールは無い。知らなかったのか？」
「それは知っている。でも、今は反則を取られてしまったんだろ？どうしてなんだ？」
「審判がルールを捻じ曲げたからだろ」
「やはりそう言う事か……」
智代がサッカー部を睨み付ける。
行くか？
“最終兵器智代”出撃か？
「ん？なんだ？」
血の惨劇を未然に防ぐべく後ろから肩を掴むと、不思議そうに振り向かれる。
意外に冷静……みたいだな。
「……怒ってないのか？」
「怒る？……肩を掴まれたくらいで怒る訳ないだろ。お前なら、別に嫌じゃない……」
いやいやいや、何故この流れでそうなる？
「いや、サッカー部に」
「ああ、そっちか。もちろん私だって怒っている。でも、抗議は杏や春原がもうやっているからな。出て行くタイミングを逸してし

まった感じだ。そう言うお前は怒ってないのか？」
「もちろん怒ってる……お前にな」
「どうして私なんだ！？悪いのは、卑怯なあいつらじゃないか！！」
「何でサッカー部に審判やらせんだよ？」
「そんな事知らない。勝手にあいつらがやる事になっていたんだ」
「ようするに、試合するって決めただけで、そん時ルールとか確認しなかったんだろ？だからこういう事になる」
「仕方無いだろ！こっちはメンバーを集めるだけで手一杯だったんだ。それに、あいつらは審判の事なんて何も言ってこなかった」
「聞かれない事は答えないのがペテン師の常套手段だろうが。俺に睡眠薬パンを食わされた事、もう忘れたのか？」
「忘れるはず無いだろ。お前は私を眠らせて、Ｈな事をしようとしたんだ」
乙女に恥じらいながら、彼女は言葉少なげに俺達二人の思い出を語った。
てか、大事な部分が全て抜けている。
「本当には入れてなかっただろうが！」
「わかっている。騙されないよう気をつけろって言いたいんだろ？」
「……たかだかサッカー部に嵌められてるようじゃ、老獪な町のお偉いさんの相手なんてとてもじゃないが出来ないぞ。隙を見せるな」
智代をたしなめながらも先輩達の動向をうかがっていると、不意にサッカー部のキャプテンがくいっと首を横に振った。
まるで、誰かに向けて何かを促した様な……。
「まずいっ！！戻れ！！」
叫びながら走り出す。
今は抗議の為にこちらのチームの全員が敵陣に来ている。
つまり、こちらのゴールがすっからかんだ。

通常なら審判が試合を中断させて一旦仕切り直しで再開する所だが、今はそんな常識が通用する状況ではない。
俺が逸早く奇襲を察知した事で、慌ただしくキーパーが前線にパスを出す。
これが前線に渡って無人のゴールに蹴り込まれる最悪の展開に…
…なるはずだったのだが、

パシッ！

なんと、智代さんの長すぎる御御足がキーパーの蹴ったボールを間近でブロック！
そしてこぼれ球は……あの男の下へ。
「ちょっと待てよ！！抗議してんのに勝手に始め……ん……あれ？」
突然降って湧いた幸運に、春原さんが呆ける。
敵チームは全員攻めようと走りだした為、ディフェンスは誰もいない。
「ふはははっ！ズルするからこういう事になるんだよ！！」
フリーズの解けた春原さんが、超どフリーでシュート体勢に入る。
だがしかし、

ピッピッピッ！

スカッ！どてっ！

お約束の様な審判の笛に春原さんはずっこけて空振りし、そのまま後ろに倒れた。
「坂上が近かったから、やりなおし」
それは蹴る前に注意する事だ……。
「今のは止めちゃいけなかったのか？」

「いや、ナイスだ。ガンガン狙ってけ」
またも反則を取られ困惑する智代に、俺は親指を立てて褒めてやる。
相手のリスタート時には一定の距離を離れなきゃいけないルールが無い事もないが、サッカーとフットサルで距離が違うし、それ以前に最早審判のサジ加減なので何処に居ても同じだろう。
それより、今の内に立て直すべきなんだが……。
「おまえらいい加減にしろよ！！」
起き上がった春原さんがやはり抗議を始めてしまう。
「春原、何言っても無駄だからもう戻ってこい」
「チッ……審判、キーパー交代だ！」
いきなりだなおい。
岡崎さんに言われて思いついたか、春原さんは唐突にポジションチェンジを申し出た。
確かに戻ってる暇は無い……が、

ピッー！

やはりな。
せっかくのチャンスにそれを許すはずも無く、春原さんを無視して審判は試合再開の笛を吹く。
智代を警戒してか、キーパーはボールを浮かしてのロングパスを出してきた。
「クソッ！！」
ボールは懸命に戻る春原さんと智代の頭上を越え前線に。
中野がヘッドで落とし、すぐさま奴はマークの杏さんを回り込んでかわす。
５番がそれをダイレクトで折返し、ゴール前に走りこんだ中野は直接シュート。

ドカッ！！

それを読んで詰めていた俺が至近距離でブロック！
しかし、跳ね返ったボールは８番の前に。
そのまま８番のシュート！

ガッ！！

それも俺が足でブロック！
こぼれ球はそのままサイドラインをわった。
「まだだ！集中！」
だが、すぐにボールを拾った荒川が、間髪入れずキックインで直接センタリングの浮き球を上げてくる。
「シュ、マイコォ！！ポゥッ！！」
ようやくゴールに戻ってきた春原さんが、またも何かが乗り移ったかの様なパンチング！！
シュマイケル？元デンマーク代表のキーパー？
とにかく春原さんのファインセーブで助かった！
かと思いきや……、

ピッ！

「ハンド。ＰＫ」
またしても審判がトンデモ判定。
「なっ……！？」
「ハンドって何だよ！？ペナルティエリア内だったろ！！」
「お前、キーパー交代するって言ってたじゃん」
「はあ！？」
完全な揚げ足取りに、一同絶句する他無い。
込み上げる怒りに、拳を固く握った春原さんの体が小刻み震えだ

す。

「てんめえぇぇぇ～～～！！」

ガッ！

「どけ川上！！こんなの、サッカーじゃねえよ！！」

「ダメです！春原さん！」

ついにブチ切れ審判に殴りかかった所を、慌てて割って入り背中で止める。

ここで暴れたって、それこそ過去の焼き直しにしかならない。

当然、岡崎さんもすぐに止めに入ってくれるだろう。

そう思っていたんだが……甘かった。

春原さんを止めるどころか、岡崎さんは無言で睨みつけながら審判に詰め寄っていたのだ。

「な、何だよ……？やんのか！？退場にすんぞ！」

「おまえら……部活やってる人間が素人相手にこんな真似して、恥ずかしくないのか？」

その岡崎さんの問いには、単なる憤りだけではない“重さ”の様な物があった。

更に度重なるアホなジャッジに不満を持ちはじめた観客達のブーイングがそれを後押しする。

「う……、い、いや……」

うろたえた審判は、再び泣きそうな顔でベンチに救援要請の視線を送る。

さっきからチラチラキャプテンの顔色うかがう事で“自分は指示に従ってるだけだ”感を出そうとしている事から、ヒールになる覚悟が無いのだろう。

もっとも、さっきからこじつけの様な判定をしているのはこいつ自身であり、片棒担いでる時点で同罪だが。

「おい、審判早くしろよ！ＰＫだろ？」

このままでは落ちると気付いたか、立ち上がったキャプテンが審判を恫喝するように急かす。
すると今度は杏さんが、つかつかと諸悪の根源の方に向かって行く。
「部員に汚れ仕事押し付けて偉そうにしてるサイテー男は黙ってなさいよ！」
「何！？」
「どうせあんたが命令してやらせてる事ぐらい、みんなお見通しなんだからね！」
「はぁ？知るかよ。審判のジャッジにケチつけてんじゃねえよ」
「そうよね。あんたは好きな子に直接告白出来ないどころか、ラブレターすら他人任せにするヘタレだもんね！」
「て、てめえ、何バラして……！！！」
ハッとなって口を押さえたがもう遅い。
サッカー部員達の間には動揺が走りざわつき、周囲の観客達にもたちまち情報が伝播していく。
「やだ～」
「ぷぷっ、マジかよ？」
「ありえな～い」
こだまの様に次々と聞こえて来る失笑。
これまでふんぞり返っていた強面サッカー部キャプテンの威厳が崩壊した瞬間だった。
自身の恥部を衆人の前でばらされたキャプテンは、鬼の形相で怒鳴り散らす。
「全部こいつのデマだ！！信じるんじゃねえ！！」
「何よ！みんな本当の事じゃない！まあ、地球が爆発したって、うちの椋があんたを好きになる事は無いけどね！」
「藤林ぃぃぃぃぃ！！てめえ、ぜってぇ許さねえぞ！！」
確かに地球が爆発したら好きとか嫌いとか言ってられん。
「審判！メンバー交代だ！日野と小金井出ろ！俺と豊島が入る！」

その申告で5番と8番が出て、キャプテンと巨漢の4番がフィールドに入った。
ついに出てきた……か。
フォワードの二人を下げなかった事から、あくまで点を取って勝つ気なのだろう。
それは同時に、こちらの攻撃力が貧弱である事を見透かされているとも言える。
まあ、バレバレだけど。
「そっちはどうすんだよ？キーパー誰がやるんだ？」
非難の矛先がキャプテンに向かった事で落ち着きを取り戻した審判が、思い出した様に訊いてくる。
てか……、
「さっきも言ったけど、いい加減僕は攻めるよ。川上がやれば？」
「あ、いや……」
「待て！オーキは手を怪我してるんだ。キーパーなんて無理だろ」
俺が答えようとした所を遮り、智代が勝手に答えた。
確かにそれもあるが、問題はそこじゃない。
「そうなると、俺ら三人の中の内の誰かがやるしかないか……杏がやったらどうだ？ほら、おまえよくボタンをキャッチしてるじゃないか」
「あの仔とサッカー部のシュートを一緒にしないでよ！あんた、か弱い女の子にキーパーやらせる気？」
「誰がか弱い女の子なんだよ……」
「何か言った？」
「ああ、いや……じゃあ、智代。おまえなら適任だ！」
「おまえは杏が言った事を聞いていなかったのか？キーパーはか弱い女の子がやる物じゃないんだ」
いやいやいや……。
今、智代さんの中で情報が誤変換されました。
「じゃあ……俺か？いや、でも俺も……」

言葉を濁した岡崎さんは、腕を組んで逡巡しながら左手で右肩少しさすった。

そうだ……岡崎さんも昔右肩を痛めたと聞いている。

女性陣にやらせるのは気が引けるし、かと言って俺がやったら意味が無い。

正直、春原さんで最後までいきたかったと言うのが本音だ。

優れた運動神経とサッカーに対する経験と知識、そして何よりボールや相手を恐れないガッツ。

春原さん以上に適任者は居らず、彼がキーパーなら“あえて打たせる”と言う選択肢が増え、守備にかなり余裕が出来る。

実際ここまでサッカー部相手に完封出来ているのも、半ば彼のおかげだ。

だが、ここまで頭に血が上っていては、なだめすかすのはもう無理だろう。

「……やっぱ、俺がやるしかねえか」

観念したように岡崎さんが言った。

俺も消去法でそれしかないとは思っていたが、その前に確認しておくべき事を忘れてはならない。

「岡崎がキーパーだな？」

「待ってください。その前に、ＰＫは無しですよね？」

「えっ……？いや……」

「そうだった。どうなんだ審判？」

「それは……」

「何言ってやがる。判定が覆る訳ねえだろうが」

後一歩で押し切れそうな所で、またしても相手キャプテンが加勢してくる。

「ふざけんなよ！ポジションチェンジは今行われてるんだから、ハンドな訳ねえだろ！！」

「知るか！審判がハンドつったらハンドなんだよ！おい審判、メンドクセーからこいつら退場させちまえ」

「ほら、命令してんじゃない！大体、サッカー部から審判出してる事自体おかしいのよ！」
「何言ってんだ。お前等が何も言わねえから、仕方なくこっちが出してやったんだろうが。文句言うなら、審判やれる奴連れてこいよ」
「なるほど、じゃあこちらから出せば審判を代えていい訳だな」
「それなら、ことみ！おまえルールくらいなら……」
「但し、ルールだけ知ってれば誰でもいいって訳じゃねえ。最低でもサッカー経験者な。でないと、円滑な試合にならねえだろ」
物知りな一ノ瀬さんを呼ぼうとした岡崎さんの言葉を、キャプテンがドヤ顔で遮る。
むかつくが至って正論だ。
そして当然、こちらにそんな人間が居ない事を知っているから言った台詞でもある。
連れてこれるなら連れてきてみろ。なんなら春原か川上がやってもいいぞ。
と、思っているんだろうが……、悪いがここでトラップカード発動だ！
「それなら俺がやろう」
背後からの声に一同が振り返る。
そこに居たのは……やや痩身だが程よく筋肉質、いわゆる“細マッチョ”な見知らぬ男だった。
「お、お前は……小笠原！」
驚愕したキャプテンの顔がみるみる青ざめていく。
そう、何しろこいつこそ用意させておいた切り札の……誰だろう？
「報道部からも推薦で～す。サッカーのクラブチームに所属していてぇ、フットサルの審判資格もお持ちの小笠原先輩なら、的確で中立なジャッジをしていただけると思いますぅ」
小笠原？先輩を連れてきた眼鏡っ子・門倉がすかさず説明してくれた。

「知ってる奴か春原？」
「ああ。あいつもサッカー部のやり方に嫌気がさして辞めた口だよ……」
そう答えた春原さんの言葉に、若干感傷の色が混じっている気がした。
「オーキ、おまえが連れてきてくれたのか？」
「探してきたのは門倉だ」
「そうか……さすがオーキだ！」
「へえ、あんたやるじゃない！これで文句無いわよね？そこの彼と審判交代って事で」
門倉だと言ってるのに、智代もみならず杏さんにまで感心され、かゆくなった頭を掻く。
試合を中止出来ない以上、こんな事くらいしか出来なかった訳だが……まあ、念には念を入れておいて正解だったな。
しかし、サッカー部がこれで簡単に納得するはずがない。
「待てよ！誰が審判代えていいっつったよ？」
「あんたが今得意顔で言ったじゃない！自分で言った事も覚えてない訳？」
「連れてこいとは言ったが、代えるとは言ってねえな」
「バッカじゃないの？さっきから子供みたいな屁理屈ばかり言ってて、あんた恥ずかしくないの？」
「ダセエぞサッカー部！」
「ここのサッカー部マジイケてないよね」
「汚ねえ事ばかりしてないで、ちゃんと試合やれよサッカー部！」
杏さんの『子供か？』発言に触発されたか、ついに観客達によるブーイングの大合唱が巻き起こった。
「さすがにこれはマズイっすよ……」
「審判くらい、代えてやってもいいんじゃないかキャプテン？」
これにはサッカー部員達もビビってひより、情けない顔でキャプテンに懇願を始める。

「ちっ……いいだろう。でも、ＰＫは審判が代わる前の判定だからな」
「何でそうなるんだよ！？」
「嫌ならいいんだぜ？そのかわり、審判の交代も無しだ」
この状況でなお二者択一にしてくるとは……まったくしぶとい。
こういうのも負けず嫌いと言うのだろうか？
「あんな事言ってるが、どうする？」
「決まってるだろ！審判も代えるし、ＰＫもなしだ！」
「そりゃあ、それが一番だろうけど、あっちも意固地になってて引きそうにないのよね……」
「ＰＫと言うのはキーパーと１対１の勝負の事だろ？それならＰＫの方がまだマシじゃないか？審判が相手の味方のままでは、何でもかんでも反則にされてしまって勝つのは無理だ」
「やっぱり、それしかないか……要は春原がＰＫを止めればいいんだしな！」
「って、僕かよ！……まあ、僕がやるしかなさそうだけどさ……ＰＫなんてそう止められるもんじゃないんだよね……」
「でも、止めたら点を取ったのと同じかそれ以上のヒーローだぜ？ギャラリーの女子達の視線はおまえに釘付けだ！」
「やっぱそうかな？さっきの天使ちゃんも、益々僕のファンに？」
「ああ、もうメロメロだぜ！」
「メロメロ！？じゃ、じゃあ、そのまま告白されちゃったりするかも！？」
「ああ、“かも”な！」
「ふっ……ふふっ……みんな、ここはこのスーパー・グレート・デリシャス・ワンダフル・ゴールデン・サドンデス・キーパー・春原に任せろ！」
相棒の岡崎さんに乗せられサドンデス春原さんのやる気ＭＡＸ！になった事で、俺達の選択肢は決まった。
かに思えたのだが、ＰＫ前にもう一悶着起こる。

小笠原さんが審判をする代わりにＰＫを飲むと、やつらはＰＫの１プレイ後に審判を交代すると言ってきたのだ。
まあ、それぐらいならと先輩達は受けてしまったのだが、そこには卑劣な罠が潜んでいた。
「待てよ。キーパーは春原じゃなくて岡崎に代わったんだろ？なんで春原がゴールに入るんだよ？」
春原さんとキッカーであるキャプテンが対峙すると、またもや難癖をつけてくる。
「このＰＫだけ僕が止める。交代はその後だ」
「はあ？交代つっといて、１プレイもしない内にまた交代とか有り得なくね？」
「何がだよ！？別に何度ポジションチェンジしたって問題なんて無いだろ！！」
「ダメだね。審判が受理して交代は成立したんだ。そんなキーパーがころころ代わる事が許されたら、全員キーパーになっちまうだろ」
「別にプレイ中でもキーパーの交代は認められている。春原がキーパーで問題無い」
「てめえはまだ審判じゃねえんだから黙ってろよ！ＰＫのキーパーは岡崎以外認めねえ！」
正しいルールを語る小笠原さんの言葉すらはね付け、もはや完全に自分が“ジャッジメント”になっていた。
「てめえ……いい加減にしろよ！！」
「落ち着け春原！……俺がキーパーなら文句無いんだな？」
今にも殴りかかりに行きそうだった春原さんを制止し、名指しされた岡崎さんがゴールに向かう。
「岡崎……」
「任せろ春原……あんな奴らになんざ負けねえよ」
「僕のメロメロ取る気だな！！おまえには渚ちゃんが居るだろ！？」

「いや……別に取る気ねえから……安心してくれ」
グローブとキーパーのビブスを交換し、岡崎さんがゴールについた。
「岡崎さん！」
俺は彼のを呼び、無言で力こぶを見せるように肘をL字に曲げて右腕を上げ、左手で右肩を叩きつつ右手を開いたり閉じたりして見せる。
すると彼もまた無言で頷いた。
伝わっただろうか？
いや、伝わっても、はたして止められるか……。

ピッー！

この場に居る全ての視線が注がれた緊張の一瞬。
数歩の助走から、キャプテンがボールを蹴った。

カッ！

ふわりと蹴られたボールは、威力よりもコントロールを重視された物であり、正確にゴール右上部に飛んでいく。
当然だろう。岡崎さんの肩の事を知っていれば、誰でもそこを狙う。
岡崎さんもそれを読んでいて右に動いていたものの、やはり右腕が上がらない。
左手でも無理だろう。
このままでは、ゴールが決まってしまう！
「くっ、動け！動きやがれえぇえぇえぇえっ！！！」
あのクールな岡崎さんが雄叫びを上げた。
懸命に伸ばした右腕がギリギリ届き、ボールを弾く。
もしシュートに威力があったなら、そのまま持ってかれていただ

ろう。
そのまま岡崎さんはどうっと倒れた。
だがしかし、まだボールはゴール前に転がっている。
「クソッ！！」
それを詰めに中野、荒川、そしてシュートを外したキャプテンがスライディングでボールに殺到する。

ガキッドガガッ！！！

一番早かった荒川のシュートを俺がブロック！
だがその直後、キャプテンのスパイクが俺の脛に入り、中野もボールを奪おうと掻き出しにくる。
岡崎さんが無理を推して守ってくれたゴール……、
「うおおおおおおおおおっ！！」
俺がここで負ける訳にはいかねえんだよ！！
その三人ごと強引にボールを押し込み、右足を振りぬいた！
そしてそのボールは、前線に残らせた智代の下に。
「決めろ！！智代！！」
俺の言葉に頷いて、坂上智代が発進する。
敵のディフェンスは追いつけず、キーパーと1対1。
にもかかわらず、最も厄介な審判の笛は無い。
智代のシュートは枠に飛ばないと思っているのか、キーパーもやや引きつりながらも余裕の笑みを浮かべる。
だが、

ドォンッ！！

「へぷっ！？」

ドシャァァァァァッ！！

智代の放った強烈なシュートは、なんと相手キーパーの顔面を直撃！！

不意に近い形でそれを食らったキーパーは、そのままゴールの中に吹っ飛ぶ！！

そしてボールは……、

カッ！

ゴールバーに当たって……惜しくもゴールの前に転がる。

「もらったぁ！！」

ボスッ！

それを目聡く狙っていた金色のハイエナが押し込んだ！

第二章　4月30日　サッカー部く春原

「いやっほぉ～～～～～っ！！ぽうっ！！」
きっちりごっつあんを決めた春原さんは、さっそく観客達に某ジャクソンらしきダンスを披露する。
だがしかし、ゴールを告げるホイッスルはまだ鳴らされていない。
「審判、笛を」
「えっ……！？い、いや……」
呆けていた審判を促すも、何とか言い訳を捻り出そうとしているのか、一行に笛を吹こうとはしなかった。
だが、頼みのキャプテンは倒れたままだ。

ピッピーーー！

見かねたように小笠原先輩が代わり笛を吹いた事で、ようやくゴールが正式に認められる。
「な、何勝手に吹いてんだ！？今のは完全に反則だろうが！」
上体を起こしたキャプテンが、顔をしかめながらそれに抗議する。
まだ足を押さえている事から、どうやらブラフではなく本当にどこか痛めたらしい。
それに対し、小笠原さんもまた憮然として答える。
「ああ、お前がな。わざと足狙いやがって、一発レッドもんのファールだ」
「てめえはまだ審判じゃねえだろうが！そもそも、部外者がしゃしゃり出てくんじゃねえ！」
「あん？ざけんなてめえ。お前らが審判すらまともにやれねえって言うから、わざわざ俺が呼ばれたんだろうが。恥ずかしい試合しやがって。謝れ！全世界のサッカー愛好者全てに謝れ！」
力関係的に対等か、あるいは小笠原さんの方が上なのか、部内で

は独裁者であるキャプテンがボロクソ言われていた。
雰囲気的に実力は小笠原さんの方が上っぽくもある。
「うだうだ言ってる間に、怪我の治療した方がいいぞ。あっちでキーパーのびてるし」
そう、今はそれが何より先決だ。
智代のシュートを顔面に受けた相手のキーパーだけでなく、俺に吹っ飛ばされた荒川も足を押さえて立ち上がれず、そしてこちらも、岡崎さんが肩を押さえてうずくまっているのだから。
「朋也！！」
「岡崎、平気か！？」
心配して杏さんと智代が岡崎さんに駆け寄る。
「くっ……、大丈夫だ……つぅっ！」
「ちっとも大丈夫そうじゃないじゃない！」
「無理をするな」
「宮沢、資料室から救急箱持ってきてくれ！」
「用意してあります！」
治療の為に宮沢を呼び、入っていいのか迷っているようだった渚さん達にも手招きした。
マズイな……これは最悪の事態も有り得る。
「朋也くん、大丈夫ですか！？」
「朋也くん、どこか痛いの？」
「大丈夫だ……！」
群がる女子達に精一杯強がって見せているが、脂汗がにじんでいてちっとも説得力が無い。
「コールドスプレーです」
「ああ、すまない宮沢」
救急箱を持った宮沢が到着し、とりあえず患部にスプレーをかける。
治療は彼女に任せるとして……問題は岡崎さんが続けられるかどうかだが……。

「どうだ？そっちはいけそうか？」
小笠原さんが様子をうかがいに来る。
サッカー部は荒川とキーパーが交代するのか外に出され、キャプテンも足を治療していた。
しかしあちらと違い、こっちには交代要員は居ない。
「あまり治療に時間がかかるようなら、交代するか、一人少ない状況で試合を始めるか？」
「だ、大丈夫だ……出られる……くぅっ！」
「ダメです！朋也くん無理をしないで下さい」
「そうですね。暫くは安静にしていた方がいいと思います」
「じゃあ、交代した方がいいな。誰が入る？」
審判の問いに、渚さん達は一度互いの顔を見合わせたが、
「わ、わたしが朋也くんの代わりに出ます！」
「私も、痛そうな朋也くんの代わりに出るの」
「あ、あの、私もあまり運動は得意じゃないですが、岡崎君の治療する間くらいなら……」
それで示し合わせたかのように三人同時に申し出てくれた。
だが、
「いや……おまえら運動苦手なんだろ？あいつらかなり荒っぽいし、任せるわけには……」
やはり岡崎さんが承諾しない。俺も不安だ。
「じゃあ、わたしが出ます！これでも運動は得意ですし、サッカーもお兄ちゃんの練習によく付き合ってました」
「わたしも、出られます。得意と言うほどではありませんが、いないよりマシだと思います」
「芽衣ちゃんは中学生だろ。怪我しちまうって。宮沢は……」
「宮沢もダメだ。“奴等”がこんな試合見てたら、絶対乱入してくる」
岡崎さんに代わって俺が宮沢を却下する。
わかってはいたが、代わりになれる人材がいない。

「やっぱ俺が出るしかねえだろ……？」
「でも……」
痛みに耐えながら無理にでも岡崎さんは立ち上がろうとする。
それ以外無いか……。
最悪の事態に歯噛みした、その時だった！
「風子……参上！！」
一陣のつむじ風が巻いたかと思うと、忽然とちっこい少女が現れたのだ。
突き上げた手に何か木彫りの星？のような物を持っている。
どこかで見た覚えがあるような……無いような……。
「岡崎さん、お困りのようですね。ここは風子に任せて下さい！」
「……おまえサッカー出来るのか？」
「当然です！これでも風子、『チョットアレミナ、エースガトール、スグレモノゾ』と、町中を騒がせてます！風子の噂で“チャンバ”も走ります！！」
「ちゃんばって何だよ？」
「仕方ありませんね。そこまで言うなら、風子の実力を見せてあげましょう！」
「だから、ちゃんば何だよ！？」
岡崎さんの執拗なつっこみを無視し、女の子は少し下がってボールも持たずに実演を始めた。
「ヒトデ・シュート！！ヒトデを相手に投げて、キーパーがそれを拾ってる間にシュートを決めます！」
「ヒトデ・タックル～！！ヒトデを相手に投げて、相手がヒトデに気を取られてる隙にボールを奪います！」
「ヒトデ・ブロック～！！シュートを打たれそうな所にこの可愛いヒトデを仕掛けておき、相手をほわ～んとさせて点を取ろうとする気を無くします！そう、こんな感じに……」
ヒトデを抱きしめた女の子は、ほわ～んを実演してくれる。
まったくどうでもいいんだが……。

「試合に余計な物の持込は禁止だから。その木のやつ没収な」
「……風子もう帰ってもいいですか？」
「どうぞ」
審判の的確なダメ出しの前に、存在も言動も謎の少女は風とともに去っていった。
一体何だったんだ……？
「……で、どうするんだ？」
「だから、俺が出るしかねえんだって……」
「待って！あたしが出るわ！」
今度は誰だ！？
やれやれといった感じで期待せず振り返ったが、そこに立っていた少女に暫し目を奪われる。
金色の翼を広げた……ブルマな天使。
いつの間に着替えたのか既に体操着姿で、足元にはどっからか調達してきたサッカーボール、やる気満々以外の何物でもない朱鷺戸沙耶がそこには居た。
「えっと……おまえはさっきの……？」
「『岬太郎』よ！」
えええ～～！？
そう名乗ったかと思うと、岬くん？は足元のボールを器用に浮かせ、リフティングをはじめる。
「親の都合で子供の頃から世界各地を転々としてきたから、何処でも誰とでも友達になれるサッカーはわりと得意なの。普通の子よりは戦力になれると思うわよ」
キャプつばの岬くんチックな過去を語りながら、頭、肩、そして上体を前に倒して首の後ろに一度ボールを収め、跳ね上げて再びリフティングを続ける上級テクを朱鷺戸は披露して見せた。
やべえ……マジで俺より全然上手い。
「わあ、岬さん凄く上手です！！」
「へえ～、言うだけの事はあるわね……！」

「でも、太郎と言うのは変じゃないか？どう見ても女の子じゃないか」
「太郎よ！ねえ、オーキ君？」
空気を読まない智代の無邪気過ぎる疑問に、朱鷺戸はノリで堂々と嘘をつき、妖艶な視線で片棒を担ぐ事を求めてくる。
このアマ……どうしてくれよう？
「太郎だ。実はこいつ男なんだ」
「へっ……！？え、ええ、そうよ！」
俺もノッて断言してやると、そこまでは予想外だったのか岬くんの表情が一瞬引きつったが何とか持ち直す。
「そんな訳あるか！おっぱいだってちゃんと有るじゃないか！」
「これは……偽ぱいよ！」
「偽ぱい？偽物って事か？」
「そうよね！いくらなんでも、世の中胸が大きい子ばかりじゃないわよね！」
何故か杏さんが偽ぱいに食いついた！
渚さんや妹さんも胸の辺りを気にしてか引っ張ったりしている。
でも、残念ながら多分本物です……。
「体操服だって女物じゃないか。もし本当に男だとしたら、変態だな！」
「うぅ……！」
「だから何だ？女装する男子、いわゆる“男の娘”は最近流行りなんだぞ。お前はその程度の個人的趣味で、人を差別するのか？」
“変態”呼ばわりに怯む朱鷺戸を、すかさず援護射撃。
すると智代は、益々むきになってこちらに詰め寄ってきた。
「どうしておまえがこいつの味方をするんだ！？大体、おまえたちは一体どういう関係なんだ！？まさか、おまえも本当は男が好きなのか！？」
「そうだ……と、言ったら？」

ズーーーーーン！！

智代は膝から崩れ落ちた。

本当に冗談の通じない奴だな……。

まあ、今の内に話を進めるとしよう。

「……で、結局どうすんだ？早く決めてくれ」

「ああ……岡崎さん、こいつでいいですか？」

「そうだな。そいつなら俺より戦力になりそうだ。えっと……岬……だっけか？頼んだぜ！」

「ええ」

こうして名誉の負傷をした岡崎さんは、渚さん達に連れられコートを後にした。

「あれ？岡崎交代すんの？うひょっ、天使ちゃん！！何故ここに！？」

「岡崎先輩が怪我したみたいなんで交代しました。よろしくお願いしますね、先輩！」

「マジで！？フッ……僕のより近くでカレーでフランケンなプレイを見たいって事だね！！」

「ふらんけん？え、ええ……」

春原オンステージから戻ってきた春原さんは、どうやら岬くんの件は聞いていなかった様だ。

まあ、ここは彼のモチベーションを下げない為にも、黙っていた方がいいだろう。

後は……、

「杏さん、キーパーなんですが……」

「ん？ああ、ＯＫ！あたしがやるわ」

「すいません」

「ま、正直そろそろ走り回るのしんどくなってきてたしね。それにちょっとやってみたい事もあるし」

「なるべく打たせませんので」

岡崎さんの負傷で覚悟していてくれてたのか、杏さんはすんなり承諾してくれた。
残る問題は……いまだに四つん這いのままぶつぶつ言ってるこの娘か。
「ほら、立て。試合始まるぞ」
右手を差出ながら、耳元でたしなめる。
「オーキは……男が好きだったのか……だから最近私に冷たいのか……!?」
「いい加減にしないと、揉むぞ!」
「揉むな!!」
腕を掴みながらようやく上がった顔が、間近で俺を睨み付ける。
まったく、こいつは……。
その可愛さにあてられ、耐えられそうにないので腕を引っ張り半ば強引に立たせた。
「お前は、男が好きなのか?」
「んな訳ねえだろ。冗談くらいわかる様になれ」
「じゃあ、あいつとは一体どういう関係なんだ?随分と親しそうじゃないか」
「ただのダチだ。始まるぞ。試合に集中しろ」

ピーーーッ!

背中を押した所で、それを待っていたように試合が再開する。
サッカー部からのキックオフ。
どうやらあちらも荒川とキーパーが下がり、三年の7番と正キーパーに代わった様だ。
残念ながらキャプテンは大した事なかったらしく、引き続き出てきている。
「見ててくれ天使ちゃん!!」
春原さんが猛然とボールを取りに向かう。

って、しまった!!
「へっ!?」
前半の時と同様、普通にパスを回され、あっさり春原さんは抜かれてしまった。
「パス出すなんて卑怯だぞ!!」
まずいな……ごたごたしてて、色々と調整出来ていない。
前線に智代と春原さんが行ってしまい、守備人員が足りない状態だ。
てか、春原さん浮かれ過ぎだろ!少し調子に乗せ過ぎたか?
「智代、戻れ!」
ひとまず前線の智代を呼び戻すも、攻め手は3人、こちらは俺と朱鷺戸の二人。
ここは攻勢を少しでも遅らせて、智代が戻るのを待つべきか……。
って、あれ?朱鷺戸は?
近くに居たはずの朱鷺戸の姿が無い。
一瞬目を離した隙に……こんな時に何処行った!?
「もらうわね!」
「えっ!?」
「なっ!?」
ようやくその姿を発見出来たのは、朱鷺戸が相手からボールを奪った瞬間だった。
何だ今のは……?
この俺が、彼女の動きを把握出来なかった?
いや、俺だけでなく、ボールを奪われた相手もほとんど何も抵抗する事なく、そう、まるで朱鷺戸の接近に気付いていなかったかのような感じだった。
まさか……ひょっとしてあいつは……マジ岬くん!?
「坂上さん」
朱鷺戸から戻ろうとしていた智代にパスが通った。
そのまま智代はノーマークでライン際を上がっていく。

「智代ちゃん、パスだ！」
中央に走りこむ春原さんがセンタリングを要請する。
まさに絶好のチャンス。
いや、ダメだ！
「智代、直接打て！！」
前半幾度も繰り返された光景が脳裏をよぎり、俺は叫ぶ。
マークを連れた春原さんに対し、智代は角度はある物のノーマーク。
何より、もう智代のシュートはゴールの枠（相手キーパーの顔面）に行くのだ。
ここは直接打たせるべきだろう。
そして、跳ね返った所をまた春原さんがごっつあんすれば……いける！
勝利を確信し、思わず拳を握る。
この二人が居れば、例えこれで点が入らなくても同点ゴールは時間の問題だ。
俺の指示通り、ゴールだけを見据え智代がシュート体勢に入る。

ボンッ！！

智代の人間離れしたバネから放たれる、弾丸シュート……が真横に飛んだ！？

ベコッ！！

「ふごっ！？」
そして正確に春原さんの横っ面に直撃！！
跳ね返ったボールは……ゴールの枠を大きく外れていった……。
……ええっ！？
何で！？どう蹴ったら真横に飛ぶの！？

「どこ蹴ってんだよ、このノーコン！！」
「今のはパスだ！おまえがパスを出せと言ったから出してやったのに、何をやってるんだ！！」
そして再び言い争いを始める二人。
ハ……ハハッ……。
どうやら、まだ楽には勝たしてくれないらしい……。

第二章　４月３０日　伝説の少女の伝説

奇跡？の直角シュートについて色々問い詰めたいところだったが、すぐさま気持ちを切り替えリスタートに備える。
コートの狭いフットサルにおいては、例えボールが相手キーパーの手にあろうと気は抜けない。
いや、むしろ相手のチャンスだと言っても過言ではないだろう。
特に今、こちらの守備陣は元々の弱点が殊更顕著になってしまっている。
空中戦だ。
岡崎さんと春原さんが抜けた穴を、俺一人でカバーするのは不可能。
仮に俺が競り合いに勝てたとしても、その後に大きな隙が出来てしまう。
こぼれ球を拾われれば即失点に繋がりかねないリスクを考えると、制空権は半ば放棄すべきかもしれない。
予想通り、キーパーはロングスローを投げ込んできた。
ボールは一気にこちらの領空を侵犯し、狙いは俺のいる中央を避けた左サイドの深部。
そこに走りこむエースの中野。
だが、その背後をかすめるようにして、鳥影が飛翔する。
「おおっ！！」
思わず発した唸りが観客とハモる。
まるで翼の如く広げた長い髪で揚力でも得ているかの様に、やたら対空時間の長い跳躍で朱鷺戸はボールを撃墜してのけたのだ。
「ナイスヘッド！」
シュタッと着地を決めた朱鷺戸は親指を立て男前な笑顔で応える。
こいつ、空中戦も出来るんか！
ヘッドに躊躇も無いし、やたら飛んだし……やはりマジ岬くん！？

「ナイスだ天使ちゃん！」
そのボールは春原さんが拾うも、直ぐに7番にチェックされ再びこぼれ球に。
それをいち早く朱鷺戸がフォローするも、その前にはキャプテンが立ちはだかる。
一回り以上違う体格差。
更に、この男の今までの所業を見れば、『女性に手荒い真似は出来ない』などと言う紳士的人間性を持ち合わせていない事は明白である。
平気で体をぶつけてくるだろうし、そうなれば如何に岬くんのテクを持つ朱鷺戸でもひとたまりも有るまい。
にもかかわらず、朱鷺戸はフェイントを入れ果敢にキャプテンを抜きにかかった。
「坂上さん！」
と見せかけ、朱鷺戸はノールックで逆サイドの智代にパスを出した。
うまい！
が、うま過ぎて智代も自分に来ると思っていなかったのか、棒立ちで受けてしまう。
その隙に、キャプテンのそのまた一回りデカイ巨漢の4番がシュートコースを塞ぎながら迫る。
「かまわん！！打て！」

ドガァァァァンッ！！

智代の放った強烈なシュートが至近距離で4番のどてっぱらに炸裂！！
「ムッ！？」
だがしかし、眉をひそめたのは智代の方だった。
4番は智代の殺人シュートを受けても微動だにせず、完全にブロ

ックして見せたのだ。
「なるほど。とんでもねえシュートだ……お前本当に女か？」
「なにっ！？」
少し腹をさすりながら出された４番のパスは、横の７番を経由して前線の中野に渡る。
左サイドでフリーの中野。
俺はそれと距離をとって対峙する形をとる。
交錯する視線。
俺は城。
俺は石垣。
俺は堀。
幾重にも築かれた万里の城塞の如く泰然と待ち構え、その目に問う。
『貴様はこの壁を、何処まで越えられるか？』と。
「くっ！」
数瞬足を止めていた中野は、攻めあぐね７番に戻す。
「もらったー！」
威勢よくボールを取りにいった春原さんは余裕ですかされ、７番がそのまま上がってくる。
あの人ホント守備下手だな！
キャプテンには朱鷺戸がマークについてるが、７番と中野は俺が抑える他ない。
２対１。
敵の攻撃を少しでも遅らせるべく、７番と一定の距離を保ちつつじりじりと後退し牽制する。
ダッ！
サイドに開いていた中野が、俺の背後をとるように中央に入り込んでくる。

それと同時に、7番は左側に斬り込んできた。
「くっ！」
これも想定の範疇。
とは言え、止めるのは至難。
7番を止めにいけば中野に出される。
だが、放置すればそのままシュートを打たれてしまう。
求められるのは、絶妙なバランスとタイミング、そして忍耐。
呼吸を読め。
パスとシュートどちらにも反応出来る位置取りをしつつ、ぎりぎり振り切られないスピードで7番を外に追いやる。

カッ！

7番がヒールでバックパス。
それを回り込んだ中野が、振り向き様にシュートを放つ。
俺は反転し足を伸ばすも、届かない。

バシッ！！

しかし杏さんが軽く横に跳びながらガッチリと正面でキャッチ！
「ナイスキャッチ！！」
コースを限定してほぼ正面に打たせたとは言え、かなり威力はあった。
それをきっちり捕ってくれるとは……。
これは、もう少し打たせても平気かもしれない。
「これでもドッジボールは得意だったのよね。さあ、反撃よ！陽平！」
「えっ！？」
などと感心している場合ではなかった。
俺がパスを要求するより早く、杏さんはそのまま助走をつけ、ダ

イナミックなオーバースローでボールを投げてしまったのだ。

ビュン！

放たれたのは、スレンダーな少女の身体にとても似つかわしくない剛速球。

その威力にサッカー部も唖然として弾道を目で追うのみ。

「へっ！？」

ズドォォォォォォン！！

そしてそれは、見事に振り返った春原さんの顔面を直撃した！！

どうしてあの人は味方のシュートやパスばっか顔面ブロックするんだろう……？

まあ、いきなりやっちゃう杏さんも杏さんだが……。

せめて事前に教えてくれてれば、ここぞと言う場面で奇襲に使えた物を……。

「ちょっと、ぼ～っとしてんじゃないわよ！！」

「おまえは勝つ気が無いのか！？」

跳ね返ったボールを智代が拾う。

だが、

ドドドドドドドドドド！！

闘牛の如き勢いで、敵の４番が肩から突っ込んでくる。

「！！」

反射的に智代は飛び退くも、ボールが置き去りに。

あそこでボールも一緒にかわすか、ファールを誘えると一気にチャンスになるんだがな……。

まあ、そこは仕方がない。
それよりも、あの４番かなり厄介だ。
スピードは無いが常に下がり目の位置に居り、巨体を活かしたパワーディフェンスで智代を抑えこんでいる。
いや、あんなワンパターン、止められて当然ではあるんだが。
春原～智代ラインが死んでいて、変化のつけようが無いのが痛過ぎる。
何か策を講じるべきなんだろうが……。
動かそうにも駒が無い。
あるいは岬くん……朱鷺戸を前に上げてみたくはあるが、彼女が居ないと守備が崩壊しかねんし。
ここは二人を信じて賭ける他ないか……。
……春原さんキーパーやってくれんかな？

結局、一点ビハインドのまま時間ばかりが刻々と過ぎていった。
智代と春原さんのコンビは機能する事はなく、智代のシュートは春原さんの顔面か４番に阻まれ、それに業を煮やしたのか春原さんは智代にパスを出さなくなり、単独での突破をしかけては潰される悪循環。
こちらも相手の攻撃を何とか水際で防げてはいるが、攻められっぱなしな上に攻撃も不発じゃ、体力的にも精神的にもかなりキツイ。
「主審、タイムを」

ピッ！

残り時間的にも頃合と見て、誰かが限界を迎える前にタイムをとった。
フットサルでは試合中のタイムが前後半一度だけ使えるのだ。

岡崎さんの事もあるので、渚さん達演劇部応援組のもとに集まる。
「朋也、怪我はどう？」
「ああ、おかげで大分楽になった」
見た所治療は終わってる様だが……岡崎さんを戦力として期待するのは厳しいだろう。
審判が代わったとは言え、女子に対してのラフプレーは多少厳しいが、男同士の場合はあからさまな反則以外は基本流しで、サッカー部のプレイは依然荒っぽい。
いや、高校レベルならこれぐらいのパワープレイは当然であり、その点で小笠原さんのジャッジは極めて中立と言える。
怪我が悪化するかもしれないし、岡崎さんも無理をしてまで出ようという気は無さそうだ。
「おにいちゃん、もっとしっかりしなよ！おにいちゃんが何とかしないでどうするの！？」
「仕方ないだろ？あちらさんもエースの僕を警戒して、マークがきついんだよ！」
「そんなの当たり前でしょ！それでも点を取るのが真のエーストライカーだって、中学の頃言ってたじゃない！」
「うっ……」
「陽平、あの守備は何？真面目にやりなさいよね！ただ突っ込んでいくだけで、取れる訳ないじゃない！」
「ボールも取られ過ぎだ！せっかくみんながパスを出してやってるのに、おまえはボールを取られてばかりじゃないか！」
「あんたからは、まともなパス一本もありませんけどね！」
やはりと言うか何と言うか、春原さんに非難が集中する。
ブランクと相手の春原さんへの執着を考えれば仕方無いのかもしれんが……俺としてももうちょい頑張ってもらいたいところだ。
「朱鷺戸、疲れてないか？」
「ええ。途中からだし、まだまだ余裕有るわよ」
俺と同じく演劇部の輪から離れていた朱鷺戸に労いの声をかける

と、おどけたガッツポーズで応えてくれる。
その仕草の可愛さもさる事ながら、その……ぷるんと揺れた物に思わず目を奪われてしまった。
いかん……！
「そうか……その調子でよろしく頼む」
「了解ボス！」
邪まな視線と照れを誤魔化すべく、もっともらしい事を言いながら皆の方に顔を向けると、智代の白眼と目が合う。
まったくあいつは……。
ちょいちょいと手招きすると、ムスッとしたまま寄ってくる。
「何やってんだお前は？」
「何って……仕方ないじゃないか。あの大きくて失礼な奴がいつも私の前に居るんだ」
「それだけじゃないだろ……どうして春原さんにぶつけんだよ？狙うなら相手のキーパー狙えつったろ？」
「あいつの顔が視界にあると、ついそっちの方にぶつけたくなるんだ」
「……お前、春原さんが好きなのか？」
「そんな訳が有るか！！嫌いだからに決まってるだろ！！冗談でも気持ちが悪い事を言うな！！」
獲物に襲い掛かる時の勢いでくま代は俺の体操服の襟首を掴み、がくがくと前後に揺すって嫌悪感と怒りをアピールしてくる。
そこまで春原さんが嫌なのか……。
「そういうおまえこそ……そ、その子の事をどう思っているんだ？」
「はあ？」
そしてそれがようやく止んだかと思うと、襟首を掴んだまま必死な眼差しでアホな事を訊いてくる。
「あのな、こんな事やってる場合じゃないだろ？」
「おまえがはじめに春原が好きなのかとか訊いてきたんじゃない

か！それに答えたんだから、今度は私が訊く番だ！」
「意味が全然違うだろうが……」
ただの皮肉とマジな問いを一緒にされても困る。
てか、せめて本人が居ないとこで訊けよ！朱鷺戸だって困るだろ？
そう思いながらチラリと朱鷺戸の表情をうかがうと、その視線に気付いた彼女はさらりと言った。
「あたしはオーキ君の事好きよ」
なんだってえ！？
ギョッとして智代の顔も跳ね上がる。
そこにあったのは涼しげな余裕の笑み。
ああ、なんだ、やっぱりからかっただけなんだろ？
なんてね！っとかきっと言ってくれるはず……、
「って、何告ってんだあたしはあぁぁぁあああ～～～～～～～～～！？」
と思ったのに、いきなり叫んで目茶苦茶取り乱し始めたぁぁぁっ！！
「うわ～～～！！ふぎ～～～！！クケケ～～～！！どうしよ！？どうすんのよ！？はっ！！こうなったら恥ずかしいギャグをやってバランスをとるしか！！」
発狂でもしたかのように奇声を発しながら何やらぶつぶつ言ったかと思うと、朱鷺戸は左腕を上げて右手で脇を隠すような構えをとる。
ま、まさかその構えは……！？
「あ～ん、どどすこすこすこ、どどすこすこすこ、どどすこすこすこ、ラブ注入！」
くねくねと踊りながら、最後に両手でハートを作ってウインクしながら俺に注入してくる。
確かに可愛いが、こっちはむしろ心配方面でハラハラドキドキだ。
「って、更に注入してどうするんじゃゴルアアアアアアアアア！！」

やっぱり墓穴だったよ！頭抱えて錯乱しだした～～～～～！！
と、兎に角なだめなければ……おもいっきり周りに注目されちゃってるし。
両肩に手を置いて暴れるのを抑え呼びかける。
「落ち着け！落ち着け朱鷺戸！！」
「ダメよ！ダメなのよ！！何か奇行をやって相殺しなければ……！！」
いや、何を！？
「大丈夫だ！！お前はもう十分変だから……もう、これぐらいにしておけ！」
「ううう……本当、お兄ちゃん……？」
何でお兄ちゃん？
理解の範疇を5段階くらい超えてるが、とりあえず肯定してやる他ない。
「ああ……お前程変な女は、そうは居ないだろう」
「はあはあ……そう……ふっ、そうよね……」
何か解らんが納得して落ち着いたようで、何事もなかったかのように澄ました仕草で顔にかかった髪を払う。
そして唖然としていた智代に対し、挑発的な笑みで人差し指を突きつけた。
「じゃあ坂上さん、どっちが先に点を取るか勝負よ！」
いやいやいや、何だその脈絡の無い超展開！？
「……いいだろう！その勝負、受けてたってやる！」
ええっ！！受けてたっちゃうの！？
俺には何だかさっぱりだが、こいつらの間ではそれで通じているのか、にらみ合う二人の間には火花が散っていた。
ま、まあ、これで二人のモチベが上がるなら良いか……。
ピーーー！

こうして、まったく作戦とか話し合う間も無くタイムは終了！
相手のキックインで試合は再会したのだが……直ぐに相手の雰囲気の変化に気付く。
面子が変わった訳では無いが、明かに先程までの攻めの気迫が感じられず、安全にパスを回すだけで仕掛けてこない。
残り時間は5分を切っている。
大差をつけて勝つ事を諦め、このまま一点差での逃げ切り狙いに切り替えてきたか。
「どうやら“鳥かご”みたいね……」
朱鷺戸も気付いたらしくキャプつば用語をつぶやく。
安全にパスを回して時間を稼ぎつつ、焦って隙を見せれば追加点を狙ってくる。
プロや代表の世界でも定番で鉄板の作戦だ。
厄介だな……。
常識的に考えれば、この状況を打開するのは難しい。
「クソッ！時間稼ぎか！卑怯だぞ！！」
敵陣で翻弄されていた春原さんも文句を言う。
ぼろ糞言われて発奮した矢先にこれはさすがに気の毒だ。
だがしかし、彼は足を止めずひたすら献身的にボールを追い駆ける。
そして、こちらには常識をはるかに超越した二人の狩猟者がついていた。

パシッ！

敵のパスを読んだ智代が、瞬間移動と見紛うばかりのスピードでパスをカット。
そのまま反転と同時にシュートにいく！
「させるか！！」

ドゴオオオオオオン！！

またも４番が腹でパワーブロック。

「ぐう！？」

しかしシュート力がやや優ったか、威力を殺しきれずボールは跳ね返った。

それに反応し、再び智代が直接ボレーにいく！

「ぐおおおお！！」

「私は……女だぁぁぁぁぁぁっ！！」

バッガァァァン！！

次の瞬間、４番の顔面が弾けた。

智代のシュートが至近距離で直撃したのだ。

ボールはそのまま大きな弧を描いてゴール前へ。

そこに三度智代が走りこみ、ボレーの体勢で落ちてくるボールを持ち構える。

「うっ！」

だがそれは、ゴールエリア外まで飛び出したキーパーにヘッドでクリアされてしまう。

惜しい！ヘディングが出来れば間に合ったかもしれない。

しかし、こちらのターンはまだ続く。

まるでそれを見越していたかの様に、クリアされた浮き球に朱鷺戸が飛びつく！

「悪いけど……もらったわ！」

空中で身体を弓なりに反らし、走ってきた勢いと自身のバネと体重を乗せた華麗なヘッド！

ボールは無人のゴールに……、

チッ！

だがなんと、それを7番が好フォロー！
朱鷺戸のヘッドは惜しくも戻っていた7番に軌道をそらされコーナーに。
「ナイスヘッド！」
「むう～残念。入ると思ったんだけどなあ……」
「コーナーだ。気を取り直していけ」
「ええ！」
コーナーに向かいながら朱鷺戸を労いつつ、智代に手招きする。
「なんだ？」
「コーナーお前が蹴れ」
やって来た時から既に不機嫌そうだったが、指示を聞いて智代はあからさまに不貞腐れた。
「どうして？コーナーキックを蹴ったら、シュート出来ないじゃないか！」
「……」
「それとも、やっぱりおまえはあいつの方が好きで、あいつに勝たせたいからそんな事を言うのか？」
「あのなあ……誰の為にこんな試合やってると思ってんだ……？」
「……すまない」
あまりに子供じみた言い分に、溜息混じりに言ってやる。
これにはさすがに堪えたようだが、依然として不満があるようだ。
「それに言っておくが、お前がパスを出すのは春原さんだ」
「春原に？」
「ああ、おもいっきり狙って蹴れ！いいな？」
時間もそれ程無いので、厳しい口調で手短に指示を出し、足早に定位置に戻る。
コーナーの人選はずっと考えていた。
俺や朱鷺戸が蹴れば守備が手薄になるし、春原さんにはゴール前で競り合いをしてもらいたい。

消去方的にヘッドが苦手な智代に蹴らせるのが一番だろう。
あいつはノーコンだが、春原さん（の顔面）へのパス精度は絶対だ。
そして……来る場所が決まっているなら、やりようはいくらでも有る。
ちゃんと蹴ってくれよ。
智代が助走に入ったと同時に、俺はスタートを切った。

ドオオオオオオオン！！

「ひっ！！」
智代の殺人弾丸ライナーショット（パス）が春原さんに迫る。
そして、その間に割って入るようにして、俺は頭から飛び込んだ。
よし、狙い通り！！

ズガァァァァァァン！！

額でハンマーを受けたかのような凄まじい衝撃！！
あまりの威力に、力負けして弾き飛ばされそうになる。
春原さんはこんな物を何度も何度も顔面で受けていたのか！？
「うおおおおおおおおっ！！」
最後は気迫で何とか押し切った。
進行方向を鋭角に変えた兆弾に、相手キーパーは反応すら出来ない！

ガッ！

にもかかわらず、不運にもボールは相手キーパーの足に当たってしまい、ゴールならず！
クソッ！俺は本当についてな……

カッ！

勢いを残しながら跳ね返ったボールは、更にたまたまそこに在った春原さんの足に当たり……キーパーの股間を抜けゴールに転がった。

……それ、なんてミラクル！？

ピッピーーー！！

「イイイイイヤフォオオオオオオオオオイ！！！ハット！！ハット・トリックウゥゥゥゥゥゥ！！！」

ついに、ついに同点。

俺達はサッカー部相手に三点差を追いついたのだ。

……なのに何でだろう？

何か物凄く納得いかない……。

智代の気持ちがわかったような気がした。

軽い脳震盪を首を振って覚まし、気持ちを切り替える。

「智代、下がり目の位置で守備につけ」

「わかった」

「それと、ナイスキックだった。この一点は半分お前の手柄だ」

「それは違う。点が取れたのは、いや、こうして追いつく事が出来たのは、全部お前のおかげだ。やっぱりオーキは本当に頼りになるな！」

言葉では謙遜しつつも、久しぶりに褒められて智代は心底嬉しそうだ。

どうやら機嫌も直ったらしい。

「朱鷺戸、杏先輩、ここが正念場です」

「ええ！」

「わかってるって。みんな、気を引き締めていくわよ！」
「おー！！」
残り時間も後数分。
追いつかれたサッカー部は、死に物狂いで攻めてくるはずだ。
それがわかっているからこそ、俺達はあまり浮かれる事なく、ここで今一度気を引き締める。
もちろん、物凄い勢いで浮かれているあの人は除いてだが……。
「うひょひょひょ～～～～～～！！天使ちゅわ～～～ん！！君の為に決めたよ～～～！！」
仲間と喜びを共に分かち合いたかったのだろう。春原さんは某峰さんに襲い掛かるリュパンの如く、朱鷺戸に向かって空中をダイブする！！
「えっ！？……いや、あの……ひいいいいい！！」
「お前は……たまたま点を取っただけで浮かれ過ぎだあああああああ！！」

ズドドドドドドドドドドドドッ！！

「ひ……で……ぶしゅ～……！！」
引きつりながらそれを避けた朱鷺戸と入れ替わるようにして智代がカウンターの空中コンボを決め、春原さんは某北斗関係の人に敗れた雑魚キャラのように吹っ飛んでいった。
何か最後破裂した気がしたが、きっと気のせいだろう。

ピーーー！

春原さんが人間に戻った所で、最後の戦いが始まる。

バシュッ！

と、いきなりキャプテンがシュートを打ってきた。
「！」
突然の奇襲に面食らったが、ボールはゴールバーをかすめただけで事無きを得る。
だがこれは、敵の攻勢の始まりに過ぎなかった。
敵は引き続き、遠目からでも隙あらばガンガンシュートを打ってくる。
コースが塞いでようが、まったくお構いなしに。
まるでこっちの大砲作戦だ。
いや、むしろそれが狙いなのか？
いくら俺とて、敵のシュート全てを止める事は不可能だ。
例えブロック出来ても、それを完璧にコントロールしたり、ランダムに跳ね返るボールの軌道までは読めない。
つまり……数打ちゃ当たるごっつあん狙い。
形振りかまわないにも程があるだろう。
しかしそれだけに凶悪だ。
細かいパス回しを棄てた事で、敵もまた常に二人以上が下がり目の位置に居る。
これでこちらのカウンターは封じられたも同じだ。
逆に中野は常にこちらのゴール前に張り付き、ウザイ事この上ない。
そしてキャプテンが個人技で中盤を押さえ、前線とディフェンスを繋ぐ……。
カウンターサッカーとしては、あっちの方がはるかに完成している。
だが、例えそうだとしても……俺には微塵も焦りは無い。
一手遅かったな……。
時間的に相手の攻撃機会はそう何度も無い。
つまり、数打てないんだから、滅多に当たる事はないのだ。
こちらの空中戦の弱さを衝くつもりなんだろうが……。

智代に中盤を掻き乱させてプレッシャーをかけ、朱鷺戸が中野をマーク。
焦りと、フットサル用のボールにあちらも慣れてはいない事も手伝い、それだけでロングボールの精度を欠き半分以上はパスミスに変わる。
後は俺が冷静に淡々と危険の芽を潰していけばいいだけの事。
守りに専念してる分には、こちらがミスをしなきゃまず失点はないのだ。
俺には始めから勝つ気は無い。
春原さんだって部に戻る気は無いのだから、勝って得られる物は何も無い。
名誉だけなら、引き分けでも十分だろう。
現にこの会場に居る観客の全ては、こちらに声援を送ってくれている。
むしろ……ここで勝ってしまえば、ますますサッカー部を追い詰め恨みを買いかねない。
「くっ、全員上がれ！！」
恐らく時間的に最後プレイ、敵の全員攻撃が来る。
4対2。
数の上で圧倒的に不利。
その波状攻撃を前にして、俺は右手を握り瞳を閉じる……。

その時、思い浮かんだのは、何故か中学時代の一個上のキャプテンだった。
いや、俺様ちゃんで性格最悪な所や、その上で実力も伴っている点はよく似ている。
あの人の事は本当に苦手だった。
ぶっちゃけ嫌いだった。

そして……悔しいが一度も勝てた事は無かった。
まあ、選抜級の人だし、先輩だからと遠慮もあったから仕方無いと言えば仕方無いが。
嫌な人だが……実力は認めざるをえなかった。
そしてもう一つ。
あの人は、本当に楽しそうにサッカーをしていた。
そりゃあ、あんだけ自在にボールが使えれば楽しいだろう。
俺は結局……あそこまでサッカーを楽しむ事は無かったんじゃないかと思う。
あの人が引退した後でさえも……。

刮目すると、相手のキャプテンは眼前に迫っていた。
そして直前でボールを止め、ボールを軸にクルリと回転して俺に背を向ける。
自分の身体をブラインドにして背後へのバックパス？
いや、違う！
この土壇場で相手のキャプテンが選択したのは、味方を囮にしての自力での突破。
そりゃそうだろう。
仮にもキャプテンが、俺を一度も抜けずに終われる訳が無い。
面目を保つ為にも、俺を抜いて決めるしかないのだ。
自分の身体を壁にしながら再び半回転し、俺の横を抜けていく。
“ルーレット”
あのフランス代表ジダンが得意とした技であり、その自分とボールの間に相手の身体を置かれるという性質上、来るのがわかっていても止めるのは至難。
だが……残念だが、その技は経験済みだ！！
俺はサイドステップでその動きに追いすがり、ドリブルの出所に

足を伸ばす。
「なっ！？」
爪先でつっついた程度だが、こぼれ球になればそれで十分である。
必殺のフェイントを止められた事で、呆然としてキャプテンの足は止まった。
そのうなだれた背に心中で呟く。
「俺よりサッカーを楽しんでない奴に、負ける気はしない」と……。

「智代ちゃん、今だ！！パスをだせ！！」
こぼれ球を拾ったの智代に、前線で一人残っていた春原さんがパスを要求する。
まさか……春原さんは勝つ気なのか！？
嫌な予感がした。
いや、しかし、そこは智代・春原コンビの事、最後までお約束で締めてくれるはず！

ズドオォォォォォォォォン！！

「だあっ！！……から顔はやめてと……」
やっぱり智代のパスを顔面に受け、春原さんはその場に倒れこんだ。
跳ね返ったボールは、上空高く飛んでいく。
それを確認し、小笠原さんは笛を咥えた。
よし、終わった！
主審の仕草で試合終了を察し、フィールドに立つ者全てがその動きを止める。
ただ一人を除いては……。
「智代！？」
上がったボール目がけ、矢のように疾走する智代の姿がそこにあ

った。
そしてその走力を跳躍力に変換し、高く高く飛び上がる。
だが、どうしようと言うのだ!?
お前へディング出来ないんだろ!?
ま、まさか……!?
その疑問は、踏み切り後の彼女の姿勢で戦慄と共に氷解した。
この世界には、誰でも知っていて、出来るけど出来ない技が存在する。
サッカー少年なら誰もが憧れてやまず、しかし試合中には出来ない……と言うより、誰もやらない技が有る。
だって、普通はそんな事をする必要は無いのだ。
もっと安易で確実な方法が有るのだ。
現実のその技は、単に苦し紛れに倒れこみながら足を伸ばすだけの技なのだ。
だからこそ、これはもはやファンタジーの領域。
背面飛びの要領で回転しながら、智代の長い足が空中のボールを捉える。
そう、その技の名は……“翼くんのオーバーヘッドキック”!!

バシィィィッ!!

キーパーは構える事すら忘れ、ただ放たれたシュートの行方を目で追うのみ。
動けるはずがない。
この場に居合わせた者は今、伝説の目撃者となったのだから。
そして、少女が着地すると共に、ボールは相手ゴールネットを揺らしていた。

第二章　5月1日　天使ｖｓ狩猟者　第ニラウンド

ピピーーー！！

ピッピッピーーーーー！！

ゴールを告げる笛と試合終了を告げる笛が続けて鳴った。
たった一蹴。
それだけでこの場に居合わせた全ての人間は魅了され、そして感じた事だろう。
これが“坂上智代”なのだと。
そして俺は、ただこのシーンを作り出す為だけに天に配されたに過ぎない。
あるいは……俺がサッカーをやってきた事すらも……。
熱狂、興奮、歓喜。
大歓声の中、奇跡の大逆転ゴールを決めた少女はたちまち仲間と、コートに雪崩こんだギャラリーに囲まれ祝福を受ける。
その人の波に逆らうようにして……俺は独りコートを去った。

5月1日（木）

今日も朝刊を配り終えた俺は、“あの場所”でぼんやりと色あせた空を眺めていた。
報われたのだろうか？
続けてきた無駄な努力が。

他に使い道もないと思っていた物が。

『あいつを守れたんだから、本望じゃないか』

そう何度も自分に言い聞かせ、納得させようとする。

だが、その度にあいつの最後のシュートが思い出され、胸に空いている穴に沁みた。

あの瞬間、あの一蹴で、悟った。

負けなければいいと思っている者と、勝利に拘る者の差を。

ずっと負け続けてきた者と、これからも勝ち続ける者差を。

何も得られない者と、全てを得られる者の差を。

この先、俺とあいつの道が交わる事は無い事を……。

「あンた、背中が煤けてるぜ」

不意に、背後からドスを利かせた意味不明な台詞が降ってきた。

「“泣いている”とかじゃなくて？」

「あれ？似た様な意味じゃないの？まあ、どっちでもいいわ」

さして興味も無さそうにとぼけながら、朱鷺戸は長い髪をふわりと浮かせながら俺の隣に腰掛ける。

何でこいつがここに……？

とは不思議と思わなかった。

むしろ以前にもここでこいつと会っていた様な……そんな既視感さえ覚える。

まったく、何処にでも現れる奴だ。

「とても奇跡の逆転勝利をやってのけた立役者の背中には見えないわね……て言うか、昨日は何で先に帰っちゃったの？探してたわよ坂上さん」

「別に……役目を終えたから帰っただけだ」

「それならそうと前もって言ってくれたらいいのに」

「いや、予告してどうすんだよ……」

わかってるんだか、わかってないんだか……。

少し和まされてふっと軽く鼻で笑う。
「苦手なんだよ……ああいうの」
「苦手って？」
「勝った後の馬鹿騒ぎみたいなの……別に嫌ってんじゃないが、なんか冷めちまう」
「まあ、確かに点取った時の春原先輩のはしゃぎっぷりは、さすがに私もひいちゃったけど……」
朱鷺戸の頭にはおもいっきりジト汗が浮かんでいた。
あの人のはもう、点をとったらその後のパフォーマンスまでがルーチンになってんだろう。
ルーチン……か。
「ＦＷは点を取った喜びを素直に表に出す事で、その快感を糧にしてるんだろ。でも、ＤＦはいちいち１つのプレイに一喜一憂してられんからな……直ぐ気持ちを切り替える癖がついちまってんだよ。まあ、性分もあるんだろうが……」
「ああ、なるほど。それは一理あるわね……」
一度は納得してぽんと拳で手のひらを叩いた朱鷺戸だったが、何かに勘付いたかいきなり座ったままかがみこみ、下から覗き込む様にしてジッと俺を見つめてくる。
「ひょっとして……勝った事、後悔してる？」
鋭い御指摘。
それっぽい事を並べて煙に撒こうと思ったが、やはりこいつには気付かれたか。
「まあな……サッカー部の面子を完全に潰す必要は無かったはずだ」
「そう……」
素直に肯定すると、朱鷺戸はふっと微笑み、灰色の空を見上げる。
「心配してるのね。坂上さん達の事」
「……そういえば、俺が帰った後どうなったんだ？」
「それが、あの後直ぐ騒ぎを聞きつけた先生が来て、礼もしない

まま解散させられたわ」
「そうか」
「ホント、狙ったようなタイミングで現れたのよね～、一体誰が教えたのかしら？」
「さあな」
白々しく顎に指を当て考える振りをしてから、ニヤついた視線が戻ってくる。
まあ、実際チクッたのは俺じゃあないし。
しかし、それにしても……、
「そんなに気にする必要無いと思うわよ。あんな凄い試合を見せられたら、誰だって坂上さんを認めざるをえないでしょうし。サッカー部だって、これ以上係わり合いになろうとは思わないんじゃないかしら？」
「……」
「でも、オーキ君らしいけどね。そういう・と・こ・ろ」
どうしてこいつはこんなに俺の事を知っているんだろう？
立ち上がって振り返った笑顔は、からかいながらも優しい。
気心の知れたダチといるような気安さと、居心地の良さ。
それでいて、早苗さんのように俺の心の機微まで理解してくれているような……。
ようするに……俺は“癒されてる”んだ。
まだ出会ったばかりの、よくわからない謎の少女に……。
こいつと居ると、凄く“楽”と言うか、“安らぎ”を感じる。
てか……確か昨日……告られた……んだよな？
状況が状況だけに、いまいち真意は掴めんが……少なくとも好意はもたれていると思う。
なら……もう、こいつと付き合っちゃうか？
改めて目の前に立つ朱鷺戸を値踏みしてみる。
……うん、コンマ一秒で答えが出た。
『ケチのつけようがねえ』

顔もスタイルもそこらのアイドルよか上だし、頭もいいし話も合う。性格はちょっと変だが、俺も変人扱いされてきた人間だ。むしろそこも丁度いい。何より俺を理解してくれている。

完璧じゃないか！

それ以上の何を望む？

もちろん、出会ったばかりでわかっていない事は多いが、そんなの瑣末な事だ。

お互いを想う気持ちさえあれば、解決出来るだろう。

ただ……あの発作みたいなのが一抹の不安ではあるが……。

……っとまあ、オチがついた所で妄想はこれぐらいにしておこう。

「さて……そろそろ帰るわ。昨日はありがとな。助かったよ」

踏ん切りつけるべく、礼を言いながら立ち上がると、前に立つ朱鷺戸を追い抜き背を向ける。

「お礼なんていいわよ。見てたらあたしもやりたくなったから、自分から買って出たんだし」

「……おかげで大分楽になった。サンキュ」

過去と現在、二重の意味合いを謝辞にこめ、後ろ手を振った。

学校では、昨日の試合の話題で持ちきりだった。

幸い、話題の中心は劇的な決勝点を決めた智代と、ハットトリックを決めた春原さんだったので、たまに思い出したように『凄かったね』と話しかけられるだけだったが、煩わしい事にかわりない。

「川上君、やっぱり凄いね……私、感動しました」

そうお隣の仁科さんに言われた事だけは、悪い気はしなかったが……。

昼休み、俺は宮沢に会いに資料室に向かった。
昨日の事で、彼女にも色々動いてもらったしな。挨拶の一つでもしておこう。
すると、その資料室の方から黒いカチューシャをつけた髪のやたら長い娘がやってくる。
話題の“ミラクルシューター智代”だ。
「オーキ！」
俺に気付き、嬉しそうに駆け寄ってくる。
見つかった！
いや、別に避けてた訳じゃないが……。
どうせ昨日の事とか詰問されるんだろうと思うと、ちょっとメンドイ。
などと思っていたのだが、
「オーキ！……ってしまったーーーーーー！！」

ズザザーーー！

走ってきていきなり目の前で崩れ落ちた！
一瞬、ヘッドスライディングでもしてくるのかと思ったよ。
何だ！？
何が起こった！？
「おい、どうした？大丈夫か？」
この異常な事態に俺も心配になり、片膝をついて彼女の背に手を置く。
「オーキ……それがな……」
潤んだ瞳で何かを言いかけるも、智代は口をつぐんで語ろうとしない。
「どうした！？」

「……すまないオーキ……私と一緒に来てくれ」
肩を揺すって強く促すと、ようやく彼女は俺に寄りかかりながら立ち上がる。
そうして、彼女に腕を掴まれ連れてこられたのは……目当ての資料室だった。
「あら、坂上さん早かったですね……ああ、川上君もご一緒でしたか。いらっしゃいませ～」
「やっほ～、オーキ君」
「おお……」
教室には宮沢の他に門倉の姿も見える。
何だ、三人一緒か。
「有紀寧、実はうっかり私の方から声をかけてしまったんだが……その場合はどうなるんだ？」
「それは……残念ですが無効ですね」
ズウーーーーーーン！
またですか！！
宮沢と謎のやりとりをした智代は、またも四つん這いに。
まったく訳がわからんが、とにかく智代は何か重大なミスを犯して落ち込んでいるっぽい。
「オーキ……」
「ん？」
ゆらりと立ち上がった智代の目が座っていた。
「何も見なかった事にしてくれ……」
「は？」
「お前は何事もなかったように一度廊下に戻り、そこで教室から出てきた私に声をかけるんだ」
仰る意味がまるでわかりません。
宮沢は苦笑し、門倉はぷぷっと噴出しそうになって口を押さえて

いた。
「はい、スタート！」
「……なんか立て込んでるみたいだから、また来るわ」
「はい。すみません……」
「じゃあねぇ、オーキ君」
何か事情を聞ける雰囲気でも無さそうなので、ひとまず退散する事にする。
「オモイオモワレフリフラレ……」
教室のドアを閉める際に念仏の様な物が聞こえた気がしたが、聞かなかった事にした。

ガラッ

暫く行った所で、背後から教室が開く音がした。
首だけ捻って確かめると、丁度出てきた智代と目が合う。
真顔だった。
怖ええよ！
見なかった事にしてそのまま歩みを止めず帰ろうとする。

ダダダッ！

くまさんが追ってきた！
「……」
ところが、瞬く間に追いついたくまさんは、無言で俺の直ぐ後に付いて来るだけだった。
怖くて確認出来ないが、無茶苦茶怒ってるのは発する“気”でわかる。
何だ？
これ何てプレイ！？
「ああ、もう、さっきから一体なんだよ？」

「……それは、私に話しかけたのか？」
「ああ、そうだよ」
観念して話しかける。
正しくは話しかけさせられただが。
だが、それで魔女の呪いでも解けたのか、鬼の形相が見る間に無邪気な天使の笑顔に変貌していく。
「そうか……何か用かオーキ？」
そしてデレた！
俺の左腕に自分の腕を絡ませ、嬉しそうに身を寄せてくる。
一体何がしたいんだ……！？
空いてる右手で痛くなった頭を押さえる。
そういえば……宮沢は何か“まじない”が得意だとかで、たまにやってたな……。
呪文みたいの聞こえたし、どうやらそれっぽい。
「いや、お前に用があるんじゃないのか？」
「ん？……そうだ！どうして昨日、試合が終わって直ぐに帰ってしまったんだ！？」
ようやっとその質問ですか……。
何と言うか……メンドイとか思ってすみませんでした。
「別に居る必要無いだろ？元々俺は部外者なんだし」
「必要なら有る！お前のおかげで試合に勝てたんだ。それなのに、本来なら一番賞賛されるべきお前が居ないなんて、おかしいじゃないか！そもそも、お前は部外者じゃない！立派な関係者だ！」
真摯な表情が間近に迫る。
彼女にとっては、受けるべき賞賛を受けない事もまたフェアではないと言う事なのだろうか？
「それに……私は誰よりお前と喜びを分かち合いたかったんだ！サッカーでは点を決めたり試合に勝った時、仲間と抱き合ったりする物なんだろう？お前とはまだしてないじゃないか！」
真面目な話かと思いきや、いきなり子供みたいに拗ねだした！

……嫌な予感がした。
てか、もう捕まってるから避けようがないんだけどね……。
まさか腕を組んできたのも、初めからそれが狙いか？
「いや、だから、そういうのが恥ずいから逃げたんだ」
苦し紛れに本音を吐露する。
だが、生まれながらの狩猟者である智代さんは、恥じらいながらも攻勢を弛めようとはしない。
「それは……私だって人前じゃ恥ずかしい。でも、今なら誰も見ていないじゃないか」
「てか、そういうのはその場の勢いでやる物だろ。一日経ってやる物じゃない」
「だから、私はその場でやりたかったんだ。それなのに、逃げたお前が悪い」
腕を絡め捕られたままじりじりと端に追いやられ、ついに右腕が壁に接する。
こうなっては是非も無し。
目をつぶって右手を握り、覚悟を決めた。
「わかった。ちょっとだけだぞ！」
「えっ！！」
おもむろに左腕を腰に回し、巻き込むようにして抱きしめ頭に右手を添えてやる。
「んっ……」
直ぐに智代も両手を力強く俺の背に回してきた。
必殺のベア八ッグだ。
正直痛いが、その痛みが蕩けてしまいそうな心と身体を正気でいさせてくれる。
「……オーキ……ありがとう」
「ん、まあ……よくやった」

暫し健闘を称え合った後、智代のおまじない完遂の為の校内一周に付き合わされた。
行く先々で智代は芸能人の如く囲まれ、皆口々に選挙の応援を約束していく。
まあ、それは別にいいのだが……。
「川上先輩も頑張って下さい！」
たまに俺も一緒に応援されるのは何故だろう……？

第二章　5月2日　風評注意報

夜、鷹文から電話がかかってきた。
『ねぇちゃんと仲直りしたみたいだね』
『別にアホな事してっから叱っただけだ』
『にぃちゃん的にはそうなんだろうけど。ほら、ねぇちゃん叱られ慣れてないからさ、この世の終りかってくらい落ち込んでたよ』
『だから俺が厳しくしてんだ。ほっといたって慣れないままだろ？』
『そりゃあ、つきあってたら喧嘩くらいするだろうけどさ。わかってると思うけど、ねぇちゃんアレで打たれ弱い所有るし、手加減してやってよ』
『いや、別につきあってねえし』
『えええええええ～～～～～～～～！？まだつきあってなかったの！？』
『前に言わなかったか？』
『いや、聞いたけど、あれから大分経ったし、色々噂とかも耳に入ってくるからさ。あのねぇちゃんに恋人が出来たって、うちの学校でも結構話題になってるよ』
『お前の中学で？まあ、あいつの出身校でもあるから変じゃないか……』
『光坂に編入した事も、生徒会長に立候補した事も、全部にぃちゃんの為って事になってるよ？尾ひれがついて、この前なんか既に同棲してて子供まで居るって話になってたし』
『お前もその年でおっさんか』
『いや、せめて叔父さんって言ってよ！じゃあ、にぃちゃんが昔ねぇちゃんともめた人達に話つけて回ってるってのも、ただの噂なわけ？』
『それは面倒事が起きる前に手を打ってるだけで、別にあいつの

為だけじゃない』
『やっぱりこれは本当なんだ』
『あいつには言うなよ。面倒だから』
『隠しておきたいなら言わないけどさ。でも、うちの学校にまで噂が届いてるくらいなんだから、ねぇちゃんの耳に入るのも時間の問題だと思うけど』
『そうだな……既に手遅れかもしれん……か』

5月2日（金）

わかってはいた。
何処に居ようと目立たないはずがない坂上智代の、誰よりも近くに居たのだ。
俺だけスルーしてくれるはずが無い。
「オーキ君と智代ちゃんの噂ぁ？いっぱいあるよぉ！」
色々気になったので門倉に尋ねると、かいつまんで羅列されただけで休み時間が余裕で一つ潰れた。
教室に迎えに来たり、腕を組んで登下校したり、二人っきりで遊んだり……。
その辺は目撃されていて当然だから仕方あるまい。
改めて他人の口から指摘されると顔から火が出る思いだが、覚悟はしていた。
裏で智代に遺恨がありそうな連中の所を回ってる事も、ヤンキーネットワークを通じて外部に洩れる事は想像出来る。
しかし、ポスターの件までバレているとは流石に思わなかった。
あの時は既に休み時間も終わっていて、周囲には教師以外いなか

ったはずなんだが……。
「まさか門倉、お前がバラしたんじゃないだろうな？」
「え～、してないよぉ！私だって実際にやったかまで知らなかったしぃ」
そうだ。俺だって匂わせてはいたが、はっきりとやったとは言ってないはず。
とすると、
「じゃあ、教員の誰かが漏らしたとか？」
「もしくはぁ、憶測が本当になっちゃったとかぁ？ほらぁ、うちの学校の子頭いいしぃ」
確かにうちの生徒なら、推理力旺盛な奴もいるだろう。
特に目の前のこいつとか……。
「だからぁ、本当に私じゃないよぉ？」
眼鏡越しにある大きな瞳の深奥を見透かさんと疑惑の眼差しで凝視してやると、少し赤くなりながらニコリと笑って否定する。
やはりこいつの魂胆はまったくわからん。
まあ、広まってしまった物に是非も無い。
「それで、噂に対する反応は？」
「前は色々言われてたみたいだけどぉ、ポスターの件や試合での大活躍もあって、今は概ね好意的だと思うよぉ。智代ちゃんのファンクラブでも、二人の仲は公認みたいだしぃ」
既にファンクラブとかあんのかよ……！
公認か……それはもう外堀は完全に埋められ包囲完了って事ですか？
「てか、色々ってなんだ？」
「ん～、オーキ君がこの学校を影から支配する為に恋人の智代ちゃんを送り込んで生徒会長にしようとしてるとか？」
「手篭めって……」
そっちは主にヤンキー系が出所のネタだろうな……。

鷹文も子供が居る事になってるとか言ってたし。
まあ、影の支配者と言うのは当たらずとも遠からずだが。
「でもぉ、あまり気にする事は無いと思うよぉ？噂は噂だしぃ。むしろぉ、今は相乗効果で智代ちゃんにとってプラスに働いてると思う」
「“今は”な……」
窓枠に切り取られた小さな空に目を移す。
生徒会長になるだけなら、生徒の人気だけ取れればいい。
だが、あいつの目的の為に必要なのは、むしろ教師を、大人達を味方にする事だ。
それにはやはり、この風評はマイナスにしかなるまい。
「また何かあったら頼む」
「うん。まったね～」
丁度そこでチャイムが鳴り、俺達は自然と解散となった。

第二章　5月3日　Everyday、カチューシャ　（自走式ロケットランチャー）

5月3日（土）

「ちいっす」

「おう！来やがったな」

バイト帰りに古河パンに顔を出すと、いつも以上に威勢のいい声に出迎えられる。

こりゃ何かあるな。

すぐにそれと判るほどの、かなりのワクテカぶりだ。

そういえば、今日から三連休か。

て事は……、

「今年もあるんですか？」

「あたりめえだ！ここ数年、負けがこんでやがるからな。今年は必勝の布陣で臨むつもりだ」

毎年ゴールデンウィーク恒例となっている隣町との草野球試合。

それが今年もあるらしい。

基本町内会が中心なので大体いつも同じ顔ぶれだが、正直うちの町内は高齢化が進んで秋生さんのワンマンチームと化して久しい。

まあ、それでもそこらのオッサンが秋生さんに敵うはずもないので、長らくうちの町内の方が優勢だったのだが……数年前にあちらに元甲子園球児が数人加入した事で形勢逆転、現在はこちらが圧倒的劣勢に立たされていた。

しかし、秋生さんの口ぶりからすると、ついに面子を一新すると言う事だろう。

「と言うと……こちらも現役高校球児で対抗するとか？」

町内会未満の若い世代には古河パン前の公園から巣立った連中は多い。

ガキの頃から秋生さんとの遊びの中で自然と鍛えられたそいつら

は、長じて各運動系の部活で活躍している輩ばかりだ。
そいつらを集めれば、少なくとも体力で劣る事はなくなるだろう。
……と思ったのだが、的外れだったらしく上機嫌だった表情が急に険しくなる。
「いや、奴らにも一応声はかけてみたんだがな……どいつもこいつも部活やら旅行やらで都合がつかねえらしい」
「じゃあ、誰なんです？」
「さあな」
「さあって……」
必勝の布陣って話はなんだったんだ？
だが、呆れる俺をよそに、秋生さんはいつもの不敵な笑みを浮かべながら断言する。
「実の所、俺もまだ詳細までは聞いてねえ。だがきっと活のいい最高のメンバーが集まったはずだ。やるぜオーキ！今年こそ隣町の奴らにリベンジだ！」

そんな訳で、いきなり俺の三連休は潰れてしまった。
試合は明後日だが、今日から練習を始めるらしく、店番があってずっといられない秋生さんの代わりに俺が仕切れと仰せつかった。
まあ、特に予定もないから出るのはかまわないが……。
それよか、最高の面子とやらが不安である。
俺だって野球は十分門外漢なんだが、その俺に任せるという事は……。
……寝よう。
もう集まってる物を今更俺が考えたって仕方無い。
どんな面子でもやってやると覚悟だけして、練習の時間まで二度寝する事にした。

トントントン……♪

聞こえてきたリズミカルな音が、眠りについていた意識を表層へと誘う。

家族の誰よりも軽快に階段を上ってくる音。

またかよ……。

休みのたびに朝っぱらから来られたんじゃ、たまったもんじゃない。

鍵でもかけておくか？

……やめよう。ドアごと破壊されるのがオチだ。

「おはようオーキ」

考えている間に勢いよくドアが開け放たれる。

もはやノーノックにも慣れてきた。

返事もまたずに侵攻してくるカチューシャに対し、こちらは布団の中で待ち伏せる。

近付く気配。

……今だ！

枕元に立ったと同時に薄目をあける。

まずは細い足首からふくらはぎにかけての清楚なハイソックスゾーン。

続いてひざ小僧を境に、程よい肉付きの魅惑の太ももゾーンに入る。

それにしても長い。

膝２０センチなんて、こいつの脚では大した長さじゃないだろう。

２５センチ……。

３０センチ……って、あれ？

いくら脚が長いからって、一向にスカートの裾が見えてこないん

ですけど!?
ちょっと短か過ぎやしないか!?
こりゃあ、けしからんな。
『叱ってやらなければ』と思いつつも期待に胸も鼻も膨らむ。
だが、
「チッ!」
更に上まで辿った所で思わず舌打ちが出た。
なんと、不届きにも今日のカチューシャは短パンをはいてやがったのだ!
上も普通の動きやすそうなシャツで、いつもは大人っぽいシックな服装が多いのに、今日は随分とラフな格好である。
「失礼な奴だな。いきなり舌打ちなんかして」
「休みの日くらい寝かせろ。てか、今日は予定あるし」
「ん?今日はみんなで野球の練習をするんじゃないのか?」
「オマエモカ……」
脱力して布団につっぷする。
それで今日は短パンな訳ね。
と言う事はだ。
「みんなって、岡崎さん達か?」
「うん。他にも、寮の仕事があるから練習には参加出来ないが、明後日の試合には美佐枝さんも来てくれる事になった」
「えっと……キーパーやってたお姉さんだっけ?」
遠目からだったが、ポニーテールで背が高く、活発そうと言うか、気風のよさそうないかにも姉御って感じの人だったのを思い出す。
そうか……あの人も来るなら、一度くらいちゃんと挨拶しておくべきか?
「うん。でも、実理や有紀寧は用事があって来れないそうだ」
「つまり、演劇部の先輩達メインか」
「私もあまり詳しくは聞いていないが、あいつらが集めたのなら多分そうなるだろうな」

“最強の布陣”って話はどこいった!?
まあ、智代と相良さんはいい。
杏さんや春原さんも運動神経はいいからやれるとは思うが……。
岡崎さん、野球やれるのか?
悪いの確か利き手だろ?この前の試合でも痛めてたし……。
渚さんは……秋生さんの運動神経が遺伝しなかったみたいだし。
一ノ瀬さんは……絶対後衛ジョブだよな。魔法使いとか学者とか。
椋さんは……どうなんだろう?試合の時の反応を見た限りじゃ、運動に自信は無さそうだった。
う〜ん……これなら元のおっさん軍団の方がマシな気がする……。
大半、と言うか下手すると全員素人だろ?
まったく……どいつもこいつも、頼むから何でもノリでやろうとすんなよ!
「ど、どうした!?急に頭を抱えて……痛いのか?」
「かなり……」
またしてもものっぴきならなそうな状況に、頭痛を覚えて布団に突っ伏する。
すると、いきなり頭の下に手が回ったかと思うとふわりと上体ごと浮かされ、肌色の大地に下ろされた。
こ、これは!?
まるで最初からそこに収まるべきであったかのような驚きのフィット感。
柔らかく温かで心地よく、それでいてどこか懐かしい。
ああっ、遠き理想郷がここに在った。
求め続けた究極の安眠枕が!
「大丈夫か?」
後頭部を智代が優しく撫でてくれる。
膝枕だ。
うつ伏せで生でだ。
「寝不足なんだって……」

「仕方ない奴だな。夜更かしするからだぞ」
適当な事を言いながら、頬に触れるふとももの感触を堪能する。
まあ、今回はただの草野球だし、気楽にやろう。
たまには短パンも悪くない……。
そんな事を思いながら、俺の意識はおちていった。

「遅えぞてめえら！初っ端からキャプテンが遅刻してんじゃねえ！」
で、結局俺達は何やかんやしてて遅刻した。
古河パン前の公園に集まっていた顔ぶれはほぼ予想通り、演劇部の面々と春原さんの妹さんも来ている。
皆動きやすいラフな格好だが、渚さんと椋さんはやらないのかスカート姿だ。
てか、俺がキャプテン決定なの？
「すまない」
「すんません」
「朝っぱらから仲良く乳繰り合うのはかまわねえが、練習時間短けえんだ、遅れんなよ」
「乳繰り！？」
秋生さんの戯言に春原さんが大きく目を見開き過剰反応する。
「岡崎ぃ！やっぱりあの二人ってそういう事やってんのかな！？」
「俺が知るかよ。まあ、付き合ってんだったら、やってても不思議じゃねえんじゃねえか？」
「やっぱり！？あの智代ちゃんの大きなおっぱいを毎日……ゴクッ……羨ましい！！」
「お前は……おかしな想像をするな～～～！！」

バキッ！！

「くえぇぇぇっ！！」

妄想して鼻息を荒くした春原さんは、鳥人となって大空へと羽ばたいていった。

直ぐに地に墜ちたが。

「おにいちゃん……お二人に失礼だよぉ……」

兄に代わってよくできた妹さんが申しわけなさそうに頭を下げてくれる。

しくじったな……。

二人そろって遅れてくれれば、冷やかされる事くらい予想出来ただろうに。

いや、悪いのは寝心地の良過ぎる智代の膝枕だ！

「私たちは別に変な事はしていない。ただ、オーキが寝不足で少し頭が痛いと言うから、膝枕をしてやってただけだ」

って、バラしてるよ！！

「オーキがよだれまで垂らして幸せそうに寝てから、起こすのがギリギリになってしまったんだ」

だから照れながら恥ずかしい詳細を話すな～！！

「ハア……ホントお熱いわね……」

「はっ！待てよ……付き合ってたらやってるって事は、まさか岡崎と渚ちゃんも乳繰りあいまくり！？」

「はぁ！？春原お前何言って……」

「ぬあぁぁぁにいぃぃぃ！？」

こういう時だけ妙に冴える春原さんの推理に、岡崎さんは慌てて否定しようとした。

だが時すでに遅く、阿修羅面“怒り”へと変わった秋生さんが岡崎さんの胸倉を締め上げる。

「てめぇぇぇ、俺の渚と乳繰り合った、だとぉ！？」

「合ってない！合ってねえって！！」

「お父さん、私と朋也君はそんな事してないです」

「ま、まあ、そろそろ練習始めましょう」
矛先が岡崎さん達に向いた所で、なんとか話を逸らしつつ軌道修正する。
しかし、すっかり確認する機会を逸してしまったが、俺がキャプテンでいいのか？
滅茶苦茶不安だ……色々な意味で……。

第二章　5月3日　カチューシャ取り説

秋生さんが後の事を俺に任せて店に戻ったので、とりあえず仕切らにゃならなくなった。
まあ、今日はひとまず軽い練習をしながら、みんなの実力を見ていく事にしよう。
「それじゃあ、まずは軽くキャッチボールでもしますか。ペアになって始めて下さい」
「オーキ、一緒にやろう！」
ペアでと言った途端、速攻で智代に腕を掴まれ捕まった。
俺はフリーで見回るつもりだったんだが……有無を言わせぬご機嫌ぶりに、まあいいかと許してしまう。
「ひゅぅ、お熱いねえお二人さん。それじゃあ岡崎、僕らも……」
「朋也くん、私、朋也くんと一緒にやりたいの」
「そうだな。どうせお前、キャッチボールなんてやった事ないだろうし。やるか、ことみ」
「え……？」
そして岡崎さんを意外にも一ノ瀬さんが積極的なアプローチでゲット。
当然組めると思っていたのか、当てが外れた春原さんはショックをうけて暫し硬直する。
「あの子、こういう時は素早いのよね……」
「……ふっ、しょうがないな～、芽衣、久しぶりに……」
「じゃあ、芽衣ちゃん、一緒にやろっか？」
「はい、杏さん」
そして、気まずさを金髪をかきあげる仕草で誤魔化してる間に、杏さんと妹さんが組んでしまった。
「ん？どうしたのおにいちゃん？」
「う……」

この短い間に二度振られ、あぶれたおにいちゃんがそこに居た。
しかし彼は気を取りなおすと、きょろきょろと周囲を見回し獲物を見つけ寄って行く。
「椋ちゃん、僕と一緒にキャッチボールしない？」
「あ、あの……私はマネージャーなので、見学してます」
「じゃあ、渚ちゃん、一緒に……」
「すみません。わたしは舞台の練習をしなければならないので、もう少ししたら戻るつもりなんです」
「いいじゃん、いいじゃん、ちょっとだけ、ね？そんなに時間とらせないからさぁ……」
「ご、ごめんなさい！」
「すみません！」
「あ……う……」
見学組を軟派と言うか、怪しい勧誘っぽく攻めるも、二人同時に深々と頭を下げられ、４タコしたおにいちゃんがそこに居た。
あはれだ……。
あはれ過ぎる。
「えっと……じゃあ、春原先輩は坂上とやって下さい」
「待て！どうしてそうなるんだ！？」
憐憫の情とキャプテンの責任からそう提案したのだが、今度は智代が猛烈に抗議してきた。
「私だって、春原となんてやりたくない！」
「“だって”って……それじゃあ、まるでみんなが僕の事嫌いみたいじゃん」
「その通りだ」
「断言するなよ！！」
「別にいいだろ？キャッチボールするぐらい……」
「嫌だ！私は、オーキと一緒にやりたいんだ！どうしてそれがわかってくれないんだ！？」
微塵も空気を読まない智代は、恥ずかしい事を言いながらむくれ

てそっぽを向いてしまう。
まったく、生徒会長になろうって人間が、立場的判断くらい解せ。
どうしたもんかと困っていると、すかさず助け船を出してくれたのは妹さんだった。
「おにいちゃん、わたし達と三人でやろ。いいですよね？杏さん」
「まあ、それしか手はないわよね……」
よく気のつくええ子や……。
なのに当のおにいちゃんは、性懲りもなく兄貴風を取り繕おうとする。
「しょうがないなぁ、芽衣がどうしてもって言うなら、にいちゃんが一緒にやってやるよ」
「別にやりたくないならいいわよ。芽衣ちゃんやっぱり二人でやろっか」
「一緒にやらせてください！」
だがその野望もたちまち杏さんに打ち砕かれ、結局最後は土下座していた。

１０メートルくらい離れて向かい合い、キャッチボールを開始する。
「いくぞー」
まずは見本として、俺の方から腕だけで投げる、いわゆるスナップスローをやって見せる。
緩やか弧を描いたボールは、左肩の上辺りに構えていた智代のグローブにすっぽりはまった。
「やってみ」
「こうか？」
一度ボールを見てから、智代が投げる。

ブン！

投石器の様に弓なりにしなった腕から勢いよく放たれたボールは、そのまま俺の頭上のはるか上を越えていった。

いきなり大暴投だ。

「すまない」

「だから、軽く投げろって」

見失うと面倒なので、慌てて踵を返し小走りで拾いにいく。

こりゃ、後ろ人いないか十二分に注意しないとだな……。

思った通り、他はともかくコントロールに難があるようだ。

そう思ってまずコントロール重視のスナップスローを教えたのだが……智代のコントロールは一向によくならない。

投げるたびにそのたわわな果実がゆさゆさと揺れて……いや、要するにだ、あいつ的にモーションがまだ大き過ぎるんだろう。

スナップスローは主に肩、肘、手首の力と、僅かな上体の捻りと体重移動で投げてる訳だが、全身バネ人間である彼女はそれだけでもこれだけのパワーを生み出してしまうのだ。

これで全身を使って投げたら、一体どうなるんだろう？

「どこを見てるんだ？」

視線に気付いたか、捕球しながら暴投娘がジト目で訊いてきた。

だから、そう言う事は大声で言うなよ。

いくら離れているとは言え、他の人にも聞こえるだろ。

「お前こそ、ちゃんと俺を見て投げてんのか？」

「ちゃんと見ている！見ているけど、上手く狙った所にいかないんだ……って、誤魔化すな」

俺が答えるのを待っているのか、智代はボールを持ったまま投げる素振りを見せない。

こじれると墓穴になりそうだな……。

そう判断し、溜息をつきながら寄っていく事にした。

「キャッチボールは、相手の胸元を見て、そこに向かって投げる

んだ」
“誤解”が無いよう、とんとんと自分の胸を親指で叩きながら指導してやる。
そう、俺は別に不純な動機でそれをガン見していたわけじゃないのだ！
「相手のグローブに向かって投げるんじゃないのか？それでは、相手にぶつけてしまうじゃないか」
「捕るからいいんだ。てか、お前はグラブにだって投げれてないじゃんか」
「それはそうだが……」
「とにかく、相手の真ん中に投げろ。そうしたら、多少ズレても手の届く範囲にいくから」
一方的にコツだけ教えて、また妙な事を言い出される前に背を向け逃走する。
そして元の位置に戻って向き直ると、
「うっ……！」
ドキリとして思わず唸ってしまった。
俺が詭弁を弄したと思ったか、無茶苦茶睨まれている。
ボールを持って構え、鋭い眼光で俺の心臓を射抜くが如く、智代は俺の胸元を凝視していた。
その姿はまるで……“あの日”の、かつて網膜に焼き付けた『伝説の最強少女・坂上智代』。
ああっ……それだよ！
やはり坂上智代はそうでなくては……！
周囲の景色が“絶対ヒロイン”の存在に侵食されて消え、世界に俺と彼女だけが残る。
やはりこいつは、少し遠目からの方が、敵として対峙する方が映えるんだ。
近くなり過ぎて、その辺りをついつい忘れてしまうけど。
今ならこいつのファンが多いのももっともだと頷ける。

「こいっ！」
湧き上がる昂揚感を抑えきれず、腰を落としグラブを叩きながら催促する。
さあ、投げろ！
投げろ智代！
お前の全てをぶつけてこい！
この俺が、この川上央己が、全て受けきってやる！！
そして智代は、俺から一切目を離す事なくボールを投げた。

ブンッ！

大きく弧を描いたボールを見上げながら目で追っていく。
やっぱり大暴投だった。
「すまない！」
肩透かしを食らい呆気にとられていると、智代は謝りながら走ってきて、そのまま擦れ違い自分でボールを取りにいく。
……一体何だったんだ……？
「すまない。お前の事はずっと見ていたんだが、狙っていた所に行かなかった」
帰ってきて、俺にボールを渡しながらまた謝ってくる。
特に怒ってる様子もなく、態度はあくまでしおらしい。
もし俺が出鱈目を教えたと思っていたら、あいつなら抗議してくるよな……。
って、事は……ただ単に俺に向かって投げようと注視してただけ？
「そういえば……お前って目悪いんだっけか？」
「ああ。……ひょっとして、目が悪いからコントロールが定まらないんだろうか？」
「どうだろ？メガネ有るなら試してみたらどうだ？」
「そうか……わかった。取ってくるから少し待っていてくれ」
どうやら、単によく見ようとして眉間にしわが寄ってただけだっ

たらしい。

さて、智代がメガネを取りにいってる間に、他のメンバーの事も見ておこう。

まず、岡崎さんと一ノ瀬さんペアだが……、

「えい！」

ひょろろ～……ぽて……ころころころ……

一ノ瀬さんは体を開いたまま腕の力だけで投げようとする、完全に“女投げ”だった。

あれでは筋力以前に力がボールに伝わらず、遠くまで飛ぶはずがない。

「いくぞ、ことみ」

対する岡崎さんは、下手投げでふわりと山なりのボールを投げる。

それを一ノ瀬さんはおっかなびっくりながらも懸命にボールに手を伸ばし、

ポフ、ポロ、ころころころ……

キャッチできずに落としていた。

何と言うか……グラブを閉めるタイミングがワンテンポ遅い。

それでも一ノ瀬さんはめげずに、すぐにボールを拾いまた女投げ。

う～ん……精一杯頑張ってはくれてるようだが……。

まあ、予想通り……か。

次は春原兄弟と杏さんのところを見てみよう。

「いくぞ、芽衣」

春原さんが妹さんに向けて投げる。

ヒュン……パシ！

まったく違和感の無いフォームから繰り出されたボールは、程よいスピードでコントロールされていた。

「いきますよ～、杏さん」

それを難なく捕った妹さんは、まったく無駄無く流れる動作で投球モーションに入り、軸足を開いて身体を１２０度回転させながら杏さんに向けて投げる。

ひゅん……ぱし！

申し分ないスピードとコントロールで、ほぼ杏さんが構えていた位置からほとんど動く事なくボールはグラブに納まる。

さすが春原さんの妹さんだけあって、運動神経もなかなかの物の様だ。

「陽平！」

そして杏さんは大きく振りかぶり、春原さんに向けて……投げた！

ビュンッ……バシンッ！！

「ひい！！」

矢のように真っ直ぐな速球が、顔の前に構えた春原さんのグラブに突き刺さる。

やっぱ杏さん投げるのうまいな……。

コントロールはともかく、草野球レベルなら十分ピッチャーとして通用するレベルの球速と球威だ。

「あんたさっきから僕の顔ばっか狙ってませんかね！？」

「たまたまよ」

「何か毎回殺気を感じるんですけど？」
「気のせいよ」
「そもそも、何でキャッチボールでおもいっきり投げるんだよ！」
「しょうがないじゃない。あたしは非力な女の子なんだから、全力で投げないと届かないのよ」
「非力って……！？」
「何か文句有る？」
「ありません……じゃあさ、そろそろ投げる順番リリースにしない？」
「おにいちゃん、それを言うならリバース……」
「ダメよ。それじゃあ、あんたを入れてやった意味が無くなるじゃない」
「……」
……どうやらコントロールも、いや、コントロールこそ凄いらしい。
とりあえず、あの三人は問題なさそうだ。
「オーキ、お待たせ！」
丁度、暴投娘がメガネっ娘になって戻ってきた。
「変じゃないだろうか？」
「別に、それはそれでいいと思うけど」
「そうか……よかった……」
俺の言葉に、メガネッ娘智代はほっとした様にはにかむ。
「てか、前も別に変じゃないって言わなかったか？」
「あの時はあの時だ。服装も違うしな。ああ、後、メガネをかけたまま運動をしたことは無いんだが、平気なのか？」
「野球なら平気だと思う。プロでもメガネやサングラスしてる選手はよく居るし」
「そうなのか。やっぱり、よく見えた方がいいんだろうか？」
「そりゃ、見えないよりはな。ただ、コントロールはどっちかってえと身体的な物だし、慣れとかもあるからな。練習もせずにいき

なり思った所に投げられる奴は、そうは居ないだろ」
「そうか……うん、その通りだな。でも、オーキが手取り足取り教えてくれるから、きっと出来るな」
そう言いながら、何故か智代は俺の腕に自分の腕をからめてくる。
「手取りだ」
得意満面だった。
それがやりたかっただけかよ！
「そのネタも前にやったろ？てか、さっさと続きやるぞ」
「まったく、オーキは照れ屋さんだな」
「胸取るぞ」
「取るな！」
深い深い谷間を覗きながら言ってやると、ようやく胸を隠しながら離れた。
まったく……休日だからって浮かれまくりだな。

その後、練習を再開するも結局メガネをかけても智代のコントロールは大して向上せず、見切りをつけ次の練習に移行する事にした。

第二章　5月3日　カチューシャ試射

「じゃあ、次はバッティングの方をやりましょう」
アップを兼ねたキャッチボールを終え、大体のレベルがわかった所で、次は打つ方を見てみようと思う。
しかし、これには一つ問題がある。
バッティングピッチャーを誰がやるかだ。
俺はコントロールに自信が無いので、出来れば他の人にお願いしたいのだが……。
「えっと……春原さん、ピッチャーお願い出来ますか？」
とりあえず、それなりにやれそうでやってくれそうな人をチョイスしてみる。
「フッ……さすが川上、わかってるじゃないか。ピッチャーはこのエースで4番・サード・春原に任せろ！！」
春原さんは金色の髪をかきあげながら、謎の言葉と共に快く引き受けてくれた。
えっと……本命はサード志望？
それとも、まさか“サード”とは“三人目”を表している！？
この人なら有り得るかもしれん……。
そうか……三人目なんだ……。
「じゃあ、春原（三人目）さんお願いします」
「オッケー♪」
「バッターは順番で。十球交代にしますか。最初は……岡崎さんいけます？」
「まあ、軽くならな」
「じゃあ、岡崎さんお願いします。残りの方は適当に守備について下さい。一応、捕ったら一塁に送球までやりますか。内野2外野2になるように守備について下さい」
三角ベースの様にベースを1・3塁と本塁のみ置き、足でファウ

ルラインを引いて準備完了。
「投球練習三球でいいですか？」
「おう！」
女子達が守備位置につく間に、試しに投げてもらおう。
自信満々だから大丈夫だとは思うが……。
春原さんは慣れた感じのフォームで大きく振りかぶり、投げた。

パスッ！

「ストライーーーク！」
親指を立てながら自分でコールしていた。
しかし、確かにほぼ真ん中に入ってる。スピードも申し分ない。
思った以上だ……この人逸材かもしれん！
「じゃ、岡崎さん始めますか」
「ああ」
「へへ……岡崎、おまえとの勝負も、いつ以来かねえ」
「さあな。んな事いちいち覚えてねえよ」
金属バットを持った岡崎さんが打席に立つと、春原さんが何やら語りだした。
「思えば、初めて出会って以来、おまえとはいくつもの夜を語り明かしたよね」
「やめろよ……気持ちわりい」
表現がちょっとアレだった。
ファーストの芽衣ちゃんが「ええっ！？おにいちゃんと岡崎さんてそういう……」と、ショックを隠しきれないでいる。
「僕らの関係にも、そろそろビロードをうとうか」
「ああ、終わらせてやるから投げろ」
多分ピリオドなんだろう。完全に別れ話だった。
「そろそろ決着をつけようか……どっちの力が上か勝負だ岡崎！」
！」

「さっさと投げろって！」
苛立った岡崎さんに急かされ、ようやく小芝居を終えた春原さんがモーションに入り、
「食らえ岡崎！！」
投げた！

キン！

打った！
「なにぃ！？」
軽く合わせるようにコンパクトなスイングで弾き返された打球は、一二塁間を抜けライトの杏さんの元に。
ライト前ヒットって所か。
「……」
いきなり打たれた春原さんは、「なにぃ！？」の顔のまま硬直している。
「やるな岡崎、それでこそ僕の小生のライバルだ！」
立ち直ったが、へりくだっていた。
「どうでもいいから、早く次投げろよ！」
「ふっ、一度打ったからっていい気になるなよ岡崎！僕の本気の剛速球で、ドコモを抜いてやるぜ！」

キン！

会社を設立しようという志は立派だったが、初球と大差ない剛速球はあっさり打たれていた。
その後も一球ごとに挟まれる小芝居にうんざりしながらも岡崎さんはヒット性の当りを連発し、１０球中ヒット７本、ファール３本という結果に。
「完全決着だな。今後は俺の命令に服従しろ。絶対にな！」

「……また岡崎、僕達親友だろ？」
「黙れ雑魚が！下僕の分際で俺を呼び捨てにするな！」
「お、岡崎……！？」
キレ気味ゆえか、岡崎さんは某自称天才生徒会長っぽくキャラが変わっていた。
何かやばそうなので、丁度終わったし空気を変えよう。
「打者交代で。次誰いきます？」
「じゃあ、あたしやるわ」
二番手に杏さんが進み出てくれた。
岡崎さんからバットを受け取り、打席に入る。
「へへ……杏、お前との勝負も、いつ以来かねえ」
またそれから！？
「はいはい、どうでもいいから、早く投げなさいよ」
「ふっ……後で吠え面かくなよ、杏！」
杏さんにも急かされ、フラグを立てながら春原さんが投げた。

キン！

「えっ……！！」
やはり打たれた！
綺麗な流し打ちでライト前ヒット。
うん、杏さんはバッティングの方も問題なさそうだ。
「へ、へえ、やるな杏。それでこそ……」
「つべこべ言ってないで、どんどん投げなさい！」

キン！

キン！

キン！

杏さんも立て続けに安打を製造し、ヒット7本を記録する。
「打つ方はなかなか楽しいわね。ストレス解消にいいかも」
杏さんもお気に召したようだ。
そりゃあ、あれだけポンポン打てれば楽しくもなるだろう。
本当に凄いのは春原さんだ。
あの人の球は、コース、スピード共にある程度やれる人間には非常に打ち頃な絶好球である。
やはり俺の目に狂いはなかった。
この人、努力次第ではバッティングピッチャーとして大成するかもしれない。
「私も打ってみたいの」
三番手に名乗り出たのは、意外に好奇心旺盛な一ノ瀬さんだ。
だが、
「えい！」
掛け声に反してふらふらなスイングが空を切る。
「ストライーーーク！！」
ようやくとれた空振りに、春原さんは派手なコールで喜びを表す。
そこまで嬉しいかな……。
さすがの絶好球もやはり打者次第、運動が苦手な人にはちと厳しいだろう。
「ストライーク！バッターアウトーーー！！」
その後も一ノ瀬さんのバットはカスリもせず、ついに三球三振してしまう。
彼女はスイングも完全に手打ちだった。
重いバットに振り回されている感じ。
「一ノ瀬さん、ちょっとバット貸してもらえます？」
立ち上がってバットの重さを確かめるが、用意した中で一番軽い子供用のやつだった。
やはり筋力うんぬん以前に、身体の使い方の問題か。

「一番軽いやつですね……もう少し、意識して身体全体で振ってみて下さい」
「わかったの」
初動の一瞬バットを引きながら体重を後ろに乗せ、前に体重移動しながらそれをスイングに乗せるまでの動作・テイクバックをやって見せてから、彼女にバットを返して再開する。
気分良く打たせてあげたいが、まずは正しいフォームか。
ちゃんとしたスイングが出来れば、自然と春原さんの球なら打てるようになるはず。
しかし、一ノ瀬さんのスイングはぎこちないままなかなか改善しない。
まあ、アドバイス一つで簡単に修正出来る物でもないし、杏さんが特別なんであって普通の女子はこんな物だろうけど。
「へへ～ん、ことみちゃんには、僕の球はまだ早過ぎたみたいだね」
「う～、春原くん、いじめっこ」
さすが春原さん、ここぞとばかりに弱者を嬲りだした。
だが、残り三球となった所で、一ノ瀬さんは何やらぶつぶつと呟きだす。
「本塁から投手板までの距離６０フィート６インチ。投手の投げるボールの初速が……」
まさか分析しだした！？
う～ん……でも、目測で球の速さなんてわからないだろうし、そもそも投げる球の速さやコースは毎回違う。てか、すみません。ピッチャーの位置も適当です。
大体、仮に計算で解が出たとしても、計算通りに動けないと意味ないと思うが……。
キン！

あっ、当たった！
８球目は予想通り空ぶったが、９球目がついにバットに当たった。
ふわりと浮いた打球はピッチャーとキャッチャーとファーストの中間辺りにポテっと落ちる。
微妙なとこだが、あるいは守備がミスればヒットになる……かも？
「打てたの～！」
ついに出た初ヒットに、一ノ瀬さんは両腕をぶんぶん振って無邪気に喜んでいた。
まあ、計算でも暗示でも方法は何でもいいから、まずは“自分が打つイメージ”を持つ事が大切だという事だろう。
それはいいのだが……いかんと思いつつも、どうしても彼女がはしゃぐたびに目の前でゆさゆさと揺れる物に目がいってしまう。
一ノ瀬さんのも凄いな……。
智代よりもデカイかもしれん……。
いやいや、いかんいかん、先輩達や妹さんもいるんだ。
頭を振って迷いを断ちフィールドに目を向けると、智代が外野から睨んでいる気がした。
「えっと……次は妹さん打ってみる？」
「あ、はい！おねがいします！」
１０球目は空振りで一ノ瀬さんが終わったので、妹さんを指名する。
いや、別にちょっと後ろめたいとか、間をおいてほとぼりを冷まそうとかではなく、春原・ザ・サードさんのメンタル面を配慮してだ。
多分、智代なら容赦なくかっ飛ばすだろう。
そうなると、春原さんの心が折れて最後まで持たない可能性がある。
「あの、川上さん、水曜日はありがとうございました！」
打席に立つ前に、妹さんは深々と頭を下げてきた。
「すみません。今までちゃんとお礼も出来なくて」

「別に気にしなくていいよ。あいつの尻拭いをしただけだし」
「わたし達の所為でお二人の仲までダメになってしまったら、本当にどうしよう？……て、思ってました。でも、お二人の絆はわたしが思ってたよりずっと強い物だったんですね！」
「ああ……まあ……」
やや興奮気味な妹さんの目は、すっかり夢見る少女になっていた。
「三点差から逆転して試合に勝てたのも、お二人の強い絆が生んだ奇跡ですよね！とっても素敵です！あ～ん、いいなぁ！うちのおにいちゃんも、川上さんくらい渋くて落ち着いてたらなぁ！」
俺も君みたいな可愛くてよく出来た妹が欲しかったよ！
「まあでも、勝てたのはお兄さんが点を取ってくれたおかげだから」
「あんなのたまたまです！川上さんが出てくれなかったら、間違いなくもっと点を取られて負けてました！それにおにいちゃん、あれからず～と事あるごとに自慢してるんですよ？ハットトリック決めたって。もう、こっちが恥ずかしくなりますよ」
「芽衣！早く打席につけよ！投げるぞ！」
半分愚痴になりだした所で、急かす体で兄が口を挟んだ。
そのムッとした表情は、自分の恥部を愚痴られたゆえか、はたまた妹が他の男と仲良く喋ってるのが気にいらないのか。
「もう、この前のお礼してるんじゃない！いいよー、おにいちゃん投げて」
「いくぞ、芽衣！」
ようやく妹さんが構えてＯＫサインを出し、春原さんが投げる。

キン！

しっかりした綺麗なフォームで難なく打っていた。
運動系の部活でもやってるんだろうか？この子もなかなかのセンスだ。

結果、妹さんも空振り1のヒット6本のなかなかの好成績。
「おにいちゃん、とっても打ちやすかったよ」
「は、はは……ま、まあね」
妹にまで打たれプライドは既にズタズタだが、かろうじて残る見栄で春原さんは笑ってみせる。
だが、その笑顔の引きつり具合から、そろそろ春原さんの限界も近そうだ。
「私の番だな」
妹さんからバットを受け取り、ついに真打が登場する。
「バットそれでいいのか？もっと重いのもあるぞ」
「他の女の子もこれを使っていたじゃないか。どうして私にだけそんな事を言うんだ？」
折角忠告してやったのに、智代は何を勘違いしているのかむくれてしまう。
またか……。
「まあ、お前がそれでいいならいいけど……」
バットも自分に合った重さの物を使うのが一番なのだが、こいつの場合軽いバットの方が力のセーブになっていいかもしれん。
「へへ……智代ちゃんとの勝負も、いつ以来かねえ」
智代が打席に入ると、もはやお約束となった小芝居が始まった。
「勝負？お前が一方的に私に対して失礼な事を言ってきて、やられてただけだろ」
「う……数々の赤面の恨み、今日こそ晴らしてやるぜ！リベンジヨだ！」
余程恥ずかしいやられ方してきたんだな……Ｒｅ便所？
妹さんの方が情けなくて涙が出てきそうな顔をしている。
「面白い……やってみろ」
「死ねえええええええっ！！」
実の妹さんが居る事も忘れ、物騒な事を叫びながら春原さんが渾身の一投。

しかしその瞬間、俺は見てしまった。
死相が浮かんでいたのは、むしろ春原さんの方だった事を。

グワァラゴワガキーン！！！

「死っ！？」

訳のわからん怪音が鳴り響き、続いて小さな悲鳴が上がった。
何だかんだでちゃんとストライクに入っていたボールは、しかし智代によって投げられた時の数倍の速度と威力を上乗せして弾き返され、弾丸ライナーで春原さんの顔面に突き刺さった。

第二章　5月4日　帰ってきた古代怪獣

日が落ちると、俺は定期的な情報収集の為に宮沢グループの溜まり場へと向かった。
扉を開けて中に入ると、場の空気がたちまち硬質化する。
いまだに俺が招かれざる客である事は承知しているが、だが、この日はいつも以上にあからさまな敵意を向けられていた。
「てめえ、よくもズケズケと顔を出せたもんだな？」
いかにも頭の悪そうな数人に囲まれ、思わず吹き出しそうになる。
こういう事には慣れているが、今日はいつものそれとはまた雰囲気が違うようだ。
「待ちな。まだ、そいつが係わっていると決まった訳じゃないだろ？」
どうした物かと困惑していると、長い黒髪を妖艶に払いながら現れた女性が男達を制してくれた。
レディースのトップである後藤田さんだ。
「何かあったんですか？」
「さてね。詳しい話は、やられた当人に聞くのが一番だろ？」
そう言って踵を返した彼女に連れられ店の奥にいくと、そこにはソファーにぐてっと寄りかかる傷だらけの男達と、それを甲斐甲斐しく治療する宮沢の姿があった。
「あっ、川上くん」
「宮沢、何かあったのか？」
「それが……」
「何かあったのかじゃねえよ！坂上だ！坂上が出やがった！！」
答えにくそうにしていた宮沢の変わりに、治療を受けていた『千のかさぶたを持つ男』蛭子さんが森でクマに襲われた村人の様にまくしたてた。
智代にやられたって？

確かに用事があるとかで練習の後は会っていないが……。
絶対にあいつのわけが無い！
そう言いきれないのが悲しい所だ。
「何か悪さでもしてたんじゃ……？」
「してねえよ！隣町の連中とやりあってたら、いきなり乱入してきやがったんだ！」
いや、喧嘩してんじゃん。
「本当に坂上さんだったんですか？」
「ああ、間違いねえ！三年前に見たアイツと同じ格好だったからな！」
「三年前のって……具体的にどんな？」
「制服だよ制服！奴の中学の制服だよ！！」
「あのう……坂上さんは今、私と同じ高校に通ってるんですけど……？」
「……」
宮沢のつっこみにより、早くも蛭子の言い分は眉唾となった。
だが、智代以外の女に負けた事を認めたくないのか、尚も彼は食い下がる。
「いや、でもよぉ。やり合ってた奴等も含め１０人近くが女一人にやられちまったんだぜ？あのデタラメな強さは坂上以外ありえねえだろ！？」
「わざわざ中学の頃の制服着てる方がありえんと思うけど……他にそいつの特徴は？例えば髪型とか」
「髪だァ？確か……短い……いや、長げえのかアレ？」
「一体どっちなんだい？」
「いやよぉ姐さん、女の髪の事はよくわかんねえんだけど、髪をこんな風に両端で束ねてたんだよ確か」
そう言いながら蛭子さんは両耳の辺りに握り拳を当てて見せる。
だが、どう見ても不細工な招きネコにしか見えん。
「ん～？ツインテール……の事かねえ？」

すると、しかめっ面も様になる後藤田さんが見事な推理力を発揮してくれた。
これでツインテールになるのか……。
「坂上さんの髪は、とても長いストレートヘアですよ」
「でも、髪型なんざ、いくらでも変えられるだろ？」
「他に特徴は？声とか」
「声？ああ、そう言やぁよ！坂上の奴、お前を探してやがったぜ。『坂上智代を倒した奴を知らないか？』って。だから俺は言ってやったんだ。『知ってたってテメエに教える義理はねえ』ってな！」
「どうして当人が『坂上を倒した奴』なんて訊き方するんだい？」
「てか、既に俺ら顔見知りだし、用があったら携帯にかけてくると思うけど……」
何故か自慢気に語られた蛭子の証言により、智代襲撃説は完全に否定された。
後藤田さんは呆れ果てて頭を抱え、周りで身を乗り出して聞き耳立ててた連中も「やれやれ」と各々の話に戻っていく。
「やっぱり、坂上さんではなかったみたいですね」
「そんなこったろうと思ったよ。まったく、あんたはそうやってそそっかしいから、いらん生傷ばかり増えるんじゃないか。治療する有紀寧ちゃんの身にもなりなよ」
「でもよ、じゃあ、あいつは何者だったんだ？」
「坂上と同じ中学の制服着てたってんなら、坂上の後輩じゃないのかい？それなら川上を探してたのにも合点がいくだろ」
真犯人の正体は、後藤田さんの推測でまず間違いは無いだろう。
かつての智代にも比肩する強さの中坊、しかも女か。
まったく、また一人厄介なヤンチャ娘が増えるのかよ。面倒な。
「もしまたそいつと遇ったら、俺に連絡ください。直接会って話つけた方が早いでしょうから。みなさんも見かけたらお願いします」
だが、どんなに面倒でも、捨て置くわけにはいかない。
“この町最強の少女”なんてろくでもない都市伝説は、あいつだ

けで終りにするべきなのだから。

5月4日（日）

今日も一仕事終えてニ度寝を満喫していると、やっぱりあいつがやってきた。

「おはようオーキ」

安眠妨害をしている自覚は微塵もないのだろう。

いつもの様にニコニコしながら勝手に入ってきて布団の傍らに腰を下ろす。

今日の彼女の服装はシックな長めのスカートだった。

髪型はいつもの直球ストレートにカチューシャのアクセント。

「中学の制服に、ツインテールじゃないのか……」

「いきなり何の事だ？」

「いや、お前髪型って変える事あるのか？」

昨日の件もあり、少し気になったので訊いてみる。

「ほとんどないな……体育の時に結ぶくらいだ」

すると智代は自分の髪を撫でながら急に表情を曇らせた。

「ひょっとして、お前は長い髪は好きじゃないのか？変えた方がいいだろうか？」

「ああ、いや、そういうんじゃないっつうか……どっちかって言うと好きかな」

「そうか！良かった。実は私も気に入ってるんだ。やっぱり、髪は長い方が女の子らしいしな」

素直に答えてやると、満面の笑みで髪を前に回し自慢するように毛繕いをはじめる。

それに興味を持った俺は、思わずその髪の束を手にとった。
実は前々からやってみたかった事がある。
「ん？どうしたんだ？」
智代は少し頬を赤らめ不思議そうにはしているが、特に警戒はしていない。
チャンスは一度。
この一瞬にかける！
「美髯公」
俺はその長い髪を彼女の鼻の下に当てて言った。
おおっ！！
やはり……そっくりだ！！
「……今何て言ったんだ？」
言った意味がわからなかったらしく、一転怪訝な視線を向けながらもまず聞き返してくる。
だから俺は爽やかに説明してやる事にした。
「美髯公。時の皇帝からヒゲの見事さを称えられそう呼ばれた三国志の英雄・関羽の事だ！」
「私の髪はヒゲじゃない！！と言うか、関羽は男だろ！！」
折角教えてやったと言うのに、美髯公は突如襲い掛かってきたかと思うと、俺の肩掴み激しくゆすってくる。
まあ、そりゃこいつなら怒るわな。
「最近は女の関羽も結構いるぞ」
「そうなのか……て、関羽が最近にいるか！！」
ちっ……さすがに誤魔化せんか。
半分事実なんだが……。
「まあ、それはいいとして、今日はスカートなんだな」
「堂々と話を変えようとするな！！」
「わかった。謝るから……それで、その格好で今日の練習やるのか？」
「着替えるに決まってるだろう？今日の練習は午後からだから、

着替えを持ってきたんだ。そうやって話をそらそうとするな！お前の魂胆はお見通しだ！」

「だから悪かったって……そういや、昨日の午後どこ行ったんだ？」

「誤魔化すなと言って……そうだ！聴いてくれオーキ！」

おっ！何か知らんが乗ってきた。

昨日のアリバイ確認のつもりだったんだが、ここはじっくり聴いてやるべきだろう。

「どうしたんだ？」

「実は昨日の用事と言うのは、手紙で呼び出されたんだ。私に相談があるって」

「誰から？」

「それが匿名だったんだ。文面から女の子だとは思うんだが……」

「行ったんじゃないのか？」

「行った。指定してあった場所まで時間通りにな。けど、いくら待っても相手が来なかったんだ……失礼な話だと思わないか？」

「ん……まあ、当人が尻込みしたって可能性もあるが、まずイタズラだろうな……」

「やっぱりお前もそう思うか！今まで誹謗中傷や剃刀の入った手紙は経験有るが、こういう真面目を装った悪戯は余計に性質が悪いな」

「仕方無いさ。生徒会長になれば、そういうのは増えるかもしれん。これからはもっと用心する事だ」

頬をふくらませて怒る智代をたしなめつつも、俺は嫌な予感がしていた。

夜の町に出没したと言う“智代モドキ”と、誘導とも取れるこの悪戯。

もし、何かしらの関連が有るとしたら……？

「それでオーキ、話を戻すが、関羽とはどう言う意味だ！？」

「戻すなよ……」

人の心配をよそに、当人はネチネチと冗談を根にもって追及してくる。

まったく……三国最強とも謳われた関羽が、どういう死に方をしたか知ってるのか？

次から次へと難題が出てきて頭痛が治まる暇が無いが、痛がってもいられない。

如何なる姦計があろうとも、如何なる運命が待ち受けようとも、この可愛らしい関羽を守り通す事が、俺の俺自身に課した使命なのだから。

第二章　5月4日　いきなりバトルロワイヤル

午後からの練習は、森の中にある“あの場所”の広場でやる事になった。
ここなら人があまり来ないし、周りに民家も無いのでおもいっきりやれる。
今日は秋生さんも参加し、本格的なノックやバッティング練習をやり、
「……どうしてこうなった？」
何故か森の中でサバゲー、いや、『ゾリオン』をやる事になった。

「よし、次はこいつを使った練習をする」
一通りの練習を終え集合をかけた秋生さんは、玩具の光線銃『ゾリオン』を掲げながらそう言った。
『赤い稲妻ゾリオン』
俺が子供の頃に発売された、専用のセンサーを装着し赤外線光線銃で打ち合って遊ぶ玩具だ。
同時に放映された販促アニメの効果もあって、かなり流行ったのだが……アニメの放映終了と共に子供達のブームはとっくに去って久しい。
しかし、俺の周りではいまだにそれが続いていたりする。
主に大人達の間で……。
子供が飽きた玩具に秋生さんと商店街のオヤジ達がハマッてしまい、今でもゾリオンによるサバゲー大会が毎年一回は催されている。
まあ、ＢＢ弾をばら蒔くよかずっと安全でエコだし、確かにたまにやると楽しいのだが……やっぱりゴッコ遊び感がエアガンの比ではなく恥ずい。

だから俺もここ数年参加してなかったんだが……。
「こいつでって……その玩具で？」
「まさか、それで撃ち合うってのか？」
「その通りだ」
「野球と関係ねえじゃんか！」
岡崎さんが一同を代表してつっこむ。
だが、まだまだ秋生さんて人を理解していないようですね岡崎さん。
この人に常識とか脈絡とか通じないから！
「ふっ……甘いなＪＪ」
「岡崎だ。てか、誰だよ！？」
確かゾリオンの主人公……。
案の定、秋生さんはつっこみにまったく動じないどころか、鼻で笑ってみせる。
「例えばだ、ランナーが居る状況で打球を処理する時、ランナーを刺すのか、それともファーストに投げてバッターを刺すかを瞬時に判断して投げなきゃならねえ。そこで判断を誤ればアウトに出来るモンも出来ねえからな。つまり、野球にはそういった状況に応じた的確な判断力が必要となる訳だ。そして、その判断力を養うには、サバゲーが一番だ！」
「判断力はともかく、サバゲーはこじつけだろ！普通にランナーを置いた守備練習をすりゃあいいじゃんか」
「だからお前は甘えと言ってるんだ！何のプレッシャーも無い練習で出来る様になっても、試合の緊張感の中で出来なきゃ意味がねえ。その点、常にいつ敵に襲われるかわからねえ中での判断を求められるサバゲーは、判断力を養うのにうってつけって訳だ」
いや、このチームはそれ以前の問題ですから……。
なのだが、秋生さんの勢いと説得力の前に何を言っても無駄と悟ったか、岡崎さんは閉口する。
長年、口達者なガキ共の頂点に立ち続けてきただけあり、秋生さ

んは屁理屈も無双だ。
「それにだ。この練習の為に、わざわざ商店街の有志の方々が集まって、既に森に配置してくれている。今更やらねえ訳にもいかねえ」
「どんだけ暇なんだよ、ここの商店街!?」
おっさん連中まで用意済みとは……端からやるつもりだったって事か。
て事は、この森で練習する事にしたのも全てはゾリオンの為だろう。
本当に暇なんだな……。
「まあ、ただやるだけじゃ燃えねえだろうから、このサバゲーの優勝者にはある権利が与えられる」
「サバゲーって言っちまったよこのおっさん」
「権利？」
「最後まで勝ち残った奴には、直接倒した奴に一週間何でも命令できる権利だ！」
「それってつまり、もし撃たれた相手が優勝したら、何でも言う事聞かなきゃダメって事じゃない！」
「な、何でもって、何でも命令していいの!?」
「当然だ。それが勝者の特権だからな」
「うひょぉ!!」
「もっとも、その結果どうなろうと一切責任は取らんがな。そこは自己責任だ」
秋生さんはとても大切な事を言ったのだが、何でもＯＫと聞いて興奮している春原さんの耳には入っていなかった。
だが、賞品を聞いてもやる気になったのは春原さんだけで、他のメンバーは負けた時の事を考えますます浮かぬ顔をしている。
「お父さん……私達もやるんですか？」
「ああ。基本全員参加だ。面子は多い方が盛り上がるからな」
「あの……私遊んだ事ないんで、使い方とかよくわからないんで

すけど……」
「何も難しい事はねえ。的を狙ってトリガーを引くだけだ。ほらな」
渚さんや椋さんの遠回しな遠慮をすっとぼけながら、秋生さんは一ノ瀬さんをアゴで指した。
彼女は光線銃に興味深々らしく、真っ先に手にとって物珍しそうに観察している。

ビィィィーーーッ！！

「はふっ！！」
けたたましい電子音が鳴り、それに驚いた一ノ瀬さんが目をつぶってビクッと息を呑む。
どうやら試しに自分のセンサーを狙って撃ったらしい。
「大丈夫ですかことみちゃん？」
「びっくりしたの」
よほど気に入ったのか、それでも一ノ瀬さんは懲りずに銃を調べはじめた。
それを見て秋生さんは満足そうに頷くと、もっともらしい決まり文句で反対意見を封じ込める。
「まっ、人生何事も経験だ。んじゃ、ルールを説明する。
『1つ、センサーは必ず左胸に付け、終了まで外したりしない事』
『2つ、センサーをガード出来るのは銃でのみ』
ポケットに隠したり、腹ばいになってりゃ撃たれねえってのは無しだ」
「えっ……ダメなの？」
「当たり前でしょ……」
「やろうとしてたのか……卑怯な奴だな」
春原さんがアテが外れたという顔をしている。
ひょっとして、ちょっと自信有り気だったのはそれをやるつもり

でいたからか？
残念ながら、卑怯な裏技の類はガキの頃にほとんど出尽くし、いずれも禁止事項になっている。
「『３つ、フィールドはこの広場を中心にビニールテープで区切られた区域内』
こいつは時間経過で徐々に狭めていくから注意しろ。無論、範囲の外に出たら失格だ。
『４つ、撃たれた者は誰に撃たれたかを確認し、武装解除してこの広場に戻って待機』
センサーに数字が書いてあるだろう？それが各人の番号になる。名前を知らない相手でもわかるって寸法だ。誰に撃たれたかぐらい、ちゃんと覚えておけよ」
「撃った方が覚えとくんじゃないんだ」
「そりゃあ、撃たれるのは一度だけど、撃つ方は何人になるかわからないからでしょ」
「もちろん、撃った方も覚えておくに越したことはねえがな。他は直接殴ったり、危険でなければ原則何でも有りだ。待ち伏せや狙撃、一時的に手を組んだってかまわねえ。まっ、こんな所だ。何か質問は有るか？」
説明を聞き終え、先輩達は困惑した表情で互いに顔を見合わせたりしながらも、もはや避けられない運命と受け入れたかそれ以上ごねる事は無かった。
「よし、それじゃあ適当に散ってくれ。開始は五分後だ」
こうして、ゾリオンｉｎ“あの場所の森”は始まった。

準備が終り逃亡フェイズに移行しても、直ぐに広場を離れる者はいなかった。
「……逃げないの朋也？」

「お前こそ、とっとと逃げればいいだろ」
何気無いやりとりだったが、俺は杏さんの瞳が一瞬ギラリと光を放ったのを見逃さなかった。
杏さんは岡崎さん狙いか……。
しかし、殺気を放っているのは彼女と春原さんくらいで、他の人はどちらかと言うと“如何に生き残るか”だけを考えていそうだった。
「共闘しても構わないみたいですから、まずはみんなで行動すればいいんじゃないでしょうか？」
「それじゃあ、ゲームにならなくない？」
「わたしは椋ちゃんの意見に賛成です。お父さんや商店街のみなさんも来ているみたいですし」
「おっさんはこういうの強そうだからな……最初に倒しておいた方がいいかもな」
どうやら先輩方は共闘策でいくようだ。
この場合それも仕方がないんだろうが……あまり得策とは言えないだろう。
「んじゃ、俺は先に行くぜ。ピストルの音が開始の合図だからな」
それまで皆の出方をうかがっていた秋生さんが、やれやれといった感じで一番先に動いた。
狙われている自分が動かなければ他も動かないと察したのだろう。
それでも何気に子供達の安全を配慮してか、彼は森の入り口方面へと歩いていく。
なら、俺も動くとするか……。
秋生さんの方に目がいっている先輩達を尻目に、俺もさりげなく広場を後にした。
周囲を警戒しつつ、俺は秋生さんとは逆の方向、森の奥を目指し

木々の間を急いだ。
秋生さんを警戒しているのは先輩達だけではない。
あの人はゾリオンでも商店街最強である。
そして、その罰ゲームにおいても最凶なのだ。
秋生さんが敗者に課すペナルティ、それは売れ残りの、と言うか早苗さんのパンの強制購入に他ならない。
だから、自然と秋生さんは商店街メンバーからも集中に狙われる事になる。
恐らく、あちらは激戦地になるだろう。
下手に近寄るのは危険だ。
それにしても……。
「まったく……試合は明日だろうに……」
本当にこんな事をしていていいんだろうか？
まあ、練習の方は付け焼刃じゃ大して上達するでもなし、個々のレベルは大体わかったから問題無いのかもしれんけども……。
渚さん、演劇の練習があるとか言ってたけど、大丈夫なのか？
秋生さんが突拍子も無いのはいつもの事だが、他でもなく愛娘の渚さんの邪魔をする様なマネはしないと思うのだが……。
「！」
腑に落ちない物を感じながら進んでいると、背後に追跡者の気配を感じた。
振り返って確認した訳では無いが、つけられている……気がする。
撒くか……。
単に同じルートを来ているだけかもしれんが、あちらの意図はわからんし、距離を詰められる前にやり過ごした方がいいだろう。
この森の地理は、星明かりさえあれば歩ける程熟知している。
何気なく木々や茂みに紛れつつ死角から死角へと移動し、音も無く茂みの裏に隠れ身を潜めた。
俺が来たのと同じ方向から、タッタッタッと走ってくる音が聞こえてくる。

やはり誰か後ろから来ていたか。
足音が間近に迫る。
そして茂みの間からその正体を確認すると、やってきたのは……
クマだ！
髪の長い森のクマ娘が後からついてきていた！
やっぱりあいつだったか……。
俺が広場から人知れず居なくなった事に気付いて追ってきたのか？
幸い、クマさんはきょろきょろしながらも俺には気付かず、そのまま走り過ぎていった。
行ったか……。
複雑な心境で溜息をつく。
少し可哀相だが、あんな目立つ奴と一緒に居たら、オヤジ達の好奇の的だ。
折角、秋生さんに狙いが集まっているのに、わざわざヘイトを上げる必要はないだろう。
バトルロイヤルで大切なのは、目立たない、極力敵のターゲット優先順位を上げない事である。
それが低ければ、仮に発見されたり接触しても、確実にやられる様な状況でなければ敵も深追いはしてこない。
それがだ、若いカップルとか居ていちゃついてみろ。速攻狙われるに決まってる。
先輩達の様に集団で行動するのも、目立つだけなので得策とは言えない。
まあ、あれは仕方が無いんだろうけど……。
本当に先輩達が秋生さんを狙うつもりなら、ついでの様に狙われて早々に全滅するだろう。
非戦闘員を多数連れて激戦地に赴くのは、自殺行為に等しい。
さっきも言ったが、間違いなく秋生さんは全員から集中的に狙われる。
だが……それでもあの人を確実に討てるとは限らない。

何しろ、元傭兵だと言われても不思議でない程ぶっちぎりの戦闘力を持ち合わせているのだ。
マジで1対残り全員で丁度いいと思う。
秋生さん自身も、狙われる事を楽しんでいるし。
集中攻撃を浴びながら、平気でこちらを翻弄しゲリラ戦法で各個撃破を狙ってくるのだ。
そう、例えば、こんな風に射撃に適してそうな高い樹とかあると……。
「……」
「……」
たまたま高樹を見上げていくと、その枝の上から俺に向けて銃を構えている奴と目が合った。

第二章　5月4日　非情な光弾

何故こいつがこんな所に……？
樹の上にいたのは、神出鬼没の謎の女・朱鷺戸沙耶だった。
2～3メートルはあろうかと言うかなりの高さの枝から、俺に向けて銃を構え立っている。
“ゾリオン”ではなく、普通の拳銃型のだ。
しかも、私服のミニスカートから覗く太ももには、よく女スパイとかが付けてる黒いホルダー？らしき物まで巻かれている。
こいつ……本格派だ！
「……ホールドアップ」
暫し互いに驚いたまま見つめ合った後、朱鷺戸は思い出した様に警告を発してきた。
だが、俺は銃の脅しには屈せず、毅然と言い放つ。
「いや、まだ始まってねえし。てか、エアガンの使用は禁止だ。やりたいならこれにしろ」
つっこみながら右手のゾリオンを掲げて見せると、何故か朱鷺戸は表情を強張らせる。
「それって、レーザー銃？」
「レーザーって言うか、チカッと赤外線出る玩具だな」
「……レーザーにはあまりいい思い出ないのよね……」
レーザーで悪い思い出って何だろう？
マジで怪盗でもやってんだろうか？
それはともかく、今のままでは少々目のやり場に困る。
「とりあえず降りてこい。スカートでそんなトコに居ると見えるぞ」
「えっ！？うわぁっ！！」
忠告が仇となり、驚いた拍子に彼女はバランスを崩し枝から足を滑らせた。

やべえ！
俺は咄嗟にそれを受け止めるべく、落下点に向おうとする。
しかし、数歩進んだ所で俺は上を見ながらその足を止めた。
朱鷺戸は咄嗟に空いている左手で枝を掴み、自力で落下を防いだのだ。
「おおっ！」
「な～んてね。驚いた？……って、何で真下に居んのよ！？」
確かに驚いたが、俺の位置に気付いて朱鷺戸の方が動揺していた。
確かにここからだとバッチリピンク色の物が見えてはいたが、それは不可抗力と言う物だ。
「いや、受け止めようと……」
「もう、いいから早く離れて！」
朱鷺戸は慌てて銃を持ったままの右手で短いスカートを押さえる。
こんな時でも銃は手放さないか……こいつ、プロだな！
などと感心しながら踵を返して離れようとしたその時、

パキッ！

背後から弾ける様な音がした。
「ちょ、ウソでしょっ！？」
振り返るとベキベキベキッと彼女が掴まっていた枝が折れ、再び自由落下を始めていた。
やっぱり落ちるのかよ！
俺は反射的に再び駆け出した。
けれど、またも俺の足は途中で止まる。
彼女は女スパイさながらに、その大きく広がった長い髪がパラシュート代わりにでもなっているかの様に、ふわりと軽やかに地面に着地してみせたのだ。
「ふう……（今のはさすがに焦ったわ。まったく、いきなり折れるなんて思わない物。多分、落ちそうになって掴んだ時に、負荷が

かかって耐え切れなくなったんだろうけど。大体、オーキくんがいけないのよ。いきなりパンツが見えるとか言うから……）驚いた？」

朱鷺戸は一息つきながら額の汗を拭い、ぶつくさ言いながら乱れた髪を直している途中で手を止めると、さもわざとですよ！と言わんばかりの余裕の笑みでとりつくろう。

こいつの身体能力も常人離れしてるよな……。

たまに抜けてるのがアレだが。

「ああ、色々驚いた。そもそも……」

「どうしておまえがここに居るんだ！？」

突如、ガサーッと背後の茂みから現れたクマ娘が俺の台詞を代弁した。

しまった！

さては今の騒ぎを聞きつけ戻ってきたか！？

「あら、坂上さんも居たんだ」

「悲鳴の様な声が聞こえたが、おまえ達、一体何をしていたんだ？」

智代は朱鷺戸と俺を交互に疑惑の視線で睨みつけながら、先程とは別の問いを発する。

マズイな……何か朱鷺戸と密会する為に智代を撒いたみたいに思われてないか？

「森を散歩してたら、いきなり彼に声をかけられたから、ちょっと驚いただけよ」

朱鷺戸はしれっと空気を読んだ返答をして、俺にウインクしてみせる。

ナイス！……と言いたい所だが最後のは余計だ。

「本当か？」

「まあ、そんなトコだ」

「それより、何か面白そうな事をやってるみたいじゃない？あたしも混ぜてもらえないかしら？」

そして朱鷺戸はさりげなく話題をすり替える。

智代は依然不機嫌そうだが、まあ嘘はついてないし。
にしても朱鷺戸の奴、サバゲーに乱入する気だったのか？
真意の方は定かではないが……智代の所為で訊く機会を逸してしまった。
「無茶を言うな。例え私達がよくても、そういう事はちゃんと他の人達にも確認をとる必要があるだろ？」
「やりたいなら広場行ってみろ。まだ余ってるかもしれんし」
「わかったわ。行ってみる」
「ああ、銃だけでなく、センサーの方も持って来いよ。それと、もう直ぐ始まるから急いだ方がいい」
「ラジャー！」
難色を示す智代を遮り銃の在りかを教えると、朱鷺戸は笑顔で敬礼しながら走っていった。
こういう時は、さっさと行ってもらうに限る。
さて、後はこっちのむくれてる奴をどうにかせねば。
「いいのか？勝手にあいつの参加を認めて」
「問題無い。てか、俺らだって参加者全員把握出来てねえし」
「それはそうだが……」
「むしろ、秋生さんも知らないイレギュラーな存在が居る意味はデカイ。これで少しは勝ち目も出てくるかもな……」
それが、優れた運動神経を持ち、恐らくサバゲー経験者であろう、マイエアガンを持つ女・朱鷺戸なら最高の伏兵となってくれるやもしれない。
「何だ？おまえも古河さんのお父さんを警戒しているのか？あの人はそんなに強いのか？」
「ぶっちぎりでな……秋生さん一人と残り全員で戦っても、勝つか負けるかわからん」
「そんなにか……なら、どうしてみんなと一緒に行動せず、独りで行ってしまったんだ？そんなに手強い相手なら、尚更みんなで協力すべきなんじゃないか？」

「なら、お前はそうしろ。俺は独りで行動する」
不思議そうに問いかけてくる智代を、あえて突き放すように言って俺は歩きだす。
「待て！」
だが、やはり簡単には逃がしてはくれず、腕を掴まれ阻まれる。
「どうしてそういう事を言うんだ？おまえの事だ。何か考えがあっての事なんだろう？ちゃんと話してくれ」
「放せ。それぐらい自分で考えろ」
「わからないから訊いてるんだ！」
俺はあくまで冷たく腕を払い行こうとしたのだが、智代はムキになって今度は両手でしがみつき、必殺の柔らかバストアタックで俺の理性を破壊しにきた。
くっ……おのれ……だから見つかりたくなかったんだ！
「ちゃんと理由を説明……」
「お待たせ～！光線銃持ってきたわ！」
おまけに朱鷺戸までが最悪のタイミングで戻ってきやがった！
しかも、お待たせって！
「どういう事だ！？まさか、こいつと二人っきりで行動するつもりだったのか！？」
やっぱりそう思いますよね～！
「違う！朱鷺戸が勝手に言ってるだけだ！」
「ん？一体何の話？」
「おまえはオーキと一緒に行動するつもりなのか？」
「え？ん～、その前にルールとかわからないから、とりあえず彼に訊きに来たんだけど」
「……そうなのか？」
「だから、俺は知らんて」
智代はまだ疑っているようだったが、ひとまず朱鷺戸の答えを聞いて怒を和らげる。
腕はホールドの方は、益々締め付けられ痛いぐらいだが……。

それにしても朱鷺戸の奴、いくらなんでも戻ってくるの早過ぎないか？

「なるほど。手を組んでもいいわけね」

一通りルールを説明すると、朱鷺戸はようやく納得いって頷く。

「そうだ。それなのにオーキはわざわざ単独行動しようとしているんだ。おかしいと思わないか？」

「そうかしら？あたしは何となくわかるけど」

自信有り気な微笑でそう答えた朱鷺戸に、智代はムッとして目を座らせる。

「ほう……なら、どういう理由なのか聞かせてもらおうか」

「いいわよ。つまり……」

その時だった。

パーーーーーン……！！

サバイバルの始まりを告げるスターターピストルの炸裂音が森に響き渡る。

ザッ！！

俺は反射的に半身になって胸のセンサーを庇いながら後方に飛び退き、ほぼ同時に朱鷺戸は転がりながら距離をとって片膝で銃を構える。

ビィー……

まだピストルの残響が残っている中、遠くの方で被弾音が鳴った。

開始早々早くも脱落者が出たらしい。
これは恐らく……、
「裏切り、かしらね……」
「だろうな……」
朱鷺戸の呟きに俺も頷く。
「どういう事だ？」
ただ一人棒立ちのままポカンとしていた無垢な智代が訊いてくる。
仕方あるまい。
心苦しいが、現実を告げるとしよう。
「だから裏切られたんだよ。手を組む約束をしてた相手にな」
「そんなのズルじゃないか！」
「甘いわね坂上さん。これはあくまで最後の一人になるまで続けられるバトルロイヤルなのよ。ルールに反していないなら、裏切りも立派な作戦の内だわ」
「手を組もうと結局いつかは敵同士になるんだ。なら、初めから独りの方が後腐れないだろ？」
「それが、おまえが一人になろうとする理由か？」
もちろん、それだけではない。
が、ここではそういう事にしておこう。
「そういう事だ。坂上、今回は見逃してやるから早く立ち去れ。俺か朱鷺戸がその気だったら、お前はとっくにやられていたところだ」
俺は銃口を智代に向け、『退去しなければ撃つ』と気迫をこめて通告した。
余程ショックを受けたのか、智代は暫く俯いて立ち尽くす。
だが、再び上がったその瞳には、彼女らしい確たる強い意志が宿っていた。
「かまわない」
「は？」
「かまわないと言ったんだ。おまえの敵になるぐらいなら、今こ

こで撃ってくれてかまわない」
そうきたか……。
思わず朱鷺戸と顔を見合わせ苦笑する。
たかがゲームなんだが……本当に頑固と言うか、負けず嫌いな奴だ。
「ふうっ……ああ、そうかよ！」
ビィィィィィィィッ！！
俺は溜息を一つつくと、容赦なく引き金を引き、その電子音を響かせた。

第二章　5月4日　リア充狩り解禁

話し合いを終えた岡崎、春原、渚、杏、椋、ことみ、芽衣の7人は、事前の約束通り隊列組んで森を進んでいた。
「しっかし、川上も薄情だよね。ぼくらはともかく、智代ちゃんまで置いてこっそり居なくなるなんてさ」
「あの子って、そういうトコあるわよねえ……試合の後も一人で勝手に帰っちゃうし」
「川上さんて、クールな一匹狼って感じですよね！」
「別にいいだろ？今回はチーム戦て訳じゃないんだし。俺らだって、おっさん達を倒したら互いに敵同士になるんだ」
「朋也くん、朋也くんと敵同士なんて嫌なの……」
「わたしも、みなさんとは争いたくないです」
「えっと……、出来れば私も……」
「いや、それじゃあゲームにならないからな」
「馬鹿ねえあんた達、優勝したら朋也に何でも言う事きかせられるのよ？」
「本人が居る前で、よくそんな事が言えるな」
「そりゃあ、お姉ちゃんはこういうの得意だから勝算もあるんだろうけど……」
「朋也くん、私が優勝したら、またバイオリンを聴いて欲しいの」
「そ、それは……また今度な……」
あまり緊張感もなく、いつもの様に和気藹々と行軍する面々。
だが、その和やかな雰囲気は、突如響いた空砲によって破られる。

パーーーーーン！！

「はうっ！！」
ピストルの音に驚いた渚やことみ達がビクッとなって目をつぶる。

そして視界を閉じた彼女達が次に聞いたのは、

ビィィィィィィィッ！！

間近で鳴り響く電子音であった。

「えっ！？」

その音にニ度驚き、慌てて目を開けた渚が見た物は……あろう事か、春原に銃を向ける岡崎と杏の姿だった。

音のした方向と状況から、撃たれたのは春原で間違い無い。

あまりに唐突な展開に、渚と椋と芽衣の三人は唖然とし、春原は当然目を血走らせて怒りだす。

そんな中、ことみだけは事態を把握出来ていないのかキョトンとして首をかしげていた。

「おまえら何撃ってんだよ！？」

「ごめんねえ～。いきなり始まったから、つい」

「わりい。試しに撃ってみたくなったから、つい撃っちまった」

怒鳴る春原に対し、当の二人はまったく悪びれもせずニヤケながらまったく同じ言い訳をする。

確信犯である事は明白だったが、渚は「ついうっかりじゃ仕方無いですね」と信じていた。

「ついじゃねえよ！！いきなり仲間撃ってどうすんだよ！？」

「わりい！仲間と思ってなかった」

「思えよ！！」

「それより、今のどっちの光線が先に当たったのかしら？陽平わかる？」

「それよりじゃねえよ！！ほとんど同時だよ！！」

「センサーにも、どの攻撃が当たったかまでは表示されたりしねえか……」

「仕方無いわね……じゃあ、あたしか朋也、優勝した方が陽平に命令出来るって事でいいんじゃない？」

「そうだな」
「おまえら鬼か！！」
「おにいちゃん……」
こうして、春原は開始とほぼ同時に最初の脱落者となった。

ビィィィィィッ！！

俺が容赦なく引き金を引いても、智代はぐっと堪えるように目を閉じ、微動だにしなかった。
だが、聞こえてきた電子音が、自分の胸からではなく背後からの物であった事に気付き、はっとなって振り返る。
「あちゃあ、バレてたか……さすがオーキ君だねえ」
彼女の背後の草むらから、銃を持った恰幅のいいチョビ髭のオヤジが現れた。
商店街の八百屋のおじさんだ。
そう、俺が撃ったのは智代ではなく、その背後からこちらをうかがっていたこの人である。
「オーキ……まさか、今までのは……」
「ああ、どうやら手遅れらしい」
「手遅れ？」
何か言いかけた智代の言葉を遮り、俺は溜息混じりにぼやく。
それに彼女が首を傾げたと同時に、四方の草むらがざわめき、数人の男達が一斉に現れた。
「ちっ！」

「はっ！」
俺と智代は反射的にその場を飛び退き、銃をかまえる。
ビィィィィィィッ！！
ビィィィィィィッ！！
二つの電子音がほぼ同時に鳴った。
「むっ！？」
「なぬ！？」
現れた男達の内の二人、ひょろりとした口髭がダンディな喫茶店のマスターと、額が頭頂部まで及んでいる古本屋のじいさんが驚きながら戦意を喪失し銃を下ろす。
朱鷺戸だった。
彼女もまた男達が現れるとほぼ同時に跳躍し、瞬時に二人を撃墜してみせたのだ。
「二人やられた！？」
「くっ、なかなかやる！」
「いったん引くぞ！」
予想外に手強いと感じたか、瞬く間に男達は散り散りに草むらに姿を消していった。
八百屋のおじさんが現れてから、この間、僅か１０秒程。
「まるで本物のゲリラね……」
「何だったんだ今のは？」
近辺から気配が消えると、朱鷺戸は感心しながら銃を下ろし、智代は事情が飲み込めていないのか戸惑いを見せる。
「サバゲーの参加者に決まってるだろ」
「今のがそうなのか……何だか凄いな……！」
「朱鷺戸、敵がどれくらい居たかわかるか？」
「そうね。出てこなかった人も含めると、ざっと１０人ってトコかしら」

「１０人か……約半分だな……」

さりげなく銃を抱えてセンサーを隠しつつ顎に手をやり、熟考中のポーズで二人を牽制しておく。

確認と実力を試す為に訊いたのだが、俺の見立てとほぼ同じ答えが返ってきたので、今襲ってきた敵は１０人前後で間違いはないだろう。

いつものサバゲー参加者が２０人前後だから、その半数が組んで襲撃してきた事になる。

いや、商店街のオヤジ全員グルで、２チーム、もしくは複数の小隊で分散していると見るべきか？

マズイな……。

敵が多勢である事や、こちらの位置を捕捉された事は当然だが、何よりこいつら二人と一緒の所を目撃された事が最悪だ。

智代だけでも結構噂になってるっぽいと言うのに。

このままでは、『川上さんとこのオーキ君は、とびきり可愛い女の子を二股かけている』とか、町内の噂を独占しかねん。

位置的に秋生さんと離れている事もあり、間違いなくこちらにちょっかいかけてくるだろう。

しかし……瞬時に二人を撃破した事といい、隠れていた人数まで言い当てた事といい、やはり朱鷺戸は“かなりやる”ようだ。

ゾリオンは所詮玩具に過ぎない。

精度や射程は玩具屋のオヤジさんに改造を施され市販の物よりはるかに向上しているとは言え、精密とはとても言い難いし個々のクセもある。

それを初めて使い、立て続けに胸の小さな的に命中させるとは……マグレでなければ相当な技量の持ち主やもしれん。

う～ん……これは戦力的にも朱鷺戸を敵に回すのは危険……か？

出来ればこれ以上、町内に噂の種をばら蒔きたくないんだが……

どうせこっちのクマさんは来るなつっても後からついてきちゃうだろうしな……。

「ん？なんだ？」
視線を向けると目が合い、嬉しそうに寄ってくる。
何か知らんが機嫌は直った様だな……。
でもまあ、一応釘を刺しておこう。
「とにかく、ゲームは既に始まってるんだ。緊張感持って“勝つ為に”行動しろよ」
「そんな事か。言われなくてもわかっている」
「そうか……朱鷺戸、お前はどうする？一緒に来るか？」
「ええ。あなた達と一緒の方が楽しめそうだもの」
「なら、同盟成立だな」
「やるからには、勝ちにいくわよ！」
「当然だ」
不本意ではあるが致し方あるまい。
こうなったら意地でも勝ち残り、勝利者特権で口封じをするまでだ。

ゲーム開始から、おおよそ２０分が経過していた。
その間、俺達は地形的に守備に適した場所に陣取り、あえてほとんど動いていない。
商店街オヤジ連合のニ度目の襲撃があったが、またも朱鷺戸が２人を撃退し、凌ぐ事が出来た。
どうやら朱鷺戸の腕は本物の様だ。
これで敵の数はおそらく半分程度となり、こちらとの実質的な戦力差はほとんど無い。
気の強い智代は、こちらから攻め一気に殲滅したらどうか？と提案してきたが、俺はそろそろこちらにちょっかいを出してくるのをやめてくれるだろうと考え、却下して今暫くの様子見を選んだ。

バトルロイヤルにおいて、直接敵を倒す事は大して意味は無く、むしろ面子が減れば残った他の者にとっても有利に働く。
ここで共倒れになって喜ぶのは秋生さんだけだ。
百戦錬磨のオヤジさん達ならそれぐらい判っているだろう。
そう高をくくっていたのだが……。
「また敵が接近してきたわ」
樹上から斥候をしていた朱鷺戸が下りながら警告してきた。
だから、そんな所に登ると見えるぞとも思ったが、今は彼女の索敵能力が必要だし、何よりヤブ蛇、いや、ヤブ熊になりそうなので止めておく。
「直ぐに来そうか？」
「まだ暫くは余裕がありそうね。奇襲を狙ってるんじゃないかしら？」
「思ったよりしつこいな……」
うんざりして頭をかく。
もはや戦力的優位も無く、地の利もこちらにある。
それでもまだ攻めて来るのか……。
「やっぱり、先に倒してしまった方がいいんじゃないか？オーキは古河さんのお父さんを意識しているようだが、あの人達も古河さんのお父さんを狙っているとは限らないんだろ？」
ここまで戦果なしで面白くなさそうにしていた智代が、再び攻勢を主張してくる。
確かに、普通に考えればこいつの言う事は正論だ。
だが、この事実を知って同じ事が言えるだろうか。
「それは無い。秋生さんはただ強えだけじゃなく、バツゲームも最凶なんだ」
「一体何を要求されると言うんだ？」
「パンだ！秋生さんが優勝したら、間違いなく売れ残りのパンを買わされる……」
「大げさだな……いいじゃないか。売れ残りぐらい」

「ただの売れ残りじゃねえ！もう忘れたのか？前にお前にも食わせてやっただろ？せんべいパンとかよもぎパンとか」
「あ……あれか……！」
ようやく思い出したか、智代の顔色が青くなる。
「で、でも、食べられないと言うほどの物じゃなかったじゃないか」
「馬鹿やろう。あれはまだマシな方、危険レベルで言ったら5段階中1か2だ」
「あれでか……レベル5は一体どれ程凄いんだ？」
「そうだな……軽くショック状態で泡吹いて倒れるくらい？」
「そんな物、もはや食べ物じゃないじゃないか！」
「だから、俺達は秋生さんにだけは負ける訳にはいかないんだ」
「なるほど……そういう事か……」
納得がいったか、智代は遠い目をして虚空をみつめていた。
しかし、今度は地面に下りてきた朱鷺戸が疑問をぶつけてくる。
「でも、それならどうしてオジサン達はあたし達を執拗に狙ってくるのかしら？」
「んなモン、若い男女がイチャついてれば狙われるに決まってるだろ」
「ああ、なるほど」
「そういう物なのか？」
朱鷺戸は理解したようだが、代わりにまた智代にハテナマークが燈る。
さっきはうやむやにしたが、もうぶっちゃけてよかろう。
「そういう物だ。だから一人で行動したかったんだよ……」
「なんだ。それならそうと説明してくれればいいじゃないか」
「説明したら納得したか？」
「大丈夫だ。私はそんな事は気にしない」
「俺が気にするんだっつってんだろ！」
「まったく、オーキは本当に照れ屋さんだな」

「くっ！！」

やはり照れ屋さん攻撃がきやがった。

だから嫌なんだと、どうしたらこの娘は解ってくれるんだろう？

「だとすると、三人でここに留まってる限り狙われるかもしれないわね……バラバラになって興味を失わせるか、逆にこちらから奇襲をかけて片付けておいた方がいいかもしれない」

「よし、解散！」

「そうだ。倒そう！」

話が振り出しに戻る。

こんな事続けてると、また襲撃されるだけなんだがな……。

などと頭を抱えていたその時だった。

「！」

俺と朱鷺戸の表情に緊張が走る。

「敵か？」

それで智代も察したのだろう。声のトーンを落として訊いてきた。

「ああ、既に囲まれてる……だが、妙だ」

「妙？」

「数が多過ぎるわね……それに来た方向もさっきまでの敵と逆かもしれない」

「それは……新手と言う事か？」

「だろうな……敵わないからって、まさか援軍まで呼ぶかよ……！？」

いくらリア充憎しとは言え、どんだけこっちに執着してんだ！？

それとも、まさかもう秋生さんが倒された！？

「どうやらあちらは本気みたいね」

「だから言ったんだ。こちらから攻めるべきだって」

「そもそも、俺一人で動いてれば、こんな事にはなってない」

「はいはい、二人とも、来るわよ！」

朱鷺戸の合図と共に、ザザーと周囲の草むらが一斉に鳴った。

第二章　5月4日　ジェットエクストリームアタック

俺達が陣取ったのは、森の木々の中でも一際大きな大樹の傍に建てられた小屋の跡地だ。

子供の頃から在る謎の掘っ立て小屋で、もはや屋根も半分無く、所々崩れた壁が残るだけだが、子供達の秘密基地にもなっており、拾い集められ置いてあるテーブルなどで穴をカバーする事で防御は万全、周囲は裏が1メートル程高い段差になっている他は雑草が生えるだけで遮蔽物がほとんどない。

籠もって迎撃するには打って付けの場所であり、現にニ度目の襲撃を問題無く退けている。

とは言え、数倍の戦力で距離を詰められ囲まれれば一溜まりも無い。

オヤジ達の増援は、両側面から挟撃する形で姿を見せた。

左右ともに三人づつ、ジグザグに交差しながら蛇行してくる。

どの人も今日初めて見る人達である事から、新手である事に間違いは無い。

前方の茂みを凝視する。

元からの5人が接近しているはずだが、人の気配が無い事から距離をとってこちらの出方をうかがっているのだろう。

籠城すればその5人も攻撃に加わり、燻り出されて前に逃げれば狙い撃ちにされる訳だ。

つまりここは……後方に逃げるしかない！

と思って後方の段差を上ろうとすれば、そこにも伏兵が居て狙い撃ちにされるだろう。

「ここは棄てて右側を突破する。朱鷺戸、援護を頼む」

「了解！」

「……」

俺は距離を詰められる前に拠点放棄を即断し、敵中突破を計り右

方に駆け出した。
既に包囲されたこの状況。
しかし、敵は恐らく『こちらが包囲されている事に気付いている』事に気付いていない。
突破するなら、その情報の差を利用するしかないだろう。
そしてこの包囲網を突破するなら、これしかない！
ゾリオンの数ある戦法の中でも“反則”に限りなく近く、しかしその難易度ゆえに“あり”とされた言わば“禁じ手”を使う時がきた！
「二人とも、俺が壁になる！“ジェットストリーム・アタック”だ！」
「何だそれは？」
俺の出した指示に智代は首をかしげる。
当然だ。何の打ち合わせもしていない。
だが、ここはノリで解れ！
「とにかく。俺の真後ろに隠れてろ！」
「こうか？」
すぐ後をついてきていた智代は、素直に俺の真後ろについた……までは良かったのだが、何故か俺の両肩に手を置いてくる。
いや、ジェンカじゃないんだから……。
走り難いから放せと言おうと思った所で、期せずしてグンと体が前のめりに加速した。
「ちょっ……！？」
クマさんが後ろからぐいぐいと肩を押してきたのだ。
そうじゃない……いや、まあいいか……。
説明するのも面倒だ。
それに何よりこの戦法はスピードが命である。
これはこれで本当のジェットエンジンを得たような物だから善しとしよう。
俺の身体が持てばの話だが……。

「ええい、ままよ……！」
覚悟を決めると顎を引いて前だけを見据え、銃でセンサーを隠しながら特攻する。
「何！？アレはまさか……！？」
ビイイイイイーーーーー！！
「しまった！！」
そして、殿の朱鷺戸はさすがに心得ており、こちらの戦法に衝撃を受け棒立ちになっていた捻り鉢巻の魚屋のおやっさんを、すかさず俺達の影から狙い撃ちにした。
そう、“ジェットストリームアタック”とは、先頭の一人が防御に徹し、それを盾に後続の二人が敵を仕留める攻防一体の戦法である。
その歴史は古く、ゾリオン発売当時から使用され、その強さから反則扱いにする声も上がった物の、線引きが難しい事や、秋生さんが某連邦の白い悪魔の如く破ってのけた事で攻略法が判明し、ついに反則にはならなかった。
実際、使いこなすには高い身体能力と、先頭には的確な判断力が、後衛には射撃の腕が求められ、その上で息の合った連携が出来なければならず、子供やおっさん達でやるには限界がある。
だが、今の俺なら、そしてこの二人とならば、本家の三連星すら超えられよう！
「いつの間にあんな高度なフォーメーションを！？」
「あの女の子達も速いぞ！付け入る隙が無い！」
前方のオヤジ達は仲間がやられた事もあって動揺し、足を止め防御しながら後退り始めていた。
サバゲー慣れしているとは言え、普通のおっさんだ。
高速で動く小さな的を狙える腕も、ついていく体力も無い。
つまり、機動力勝負なら負ける事は無く、あちらにとって最も嫌

な事だろう。
左右を見て、後方を確認すべくちらりと首を捻る。
「今追ってきてるのは二人、一人は少し止まってたみたいよ」
視認するより早く、朱鷺戸が背後の状況を教えてくれた。
ゾクリと鳥肌が立つ。
怖いな……こいつはどこまで俺を解っている？
なら、話は早い。
「頃合か……反転する！」
「うわっ！！」
敵の眼前まで迫った所で、俺は指示と共に左足を軸に急旋回し、智代を左手で受け止めながら右手の銃を後方に向ける。

ビイイイイイーーー！！

「ぐわっ！！」
狙い通り、追いかけるのに精一杯で防御が疎かになっていた左翼の一人を不意打ちでしとめた。
と言っても、多分当てたのは俺じゃなく、同時に振り向き様に攻撃した朱鷺戸だが……。
偽撃転殺。
右を突破すると見せかけ、初めから狙いは左方だったのだ。
そしてこの策の本当の狙いは、別にある。
「いきなり止まるな！」
「反転だって！」
吐息が当たる程の至近距離で抗議してくる智代を、腕を掴んでクルリと回転させ背を押し離す。
こいつに抱きつかれてたんじゃ、照準を合わせるどころではない。

ビィーーー！

などと揉み合ってる間にまた撃墜音が。
左翼二人目は直ぐに小屋の影に隠れたが、代わりに小屋の先に居た別のおっさんが驚いている。
恐らく、携帯か何かで伏兵達にこちらの動きを連絡した後、遅れて追いかけてきた人だろう。
そう、最初のフェイントの本命は、離れた所にいる伏兵に対しての物だ。
あえて右方に向かう事で、左の一人が伏兵と連絡を取る事で同時に相手にする人数も減り、それによって伏兵部隊も右方に向かわせる事が出来る二重の効果を狙った策。
もちろん、残りの左の人達には狙いに気付かれ連絡が行くだろうが、この情報のラグと、何より無駄に走らせ体力を奪われる事は、もう若くない人達には相当堪えるはずだ。
「ほら二人とも、ぐずぐずしてると、あたしが全部倒しちゃうわよ」
ニヤリと挑発的な笑みを残し、朱鷺戸は颯爽と小屋の影に消え、瞬く間に電子音を響かせる。
「すげえ……！！」
感嘆する他無い。
この女キレ過ぎだろ！
既に一人で８人を倒している。
本当に全員倒しちまいそうだ。
いける！
ついにあの秋生さんを倒せる時が……。
と思っていた矢先、いきなり智代がクルリと長い髪を翻し、銃を構えながら後ろに向かって行こうとする。
「ちょっ、おい！何処行く！？」
慌ててその手を掴むと、キッとつり上がった目で睨まれた。
「後ろの人達を倒しに行くに決まってるだろ」
「バカ、深追いするな。このまま逃げるぞ」

「どうして？残り二人じゃないか！」
「もたもたしてっと他の人達も集まってきちまうんだって」
「なら、その人達もここで倒せばいいじゃないか！」
「ああっ、もう！」
「えっ！？」
このままじゃ埒が開かないと判断した俺は、智代の腹にタックル気味に肩から腕を回すと、そのまま引っこ抜いて担ぎ上げる。
「こ、こら！！何をするんだ！？放せ！！変態！！」
「置いてかれる方がいいのか？」
そして、手足をばたつかせ暴れる駄々っ子をぴしゃりと窘め、そのまま進路の開けた左側に退却した。

「いい加減下ろしてくれ」
暫く走った所で、肩越しに智代がぼやいた。
「追っ手は？」
「来ていない。多分平気だ」
まあ、ずっと後ろを向いていたから正確だろう。
念の為一度振り返って後ろを確認してから、屈んで智代を下ろしてやると、余程恥ずかしかったのか、真っ赤になってむくれていた。
「変態！」
「お前が勝手な事するからだ」
「どうして！？あいつは勝手に敵に向かって行って倒していたじゃないか！！」
朱鷺戸を指して対抗意識剥き出しでつっかかってくる。
だが、それに対して俺は溜息で答えるしかない。
今回ばかりは役者が違い過ぎる。
「まあまあ、いいじゃない？今回は坂上さんが守られるヒロイン役で」

俺が言葉に詰ってると、代わって朱鷺戸がかなり挑発的な事を言った。
おい、そんな事言ったらますます……！
「守られるヒロイン役か……確かに、その方が女の子らしいかもしれないな……」
って、まんざらでも無いらしい！
これは、このまま押し切りそういう事で納得させるべきだろう。
「そうだな。今日はそういうポジションにしとけ」
「なら、オーキが私を守るナイトと言う訳だな？」
「まあ……」
「そうか……」
嬉しそうに笑顔を見せた智代だったが、何かを思いだした様に急に真顔になり、俯き加減で腕を組んで逡巡を始めた。
「……やっぱり、私もオーキと一緒に戦う方がいい」
そして出た答えは、やはり姫より戦士がいいらしい。
女の子らしくなくていいのか？とも思ったが、藪蛇になりそうなので止めておく。
「まあ、好きにしろ」
「うん。好きにする」
単に一周して振り出しに戻っただけの気がするが、機嫌は直った様なので善しとしよう。
「さて、これからだが……攻めたいか？」
「攻めたい！」
そして、不満を思い出される前に餌をぶら下げると、案の定即答で食いついてくる。
「そうね。この小さい胸のセンサーを狙うには不意打ちするしかないでしょうし、それにはこちらから奇襲か、狙撃する方が確実ね」
その小さいセンサーを、ここまで８個撃ち抜いた猛者も乗ってきた。
てか、心臓しか当たり判定のないゾリオンでこれだけ戦果を挙げ

られるのだから、実弾だったらどんだけこいつは強いんだろう？
ちなみに、ゾリオン以外の光線銃のシリーズには、頭部につける３６０。対応のセンサーも有るらしいが、そんなの付けたら直ぐ秋生さんに全滅させられると言う事で採用されなかった。
「よし、じゃあ反撃といこう。狙いはまず……」
実は俺も、退却しながらも攻めの策をいくつか考えていたのだ。
それは、この戦力、と言うか朱鷺戸が居れば秋生さんにも勝算が有ると確信し、試してみたくなったからでもある。
それなら、商店街の方々にはここで練習台になってもらい、まとめて御退場願う方がいいだろう。
俺の代案を基に二人と策を練り、俺達はついに攻めに転じた。

第二章　5月4日　双翼乱舞

俺達の反撃が始まった。
「いくぞ」
「ああ」
手短に打ち合わせを終えると、俺達は来た道を引き返し、拠点にしていた廃屋に向かう。
予想通り、そこには追撃を諦めた二人、貫禄がある肉屋のおじさんと、メガネでモジャモジャ頭のラーメン屋の小池さん（本名は鈴木さん）がまだ残っていた。
「来たぞー！廃屋だー！」
堂々と来た道を戻ったのだ。
当然、直ぐに見つかり、二人は周囲に向かって叫びながら廃屋の影に隠れてしまう。
やはり合流する部隊が有ったか……。
ならば、尚更躊躇している暇は無い。
かまわず縦列になり、俺達から見て右手にある小屋に突進を敢行する。
「やはりジェットストリームアタックか！」
「何とか援軍が来るまで持ち堪えるんだ！」
相手側も壁の隙間から銃を構え牽制してくるが、こちらも防御しながら接近している以上被弾する事はない。
だが、広場の小屋の中間程にさしかかったその時だった。
「ヒャッハーーー！！」
「もらったぜオーキィ！！」
小屋の前の草むら、俺達から見て左手から二人のトサカ頭のヤンキー、いや元ヤン床屋兄弟が威勢よく飛び出してきたのだ。
坊主やスポ刈りと言った男らしい髪形なら格安でやってくれる良心的な床屋で、店には歴代のヤンキー漫画が揃えられている事でも

知られている。
何かとパーマや染髪を勧めてくるのが難だが……。
それはともかく、“V作戦”か！
“V作戦”とは、相手の右手に注意を向け、左手側でしとめる戦術である。
その形状と、左胸にしかない当たり判定の無いゾリオンにおいて最も有利な位置取りである事からその名がついた、必勝の戦法だ。
そしてまた、正面からは影になるニ列目三列目を狙い撃てる事から、ジェットストリームアタックへの対処法としても有効な戦術である。
あえて直ぐには合流せず、これを狙って潜んでいたのだろう。
だが、

ビイイイイイィィィーーー！！
ビイイイイイィィィーーー！！

「うげっ！！マジィッ！？」
「ぬおっ！？どっから撃ってきやがった！？」
俺達は一瞥して真っ直ぐひた走るだけで、銃をかまえてもいない。
にもかかわらず、出現したと同時に二人は兄弟仲良く電子音を響かせていた。
「何！？どういう事だ！？」
「まさか、他にも仲間が！？」
小屋の二人にも動揺が走る。
狙い通り必勝の形に持っていったにも拘らず、不可解な攻撃によって頼みの援軍を瞬殺されたのだから当然だろう。
そして、その隙を見逃す俺達では無い。
「いけっ！智代！！」
「ああ！」
さながら戦艦から発射されたミサイルの如く、長い髪を噴射炎の

様になびかせながら智代は左方に離脱してゆき、俺達はyの字の軌跡を描く。
その躍動感溢れる少女の肢体に、二人の目はあちらに釘付けになった。
「すんません！」
ビイイイイイイイイイッ！！
「うわっ！！しまった！！」
これもまたVの応用形である。
二人が智代に目を奪われている間に、俺は廃屋の障害物を逆に利用しながら接近し、突入して超至近距離からの攻撃で肉屋さんを討ち取った。
「ひえ～！！」
たまらず小池さんは逆方向に逃げようとする。
しかし、
ビイイイイイイイイイイッ！！
「うひゃ～！」
そこには建物の後方から回り込んでんでいた朱鷺戸（ときと）が待ち構えていて、あえなく撃沈。
俺達は瞬く間に拠点奪還に成功した。
「制圧完了ね」
「ああ」
得意顔で寄って来た朱鷺戸と廃屋内でハイタッチを交わす。
そして、一人外にぽつんと立っていた智代はと言うと……、
「……」
またむくれていた。

全ては読み通りに事は運んだ。
敵の部隊は恐らく3つ。前の5人と広場の2人、そして後方に3～4人。
数で優る敵は、常に数的有利を保ちつつこちらを包囲―部隊間を結ぶ線の内に俺達を入れておきたいはずである。
こちらの選択肢は逃走か反撃の二択だが、ここまで守りに専念していた事や、機動力はこちらの方が上な事から、そのまま逃走する可能性が高く、またそちらの方が厄介だと相手は考えたはず。
広場の部隊がすぐに追撃を止めたのも、体力的な事もあるだろうが、自分達が深追いする事で反撃や、俺達がより遠くまで逃る事を危惧したからだろう。
そして、それでこちらを油断させておき、こちらが気付いていない（と、あちらは思っている）前後の伏兵部隊で追走、一隊を先回りさせ挟撃あたりを狙っていたんじゃなかろうか。
一方、俺達が反撃に移る可能性も当然考慮するだろう。
そうすると、数的不利を補うべく前の部隊から2名を広場に回し、こちらの“ジェットストリーム”には地の利と“V作戦”で対応するのが一番“無難”であり、他の部隊を呼び戻す時間を稼げば挟撃にもなる。
そこまで読んだ上で、俺が立てた作戦は『ジェットストリーム・ファントム』とも言うべき物だ。
“ジェットストリームアタックは三位一体の技である”と言う概念を逆に利用したのである。
朱鷺戸を予め別働隊として建物の後方から向かわせ、俺と智代の二人によるジェットストリームアタックで三人居ると相手に錯覚させつつ注意を引き付けておき、その隙に朱鷺戸を廃屋の影に潜ませ敵の作戦に対応させたのだ。
そう、元ヤンブラザーズを狙撃したのはやはり朱鷺戸である。

もちろん、予想が外れる可能性や、二人しかいない事を気付かれる可能性もあったが、朱鷺戸であれば臨機応変に対処してくれるだろうと確信していた。

そして、目論見通り作戦は成功した訳だが……、

「どうしておまえが全部倒してしまうんだ!?私の分が無いじゃないか!」

またも戦果無しの智代さんが、またゴネだした。

「仕方ないじゃない？あのまま逃がす訳にもいかないし」

「私なら、すぐに追いついて倒せた!」

「智代!」

名実共にエースである朱鷺戸に難癖をつける彼女を、またかと溜息を一つついてから真顔で名前を呼び、じっとみつめながら近寄っていく。

「な、なんだ?」

強気に振舞おうとしながらも、俺が怒る様な事をやったという自覚はあるのか怯んで後ずさる。

そんな叱られる悪戯っ子の様な彼女に対し、俺は真摯な眼差しのまま言った。

「よくやった。作戦がうまくいったのも、お前のおかげだ」

これは世辞でも何でもなく、事実だ。

そもそも、ジェットストリームファントムを可能にしたのは智代の存在感あっての物であり、最後にこいつが囮になったからこそ、最も困難な建物内を容易に制圧出来たと言える。

しかし、意外な賛辞に一瞬嬉しそうな表情をした物の、智代はすぐに目を伏せ顔を背けてしまう。

「よしてくれ……私はまだ一人も倒せていないんだ……」

「アホか。大事なのはチームが勝つ事であって、誰が何人倒したかなんて大した問題じゃないだろ?」

「それはそうかもしれないが、やっぱり私も敵を倒したいんだ。このままでは、まるで私が足手まといみたいじゃないか……」

「お前はちゃんと作戦通り役目を果してるつったろ？それでもまだ足りないと思うなら、やるべき事は駄々をこねたり、朱鷺戸に八つ当たりする事じゃないはずだ」

正直、「なら、チーム解散だ！」と伝家の宝刀を抜きたくなったが、益々ゴネるだけだろうし、こいつの為にもならないので、大人になって堪え諭す事にした。

まだまだ一匹狼だった頃の気分が抜けきれてないと言うか、負けん気や責任感も大事だが、それでチームワークをぶち壊しては元も子もない。

これから人の上に立とうというのだから、尚更だろう。

折角、こうして大勢でのイベントに参加したり、チームで動く機会が有るんだから、そういった物を学んで欲しいのだが……。

「別にそんなつもりじゃない……ただ、おかしいじゃないか！そいつはほとんど一撃で倒しているのに、私の攻撃はいくら撃っても当たらないんだ！私の銃、壊れてるんじゃないか？」

だが、俺の想いはまったく伝わっていないのか、今度は物に当たりだす始末。

「ほら、俺のと交換してやるから、貸せ」」

そりゃ腕の差だと嘆息して、やれやれと俺は自分の銃を差し出した。

それと俺の顔を交互に見ながら、バツが悪そうに智代は俺の銃を受け取り、代わりに自分のを差し出す。

「ちゃんと照準合わせて撃ってるか？」

右手を真っ直ぐ伸ばしつつ右を向き、銃を構えて片目をつぶり照準を合わせる見本を見せる。

「照準？それは小さい望遠鏡みたいなヤツが要るんじゃないのか？」

「……それは遠距離狙撃用のスコープだ。まあ、練習も無しに撃てる物じゃないよな……」

そういえば、朱鷺戸がいきなりやれてたので、ちゃんと撃ち方を

教えるのを忘れていた。
　こいつなら、いきなり化けるかもしれんし、ここでレクチャーしておくとしよう。

　拠点を奪還してから暫く経った。
　敵がこちらに戻ってくるには十分な時間が過ぎたはずだが、依然として周囲に敵の気配は無い。
「敵が来ないな……もう、私達を狙うのは諦めたんじゃないか？」
　覚えたての銃の試し撃ちをしたくてウズウズしていた智代が、痺れを切らしたように言った。
　確かに、あちらの人数は既に6～7人になっているだろうから、戦力的にここに陣取る俺達を攻めるのは厳しかろう。
　樹上から見張りをしてくれている朱鷺戸も発見出来ていない事を考えると、もう近くにはいないのかもしれない。
「かもな……でも、こちらの油断を誘って機を窺ってるだけかもしれんし……」
　その時、

　パーーーーーン……！

　電子音とは違う乾いた音が木霊した。
「敵か！」
「違う！慌てんな」
　勇み足で飛び出して行こうとする智代を遮り止めると、外を警戒しながら窓から顔をだけ出し、樹上に居る朱鷺戸の方はあえて見ずに話しかける。
「何か異常は？」
「今の空砲くらいね……何かの合図かしら？」

「ああ。人数が１０人以下になったから、これからフィールドの範囲を狭めるって事だろう」
「なんだ。そういう事か……」
わざわざ左肩に乗っかる様にしながら俺と同じ狭い所から顔を出し、智代が話に混ざってくる。
と言うか、おもいっきり二つ程乗り上げ顔にもムニっと当たってるのだが、雑念を振り払うべく思考に没頭するとしよう。
ここまでの把握出来ている戦果が、俺が２人に朱鷺戸が１１人。
残ったメンバーは俺達が３人、交戦していた商店街連合が残り６～７人、先輩達が７人、プラス秋生さんの計１７～８人。
その内、７～８人以上が既に脱落している事になる。
とすると……、
「先輩達は、秋生さんに全滅させられたかもな……」
「岡崎達がか？」
「丁度頭数は合う……いや……」
声に出してみると、嫌な予感がした。
そもそも、先輩達と秋生さんが戦っているというのは、始まる前に先輩達が話していた事を鵜呑みにしての憶測だ。
実際は、非戦闘員の多さから戦闘を回避しているかもしれないし、或いは、戦ったとしても、全滅しているとは限らない。
また、商店街連合の動きが掴めなくなったのは、既にやられたからであるとも考えられる。
だとしたら……秋生さんは直ぐ間近に迫っており、襲撃の機を窺っている？
「朱鷺戸、移動しよう。降りてこい」
「何処に行くんだ？」
「中央の広場だ」
「中央の？そこはやられてしまった人達が集まる所じゃないのか？」
「別に入っちゃいけない訳じゃない。遮蔽物がほとんど無いから、

あまり行くメリットは無いがな。でも、最終的には決戦は広場とその周囲だけになって、どの道ここには居られなくなる。今の内に移動しておくのも手だろう？」

何より、広場に行けば誰がやられたかは一目瞭然、判らないなら直接確かめに行くまでだ。

無論、広場までの道のりこそ危険極まりない物ではあるが……。

「うん。行こう！」

「ラジャー！」

ひょっとしたら、他の残った面子も同じ事を考え、或いは、利用し罠を張って待ち伏せをしているかもしれない。

だが、この二人とならば、それも一興と思えてくる。

例えそれが、秋生さんであってもだ。

「行くぞ。周囲の警戒は怠るなよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5911g/

CLANNAD　～Light colors～

2011年12月7日04時49分発行